

彼の者の盾はどこへ向
かうのか。

mukurobone

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

漫画キングダムの二次小説。

秦国の貴族家の三男に生まれた朱錐が向かう先は……………。

原作開始前からスタートとなります。

以下独自設定。

主人公はオリジナルキャラクターだがちよい役。オリキャラも。

主人公の活劇ものではないようだ。

完結を見据えずに、好きで書いていきますので、そうじゃなくなった完結ということ

一つよしなに。

文字数が増えたので無為に過ぎたくないう人は読まないほうがいいよ。

最後に、こちら側（投稿する側）の沼に是非あなたも足を踏み入れてみて!! あなただけの良作が生まれるはず！（断定）

目次

番外編

オギコオギコオギコ（函谷関の戦い）

2

本編 原作開始年前

第1話

8

第2話

18

第3話

25

第4話

30

第5話

38

第6話

46

第7話

56

第8話

64

第9話

70

本編 原作開始年後

第10話

76

第11話

86

第12話

97

第13話

102

第14話

110

第15話

119

第16話

130

第17話

137

蛇甘平原の戦い

第18話

145

第19話

154

第28話	第27話	第26話	馬陽攻防戦	第25話	李豹と玄象	第24話	第23話	朱錐の過去1	第22話	第21話	大王政暗殺事変	第20話
247	240	227		221	214	206	199	194	181	172		161

第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話
360	351	342	334	323	314	304	294	286	278	270	262	254

第51話	第50話	第49話	第48話	魏国山陽一帯攻略戦	第47話	幕間 夫婦と姉妹	第46話	第45話	躍動する者たち	第44話	第43話	第42話
475	466	453	444		434	425	411	399		390	382	371

第62話	魏山陽攻略 開戦二日目	第61話	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	魏山陽攻略 開戦一日目	第55話	第54話	第53話	第52話
583		574	567	557	547	536	528		519	507	498	488

第74話	第73話	第72話	第71話	第70話	第69話	第68話	第67話	魏山陽攻略	第66話	第65話	第64話	第63話
								開戦三日目と終戦まで				
703	693	682	672	663	651	642	631		620	608	601	593

第84話	第83話	幕間	第82話	第81話	第80話	第79話	それぞれの路	第78話	第77話	姉の御心	第76話	第75話
		天の計らい										
829	820	811	802	791	783	773		762	754	746	729	714

第 9 話
第 8 話
第 8 話
第 8 話
第 8 話
第 8 話

886 877 864 856 848 840

番外編

オギコオギコオギコ（函谷関の戦い）

「オギコはねー オギコなんだよ。オギコにも下を見せてー（〇???）」

「ちよちよちよ、オギコさんあぶねえですつて。ほら頭でしたら矢に当たりますつて」

「みてみてー お頭らー 桓騎軍で一番弓がへただって言われたオギコでも当てられたよー」

艶のある顔立ちでありながら残酷かつ残忍な盗賊頭である桓騎は、オギコを褒めた。

「……………オギコ よくやったぞ」

「オギコ、アブナイ、サガル」

桓騎に褒められて有頂天になっているオギコを諷めるように声を掛けたのは、顔に大きな青あざと多数の傷を持つ偉丈夫であった。

「あ、ギャカ（*□▽□） みた？みた？オギコの矢当たったよ」

オギコはギャカの姿を認めると、子供が親に報告するようにギャカに語った。

「ミタゾ、オギコ、エライ」

「でしよでしよ オギコは今日来てるっぽいよお？（*□ω□ *）??」

ギヤカははしやぐオギコをさりげなく後方へと誘導していく。

楼閣の上からその様子を眺めていた桓騎軍の幹部たちは口を開いた。

「お頭。前から気になってたんですけど、なんでオギコさんを千人将に付けてるんです？」

その言葉に桓騎は「何言ってるんだ？」と疑問を投げかけるような顔をして答えた。

「おもしろいからに決まってるんだろ」

「面白いつてそんな理由だったんですか」

「あん？　じゃあお前、ギヤカの前で言ってるよ。オギコは役立たずの能無しだったよ」

摩論は露骨に嫌そうな顔をして言葉をごぼした。

「嫌ですよ、まだ生きていたいので遠慮させてもらいます」

それに黒桜が「まあ、あのギヤカだしなあ」とどこか遠い目をして言葉を続ける。

「あいつ、オギコのことには融通きかないもんな」

それは昔の出来事を思い浮かべてのことであった。そこで「ツチ」と舌打ちをしたのは、岩のような顔と押揃される大男であった。

「ほらア、黒桜さんが思わせぶりなことをいうから負けそうになってた雷土さんが不機嫌になったじゃないですか」

「なんだと魔論ツ てめえ俺が負けそうになったつなんて吹かしてんじゃねえぞ」
「あれはどうみてー」

「うるせえ!! ぶつ殺されてえのかッ」

と、いまにも摩論に掴みかかりそうな雷土を止めたのは桓騎であった。

「ククク 落ち着けよ雷土。誰も負けたなんておもつちやいねえよ。まあなんだ。つまりは、オギコは生きてるだけで役に立つてことだ。まあ面白っても本音だけだな」
にぎわう楼閣に冷や水を浴びせるように、魏軍の後ろから巨大な井闌車が姿をみせるのはこの後すぐのことであった。

「たいへんたいへん、大変だよお頭ー (??・ω・ゝ) ???? | 〃〃旦 変な台がこつちくるよー」

函谷関の前には、過去の文献を見ても最も巨大であると思われる井闌車が配置されることになったが、それでもなお明らかに城壁に届く高さではなかった。

「俺が造った井闌車に狂いはない。やれ」

魏軍総大将呉鳳明の言葉通り、井闌車は施された仕掛けが作動すると、井闌車の背面から梯が投石機のようにうなりをあげて回転。そして、函谷関の上に梯が固定されると下から上へと通じる橋となった。

「ギャカ (ゝ・ω・ゝ)? やばい、やばいよ。橋が、梯がとどいちやったよ」

「オギコ、ハシハ、ベツノトコロ。アンシン、スル」

橋を架けられたのは函谷関のほぼ中央であった。よって、合従軍から向かって左方に配置されていた桓騎軍オギコ隊にはいまのところ影響は少ないと言えた。

だが、魏将呉鳳明は井闌車の仕掛けの有用性を確信すると予備として持ち込んでいたもう一台を動かした。目標はちようどオギコ達がいる真正面であった。

「ギャカ、ギャカもう一台来たよー (??・ω・) ???? くく且 どうしよ。どうしよう」
「オチツク オギコ オレマカセル」

井闌車によって橋が掛けられると魏軍は一気に函谷関の上へと溢れ出して、オギコ達桓騎軍に襲い掛かった。

「あちゃあ、よりによってそこに掛けるとは魏軍は運がないですね」

摩論が言うよう、井闌車を駆け上がった魏軍であったが、そこで完全に足を止める結果になっていた。

「あん? ああオギコんとか。……おら、お前らちよつと手伝え」

桓騎は暴れまわるギャカを一瞥すると、移動を開始した。

「お頭?」

「いいから来い。面白もんをみせてやる」

「ギャカ、(*☒▽☒) 艸 ギャカ凄いよ。よーしオギコもまけないぞ」

函谷関の上では、暴れまわるギャカの猛威を前に魏軍は制圧のせの字も開始することができなくなっていた。

「な、なんだこのバケモンはッ　ぐはッ」「死ねえ　ぐふッ」「化け　うッ」

鎌のような曲がつた刃の剣と短剣の二刀を自在に操るギャカは、野生そのモノのように機敏に動きまわると、的確に魏兵の首だけ刎ねていった。

気が付いたときには懐に現れ、すぐ横の者の首が宙を舞い、視覚に捉えて武器を振るえば、落ちているのは己の首。

そうして、函谷関の上は、ぼろぼろつと首が零れる悪夢のような地獄への一等地へと化していた。

その近くではオギコも奮戦していて、なんだかんだと敵兵を葬っていた。

「どんどん、どんどんでくるよ。虫みたいだ　^^」

「ツフ、虫ってお前。まあいい、あつちはギャカに殺らしておけ。オギコは暇ならこつちを手伝え」

そうして、桓騎は王都からパクってきた大樽に入った大量の油を井闌車に駆けると火をかけた。

「はしやぎすぎなんだよ。ためえらは」

こうして、桓騎が二つある井闌車のうち一台を崩壊させると、オギコ達の前には行場

を失くした魏兵が取り残される結果となった。そして、当然のように皆殺しの目に合うのであった。

本編 原作開始年前

第1話

その時代、人間の欲望は解き放たれていた。

五百年の大戦争時代、「春秋戦国時代」である。

紀元前245年中華西方の国。

のちに中華に名を轟かす大將軍がいた。

その名を「信」

まだ無名な少年は中華に夢を馳せ、ここから歩き始める。

……。

なのは漫画『キングダム』の主人公だ。

改めて今作品の主人公、朱錐（しゆすい）について、その生い立ちから三つある転機を交えて紹介する。

秦国にて、それなりの貴族家の三男として生まれ落ち、幼き頃に聞かされた戦神昭王の輝きに魅せられた大將軍の活躍譚に心を躍らせた少年が自然と求めたのは、彼らの傍に少しでも近づくことだった。それから少年は、単純なまでに武を求め、武功をもとめ、大將軍の傍を目指すことになる。

ただ残念というべきか、生家は『武』でなく『文』の家系であったこともあり家族、親族にはいい顔はされなかった。それはつまり、武官として成り上がるための土台がないことを意味していた。

だが、ここで一つ目の転機が訪れる。

それでも、ひたすらに武を求めて鍛錬を続ける朱錐に絆された父は、伝手を頼りに一人の武官に面会を申し入れて、息子のことを話したのだ。

「うむ、わかった。儂もそちらには世話になっている身だ。お主の息子、武を持って国に仕えたい想いは受け取った。任せておけ」と、私の知らぬ間に話を付けてきた父により、翌日には生家を離れて彼の元へ弟子入りとなった。

それから修練の日々に入るわけだが、現役武官の鍛錬は想像を超えた過酷なもので、基礎体力こそ正義の限界突破のリアルに体は正直だった。ことわざの血反吐を吐くとはまさにあのことだろう。

本格的な鍛錬を積むうえで、適性を知るために剣や槍などおおよそ武器と呼ばれるも

のを試した結果、弓が性に合ったのか手に馴染み「狙いは雑だがは威力はある」と評された。

朱雫は幼き頃の夢を純粹に追いかけて鍛錬を怠らなかつた。

それは、次第に花開いていく。

少年の成長とともに血反吐を吐くような鍛錬の日々が頑強な肉体を作り上げていく。齡15をむかえる頃には、おおよそ同年代の者よりも剛に優れ、弓の威力は他を圧倒するようになった。しかしながら、どうあつても狙いの粗さは改善できずにいた。近い距離ならまだしも、戦場で敵将を一矢で穿つような腕にはなれずにいた。

そしてそれは、同時に主武器としての弓との別れにもなつた。体格があり剛力に優れているがゆえに、低確率だが、一撃必殺という憧れ（ロマン）は戦場では使い道が乏しかったのだ。それならば剛力を持つて敵と直接ぶち当たれる武器を持つ方が有用だったのだ。しかしながら、当たれば一撃必殺の強弓であり、牽制など群れに向かって射る方向に変わっていく。

弓から次の武器を模索する朱雫だが、おおよそ剣舞を舞うような才も敵手をよみ打ち合いを制するほどの器用さもなかつた。そうして試行錯誤の末に、棍棒を武器にと定めた。ただし、べらぼうに重い。常人なら両手でなんとか扱うような代物でなる。

使い方はいたって単純であり、それは棒術など『優れた技巧で打倒す棍棒』でなく、お

よそ術とは呼べない『優れた膂力にまかせた打ち払う棍棒』になった。

次第にそれは、敵陣を薙ぎ払って道を拓く術となっていくは当然の帰結ともいえた。考えても見てほしい、乱戦のなかでべらぼうに重い棒を薙ぎ払える漢がいたら、どうなるだろうか、と。

棍棒を薙ぎ払えば、敵は体ごと宙を舞う。

それすなわち、宙を舞った敵が今度は武器として周囲の敵に体ごとぶつかっていくことになる。そうすると振るう度に、敵の隊伍は自然と乱れていくことになる。乱れは乱れを呼び綻びとなる。つまりはそういうことだ。

それからは正式に私兵団の一員として、諍いの仲裁から賊の討伐、果ては戦場へ従軍したりもした。その頃仲間から言われた「お前は顔が穏やか過ぎて迫力がないな」という言を受けた朱錐は、古来より伝わる伝承の鬼を模した面をかぶるようになる。

それ以降、朱錐の活躍は『鬼面の朱錐』という名でひっそりと中華へと拡がっていくことになる。

季節が巡れば、新たな戦は起こる。

それが戦国の世の習しか……………。

ただ戦うだけではない。ときには将を狙った奇襲という名の暗殺の一刀から、身を挺して将である師を守り通して死にかけたり、化け物をとめるために馬と棍棒を犠牲にしたりと、なかなか濃厚な経験を積んでいく。

殊更、おおよそ人の柁をはみ出したいち個との遭遇は、朱錐に戦うとは「生き残ること」だと自覚させていく。そしてそれは『攻』から『守』へと朱錐の意識が変わり始めた瞬間でもあった。

打倒するために振った武器をいつしか味方を守るために振るうようになる。

将を守るために、敵將の足を止める。

すなわち、敵の勢いを止めることを生業として行動するようになった。

恵まれた膂力を武器にする朱錐は決して弱いわけではない。

それこそ命を顧みなければ、おおよそその者をうちのめせるほどに強くはある。

けれど、朱錐は己が欲するものをそこには見いだせなかった。

敵の足を止めるには出鼻をくじくに限る。そうして探る癖を身に着けた頃から、負けない才覚とも呼ぶべきなのか、難敵が相手であろうと揺らぐことがない確固たる己を見出していくことになる。

戦に生き残り続けることで、戦場の嫌な空気や微妙な機微を読むことにも長けてい

く。

勘というのか、予感というのか、ふと今ここで奇襲があつたら……。が不思議とよく当たり九死に一生を得る戦働きを要所で發揮するようにもなる。これは、後発的に戦場で拓いた才能といえるだろう。

朱錐は、そのおかげで奇襲から皆を守ることができたし、生き残つてこれた。

終わることのない戦場を転戦するうちに、英雄のごとく活躍する憧れの将軍と会話する機会を得る。

「ソフフフ あなたが昌文君の盾である鬼面の朱錐ですか」と。

本人談によると「そのあと何を話したのかよく覚えていない」らしい。朱錐にとつて夢見心地とはまさにあの瞬間のことだったのだろう。

そう、朱錐が弟子入りしていたのは昌文君である。

ところで、功績を挙げている武官である昌文君と一文官である朱錐の父とがなぜ繋がることになったのかは、ひとえに昌文君の秦国を想う心がゆえである。彼は武官としてだけでなく、文官としての目を持つことで、より国のためになると、魑魅魍魎がはびこる宮廷の中では中立的な立場をとる父に教えを請うたことが縁の始まりである。

昌文君は、武官として功績を挙げながらも同時に武官として国のためにできることの限界も悟り始めており、その先を見据えていたのだ。

昌文君の盾として侍り、戰場を駆け抜けるうちに廻る歲月。

二つ目の転機が訪れる。

「副官は朱錐とする。お前ならば誰も文句はあるまい」

それは、前任の副官が戦死したことによる任命であつた。

新たな副官になり、隊を預かる側になる。それしてそれは、本当の意味での一兵卒では味わうことのなかつた隊の命運を決める指示をだす辛さ知ることになる。

昌文君を、隊を生かすために「盾になれ」と命令を発した瞬間から、次々と散つていく同胞たちを背に転進の号令を出す。

ともに駆け抜けてきた顔が一人、また一人と「殿を頼む」と消えていく辛さを痛いほどに味わつた。

戦いに一区切りがついた頃、朱錐は一人思い悩むことになった。

「いまのままでは先に逝つた皆の命に顔向けできない」と。

隊の損害を少しでも減らすためには、より深く戰場を知らなければならなかつた。兵から将へ。より遠くから戰場を見渡すような視点をもたなくてはならなかつた。

だからこそ国内、他国を問わず、戦が起こると知れば時間の許す限りに移動して、戦

場を俯瞰できる場まで赴いていく。

他国には他国の文化や風習が存在しており、また秦国で得ることのなかった話など、貴重な知識を得ていく。

その一つが嚆矢になる。

鏑矢（かぶらや）であり「鏃（やじり）」の先端部分に「鏑」と呼ばれる笛のようなものを付けることによって、矢を放つと大きな音が鳴る矢である。古来合戦の合図として使われていたものになる。

朱錐は、かつて弓を主武器として鍛錬をしたことも幸いして、一つの着想を得ることになる。それは合図としての嚆矢ではなく、武器としての嚆矢の姿である。

朱錐が将としての戦いを知るために戦場を駆けまわっていたこの時代。

名だたる大將軍から、のちにそうなるであろう勇將、智將が数多の戦場でぶつかり合っていた時代である。名高い智將が魅せる芸術的な敵を絡めとる手腕から勇將が魅せる敵の策をもかみ砕く剛力が幾多の戦場で、その盤上を彩らせていた。

朱錐はこうした將たちの才に慄き、とても同様な働きができるとは、到底思えなかった。

そうして今の己を知ったからこそ、逆の発想にいきついた。

それこそ「ありえないだろう」ことを前提にした対処を常に模索していくことだ。そうした思考は一つ武器にも表れることとなった。

古来より弓矢は遠くから將兵を射抜く必殺の武器となる。当然、敵には警戒されている。それを逆手にとる武器。

すなわち矢を放つたことがだれでもすぐに音でわかる矢であり、以後これを『嘯鳴矢』(こうみょうし)とする。

甲高い音色を響かせながら、必殺の威力で矢が放たれる。これがどういう事象を為すのかを現代的に、例えるならば発砲音になるだろう。

音に人間は反応してしまう。それが命を奪い去る威力の矢であったならば、常人ならば恐怖を煽られる音になるだろう。

こうして合戦の始まりの合図と使われていた嘯鳴矢は、嘯鳴矢として生まれ変わり武器としても役立っていくことになる。

そうした思考があらたな経験を積み重ねて、いつしか糧となり、隊を守る術へと変わっていった。

数多の戦を戦い、時に訪れる危機を乗り越えていく日々は過ぎ去り、前任の副官に顔

向けできる自信ができたころ、三つ目の転機が訪れる。

「錐よ。儂はこれからは文官として戦つていくことにする。だが、そなたの才は戦場にこそ相応しい」

それは、昌文君が武官から文官へとその在り方を変える決意をしたことに起因していた。

「やつには話を通してある」

こうして、副官の任を解かれた朱錐は、新天地へと送り出されるのであった。

第2話

朱錐は昌文君のもとを離れて新天地へ。

彼の者が治める城塞都市に向かい、城門にて名乗りを上げると守備兵の一人が門から現れたので昌文君から預かった書状を渡す。

「しばしの間、お待ちください」

守備兵が伝令を呼ぶと、書状は守備兵から伝令へと手渡されて城門内へと消えていった。

そうして伝令の姿が見なくなると、こちらの様子を窺っていた守備兵から話掛けられた。

「朱錐殿。少しよろしいですか」

「……………はい」

朱錐からすると、昌文君のお供として何度か訪れたことがある城塞都市ではあるが、話し掛けられたのは初めてであり、訝し気に守備兵を見つめた。

「あッ いえそのお、手を触らせてもらえませんか？」

「?」

朱錐は疑問に思いながら徐に手を差し出す。

「あ、ありがとうございます」

「え ええ」

緊張と喜びをの面持ちをして手を触つてありがたがる守備兵にますます「??」となり

生返事をした。

「ありがとうございます」

「……………何か意味が?」

「はっ!? 申し訳ありません。実は——」

曰く、『鬼の面は魔除けである』とのこと。

どういう伝わり方をしたのかは定かではないが、朱錐が伝承の鬼を模した面を被り、敵を打ち払っていく姿を面白おかしく伝えたひとりの徴収兵がいた。

それを戦場で聞いた彼らは、無事に帰り着いた各々の村で、話のネタとして己の武勇伝とともに話した。

するとどうだろう。

地方からさらに僻地へと拡がりだすにつれて『「鬼面」の朱錐が「敵」を「薙ぎ払う」』

は、それぞれの風土や風習の風に乗っては単語を削除、変換させていったのだ。

そうして「鬼の面」「魔」「打ち払う」となったそれらは、ある時から繋がりをみせて噂となった。

それが嘘か誠か、そんなことは他所に置いて、やがては地方から都市部へと逆浸透をはたして、たどり着いた頃には「鬼の面には魔を打ち払う力がある」となっていた。

噂を聞きつけた商人の行動は素早く、彫り師に依頼。

完成した鬼の面はたちどころに売り切れてしまう。ないとなると欲しくなるのが人情。いつのまにか流行りとなって軒先などに多く飾られるようになったのだ。

悲しいかな。朱錐の活躍譚はどこへいったのか。

いつのまにか「鬼の面」だけが残り、敵が魔となり薙ぎ払って「魔除け」となったとさ。

ただ、民草からすれば鬼の面であるが、鬼面を被る朱錐の名をすこしでも知る兵からすると察しがついた。そのため「現を担ぎたい」兵がこうして朱錐をありがたがる珍事へといたったのである。

朱錐としては、この摩訶不思議な噂に困惑気味だが、目の前で喜んでいる守備兵の姿に仕方がないかと内心とは裏腹に平常心を保って接した。

ようやくして、使いの者がくると朱錐は守備兵に挨拶をしてから、無言であとをつい

ていく。

たえ道行く軒先に鬼の面が飾ってあったりしても無言でついてく。

子どもに「あつ 鬼の面」と指をさされようとも終始無言でついていく。

そのまま城内に入るのかと思われたが、なにやらかがあったのだろう。振り返った使いの者が「こちらへ」とさつき来た道とは別の通りへと歩き出す。

別の通りを歩けども、やはり鬼の面は飾つてある。

鬼の面は確かに流行つていた。

そうしてから、ようやく城壁の前で止まり、階段を指し示す。

「こちらから上へ 殿がお持ちです」

都市を囲う城壁の上には、この城の主である王騎がおり側近とともに遠く水平線のかなを眺めていた。

「よく来ましたね。錐。」

王騎は水平線のかなたに向けていた視線を朱錐に向けると、言葉をつづけた。

「城下はどうでしたか。」

「……………」。どこも賑わいあり活気がありました」

「騰お。」「ハッ これを」

王騎の副官騰は懐から見覚えのある面を取り出して朱錐に渡した。

「これは…鬼の面、ですな」

「そうです。言わずもがなですが、元はあなたですよ。」

「……………」

「ソフソフ 魔除けとはよく言ったものです。これはあなたの功績ですよ。現に、あなたは敵に立ちふさがり、そのすべてを払ってきたのですから。」

「……………はい」

朱錐の浮かない声は仮面越しにその表情を悟らせた。

そんな朱錐と王騎が視線を合わせること数拍。

「フウウ」と息を吐くとすこし困ったような表情をして

「昌文君から聞いてはいましたが——」

焦らすような数瞬。

「迷いがあるようですね、錐。」

朱錐はかけられた言葉に驚き、無言のままに立ちつくしてしまう。

王騎は 一度しかいいませんか？ と朱錐に体ごと顔を付けづけることで意識を向けさせる。

「あなたはどんな難敵を前にしても揺るぐことなく立ち向かう盾であり、隊の重しです。そんなあなたを要に、隊は不動の盾となり、敵を押しとどめているのです。」

わかつていますね？ 論すように見据える王騎。

「そんなあなたが、いまのような蒙昧な体では隊は瓦解するだけです。そのままでは、すぐに死にますよ。朱錐。」

錐から朱錐と敢えて突き放すように語ると王騎は朱錐を見据えた。

翻つて大將軍からの薫陶を受けた朱錐は、己の未熟さに気付かされて、満面に朱が注がれてしまい何も言えずにいた。

「ソフツ あなたにもそんな一面があるのですね。いつも鬼の形相ですから、てつきりいつも怒っているのかと。ねえ 騰お？」 「ハッ！ まったくその通りです」

朱錐は普段から伝承の鬼を模した面をしている。きつかけは仲間の一言でもあつたし頭、ひいては顔をふいの攻撃から守るために着用したものになる。

「おやあ それは仮面でしたねえ ココココツ。」 「ココココツ」

愉快そうに、王騎冗談ですよ？ と朱錐に笑いかけた。

己の真似をする騰をひと睨みすることも忘れない。 「ッ！」

「ですが、仮面越しに悟られるようでは、まだまだですね。」

揺れ動く内面を的確につかれていることに、己の未熟さに視線を落とす朱錐。

「昌文君に頼まれましたでしたが、今のあなたに任せる隊はありません。矛をおいて出直しなさい。」

朱錐は、これまで昌文君を、その隊を護ることを主命においてその役割を担ってきた。そのため、昌文君が戦場を離れたことで、己の芯に据えるべきものを見失っていた。

それを王騎は昌文君の書状から読み取り、実際に目の当たりにしたことで、朱錐のそれを「迷い」と呼んで指摘したのだ。

背を向けて歩き出した王騎は最後に一言だけ添えた。

「そうそう 顔をだしていきなさい。騰お」 「ハッ！」

そうして王騎は朱錐の可否は聞く間もなく歩き去っていった。

第3話

「こちらになります。朱錐殿をお連れしました」

案内を務めた騰に連れられた先は、城塞都市中央にそびえる城の一室であった。

「そうか。入ってもらってくれ」

部屋の主からの承諾の声を聞いて扉を開けた騰は、開いた戸を支えながら「わたしはこれで」と身を引いた。

騰に礼をした朱錐は、部屋内より掛かった声に少しの懐かしさを覚えながら、中へと入る。

部屋の中央には机と左右に椅子が一つずつ設置してあり、部屋の主はその一つに腰かけて、朱錐に目を向けると声を掛けた。

「久しいな 朱錐」

「ハッ お招きにあずかり光栄の極みです」

「楽にしてくれていいよ。私はもう將軍でもなんでもない、ただの女だし」

「そういうわけには………」

「生真面目なところはじいにそっくり」

したり顔で言い切られた朱錐は、ため息を吐きながら言葉を返した。

「…………… ハア また怒られますよ」

「ん ふふふ。なつかしいなあ。ジイは元気にしてる？」

「はい。戦場を離れて文官になる決断をなされましたが、お変わりはありません」

「そう よかった。久しぶりに会いたいなあ 頑固ジイに」

「会いにいけたら、よろしいのでは？」

部屋の主は、少し思案するように宙を眺めてから答えた。

「これでも死んだ身だから、さ。そうもいかないよ」

「あなたの……………将軍の素顔を知るものは、そう多くはないのではないかと」

「んー それでもまだ数年だ。生きていることがバレたら、みんな縛り首だよ？」

「それはまた……………まあ、そうなるでしょうね」

朱錐の答えを聞いて、腰かけていた椅子から立ち上がり背を向け、少し伸びしながら言葉を返した。

「そうだよー でもいつか行くってジイに伝えといて」

「……………頑固じいにはわたしから伝えておきます」

「ふふ ありがとう。朱錐が頑固ジイって愚痴つてたこともきっちり伝えます」

「あの、それはやめてもらってもよろしいですか？」

「ふふっ」「ふっ」

「あははは」

—— 二人はしばし語り合う ——

そうして昔の話に花が咲いた頃、朱錐は肩口から見える傷跡に目が留まる。

「躰は……その なんでもありません」

「ん ああ これね」

朱錐の視線の先に気付いた部屋の主は、立ち上がると近くに飾ってあった剣を手にした。

「よくはなったかな。ほら、こうやって剣も持てる」

そうして右手で剣を持つと勇ましく宙に掲げる。

「でも さッ ツ！」 カンツカッ カッ

振り下ろそうとした途端に手から滑り落ちた剣。

「……………やっぱり 握ってられない、か」

瞬間、視線を落として落胆の表情を見せるも、前をみるように言葉を綴る。

「これでもよくなつたほうだ。以前は腕をあげることすらできなかつたから……」
朱鍬はなにも語らずに「……」。どうぞ」と床に転がる剣を拾うと渡した。

「ありがとう……」。わたしには 剣しかなかったのに……」

それは不意のことだったのだろう。

内に秘めていた言葉を吐き出すように、部屋の主である摺は想いを口にした。

「王騎様はそんなわたしでも妻にしてくれた。けど、あと一つだったんだ。あと一つ

。ちゃんと約束を果たして、胸を張ってなりたかつた」

歪む表情に、一粒の涙が落ちる。

朱鍬はそれを見なかつたようにゆっくりと背を向けた。

かつて六大將軍の一人であつた摺。

中華全土にその名を轟かせた秦國大將軍であつた摺は、あの日、死んだ。

死んだ摺はキョウとなり、王騎の妻となつた。

キョウと摺は同性同名ではあるが、全くの別人として戸籍はつくられていた。

つまり、摺の出生記録は二つ用意してあつたのだ。

一つは、召使の子である摺。

もう一つは、他國の商家の娘であり一つ年下であるキョウ。

それは、王騎の父が出生の秘密を知ったうえで、匿うことを承知したときから、万が一に備えて用意されていたものになる。

例えなにかあろうとも、別人としてでも生きられるように、と。

かすかに聞こえる嗚咽を背に、

朱錐は、言葉の先にある過去へと記憶を辿った。

第4話

朱錐が昌文君の私兵の一人として戦場に赴くようになってから数年が経った頃。

朱錐は、優れた膂力で敵を薙ぎ払い、昌文君隊の窮地には盾となり一番の働きをする鬼面の戦士として、その名を覚えられ始めていた。

時を同じくして、一つの噂を耳にするようになる。

王騎將軍の側近の一人には、男顔負けの武人であるという女兵士摺の噂を。

そして、あるとき、とある戦場に向かう野營地で初めてその姿を見ることがになった。

野營地に着いた昌文君隊はさつそく野營の準備をする。そうしているうちに、遠くに砂塵がみえはじめて、徐々に大きくなる軍馬の音は一軍の到着を報せた。朱錐もまた軍旗をみて、昌文君に声を掛けた。

「あれは……昌文君様」

「ん？　なんだ朱錐」

「王騎軍です」

王騎軍は、王騎を先頭にして颯爽と野營地に降り立つ。

先頭の王騎を筆頭に一癖も二癖もありそうな様相をした者たち群れには威圧感すらあり、その威容に友軍であるにもかかわらず気を飲まれる兵士たちの姿があった。

また、その威容は、異様からもきており、無骨な昌文君にして「派手好きで目立ちたがり屋のあほ共だ」と評するほどであった。が、今回に限っては一際目を惹く存在に、その意識をとられるかたちになる。

それが、まだ幼さの残る女兵士の姿であった。

「女？女がいるぞ しかもまだ子供のツ」「たしか摺とか……………あれでも、男顔負けの武人であるとか」

「どんなごつい女かと……………可憐ではないか」「王騎の側近の一人と聞いたぞ」

「王騎の屋敷の召使いの子だとも」「あんな可愛い娘が本当に武の達人なのか?」

兵士たちが口々に語る噂を前にして、昌文君は「達人かなにかは知らんが、女兵士いかなるものぞ」と不機嫌をあらわにする。

「ですが昌文君様。あの王騎將軍のことですし……………」

「ふん 下らん。朱鍬よ。戦場は遊び場で場でないぞッ それにあのバカの考えることはわからん」

摺の存在に否定的な昌文君を尻目に、多くの兵士たちが女兵士摺の可憐さの中にある

美しさに、目を奪われることになった。

そんな、噂話に目を眩ませていた兵士たちは、女兵士摺の異常とも呼べる活躍によって、すぐに目を覚ますことになる。

それは戦が始まってしばらくしてのこと。摺は二つの首をもって帰還してきたのだ。

「王騎様に、これを」

出迎えるために現れた王騎に対して、摺が手にしていたものを掲げると、軍中に衝撃が走ることになった。

「つつ!?その首はッ 趙来と黒要のツ!」 「つまりは敵の総大将と副将の首イ!!」

敵総大将と副将の首がある。それはつまり、戦の終わり告げていた。それに気づき一斉に咆哮が挙がる。

「……………勝った。我々が勝ったぞおおお」

「ウオオオオオオオツーーーーーオ」

勝利を祝い騒がしい周囲とは対照的に、王騎はこの戦に終止符をうった立役者に「よくやりましたね 摺。」と静かに劳いの言葉を発していた。

そんな中、摺の戦働きのすごさで驚きのあまり言葉少なになった二つの人影があつ

た。

「……………昌文君様」

「言うな。儂も驚いている」

それから何度か王騎軍と戦場をともにするたびに、昌文君隊は女兵士摺の異常なほどの戦強者っぷりを知ることになった。

そうした王騎軍との共闘は、隊を預かる身である摺とジイ(昌文君)を親しくさせ、また、その盾である朱錐に興味を持たせることとなる。

あるとき、昌文君に付き従い訪れた野営地の一角で「朱錐はここで待て。儂は摺に話がある」と天幕に入っていく。

朱錐は命令に従うように余人が勝手に入り込まないようにと、天幕の入り口前に立つて門番のように立つ。

そうしてしばらくしてから「朱錐よ。中に入れ」と昌文君から声が掛かったので、朱錐は天幕に踏み入れることになった。

天幕に入った朱錐がまず名乗ると、机を介して椅子に腰かけていた昌文君が「うむ」と頷き、同じく摺も「わたしは摺という。よろしく頼む」と名乗った。

その席で摺より「昌文君の盾」と呼ばれている理由を聞かれたことで、そのいきさつを話すことになった。

それは、戦場へ向かう道中であり、両軍が相まみえるまでに起こった。

襲撃は、大戦の前に先んじて敵の将を刈り取るという奇襲だった。

実際、そのとき右翼を指揮していた將軍は、その凶刃によって倒される結果となる。また、その混乱に乗じて他にも多くの将が犠牲になっていたことがのちに判明した。

そして、襲われたのは昌文君も同じであり、その襲撃を受けた際に、昌文君を身を挺して庇い重傷をおった朱錐が、翻って一撃を敵に与えたのだ。

そのとき「僕の一刀を受けて生きているばかりか、よもや反撃されるとはね。その立派な盾に面じて今日は引くことにするよ」という言を残したことが呼ばれる所以であつたことを語った。

余談だが、朱錐はそのあと退いていく敵を見据えたまま意識を失い、死の淵を歩くことになる。

そうして、死の淵からの生還を果たした朱錐は、昌文君から「お主の忠義に心より感謝する」という言を頂くことになり、一層の信頼を置かれる立場となった。

「あのときは、無我夢中でしたので………昌文君様が無事でよかったです」

最後に朱錐がそう付け加えて、話を終えた。

何かを思考するように腕を組んで目を閉じていた摺は、椅子から立ち上がると朱錐の前に立った。

「朱錐殿。わたしも昌文君には世話になつている。だから、これからもうっかりじいが死なないようにしっかりと守つてやつてくれ」

あまりに堂の入つた立ち振る舞いみせる摺に「ハッ！」と思わず応答してしまった朱錐は、徐に昌文君に視線をむけた。

そこには、腕を組みながらワナワナと震えている姿が……………。

「だれがじいじやつ うっかりもなにも儂は守られるほど軟弱ではないわッ!!」

と怒鳴つた昌文君の怒りは絶賛沸騰中である。

そのため、なぜか朱錐も巻き込まれる形となつて、摺と一緒にウダウダと説教をされる羽目になつたわけだが、隙を見て舌をみせた摺に、「これは懲りてないな」と心の中でごちる朱錐であつた。

さきに天幕での一件もあり、戦場でも「じいの面倒は頼むつ」や「じいを無事に連れ帰つてくれ」など主にじい（昌文君）に関する発言をしてこられるようになった朱錐であつたが、頼まれたので「諾ッ」と了承を示すことで「……………朱錐よ、あとで話がある」

と昌文君からのちに詰められている朱錐の姿があったりなかったりしたとか。

こうして、朱錐は昌文君の盾という立場もあつたためか、繆に声を掛けられるようになっていく。

そして時は流れて、秦に多大な犠牲をもたらした対趙戦となる南安の戦いが勃発する。

秦国が長年に渡つて欲しては攻め、その度に敗れていたこの地を巡る戦いは、多数の将軍が戦死するほどに苛烈な戦場であつた。

秦国の総大将であつた紀陸將軍が討たれても、なおとどまり続けて激しく争つたこの戦いは、最終的に総大将となつた王騎將軍の采配により、この地で勝利を収めるに至つた。

昌文君隊もまた獅子奮迅の働きをみせ、大いに勝利に貢献したものの副官を失う結果となつた。

辛勝であろうとも勝利は勝利である。

それも不落の地であつた南安を手にしたのだ。

秦国中央の喜びようは、前線への戦神昭王の到来に現れていた。

「大王様がお越しになるぞッ」「急ぎを全兵整列させよッ」

蜂の巣をつついたように、慌ただしくなる南安の地。

第5話

戦神昭王の登場により沸き立った南安の地は、静謐に包まれていた。

「さすがは王騎。我が宝刀よ。此度の戦働き、真によくやったぞ」

「身に余るお言葉。ありがたく頂きます。」

勞いの言葉を掛けた昭王は、王騎とそのあとも和やかに会話を続ける。

「長らく求め続けたこの地での戦いは、多くを失わせましたが、新しい芽吹きもあるとき
く」

「芽吹き ですか。」

「うむ。お前の側近だと聞いたぞ。女兵士で名は確か……………」

「摺。」

「そうじゃそうじゃ 摺であったな。最近よくその名を耳にきくぞ。どこじゃ」

その言葉に数瞬の葛藤が過るものの王騎は答えた。

「摺。前へきなさい。」

「ハイッ」

昭王と摺が対面した直後に、昭王が携えていた剣を落とすという事態はあったものの

「お前は儂の宝だ。もちろんここにいるうぬら全員もだ。帰ったら褒美をとらずぞ！」

との昭王の言葉に沸き立ち、二人の対面は終わった。

昭王は背を向けて歩き出し、摺はその場で涙を流し立ち尽くしていた。

「大王様ーッ」「大王様 万歳ッ」

昭王の姿が遠ざかろうとも兵たちの冷めやらぬ熱気は声となつて踵在し続けていた。

そんな喧騒のなか、朱錐は二人の様子に妙ななにかを覚えていた。

それは、摺という人間をわずかながらにでも知っているがゆえに感じたものだろう。

また、傍で複雑そうな表情をして、摺を見守る昌文君の姿にも違和感を感じ取っていた。

「昌文君様。なにかあるのですか」

「……………」

昌文君は涙を隠すように顔を両手で覆つて、立ち尽くしている摺を見つめたままだ。

「……………昌文君様？」

「朱錐。いまは黙っておれ」

昌文君は朱錐の言葉を封じると立ち尽くす摺に背を向けて歩き出した。

それから数刻。

南安の地は、昭王が王都に向けて出発したことで、落ち着きを取り戻し始めた。

普段の姿を取り戻した南安の地。

天幕から姿を現した昌文君は「少し出てくる」と外で待機していた朱錐に視線を向けた。

「お供は必要ですか」との朱錐の声に、少し迷う素振りをみせたあと、朱錐はついていくことになった。

向かった先は、摺の滞在する天幕になる。

天幕に着いた昌文君は「朱錐はここで待て。決して誰も通すでないぞ」と厳命し中へと入っていった。

すると「ドゴンツ」となにか固い音と「グツ」という昌文君らしき声が聴こえたために、朱錐は中へと声をかけた。

「昌文君様。物凄い音がしましたが……」

「ぬうう……… すまん。 うむ。 何でもない、 何でもないぞ」

と、どこかくぐもった声が返ってきたものの、その言葉に従い朱錐は任務に戻った。

それから中で何が話されたのかを朱錐は知るすべもないが、今日感じた違和感とないか関係があるのだろうかと思案していた。

そうして一刻ほどしてからだろうか「朱錐よ。中に入れ」と声が掛かる。

中には、椅子に腰かけている昌文君と寝台から起き上がったように座っている摺の姿があった。

「朱錐。摺がお主に聞きたいことがあるそうじゃ」

「私にですか？」

朱錐の疑問に答えるように、摺が言葉をつづけた。

「じいと話していて、朱錐の仮面のことを思い出したんだ」

「じい………」と昌文君はいらつとしたのか小声でつぶやいたが、話の腰をおるのとはばかられたため我慢した。その様子を朱錐も把握していたが、巻き込まれたくないので、気づかないふりをして話をつづけた。

「仮面……… この鬼の面のことですか」

「そう。それ。ちよつと事情があつて興味がでた」

朱錐は話の先がわからずに、促すように尋ねた。

「事情………ですか。それでなにをお聞きに？」

「その仮面なんだが………」

そう言葉を続けようとして何かに気付いたのか、声が止まった摺に、昌文君が「どうした。摺よ」と声を掛けると

「朱錐の素顔をみたことがない!」と続けた。

昌文君は、そういうええばそうか。と視線を朱錐に向けると、話すように、と頷いてみせる。それを見た朱錐は話し始めた。

「それは、そうでしょうね。ほぼ被っていますから。むしろ私の素顔を知っているものは、少ないかと……」

朱錐が、外しませうか?と尋ねると「見たいっ!」と返ってきたので、徐に仮面に手を掛けて外した。

しばらくまじまじと朱錐の素顔を眺めた摺は、呟くように言葉を口にした。

「……………なんか、すごいやさしそうでなごむ」

朱錐の「やつぱりか」とどこかあきらめ気味な表情にも、穏やかさがあふれていた。

「ええ。よく言われました。ほかにも迫力がないとか軍に向いてない顔、なんていわれましたね」

「それで、仮面を?」

「そうなります。顔も守れますし、敵にはこの鬼の形相を覚えられて恐れられますから、よかつたと考えています」

仮面を手に「もう付けても?」とジャスチャーをすると頷く形で摺から肯定があつたので、再び顔を隠した朱錐。

「そうか………うん たしかに、そうだな」

何かに納得したのか表情が明るくなった摺は、一つの決断を宣言した。

「私も仮面をかぶることにする」

その発言には、なぜ？と驚く朱錐とは対照的に、「ふむ」とどこか納得を示している昌文君の図ができあがっていた。

「ありがとう 朱錐」

「は、はあ」と経緯を知らない朱錐からするとなぜそうなったのかよくわからないが、本人がそう決めたのだからと生返事を返して、理由はきかなかった。

そうしてしばらく三人で会話をした後、昌文君と朱錐は天幕を出て帰路についた。

その道すがら。

朱錐を呼び止めた昌文君は言う。

「疑問はあるだろうが、今日のことは他言無用としろ。いつかはわからぬが、お主には話す」

そのあとすぐに、摺は仮面をかぶるようになる。表向きの理由は諸外国に名が通る前に、その素性、女であることを隠すためだという。また、時を同じくするように、摺に關して素性などを詮索することを固く禁じるとされた。

そうしてからの繆は、さらに戦果を挙げ続けることで、早々と將軍となった。

大軍を率いるようになった繆は、その才能をさらに発揮してく。

一度火ぶたが切って落とされれば、敵を殲滅するまで緩めることなく苛烈に戦う姿に、列国中を恐れさせ、勝利を積み重ねていった。

將軍になつてわずか数年で、五人いる大將軍に匹敵するとまで言われるようになった。

そして今も、繆將軍が率いる秦国軍が城を落とすべく攻撃をしている。

その様子を遠くから見渡せる丘の上には、馬上で語る王騎と昌文君の姿があった。

「……………また繆が城をとるぞ」

「ええ。我らが王に子は多いですが……………もつとも戦神の血を色濃く受け継いでいるようです。」

「そのことなんだが……………話しておきたいやつがおる」

「あなたの副官 朱錐さんですね。」

「ッ！ なぜ!?!」

「ソッフ 繆から何度もその名を聞けばおのずとわかるというものです。」

「んん。そうか。それでどうだ」

「あなたに任せます。繆も気を置いているようですし わたしから言うことはなにもあ

りません。それに……………」

王騎は言葉を途中で留めると昌文君を見据えた。

訝し気に「なんじゃ？」と昌文君。

「願わくば、わたしとあなたのような関係になれば安心できます」と王騎が口にするこ
とはなかった。

「ンフフフ、なんでもありません。」

王騎はそれだけを言うのと馬の進路を変えてゆつくりと駆けていく。

「?。まあいい。ああ、そうだ。王騎っ 摺は幸せだと思うか」

昌文君の声に少し反応を示した王騎だったが、そのまま駆けていった。

月日は流れ。

摺は、ついに六人目の大將軍となる。

六大將軍となった摺はさらなる猛威を列国に振るつた。

そして、あの日を迎えた……………」

第6話

六大將軍となつた嫪は、さらなる猛威となり、列國を振るいあがらせた。

そして紀元前253年。

更なる飛躍をむかえる年となるはずだった。

その年、秦は六大將軍嫪を総大将に、さらに同じく六大將軍である王騎を副將に任命して、趙の支配する馬陽を攻略すべく十萬を超える兵を派遣した。

馬陽は、秦から見て北東にあり、秦が大陸を目指すのならば、抑えなくてはならない重要拠点となる地である。それを抑えるべく、出陣した二人の六大將軍の勢い凄まじく、ついに秦國軍は馬陽を包圍するに至った。

その日、昌文君と副官である朱錐の二人は、馬陽攻略を控えた最後の軍議に参加すべく、総大将である嫪が宿營を張る本陣へと向かつていた。

本陣は、將軍が率いる精銳二千が警備を務めており、それらが円形に陣を張り巡らさせ、四方八方に監視の網を張っていた。そして一度、異常があれば即座に軍として反応、対応できるという一部の隙もない陣容となっていた。

「朱錐よ。おそらく、明日がこの戦の一番となると心得よ。儂は先に本營に向かう。

馬を頼む」

朱錐が「ハッ！」と承諾すると昌文君は馬を降りて、円の中央へと歩き出した。朱錐もまた馬を預けようと降りた馬とともに警備の兵に「馬をよろ…… ツ!？」と声を掛けようとして悪寒に襲われて言葉をとめた。

そのとき朱錐は、今いる円の対外側から流れる禍々しいなにかを感じ取った。

突然、言葉をとめた朱錐を訝し気にみる兵の「あの」とという言葉を気にも留めずに、再び馬に跨った朱錐は言葉を失った。

それと同時に、けたたましい「ガンガンツ ガンガンツ」銅鑼の音と「敵襲うー!!」「敵襲だああ!!」の声がこの地に響き渡る。

「……………なん、だ あ、れ、は……………」

一足早くそれを目の当たりにした朱錐が絞り出した声の先には、摎將軍を護る精銳達が、雑草を刈り取るがごとく易々と切り飛ばされている光景だった。

当然、精銳達は黙ってやられているわけではない。

すぐに陣形を整えると侵入者を阻む防御陣形を組み、さらには仕留めるための槍陣をも組み敷いた。

「投ッ!!」

精兵が円陣を組んで投げる手槍は、数十にもおよぶ。並みの者ならすぐに串刺しとなつて倒れていただろう。

しかし、侵入者はそのすべてを叩き落とし、或いは打ち返した。周囲に撃ち落された手槍の数々は無駄だったかのように見えたのは束の間のこと。

槍陣で足の止まった侵入者に対して

「射ッ!!」

号令とともに弩隊が矢を打ち出ちだ……す前に両断された。

そう、足は止まってすらいなかった。

立ち止まることなく投擲された槍を叩き落とし、仕留めるために距離を詰めた弩隊の距離は侵入者の間合いの中だ。

そうして、野を往くように再び動き出すと立ちふさがったあらゆるものを切り落としていった。侵入から円の半ばに達しようとした頃には誰もが一刀を恐れて迂闊には、とびかかれなくなっていた。

円の中央、つまりは本営付近で徐に足を止めた侵入者は、宣言した。

「我武神龐煖也」と。

続けられた言葉には、「すべてのことは小事であり、天地を脅かすものは一人でよい。よつてそうなり得る者を切る。」とどこまでも独尊であり、とても正気とは思えない内容であった。が、同時に、それがこの常軌を逸した強さを持つ龐煖という名の漢のすべてであると、不思議と理解もできた。

それと同時に姿を現した総大将である六大將軍繆は愛馬炎に跨り一騎打ちをするかのように龐煖に向けて駆け出した。

龐煖という常軌を逸した強さを前に、事態を飲み込めずに呆然としていた朱錐であったが、総大将である繆が飛び出したことで、己のすべきことが脳裏に去来した。

それと同時に馬の腹を叩き喝を入れると馬は勢いよく駆け出す。

「昌文君様ッ!」

後ろから聞こえた朱錐の呼びかけに我に返った昌文君は、そのまま駆け抜けていく朱錐に指示を飛ばす。

「…ッ!? 朱錐ッ 繆を、繆をなんとかしてでも護りきれッ」

遠ざかる背から「諾ッ!!」と声が響く。

「何をしている。お前たちも將軍を護らんかつ!!」

昌文君の大喝が響いた。

朱錐の悪い予感は過去に類をみないほどに警鐘を鳴らしていた。

「クツ 間に合うかつ」

摎將軍と龐煖の激突はすでに一刀を避けるために馬から滑る落ちるようにはぐれた。龐煖の右肩辺りを突き刺していた。

朱錐は円半ばに達しようとしたその時、直感が告げるがままに愛用の棍棒を構えて二人に目掛けて投擲した。

「はアツ」声とともに裂帛の気合を入れて連撃を放つ摎。

「ぬうツ」己に迫るであろう武人の劍戟を防ぎ反撃の瞬間を見極める龐煖。

続くかと思われた劍戟。

勝負の分かれ目は、すぐに訪れた。

連撃の一瞬の隙間を縫って振りぬいた龐煖の一刀は摎の誘いであり、すり抜けるように躲した摎はそのまま懐に入ると、胸の中心に目掛けて劍を突き出す。

対して、龐煖は一刀を躲される一瞬の間に、一刀が誘われたことに気付き、左腕を割

り込ませる……。

勝負を決めたはずの一突きは龐煖の左腕に突き刺さる。

摎は勢いをそのままに腕ごと体を貫こうとさらにもう一步前に踏み込む。

察した龐煖は刺されて押し込まれていた左腕を、あえて自ら深く突き差しにいくことで、剣の軌道を躰の左側にずらすことに成功。そのまま体躯を活かすように摎へと体当たりをした。

「ぐうッ」

たたたらを踏むように後退を余儀なくされた摎が視線をむけると

「終わりだ」と龐煖は右手で掲げた矛を振り下ろした。

瞬間のこと。

肩から入った切り口は周囲に鮮血の飛び散ちらせ、その場に摎は倒れた。

「摎オオオオー」

絶望に叫ぶ昌文君と事態を飲み込んだ兵士たちの悲痛が木霊した。

「摎様アーツ」「摎將軍ツ」「きようさまアアア」

倒れた摎。

横には並ぶように倒れている棍棒が一つ。

「うおおおおおおおおおおッ」

そんな中、雄たけびとともに突貫する朱錐の姿があつた。朱錐は直感のままに棍棒を投擲したあと、馬速を緩めることなく摺のもとに駆けていた。

対して、

龐煖は、天地を、己を脅かす敵を切り落とした安堵に一瞬の気のゆるみが生まれていった。

直前に割り込むように投擲された棍棒に勢いは削がれたとはいえ、致命傷であると判断したからだ。

されど、ゆるみは一瞬。敵を感じ取ると、気配を容赦なく両断した。
遅れて視線を這わすと倒れ込む馬のみ。

「? ツ!!」 瞬時に状況を把握した龐煖は、全身をばねにするように回転して槍で薙ぎ払おうしている朱錐の姿に気付いた。

「ふんツ!!」

朱錐の回転しながらの横風一閃。

龐煖は、咄嗟に躲せぬと判断して受け止めた。が、躰がわずかに浮き上がるほどの衝

撃に驚く。しかし、木製の槍が持たずに粉碎したことで、着地。取って返すように態勢の崩れている朱錐を切りつけた。

回転の勢いまま向けてしまった背中を深々と切られた朱錐だが、なおも立ち上がって佩いた剣を抜き放ち闘志をみせる。

龐煖は、その姿にほんのわずかに驚嘆するものの、すぐに意識を変えて再び構えた。

「次はない」

その言葉通り、朱錐が立ち上がったのは人より頑丈であつたわけではない。本来なら致命傷となつたはずの一刀には、摺に刺された肩口と腕、されには先ほどの一撃によつて痺れていた腕に力が乗らなかつたゆえに、生き残つたにすぎなかつた。

が、龐煖はその一刀を放てなかつた。

「今じゃッ!!!」

朱錐に気を取られていた龐煖は、降りそそぐ矢の雨に一寸遅れて気づき、一時的に防戦一方となつた。

「摺を助けよッ　なんとしてでも助け出すのじゃッ!!」

その声に呼応して、すぐさま摺のもとに軍医が詰め寄り、その場で治療が開始させれようとしていた。

昌文君は、摺が切られたことでひぎをつきそうになつたものの、すぐに、声を張り上

げて突撃する朱錐の姿に奮い立たされて踏ん張り、わずかな望みに懸けて近場にいた兵とともに機会をうかがっていたのだ。

「主を護れッ 摺に近づけさせるでないぞ!!」

昌文君の声に我に返った精兵たちは、己の命を惜しまず龐煖に突撃していく。

「摺様をお守りしろッ」 「死力を、死力を尽くせえええ」 「うおおおおおおお」

一丸となった精兵たちよる波のような突撃は、さきほどとは違い龐煖の歩みを確実に押し留めていた。

気力のみで立ち上がり闘志を見せていた朱錐は、その様を見届けると力尽きたようにその場に倒れた。

以て切り捨てられる数の分だけ時間を稼ぎ、龐煖から摺を引き離していく。

だが、必死の突貫を繰り返す兵の数にも限界がある。護るために飛び出していく兵が途切れ始めた頃、龐煖は、敵の狙いを確実に砕くべく、首を撥ねに摺の元へと再び歩を進めようとした。

その時。

龐煖は、新手の気配に気づいて、歩みを止めた。

龐煖の視線の先には、騎馬に跨る何者かが現れていた。

敵襲の報を受けて急ぎ駆けつけた王騎は瞬時に状況を理解すると、己に渦巻く激情のままに龐煖に襲い掛かった。

数十合の打ち合いの末に、王騎の矛がついに龐煖を捉えて切り裂く。

倒れ伏す龐煖に、さらに無数の矢が降り注ぎ、龐煖は完全に沈黙することとなった。

王騎は摎に駆け寄るとその容体に顔を歪めた。その横では昌文君が「どうなのだっ摎は、摎は助かるのかっ」と軍医に誰何している。

軍医からは、ただ「生きてるのが不思議なほどです」とだけ。

その返答を聞いた王騎は、直ちに思考を切り替えると、事態の收拾を図り始めるのであった。

第7話

事態の收拾にいち早く乗り出した王騎の判断は正しく、多くの負傷兵の命を救うことになった。

その一人には、朱錐の姿もあつた。

大きく切り裂かれた傷からの出血は酷く、朱錐は意識不明のまま襲撃の二日後の夕方まで目を覚ますことはなかつた。

「……は……ぐうう」

意識を明確にさせたのは耐えがたいほどの背中に走る痛み。

朱錐が目覚めたことを確認した兵が、伝令を出してしばらくすると天幕の戸を開けて中に入ってくる人影が二つあつた。

「錐よ。目覚めたようだな」

最初に声を掛けたのは昌文君であつた。

その声に「ぐツ………」と痛みに表情を歪めながら躰を起ここそうとした朱錐を手で押しとどめると「よい。そのまま寝ておけ。ばかものが」と昌文君は労うように言った。

「……申し訳ありません。」

朱錐は、躰の力を抜いて謝罪の言葉を口にした。

「ソフフフ 大した忠義心ですね。朱錐さんは。」

その声に「!？」と再び躰を起こそうとした朱錐を、昌文君が素早く頭を押さえて寝かしつける。

そうして「このばかものがツ！ 寝ておらんかツ!!」と怒鳴る昌文君の横では、どこか愉快気に笑みを浮かべる王騎の姿があった。

「そうですよ 朱錐さん。あなた 間違ひなく死にかけていたのですから。」

朱錐はその言葉に、なぜ自分がここにいるのかを思い出す。

「膠様はツ 膠將軍はどうなつたのですかツ」

「……………今は自分の怪我のことだけを……」

答えを濁そうとした昌文君に対して、王騎ははつきりと言つた。

「もう大將軍としての責務を果たすことは難しいでしょう。」

「ツ!? それは」

「王騎ツ!？」

「それに、朱錐さんは知つておいたほうが良いでしょう。人払いも済んでいますし」

言葉に従ひ回りを見渡すと、すでに、昌文君と王騎以外の姿はなかった。

この時、王騎が話した内容を朱錐は生涯誰にも話すことはなかった。

六大將軍繆が病に倒れる。

この一報は、秦国を大いに揺るがせた。

それにより、馬陽攻略の総大将は繆から王騎へと引き継つがれた。引き継いだ王騎の活躍もあつて、見事趙軍を撤退させることに成功した秦は、この地を得るに至つた。

秦国はこの祝事に湧き、同時に六大將軍繆が帰らぬ人となつた一報に涙することになる。

時間は戻り現在。

六大將軍繆は、馬陽攻略戦の最中、流行り病に倒れて急死したことになる。

「すまない。恥ずかしいところをみせた」

朱錐が振り返るとそこには、どこかすつきりとした表情のキヨウの姿があつた。

それは、蓋をしていた想いが、残された傷痕から掻き出されてしまったことで心が軽くなつたからなのかもしれない。

「いえ、申し訳ありません」

「あやまるな…………… おかげで命がある」

キヨウの本心である。あの瞬間、確かに摺は己の死を覚悟したのだから。

「ですが……………」

「ふふッ」

なおも言葉を綴ろうとしている朱錐とは裏腹に、ふと、キヨウは威圧感すらある鬼の面の下に、あのどうにもおだやかなでなごむ顔があるのを思い出して笑みがこぼれていた。それに対して「？」と仮面下でなつた朱錐の気配がしたので、話を変える意味でも朱錐がこの都市に來た理由を尋ねることにした。

「いや 氣にするな、朱錐はよくやってくれた。それで十分だ。それより、ここには王騎様の力になるために？」

「そのように昌文君様からは……………ですが、矛を置いて自分を見つめ直し出直してこいと先ほど」

「矛を置いて、か」

「はい。ですので、しばらく軍を離れて旅をしようかと。幸いなことに仮面を外せば私とわかる人はそう多くはありませんので、国外も考えています」

「そうか。どれくらいだ」

「わかりません。ですが、明朝には発つことにします。それに伴って一つお願いがあり

まして　——」

朱錐はそこで、昌文君との最後の任務を終えたあと、預かることになった人物をキョウに託した。さらに「面を外すならあずかっておこうか」との申し出に、少し考えた朱錐は、承諾することにした。

紀元前251年　秋。

城塞都市を出てから、一礼をして歩き出してく朱錐の姿があつたという。

その様子を伝えられた王騎と騰は、発つ前の晩、執務室に挨拶にきた朱錐の姿をうかべながら、話しはじめた。

「よろしかったのですか　行かせて。朱錐なら今のままでも確かな戦力に」

「騰お。」「ハッ」

「あなたもわかつているのでしよう。」

「ハッ　………世代の交代、ですね」

「その通りです。六代將軍なんて呼ばれてはいても残っているのは、もはや、わたし一人。確実に移り変わっていきます」

「列国もそれは同じ。これでは大戦は起きませんな。その間に成長させる、と?」

「ソフフ 先のことはわかりません。そうであれば、とは願いますがね」

ここから先、仮面の朱錐は行方は一年数か月後から不明となる。

月日が流れて、紀元前246年秋。

「長らくお世話になりました」

「ヒヨツヒヨツヒヨツ 良い出会いであつたぞ。それでは、儂は寄るところがあるのでな。將軍によろしくお伝えください」

男は離れていく馬車に向かってもう一度一礼すると、歩き始めた。男の背には深い傷をおつた少女の姿がある。

それから一晩かけて目的地に着いた男は、開門を願い、請うと門衛が姿を現した。

「この書状とともにこちらをお渡し頂ければ伝わりますゆえ、急ぎお取次ぎ願えませんか」
その言葉とともに書状と欠けた面のようなものを門衛に渡した穏やかな顔をした男

は、背に担ぐ少女の安否を気に掛けはじめた。

男の風体は、下民では着ることができぬような上質な服を自然と着こなしており、どこかの貴族の縁者であるということがうかがいしれた。

門衛は、急ぎ伝令に書状と欠けた面を渡した。

「懐かしい」

門衛は、少女を気遣いつていた男がふと口にした言葉から「この都市に所縁が」と尋ねる。

「ええ。旅立つ前に寄らせていただきました」

どこか感慨深い表情をした穏やかな男の様子に、門衛は、この誰とも知らぬ人間に対して、色々とあつたのだろうと柄にもなく絆されている己に気付いた。

「それは、ゆつくりとできると良いですね。もうそろそろ……」

門衛の言葉通りに、伝令は使者をともなつて戻つてきており、後ろには数人の者がたちが付き従っていた。

「そちら書状にあつた少女ですね。危険な状態であると聞き、医の心得のあるものを連れてきております」

そうして、治療ために少女をあずけた男は、そのまま使者の案内にしたがつて都市を

縦断していく。

使者は、男が軒先に飾ってあるものに時折目をとめる姿に「あれは魔除けです」と簡単に説明した。その言葉に「あんなに豪華でしたか」と男は問うた。

男がそれを問うたのも無理のないことだった。

男の記憶では、木製で割と簡素な造りであつたはずで、色すら付いていなかった。けれど、今見えるものは、細部まで精巧につくられていて、色も塗られており、さらには、石を彫られてできたとても立派なものすら、多数存在していたのだ。

「ええ、あるとき城主様が石像を彫られたことがありましてね。それに触発されたのか、彫り師たちもこぞつて作り始めたために、ああなつた次第です」

その言葉に男はどこか遠い目して「そうですか」とだけ返した。

第8話

案内された一室で待つこと数刻。

使者とともに扉を開いて現れたのは白を基調とした着物をきて、凜とした美しさをもった女性であった。

「行方知れずの男から書状が来たときいて驚いた。ん、朱錐は少し老けたな」

「これはこれは、お久しぶりでございます。キヨウ様。キヨウ様はお変わりがないよう
でなによりでございます」

と深くお辞儀をする様は、恰好からも正しく文官のそれを思わせた。

「なんか文官みたい」

と正直な感想を述べるキヨウ。

「ええ、と、まあ……、ほとんど文官みたいなことしてましたからね」

指摘を受けた朱錐から堅苦しさが抜けると、昔を思い出させる穏やかな空気が流れ始めた。

「どうしていた？ あるときから音沙汰がなくなったから心配したぞ」

「それは申し訳ありません。少々事情がありまして　――」

そうして、これまでのことを簡潔にまとめながら話をしていると、さらに一人の女性が現れて、そこに加わった。

「なんだ 生きてたのかい。私をほったらかして死んだのかと思つて、勝手にやらせてもらつてるよ」

薄桃色の着物を上品に着こなしている女性は、少し粗野な印象を与える言葉を発していても、氣立ての良さを感じさせた。

ただ口ぶりは、いかにも朱錐は酷い男であるという節を感じさせたため、朱錐は反論するように言葉を発した。

「ほったらかすも何も、私は昌文君様からあなたを預かつただけのこと。それにここでの生活のことはキョウ様にお任せしたので、不自由はなかつたはず。そうですね？」

確かめるように朱錐が視線を向けると、面白げにこちらの様子をみるキョウの姿があつた。

「さあてね。女を置いて消える男の言い分に説得力はないぞ 朱錐イ」

どこか悪戯心が顔をだしたキョウの言葉に女性は追隨した。

「そうさ。最低な男さね」

「ぐっ……………」

確かに、預かつてからすぐに昌文君からこちらに行くようにと送り出されて、着いて

からも、己を見つめ直してこい。と追い出されるような形ですぐに旅をすることになった経緯もあって、まだ怪我人で満足に動くことのできなかつた女性を連れて行くわけにもいかずに、置いて（預けて）旅にでたことは事実であった。

さらに追撃の言葉を発するかと思われた女性は、一転、朱錐の正面に立つと真剣な面持ちを見せた。

「それに……ちゃんときれいなとき礼も言つてなかつたからね。あんたのおかげで命拾ひしたよ。ありがとう」

綺麗な礼をみせる女性の姿には気品すら感じられた。

だが、それもつかの間。

「つていうかお前さんそんな顔だつたんだね。亜門、江彰と違って、聞いてた通りになんだかなごむね」

と茶化すような表情へと変わった。

「そうそう　なんか和むでしょ。朱錐の顔」

とふたりして頷き合う姿はキョウと女性の良好な関係を感じさせた。しかし、このままでは、話が進みそうもないと察した朱錐は、用件を済ませることとした。

「預けていたものをお返しただいてもよろしいですか」

「ああ。持つてこさせるよ。入って」

キヨウが入室の許可をだすと、部屋の外で待機していた者が、預けたものとともに入室して、それを朱錐に渡した。

「長らくお預かり頂き感謝します」

「……………その鬼の面を見るに、やっぱりあんただだったんだね」

ぼつりとつぶやいた女性にキヨウは笑った。

「あはははッ 信じてなかったの」

「いやあ、声はあの時の声だし間違っちゃいないとは思ってたけどねえ……………」

「んふふふ」

女性視点で見ると、苛烈な追っ手の攻撃で命の灯が消されそうになったとき、ただの一撃でそれら粉碎した鬼面の戦士の勇ましい姿と今ここにいる穏やかさを体現するよ
うな男の姿が、どうにも一致していなかったのだ。

そのあと、朱錐の「城主との面会に備えて支度を整えたい」という申し出に了承をし
めしたキヨウは、お付きの者に案内をさせた。

しばらくして、支度を整えた朱錐が現れると、そこには甲冑を着込み、鬼の面で顔を
覆い隠した戦士の姿があった。

「おお……………ひさしぶりに朱錐だ」

それは、かつて昌文君の盾と呼ばれていたままの姿であった。

「ええ………言いたいことは理解していますが、さつきまでいたのも朱錐ですよ？」
どこか皮肉気に応じる朱錐。

「ふふつ たしかにそうだ」

「……………何言ってるんだい、二人して」

と、どこか不思議なやり取りをするふたりに、女性が呆れたように言葉を発したのにはわけがあった。

秦国内ですらキョウの正体を知る人物は限られており、ましてや、他国の人間である女性にそれが知れるわけがなかったためだ。

そうこうしているうちに、城主の帰還の報を受けて、この場はお開きとなった。

朱錐は案内に従って、王騎の待つ部屋へと向かった。

「随分とお久しぶりですねえ 朱錐さん。」

「ハッ こうしてお目にかかる機会を与えて頂き至極恐縮です」

それは、かつて親交のあったものに対す挨拶ではなく、一武官が王騎と初めて対面したときのようながちりと堅い挨拶であった。

「ソフ この気堅さ。懐かしさを感じませんか 臆お。」 「ハッ！懐かしすぎです」

「それに、あなたを見ていると どこかの誰かさんを思い起こさせます。」

王騎は少しばかり懐かしむようにその言葉を紡ぐ。

そうしてから、獲物を狙うようにじつくりと朱錐を見定めると「んふふふ。」と笑みを浮かべた。

「無駄ではなかったようですね。」

あの時とは違って、気配に乱れを感じさせない朱錐の立ち姿に満足したように言葉をつづけた。

「あなたの働きに期待していますよ。錐。」と。

こうして、面会を済ませた朱錐であったが、すぐに隊を任されるようなことはなかった。というのも、「五年も行方知れずなのだから、挨拶に行つてきなさい」と王都にいる昌文君のもとへと送り出されたのだ。

そうして王都。

朱錐は懐かしさを胸に昌文君の屋敷の戸を叩いた。

第9話

「申し訳ありません。主は不在です」

およそ五年ぶりに訪れた屋敷には主である昌文君の姿はなかった。そうして朱錐が踵を返そうとしたとき、小走りに駆けてくる音とともに屋敷の中より声が掛かった。

「ちよつと待ちなさい 朱錐ちゃん」

中から姿を現したのは、昌文君の妻夏夫人であった。

「これは、ご無沙汰しております。夏夫人。あの、……私もいい歳なので朱錐ちゃんは勘弁願えませんか」

「あら、そうね。でも、私にとってはいつまでも朱錐ちゃんは朱錐ちゃんよ」

美魔女と言つて差し支えない夏夫人は、昌文君とは違つて非常におおらかであり、いい加減なところもあるがそれでいて、収めるべきところは収めるという非常に魅力にあふれた方である。

「……………そうですけど」

すこし頭を抱えたあと、苦言を呈そうと夏夫人に視線を向ければ、こちらにやさしくほほ笑みかける夏夫人に朱錐はあきらめを抱いた。というのも、幼少の頃から昌文君の

お世話になっていたこともあり、夏夫人には随分と目を掛けてもらっていた。そのため、朱錐にとつては、昌文君の次に、いや、昌文君よりも頭の上がない人物になっていた。

「ふふふ ほら、寄っていきなさい」

と手招きされては断れない朱錐は屋敷の中へと入っていく。余談だが、軒先に鬼の面が飾つてあつたが朱錐はみなかつたことにした。

夏夫人と昔話から、近況の話までしてゆつたりと時間は流れていった。が朱錐を良く知る夏夫人は、当然のように鬼の面の話題を取り出すと、「これ、あなたでしよう？」と笑みを浮かべて、からかかうのであつた。

「そうそう。せつかく朱錐ちゃんが来てくれたんだけど、もうすぐ領地に帰ることになつたのよ」

夏夫人のその言葉に少しの疑問を覚えた朱錐は尋ねることにした。

「例年は年が明けてからお帰りになられていたように記憶していますか」

「ええ。そうだったんだけど……。理由は教えてくれなかつたけど、何かあるのよ。ほら、あのひとのことだから」

昌文君は重要なことを漏らすような人物ではない。そのため、そういつたことがよくあつた。夏夫人もそのことを理解しており、理由を話さないときは、重大ななにかがあ

るときと経験から察していた。また、そのことを可愛がっていた朱錐に知っておきなさいと諭すこともよくあつたのだ。

「……………そうですか。気に留めておきます」

「そうしなさい」

夏夫人からの忠告を受け取つたあと、「また顔をだしなさいな」と促されながら朱錐は屋敷から送り出された。

送り出された朱錐は思考に耽っていた。

王宮内では、幼くして王位についた大王を傀儡とした右丞相呂氏陣営と左丞相竭氏陣営で日夜争つておるとき。しかし、大王を手元に置く呂氏陣営が有利であることに変わりはなく、むしろ安定しているともいえなくては。その流れに何か変化があつたのだろうか。

そうして思考に耽つて歩いてきた朱錐の前に、一つの影が差した。

「お困りごとかい。お前さんには命を助けてもらった恩もあることだし、知りたいなら教えるよ」

「紫夏殿ツ なぜここに。いや……………王宮内のことでも？」

「当り前さ。闇商紫夏は何でも扱うよ」

そうして紫夏から得た情報によると、呂氏は厳密には大王派ではなく、呂不韋派であ

り大王の生死にはこだわりがない事、また、謁氏と王弟成？とのつながりが日が強まっていること。そして、大王派は昌文君派のみで最小の勢力であることを知った。

「政様か」

朱鉦は、昌文君の副官として最後の任務で出会った現大王政様のことをおもい浮かべていた。

昌文君様が武官を辞め、文官として生きる決意をなさったほどだ。救出劇のあと、二人だけで話されていたが、なにか感じ入るものがあつたのだろう。

私の印象からすると、政様は齡9歳にしては、聡明であることは認める。大怪我を負っていた紫夏に対するお心遣いは立派なものであつたし、昌文君様からもたらされる情報からの現状への理解速度などは、およそ同年代とはくらべようもないほどに早い。けれど、正直に申せば、それだけであり、昌文君様が政様の先に何をみたのかは私にはわからない。

それと紫夏の話によると昌文君様の立場はさうとう危うい。傀儡とは言え大王は大王。その大王を排したい謁氏と大王がどうなるうとかまわらない呂不韋。そうなるも政様をお護りするのには、昌文君派のみとなる。夏夫人が早々に領地にお帰りになるのも、身を案じての事となると、王宮内はすでに一触即発なのかもしれないな。

「お前さんはどうするんだい。こつ言つてはなんだけど、私としては政様に大王のまま

いてもらった方が良い商いになるから助けたいんだ。あのときのこともあるからね」

「私は王騎様の元にいる身です。勝手をするわけにはいきません」

ギチリと握り込む拳とは違って冷静に言葉を返す朱錐だが、本心は昌文君様を助けた。と言っているようなものだった。

「呆れるほど生真面目だね。お前さん。道理で、キョウ様から『きつと朱錐ならそう言うから』ってキョウ様が王騎様に尋ねたら、『好きにさせなさい。わたしも好きにしますの』。なんてこの伝言を頼まれるわけだ」

昌文君は、闇商人紫夏を政救出作戦後に朱錐に預けた。また、その朱錐を王騎のもとおくりだすことで紫夏の身の安全も同時に確保していた。それは、朱錐の武の力を腐らせたくない想いもあったが、趙国、あるいは政に近いものとして紫夏が狙われないようにするためでもあった。

そのあとすぐに朱錐は旅立ったわけだが、怪我の完治した紫夏は、政のこともあり秦国に残ることを決意。もちろん、趙国に帰れば死罪は免れないので、それは妥当な判断でもあった。

そして、怪我の療養中にキョウと話すようになったことで、そのままここで働いたらどう？と勧誘を受けたのだ。

こうして、紫夏は王騎のお膝元で商人として働く傍ら、各所で吸い上げた情報をキョ

ウや王騎に流すことを生業とするようになっていた。

「私の好きに、か。……ありがとう、紫夏」

「どういたしまして。なにかあつたらここに來な」

メモと言葉を残して紫夏は去っていった。

本編 原作開始年後

第10話

年が明けて紀元前245年。

玉座を巡る呂氏と裼氏の争いは激化の一途をたどっていた。

そんな折、秦は呂氏率いる総勢二十万の軍勢を魏の少梁に向けて進軍させた。右丞相呂不韋本人が王都咸陽を離れたことで、旗頭の庇護を失うことを恐れた呂氏陣営の者たちはこぞつてこの遠征に随行した。そのため、秦国中枢で争われていた国を二分するかのような権力争いは、呂氏陣営不在による空白の時間が生まれることとなった。

この機を好機と捉えた王弟成？は、憎き腹違いの兄、舞妓を母に持つ大王政の排除を目論見、かねてより呂氏と争い続けていた裼氏を抱き込み、大王の暗殺。そして、呂氏の排除を命じた。

裼氏は王弟という駒を得たことで、己の野望がすぐ目前にまで迫っていることを確信し、すぐさま行動を起こした。

すなわち、大王政の暗殺である。

大王暗殺に加えて、大王派でありなにかと小うるさい昌文君らもまとめて処分すれ

ば、あと腐れもなくなる。あとは玉璽をおさえて、遠征中の呂氏陣營を逆賊と認定後、大軍勢を起こして討伐すれば……………。

と、竭氏は我が世の春が訪れることを幻視せずにはいられなかった。

だが、竭氏の野望は第一目で躓くこととなった。

暗殺目標である大王 \square 政が王宮から忽然と姿を消していたのだ。そのことに気付いて慌てて追つ手を差し向けたが、後の祭りであった。辛うじて捕まえられたのは、追つ手の錯乱を目的として残されていた昌文君配下の者たち数名であった。

昌文君は、機が熟せば竭氏は反乱を起こすであろうことを予見していた。同時に、現大王一派ではそれを抑えることができないことも理解していた。

そのため、有事の際に大王を無事に脱出させるべく大王とともに方策を立てていた。結果、竭氏は侮っていた昌文君に見事に出し抜かれることとなった。

王宮からの脱出を果たした御車は、昌文君とその私兵が左右を固める形で咸陽の街を駆け抜けていた。

「うまくいったようですね 昌文君」

御車から顔をだしたのは、大王であった。

「……までは。だが、まだ油断は禁物です。漂大王」

漂大王。この言葉でわかる通り御車に乗っているのは現大王である。政ではない。すなわち影武者である。

昌文君は、抜け出す手立てを万全に期した上に、お連れする大王すら影武者を仕立て上げて、万が一の備えを施していた。

咸陽の門を潜れば、あとは合流地に向けて駆け抜けるのみ。竭氏の兵は王宮を制圧するために動員されているようで、姿すらなかつた。いよいよ門が迫ってくる。難関であつた王都脱出は万全の準備が功を奏して成功を収めようとしていた。

不測の実態、王騎さえ現れなければ……。

「門を抜ければもう安心です。追いつかれることはないでしょう」

「そうですか。さすがです。昌文君様」

「仮にもあなたは大王なのだ。今は呼び捨てでよい」

「そうですね。今は大王役ですから、そうしますね。昌文君」

安堵の息が漏れそうになった両者であつたが「ソフウ」と幻聴がした瞬間、蠢く殺気に気付いた昌文君は叫んだ。

「左方盾密集。備えよッ」

言葉とほぼ同時に放たれた矢は多く、御車の護衛左方の列に突き刺さっていく。当た

り所が悪かった護衛数名が命を落として落馬していった。

「あれあれえ〜 昌文君はどこにいくのオ。」

悠然と姿を見せたは、六代將軍最後の生き残り、王騎であつた。

「王騎ツ 貴様、なぜここにツ」

「ソフフフ なぜでしょうねえ。」

不敵な笑みを浮かべる王騎は答えない。

「ツク 隊列を組みなおせ。半分は足止めじや、なんとしても逃げ切るぞツ」

王騎の出現は予期せぬものだったが、素早く意識を切り替えて、指示を飛ばす昌文君は流石であつた。止まっていた御車は慌てて動き出た。昌文君もまた、王騎の相手はせずに駆け出した。

昌文君が残していった私兵は、精兵と呼んで差し支えない練度を誇っていたが、王騎が率いてきた軍とは数に差があり過ぎた。

「さすがにやりますねえ ソフフ」

そんな精兵とじやれあいながら王騎は、駆けてく御車を易々と追つた。

「まさか王騎がでてくるとは……………ツ」

ここまで完璧に近い形で竭氏を出し抜き、咸陽からの脱出劇を演じてきた昌文君であつても、王宮の争いに興味を示さなかつた王騎がここにきてまさかというの思いで

あつた。

「王騎とは、あの王騎大將軍ですか」

緊迫した状況とは裏腹に、御車の窓から顔をだした漂の表情にはむしろ明るさすらあつた。

「その通りです。秦の怪鳥と呼ばれる最後の六大將軍になります」

昌文君はその表情に「下僕二人として、身の程をわきまえぬ大望があります。」と話した漂の姿を思いだしていた。

「あれが王騎大將軍……………」

御車から顔を覗かせる漂が、大將軍にある種の憧れを抱いていることは、昌文君にも理解はできた。こんな時でなければ、紹介くらいはしてやってもいい。だがいまは、悠長に奴を待つわけにはいかないのだ。なぜなら、王騎はこちらを屠るために迫ってきているのだから。

「お待ちなさいなあああ 昌文君ンンンツ」

名を叫びながら追い上げてくる王騎の追撃は激しく、接近を許した昌文君の私兵は悉く切り裂かれていく。

「ツクツ 足止めにもならないか。王騎には儂が行く。お前たちは大王の御車を護れツ」

指示を飛ばして昌文君に、御車から声が掛かる。

「武運を」

「……………お主もな」

決意を固めた昌文君は王騎と肩を並べるよに並走して、矛を振るつた。

「王騎イイイ」

咆哮一閃。矛を振りぬいた。

「ソフ いいわよオ 昌文君。」

だが、昌文君の気合の入った一閃は、涼し気な王騎に受け止められる。

「ぬう 王騎ッ！ なぜ今になって参戦したッ」

王騎は昌文君の問いかけには応じず、矛をはじくと、攻勢に転じる。

「こうして馬を並べるなんて、懐かしいわね。 ねえ 昌文君？」

どこか探るような剣戟だが、易くはない。昌文君はなんとか矛でさばき受け止める。

「ぬッ ック ならば、なにしに来た 王騎ッ!!」

「熱き血潮が滾る 戦いの世界を求めてッ。」

「っ！意味がわからぬッ」 矛を振るう昌文君。

「あなたにならわかるでしょうッ」 易く矛を受け止め、返しす手で反撃する王騎。

その後も言葉の応酬と、打ち合いは止むことはなく、むしろ激しさは増していくばかり

り。

「ぐぬうう　ならば儂みたいな一文官と兵を相手にせずともよからう　がッ」
 気合を入れて振るつた一閃であつたが王騎は齒牙にもかけない様子であつた。

「ソッフ」

このままでは、王騎に傷を負わすこともむずかしいと昌文君は悟り始めていた。

劣勢は疑いようなない事実であつたが、そこに一つの朗報が入る。「昌文君様ッ　あれを」と私兵の一人がさす方角には、丘がある。そう、不測の事態に備えて、兵を伏してある丘が見えてきていたのだ。

「退けッ　王騎。あの丘には　――」

「伏兵……………。考えることは同じですね　昌文君ン。」

「なっ!?!」

昌文君が配した伏兵が姿を現せたのと同じ頃、その横腹に食いつくように、王騎が配した伏兵の突撃が行われた。

「まずいッ」

王騎が配した伏兵に気を取られた昌文君を見逃すほど王騎は甘くない。

「さよならです　昌文君。」

振り上げられた矛。

「昌文君ッ」

御車から呼ばれた声で、昌文君は己の危機を悟ったが時すでに遅く、王騎の矛は振り下ろされる。

「しまッ ー」が瞬間。戦場を切り裂く甲高い音色が鳴り響いた。

音の正体は矢。王騎は咄嗟に矛の軌道を逸らしてそれをはじくと、射手に意識を向けた。

視線の先には、昌文君側の伏兵に紛れ込んで、こちらに単騎で猛進する朱錐の姿があった。

「ソフ 現れましたね。あなたの盾が。」

まだ距離があるものの、二人の視線は確かに交じり合っていた。

「王騎様……………です。が ふんッ」

朱錐は一瞬のためらいを捨てて、次の矢を放った。

ピッ ピュウーウピュ ピーッ

「この音。向けられると存外に厄介ですねえ ソフ！」

難なくと対処はできる。だが、甲高い音に耳が反応してしまい、わずかではあるが意識を取られていた。さらに、音色が途中で変化すると、軌道にも変化が生じるようだった。

総じて、威力は申し分ないが、狙いは散漫。けれど、意識をわずかでもとられる以上は、厄介と称するに値すると王騎は評した。

昌文君の伏兵の一人として姿を現した朱錐は、昌文君の危機を察知してすぐに一射を放ち、続けて二射。そうして駆けつける時間を稼いでいた。さらには、王騎に正面から挑みかかることで、その脚を止めにはいった。

「昌文君様は御車をツ」

「朱錐ツ　ここは任せるぞ」

駆け抜けていく昌文君に「諾ツ」と声を張り上げた勢いのままに王騎へと愛用の棍棒を振りぬいた。

鳴り響く衝撃音がその威力を語る。

「つと、とと。　さすがですねえ。朱錐さんは。」

愛馬の凰とともに、たたらを踏むように飛ばさた王騎であったが、満足気に言葉を発していた。

「ここから先に行かせはしないツ!!」

「ソフフフ　良い啖呵です。ですが、あなたのお相手は私ではありません。」

王騎の視線は朱錐の後ろを示していた。馬首を変えるとゆっくりと近づいてくる三つの騎兵の姿があった。

「久しぶりに顔を突き合わせるのが敵同士とはな。 元副官殿」

それは、朱錐とともに王騎のもとへと送り出された元昌文君隊の烈士馮（フォン）、濯（タク）、洪（ホン）であつた。

「馮ッ それに、濯と洪までッ」

「それでは私を先を走りますので。」

と言葉を残すと、王騎は昌文君に向かって駆けていった。

「そういうわけだ。しばらく相手をしてもらおうぞ」

元は同じ昌文君隊。同じ釜の飯を食べた仲間ではあつたが、三人が構えたことで朱錐は覚悟を決めた。

「容赦はしない。どいてもらおうぞッ」

第11話

「容赦はしない。どいてもらおうぞッ!!」

馮、濯、洪の三人は、元昌文君隊の精銳である。朱錐が守りの要であるならば、彼らは敵を切り裂く矛として、その武を示してきた猛者である。

そして、王騎軍に組み込まれてから五年。五体満足で生き残り続けている彼らが弱いはずはない。が、

朱錐はそれを寄せ付けなかった。

「はああアアああッ」

振りぬく一撃は三人の防御を吹き飛ばし、二撃目にはその体を打ち据えて落馬させた。

「ぐウ うッ」

打ち込まれた一打一毘はとてつもない重き以て、足止めを担った三人を無力化した。

勢いそのままに駆け抜けていく朱錐の背中を、三人はただ眺めることしかできなかった。

「さてさてえ 昌文君ン。これであなたは丸裸ですなえ」

王騎の声に反応して振り向けば、そこには今まさに首を撥ねようとする矛があった。

「ッ ぶないっ」

それを間一髪で躲した昌文君であつたが馬脚が乱れたことで、王騎に並ばれてしまふ。

「楽しい時間でしたが、あなたとの戦いも そろそろ幕のようです。」

「何を言うかッ まだ終わってなどおらんぞッ 王騎ッ」

「ほら 御覧なさい。 御車を。」

「なッ !?」

王騎の言葉に従つて視線を向けた先には、ついに、御車に届こうとする兵の姿があつた。

「大王っ!!」

昌文君の意識は完全に大王に向けられて、それは決定的な隙となつていた。

「それに あなたもね」

振り下ろされた王騎の矛は昌文君の首に迫つた。

三度目となる昌文君の命を刈り取るべく振るわれた王騎の矛。止めさせたのは、他にもない昌文君の言葉であつた。

「王騎ツ 政様は昭王を超えるぞ」

ピタツと昌文君の首筋で止まった王騎の矛。

「…なにをばかなー」

言葉に思考を乱された王騎の一瞬の間を、昌文君は見逃さなかつた。

「朱錐ツ 儂のことはいい 大王を護るのじゃツ」

「……………朱錐さんはもう抜けてきましたか。」

王騎は「諾つ!!」と響く声とともに離れていく朱錐を一瞥したあと、先の昌文君の言葉「政様は昭王を超える」その意味を吟味していた。

「儂として易々と討ち取られはせんぞツ」

再び気合を入れなおして、攻勢に出る昌文君であつたが、難なくそれをさばき終えた王騎は一つの決断を下した。

「まあいいでしょう。お別れです。昌文君。」

これまで、どこか掴みどころのない風体を装っていた王騎であったが、それを脱ぎ去り放った一刀は昌文君の躰を易々吹き飛ばした。

昌文君の姿は、側面に流れる谷底へと誘われて消えていく。

「ソフソフ 天の采配に 期待してみましようか。」

そこには、空にむけて不敵な笑みを浮かべる王騎の姿があった。

昌文君が脱落したことで、護衛の士気は地に落ち、事態は最悪の方向へと舵を切ったかに見えた。

「大王ツ お覚悟ツ」

そして、今まさに御車に槍を突きたてる騎兵の姿に、昌文君の副官である壁は、絶望の色を濃くしていた。

「終わりだ。なにも、かも……………昌文君様。申し訳ありません」

そうして視線を下げ始めていた壁に声が掛かる。

「壁ッ あきらめていない場合ではないぞ 見よ」

後方から発破をかけたのは、かつての自分たちのまとめ役であり、昌文君の前副官として隊を率いていた漢の言葉であつた。

指し示された先には、突き立てられた騎兵の槍を躲して、御車から飛び出し、そのまま反撃とばかりに蹴り放つと騎兵の顔面を捉えて落馬させ、その馬を奪つた漂の姿があつた。

「あきらめるなッ 隊列を組みなおせ。密集して突破をはかるぞ」

勇ましく声を挙げて、佩いていた剣を抜き放つて掲げる漂の姿は、まさしく将であつた。

「おおお……………」

思わず感嘆の声を挙げる副官に、朱錐はさらなる発破をかけた。

「ポケツとするな。壁ッ 率いるものが鈍れば、隊は死ぬぞッ」

「!?」 ツ直ちに隊を組み直し大王ともに一点突破する 私に続けええ!!」

勇ましく声を張り上げて先頭を駆るべく速度を上げる壁もまた、将の姿を体現しはじめていた。

昌文君を失い意気消沈して瓦解寸前だった兵たちは、漂の檄と壁の活によりまとまりを取り戻して、包囲網に向けてがむしやらに突貫した。

そして、護るべき御車が無くなり、護られるべき大王が先頭を走る。それすなわち、漂を守るすべての者が必死に突撃しているということ。

その突破力は、敵の度肝を抜くほどの力を発揮していた。

それは実を結び、ついに王騎の配した伏兵の包囲を突破することに成功した。死地からの脱出に、壁は喜びのままに声を張り上げた。

「よし よおおし!このまま全員逃げ切るぞ」

だが、そこに冷や水を浴びせるかのような冷静さで、漂は先のことまで見通した言葉を発した。

「だめだ………副長。半分を昌文君の救出に向かわせよ。王には昌文君が必要だ」

「………ですがそれではあなたを護るものが——」

議論して暇なかった。さらなる追撃の手が彼らに襲い掛かったのだ。

「大王ッ 右手のっ 右手の丘から新手がっ」

視線を向けた先には、丘の向こう側から湧き出るように現れては、こちらを包围するべく展開していく敵の姿があった。

察した漂の決断は早く、敢えて、いまだ隊列が乱れている敵に向けて馬を走らせた。

「ッ!? 無茶なことを。壁は昌文君様を頼むぞ」

「朱錐殿 かたじけない。半数は私につ 残りは彼とともに大王のもとに向かうのだっ」

壁が最後に見たのは単騎で突破した漂の姿と行く手を阻む敵を悉く粉碎する朱錐の姿であった。

敵は単騎で駆け上がってきた大王の姿に、困惑のまま突撃を許してしまい隊列を乱していた。そこに朱錐が先頭を駆る集団が不意打ちとなって突撃したことで大打撃を与えていた。しかし、それでも数の差は歴然であり、敵を突破できたのは、朱錐と満身創痍の兵が十騎に満たない数であった。さらには包围網を突破できたものの、先に抜けた大王の姿を見失う結果となった。

それでも、わずかに残る馬の足跡を辿ってしばらく。馬の足跡は森へと続いていった。そこからさらに手分けをして痕跡を探していると、兵の一人が主のいない馬を引いてくることがなる。そのことから、大王は追っ手を撒くために馬を降りると、森へと分け入ったと推測が経った。

「この暗がりでは、大王お一人をみつけだすのは困難極まりないな」

「ですが朱錐殿。我々は大王を見つけるまでは帰るわけにはいきません!!」

「わかっている」

朱錐は言葉を発しながら思索していた。

「困難である」とは正直な感想である。それは兵たちも同じであろう。しかし、多くの同胞の屍を踏み越えてここまでできた彼らも収穫なしで帰るわけにもいかない。大王の安否、さらには安全な同胞のいるところまでお連れしなければ、死んでいったものたちに顔向けできないと考えているだろう。けれど、兵の中には放っておけばあきらかに命に危機に瀕するほどの重傷者がいる。大王の安否は最重要だが兵の命を軽んじるわけにもいかない。

それらを勘案した朱錐は、妥協案となる指示をだした。

「()からは二人一組に編成し直す。次に一番怪我の重い者とその次に重いものを一組

として、さきに合流場所に行き現状の報告を頼む。残りはこの場所から森に向かって搜索を開始するぞ」

朱錐は、そのあとともいくつかの指示を出したあと、最後に火急の合図として矢筒に残っていた矢、嘯鳴矢をそれぞれに渡した。

そうして、朱錐たちは人海戦術とはほど遠いギリギリ連携の取れる範囲に拡がると、最後に痕跡のあつた場所からゆつくりと森へと入っていった。

闇夜に包み込まれた森は、行く手を阻んでいるかのように隔絶とした空気を漂わせていたが、対をなすように、浮かびでた月の明かりが導を示すように差し込み、道を照らし出していた。

搜索は一人は騎乗したまま高い視線を保持して遠くを。一人は歩兵となって近場の茂みを探しながら大王に呼びかける形で開始した。

しばらくは、なんの発見もないまま歩を進めていると、朱錐の右手側から一頭の馬がゆつくりと駆けてきた。

「この馬は……」

馬の状態を確認した朱錐は、右手側に展開していた兵のものであると確信して声を挙

げた。

「どうかしたかつ」

朱錐が声を張り上げると遠くに見える茂みが一揺れ、影が森の中へと消えていったように見えた。それを不審に思った朱錐は武器を構えて慎重に歩を進めると、そこには、右方に展開していた兵たちの変わり果てた姿があった。

倒れ伏す首のない二つの躰と躰を失くして転がる頭が二つ。

それは右手を捜索していた兵たちに間違いなかつた。

片方は何が起こつたのか理解していないような呆然とした表情に対して、もう片方は苦悶の表情を残していた。そのことが気になり、近くに横たわっていた躰を調べると片方の躰にだけ前方から躰の中心に剣が差し込まれた状態で倒れていた。

「……………」

先ほどの茂みの揺れに森の中に消えたような影。それに二人を亡き者として、去つたところをみるに、少数、あるいは単独の可能性もある。そうなる、考えられるのは兵ではなく暗殺者の類か。

朱錐は思考が纏まるとそれを一端横に置き、嘯鳴矢を空へと放つた。その音を目印と

して、左手側にいた二人がこちらに向かってきてるのが見えた。

「なにがあつたのかは不明だ。ただ、敵がいると心得よ」

そこから慎重に索敵しながら進むと遠く暗闇の先に灯りが漏れている地点を発見した。

「村、だろうか……とにかく行ってみるしかない」

第12話

大王を追っていたのは、王騎や竭氏の兵だけではなかった。

竭氏は大王が忽然と王宮から消したことで追つ手の兵を差し向けていたが、先の失敗からの念をいれて、さらに、お抱えの暗殺者にも追跡の命を下していた。

王騎と昌文君が火花を散らす戦場の最中。

竭氏からの刺客徐完は、戦場近辺に潜伏しながら、大王を暗殺する機を窺っていた。両者の争いは次第に規模が大きくなり合戦の様相を呈し始めた。最悪大王の死亡だけを確認できればいいと両者に発見されない距離を保ち移動を繰り返していた徐完であつたが、まさか標的が単騎で包囲網を駆け抜けることになるなど想像もしていなかつた。そのため、朱錐たちと同じく徐完は大王の姿を見失う結果となつていた。

朱錐たちが痕跡を追うのに対して、身を潜めてあとを追っていた徐完は事前の情報と方角などから、大王がどこに向かつたのか当たりをつけていた。徐完は明瞭となつた大王の行く先に暗殺の成功と搜索のために拡がって森に分け入った搜索隊の姿に嗜虐的な私情を滲ませた。

「……大王側の兵か。ふん、面白い。駄賃代わりに首をもらっていくか」

徐完が大王を見失ったのは己の失態ではあるが、そのことが癩に障ったのも事実であつた。そこで、行きがけの駄賃と称して己の慰めに大王派の兵の首を刎ねていこうと軽い面持ちで奇襲を仕掛けることにした。すでに夜の帳は降りており暗く視界の悪い森であつたこともそれに拍車をかけた。気配を消して兵たちの後ろに回り込むと跳躍。兵が騎乗している馬の背に乗ると素早くその首を切り落とした。馬は突然乗せていた人間のバランスが崩れたことと、背に乗った新たな何かに驚いて、嘶きを挙げて振り落とすように暴れて駆けていった。異変を察知したもう一人の兵が振り向くと、そこには転がる同胞の頭と横倒しになっている躰があつた。あわてて佩いていた剣を抜き放つて構え左右に視線を向けるが、敵らしき姿を発見することはできなかつた。

「な、なんだっ なにが起こつた」

ガタガタと震える両の手と定まらない剣先は男の心境を如実に物語っていた。

瞬の間、ゾワつと背後に寒気を覚えた男は振り返り様に剣を薙いだ。けれど、後ろには誰もいない。たまらずに安堵の息を吐こうとしたその時

「動くな。声を挙げれば首を落とす」

男は首筋に当たる冷たい感触とそれを成した何者かの温度を感じさせない声に恐怖した。

「貴様は大王を居場所を知っているか」

ふるふると首を振る男。

「だろうな。だが当てはある。まあ生き残ったとしても、どの道大王は呂不韋によつて始末されるだろうがな」

その言葉に「ツッ!」と驚愕を覚えたように震える男の躰。

「ん、なんだ知らなかったのか。冥途の手向けに教えてやる。竭氏を焚きつけていたのは呂不韋だ。此度の遠征も計画の一部。知らなかったのは竭氏一派とお前たちだけだ」

竭氏側の刺客であるが徐完も馬鹿でない。暗殺者として魑魅魍魎である王宮内の情報に常に集めていた。

男はもたらされた言葉で味方だと信じていた呂氏陣営がまさか敵であるなど考えが及びもしていない事実を知った。その驚愕は頭の中が瞬間的に真っ白に染まるほどであった。男が信じていたものが崩れ去った瞬間でもあった。だが、そのおかげか、駆け巡っていた恐怖を忘れる結果となった。

「絶望したか？ ツクク お前たちはただの道化だったわけだ」

嗜虐的な一面を持つ徐完は、男が絶望に満ちた表情をしているだろうことに愉悦を感じていた。

「さあ 手向けはここまでだ。あの世で大王と再会したときにも話してやるんだな」
充分に愉しんだ徐完が首を切り落とそうしたが、先に動いた者がいた。

「この身に グラウ かえてでもツ だいおうs」

「ツ!! きさまっ」

男は素早く剣を両手で持つと、ためらいなく自身に突き立てたのだ。躰の芯を貫ぬくように差し込まれた剣は、確かに徐完に届いていた。けれど、間一髪、身の危険を察知した徐完は、咄嗟に躰をひねることで致命傷を避けていた。すぐに力を込め男の首を切り落とした。

「ツチ 雑魚の分際で」

と徐完は捨てるように吐いたその時「どうかしたかつ」と左方から声が掛かったことで、すぐに意識を入れ替えて、この場をあとにした。

徐完は再び気配を消して当たりをつけた集落へと移動を始めていたが、脇腹に絶えず走るじりじりとした痛みを顔に歪めた。

「クソツ クソツ クソツ クソツ クソツ」

徐完は片手間に始末しようとした雑魚からの反撃を許したうえに、手傷まで負わされたことで頭に血がのぼって、徐々に刺された脇腹の痛みすら忘れていった。

それでも、冷静な暗殺者としての一面は顔を覗かせる程度には経験を積んでいた徐完は、大王の行方に思考を傾けた。

大王派の情報の一つ。それは、昌文君がこの辺りの村から下僕の子どもを引き取ったという話であった。それはそのときの御者を脅して吐かせたので、間違いない。だが、貴族が気に入った下僕を引き取るなど、そうめずらしい話ではなくその時は気にも留めていなかった。けれど実際に見失った大王がその近辺に向かっている事実は、やみくもに探すよりも可能性がある。と。

そしてもうすぐ森を抜ける直前まできたとき、前を走る人影を発見した徐完はニタリと口角を挙げると迷わず剣を抜き放って襲い掛かった。

「大王ツ 覚悟！」

不意をついた一撃は大王の首を確かに捉えようとしていた。

第13話

朱錐は遠くに灯りをみつけると、兵にはそのまま森での大王の搜索と索敵を命令して、灯りに向かつて馬を走らせていた。襲撃があつた時に見えた影が向かつた方角とも一致していることから、何かがあると朱錐は確信に近いモノを抱いていた。

そうして、村のほとりまで着くと灯りが見えている方角から悲鳴がするのであつた。

「貴様たちは何を知っている。早くせねばこやつが死ぬぞ」

村人の子の首を締めあげて劍の切つ先を向けた刺客徐完は、一種の焦りを覚えていた。それは、先ごろ易々と大王の首をとれると確信して飛び掛かつたはずが、仕留めきれず、あまつさえ反撃を受けたことに起因していた。また、任務を完了させようとしたその時、さらなる己の知らない事態が顔を覗かせたことで、焦りは焦燥感に顔を変えて精神に滲みはじめていた。

事の発端は、大王に致命傷かと思われる傷をつけた瞬間のこと。突如、兵に切られていた傷に痛みが走つた徐完は動きが鈍り、今まさに重傷を負わせた大王からの手痛い反

撃を受けることになった。そのため、一時的な後退を余儀なくされた。

徐完は素早く傷の手当をすませると、再び追跡を開始。そして、村の中で力尽きて倒れ伏す大王とそれを遠巻きにみる村人親子の姿をみつけた。

徐完は村人を亡き者にするか一瞬の迷ったが、大王の素性を知らぬのなら塵芥と変わるまい。と大王の首を優先した。そのとき、あきらかに怯えていた童が制止の声を挙げたことに驚き、その動きを止めた。そして、ふとなにか見落としていないかと改めて見渡すと、大王が佩いていた剣がないことに気付いた。そのため、この者たちが何かを隠していると察した徐完は、止めに入った親を突き飛ばすと童を持ち上げて先の言葉を吐いた。のが事の顛末である。

「そ、そのものはひ、漂とってわ、わたくしどもの下、下僕であつたものです」

「こいつが下僕だと……。まさか 偽物かッ」

「け、剣は同じ下僕であつたものがこ、黒卑村に」

「黒卑村……。なぜだ」

「な、な何かを託されたようで、わわ、わたくしどもには……………」

数拍思考に費やした徐完は目撃者を消すために村人に躰を向けた。

「残念だが……お前たちには死んでもらう」「ひいつそんなっ」

一家の首を刎ねるため動きだそうとした徐完は、咄嗟に後ろに跳躍した。

「ドン」と重い音が響き、徐完が先ほどまでにいた場所に目をやると突き刺さる無骨な棍棒が一つ。徐に家屋の影から姿を現した朱錐が言う。

「状況はわからないが、とめさせてもらおう」

尋常じゃない重量を感じさせる棍棒を投げつけて現れた朱錐に徐完はさらに距離をとると武器を構えた。

「……………」

ただならぬ気配に徐完は警戒感を滲ませ、高まる緊張感。

「退くなら追わないが、どうする」

にらみ合う二人であつたが、朱錐が佩いていた剣を抜き放ち、悠然と歩を進めると事態は動いた。

「退く」

言葉を残すと徐完は、すぐに姿を消した。

安堵の息を吐く村人をよそに、朱錐はすぐさま倒れている大王の安否の確認に走るのであつた。

その後朱錐は王都に戻ることになる。というのも、朱錐は昌文君から大王が偽物であることを知らされていなかった。そして、状況の推移に寄らずに役割はそこまで良いとも指示を受けていた。それは、昌文君が朱錐を信用していなかったというわけではない。けれど、行方しれずだった五年という時もまた十分に長い。すでに計画は最終段階まで煮詰まっていたこともそれに拍車をかけた。妻夏夫人から朱錐の帰還と「変わつてなかつたわ」というお墨付きをもらった昌文君は、それならばと、朱錐には伏兵として待機してもらい、不測の事態の備えとしたのだ。

朱錐もまた昌文君の人となりから、そのことを理解していた。そして、村人から彼は大王ではないと知つた朱錐は、探していた大王はなり代わつた影役であつたこと、また死亡した旨を伝えた。そして、兵たちには合流地へ向かうように指示をだした。

兵たちを見送り、しばし村に滞在したあと、朱錐は急ぎ王都に馬を走らせた。王都に着くと、すぐに紫夏が指定していた店へと足を向けた。店では紫夏から渡されたものを見せると奥へと通されることになり、奥には紫夏がすでに待つており、朱錐は急ぎの頼みごとを一つお願いした。そして、紫夏からは、王騎の伝言を渡されることになる。

舞台は、黒卑村を駆け抜けて、政と出会った信がいる掘つ立て小屋の中。

「……………ひ、漂なのか」

「違う。政だ。」

「せい？」

「お前が、信か」

「な、なんで俺の名をつ　そ、それに漂と同じ顔のお前はなんなんだっ」

「……………説明している暇はなさそうだな」

政の言葉と視線のさきには、小屋の外に何者かが剣を振り下ろそうとしていたところであった。脆くもほったて小屋は両断されて崩れ去る。転がるように外に飛び出した信と政の前には、全身を赤黒い布で覆った男でいた。

「ほう。躲したのか。アレで死んでおいた方が楽に死ねただろうに」

氣負うこともなくそこに立つ刺客の威容から察しがついた政が言葉を発した。

「刺客。その姿、朱凶か」

朱凶とは200年続く暗殺を生業とする一族の総称である。けれど、そんなことを知る故もない信には、まったく相手の脅威度は伝わっていなかった。

「しゅきよう?」

恰好から下僕と察しの付いた信を眼中から外した刺客徐完は己の目的を告げた。

「察しの通りだ。オレからは逃れらんぞ、凶政。恨みはないが死んでもらう」

「んんだてめえはっ こいつにはまだ用があるんだっ 俺の邪魔すんじやねえぞ赤いおっさん!!」

餓鬼のたわごことに、カチンとくるものがあれど、先までの失態続きに徐完は慎重になつていた。

「よせ信。迂闊に飛び込めがお前が死ぬぞ。」

「んだと!」

「きけっ 信。朱凶とは200年の歴史を持つ暗殺者の一族だ」

徐完は下僕にそんなことを教えたところでどうなるものでもないと蔑むように言葉を発した。付け加えた一言が信の闘争心に火をつけることになるかも知らずに。

「ふふふ。教えたところで小僧がここで死ぬことに変わりはないぞ。大王に瓜二つだったあの男と同じようにな」

「!! てめえが漂をやりやがったやつかつ ぜっていにゆるさねえぞ」

「なんだ貴様、知り合いか。とどめは刺せなかったがまあ地獄で再会するんだな」

「ん 暗殺者のお前がとどめを刺さないとはどういうわけだ」

徐完は、つい口を滑らせた己の失態を目ざとく拾った政の言葉に冷静さどこかに置き忘れたかのように、いら立ちが再燃した。

「ツチ 面を被った変なやつの邪魔がはいっただけだ。どうせ長くはない。それに優先させるべきは本物の大王の政。お前だからなあ」

多分にいら立ちを滲ませる刺客徐完に、もともと気が短い信がもう我慢がならないと野生さを滲ませて飛び込み、切りかかった。

「糞があ 漂の仇だつ 絶対にぶつ殺してやる!!」

この戦いを制したのは信であった。その後、黒牟村は追つ手の軍に包囲されるが、信と政の二人は河了貂の助けを借りると村を脱出。そのまま行方をくらますことになる。また王騎の関与によって、昌文君は始末したと報告がはいった。そこで乱を起こした裼氏は、大王派の筆頭はすでになく、さらには実権のない大王などどうにでもなると判断して、標的を呂氏へと切り替えた。そして、現在二十万の兵をひきつれて魏の小梁にいる右丞相呂不韋を逆賊として始末するための準備に取り掛かった。けれど、ここで玉璽を発見できなかつたことが響き、呂氏の二十万を超える数十万の大軍を起こすことができずないばかりか、十万にも満たない数しか集めることができずに、その対策が必要と

されていた。

そして今、秦の王都ではひと騒動が起こっていた。

山の民が山を下りて、ここ咸陽に現れたというのだ。それは、四百年前に秦王穆公が開いた国交の門を閉ざして以来初のことであった。蜂の巣をつついたような騒ぎとなった王都の中心である王宮内。その一角に陣取り、様子を眺める王騎の姿があった。

「山の民ですか。これは面白くなってきましたねえ。そうは思いませんか 騰。」

「ハッ 何が起こるのか楽しみです」

「誰はどうですか。」

「……………なるようになるかしら」

「ソフフ 昌文君の言葉が本当かどうか 確かめさせてもらおうとしましょう。」

第14話

秦王政は、山の王楊端和と強固な盟を結ぶことに成功し、山の民からの助力として三千もの猛者とともに下山を果たした。

一夜明けて、政は古の名君穆公が建立した家屋のなかで決戦の日の朝を迎えていた。

「起きてらっしゃったのですか 大王」

声の主は、大王政の側近中の側近。政がもつと信頼を置く臣昌文君であった。

「ああ。昌文君か。………一つ尋ねたい。俺たちを襲った刺客なのだが、面を被った者に邪魔されたといっていた。心当たりはあるか」

それは、信と初対面を果たした折に、襲撃してきた刺客が口を滑らせた言葉の一つであった。

「面、ですか。それならば朱錐でしょう。私が王騎と戦っていたときに御車を任せましたので」

朱錐の名に、遠き日の政の記憶が刺激される。

「鬼面の朱錐か。たしか行方知れずになったと聞いていたはずだが見つかったの

か」

「ええ。昨年暮れに差し掛かる頃、我が屋敷に参ったようで、妻から報せを受けて知りました」

趙からの逃避行。連れ出そうとしてくれた道剣をはじめ、ほとんどの者が追っ手の犠牲となったあの日。自分を護り、導びいた女性の姿が目には浮かぶ。

「あの時から 六年か」

「左様です。そして、ようやくですな」

徐に瞳を閉じた政は、瞼の裏に映るあの日に想いを馳せた。

「……………紫夏。俺はやるぞ」

呟いた言葉で決意を固めた政は、高らかに宣言した。

「昌文君。玉座を取り戻すぞ」

「ハッ!!」

王都咸陽は、古の盟復活を掲げて下山してきた山の民に困惑を隠せずに混乱の様相を

呈していた。それは今や王宮王都を牛耳る竭氏一派も同様であり、早急に会議を開くと喧々と議論を交わした。そして、竭氏は有事に備えて招集していた八万を超える兵も待機していることに加えて、山の王楊端和自らが山から下り、ここ咸陽まで来ていることを重く見て、王都咸陽を守護する門を開く選択をした。

そして、王弟成？を交えた会談を安全に行うために、山界の王に侍る頭数に制限を掛けさせたところまでは順調であった。だが、そこから次の関所で武装解除を求めた瞬間から事態は急変した。突如、武器を預けるようにと近づいた兵を、先頭に躍り出た一人の山の民が切り捨てたからだ。それは遠くから様子を確かめに来た竭氏を激高させた。「山猿どもがふざけた真似をツ 一人残らず皆殺しにしろ!!」

離れた所からその様子を眺めていた竭氏の檄が届いたかのように一斉に武器を構えて突撃していく王都兵に対して、山の王楊端和の檄に応えるように突撃を開始した山の民がここに激突した。

「舞台は整いました。 ねえ 昌文君。 あなたの言葉 確かめさせてもらいますよ。」

激突の場となった王宮眼前の門を信の活躍により見事突破した政たちは、王宮へ雪崩れ込むべく突撃していたが、待ち構えていた弩を構える歴戦の兵の攻撃により、その動

きを止められていた。けれどそれは、政や昌文君にとつては想定通りの展開でもあった。そこで、王宮に続く右方に存在する迷路のような回廊から、この乱の首謀者王弟成？と竭氏を討ちとるために、囧となる部隊と敵の急所を突く部隊の二手に分かれる決断を下した。

右方の回廊から急所をつくのは、信と山の民の精鋭を含む壁を中心とした部隊であった。他方囧となりこの場に残るのは、敵方が最も討ち取りたい大王である政とその側近中の側近である昌文君その人であった。

弩隊の後方でこの待ち伏せを発案した竭氏の片腕肆氏は、山の民の中に大王囧政がいることを察していた。肆氏がそれを声に挙げて発すると山の民に扮していた囧政は素直にその姿をさらした。

その報告を受けた竭氏は、囧政を討ち取るために集結しつつある王都兵を続々と投入していく。それは、二手に分かれたことで頭数を減らした政陣営にとつては悪夢のような状況であった。数の差で歴然であり、圧倒的な武を誇っていた山の民の勇者たちですら疲労には勝てずに削られ始めていた。それは、政を護っていた護衛兵に及んでおり、竭氏側の将魏興の切っ先がいつに届くことになった。

「……までお越しになられた武勇は認めよう。だが、生まれた刻が悪かったと諦めてもらう。大王よ 覚悟っ!!」

だが、魏興が馬上から勢いよく振るった矛は、政には届くことはなかった。
「随分と軽い剣だな。ツむん」

割って入った昌文君が受け止めていたのだ。そして、気合入れて地面を踏み込むと、魏興の矛をはじき返した。

魏興は、はじき返されて崩れていた体勢を馬上で整えると、昌文君を強敵として見据えた。

「邪魔をするな 昌文君ツ!!」

そして、激した魏興と昌文君よる激しく打ち合いが起こった。

その様子を王宮の一角からながめていた王騎は、彼の無骨な賢人の変わらない姿に愉快だ。

「相も変わらなず渋い働きをしますねえ 昌文君は。そうは思いませんか 錐。」

「……………はい」

「駆け付けたいですか 昌文君のもとへ。」

「私は王騎様の幕僚の一人です」

はつきりとした言葉を返してはいるが、握りしめている拳は本心を語っている、がそ

それはそれ。と王騎は言葉が続ける。

「あなたのそういう所、わたしは嫌いではありませんよ。 騰はいますか?。」

「ハツ ここに」

「そろそろ右龍の決着もつく頃でしょう。」

そう言う王騎は騰に簡単な指示をだして送り出した。

「錐。わたしたちも行きますよ。」

混戦が続く中、右龍を抑えていた左慈を切つて敵の制圧を果たした信を含む別動隊は玉座を目指していた。

「しっかし 壁のあんちゃんに、あんな無謀な一面があつたなんてなあ」

信は山の民に担がれている情けない姿の壁に愚痴を漏らした。

「……………すまん。気が逸つていたようだ。情けない」

それは、右龍に突入した壁たちが、通路の先にあつた広場で待ち受けていた、竭氏側の将左慈が率いる守備兵と遭遇した時の事。二つの勢力が遭遇した以上戦いは必定で

あり、すぐに激突すると乱戦となった。数の差から壁たちが押されるかに思えた戦いは、逆の様相を呈していた。それは、あまりにも屈強な山の民の攻勢に守備兵が恐れをなしたためであつた。その中でもバジオウ、ダジフの力を凄まじく、守備兵の士気を大いに落としていた。

「このまま制圧するぞ」

と壁の号令のもと、士気が最高潮に達しようとしたとき、それに待ったを掛けたは、堀氏側の将左慈であつた。生え抜きの武人である左慈の一刀は、飛び掛かつた山の民を一瞬で両断してみせたのだ。この時、壁は将として目覚め始めており、このまま潮目を変えられてしまつてはまずいと咄嗟に左慈に切りかかつたのだが。

「私が相手だッ」

流れを引き寄せるべく気合をいれて放つた壁の一刀であつたが、左慈はそれは危なげなく受け止めた。

「少しはマシか。だが、それだけだ」

そして、取つて返すように反撃にでた左慈の実力は、壁を軽く上回っていた。敵の力量を見誤つた壁は躲しきれずに深手を負うことになつた。

「はん　しづとく生き残つたか。もう　死んでいいぞ」

壁にとどめを刺そうと近づくと左慈に「うらあ!!」と勇敢にも切りかかつたのは信で

あった。

「壁のあんちゃんは下がってな。このハゲは俺が切つてやるからよお」「し、信」

自信過剰というか怖いも知らずというか、いずれにせよ年齢の割には、胆力の籠った一撃を放つて見せた少年に一瞬目を見張る左慈。

「フン それがどうした」

激しく打ち合いを始めた左慈と信であったが、徐々に左慈が押し始める。野生的な動きと見た目からはわからない怪力で怒涛の攻撃をみせる信であったが、武人として本当の修羅場を潜り抜けてきた左慈には及ばなかった。そのまま左慈が押し切るかとみられた状況を変えたのは壁であった。深手を負つて満足に動けないままで、背を向けていた左慈に切りかかり、手傷を負わせることに成功した。かわりにさらに一撃をもらう羽目になったが、すでに立ち上がるのがやつとの状態であった壁の躰は、自然と脱力の境地に立ち致命傷をさけることになった。再び壁が切られたことで、タガが外れた信の攻勢は、実力が上回っていたはず左慈を今度は追い詰めることになった。

「餓鬼がッ 次の一刀で屍に変えてやる」

「やってみろ このハゲがッ」

決着を意識して対峙した二人の剣先が交錯すると、立っているのは信だけであった。

「壁のあんちゃんのおかげか、最後の一撃が一番遅かったぜ ハゲのおっさん」

倒れ伏した左慈に言葉をかけた信も同時に切られてはいたが、重傷というほどではなかった。そして、信も対峙してわかったことだが、どう考えても壁では左慈に勝てるような気がしなかった。それは切られた壁自身も考えており、勢いが先行していた己を恥じていた。

その後は将が討たれたことで、まとまりを欠いた守備兵を信たちが粉砕した。そして、右龍を抜けた信たちはついに玉座に座る王弟成?の喉元までたどり着くことになる。それでも、ランカイなる人外を思わせる巨人との死闘を制した信たちは、兵を引き連れて出口を塞いだ騰の活躍もあって、ようやく乱の首謀者の一人、竭丞相の首をとることに成功した。だが、逃げ惑う竭丞相に気を取られた隙にもう一人の首謀者である王弟成?を玉座の間から取り逃がすこととなった。

そして、次に成?の姿があったのは、両者の勢力が乱戦となつて命の取り合いをしてる中央の広場であった。

第15話

王宮の中央広場の戦いは、いまだに決着はついておらず、両者による乱戦が続いていた。そこに、謁見の間にいた成?が現れたことで、事態は終局へと動き始めた。

「せ、成?様ッ」

竭丞相の片腕肆氏は乱戦の後方にて冷静に戦況を見守っていたが、突如現れた成?によつて思考を乱されることになった。

「なぜ成?様お一人でこのような場所に……丞相閣下はどうしたのですか」

「死んだ。首を刎ねられて死におつたわ ああの役立たずめが」

肆氏は成?の言葉をにわかには信じられなかった。

「し、死んだ……竭丞相が?う、右龍を抜かれたのか。それでは左慈も……。な、ならば早急にだ ー」

肆氏の明晰な思考はすぐに最悪な状況にあることを認識した。さらに、早急な大王の排除を指示しようとしたがそこに邪魔が入ることになる。

「な、なんとかしろ。し、肆氏。き、きさまは丞相のかたうでであろうが」

成?は、だだをこねる子どものように手にしていた剣で肆氏の躰を叩きはじめたこと

で、肆氏はそちらに意識をとられることになった。

「お、おやめください。せ、成？様。今はそのようなことを為さっている場合では」
そして、大王派と竭氏の争いは、一人の漢がこの地に降り立ったことで終わりを迎えるようとしていた。

「ソフ」

王宮を囲う堀から飛び降りたのは、中華に名を馳せた大將軍。

秦の怪鳥こと王騎その人であった。

悠然と降り立った王騎は不敵に笑う。突如とした王騎の出現に、乱戦の最中にいたはずの両者は、ひとり、またひとりと視線を奪われては、その矛を止めた。

そして、王騎に待るべく配下の兵が続々と広場へ降り立つと、乱戦の空気は完全に消え失せ、静寂があたりを包み込んだ。整然と居並ぶ王騎直属の屈強な兵の姿が広場の空気を完全に支配すると、それに抗うかのように声を挙げたのは、竭氏派の将魏興であった。

「王騎將軍。なぜ偽りの昌文君の首を差し出した。それ如何によつては、その首もらい受けることになるぞ」

問うように言葉を発した魏興であったが、すでに王騎を排除すべき敵と認識していた。そのため、王騎が兵を動かす前に首を刎ねるつもりで、距離をつめていた。

「……………」

魏興は馬上から凄みを利かせるように睨みつけたが、王騎は一言も発しなかった。

「沈黙は敵対と受け取るぞ」

絶対的に有利な馬上から矛を振り下ろせる。さらには己の間合い。魏興は王騎を斬れると確信して矛を振り上げた。

斬ッ!!

だが、魏興の矛は振り下ろされることはなかった。

矛を握ったまま落下する上半身。馬から落ち、倒れ伏す躰。遠くなる意識に、視界は黒く、黒く、染まっっていく。

こうして、なにが起こったのかすら理解できぬまま、魏興はその生を終えることになった。

王騎はただ目の前にいた敵を一刀で切り捨てた。ただそれだけのことだが、そこに居たすべての者が王騎という圧倒的な武を前に言葉を失くして、畏怖を覚えた。

王騎は魏興を屠ると大王の政のもとへと歩を進める。

ただ王騎がこちらに向かつて歩いてくる。ただそれだけであるのに、戦いで猛つていた両者の心胆は寒からしめさせ、大王への道を拓かせていく。

戦いで騒然となっていた広場はいまや静まり返り、ただ王騎の足音だけが響いてい

く。

昌文君はこちらに向かつてくる王騎に対して、何故ここに姿を見せたのかを思案するよりも先に、大王と王騎の間に己の躰を差し入れて行く手を遮った。山の王楊端和もまた警戒心をあらわにして、その躰をさらした。

王騎、昌文君、楊端和。三者の距離が近づくほどに、緊張感は張り詰めていく。

しかし、緊張感などどこ吹く風と王騎はいつそ気軽に言葉を発した。

「この曇天では天の采配も冴えませんか。まあ わたしは嫌いじゃありませんけどねえ。」

「ソフフフ」とはぐらかすような王騎の態度に慥然として質問を突き付ける昌文君。

「なにしにきた 王騎」

王騎はそれに対して、変わらない昌文君の在りように少しの呆れとなつかしさを交えて言葉を綴る。

「あなたはせっつかちですなえ 昌文君。そうは思いませんか 錐。」

「……………」 「ソフフ 寡黙ですなえ 騰とは違って。」 「?!」

昌文君は、王騎の言葉で後ろに控えていた朱錐の存在を認識した。そのことでふと懐かしさを覚えたが、質問に答ええない王騎に対して、再び問いだした。

「朱錐か。……………うるさいぞ 王騎。さっさと答えろ」

それは、政も同じであつたようで王騎の前に躰をさらすと、続けざまに王騎へと問いかけた。

「俺たちは今重要な局面を迎えている。將軍に構っている暇ない。用件はなんだ」

王騎の前に、怯みもせずに躰をさらした政の胆力に、ひとまずの関心を持つと言葉を発した。

「ソフではお聞きしましょう。貴方様はどのような王を目指しておいでですか。じっくりと考えて下さつて結構です。ただあ　我が宝刀は不遜な答えを許しませんよお」

どこか間延びをするような声とは裏腹に、王騎の雰囲気は戦場に立つときのそれであつた。

「中華を統一する王だ」

政は王騎が作り出した張り詰めるような空気に物怖じせずの一つの宣言をした。

「統一王ですか。この500年、そんな与迷い事を本気で口にしたのは、あなたの曾祖父、戦神と謳われた　――」

政は王騎の言葉を遮るように口を開くと語り始めた。

「昭王の名に、そなたはもう縛られるな」

そうして語られたのは次のような言葉であった。

中華を夢みて生涯を戦に投じた昭王は、武人を愛し、また愛される王であった。その昭王の死からすでに七年が経過している。寄るべき大樹を失ったそなたの苦しみが、いまだ消えないのは、昭王の影を追っているからだ。政は指摘した。

「そして再び秦の怪鳥として中華に羽ばたきたいと願うのならば、昭王の死を受け入れて、一度地に足を付けよ。王騎將軍」

勇ましく、そして、諭すように語る政に、王騎は遠き日の昭王の姿を思い浮かべていた。

「中華に羽ばたく ですか」

「ゴホツ ゴホつ ゴホツ そうじゃ。クフフ 夢。及ばず、か。やはり中華は広かったなあ」

いまだ地平のさきを見据える昭王の瞳の輝きは失われてなどいなかった。けれど、戦神と謳われた昭王もまたひとりの人間でしかなかった。

「この夢。お前に託すぞ 王騎」

「……………冗談を。あなたを失くして、私の飛び立つ天など、どこにも存在しませんよ。」

「ゴホツ 何を言うか 王騎。戦場はなくならんぞ」

「ですが 熱き夢を追いかける戦場はなくなります。」

「そうかのお いや そうかもしれん ゴホツ な ゴホつ」

「ええ。目を見れば理解しますとも。口では何とでも言えます。」

「……………そうか」

長き沈黙のあと、徐に腕をあげた昭王。見つめるは地平のその先。

「あと、二十年。二十年、生があれば、この手に夢を掴めたやもしれぬ」

延ばした腕のさき、握りしめた手の平、その中に、確かに中華があった。

「口惜しいのお」

「大王……………」

そのとき落ちた雫は王騎の涙であったのだろうか。曇天の空から落ちる雫が地面を染めはじめた。

「ゴホツ ゴホツ 中華は広がった。それだけのことよ のう 王騎」

「……………」

「儂亡き後であつても 研鑽を怠る出ないぞ。いつかまた ゴホツ 中華を ゴホツ
ゴホツゴホツ。……………少ししやべり過ぎたか」

「…大王。さあ御体に障ります。天幕にもどりましょう。」

降り出した雨は大地に新たな芽をはぐくむように降りしきる。

「いつかまた中華を」 中華を目指す王が現れるやもしれん。語られなかった言葉の先に
あつた想いを王騎は確かに受け取っていた。

あれから七年の月日が流れて、現秦王を前に王騎は芽吹き of 刻を感じていた。

王騎は強く見定めるように政を見つめる。

そして、動きのない王騎たちを前に、いまとなつては反逆の徒として処刑される道し
かないことを恐れた竭氏派の兵は、この隙に政と王騎を殺してしまえば、成？が王と
なり、罪から逃れられるのではないかと夢想していた。が

「ドンツ」と響く重く鈍い音とそれを成した漢の威に、夢想は解け落ち、兵たちは現実へと引き戻されることになった。

「ソフ んフフフフフ 昌文君が一人で熱くなっているわけは ほんの少し解りましたよ。」

昌文君に躰を向けた王騎は、そう語ると踵を返して歩き始めた。

「今日の所はこれで引き上げるとします 錐も行きますよ。」

そのまま去っていくかに見えた王騎であったが、ふいに立ち止まると振り返り、現王である^〇政に向けて言葉を発した。

「それとお 大層な口をたたくのならば それに見合ったものを見せていただきたいのですねえ ではあ」

「ソフフフフ」と独特の笑い声を発しながら、再び歩き出した王騎は、二度とこちらを振り返らなかつた。

「どうした朱錐。行かずともよいのか」

そこには、いまだにこちらに留まっている朱錐の姿があった。

「……………大王様。一つ、伝言がございます」

「朱錐か。あの時以来だな。分かつた。聞こう」

そうして大王の耳元まで近づいた朱錐は、預けられた言葉を渡した。

「ッ ああ、確かに受け取ったぞ」

「ハッ それではこれで。昌文君様もご健勝を」

「うむ 此度は助かったぞ」

政は、あの日と変わらない大きな背に、感謝の意を静かに贈ると、渡された言葉を胸の内で反芻した。

「あの日の月を忘れないでください」

そこには、

立派な王になられたあなた様に会える日をお待ちしております。

そう続いているような気がした。

その後、この反乱は届けられた竭丞相の首によって完全に戦意を失い、鎮圧された。本来ならば関わった者たちの一族すべてを根絶しにするべき事案であったが、おもに、成？陣営への制裁と竭丞相の処断を持つて終結とされた。これまでに非常に多くの犠牲をだした内乱であったが、この事実を他国にわざわざ報せる必要はなく、徹底的な箝

口令が敷かれることとなった。

第16話

遠征に出ていた呂氏が帰還すると、竭氏の反乱など、なにも無かったように王宮は動きはじめていた。

「竭氏残党の処分は、主要な者たちを除けば、従わない者だけになる予定じゃ」

乱の結末まで把握しているはずの右丞相呂不韋は、権力を二分して争っていた左丞相竭氏が死去した報にも、その残党のことにも不気味なほどに興味を示さなかった。そうして、乱などなかったかのように、ただ肅々とことを収めていく呂氏陣営に対して、昌文君を筆頭する大王派は、竭氏残党の処断と取り込みに忙しい毎日を過ごしていた。「それでは、処分が甘すぎるのではありませんかッ」

昌文君から聞かされた内容に、納得がいかないと噛みつくように発言したのは、左慈から受けた傷もいまだ完治していない壁であった。

「そなたの言い分はよくわかる。だが、今のままでは呂氏陣営と戦うことすらままならぬのだ。儂らには、そうするしかない。それにこれは、大王様も承知のうえじゃ」

「しかしッ そッ………いえ、申し訳ありません」

壁はさらに言葉を続けようとして、こちら見定めるような昌文君の鋭い視線に気づく

と冷静さを取り戻し、己の発言を恥じるように謝罪の言葉を口にした。

「よい。じゃが、感情のままに発言しては、いつ揚げ足を取られるかわからんぞ
よ」

昌文君の言はもつともであり、壁は己の未熟さが足を引つ張らないように、さらなる研鑽を誓った。

その頃、王騎が治める城塞都市でも一つの出来事が起きていた。

朱雫は謁氏の反乱騒動が落ち着いた頃、王騎から呼び出しを受けていた。そこで一つの指示を受けることになった。その内容を簡単にいうと、先の昌文君と王騎軍がぶつかったときに出した損害は、あなたのせいで大きくなったのだから、その穴埋めをしろ。ということであった。

「あとは、ん、……………」

王騎という人物は頭の回転が非常に早く言い淀むことなどこれまでなかった。それを目の当たりにした朱雫はなにかあったと考えると、次の言葉に意識を傾けた。

「……………入りなさい。」

王騎の言葉に従い入室してきたのは、一人。それは、虎を模した面を被り素性を隠し

た人物で、王騎の後ろに並ぶように立った。

隠せてはいる。たしかに素性を隠せているのだが、朱錐が見間違ふことはなく、王騎の真意をはかりかねていた。

「あの……………、王騎様？」

「無用な問答をするつもりはありません。あなたに預けますので存分に使つてあげなさい。」

王騎の言葉に、もはや、可以外の返答はない。と感じ取つた朱錐。

「……………よろしく願ひします」

上官となる朱錐ではあるが、この虎の面をした人物に対して、なんと声を掛けるべきなのか数拍悩んだ末に、これまで通りの対応でいくことにした。

「よろしくな 朱錐」

その後、虎の面の人物から事情を聞くと、自分の中に残っている悔いを失くしたい。という言葉が返つてきた。そして、それを叶えるためには、王騎では近く、昌文君では遠いうえに、さらには文官。ちようどいい距離として白羽の矢が立つたのが朱錐であった。ということらしい。

隊の編制にあたり、昔馴染みに声を掛けると快諾が得られ、隊の骨格が出来上がるこ

とになった。

大將軍が率いる軍にはそれぞれに特色がある。それは一軍を率いる將の呼び名にあらわれていた。あるところでは第1軍將、第2軍將であり、また別の所では第1將、第2將と呼ばれることもある。王騎軍では各將を軍長と呼ぶことになっていた。現在は第1から第5軍長まで編成されていて、新たに創設された第6軍長に朱錐は付くことになった。

そして現在。部屋の中には第6軍長とそれを支える面々が揃っていた。

軍長は朱錐。副長には虎の面こと虎豹（コヒョウ）。將として、馮、灌、洪の三人。さらに、副長付きという形で、玄象という者が付いた。王騎軍における正規兵五百を本体として、二千人まで編成するようにとのことであつた。

「いきなり新参者の私に付かされた者たちだ。まずは、信を得る所からか」

正規兵五百ですら他の軍長より百ずつ譲り受ける形であるため、実質、一人一人の練度は高いがまとまりはないバラバラの軍と言えた。

「朱錐。その辺はある程度は問題ないぞ」

そう声を発した虎の面こと虎豹は、そのまま続けざまに言葉を発した。

「古参の者ほど朱錐を良く知っていることもあつて、乗り気の者は多い。それに」

虎豹はそこで言葉を止めると馮にその先を語るように視線で促した。

「朱錐殿は知っているのであるが、昌文君様は文官になるご決断をなされた際に、ご自身の私兵団の大半を解散させました。その中で武に長けた者の多くは王騎様の元へ送り出されましたので、軍中には今でも元昌文君隊の者はそれなりに多く、今回、その者たちが中心にこちらにきています」

「あとは、生前の私の元にいた者たちだ。素性は明かしてはいないが、選りすぐりだぞ。あと、録鳴末には文句を言われたから、謝っておいてくれ」

録鳴末とは、第一軍長を務める勇将である。いや、猛将かもしれない。がその実力は王騎軍中でみても上から三番目の実力者で、朱錐とは昌文君隊の頃から交流があった。交流ときくと友好的なものを想像しがちであるが、中身は、主に、立ち会え。的なものである。それは、多様な人材を揃える王騎軍であっても、朱錐ほどに優れた膂力を用いた戦い方をする者がいなかったことに起因していた。そのため、わざわざ腕試しをするために挑発してきた録鳴末に対して、昌文君が「近しい世代の実力を知るのにちょうど良い」と承諾して以来、互いの時間が空いた時にぶつかっている仲である。

「録鳴末ですか。顔を出しておきます」

一度目の激突は、朱錐の膂力の程を誤って認識していたこともあり、一撃目で転がるようにぶっ飛んだ録鳴末が気絶して、あつけなく幕を下ろした。しかし、若さの分だけ

気性の荒かった録鳴未がそのまま黙って敗北を受け入れるわけもなく、目覚めるとすぐに「あの野郎ツ」と叫び再び朱錐に挑みかかった。そして、驚くべきことに、二度目には朱錐の膂力から繰り出される一撃を、見事に受け止めてみせたのだ。といつても二撃目は受け止めきれずに再びぶつ飛ばされていったのだが……………。

「そうしてくれ。文句があるなら朱錐に言えと宣言しておいた。そのうち」

ドタドタと足音が響いたかと思えば、件の第一軍長がさつそく姿を現した。

「朱錐ツ！ 貴様俺の軍から目ぼしい奴ばかり引き抜きぬきやがっていい度胸だな。

「こつちにこいッ!!」

当たり前だが、録鳴未怒り心頭である。

「がんばってこい」

虎豹は手をひらひらさせると非常に気楽に朱錐を生贄とした。

「……………」

朱錐は無言で恨みがましい視線をぶつけると、あきらめたよう部屋をあとにした。朱錐が去り、沈黙が支配する一室で声を発したのは、玄象であった。

「姉さん。いまのは酷いと思うんだけど」

「いいんだよ 玄象。あの二人はいつもあんな感じだから」

「そう、なの?」

その視線はこの場にいる馮、濯、洪に向けられたが、虎豹の視線に気づくと沈黙を貫いた。

「な、みんな納得してるから何も言わないよ」

「そうなの、かなあ」

ところかわって、修練場では録鳴未と対峙する朱錐の姿があった。

第17話

王騎軍の者たちが鍛錬を積む修練場の一角で対峙するのは、王騎軍第一軍長を務める録鳴未と新設された第六軍長を務める朱錐。その周りには第三軍長鱗坊と同じく第五軍長同金の姿があった。

「またやっているのか、録鳴未は」

口を開いたのは第三軍長である鱗坊。

「もう数えるのも面倒になった」

それに応えたのは第五軍長同金。

「外野は黙ってるッ お前らだって引き抜かれたんだろがッ 不満じゃねえのかよ」

そう怒鳴り声を挙げたのは第一軍長である録鳴未。

「といつてもなあ、同金」

「うむ、殿からの仰せならば否はない」

朱錐とこの二人は、録鳴未とこういつた関係になつてしまつていたため、自然と彼らとも交流をもつようになった。こちらは本当に親交のある交流である。

「そういうことを言つてんじゃねえよ。筋つてもんがあるだろうが筋つてもんがよ」

「それに関しては申し訳ないと思つている」

さすがに悪いと感じていた朱錐は素直に謝罪した。

「ツ！それだよ。お前んところの副長の虎。あんの野郎つ　よりにもよつて古参の実力者ばかり引つ張つていきやがつてつ」

むしゃくしゃとした気持ちしが再燃した録鳴未のこの発言に、一つの事実に思い至つた鱗坊は横にいる同金をみた。

「おい同金」

「うむ。おそらくそうであろう」

「……………おい、なんだよ。鱗坊、同金。それに朱錐。なんだその哀れな者を見るような気配は」

「強く生きろよ　録鳴未」

「「ぶふツ」　嘖き出した二人は「クククツ」と笑うのを我慢している。

「あん？　なんだお前らみんなして」

録鳴未は知る故もないが、笑いを堪える二人は、朱錐の放つた一言がツボにはまつたようだ。朱錐はそれらが実際に行われているところをみたことはないが、彼の人は昌文君にもそうだったように、わりとお茶目な性格をしているため、これからも揶揄われることだろう。ちなみに、このとき朱錐は気づいていなかったが、その矛先の後始末を誰

がするののかという点に思考が及んだとき、愕然としたという。

「ダあああ もういい。来い 朱錐!!」

「全力でかまわないか」

「当然だろうがっ 手加減なんざ必要ない」

その言葉に集中力を高めると朱錐は構えた。

「む 同金よ」

「ああ、なにか雰囲気が変わったな」

構えた朱錐から発せられる威には、昔とはどこか違うものを感じさせた。

「いくぞ 録鳴未」

「来いや」

朱錐は構えていた愛用の棍棒を振り上げると録鳴未に向かって一直線に振り下ろした。それを、両手で支えるように構えていた練習用の頑丈な槍の横腹で受ける録鳴未。

しかし、練習用として頑丈さに重きを置いた槍が一気にへし折れるかのように曲がっていく。

「こ、の馬鹿力があああああああ」

それでも録鳴未は、折れ曲がりにはするものの粘りをみせる槍ごと持ちがるように朱錐の棍棒を跳ね挙げた。

「うらあ嗚呼あ!! どうだ朱錐い!!」

弾き返した録鳴末の声が響く。

「……………驚きだな。あそこからはじかれるとは思ひもしなかつた」

朱錐と録鳴末の争いは何度目かの激突のあと、様子を觀ん来た鱗坊によつて、この平和的?な方法へと姿を変えていた。そもそも、録鳴末は膂力のあるものからの攻撃を経験するために朱錐に絡みに行つたのであつて、特に私怨があるわけでもなかつた。戦うとどちらにも重傷を負う可能性もあつたため採用になつた。それからは、合間をみては腕試しとばかりに録鳴末が顔を出しにくる関係になつていた。

「つうかお前、前より重くなつてんじゃねよ。俺がつぶれたらどうするつもりだ」

「それはない。録鳴末なら大丈夫だと確信している。彼の人も、もし潰れたとしても、第一軍長にはこの隆国がなるからなんの問題もないと言つていた」

「ツチ 隆国の野郎が。それは、普通大丈夫なんていわねえんだよ」

「うむ。録鳴末なら大丈夫だ」

「お前ほど無茶苦茶な奴なら死にはしない」

「無茶じゃねえよ。お前らも一回やつとけつて。干央も体験済みだぜ。それにこの先もどんな敵がいるかもわかんねえんだからよ」

録鳴末の言葉に鱗坊は「ふむ」と納得を示すと同金に声を掛けた。

「……………録鳴未がまともなことを言ったぞ 同金」 「どういう意味だ鱗坊っ」

鱗坊が言に一理あると同金も頷く。

「たしかに一考の余地があるな」

ということと二人も体験してみた。

「……………同金」

背中を地面に預けたまま二人は共通の認識を持っていた。

「鱗坊よ……………。やはり録鳴未は録鳴未であつたな」 「どういう意味だ同金っ」

こちらは手加減を加えたものの、同じようには受け止めきれず、二人とも引き倒されるように背を地面に預けると、棍棒の先が石畳を粉碎して止まる結果となつた。ちなみに干央も倒れるように押し込まれたが、地に伏すを良しとせず意地を見せて背中はずか
なかつた。

ここからは、朱錐の知らぬことだが修練場には朱錐隊に入る者がチラホラとおり、此度の騒動を目撃していた。また、他の軍長たちを膂力のみだが陵駕する姿に、朱錐の株は上がり、知らぬうちにその者たちから信を得ることになつた。ちなみに、録鳴未がそのことを狙っていたかは定かではない。

後日、朱錐は正規兵五百を三つに編成。それぞれで模擬戦を行うことによつて、隊としての在り方を形作ることになつた。まず、副長虎豹の用兵術は抜きんでており、そ

の攻撃力は圧倒的で他の追隨を許さなかった。つぎに、それすらをも押しとどめる軍長朱錐の用兵術は兵たちの心を掴んだ。そして、この二人以外に隊を任された漢、馮の用兵術は可もなく不可もなくであった。

虎豹の用兵は鋭く、一気に相手を分断するとあつという間に殲滅していく。しかしこれが対朱錐となると、朱錐は虎豹の決め手を読んでいるかのように払い落して勢いを削いでいく。一見地味だが効果的な手法で分断を許さずに膠着をつくりだしていた。

結果、強力な矛とそれをも押しとどめる頑強な盾。矛盾した二つの特性を活かすのが第六軍の目指すものとなった。さらに、副長付きの玄象は一人で十数人を同時に相手にしても圧倒する活躍をみせた。そのことを褒めると「この剣じゃこれぐらいが限界」との言を頂くことになった。さらに特殊な剣があれば「百はいける」とのこと。本場に特殊な剣であるため入手はまず無理ということで、固執せずに合う剣を探すそうだ。また、虎豹を姉のように慕っており、二人の仲は良好なようだ。

次に千五百人の募集を行うことになり、攻を司る勇猛さと機敏さのある者を中心に九百名。秀でる身体能力がなくとも意思が固く、我慢強いものを守を司る者として六百名。合計千五百人を集めた。

どのような者でも戦場で生き残るには、まず一に体力、二に体力である。最初の二か月は体力ありきで訓練が勧められた。そのなかで、目ぼしい者を拾い上げては、その都

度正規兵の練兵に参加させることで、隊としての意識を高めさせる。さらに、正規兵の練兵を受けたものは、再び募集された兵のもとに戻ると今行われている基礎体力を高める訓練の意味を理解して、より訓練に身が入るようになる。すると、横の者の意識の高さが次第に全体へと伝播していき、晴れて基礎体力の高い新兵が生まれることになった。もちろん、さぼろうとしている者は技量の高さに関係なく振るい落としていった。半端に技量のある向上心のない者は、驕り、高ぶり、結果として隊の損害にしかならぬいと判断からだ。最終的に全体の一割程度を失うことになったが、ひとまず練兵を終えて実践へと入っていった。

また、この新兵の訓練が始まってから一か月ほどしたころ、朱錐はさらに一人の若者を隊に入れることになった。

名を李豹と言い、一か月遅れた形で募集兵に合流したが、その一か月後には皆に追い付きすぐに追い越していった。まだ年若い李豹であるが、身体能力は高く、人柄も良い。最年少の側近として引き上げられたものにも関わらず、僻まれることのない稀有な人格の持ち主であった。ただし、唯一懸念される事象が一つあったため、伝承に登場する？（ヤオ）を模した面を付けさせることになった。

紀元前245年 始皇2年初夏。

再び戦の火ぶたが切られようとしていた。

蛇甘平原の戦い

第18話

紀元前245年初夏。

秦国王層部は魏国との国境の地にある重要拠点滎陽（ケイヨウ）を奪取すべく軍を起こした。そして、その報せは募兵の立て札が国中に並び立つことで、知れ渡ることになった。

「滎陽か。王騎様に出陣の要請はあるのだろうか」

「要請はあるだろうけど出陣はしないよ。それに何かあるらしくて、しばらく空けるってさ」

魏を攻めるための玄関口となる滎陽は、両国にとって重要な拠点であり、大規模な戦になることは明白であった。当然、大將軍である王騎のもとには、出陣の要請が届く。しかし、昭王がなくなつて以来、王騎本人がそれに応じることはなく、今回も同様であり、公將軍がその任を受けて総大将となると噂されていた。

「虎豹。わたしはその戦いの様子を見に行こうかと思う」

流石に上官が副長に対して恭しい態度のままではよろしくないと虎豹から指摘を受

けた朱錐は目下改善中であつた。

「ん、そうか。私は王騎様にここを任されているから離れるわけにはいかないけど、一人で行くのか」

「戦場の空気を知ってもらうために、李豹は連れて行くつもりです」

「李豹か。まだ年若いが、戦の空気はなるべく早くに知って馴染んでいたほうがいいだろう」

李豹とは朱錐が新たに側近として拾い上げた少年になる。年齢は14歳とまだ年若いだが、個の武には見所があり、集団による模擬戦においては、将としての器を覗かせている将来有望な若者であつた。

「あと、念のために馮、濯、洪の三人を連れていきます」

「それだけいれば、大抵のことはどうにかなりそうだな」

「戦を観にいくだけですから、心配はいらないでしょう」

「それもそうか。象はどうする?」

虎豹は自身の後ろで気配を消すように、立っていた玄象に声を掛けた。

「私は姉さんの側にいる。まだ治療も途中だし」

玄象の言葉に虎豹は自身の利き腕の拳を握ったり、開いたりする。

「うん。そうだな」

昨年暮れ頃、王騎が治める城塞都市に戻る途中のことであつた。馬車の前に現れたかと思うとそのまま倒れ込んだ少女がいた。少女の白を基調とした衣服は、躰からは流れる血によつて赤く染まつていて、すでに意識はなかつた。突然に止まつた馬車から降りた朱錐は、倒れている少女の容態を把握すると馬車の主から許可をもらい、すぐに近くの街で応急処置を施させた。馬車の主を待たせるわけにもいかず、先に行くように促したのだが「ヒヨツヒヨツ 急ぐ旅でもなし、気にするでないぞ。それに、この出会いは天祐やもれんぞ」とそのまま滞在なさると、どこかに使者を飛ばされていた。それから数日。容態の安定した頃合いを見計らつて少女をこの地まで連れてきたのだ。

そこから、さらに一週間が過ぎようとした頃。

意識が戻つたという報せを受けた朱錐は、少女にこれまでの経緯を話し、これからのことを尋ねた。すると「妹がいるけれど、生死もわからない。それに行く当てもない」とのこと。それならばと、しばらくここで暮らさないと提案すると少女は少し悩んだが、これを了承した。また、少女は身動きが取れる程度に回復すると、お礼をしたいと申し出たため、朱錐は城主を紹介した。さらにその妻がこの少女、玄象に興味を持ったことで今の関係へと発展していた。

玄象は虎豹の腕に後遺症があることを知るとお礼の代わりに、不思議な術を用いて少しずつ改善へと導いていた。

朱錐は滎陽付近で行われる両国の激突を観戦する許可を求めて王騎のもとへと向かう。王騎の側には副官の騰がいつもと同じように待機していた。朱錐の申し出に「それならば付近を通る予定がある」という言とともに、帯同を命じられるのであった。

王騎に帯同する形で第1〜6軍長が揃うと、秦と魏が滎陽付近で激突する頃合いを見計らって、城塞都市を発った。

その頃、滎陽を守ると思われていた魏軍は、逆に秦の丸城に攻め込むと、これを落城させた。城主であり此度の戦で將軍へと任命されていた黒剛將軍は敗死。城内は兵、民に関わらずに殲滅された。秦は滎陽へと攻め込まれた魏は守りを固めるといふ固定観念を持つていたこともあり、見事に虚を突かれた形となった。さらに、丸城を落とした魏軍大將呉慶は、一度滎陽に立ち寄ると全城兵を吸収、巫水に向けて全軍での進軍を開始していた。

巫水にて軍議中であつた？公將軍付きの幕僚は、その報せを受けて狼狽したが、当の本人は「うろたえるな」と一喝。すぐに魏將呉慶の狙いを察すると、戦場を滎陽城から、滎陽―巫水間にある蛇甘平原に移す決断を下した。当然滎陽城を攻略するために、いまは軍の集結させている段階であつたためすべての準備が不足した状況であつた。？公

將軍はそれでも、魏軍よりも先に蛇甘平原へと入る要所を抑えるようにと進軍を指示した。

こうして両軍の戦は、攻城築城戦から平原での激突、野戦へと姿を変えた。

戦場なつた蛇甘平原では、秦よりも早くに進軍を開始していた魏が要所である付近にそびえる丘を占拠することで、戦いを有利に進めていた。平原での戦いでは、高所の理が顕著にでていた。反対に攻め入る秦にとつては劣悪な状況になっていた。というのもすでに丘を魏に占拠されているため、勝利のためにはまずこの丘の奪取は急務であった。そこに、騎馬隊の待機命令に対して、歩兵部隊は到着した順に丘を奪取するための突撃命令がすでに下されているために、作戦的要素を抜きにしたただの突撃を繰り返していた。そのため、歩兵は次から次へとその数を減らしていた。

それは、いままさに戦場にたどり着いた第四軍所属の壁たちにとつても同様であった。それでも、壁は素早く状況を視認すると、いまだ困惑の様相を隠せない第四軍所属の歩兵一団に向かって檄を飛ばして、士気を向上させた。

「反乱の鎮圧で活躍したというあの噂は本当のようだな。壁」

壁の見事な檄に対して言葉を掛けたのは、尚鹿（シヨウカク）という名の壁の幼馴染であり、ともに千人将の位についている者であった。

「逆だ 尚鹿。俺は自分の無力さ知っただけだ」

壁の言葉は嘘偽りのない実感であり、この三か月も研鑽を怠るようなことはしなかった。

「あん？」

「いや、なんでもない。（死ぬなよ 信）」

壁は、竭氏、成？の反乱の際に行動を共にした下僕だった少年信と再会を果たしており、その身を案じていた。

第四軍所属となった信を含めた伍は、千人将である縛虎伸（バクコシン）隊に編成されると、命令に従って両国が戦う戦場へと突撃。魏の守備陣形を先行した信が飛び越えて崩すと他の歩兵はそこを目掛けて穴を拡げて乱戦へともちこんでいた。両軍が入り乱れる戦場において、漂とともに千に渡る一騎打ちを続けてきた信の實力は頭一つ、二つは抜きんでっており、あつという間に十数人の敵兵を切り倒した。そして、指示を出していた敵将を見つけると一気に距離を詰めて、その首を落とすことに成功した。

この信の活躍によって突撃した第四軍所属の歩兵たちは、同国他軍よりも有利に戦いを進めることができていた。

だが、周囲に大量にいた魏兵の姿が見えなくなると状況は一変。

異変にいち早く気づいたのは、第四軍の誰よりも前線で剣を振るっていた信であった。

「な、なんだありやあ …あッあれはやべえぞっ」

信にはそれが何であつたかを判断することはできなかったが、第四軍とは別の場所に突つ込んでいく姿に脅威を感じて急いで自らが所属する伍へと走り出した。

時を同じくして魏兵の姿が見えなくなつたことで異変を察知した伍の面々であつたが、やはり何が起つているのかを把握することは出来てはいなかつた。

「信の野郎はどこにいきやがつたんだ」

始めに言葉を発したのは、出っ歯が特徴の尾平である。

「さあ。でもさつきいた五人組の話が本当ならもつと前だろう」

それに返したのは、尾平（ビヘイ）の弟尾倒（ビトウ）であつた。

「信君は心配ですが、いまはこの異変のほうが問題です」

信のことは気に掛けているが、魏兵が突然退いたことに疑問を持っていた伍長（ゴチョウ）を務める澤（タク）。

伍長とは、戦場における歩兵の小集団を指揮する者である。また伍とは五人で一組という枠の名であり軍の基本となる組織である。ちなみに信の所属する伍は、澤伍長に尾平、尾倒の兄弟と信、あと一人差？という者が所属していた。

すると正面から流れ来る砂嵐が視界を狭くする中、尾平たち三人に向かって全速で駆けてくる信の姿がみえた。

「……………げろッ。み……………な、そこから逃げろッ」

砂が嵐のように舞う後ろから響く重低音にかき消されていた信の叫びが聞こえた頃には時すでに遅く、敵の魔の手が伍に迫っていた。

「はっ！」

声を出したのは誰であつたのだろうか。信の叫びが聞こえたのとほぼ同時に尾平たちの前に姿を現したのは、魏が誇る戦兵器装甲戦車隊であつた。

魏の装甲戦車隊は、魏兵を見失つて棒立ちになつていた秦兵たちを悉くに轢き殺していく。目の前で飛び散る人間だつた肉塊に放心状態になつてしまった尾平たち三人を助けたのは他ならない信であつた。

「ボケッとしてんじゃねえッ」

三人に飛び込むように躰をぶつけた信のおかげで、三人は急死に一生を得ることになつた。そして、そのまま走る去る戦車の背を睨みつけながら信は澤伍長からあれらの名を知ることになつた。

魏の戦車隊とは、馬二頭立ての荷車を改良して、荷物の代わりに、二人から三人の兵を乗せたまま戦うことができる戦兵器である。戦場によつては騎馬隊を陵駕する威力

を誇る。また車輪を通す車軸からは、荷台幅をはるかに超える尖れた金属棒がはめ込まれており、触れるものを悉くに切り裂いていく。荷台に乗るのも熟達した兵たちであり、矛や弩を用いて攻撃する。

なんとか一度目の戦車隊をやり過ぎた信や伍の仲間であったが、振り返ったさきには、無数の肉塊となった秦兵の屍が戦車隊の道筋を克明に描き出していた。

秦兵を死地へと追いやった戦車隊の戦果は凄まじく、参戦していた歩兵は、すでに半数以上が消失していた。そして魏は秦の歩兵隊を壊滅すべく第二波として魏本軍所属の戦車隊を出陣させた。馬と戦車がかき鳴らす轟音は、さきほどよりも大きく響き始めていた。

第19話

「ソフフ？公さんは変わりませんねえ」

秦と魏が激突している蛇甘平原から少し離れた崖の上には、王騎の姿があった。さらにそれに付き従うは副官騰をはじめとした各軍長たちも戦の動静を見守りながら待機していた。

戦は進み、迫りくる魏本軍の戦車隊の突撃を凌いだ信たちは、羌？の助言もあつて戦車の一つを大破させることに成功していた。信は横転大破した魏の戦車から生き残っていた馬を繋ぎから解放して跨ると、反撃にでるべく戦車隊へと駆けだした。

「だめだ。どこを攻撃すれがいいのかわからねえ」

だが装甲を施された戦車を前に信は攻めあぐねていた。前に立てば弩に打たれ、横に並ぶには車軸から伸びる尖った金属棒が邪魔で近づけない。ならば後ろからと行きたいところだが、当然のように矛や槍、弩を構えた魏兵がそれを許さなかった。

攻めあぐねている信に対して、魏兵はなんとか反撃にしようとしている活きの良い獲物を狩かるために、信へと群がり攻勢を強めていた。

一対一ならまだしも、一つ、二つ、三つと狩場に誘導するように攻撃してくる戦車隊の連携によって次第に逃げ惑うようになっていた信であったが、ここでも羌？の助言によって活路を見出すことになった。

「お前の相手は戦車そのものだ」と。

信は戦車を操っている兵を討つことばかりを考えていたが、羌？は戦車の核となっている荷車を狙えというものであった。助言を受けた信はすぐさま車輪に異物を投げ込み戦車を横転、大破させた。この成功を皮切りに、生き残っていた第四軍歩兵団は、戦車隊の荷車の車輪を破壊していくことで、小隊を壊滅へと追いやることに成功した。

これまでの秦軍歩兵の被害に対すれば微々たるに過ぎる勝利ではあるが、一矢報いる形となった。

この信たちの活躍は極局地的な勝利をもたらしたが、大局の趨勢に影響を与えるものでは到底ないと思われていた。

それは魏軍第3軍の将を務めた宮元（キユウゲン）も同様であり、小隊壊滅を受けてなお、すでに虫の息となっている敵歩兵を殲滅すべく丘を守る人員を除いたすべての兵を丘の上から進軍させたことにもあらわれていた。

だが、この誰もが注目しなかった信たちの活躍の一報は、？公將軍の耳にとまることになる。

「そこには何かあるぞ。第四軍騎馬隊に突撃の号令じゃ」

目前に迫る魏軍第3軍の進軍に、もはや風前の灯と相違ない信たち第四軍歩兵であったが、後方から腹に響くような轟音に第四軍騎馬隊の突撃を認識した。

信たちを一足に追い越していった騎馬隊は速度に乗ったまま魏軍と衝突して切り裂いていく。そして第四軍の騎馬隊に所属していた壁は、馬に騎乗している信の姿を認めると安堵したように、声を掛けた。

「無事であったか 信」

「おうよ。壁のあんちゃん」

壁は信の無事を確かめるとすぐに千人将として自隊に指示を飛ばし始めた。

その様子を少し離れた所から観察していた縛虎申千人将は、その手際の良さに感心はするものの、？公將軍の意図を把握できていないと断じ、すぐさま生き残っていた自隊に所属する歩兵を招集した。そして、丘の上に陣取る敵將軍の首を目掛けて突撃をする旨を伝えた。

第四軍騎馬隊の突撃によつて戦場は敵味方騎馬隊に歩兵隊、さらには敵戦車隊が入り乱れる乱戦の様相を呈していた。その戦場の混沌を無理やりに押しつけ、時には、縫うように突貫する縛虎申隊はついに乱戦を突破することに成功した。しかし、あまりにも強引な突破劇の代償も大きかった。突撃時には、百数名はいた兵は四十数名まで減少し

ていた。

犠牲は確かに大きかった。だが、その犠牲のおかげか魏将宮元は縛虎申隊が足元にまで詰め寄っていることを完全に見逃す結果となった。

戦場から縛虎申隊の姿が消えようとも戦況は進んでいく。

宮元が戦車隊を旋回させて壁たち騎馬隊にぶつけようと画策すると、？公將軍は残っている騎馬全軍を持ってこれに対応させた。そうして、宮元たちの目が丘の下で争われる両主力の動向に向けられていた隙を突く部隊がいた。彼らは、麓から中腹、そして喉元まで一気に駆け上がって守備兵を抜くと、ついに頂上にいた宮元の姿を捉えることに成功していた。

この突撃は意表を突いたものであったとはいえ、丘を守る兵は多く、尾平たち歩兵を丘の中腹に囷として置き去りにしていた。

追いつかれれば全滅必至の状況ではあったが、ここでこれまで実力を隠していた羌？の鬼人の如き働きより敵兵が怯むと、それらを背に尾平たちは全力で丘の上へと逃亡した。対して丘の上では、縛虎申が魏軍副将宮元を道ずれとして討ち取る偉業を成し遂げていた。

「ば、縛虎申様……………」

涙を流す側近たちを横目に、倒れ伏している縛虎申の姿に信は將の在り方を教わった

ように感じていた。

縛虎申隊の活躍によつて魏軍副將宮元を討ち取り、丘の頂上を占拠したものの、兵数はすでに十を切つていた。そして、強引に突破してきた丘の上の守備兵はまだ千を超えて残つてゐる。それが頂上を目指すように逃亡する尾平たちとともにここに迫つてきていた。

現状ではもはや交戦することも難しいと考へた縛虎申隊の面々は、敵守備兵の少ない方向から丘から下ることを思案してゐた。だが、その信たちを遮るように、事態は動いてゐた。

魏軍総大将呉慶は、信たちが丘の頂上を占拠することを予見してゐたかのように、すでにその丘の足元まで進軍してゐた。これにより、信たちは丘から下りることすら難しい状況へと追い込まれてゐた。

丘の上の魏の旗が縛虎申隊によつて倒されたのと同じ頃。

信たちのいる丘の下で魏軍第3軍と乱戦を繰り広げてゐた秦国第四軍騎馬隊の壁たちのもとには、新たな指令が將軍より届けられてゐた。単純明快なそれは「丘を完全に占拠せよ」という乱戦などないかのような無茶苦茶な命令であつた。それでも、將軍の命令に従うべく丘の上を目指す秦国軍だが、魏軍第3軍はまだ健在であり、丘の中腹に陣を敷いてゐた守備兵もいる状況では、思うように進軍することは難しいと言わざる

負えなかった。

その時、壁は遠くの崖を思わせる丘の上に佇む王騎將軍の姿を視認していた。

「おい壁。すぐに丘に向かわないと軍令違反になるぞ」

遠くを見つめたまま動きのない壁を心配した尚鹿が声を掛けると壁は一言だけ言葉を返した。

「王騎將軍の姿が見えた。何かが起こるかもしれない」

「おい。何言っているんだ壁。將軍は随分前に引退したままだろう」

尚鹿の言は正しい。王騎が秦国軍として戦うことがなくなってから随分と月日が流れていたのだから。

その頃、崖のような丘に布陣していた王騎は、副官騰と物見遊山を感じさせる会話を重ねていた。

「あちらの丘。眺めが良さそうだとは思いませんか。ねえ騰。」

「ハッ 間違いないかと 殿」

「しかしこのまま移動しますと戦争に参加したことになりませんか」

「誰も参加しようなんて言ってませんよ。ただ眺めがよさそうな丘があるから登りにいだけでです。」

「邪魔なものはおしのけて、ですな 殿」

「ソフ 行きますよ 騰。」

王騎はそのまま前方に拡がる崖のように切り立った丘を愛馬凰とともに駆け出した。当然王騎に付き従う軍長をはじめとした王騎軍は同じ進路とり、見晴らしの良い丘に向かつて一気に駆けだした。

その進撃は、前方にいる魏軍をあつという間に切り裂き、粉碎していく。壁たちはこの流れに乗るべく指示を飛ばして同時に丘の上を目指した。

こうして、王騎を先頭にした王騎軍は一度も滞ることなく信たちが占拠した丘の上へと到着した。

朱雉もまた他の軍長と同じように丘を駆け上がったが、ふと舞うように戦う人影に目をとめたが、今は王騎將軍に付き従うために、視線を戻して駆け上がった。

第20話

「俺が弱えかどうかためしてみろやツ おかま巨人ツ!!」

威勢の良い啖呵を切ったのは、縛虎申とともに丘を駆け上がった信である。対して、おかま巨人と呼ばれた人物は秦国六大將軍最後の一人。怪鳥王騎その人である。

「あのバカ……………」

そして朱錐の後ろで? (ヤオ) の仮面越しに頭を抱えているのは李豹である。

「あなた さつきからずつと死地にいるのをご存じないのお。」

王騎は兇戯でもするかのように矛を信の首筋に動かした。それはあまりにもなめらかな手際であり、優れた動体視力と野性的な勘で危機を察知する信ですら首筋に矛が止められるまで気づくことができなほどであった。

「ツ?!」

いつのまにか首筋に当てられていた矛先に、信は動物のような俊敏さで後方に跳躍した。着地と同時に手を首元に這わせて首がまだ繋がっている安堵感と生来の反骨心から王騎に飛び掛かった。

自国の將軍に下僕の少年が剣を向ける。実際に起これば家族、親族郎党など関わりの

あるものすべてが根絶やしにされかねない事象である。

だが、信の剣が王騎に届くことはなかった。

飛び掛かかる信に立ちふさがって剣を受け止めた存在いた。

「いい加減しろッ」

李豹は信の動きを察知して、冷静に対処していた。

「な、なんだてめえッ」

信は己の全力の剣を苦も無く止めた李豹に驚きを覚えていた。

「この方がどなたかわかっていないだろうが、秦国の大將軍王騎様だぞ。死にたいの

かつ 信」

「な、なんで、なま、え………えッ!? こ、こいつがだいしようくん?」

だいしようくんという言葉が大將軍とすぐには結びつかない程度には困惑していた信であったが、自国の將軍に剣を向けたという無礼がなくなるわけではない。特に壁に至っては李豹が動いたことで介入する機会を見失っていたため、どうすべきかオロオロと拳動が怪しくなっていた。

「ソッフ 童信との児戯はここまでとしましょうか。李豹も戻りなさい。」

王騎のこの一言でこれまでのことは將軍のお遊びであった認識されて不問になった。それを理解した壁は人知れず安堵の息を吐いていた。

「りひよう、か。名前は覚えてぞッ 次、会ったときはぶつたおしてやるからなッ」

信はそんなことなど露知らずに、目の前の李豹から目を離せなくなっていた。それゆえに威勢の良い啖呵を吐いたのだが、李豹は「…はああ」深いため息を吐くと信の相手をせずに列へと戻っていった。背後では「なんだてめえやれやれみたいなため息なんかはきやがって」と怒鳴る信を置いて。

場の空気が滞つたのを察知した壁は、いまこそ発言する機と認めると声を挙げた。

「援軍痛み入ります 王騎將軍。現在指揮権は將軍であられる貴殿のもとにあります。ならば直ちにわれらを率いて眼下にいる魏軍大将呉慶にむけて突撃の命をお出しください」

「ソフフフ 生真面目なところは似るんですかねえ。」

愉快な笑みを浮かべる王騎であったが、返答は否であった。

「私はただ通りすがりに、この丘を気に入ったから登ってその景色をたのしんでいるだけですよ ねえ 騰。」

「ハッ 望外の眺めです」

「そのようなお戯れをしている時では……………。今ならこの丘の利を活かして突撃すれば呉慶を確実に討ち取れます。王騎將軍。是非に我らをお導き下さい」

壁の懸命な説得が続いている中、朱錐の後ろに戻ってきた李豹からは、なんとも脱力

的な空気が発せられていた。

「知り合いか」

「はい。名を信と言います。同じ下僕の身としてともに生活していました。ですが、まさか仮面一つで気づかないとは………はああ」

「そ、そうか」

朱錐もさすがにそれはなあと感じていた。がそこで「ん？あの信か」と思い浮かぶ人物がいた。謁氏、成？の反乱が落ち着いた頃、昌文君の妻夏夫人から封書が届いたことがあった。そこに昌文君の言葉として「信という若者いる。粗々しい少年だが、見所はある。手が貸せるのであれば助けてやってほしい」との内容であった。

「どうかされましたか 朱錐様」

「いや、昌文君様からして見所のある若者だと聞かされていたのが、おそらくあの者のことかと思つてな」

「昌文君様からですか。信で合っているかと。なんと言つても天下の大將軍になる男ですから、信は。もちろん私もですけど」

「……………」

朱錐は、純粹に天下の大將軍を指す信や李豹が眩しく、そして、ほほえまして「ふふ」と自然と笑みがこぼれた。朱錐として大將軍に憧れて軍属となった身だ。けれど、そ

れは大將軍の側であつて大將軍そのものではなかつた。

はたして、この若者たちの輝きは、夢へと手を届かせるのであろうか。

「天下の大將軍とは大きくでたな。期待しているぞ。李豹」

「ハツ 必ずなつてみせます」

朱錐が若者の輝きに魅せらえていると、様子を見ていたのか録鳴未が声を掛けてきた。

「ツハン！ お前の所には活きの良いのがいるもんだなあ 朱錐」

「嫉妬か、録鳴未。みつともないぞ」

「してねえよつ馬鹿が。んな簡単に大將軍になれるわけねえだろうが。それにおめえみたいに夢ばつか語る野郎はすぐ死ぬつて決まつてんだよ。分かつてんのか」

言葉は悪いがこれでも録鳴未いう漢は情に厚い。伝わりにくいやさしさが小さじ程度は入つていた。

「成つてみせます。俺も信も」

知つてか知らずか、まっすぐに録鳴未の目を見て言葉を発した李豹。

「ツチ んんだよてめえは。人の話聞けよ」

言葉は悪いがちよつと照れ？が入つたのか顔をそむける録鳴未。その横では仮面越しにニヤニヤとしている朱錐の姿が……。

新しい芽の息吹に軍長たちに穏やかな空気が流れる。

「若さとは良いものだ。同金」

「ああ、そうだな。鱗坊」

それぞれ第3、第5軍長である鱗坊と同金も新鮮な若者の言葉に昔日の日々を想う。

「まあその心意気は認めるが、若さに無知は付き物であろう」

そこに第2軍長である隆国は、若さゆえの勢いだけでは何物にも成れはしないと。

「おつ、なんだ隆国。お前も気にしてんのかよ」

「うるさいぞ録鳴末。若者の成長はどのようなことでも喜ばしい。それだけだ」「なんだとツ」

その空気を変えたのは、こちらを気にしつつも、戦場から目を離さない第4軍長千央の言葉であった。

「おい。戦況が動くぞ？公將軍だ」

眼下では魏総大将呉慶率いる五万の軍勢に五千の手勢を率いて奇襲的な突撃を敢行している？公將軍の姿があった。

「激しいな。あれが？公將軍か」

突撃に対してすぐさま防御陣形を敷いた魏軍を粉碎して切り裂いていく？公將軍の姿に朱錐はポツリと眩いていた。

「朱錐は？公將軍ははじめてであつたか」

呟きを拾つたのは同金。

「名前ぐらいなら聞き及んでいたが、実物をみるのははじめてだ」

「うむ、將軍は常に前線に張り付いておられるからな。戦場が被らねば知り得ないのも無理はない。だが、戦に關しては真に強く鋭いぞ。それに我々とはまったく違つた視点で戦を捉えておられる」

多種多様な才を持つものが集まつた王騎軍ではあるが、？公將軍の戦の捉え方はそのどれとも違つたという同金の言葉に朱錐は興味を持った。

「ふむ。そうなるか、？公將軍なにを見ておられるだろうな」

敵の陣形を吹き飛ばしながら突進を続ける？公軍を魏軍は陣を厚くして止めるのではなく、左右から挟み込み推進力となる？公配下の騎兵を削り始めた。

將軍の突撃というのは、先頭に將軍が駆けることでその勢いは最高潮になる。当然敵は先頭の將軍の首を獲りたい。そうすれば、残りは雑兵となり下がるからだ。しかし、その一人を討てない所が、戦の妙ともいえた。武に長ける將軍、大將軍の突撃とは、個ではなく集として捉えなければ、將を討つことは早々に叶わない。？公はその類の將軍であると理解した魏將呉慶は、つき従う兵を削ぎ落すことで推進力を奪い、勢いを落した將を狩る方法に切り替えた。

呉慶の戦略は？公軍を確実に削ぎ落としていく。？公兵は屈強かつ強靱であるが、左右を敵に挟まれた状態では個々の武は半減してしまい、いよいよに魏軍に討ち取られていく。このままでは、秦の敗北が濃厚となっていく戦果のなか、丘の上から飛び出した壁率いる壁隊と尚鹿隊合わせて百数騎、さらには、王騎から馬を貸りた信が敵軍を縫うように突破すると、？公軍の進行方向から向かつて左側を並走し始めたことで好転をみせる。さきほどまで、？公軍を左右に挟んでいた魏軍であったが、その魏軍の左外側に壁隊が並走したことで、今度は魏軍左列側も敵に挟まれる形となり、動きを緩慢になつたのだ。そのことを瞬時に悟つた？公は左を指さすと「左じや つぶせえ!!」と号令をかけた。？公兵はもとより屈強かつ強靱であるため、向かうべき方角が示されるとその力を取り戻して魏軍左列側を一気に削り出した。

流れが？公軍に傾き始めた頃、突如壁隊から一騎のみが猛然と先へと駆け出していく。

「信」

李豹は単騎がけをする信を見つめている。

「……………どうや？公將軍の進行方向にいるあの二騎の所にいくようだな」

「おいおい大丈夫かよ、あのガキ。あそこにいるってことはそこそこヤル奴だつてことだぜ。たぶんよ」

信が向かっている方角に居るのは、魏将であろう二騎。場所は、？公軍が突破している陣と魏将呉慶のいる本陣の中間であり、？公軍を迎えうつ位置に佇んでいた。

「信は負けません。絶対！」

「お前らのその自信はどこから来るんだよ。一体よお」

李豹は信がこんなところで終わるような男でないと信じているし、録鳴未からは、威勢のいいガキが単騎がけているようにしか見えなかった。

信が二将に近づくと一騎が向きを変えて信と劍戟を交わし始めた。

その間にも、？公軍は魏軍本陣へと突貫していく。

信と対峙してる麻鬼（マキ）は一つの誤算に焦りを覚えていた。さつとこの小僧を切り捨てて、本命の？公の首を朱鬼とともに刎ねる予定であったはずが、信の予想を超える実力に仕留めることができずにいることに。

また、それは本命？公の到来が差し迫っていた朱鬼も同じであった。なぜなら、彼らは二人一組として敵将を狩ることに特化していた。それゆえに「急げ 麻鬼ツ」と朱鬼が声を掛けてしまったことが勝負の分かれ目となった。すでに若干の焦りを抱えていた麻鬼はさらに勝負を急いでしまい、仕留めにくる大振りの一刃を誘った信のブラフに乗ってしまい、その隙に信に斬られたのだ。

「ま、麻鬼ツ おのれ小僧!! ツ?公!!」

斬られた麻鬼に意識を取られた結果、迫りくる？公にあっさりと斬られた朱鬼。

本来二人掛かりであれば？公を討つ可能性すらあつたにもかかわらず、信という少年の介入によつて、二人はこの世を去ることになった。

「よし、よしッ」

「はッ まあまあやるじゃねえかよ」

「録鳴未は素直じゃないな」

「うっせえよ 朱錐」

二将が討たれたことで事態は一気に終局へと動き出した。

やや劣勢と判断した魏将呉慶の側近は一端退くことを提案したが、呉慶はこれを拒否。？公と対峙する選択をとつたのだ。呉慶は知力智謀よりの将であり、単騎で古今無双誇るような豪傑でない。しかし、彼は退くことを良しとはしなかった。いや、できなかったがより正しい表現であろう。将となる人物はそれぞれ少なからず核となる根源を抱えている。信や李豹なら天下の大將軍になるといふ夢であるし、？公にとつては戦場で勝つことこそがすべてであると言つていい。そして、呉慶にとつては、今回秦が魏に侵攻してきたこと。それ自体が根源に触れていた。遠き日に滅んだ小国の王族であつた呉慶にとつて、侵略という行為こそが許すまじ所業であり、退くという選択肢が
ありえなかつたのだ。

対峙した両国の大将はそのまま一騎打ちによる決着へとむかった。

武の将と知の将が一騎打ちで対峙すれば、どうなるかは火を見るよりもあきらかであつた。呉慶の粘りもむなしく？公が呉慶を切り捨て、勝利した。

呉慶がもしも退くという選択肢を取れていれば、勝敗は魏に傾いていたはずである。残している兵力差からもそれは明らかであつた。呉慶とて己が間違つた選択をしていることを理解していた。だが、心がそれを許さなかつた。あるいはそれは、？公という大炎が呉慶の心情に触れた故に燃え上がってしまったのかもしれない。

そして、？公は呉慶の智謀と武に走つた激情を見事な大炎であつたと賛辞を贈つた。魏軍総大将呉慶が討たれたことで、戦意を失つてしまった本軍を唯一立て直せるはずであつた、ほぼ無傷の魏軍第2将白亀西の前には、秦の怪鳥王騎とそれを支える軍長たちが現れたことで立ち直すことは叶わず、あえなく全軍退却の号令を發した。

こうして、この年最大の戦となつた蛇甘平原の戦いは、秦国の勝利で幕を閉じた。

大王政暗殺事変

第21話

蛇甘平原の戦いが決着したが、秦国軍総大将である？公は滎陽へは進軍せずに引き返す決断を下した。

これは、秦の侵攻作戦としては失敗と言えたが、魏将呉慶はまぎれもなく魏の名将であり、それを討ち果たしたことは、滎陽への侵攻以上の戦果であったとも言えた。しかし、その代償は大きく、秦も甚大な被害を受けていて、これ以上の遠征の継続は困難であると判断されたからである。

「丘の上からの睨みには、随分助けられたぞ王騎。亜水までこい。酒を飲むぞ」

「わたしはただの通りすがりですよ。それに用事もありませんのでこれで」

「酒じゃああ」

「……………」

さしもの王騎もここまで話を聞かない？公になんとも言えない表情はするものの、亜水で酒を楽しむのであった。その後、王騎たちは「行くところがありますので、あなたたちは帰国なさい」と朱錐隊の面々は王騎たちと別れて帰国の途についた。

大戦の名残か静かにゆつくりとした時間が流れだしていた。

王騎領にて練兵を行っていた朱錐も同様であり、戦場において新兵たちが地に足をつけて戦えるようにと隊に磨きをかけていた。

「王騎軍の中でいまだ未熟かもしれないが良くなってきたな」

「そうだぞ、まだまだだ。けど、その中では李豹の伸びは著しいな。魏でなにかあったのか」

秦が魏へと侵攻した蛇甘平原の戦いを観戦した李豹は、ひとつの殻を破ったかのように躍動していた。

「李豹には、ともに育った信という若者がいるのだが、その子が戦場においてな、彼の活躍にも背を押されたようだ」

「ふふっ　そうか。それは李豹も負けていられないな」

競い合う相手がいるというのは、若い両者にとって良い影響を与え合うものだ、軍長と副官は笑い合った。

「そういうえば李豹から聞いたのだが、最近、玄象とよく剣を交わしてるそうだな」

「ああそのこと。近頃、李豹が頭角を現しはじめたでしょう？それでアレは誰っていうからさ、教えた。李豹は李豹で象の剣の腕が凄いつて知ってて、手合わせを願ってたの」

朱錐は玄象の腕を実際に見ているため、結果は予想ができてはいたが、番狂わせはな

かったと告げられた。

「わかっているみたいだから言うけど、玄象の圧勝。李豹も筋はわるくないけど、まだまだ経験不足」

「逆に、あの歳で十数人の精兵を手玉に取れる腕の方が不思議ではあるな」

「あー、そのあたりは私も最近聞いた。相当特殊な環境で育つたみたいだか。象が話したら、聴いてやってほしい。私からはいえないかな。あと、そうだ。今度象の様子をさりげなく観察してみて。面白いから」

何がという部分が抜け落ちていてわからないが「若いっていいなあ」と呟く副官の姿に、朱錐は一応は気に留めておくか程度に領いて答えとした。

練兵を終えて城塞都市に戻ると朱錐宛てに封書が届いていた。

「……………宛名は。ふむ」

封書を開いて中を確認した朱錐はしばし熟考したのちに、王騎に断りを入れてから城塞都市より姿を消した。

舞台はかわり、秦国の王都咸陽各所では、流血が地面を赤黒く染めていた。

その一報を受けた昌文君は、ただちに嚴戒態勢を敷くと指示を飛ばしていた。

「いまは生きている者を優先せよ。これ以上一人も失うわけにはいかぬ」

昌文君が焦るように指示を飛ばしたのも無理はなかった。なぜなら昌文君に協力的であった貴族が殺されたという一報を皮切りに、他十数人にも上って同じ報を受けることになったためだ。

「申し訳ありません。遅れました」

「壁か。無事であったか」

壁も同じようにその一報を受けると、急いで昌文君のもとに訪れていた。そこで状況を知った壁は自身の護衛隊からも狙われる可能性のある各家へと走らせた。

「竭氏の残党でしょうか」

「わからぬ。あるいはもつと別の狙いがあるやもしれん。何者かなど今は関係ない。これ以上は好きにはさせんぞ」

しかし、昌文君の決意の言葉もむなしく、この夜さらに数人の協力者が地に伏せることとなった。

翌日、現在の状況を改めると20に届きそうなほどの協力者が亡き者にされていることが判明した。ただでさえ大王を支える昌文君の一派は数は少ない。そのうえでのこの被害は、易々と見逃すことのできない事態であった。これ以上の被害は昌文君派もとい大王派の消滅にすら関わる事態であると、各家へに護衛を配置して今晚の襲撃に備えるのであった。

襲撃に備えて固く門を閉ざしていた昌文君の屋敷に、竭氏の参謀を務めていた肆氏が姿を見せたことで、この騒動の本質を彼らは知ることになるのであった。

その頃、王宮の中では無数の屍となった衛兵だったものが横たわり、それを成した者たちを見上げていた。

「ククク。なんと脆い守備であろうか」

「確かにな。大王を守護する場とはとても思えん酷さだ」

衛兵を屍へと変貌させた者たち、悠々と王宮内に潜入すると依頼主の標的である大王
☒政の寝所を探して動き始めていた。

「上から手が回って以上は当然であろう。急ぐぞ。他の者たちに後れを取るわけにはいかぬ。この依頼をもって我らこそが闇の世界に君臨するにふさわしいことを証明するのだ」

最後に口を開いたのはこの刺客集団堅仙（ケンセン）の主である。他の者たちとあるように、此度の依頼を受け取って参戦しているのは、堅仙だけではなかった。他にも号馬（ゴウマ）、赫力（カクリキ）、朱凶（シユキョウ）そして闇の世界ではもはや伝説と化している蚩尤（シユウ）の姿すらあった。

そうして、獲物を奪われまいと、大王の寝所に向けて回廊を走っていた堅仙の前には、

蛇甘平原の戦いを経て一回りも二回りも成長した信と河了貂が行く手を遮るようになり、ちふさがった。

「政を闇夜に狙うようなクソ野郎は、このオレが叩き斬つてやる」

信は抜き放つた剣を堅仙たちに向けてと啖呵を切つた。それを宣戦布告として、両者は激しく剣戟を交わしはじめた。堅仙の奇抜な技に最初こそ押され気味であつた信であつたが、それらを見極めると終始、刺客集団を圧倒した。一人、二人、三人四人と仕留めていく。形勢の不利を悟つた彼らであつたが、窓より覗く景色には、他の刺客が大王へと迫る様子が見て取れたことで、このままおめおめとは退くに退けない状況であつた。

対して信は、外の状況から政に刺客の存在を報せるために、一緒にきていた河了貂に「テン。先に行つて政に刺客のことを報せてこい」と先に政のもとにいくように促した。信の言葉に従つた河了貂は信の無事を祈りながら政のもとへと走り出した。

政に危機を報せるべく先にみえた回廊の角を曲がつた直後に河了貂は何か蹴躓いて前のめりに倒れた。

「いつてえ なんだよいつたい」

言葉を吐きつつ立ち上がると、そこには倒れ伏した筋肉隆々の男たちの姿があつた。

「ひえ え……………つて死んでんのかよ。仲間割れかなあ やだやださつさと政のもとに

いこつと」

河了貂は過酷な黒牟村の生活のなかで、他人の生き死しを見てきたこともあつてか大きく動じることはなく、政のもとに向かつて再び走り出した。

その姿を静かに眺める影が一つ。

「来るなつていつたのに……。それにしてもこれは一体？まあい」

そう言うとき影は闇の中へと姿を消した。

刺客集団堅仙を圧倒していた信が8人いた刺客のうち6人を斬ると、残った二人は全滅を恐れて逃走した。信は逃げだした者は無視して、先に行かせた河了貂が心配になつて走り出した。

まもなく倒れ伏した男たちと遭遇したが、河了貂のことを優先して奥へとさらに歩を進めた。そうしていくつかの角を曲がると何者かと会話をする河了貂の姿を見つけることができた。

「テンつと……」

「信！よかつたあ無事だつたんだね」

「当然だろうが、俺があんな奴らにやられつかよ。それより途中で倒れてた筋肉隆々のおっさんどもはだれが倒したんだ。それに誰だこのおっさん」

「このひと？この人は昌文君一派の文官だつて。誰がやつたかなんてわかんないよ。お

れがいったときにはすでにああなつてたからさ」

信は河了貂の言葉を耳に残しながら視線を文官だと名乗った男に向けた。その視線に気づくと男は恭しく頭を下げると言葉を発した。

「昌文君様には良くして頂いております。あなた方のことは肆氏様から聞き及んでおります」

「ふうん、そつか」

信はテンの言葉を疑うわけではないが、この文官を一目みたときから妙に気に掛かっていた。

「まっ、ほかに俺たちみたいなのやつがいんのかもな」

けれど、今はそれどころではないとそのことを頭の隅へと追いやる。そして、正体は不明だが刺客を倒した奴なら味方なんだろうと深く考えずに受け答えをすると「さっさと行くぞ。テン。それでおっさんはどうする」と声を掛けた。

「大王様の危機とあらば、この身も何かの役に立つやもしれません。お供いたします。わたしにはこれもありますから」

と護身用なのか訓練に使われる木製の槍を掲げた。

その頃、大王[□]政は宮女とともに寢所にいた。宮女はすでに眠りついていたが、静かに書物を読んでいた[□]政は、遠くの物音とただならぬ気配を察知して、寢所の間に

入ってきた者を問答無用で切り捨てるために扉の後ろで剣を構えていた。なぜなら、こうして深夜に近づいてくる足音というのは、刺客である以外は考えらえなかつたからだ。というのも、王の寝所とは、毎夜ごとに変えられており、実際にその日の寝所を知るものは非常に少ないのである。そのため、政はかすかな異常を察知してからは、刺客の存在を前提に物事を考えていた。

「足音は三つ……。奇襲で一人目を、できれば二人目も……」

かすかに言葉声を声にだして決意を固めた政は、先制の一振りで一人目を殺すべく意識を集中させた。

「タツタツタツタツ」大きくなる足音に狙いを定めると一気に扉を押し開いて刺客へと剣を走らせた。

第22話

「よっ！ひさしぶりだな 政」

☒政の剣先を受け止めたのは刺客。ではなく信であった。後ろには河了貂と大柄な文官らしき男が一人。

「信か。お前がここにいるということは、昌文君の指示か」

政は信であることがわかると剣を収めてすぐに思考を回転させた。

「いや、肆氏つてやつ配下とかいってたな」

「肆氏が？……刺客は何人だ」

「八人は切った。九人はなんか倒されてた。それも、まだ何人かはいるはずだ」

「倒されてた？」と政は呟くと信たちの後ろにいる大柄の男に視線を向けた。男は視線を合わせると恭しく頭を垂れる。

「お前は……。いや、いまは敵の数も定かではない以上はここにいるのは危険だろう。向（コウ）を起こしてくれ、すぐに移動する」

政は信の話しから軍ではなく刺客、暗殺者の類だと当たりを付けると安全を優先して「ついて来い」とすぐに行動を開始した。ちなみに起こした向がひと騒ぎをしたが☒政

が手短かに説明すると納得したのか静かになった。

「この先に歴代の大王しか知らない抜け道がある。それを通れば王宮の外だ」

「今回は楽勝そうだな　なあテン」

「そうだね。三人で逃げてたのがもう懐かしいけど、さつさとこんなところからおさらばしようぜ」

「ふっ　そうだな」

政は、毎度危機的状況が起こる時には、この三人が集まっていることに不思議な縁を感じていた。そんな政を後ろから付き従って眺めていた宮女向もまた、どこか不思議と楽しそうに見える。政の姿に頭を傾けていた。それもそのはずで、政は秦国の大王様であり、信と名乗る粗暴そうな子どもと縁があるようにはみえないし、当然横にいる不思議な生き物は論外であるからだ。

脱出路のある部屋について政たちは鍵を開けて部屋内へ。そして、王宮から外へとつながる抜け道の扉を開けようとして、問題が発生した。

「外側から鍵が掛けてある」

「はあ？　じゃあ開かねえってことじゃねえかよ」

「え。でもさつき政は秘密の抜け道だっていったよね？」

「ああ。歴代大王にしか伝えられることのない抜け道だ。だが、一人だけ知っている者がいる。先代の王に仕えていた重臣であり、現宰相でもある。呂不韋だ」

「り、呂氏つて政の後ろ盾じゃ」

河了貂の驚きは、王宮の事情に詳しくないものにとつては当然のことであつた。竭氏亡き後、呂氏の専横を咎めることができるものは、もはやいなくなつていた。当然彼らは大王を守ることはあつても亡き者にするわけではないと考へていたからだ。

「つとーテン待て刺客だ」

気配に気づいた信の言葉で、入り口付近に視線を向けると、出入りを塞ぐように赤黒い衣服をまとつた者が3人、もう一人は小柄で白を基調とした衣服の者が一人がそれぞれ佇んでいた。

河了貂は入り口をふさがれたことで、自分たちが袋にネズミとなつたことを理解して動揺するように信に声を掛けた。

「ね、ねえやばいよ 信」

「なんだよ。赤いおっさんと同じかよ」

それに対して信は、刺客の正体が政と初対面のときに遭遇した敵と衣服が同じであり察しがついた。政はその言葉を補足するように「朱凶か」と声に出した。

一方、朱凶側では、標的の政と一緒に、前回の任務で朱凶の名に泥をつけた信を同

時に始末できる状況に歓喜していた。そして「今宵は我らのためにある」と前回の雪辱を晴らすべく朱凶の三人うちの一人が信に向かって駆けだし、一気に加速すると切りかかった。が、突進するように素早く切り捨てにかかった朱凶であったが、信は臆することなく踏み込み上段から一閃した。飛び掛かった朱凶は防御すら満足にできずにあつさり討ち取ることになった。

「な、なんだと」

驚愕の表情をする朱凶をよそに、朱凶の後ろに控えるように佇んでいた羌？は、無言のまま信の前に歩き出た。信は羌？の姿を認めると問うように言葉を発した。

「羌？。てめえ政を狙う刺客だったのかよ」

それに対して、羌？は沈黙のあと「そうだ」と肯定した。そのあと問答を繰り返したが、羌？の目的は変わらずに政の首を獲ることであると引かなかつた。羌？はいい加減に痺れを切らしたかのように、視線を信から後ろにいる大柄な男に移して歩き出した。

「どこを見てやがる。お前の相手は俺だろうがっ」

信の激情とは裏腹に羌？の視線は大王を庇える位置に立つ男に固定されていた。

「そこで見っておけ。大王の首をもらっていくだけだ」

「させねえっていいってんだだろうがっ」

剣を抜き放って一閃を振るった信であったが、羌？はそれを見透かすように躲すと、

反対に剣先を震わせ信に薄い傷を負わせた。

「お前の相手をしている暇はない。次は殺すぞ」

冷徹な眼差しをみせる羌？に、信はそれでも退くという選択をみせなかった。

「できるもんならやってみろ」

こうして信と羌？が切り結び始めた後ろでは、政が大柄な男に話しかけていた。

「お前はなぜここにいる」

事情があるのだろうか？と委細を省略して話を進めようとする政に大柄な男もそれに応えた。

「商人より話があり、それを肆氏に。文官としてなら敵に怪しまれないだろうとこのように」

「……………。そうか」

そんな二人の姿を不思議そうに見ていたのは河了貂であった。

「ねえ 政。その人知り合いなの」

「ああ。昔世話になったこともある」

「ふーん」

「河了貂はそっけなく返事をしたが、内心では「大王の世話をするってことは、結構な位についてる人なんじゃ？」と思考を働かせていた。

その間にも信と差?の剣戟は続いていた。相手を切り裂かんと激しく攻勢に出る信に対して、ひらりと舞うように躲しながらも的確に攻撃を加えていく差?。時間が経つごとに信だけが傷を増やしていく。実力だけをみれば差?が圧勝する程度には両者の技量の差が他者からも見てとれた。しかし、差?はなぜか信を深く傷つける意思をみせないこともあつて、動けなくなるまで動くであろう信を相手に苦戦するという妙な構図ができあがつていた。

そうしているうちに、朱凶の長燕呈は、蚩尤の伝説との差異から「もはや崇める対象でも憚る対象でもない」と差?に見切りをつけると、剣戟を交わす二人を無視して剣を抜き放ち一瞬で加速、政の首目掛けて飛び掛かるよう剣を振るつた。

「しまッ 政っ」

信の声もむなしく、燕呈の剣は政をとらえた。

かに見えたが、燕呈の剣と政の間に差し込まれた木製の槍によつて受け止められていた。た。

「なにっ!?!」

眼中にもなかつた文官姿の男に剣を止められた驚きに思考が一瞬止まると、その隙をついたように政は剣を抜き放ち刺客へと斬りかかる。それを何とか受け止めた燕呈であつたが、二対一という状況は芳しくないとすぐに状況を察して、二対二に持ち込むた

めに、後方に跳躍した。

「……………あの手応え。中身は木製であるはずがない」

燕呈は己の剣にうぬぼれるつもりはないが、少なくとも木製の槍を切れないほどに己の実力を過少評価するつもりもなかった。

「いずれにせよあの男も標的とする。お前は男を私は大王を先に殺す」

「ハハツ 燕呈様が滾っておられる。この私めにお任せを」

相手が二人いるのなら、こちらも二人でいく。合理的な判断を下した燕呈であったが、ことはそうもいかずに新手の登場と不意打ちによつて後ろから刺されたその一人を失うことになった。

「ば、ばかなこのわたしが気配にきづかぬなど……………」

「気づかない程度に雑魚だつてことを理解しろ」

そう言い放つたのは、いまだ姿を現していなかった刺客集団号馬であった。その数は実に十三にも及んだ。

「ここにいる全員を始末すればいいだけとは、楽な任務だったな」

新手はすでに自分たちの数的な優位に加えて、大王を守る者の少なさに任務の成功を確信していた。

登場した新手の多さに信は差？に一時休戦を申し入れると「こいつらの相手は俺がす

る。おっさんはなんとか政を守ってくれ」と声を張り上げた。

「ククツ 俺たちをお前ひとりで相手にする？ふざけたことをぬかしやがって」

信の安い挑発に乗った号馬の一人が前に出ると羌？は「しばらくでいい。あいつらの相手を頼む」と信に告げて、後ろに下がった。また、他にも朱凶の長燕呈を斬るべく号馬のなかでも腕に覚えがある者が切りかかっていた。

号馬の長は蚩尤という名に油断は禁物であると判断すると、信を素早く囲んで排除するように指示を出すと、さらに大王へは二人の刺客を送り出した。

信は劣勢を承知で囲い込むように陣を敷いた号馬の中に飛び込み剣を振る。当然、相手は一人一人が手練れであり信の狙いもなくただ剣を振る攻撃は易々と躲されて、反撃を受けて傷を負っていく。そのあまりにも滑稽な信の姿に嗜虐的になった号馬が痛みつけ始めたとき、事が起こった。

それは、大王を狙って動いた二人の号馬は侮るわけではなく任務を粛々と完遂しようとして攻撃したことで起きた。障害にもならぬと思われていた文官風の男によつて、それぞれが一撃のもと地に叩き臥せられたのだ。この想定外の事態に「な、なにっ」「馬鹿な………」と手を止めてしまった号馬たちの動揺は、明確な隙となつて立ち上がった羌？が反撃にでる時間を与えてしまった。

「トーン タンタン」

「トーン タンタン」

と紡ぐように言葉を吐き舞うように拍を刻む。

羌?の姿が消えたど理解した頃には、信に群がついていた号馬の首が撫ぜるように匆ねられていく。

「トーン タンタン」

「トーン タンタン」

吐き出される言葉はいつそ呪詛のようにさえ聞こえ、敵対する者の首を容赦なく匆ねていった。

「トーン タンタン」

「トーン タンタン」

圧倒的なまでの羌?の強さであったが、同時にその羌?の様子にも変化が起きていた。額からは汗が噴き出し、呼吸音すら苦し気に聞こえはじめていた。

羌?は近くにいた号馬たちすべてを切ると、残りの力を使って政の首を狙った。

「トーン タンタン」

「トーン タンタン」

一瞬のうちに政の前に移動した羌?の刃は確か政の首を捉えようとしていた。が、その首目前にして、羌?の躰は唐突に襲った重い衝撃によって吹き飛ばされて地を二転

三転と転がると力尽きたように動きを止めた。

「……………」

男はその動きを完全に見切ったわけでない。

ただ度重なる技の行使によって意識が乱れ、漏れ出していた殺気にむかつて、そのまま槍を振るつた結果であつた。

「えっ、えっ?」

と混乱する河了貂を除いて、この場のすべての視線がこの文官に集中していた。

一瞬のことに驚愕と静寂があたりを包み込むなか、回廊から響きはじめた大勢の兵の足音は、騒動の収束にむけての流れを作りだした。

いち早く事態を認識した朱凶の長燕呈は、切り結んでいた号馬を斬ると残りの事態のすべてを無視して出口からの逃走を選択した。回廊にはこの場に急いで駆けつけた隊列の乱れた兵たちの姿があり、その隙を見定めると跳躍。そして、壁を走るように移動して前列の兵を飛び越えると、今度は兵の足元の隙間を縫うように一気に駆け抜けて闇夜に消えていった。それに一瞬遅れた号馬もまた逃走を選択するが、一步遅かつた。一人目が隙をついたことで「隊列を組め。儂は大王を。壁は逃げた刺客を追え」と昌文君の大声が響き渡ると、兵たち隙間を埋めるように隊列を組み為したことで、もはや逃げ道は残されてはいなかった。

昌文君は逃げ遅れた追っ手を捕まえた。大王の無事に安堵するとともに、大王の横にいた大柄の男に視線を向けると「あとで話がある。ここに残れ」と伝えた。信は重傷であつたようだが、意識ははっきりしており、刺客として現れた蚩尤を渡せという昌文君に対して「蚩尤じゃねえっ　こいつは俺の伍の仲間の差？だ」と一步も引かずに会話の応酬をした。大柄な男は、信のもとに駆け付けようとしていた河了貂を呼び止めて「私
が戦えることは内緒にしておいてくださいね」と声を掛けた。

「?　いいけど、貸し一つだからね」

とちやつかり男に貸し付けた河了貂は信の下へと走つていった。

政の執り成しもあり、ひとまずはお咎めなしとして、信や倒れていた差?は治療のために移動していった。部屋に残っているのは、昌文君と大柄な男の二人だけになった。

「雖よ。お主も肆氏から此度のことを?」

「わたしは紫夏より。肆氏にはその伝手から。王宮内には父の名でここに参りました」
「なるほどそうか。それならば呂氏にも気づかれまい」

「政様の手助けをするが一つ。あと、昌文君様が推す信という若者にも興味がありました」
「たので」

「信か。お主の目から見て奴はどうだ」

「粗削りですが、胆力には目を見張るものあります。期待はもてますが……」

「もてますが、何じゃ」

「ところで、話は変わりますが、うちには李豹という若者がおりましてね。私はその子を推しているのです」

「李豹？聞かぬ名だな。……………むっ？李……………まさかつ！生きておるのか」

「ご明察です」

昌文君は大王の影、そして囷として竭氏の反乱の際に犠牲になったときいていた。万が一など起こさぬように準備を進めたはずの計画によつて、だ。多くの者が犠牲になつた反乱であつたが、とりわけ漂は、昌文君が連れ出さなければ、命を落とすことなどなかつたはずであつた。そして、昌文君はそれを受け入れはしたが、割り切れぬ想いも同時に抱えてきていた。その荷物が実は必要のないモノであつたことに「そうか。そうか……………」と彼が生存している喜びに言葉をこぼした。

気を取り直した昌文君は李豹について気になつたことを尋ねた。

「このことは政様や信には教えているのか」

「そのことなのですが、実は一度蛇甘平原で信とは顔を合わせたのです。もちろん李豹には面で顔を隠させてはいたのですが……………」

昌文君は言葉を止めた朱錐に何となくだが事情を察して、少しやれやれとした表情をした。

「まったく、あの馬鹿は」

そこには呆れながらもどこか情を感じさせる昌文君の姿があった。

「政様とは相応しい場所でお会いしたいと申し出を受けています」

「相分かった。そのように取り繕うとしよう」

「ありがとうございます。ところで蚩尤と名乗ったあの少女はどのような措置を」

「蚩尤か。先ほどの政様の態度から察するにお咎めはなしといった所であろう。なにか気になることがあるのか」

「少し話を聞いてみたいと思ひまして」

「ふむ。此度の功もある。儂の方から内密に大王様に掛け合つてみよう」

しかし、羌？は夜のうちに姿を消してしまふ。

こうして、秦国王政を狙った騒動は終結した。同時に捕虜となった刺客から騒動の首謀者の名が挙がると、この戦いが序章でしか過ぎないことを大王政を含め、その側近中の側近である昌文君一派は知るのであった。

朱錐の過去 1

「一度矛を置いて出直してきなさい」

朱錐は昌文君が文官としての道を歩む決断をしたことで、副官の任を解かれて王騎の下へ送り出された。けれど、王騎は今の迷いを抱えたままの朱錐では、すぐに死ぬだけだと任には付かせなかった。

朱錐は、その言に従って鬼の面を外すと、軍務から完全に離れて一人、旅を始めた。「といつても、行く当てがあるわけでもない。一度この国を巡ってみるのもいいかもしれない」

ふと口にした言葉に沿うように、時に人の往来が盛んな街道を通り、時に人の気配がそぼろな獣道を歩き、時に踏み入る人など皆無であろう辺境を探索した。

往来のある街道は、多くの商人や作物を運ぶ荷車が所狭しと目的地に向けて走り、明るい話題が胸に染みだした。翻って人の気配がそぼろな獣道では、民草の暖かさを踏みにじる輩との遭遇に心を痛めた。そして、踏み入る人がいない辺境には、心打たれる自然の営みに人の小ささを知った。

そして、今は、灯りを頼りに近づいた集落にて、民草の暖かさを踏みにじる輩、野盗

と対峙していた。

山間にある小さな集落を襲った野盗は、住民を皆殺しにするとそこで酒宴を開いて、戦利品を誇らしげに掲げていた。

「素直に出すもんをださねえから、こいつらは殺した」

十人程度を従えた野盗の頭は、集落の住民が必死にためていたであろう食料をむさぼりながら吐き捨てた。

「……………そうか」

「こんなところに何しにきたかは知らねえが、俺様は今、気分がいい。持つてるもんを全部おいていけば命だけは助けてやる」

「奪うことにためらいはないのか」

「あん？この俺と問答でもしようってのか。ハンっ いいだろう。答えてやる。答えは、ない。だ。強い奴が弱い奴から奪い取る。どこでもやってんだだろうが。国から奪われるか、俺様から奪われるかの違いだけだろうが」

「少なくとも国は民を守っている」

「馬鹿かてめえ。そういうのは、ちゃんとした野郎がいる所だけに決まってんだだろうが。現に俺達はそういうやつらから奪われたんだよ。……………ツチ 他所者になに話してんだ俺は」

「誰にだ」

「誰じゃねえんだよ。御貴族様に役人どもの気分一つで俺達みたいなのが生まれてるんだよ」

「そうか……。投降するつもりはないか」

「捕まれば縛り首になることくらい知ってる。もういい。この野郎をバラしちまえ」

野盗の頭の言葉で周囲いた男たちは手に持つている錆びた剣や槍、鍬などを持って一斉に朱錐へと襲い掛かった。

「やむを得ない、か」

愛用の棍棒は信頼できる者に預けてあるため、護身用に持ち歩いていた木製の槍で襲い掛かったものを叩き伏せた。朱錐の放った一撃は重く、先頭にいた男が地に埋まるように叩きつけられて動かなくなったことで、彼らは怯みを立ち止まった。一人、野盗の頭のみがその様子を冷静に見つめながら言葉を吐いた。

「ツハ こんな山奥でてめえみたいなの化け物に遭遇するとは、俺の運もつきたようだな」
「投降するなら殺しはしない」

「結果は同じだろうが。おい 孟。お前は餓鬼どもの面倒を見る」

その声に奥の大木の影に隠れていた少年が顔を出すと走り去っていった。

「あの子はなんだ」

「戯れに拾った孤児だ。まさか野盗に育てられた子どもまで殺すとはいわねえよなあ」
「確約はできないな」

「正直なことで。まあだから信用ができるともいうが……。さて、野郎どもこいつを殺さねえと俺たちに明日はねえぞ。おらッ 殺るぞ野郎どもッ」

その言葉に戦意を取り戻した男たちは、再び朱錐へと殺到していく。けれど、数にものを言わせてただ突っ込んでくるだけの農民あがりの野盗に負ける道理もなく全員が叩きのめされた。

「全員あの世送りとは、容赦がないねえ、ああ？この野郎」

「……………」

「難儀なやつだな。縛り首になるくらいなら、一瞬であの世へってか。だが、この俺様はそうはいかないぜ」

野盗の頭は腰に携えていた剣を取りだすと構えた。

「その槍、ただの木製の槍じゃないんだろう。ああ、そうだ冥途の見上げにあんたの名を聞かせてもらっていいか」

「朱錐という」

朱錐はそう言葉を発すると、近くに落ちていた集落の家に飾られていたであろう魔除けの面を手を取った。

「あん？魔よけの面なんかとつてどう……す……」

男はなにかに気付いたように驚き、そして納得したような表情をした。

「お前が秦国の鬼面の朱錐か。あの介子坊と打ち合つて生き残つたつていう」

「ただ打ち合つただけだ。噂になるような話でないに、詳しいな」

「そりやそうだ。俺はもとは趙の人間だからな。糞にちよつと諫言しただけで、家族は皆殺し、運よく……いや悪くか。外にでていた俺は追つ手に追われてこのざまだ。所詮この世には奪うか奪われるかしかないつて悟つたね」

「承知した。もう何も言うまい」

朱錐は魔除けの面で顔を隠して構えた。その瞬間から放たれた威に、野盜の頭から全身の汗が噴き出した。

「やべえなおめえ。だが、行かずとも死ぬなら行くしかないわなああああつ」

覚悟を決めた特攻は己のすべてを込めた上段からの振り下ろしであった。

朱錐は、それを槍の横腹で受け止め、同時に剣を跳ね挙げて体勢を崩すと軀を回転。渾身の力で突きを放つていた。

「がハつ 悪かねえ、な」

朱錐の膂力で突かれた槍は男を貫き、絶命させた。

第23話

大王の暗殺騒動から明けて、数日。大王とそれを支える昌文君の一派と信は本殿の間で今後の動きを模索していた。

「呂丞相の名がでたのだから、我々は断固として追及の声を挙げるべきではあるが………」

「声を挙げてどうなるというのだ。大王様を支える我々と呂氏陣営との差は吹けば飛ぶほどに開いているというのに、逆に叩き返されるのがオチだろうが」

大王の暗殺という禁忌中の禁忌を呂丞相が犯したことは間違いない。けれど、現状の勢力差を正しく理解する彼らは、呂丞相に対して、それを追及することすらできない無力さに苛まれていた。それを理解している昌文君はこの場をまとめるように言葉を発した。

「残念だが、此度の騒動で奴を追い詰めることはできん。大王様もそれは承知されている」

「な、なに言ってるんだよ昌文君のおっさん。証拠は挙がってるんだから捕まえちまえばいいじゃねえか」

信の発言はそのあたりの内情を把握していない故の発言であるが「それができれば苦労はしない」と壁は優しく今の現状を信に告げた。納得がいかない表情をする信だが、壁たちの後ろに座っていた大柄な文官の姿を見つけると「文官のおっさん」と声を掛けた。

「これは信殿。どうしました」

「あんたもあの場にいたんだからよ。こうなんかあんだろ、うまくいくような案がよ」

「ふむ」と大柄な男はいかにも名案がありそうに大きく頷き、間をとると「……………ともつたい付けてもないものはない」とはつきりと告げた。

「つて、ねえのかよっ」

ずっこけそうな姿の信がいたが、その横で壁は聞き覚えのある声に視線を向ける。

「それほどまでに、差があるということだ」

穏やかな表情をした男の姿は、どこから見ても一文官そのものであり、とても壁が知る人物と同一は思えなかった。

「昌文君様。あの方はもしや」

「ん。そうか。壁も知らなかったのか。うむ、想像通りであるが、他言無用とせよ」

その時本殿の間の扉を開くと外から急使が飛び込んできた。それは呂丞相と四柱が揃って大王様に謁見を申し入れたというものであった。さらに、すでに丞相はここに到

着して、こちらに向かっているとのことであった。

本来の手順をすつ飛ばしていることは明らかであるが、両者の明確な力関係の差がこれを不問させた。

本殿の間が開くと呂丞相を支える四柱と側近が、まず姿を見せた。

四柱とは、呂丞相を支える四人の傑物を評したもので、軍総司令の昌平君、剛力無双の豪傑蒙武、法の番人李斯、そして、秦国の外交を一手にまとめる重鎮蔡沢の四人のことである。

四柱と側近が本殿に入ると、最後の呂丞相こと呂不韋が姿を現した。

信は政を暗殺しようとして刺客を使った卑怯者を睨みつけて、さらに文句の一つでもいつてやるつもりだったが、彼らがそれぞれ纏っている空気に、気圧されて声が出せなくなっていた。

呂丞相は膝をつき、ひとまず大王の無事を寿ぐと「刺客を放ったのはこの私、呂不韋である」と声高に宣言した。それに対して、大王である政は「そなたであるはずがない」ときつぱりと否定した。それを受けて「もちろんですとも、大王様。私が責任をもつて首謀者を特定いたします」と完全に白であると大王に認めさせた。

これで、此度の騒動は一応の決着となる。つまりはこれが、呂丞相が「黒を白といえば白になる」を地でいく行いとしても、大王陣営と呂氏陣営のどうすることもできない

力の差と言えた。

その後は、蒙武が六大將軍という制度の復活を上奏したり、蔡沢が場を転がしたりと波乱もあつたが大過なく謁見は終わりを迎えた。

蔡沢は帰り際になって、氣配を消すように大王派の後ろ端に座る大柄な男を見つけて「ヒョツヒョツヒョツ」と愉快気に笑い声をあげた。氣になつた昌平君が「蔡沢様？」と尋ねると「ヒョツヒョツ 昌平君。この場でなにか氣になる者はおつたか」と返した。

「……………一人、手に入れたい駒としてですが、信という若者位でしょうか」

「ふむ。そうかそうか」と頷くと「ヒョツヒョツヒョツ 面白いのお」と笑い声を挙げた。「？」と蔡沢の顔を覗き込んだ昌平君であつたが、問答は終わりだとばかりに蔡沢はさつさと歩き出した。

本殿の間には、あまりにも強大な敵の姿に意氣消沈した大王派の者たちだけが残されていた。

沈黙が支配する本殿の間に置いて、憤るように行動を起こしたのは、他ならぬ大王政であつた。それは内から吹き出る怒りを玉座の側面を激しく蹴りつけることで抑えようとしているかのようにあつた。そんな政を止めた信が「ちよつと外の空氣でも吸いにいこうぜ」と提案すると、政もそんな氣分なのか信を連れて本殿の間から移動した。

残された俯き加減の昌文君一派の者たちのなかで、一人立ち上がった大柄な男は、昌

文君に一つの提案をすると踵を返して本殿の間をあとにした。

大王暗殺という最大の禁忌を犯したにもかかわらず、お咎め一つすることができないほどの力の差を見せつけられた大王派であったが、このことが逆に、彼らの結束を固める機ともなった。はつきりと見えていなかった相手の強さを認識したからこそ、彼らはそこを目指して走りだした。ただ守るのではなく、攻めるために。

そうして、まず行ったことは、此度の騒動をいち早くに予見して手を打っていた元竭氏の片腕肆氏を陣営へと迎え入れることであった。難色を示す者もいたが、政は「過去の遺恨は捨て去り、一丸となつて戦わなければ呂氏には近づくことすらできない」と檄を飛ばして、その者たちの意識を変えさせた。

本殿の間をでた大柄な男は、ふと、王宮広場に降りる階段脇で座り込む少女を見つけ、声を掛けた。

「君はたしか、河了紹だったかな」

「ん？ あつ、あの時の妙に強い文官さん。長いから、オレのことはテンでいいよ」

「ふむ。では私のことはスイとお呼びください。ほら、王宮は色々あるから嗜む程度には、ね。それでテンはどうしました」

「へえスイって言うのか。ていうか鬼強い羌？をぶつ飛ばしといて嗜むってどんだけだよ。はあ……でも、あんなことが起こるんだったら戦えないと身が持たないよなあ、

やっぱり」

「皆が皆、戦えるわけではないですよ。昌文君様は別としてね。それに適材適所つて言葉もあります」

「適材適所かあ。……オレにできるかな。軍師なんて」

「軍師？それはまたすごい言葉が出てきたね。なるのですか？」

「まだわかんない。知り合いがそういう師匠？を紹介してくれるつて」

「紹介ですか。この辺りで軍師といえばあそこでしょうけど……」

「スイはどこか知ってるの？」

「まあ有名ですから。それはいつぐらいに」

「三日後。なにかあるの？」

「私からも紹介状とはいきませんが、うまくいくような書状を書いて渡そうかと。ほら、貸しがあるからね」

「本当っ！じゃ、それで貸し借りなしってことでいいよ」

「それじゃ届けさせるとするよ。書状は蔡沢という人に渡してほしい。いなかったら、すまないけど、使えないから処分してほしい」

「ふーん。そう聞くといまいちな感じするけど、可能性があるならもらつとく」

そうして、三日後。

河了貂は信に軍師になるために、家を出ることを告げた。

家を出て、待ち合わせをしていた羌？と合流するとそこには馬車があり「これに乗れば行ける。それにこれを渡せ」と書状を渡された。

こうして、河了貂は羌？と別れて単身馬車に乗って、向かう場所すらわからずに軍師への道へと舵を切った。

そして、どこかもわからずに馬車に連れられた先には、大層に立派な建物があり、その中には喧々囂々と議論を交わす声が響き渡っていた。扉を開くとなかには数十人の男たちが一対一の対面形式で向かい合い合議論を交わしている姿があった。その一番奥の席には艶のある長い髪をした男を中心に左右に老人と少年が座っていた。

第24話

河了貂は信や政たちともに歩いていくために、羌？からの推薦をもととして、軍師になるべく昌平君が携わる秦国随一の軍師育成機関にきていた。

「なぜ蚩尤ではなく、あなたがここにいるのですか」

まずはじめに口を開いたのは、奥に座っていた三人のうちの一人、蒙毅という少年であつた。

「おれが羌？に頼んだ。それでこれを渡せつて」

河了貂は懐から書状を取りだすと案内についていた者に手渡した。「拝見します」と書状を開くと、独特な字体に首をひねりながらも、「読み上げよ」という昌平君の言葉に従つた。

「天才を送る故軍師に育てよ。その者になにかあれば殺しに行く。その者の名は河了貂也」

およそ推薦状とも紹介状とも呼べぬ内容に、この場にいる軍師を目指す者たちは憤懣やるかたないままに怒りの声を挙げた。が、昌平君は河了貂という名に覚えがあり「蒙毅、隣の部屋をその子に」入寮を許可した。

さらに、河了貂が「あと、蔡沢っていう人いる？」と声をだすと「蔡沢様になんという口の利き方かつ」と怒鳴る者もいたが、当の本人は「童よ、儂に何か用かの」と問うた。河了貂は懐からもう一枚の封書を取り出すと、それを蔡沢に渡すように案内に託した。

「さて、中身はなんであろうかの」

蔡沢は品定めするように中身を改めたと「ヒョツヒョツヒョツ」笑い、昌平君に一言だけ告げた。

「童は大事に扱え。でなければ鬼がきよるわい」

愉快な蔡沢に昌平君は物珍しものを見るように言葉を返した。

「鬼、ですか」

「ああ、ああ、そうじゃ。あれは鬼じゃよ ヒョツヒョツヒョツ」

それ以上は何かを話すような素振りを見せない蔡沢。

「ふむ。蒙毅」

「はい。先生。言われずとも承知しています」

これにて、この場はお開きとなった。一人部屋に戻った昌平君は、先程の蔡沢の言葉の意味を吟味していた。

「蔡沢様があのような申し入れをされることは、珍しい。鬼とは何かの隠語であろうか」

鬼にまつわる何かしらの出来事を思考してしばらく、ふといつ頃からだったか、魔除けとして鬼の面が流通し始めたことに思い至った。

「地方発祥の民間宗教の一つであろうと気にもとめなかった事柄ではあるが、蔡沢様が仰られるくらいならば、なにかあるのか」

その頃、河了貂は、自室となる部屋に案内役となつた蒙毅とともにいた。

「ここが河了貂、君の部屋になる僕の隣の部屋だ。何か聞いておきたいことはあるかな」
河了貂は大人ばかりがいるこの育成機関のなかで、歳の近い蒙毅に少し親近感を持ち始めていた。

「いや、いまはべつになにもない、かな」

「まあなにかあつたら隣にいるから気軽に寄つてくれればいいよ。それじゃ僕の方から一つ。大王側の君がなぜここに？」

蒙毅からは先ほどまでであつた親しみのある表情は消え失せ、河了貂の一挙手一投足を見逃さないとばかりに静かに見据えた。

「!? な、なんでそれをつ」

「僕たちを舐めないでほしい。それくらいは承知の上さ。大王様を逃がした黒卑村の河了貂。それと、今握っている吹き矢なら僕には当たらないからあきらめた方がよい」

河了貂は自身のことがここまでバレていることに、焦りを覚えると、それでも隙あら

ばと吹き矢を強く握りしめた。対して蒙毅はそんな河了貂をここまでじつくりと観察して早々に結論をだした。

「うん。やっぱり君は何も知らずに此処にきてしまったようだね」

と言葉を発すると、張り詰めていた空気を霧散させると「ああ、大丈夫。危害は加えるようなことはないよ」と続けた。

河了貂はその言葉に自分が試されていたことを知った。

「ごめんね。こちらにも事情があるからそこは割り切つてほしい。でも軍師になりたいのなら、ここに来たことは正解だよ。ここはそういう場所としては、秦国一だからね。先生は、先ほど壇上の中心にいた昌平君様で、軍司令でもあられるお方なのだから」

河了貂は「でも、四柱なんだろう」と中央にいた整った顔立ちで艶のある長い髪した偉丈夫を思い浮かべた。

「先生は確かに呂丞相の四柱であらせられるが、ここはそういった公務とは完全に別。純粹に軍師を目指すものたちの集まりさ。さて、そろそろいいかな。河了貂。僕の新しい兄弟弟子。いや妹弟子かな」

「なっ!」

「仕草を見れば分かるさ。そうだ。最後に一つ聴きたいんだけど、蔡沢様に渡した封書はだれからもらったのかな。ああ、無理には言わないよ」

「……………、文官のスイって人から」

蒙毅は「文官のスイ？」と河了貂からでたスイなる人物を脳内で探してはみたものの、該当する文官はいなかった。「まあ、おいおいでいいか」と中断すると声を掛けた。

「ようこそ昌平君の軍師学校へ。河了貂。僕は蒙毅という。よろしくね」

ところ変わって、王騎が治める城塞都市。その中、大浴場では、王騎を含めた王騎軍中の者たちとともに、湯船につかる信と壁より信との連絡係として遣わされた淵のすがたであった。

「ココココ いきなりきて、この私に修行を付けてほしいだなんて浅慮がすぎますよ童信」

王騎は、信を見据えるとやんわりと否と回答した。

「そうだ。失せろガキが。將軍は貴様の相手をするほどお暇ではないのだ。それに昌文君がいるだろうが、お前には昌文君がよお」

と録鳴未が何考えてんだこのガキはとばかりに捲し立てた。

「昌文君のおっさんじゃだめだ。俺は天下の大將軍に稽古をつけてほしいんだ」

「……………」

たかだが百人将に上がっただけの十四、五の少年が、ちよこつと話したことがあるだ

けの天下の大將軍の居城にまで上がり込んで、稽古をつけてほしいと言いつ傍若無人ぷりに、一同が唾然するのも無理はなかった。

当然正氣に戻った王騎軍中の者は「駄々こねてんじゃねえ」「調子に乗つてじゃねえぞ」「失せろ餓鬼が」と騒がしくなった。

「おバカは一度死なないと治らないようですねえ。いいでしょう。支度したら午後から私についてきなさい」

宣言通りに王騎は、午後になると信たちを連れてとある場所へとむかっていた。

「そういえば、李豹つてやつがいなかったけど、どこにいるんだ」

「李豹なら朱錐さんのもつで指揮を学んでいる頃でしょうかね。ねえ騰」

「ハツ 光るものがありますので、磨けばよい指揮官になれるでしょう」

「ツチ 俺だつて学んで一氣に將軍になつてやるぜ」

王騎は「ココココ」と笑つと「まったく、威勢だけは將軍級ですね」と言葉をつく。すると「ハツ 威勢だけは大將軍級です」と騰は続けた。

そうこうするうちに目的地に着くと、王騎は信にその覚悟を問うた。それに対して信は「どんな過酷な修行でも乗り越えてみせる」と意気込みを語つて見せた。その言葉を聞いた王騎は「そうですか」理解したと頷くと、横のそびえていた崖から信を蹴り落とした。当たり前だが、下が地面なら即死であろうが、ちようど川の浸水の深いところに

落ちたことで大怪我を免れていた。信と一緒にきていた淵は王騎に抗議するが、「今、童信が立っている場所こそが修行の地である」と告げた。

そこは、戦乱の続く中華の中で逃げる場所を失ったものたちが集まり、狭い覇権を狙って争い続けている超小国家群が割拠している地であった。

「中華最強の大將軍を目指すのなら、まずはこの地を平定してみせよ」

王騎流の過酷な修行はこうしてはじまりを告げた。信はここで費やした時間の分だけ、少数による戦い方を学ぶのであった。

時を同じくして、朱錐隊では元いた二千の兵に加えて、さらに千名を新たに募り、その訓練に勤しんでいた。

「ここにきてさらに増員せよとは、穏やかではないな」

「ああ そうだな。戦の気配があるのしれないな」

第6軍長朱錐と副官虎豹は練兵の風景を眺めながら、先のことを考えていた。

「新しく加わった千名に関して李豹と玄象に任せてよかったのか」

「大將軍になるといふのだ。李豹にはそれくらいはやってもらわないとな。玄象に関しては申し入れがあったので補佐に付けることにした。まあ濯と洪が脇を固めているから問題はないだろう」

「それなら安心だな。ところで馮はどうしたんだ」

「馮には、前回の募兵で集まった攻を司る九百名に戦の術を叩きこませているところになる。残りの者たちには私がこれから守を叩きこむ予定をしている」

馮、濯、洪はそれぞれ、朱錐と同じく元昌文君隊の烈士で戦歴も長く、戦を良く知る者たちである。

「朱錐が叩きこむのか……」

虎豹は、朱錐が行う守の訓練を浮かべて、苦笑いをした。文字通り、朱錐が叩き込むのだから、盾を持った人が空を飛ぶ光景が拡がることだろう。

「虎豹には全体の指揮をお願いしたい。精兵五百を使って全体の訓練の底上げを図ってもらいたい」

こうして、朱錐隊は三千人の部隊となった。

大まかな内訳としては、主に攻を司る者が千五百、どちらもこなせる者が千、守を司るものが五百となった。

李豹と玄象

「よし。いいぞ。このまま走り続けるぞ」

李豹は新たに加わった千名とともに基礎体力を底上げする訓練に参加して士気を高く保っていた。

最初こそは、戦で名を挙げたいという気概のある者たちから、？の面を被っているとはいえども、体格からして年若い者であると察しがついたこともあり、李豹が上官であることに不満を口にしていた。けれど、李豹は彼らと同じ訓練を受けることで能力を示し、その人柄によって彼らの心を掴んでいく。一か月も経つと彼らは李豹を完全に上官として信頼を寄せるようになっていた。そして訓練にこそ参加はしていないが、李豹のとなりに、いつも玄象という凛とした美しさを持つ紅一点が寄り添っていた。二人の関係は定かではないが、麗しい少女を侍らせる李豹に「俺だつてやってやる」と奮起した者たちもいた。彼らは、李豹という存在に後押しされるように、訓練に身が入っていき、成長は目を見張るものがあった。

こうして李豹は、通常ならば三か月は要する訓練課程を二か月に短縮させることに成功した。

「この功をもって李豹を百人の将とする」

「ハッ 謹んで拜命いたします」

「そう改まる必要はない。形式的なものになる」

疑似的な任命式には、軍長朱錐をはじめとして、第6軍の主要な者たちが揃っていた。ちなみにだが、こういった主要な者たちの前では、李豹は？（ヤオ）を模した面を外して素顔をさらしている。

「おめでとう。李豹。少しだが精悍になってきているな」

声を掛けた副官虎豹は、少年らしい顔立ちの中にある相応の覚悟をみてとっていた。様になってきている。これからも精進しろよ」「その通りここからだ」

次に声を出したのは、李豹とともに新兵の育成に携わっていた濯と洪。

「精進します。これからもご指導のほどよろしく願います」

深々と礼をした李豹に最後に声を掛けたのは玄象であった。

「剣なら任せて」

「玄象もありがとう」

「うん」

そのまま少しの間視線で会話をするように見つめ合う二人に「ゴホンっ」とわざとらしく咳払いをした馮は「私たちはこれで」と濯と洪をつれて部屋をあとにした。

「ふむ。玄象からみて、李豹の剣の腕はどうだろうか」

「李豹は優秀だよ。私の剣にも徐々にだけどついてきている」

玄象は李豹をそう評すると優し気に見つめた。

「そうか。では、李豹からみて、玄象の剣はどうだ」

「そうですね。あの舞うような剣技は強く美しいと思います。ですが、同時に怖く感じることがあります」

李豹は、玄象が時折みせる陶醉するような、ここではないどこかへ行ってしまうような感覚を恐ろしく感じていた。

「あれでも全力には程遠いんだけどね」

「それでもいつかは、象に勝ってみせます」

「フフ それは楽しみにしておく。豹」

朱錐には、二人の関係は良好なように思われた。その時肩を叩かれた朱錐が振り返ると、もう片方の手で手招きしている虎豹がいた。朱錐はそれ従うように「少し外す」と奥の部屋へと移動した。

朱錐が「どうかしたのか」と問うと虎豹は、奥の部屋から李豹たちのほうを見るように促した。

「ほら、見てみる」

そこには、李豹の顔に「傷……………」残ってしまったな」優しく触れる玄象の姿あった。いつもの凜とした表情だけではなくたしかな柔らかさがそこにはあった。李豹は少し照れたように「気にしなくていい」と玄象の手にそつと触れるとそつぽを向いた。

「いい感じに見えるか。あの二人」

虎豹は初々しい二人の姿に、どこか嬉しそうにしている。

「嬉しそうですね」

「ああ。ちよつとな。李豹なら問題はないとはおもうけど、これから期待しよう」

「ところで、腕はなんとかかなりそうなのか」

「ああ、玄象曰くズタズタになっていたものを紡ぎ合わせる感覚らしくてな。どこまで治るかはわからないそうだ。まあそれでも、まともに剣を振れる程度には回復したよ」

虎豹は佩いていた剣を抜き放つと天に掲げた。

「……………あの時は、すまなかつたな」

「いえ。私の方こそ余計な一言でした」

「そういうな 朱錐」と言葉とともに掲げた剣を振り下ろす。振り下ろされた剣は、地面に落下することもなく虎豹の手の中に納まったままであった。

「將軍だった時ほどじゃないけど、もう多少のことでは落とすことはないよ。それに、私の中にあつたモノがはつきりと視えたんだ。朱錐が気にすることじゃない」

あの日溢れた雫は、キョウの中に抑え込まれていた摺の願いに届き、呼び覚ましていた。

「龐煖のことを忘れた日はない。けれど、それは私が弱かったからだ。あの時朱錐が駆けつけていなければ、私はこの世にいなかった。それに、大將軍として私たちが他国にしてきたことに比べれば、斬られた恨みは、些細なものに過ぎないよ。私は助かった。それでいいじゃないか。そうだろう 朱錐」

そうして、朱錐はしばしの沈黙のあと「はい」とこぼしてから、なにかを思案するようになり、さらに言葉を発した。

「武神とはなんなのでしようね」

「さあな。今度あったときにでも訊いてみたらどうだ」

「それだと私死んでますよね」

朱錐は、龐煖は王騎に斬られたあと矢の雨に降られて死んだと聞いていた。

「アハハハ そうだね。でも例えばあの世であつたとしたら、お返しくらいはしてやるんだろう」

「それはまあ。なんせ斬られましたから、一撃くらい受けてもらつて御釣りがくるはずですよ」

「そうだな。しっかりと打ち込んでやれ。例え武神と言えども、骨身に染みるだろうさ」

そんな他愛のない会話を二人がしていると、いつから聴いていたのか隣の部屋にいた玄象がそれに加わった。

「武神っていうやつなら、私も聴いたことがある。うちのお婆が言ってただけけど、元は求道者で、名の通りなんだけど、神を躰に宿す者なんだってさ」

玄象の言葉に虎豹は少し思考したあと「神ねえ」とこぼしたした後、自身の考えを口にした。

「神を宿す、か。あの強さはおよそ尋常な者ではなかったが、剣で斬れば血が流れ、突き立てれば躰を穿つことができたんだ。私からしたら、どこまでも強いただの人間だったけどね」

「そうなの？ 私はお婆から聴いただけで実物なんて見たことないから、なんともいえないな」

朱錐からみた龐煖と名乗った侵入者の強さは、およそ人の域が及ぶものではなかった。

「武神と言えど、ただの人か。それでも大將軍の精銳二千を相手に易々と斬り進むのだから、十分に人外の所業……」

けれど、現実には王騎様によって斬られて倒れ伏した。

朱錐はこの何気のない会話の中で「武神といえどもただの人でしかない」となにかが

腑に落ちた気がした。

だれもが誰かに憧れて、何者かになりたいと願う。特別な人間などこの世には存在していない。ただ特別であろうと努力し続けた者が何者かになっていくだけだ。もしこの世に武神というものが存在しているとしたら、それはただ才能を持つてうまれた誰かが修練を続けた結果に過ぎないのではないかと。

「あの強さもまた人である証か」

朱錐のふとした呟きに虎豹は「ん。どうかしたのか 朱錐」と声を掛けた。

「いや、なんでもない。少し武神いうものを大きく見過ぎていたようだとも思つてな」

「あれはどこまでも人だ。尋常じゃない強さを持つていても人であることに変わりはない。神なんてご大層なものじゃないよ」

「私もお婆から聞いたときは恐ろしい存在だつて気がしてたけど、そう考えると恐ろしく強い人なだけなのかもしれないって思う」

「そうなのかもしれないな」

第25話

始皇三年（紀元前244年）二月。

秦は丞相呂不韋の号令の下、二十万の大軍勢を興すと隣国韓へと出陣させた。

秦国軍総大将には、白老と諸国に名高い蒙？大將軍。副将は、蒙？麾下の王翦と桓騎の二将が付いた。

蒙？は初戦となった韓の高祐（コウウ）を陥落させると、そこからは破竹の勢いで韓への侵攻が続いた。また副将として第二軍、第三軍を率いていた王翦、桓騎も足並みを揃えるように隣接する城を落としていった。

この蒙？大將軍の破竹の快進撃は秦国を大いに賑わしていた。そして、当初目標としていた安方（アンホウ）を攻略する頃には、活気づく国内に後押しされる形で更なる韓への侵攻計画が練られていた。

「この勢いを止める理由はあるまい。そなたはどうだ昌平君」

「いささか深く入りすぎることになります。他国はともかく、楚に対してだけは、張唐殿を南の要所に置くことを条件に」

「楚か。ふむ、許す。そなたに任せる」

その後も秦の進撃は止まることはなく、韓の領土を切り取っていった。他方その頃。

河了貂は拵げられた戦略地図の一角を見据えたと言葉を発した。

「ねえ蒙毅。これって深入りしすぎじゃないの」

「たしかにね。今は韓に侵攻しているけれど、秦は楚と魏と趙の三国に隣接してる。秦から大軍勢が出払っている今この三国から攻められる可能性がないわけじゃない」

蒙毅は局地的に視れば河了貂の言は正しいと肯定した。

「でもね、今現在ほかの三国は簡単に動くことはできないんだ。まず楚に関しては元々南虎罌という厚い防護壁を築いて侵攻を妨げている。そのうえ、先生の計らいで張唐殿が守備長に付かれているから問題は起きないだろう。次に魏についてだけど、先の大戦で活躍した？公將軍が今も前線で目を光らせているから、こちらも問題ない。あと、趙に関してだけど、河了貂は、三大天というのは知っているかい」

「秦の六大將軍のときに趙で活躍していた三人の大将軍のことでしょう。話ぐらいは知ってる」

「その通りだね。趙の三大天には、藺相如（リンシヨウジヨ）、廉頗（レンパ）、趙奢（チヨウシヤ）の三人が付いてただけで、彼らはすでに死去、或いは罷免されて他国に身を寄せている。それがどういことがわかるかい」

蒙毅はあえて答えをいうのではなく、河了貂に問うことで理解を深めさせようとしていた。

「大軍を率いて戦える人がいないってことでしょう」

「そうだね。平凡な将に大軍を任せることができないわけじゃない。けれど、それはいたずらに自国の兵を失う愚策になるだろう。大將軍は、まさに国を背負って戦える傑物じゃなければいけない、これをまず理解してほしい。もし、彼らの内だれか一人だけでも健在ならば、この遠征は当初の戦略目的となった安方で止まっていただろう。長くなったけれど、そういうわけで、趙もまた動くことができないんだ」

蒙毅が語った通り、現在の趙中樞には、他国の向けて侵攻させることのできる大將軍の存在は皆無であった。そう中樞には……………。

それは、蒙? 大將軍の快進撃に湧いていた秦國中樞に届いた一報により幕を開けた。

「急報ッ。急報であります。趙が、趙が、馬央へと侵攻した模様です!!」

この報せは秦國中樞に衝撃を与えることになった。というのも秦は今まさに動かせる精兵たちをすべて韓への侵攻作戦に投入していたからだ。さらに悪い報せは続き趙は十万を超える大軍で攻め入っていた。

「……………まずい」

だれが口にしたものかはわからない眩きであったが、ここにいる高官たちの共通認識

であつた。

「いまや、中央を守る兵すらおぼつかないのに、援軍など出せるはずもない」

それは、韓への侵攻作戦がうまく行き過ぎた代償でもあつた。だれもが對抗策をすぐには見いだせないまま沈黙が続くと思われたが、大王_□政はその中で、効果的であろう手段を口にした。

「緊急徴兵令を発して十万の軍を興せ」

というものであつた。熟達した兵が数少ない今にできる、苦肉の策であつた。

けれど、すでに侵攻している趙に対して、いまから軍を興して對抗するということは、馬央に援軍を送ることはできないことを意味していた。馬央は陥落とともに、非戦闘員である女、子どもを含めたすべての秦人が皆殺しの憂き目にあうことになつた。

基本として、侵攻作戦とは、敵国の城を占領、略奪まではするが、非戦闘員を殲滅することはしない。なぜなら、女性や子どもまで殲滅すれば、敵国はどれほど劣勢に立たされようとも降伏するという選択肢を取ることがなくなるからだ。当たり前の話になるが、降伏しても殺されるのであれば、兵は最後まで抵抗するだろう。それは、攻める側にとつては損耗を激しくする要因であり、本来は避けるべきことである。

けれど、趙はそれを実際に馬央で行つた。

趙がこの定石を無視した行いに至つたのにもわけがあつた。それは、趙と秦の間で起

きた「長平の戦い」に起因していた。

趙は廉頗大將軍を秦は白起大將軍を総大将として始まったこの戦いは、実に二年もの月日に渡って続くも、決着することはなかった。

さきに痺れを切らした趙王は、総大将を名将廉頗から血氣盛んな趙括へと交代したことから戦いは突如として終幕をむかえることになる。趙括はこのまま膠着状態が続くように見せかけた所で奇襲部隊を率いて白起を討つ作戦をとった。けれど、王騎の待ち伏せにあつてあえなく戦死する。

二年に渡ったこの戦いは、趙側にも相応の負担を強いたこともあり、総大将の戦死がもたらした士気の低下は戦の継続を諦めざる負えないものとなる。

秦は、こうして数十万と言われる捕虜を抱えることになった。が、ここで、白起は果断な選択する。それが、数十万に渡る捕虜の生き埋めである。

この白起の判断は、秦と趙の間に決して埋めるができない大きな溝をつくることになった。そしてそれは、そのまま趙が秦人に対して持つ恨みであり、憎悪であった。

補足になるが、白起のこの選択は、秦の大將軍として趙国を滅ぼすためには、必要な過程であるとの判断であったという。

こうして、秦の本営が十万の軍を興すために奔走している頃、戦の報せは朱錐のもとにも届いた。

「隣り合うだけあつて趙とはなにかと因縁深いな」

「そうだが、同時に当時の三大天は皆いなくなっているのは僥倖かな」

朱錐と虎豹は互いに戦歴が長いこともあり、趙とは幾度となく戦場でぶつかりあつていた。

「王騎様がどうお考えかはわからないが、韓に二十万人が出兵している今、我々も出陣となる可能性は高いだろう」

「趙、か。長平のこともある。負けるわけにはいかないぞ」

「ひとまずは、主要な者を招集して、兵たちに心構えをさせておきたい。皆を呼んでほしい」

趙との激突は、すぐそこまで迫っていた。

馬陽攻防戦

第26話

「追つてきましたねえ 趙軍は。随分とやる気なご様子で結構なことです」

始皇三年。三月。

同年二月虎狼之國と呼ばれる秦による韓侵攻作戦から一月が過ぎようとしていた。秦は順調に韓の領土を占領、当初の目標地安方を通過点へと変えてより韓の奥深くまでその牙を伸ばしていた。

だが、戦勝に湧く秦中枢に一つの報告がなされたことで、事態は動き出した。

それは、対趙の前線都市となる馬央陥落の報せであった。

趙による十万人規模の侵攻により馬央は陥落。さらには、姉妹都市と位置づけられている馬陽にもすでに敵の手が伸びているというものであった。

この報せは戦勝に浸っていた秦中枢を大いに慌てさせることになった。

秦はすでに隣国韓の奥深くまで二十万の大軍勢を侵攻させていたことで、国内の守りは手薄となっていた。それでも、韓侵攻を深めさせたのは、趙が動くことはない和高をくくっていた首脳陣の失態であった。

それでも秦国本営は、緊急徴兵令を発して近隣から十万の兵を集めて馬陽へと派遣した。そして、昌平君からの打診を受けた王騎は総大将となり、此度の防衛線の指揮官に就任。副将には蒙武將軍が付くことになった。

六大將軍最後の一人である王騎が総大将として前線に復帰したという報せは、列国に衝撃を与えた。

馬陽の地に着いた王騎は、城を包囲する趙軍とそのまま開戦せずに、乾原（カンゲン）に陣を敷いた。趙軍は秦軍の動き確認すると、城攻めの最中に後方から攻撃されることを避けるために、到着した秦軍を追い払うために乾原へと移動していた。

その頃、乾原の地から少し離れた高台にも、蒙毅や河了貂といった軍師候補生数人が実戦を見るために訪れていた。

「蒙毅、ここからだ、さすがに遠いね。これじゃ旗の文字くらいしかみえないや」

「目が良いんだね河了貂は。距離は仕方がないさ。安全に戦いを見るためにはこれぐらいは離れている必要があるからね」

河了貂と蒙毅がそういった会話を始めた頃には、両軍の配置がほぼ定まりはじめていた。

「河了貂、趙は大隊が五つで間違いないかな」

「五つに分かれてるからそれは間違いないよ」

二人の会話に加わわるように軍師候補生たちは各々見解を述べた。

「そうなる」と趙は最低でも五人の將軍が来ていることになるな」

「うむ。兵数でも趙十二万に対して秦十万といった所だ。將軍にしても王騎將軍と蒙武將軍の二人だけ、將の数においても負けているな」

「いえ、そうでもないようです。王騎大將軍の側近たちは皆將軍級の実力の持ち主であると先生から聞いたことがあります。ですから將の数が劣っているとは思いません」
蒙毅の言にそういうことならば、納得を見せる面々。

「軍長つていうだろ。確か第一から第五まであるつて」

河了貂の言葉に一つの噂を聞きかじっていた候補生の一人が口を開いた。

「ん、儂は最近になって第六軍が創設されたという話を聞いたぞ」

「そうなのですか。ふむ、ですが……………」

と再び戦場に目を向ける蒙毅たちであったが、本陣を除いて展開している部隊は副將の軍を加えて六つの大隊しかなかった。

「新設されたばかりという情報が正しければ、どこかの大隊の組み込まれているのかも
しれませんね」

両軍が配置を完了したことで、両国の狙いは鮮明となった。

趙中央四万に対して、秦は中央に副將蒙武兵二万、第一軍録鳴未兵二万の計四万を主

攻として軍を編成。

趙左翼六万の敵主攻に対しては、秦右翼にそれぞれ第二、第三、第五軍として隆国兵二万、鱗坊兵一万、同金兵一万の計四万を配置。

趙右翼二万には、秦左翼に第四軍干央兵一万が付いた。

開戦に向けて両国の緊張が最高潮を迎えようとしていた。

「先鋒隊前へ」

先鋒を務める蒙武は、猛りを抑えるように静かにされど力強く声に言葉をのせた。

「ただ俺に付いてこい」

蒙武は息をのむ兵たちの気配を一拍、感じ取る。そして、握った右手を掲げて宣言した。

「突撃だっ」

「うおおおおおおお」

兵は大地を揺るがす咆哮を発したまま先頭を駆ける蒙武を目指して突撃を開始した。

対して趙軍は、重装騎兵の衝撃力を用いて蒙武の突撃を潰す目論見にでていた。が、蒙武はこれを歯牙にかけずに突破。勢いそのままに、趙中央軍に突撃を敢行した。

蒙武が重装騎兵を突破した頃、趙主攻である左翼三将の一人涉孟（シヨウモウ）もまた、秦第二軍の前線を突破するとその躰に喰らいついた。

戦場は両先鋒の勢いに乗せられるように激しさを増していった。

王騎は、両先鋒の力をその目で確かめると本陣を離れて、秦左翼に馬を走らせていた。「騰、ここは任せました」「ハッ 手筈通りに事を進めます」

左翼第四軍に所属していた壁は、戦場中央を遮りるように凹凸の激しい地形と分布する木々を見据えながら、焦るように言葉を発していた。

「この険しい地形を壁として機能させて、残りは中央の主攻に加わるほうが良いのではないのか」

その壁の言葉を拾う者がいた。

「ソフソフ 主攻はここ。左翼ですよ」

「お、王騎將軍」

王騎が突然姿を現したことに気づいた兵たちは、それに驚き、大將軍という存在自体が大いに士気を鼓舞させた。壁は兵の熱気に当てられながらも冷静に先ほどの言葉の真意を問うた。

「左翼は地形に阻まれて、とてもではないが敵本陣に攻め入れるとは思えません」

「ソフソフ 誰かさんを思い浮かべさせるせつかちさですねえ。壁千人将は」

王騎は壁の言葉に「ココココ」と独特の笑い声をだすと諭すように語りはじめた。

「初日から敵中央の首を獲ろうとするならば、前もって策を施しておく必要があります。」

もちろん、この戦いにそのような時間は存在しなかったわけですから、土台無理な話。さて、兵の質に数の差もあるこの戦いでも、有用な戦法が一つあります。それは、敵の有用な駒を先に削ることです。そのために……」

第四軍を指揮する干央は王騎を真意を汲むと言葉を発した。

「お任せください。死闘は私の最も得意とするところです」

「苛烈な戦いとなるでしょうが、頼みましたよ」

会話をおえた干央は配置戻っていく。壁は王騎の言葉の意味を知るために「駒、駒？　そうか、駒か」と口だしながら自隊に戻った。

王騎は干央の突撃を見届けると、中央に向けて馬を走らせた。

「俺達は何をしたらいんだ　王騎將軍」

「ソフフ　良い心構えです。童信」

王騎は信たちを特殊百人隊として独立した隊として選別していた。その信たちに敵右翼の將馮忌を「どさくさにまぎれて側面から討ち取れ」と指令をだした。王騎は信が任務を理解した上で、引き受けたことの褒美として、信が隊長の特殊百人隊に「飛信隊」という名を贈った。

一方、趙総大将代理趙莊は秦左翼一万が趙右翼二万に対してやみくもに突撃してきたことこの狙いを読めずにいた。

「馬鹿な。王騎が数の差を理解していないわけがない。まさか血迷ったのか」

趙荘は言葉を口にしながらも、現状は右翼の將馮忌の判断に任せることにした。

王騎は信たち飛信隊に指令を発したあと、本陣に帰還していた。

「戦況はどのようになっていきますか」

「ハッ 中央の蒙武は敵中央の將李白の斜陣に勢いが削がれています。右翼は、大分押し込まれています。趙將涉孟の猛攻をさきほど一旦耐えたのですが、すでに第二軍の半ば辺りまで崩壊。そのためか後退が見られます」

「ふむ。蒙武さんのお相手は守備に名高い李白ですか……。もう少し様子を見てみましょうか。第二軍の方は、確かに後退が見られますねえ」

王騎は、本陣を敷いた丘の上から先ほど受けた第二軍の戦況を見定めると声を掛けた。

「確か朱錐さんは第二軍でしたね。騰」 「ハッ 間違いありません」

王騎は騰の言葉に「ソフソフ」と含むように笑うと、面白いものがみれそうですと言葉を発した。

その頃、朱錐は指示を飛ばしながら、趙將涉孟の猛攻を後退しながら凌いでいた。「李豹。そのまま無理をさせずにゆっくりと後退させよ」

李豹は朱錐の指示のもと盾を構えた朱錐隊の面々に声を掛けた。

「慌てる必要はない。訓練を思い出せばいい。乱れず少しずつ後退するぞ」

朱錐隊は、渉孟と中盤で一当たりして、脚を止めさせたあとは、押し込まれるように後退を続けていた。

そのため第二軍は半ばを越えて後方に差し掛かるように扱られる形で、第二軍の將隆国の本隊にまで迫られていた。

「頃合いか。前列を交代させる。李豹」

「ハ 前列を交代。弩兵は援護に入る。盾。構え 射ッ」

盾兵は盾を一斉に斜に構えて斜線を拓くと後列に布陣していた弩兵が一斉に攻撃。

「盾兵、弩兵下がれ。重装盾、前へ」

趙兵が弩に射られて怯んだ隙に前列を重装盾隊と交代した。

「隆国に伝令………は、必要なさそうだな」

渉孟は思い描くように進撃できていないことに鬱憤といら立ちを重ねていた。

「突撃で前線を突破するところまでははうまくいったね………あの盾隊が忌々しいね」

初撃となった突撃で秦前線を粉微塵に粉碎した渉孟は、勢いそのままに中層を喰い破るつもりであったが、突如現れた盾隊を前に急減速する羽目になっていた。それでも渉孟自らが先頭に立って武勇を示せば敵を後退させることができていた。もちろん秦にしてもそれは承知の上であり、渉孟に攻撃を集中させることで突破する力を削いで勢い

を抑え込んでいた。

「もどかしいね。ん、正面から弩兵よ。守るね」

涉孟は前線の異変にいち早く指示を飛ばしたが斉射された弩に多くの趙兵が倒れた。忌々しさに「ツチ」と舌を打つ間に、敵前列が入れ変わる姿を目の当たりにしていた。

「重装の盾隊とは山猿が考えそうな手ね。そんなちなけな盾でこの私を止められるはずがないねッ」

涉孟は敵の狙いが自身の足止めだと看破すると敢えて敵の狙いに乗ったうえで、重装盾目掛けて突撃に入った。

「山猿はさつさと死んで山に帰るといいねッ」

己こそ中華最強であるという自負のもとに特徴的な弧を描いた矛を薙ぎ払った。高く響く金属音は確かに一撃がはいったことを認識させた。

「なッ」

隊列ごと薙ぎ払う目論見で振るった矛は、隊列乱すには至らずに揺らぐ程度で崩れることはなかった。

「ツク」と涉孟は信じられない面持ちで、二撃目を全力で振るう。が結果は変わらない。と同時に「し、涉孟様。左右後方より敵騎馬隊がこちらに向かって突撃しています」

「数は」

「左右ともに千騎程度かと思われれます。深入りした我らを後方と分断する狙いかと愚考いたします」

涉孟は、その報告に思考を始めていた。

山猿の中腹までは喰い破ったね。勢いのままに将まで獲りたかったけど、前後で分断されるのはよくないね。ここは一旦立て直しを図ったほうが得策ね。

「一旦退くよ。皆、付いてくるね」

涉孟は踵を返すと一直線に駆けだした。

その頃、第二軍の両端に事前に配置されていた馮と濯は、隆国の合図を受けて、中央に入り込んだ趙将涉孟を討ち取るべく突撃を開始していた。この両端からの騎馬による突撃は、趙兵にとっては後方寄りからの奇襲となる上に、両側からの挟撃の様相を呈していたこと、さらに、涉孟が秦第二軍の中層まで入り込んでいたことで、軍としての機能が発揮されないままに討ち取られていた。

「このまま趙将涉孟を討ち取るぞ」

奇しくも、両端を率いた馮、濯は同じ号令のもとに士気を向上させた。また、両者は同時にこちらに向かって馬を駆る涉孟を発見すると、躊躇うことなく左右から襲い掛かった。が

「ぬうッ なんとという力か」

左右からほぼ同時に襲い掛かった馮と濯であったが、涉孟の一闪に馬ごと弾き飛ばされた。

「その程度でこの私が討ち取れると勘違いしてきたあるか。山猿の分際で身の程をわきまえるといいねッ」

これまでの鬱憤を晴らすように怒号を吐いた涉孟に馮は「討ち取るのは俺たちではないわ」と涉孟の後ろに視線を向けた。

涉孟は先程の突撃までの流れが己の脚をここに止めることであつたことに気付くと後ろを振り返った。

「死んでもらうぞ」

そこには、虎の面を被つた將の姿があつた。

「お前何者ね。わたしは王騎を殺して六將の伝説に終止符を打つ涉孟よッ」

「王騎様を討つだど？ 涉孟。貴様には無理だ。この私を討つことすら、なあッ」

両者は同時に駆けだし、交錯。勝負は一瞬して決した。

「ば、か、な」

己の躰が倒れる姿を眺める不思議な光景を最後に、涉孟はこの世を去つた。

「貴様程度では、王騎様に触れることすらできはしない」

虎豹は涉孟の右上段からの振り下ろしを抜き放つた劍の腹で受け流がして懐に入る

と首を目掛けて一閃。渉孟の首を刎ねていた。

「趙將渉孟の首。第六軍副官虎豹が討ち取ったぞおおおおお」

と馮は渉孟の首を矛で刺して掲げた。

「うおおおおおおお」

雄たけびが響き渡る中、正気を取り戻した渉孟の側近たちが「渉孟の仇を討て」と動きだした。が

「姉さんには触れさせない」

玄象はどこからか姿を見せると虎豹に群がろうとした側近の悉く斬り払った。

戦場の異変は秦右翼だけではなく、左翼でも同時に起こっていた。

王騎の檄を受けた秦左翼の軍は、士気の高揚そのままに、趙右翼二万に突撃していた。序盤は士気の高い歩兵の力に引かれる形で秦軍は猛攻を見せた。それは、左翼軍所属となっていた壁も同じであった。剣から矛へと武器を変更したばかりとは考えられないほどに違和感なく敵を屠ることに成功していた。

「むっ 敵が退いていく。追撃……いや、おかしい。そこまでの手応えはなかったはずだ」

壁は自隊の停止を命令するが、ここで士気が高揚していることが裏目に出ていた。壁の停止の指示は届くことはなく兵たちは手柄を獲るべく我先にと趙兵の背を追って

いった。

それが、趙右翼の将馮忌の狙いであるとも知らずに。

第27話

秦左翼を務める第四軍一万は趙將馮忌の策に嵌り壊滅の危機に瀕していた。

秦左翼軍は、趙軍に三方を塞がれる形の狩場に結果的に誘い込まれる形となり、趙右翼本隊を前方として左右に展開した趙軍から放たれる雨のような矢に成す術もなく討ち取られていた。

それは、第四軍所属であった壁千人将隊も同様であり、隊長である壁もまた矢傷を負っていた。

「耐えよ。今は耐え凌ぐときだ。盾を拾え。何としても生き残るのだ」

降り注ぐ矢の雨にも冷静さを失わずに壁は指示を飛ばしていたが、第四軍後方でいまだに生存していた歩兵の一人が後方へと活路を見出して駆け出すと事態は大きく動き出した。亀のように耐え忍んでいた兵たちは堰をきったように後方へと駆けだしてしまった。

「下がってはならぬ。背を見せれば後ろから討たれるだけだぞ。活路は前にのみにある。私に続くのだッ」

壁の声が届く範囲は踏みとどまったものの、それ以外は秩序なく後退を始めていた。

そんな最中、第四軍を指揮する干央は、自身が率いる騎馬隊をまとめると、趙軍前列に再突撃を開始した。壁隊もそれに続くのであった。

その頃、飛信隊という名を授かった信が率いる特殊百人隊は、馮忌本隊の真横からの奇襲を成功させていた。戦場を横切る凹凸のある茂みを利用した隠密行動は功を奏して、趙將馮忌に迫っていた。

「私は後ろの茂みに一時避難する」

騎馬主体であった本隊の力を活かすために距離をとる選択をした馮忌であったが、後方より秦軍の旗が突然挙げられたことで、脚を止める羽目になる。瞬時に「あれは偽装である」と見抜いた馮忌であったが、止まってしまったが故に、飛信隊の追撃を受けることになった。

「私が行く。お前は隙を見て趙將の首を獲れ」

羌？が馮忌の近衛を瞬時に切り倒して視線を集めると、信は獲物を狙う狩人のように、趙將馮忌だけを見据えた。羌？に続けとばかりに飛信隊の生き残った者たちが後に続いた。さらに、飛信隊の働きによって馮忌が一時的に指揮を執れなくなったことで、守備陣形が正しく機能しなくなった趙右翼を抜いた干央や壁たちが姿を現した。

「童に先を越されていたか。皆の者あれが趙右翼の將を務める馮忌である。突撃だッ」

干央は勢いのままに、飛信隊が必死に食らいつく本隊に向けて攻撃を開始した。

「ぬかったか。だがしかし、この私を討てなければ結果に変わりはないぞ」

馮忌は、干央たちがこちらに加わるのを阻止すべく後方待機を指せていた予備兵を動かす指示をだした。この指示をするために、視野を全体に向けてしまったことが、結果として馮忌の命運をわけることになった。

今、馮忌の視界に映っていたのは、自身の本隊に喰らいついでいる飛信隊と異質な強さを見せるその将が一人、それに前線を突破してこちらに突撃を開始した秦左翼の将の存在と染み出るようにその数を増やしていく敵兵であった。そこから馮忌は、近衛兵を抜けて飛信隊が己に届くまでにかかる時間的猶予を使つて、前線より染み出てくる敵兵の後続を断つべく兵を動かした。

「後続を断てば、敵は少数である。隊列を組み直し、敵を締め出すのだ」

馮忌の的確な指示によって後続は抜けることができずに消滅した。しかし、その代償として干央の接近を許すことになっていた。

「馮忌、貴様さえ討てれば、もはや兵などいらぬわ」

「何を勝ち誇っているか、秦将よ。すでに貴様らの命運は我らに包圍殲滅される以外にないとなぜわからぬ」

「命運だと？ それはそなたであろうが。見よ殿の飛矢が届くぞ」

「!?」

馮忌の指示は的確であった。事実として、後続の断たれていた干央たちは少数であり、この機を逃せば言葉通りに包圍殲滅されていたはずであった。だが、戦場を見渡せるほどに拡いた視野が馮忌のアダとなった。群体をみて個を見逃していたのだ。

信は、馮忌たちの意識が完全に自身から外れた瞬間に趙将の近衛の隙間を縫うように入り込むと跳躍。馮忌を切り裂き、討ち取ることに成功した。

「小僧よ。殿から名を授かったか」

信がその問いかけに「飛信隊だ」と告げると、干央はそれに応えるように高らかに宣言した。

「うむ。趙左翼の將馮忌は、飛信隊の信が討ち取ったぞおお」

この時、信たちはすでに少数であり、残っていた趙兵が殲滅に動き出せば全滅は免れなかった。しかしそうはならなかった。号令を下すものがいなかったことが一つ。その遅れがもたらした刻に「涉孟様討ち死に」の報が決め手となった。

今戦争を率いた趙軍五将の内、初日にして二将の討ち死にとは、それほどの衝撃であった。一人がその場から後退すると流されるように趙右翼は霧散していくのであった。

趙軍総大将である趙莊は、先に左翼、続いて右翼と、趙両翼からもたらされた報に動揺を隠せずにいた。それでも、混乱が最小限になるように手早く措置を施すと思案する

ように言葉を発した。

「涉孟に続き、馮忌まで失うとは……どうする。今から退くべきであろうか。だが、中央の李白は蒙武をうまく抑えている。二将を失ったとはいえ、兵力は我ら趙がまだに上であることは明白だ」

趙荘の言は正しく、涉孟は初撃の突撃から討ち取られるまでの間に多くの秦兵を屠っており、馮忌に至っては九千に迫るほどに討ち取っていた。また、万極（マンゴク）も敵大隊に対して猛威を振るっていた。趙荘はそれらの事実から将さえ健在ならば十分にやり合えると判断して、日暮れを前に全隊を退かせた。

「趙荘は軍を退かせましたか。早々に二将を失いましたからね。賢明な判断です」

王騎は日暮れが迫っていることも加味して追撃は行わずに、趙軍が退いたことを確認すると同じように全軍を退かせた。

暗闇があたりを染める頃。

王騎は、朱錐がいる第六軍に顔をだしていた。

「よく初日に涉孟を討ちとってくれました。お見事ですよ」

「ツハ 私は後方で指揮を執っていただけです。賞賛は隆国と実際に涉孟を討ち取った虎豹にこそ相応しいかと」

「ソッフ もちろん隆国の刻を見計らう采配と虎豹の武勇も見事ではあります。です

が、貴方がうまく敵を誘い込み、脚を止めるからこそ策は成つたのですよ。それにあなた……」

と王騎は朱錐としばらく視線を合わせて見定めると「まあ、いいでしょう。明日もその調子で頼みますよ。錐」と声を掛けると次に向かつて去っていった。

朱錐はそのまま集まっていた第六軍の面々に労いの言葉を綴った。

「皆今日は良くやってくれた。李豹の指揮は的確に相手の勢いを削いでいた。馮と濯もうまく涉孟の脚を止めたな。そして本日の第一功はいうまでもなく、趙将涉孟を討つた虎豹である。よくやった。初陣の者も多い中、兵の皆も良くやったぞ。王騎様より格別の酒もいただいた。皆、飲むぞッ」

うおおおと盛り上がる第六軍の兵たちに酒を配るとすぐに宴会酒宴となつた。皆が酒を傾け、騒ぎ、笑い、泣いて生きている実感、或いは生き残つた自身を祝い盛り上がる中、朱錐に話しかける者がいた。

「朱錐。私の活躍を忘れてない」

「むッ。そうであつた。玄象も精兵相手によくやってくれた。感謝する」

玄象は、どこか頬を膨らませて不満を示しているように見えるが、それを気にしているわけではなかつた。

「いい。命を助けてもらった恩は返すから、そのつもりでいて」

「玄象。私はたまたまその場に居合わせただけなのだ、説明したと思うのが」

「それでも私を助けるために尽力したって聞いた。それとも朱錐は私を恩知らずにしたのか」

そうは言ってもだな、と「むう」と唸るように声を発した朱錐に

「受け取ってやんなよ。象がそうしたいっていうんだからさ」

との虎豹の言に少し思案した朱錐は返答した。

「承知した。だが、一つだけ聞き入れてほしいことがある。命を賭して恩を返すような真似は決してするな。そなたはそなたのためにその命を存分に使ってほしい。よいな、玄象」

言葉を受けて「わかった。私のことは象でいいよ」と言葉を発したあと「自分のために、か」とある人物に視線が流れていたが、皆は気づかないふりをして、そのあとも酒宴を楽しんだ。

今戦場は王騎が前線に復帰したこともあって、中華全土からの聞耳を集めていた。そのため、虎豹の名は第六軍副官という肩書とともに中華に名を示すことになった。

第28話

趙軍は、初日に涉孟、馮忌と立て続けに失ったことで二日目の朝からは、將の損失を防ぐために、攻めに偏重せず、守勢に転じていた。

「昨日引き続き、李白には蒙武を抑えてもらう。左翼は万極を主体として秦右翼をじつくりと削ってもらおう。公孫龍は万極の支援とする。挟撃に注意しつつ、迎え撃つぞ」

趙十二万、秦十万で始まったこの戦は、趙十一万、秦八万五千と開戦時よりも兵力において差が開いていた。

「今日もなにか起こるかな」

声を出したのは、この戦いを遠くの高台から観戦していた河了貂であった。

「いや。おそらくだけど、今日はお互いに正面からのぶつかり合いになるだろう」

そう答えたのは、河了貂の兄弟子である蒙毅である。

「やっぱり昨日の二將が討ち取られたのが影響しているのかな」

「そうだね。趙はこれ以上將を討たれると戦の継続が難しくなるだろうから、奇策に掛からないように純粋な兵力差を活かした戦いをしてくるだろうね」

そこに二人の会話に軍師候補生の一人が声を掛けて加わった。

「ところで蒙毅よ。寡聞にして儂は知らなかったのだが、第六軍の虎豹という者と飛信隊の信という者に心当たりはあるか」

「飛信隊の信については先生から少し聞いた覚えがあります。ですが、虎豹については、虎の面を被っていること以外はまったくありません。言い訳にもなるのですが、近年、王騎將軍が前線にお出になられていないこともあつて、謎が多いのです。第六軍の話自体も昨日知ったくらいですから」

蒙毅の返答に「やはりそうか」と全容がわからないことにもややもやしたものを抱えながら呟いた。

「將軍かあ」

「やっぱり同居人のことが気になるのかな」

「大將軍になるつていつも喚いてるくらいだもん。信は」

「河了貂。目指すものを口にするというのは、案外効果的なことなんだよ。人は口にすることで現実的に物事を考えるようになるものなんだ。言い続けているうちに、もしかしたら、君の同居人が本当に大將軍になるかもしれないよ」

「蒙毅。そんなわけないじゃん。言うだけでなれるんなら、オレだつて天下の大軍師になつてやるつて言い続けるよ」

「ふふふ。そうだね。言うだけじゃだめだ。そのために努力を惜しまない者じゃない

と、その機会すら掴めはしないさ」

蒙毅の言葉に河了貂は「だよね」と力強く頷くと新たな決意をしたように真剣な眼差しで戦場を見据えた。その姿に「僕も妹弟子には負けていられないな」と戦場を見据えるのであった。

ところ変わって、丘の上にある秦軍の本陣には、王騎と副官騰の姿があった。

「さて、どうやら向こうも配置が終わったようですねえ」

王騎の言葉に返答するように、騰は自身の考えを告げた。

「そのようです。配置を見る限り、中央の李白を軸に守勢に回り、正面からの削り合いと言ったところでしうか」

「ソッフ そうですねえ」と言葉を発した王騎は、本日の秦の主軸となるであろう蒙武に視線を向けた。

「今日も同じだ。ただ俺の背についてこい。丁之ツ（チョウシ）来輝ツ（ライキ）」

蒙武は側近の二人に声を掛けると、昨日と同じように右の拳を掲げると号令した。

「狩るぞ。全軍、突撃だッ」

うおおおおおおお、と明らかに昨日よりも士気高く、地響きさせる咆哮を挙げた蒙武軍は、趙中央の李白軍の向けて突撃を開始した。

王騎は蒙武軍の異様な士気の高さの要因を確認するように、昨日の蒙武軍の損害につ

いて声を掛けた。それに対して騰は「六百です」と答えた。

その数字は明らかにおかしいことであった。蒙武軍二万と李白軍二万が普通に激突したにしては少なすぎた。本来ならば、数千に及ぶ損害が出ていてもおかしくないはずであるにもかかわらずに六百という数。

王騎はそのからくりを察すると蒙武の評価を改めるように口を開いた。

「呂氏が手元に置きすぎたことも原因でしょうが、噂とは随分と印象が変わりますねえ」
中華においても蒙武の名を知られていた。

ただ、その評価は「武勇を頼りに暴走する武人」というもので、決して高いものではなかった。つまりは「個の武は評価に値するが、軍としては与し易い」という程度であった。しかし、実情を見るとその印象は大きく違っていた。蒙武は自軍の騎馬隊と今回急遽徴兵された歩兵の士気の高さの違いを勘案すると、守陣を敷いた李白軍を利用して、訓練をしていたのだ。さらに、蒙武の突撃力を警戒していた李白の陣に沿うように駆け抜けることで、敵が手も足もでないように見せかけて、いかにも戦いを優勢に進めているような演出も施していた。その結果、多くの徴兵された歩兵が生き残り、初日の自軍の優勢さに背を押される形で高い士気を手に入れていた。

戦場に目を戻そう。

蒙武軍は、初日とは打って変わって李白軍が敷いた斜陣に対して沿うのではなく、突

き破つて前進した。

趙將李白はその威力に目を奪われはしたが、冷静に策を展開して、蒙武軍を包囲することに成功した。この李白の策は本来であれば上策と呼べるものであったが、蒙武軍はこれをものともせず破壊、殲滅し始めた。包囲している側が殲滅されるといふ異様な光景に、李白は不測の事態が自身に迫る前に本軍を後方へと移動させた。前線から距離をとつた李白を蒙武は、追わずにこれを放置。そして、指揮官を失つた残兵をひたすらに殲滅した。

李白軍の包囲が瓦解して、さらには殲滅されたことを目の当たりにした趙莊は、早々に全軍を退かせることになった。

日を跨いだ三日目もそれは変わらず、蒙武軍を止めるために趙左翼の万極軍を完全に下げて守備にまわして、空いた公孫龍軍を中央に配置。李白、公孫龍軍で蒙武を止めようとしたが、これもまた叶わなかった。

この蒙武軍という突出した力の出現は、戦場を大きく動かす要因となった。そして、明けて四日目の朝。

趙軍総大将である趙莊は、開戦せずに、本陣を現在の位置から山深い後方へと移す決断を下した。

趙軍が山深い後方に向けて後退していくのを確認した騰は、報告するように王騎に声

を掛けた。

「殿。趙軍は退却ではなく、本陣を後方に移動させたようです」

「退却ではなく、後退ですか。妙じゃないですかあ。貴方はどうみえますか。騰」

「ハッ 涉孟、馮忌の二将を失い、さらに蒙武によって兵力差もなくなった今、趙莊に打てる手はなく、退却が最善かと」

「その通りでしょう。損害を最小にするのなら、今が退却すべきときです。ですが、本陣を後方に移動した。ということは、どうしても私を誘い込みたいようですねえ 趙莊さんは」

「そのようです。如何いたしますか」

「もちろん、追います。相手の狙いがわかっているとはいえ、趙軍をこのまま放っておくわけにはいきませんから」

王騎は趙軍を追跡することを決断すると、全軍を趙本陣のあった丘の制圧と追撃を命じた。そして、制圧完了の報を受けると速やかに元趙軍の本陣があった場所に本陣の移動する旨を伝えた。

王騎が本陣の移動を命じている頃、元趙本陣があった丘を制圧した蒙武と五人の軍長は、これから戦場となる山々を眺めていた。

「蒙武將軍。追撃されるのであれば、殿の言をお忘れなく」

蒙武に言葉を掛けたのは第二軍長である隆国であった。

「追撃はこの丘が見みえる所までであろう。言われずとも承知している」
「ならば、何も言いませんまい」

蒙武は全軍での追撃を命じた。

第29話

王騎は本陣を趙莊のいた丘に移すと各軍長から上がった報告に耳を傾けていた。

「四日目の朝から追撃に入っていますが、いまだに会敵しないというのは、さすがに不自然です。ねえ騰」

「ハッ この地に入ってからこの退きの速さは、わが軍を深く誘い込むことが目的であるのは明らかかと」

王騎は騰と言葉を交わしながら、趙莊の狙いを読み解こうとしていた。

趙莊は涉孟、馮忌の二将を早々に討たれたことで、兵力差を頼りにじっくりとこちらを削る予定であったはず。ですが想像をはるかに超えた蒙武の武力を前に今やその差もごくわずか。にもかかわらず、退却はせずに後退を繰り返している。

こうなると龐煖さんが総大将であるというあの報せが気になります。あそこから仕込まれていたとしたら、随分と私を誘い込むことに夢中なご様子。しかし、残念ながら趙莊にはそれほどの器は見受けられません。この地、この状況……。伏兵、援軍があるのは間違いなさそうです。問題はどこから現れるのかという点ですが、各軍長も広く斥候を飛ばしているにもかかわらず、その影もない。

「ソフソフ」

王騎は自身の及びもしない策がこの戦場に至るまでにも張り巡らされている可能性に、ある種の喜びを見出していた。

前線を離れて幾年月。鎬を削った好敵手はすでにその多くが、この世を去っていた。今回、龐煖の名に一つの惜別を胸に出陣を決意した。が、姿の見えない思わぬ強敵の出現に王騎は自然と笑みがこぼれ、あの頃の、血沸き踊る戦場に回帰したかのような錯覚すら覚えた。

「いいでしょう。どこのどなたかがこの戦を描いているのかすら皆目見当もつきませんが、あの方に捧げる一戦にふさわしいものにしてみせるとしましょうか」

現在、秦本陣に対して正面には蒙武、隆国軍。左翼のは録鳴未、干央軍。右翼には鱗坊、同金軍が展開していた。

朱錐は、どの軍にもすぐさま支援に入れる本陣の丘の先、蒙武、隆国軍の後方に位置していた。

「どこにも敵の姿がないようですね」

索敵しながらの追跡であるため行軍速度は上がることはなく、戦場にしては、ゆつたりとした時間が流れていた。

「先まで見渡せないのでは、慎重に進むしかない。会敵しないということは、趙はそれ

上の速度で退いているということだ」

李豹の言葉を拾った虎豹は、自身の見解を言葉にした。それに触発されたのか玄象が口を開いた。

「関係ないかもしれないけど、ここに入ってから妙な感じがずつとしてるんだけど、皆は何か感じない」

その言葉に虎豹も感じ入るものがあるのか頷くと言葉を発した。

「象の言う通り、独特なものがある。朱錐はどうだ」

「……………」

朱錐は虎豹の問いかけに反応をしめさずに遠くを見据えたままであった。

「朱錐?」

「うん? ああすまない。考えごとをしていた。それでなのだが、少し隊の編制を変更する」

「今からか」

虎豹の疑問ももつともであり、すでに、昼を跨いでひさしく、日が傾き始めていた。

「ああ、なにか胸騒ぎする。念のために、な」

朱錐の言葉に虎豹は昔を思い出すと言葉を口にした。

「お前のそれはよく当たる。今日は長い夜になるかもしれないな」

その夜、異変を報せる銅鑼がかき鳴らされたのは、左翼に位置する録鳴未、千中央軍が野営する方角からであった。

朱錐は、銅鑼の音が一度止んだことに疑問を感じながらも、胸騒ぎがに背を押される形で軍の半数を虎豹に預けると左翼の野営地に向かっていた。

「どうやら敵襲なのは間違いないようだ」

戦いを報せる雄たけびと鳴らされ続ける銅鑼音が届いていた。朱錐たち千五百が野営地に付いた頃にはすでに勝敗は決したようで、逃げ惑う秦兵に対して執拗なまでに攻撃を続ける趙兵の姿があった。

「野営地に残る趙兵を殲滅する」

朱錐は愛用の武器を掲げると号令を発した。

「全軍突撃ッ」

号令のもと突撃を開始した第六軍は、勝利に酔いしれて秦兵を殺戮していた趙兵を一気に殲滅へと追い込でいった。

「はああああッ」

朱錐は趙兵が群がる一角に飛び込むと棍棒で薙ぎ払っていった。戦場に吹き飛ぶ趙兵の姿と砕けた鎧の金属片が無残に飛び散っていく。それを二度、三度と繰り返すたびに人が飛び、散る肉塊となった者たち。今だ息をしている者らが上げた視線の先には、

新鮮さを示すような赤色が滴り落ちる棒を持った鬼が一人。

「ひゃあ ツはっ、お、に」

何とか言葉を絞り出した男は、次の瞬間には肉の塊となつて宙を舞った。ただ暴力というものを体現した朱錐の姿は、長平の恨みを原動力とした彼らに恐れ生まれさせた。それは次第に伝播して、波紋のように拡がっていく。

「おにだ。おにがああああ」

一人が尻もちをついて、また違う一人が背を向けて逃げ出していく。その間にも振られる暴力は、自分たちが殺戮する側からされる側へと変わったことを強く認識させた。そうになると、誰も彼もが逃げ出した仲間の背を追うように我先に戦意を投げ捨てて逃亡していった。

「逃げる者は追う必要ない。負傷者を優先しろ。いまだ戦える者は防衛線を張り直すぞ」

朱錐が全体に指示を飛ばして事態の收拾に乗り出していると、深手を負って側近に守られていた干央が姿を見せた。

「助けられたようだ。感謝する」

「礼はいい。それよりもお前を命がけで守った者たちにこそ、その言葉は贈つてやるべきだろう。まあお前の手当がさきだがな。お前ほどの者が誰にやられた」

「万極だ。別のことに気を取られてぬかったわ」

「あの不気味な将か」

「それと……：……：龐煖だ。龐煖が姿を現したと、殿に」

「龐煖がでたのか。王騎様より道中で知らされてはいたが、本当に生きていたのか」

朱錐と干央が会話を重ねていると干央からの報を受けた録鳴未が数千をひき連れて到着した。録鳴未軍を視認した干央は折り入って頼みがあると切り出した。

「飛信隊の姿がここにはない。おそらくだが、いまだ万極に追われているはずだ。どうか助けてやりたい」

と録鳴未の到着で活気づいた野営地で、「飛信隊の救援」を願い出ていた。干央によると、隊長の信は飛信隊の仲間と連携して龐煖に一太刀を浴びせたという。しかし、龐煖の反撃に膝をついた信はそのまま気絶。その後は軍同士が入り乱れることになったという。

「あの者はまだまだ伸びるはずだ。ここで無為に死なせるわけにはいかぬ」と。

朱錐は干央の申し出を受けると、すぐに録鳴未に後事を託した。

そして、虎豹に伝令を出して、軍を集結。虎豹と玄象、他精銳三百を飛信隊の搜索に当たらせると、朱錐は李豹を連れて、あえて目立つように軍を動かした。

その頃、戦場となった野営地から辛くも脱出することに成功した飛信隊であったが、

万極による苛烈な追撃を受けていた。ただ一つ幸いなことに、追撃から包囲されるまでの一瞬の間に信の身柄は尾平や尾倒たちの活躍で隠すことに成功していた。

「ひ、飛信隊。き、貴様らはここでむ、骸をさらすのだ」

万極が殲滅の号令を掛けようとしたその時、慌てた様子の子の伝令が姿をみせた。

「伝令ッ！ 万極様。こちらに向かつて一軍が進軍しているとのことですよ」

万極は、その報告に山裾へと視線を移動させれば、確かにこちらに向かつてくる一軍の姿が確認された。

「か、数はお、多くない。げ、迎撃しろ」

信を隠すことに成功していた飛信隊の生き残りは、万極軍の意識が自身たちから山裾の一軍に向いた隙を見逃さなかった。

「全員散るぞ、生き残るんだッ」

そうして、飛信隊は馬が駆け下りれない木々の隙間に飛び込みいく。万極は彼らの咄嗟の行動に面を食らったことで、ふいに冷静になるとおかしなことに気付いた。

「ふ、馮忌を討つたのは、し、少年ときく。い、なかったはず、だ」

そして、彼らが逃げた先は山の麓。そこは、すでに包囲網が敷かれている方角であった。

「や、やつらが下に、に、逃げたのはう、上にやつらのだ、隊長が、い、いるからだ」

万極はここから山の頂上に向けての追跡を命じると、麓に迫る秦の一軍に向けて馬首を向けた。

「み、見つけ出してこ、ころせ」

第30話

四日目の夕刻から始まった戦いは、いまだ終結するすることはなく、新たな火ぶたが切られようとしていた。

朱錐は、干央からの申し入れを受け入れると、李豹を連れて山の麓に軍を動かし、山間を包囲する趙軍と対峙していた。

「朱錐様。いかが致しますか」

「虎豹たちの動き次第にはなるだろう。馮。濯と洪をここに」

朱錐は第六軍二千五百を動かしていた。対して趙軍は、集結すれば万を超えるだろうことは明白ではあるが、山間から一つの山を包囲していることもあって、対峙している数は多く見積もっても倍程度であった。

「李豹。軍を動かすぞ」

朱錐は趙軍の後方から上がる銅鑼の音と、山を移動する松明の明かりに虎豹たちの侵入が手筈通りに進んだことを確信した。

そして、趙軍が背後の異変に揺らいでいるのを見て取ると馮、濯、洪にそれぞれ三百を与えて三本の槍として突撃させた。

「朱錐様。戦力を分散させずに、一つとして突撃したほうが良いのではないでしょうか」
「それでも良いのだが、あれは威力偵察、いや挑発のようなものだ。釣られて追ってくるなら守りながら下がることになるが、おそらくは来ないだろう」

「それは、なぜ……いえ、初日に趙將を討ったからですね」

「そういうことだ。私たちが討ったとは知らずとも、どのように討たれたかは知っていない。それに、彼らは山間を封鎖するように陣を敷いている。我らを追っては綻びを作るようなものだ」と承知しているはずだ」

朱錐の予測通り三本の槍が趙軍に確かな傷をつけて帰還しようとも、動き出そうとはしなかった。

「趙將がこちらに降りてくるまで続ける。第二波いくぞ。李豹は百人隊を指揮して馮隊に加われ。濯と洪で一隊として貫けそうなら貫いてやれ」

「ハッ」

朱錐は第二波の号令を掛けると、四人は二人一組となって突撃を開始した。

「た、助けが来たんだ」

同じころ、趙軍の追跡に孤軍奮闘していた信とは別の方角に脱出した飛信隊の生き残り、山の麓で戦う友軍の姿に安堵していた。

「確かに友軍だろうけどよ、数が違いすぎねえか」

彼らの指摘通り、山の麓は見えるだけで倍程度の数の差が見て取れた。そして、全体としてみれば秦が圧倒的に劣っているのは誰の目にも明らかであった。

「あの軍は、無理に突破しようとしていない。おそらく陽動だ」

そんな中、立つてはいるが辛そうに肩で息をしている羌？は冷静に軍の動きを見ていた。

「陽動？あれは固で別動隊がいるっていうのか」

「おそらく、けど……。本命はさらに少数精鋭のはず」

「だ、だけど、あの軍は、俺たちを助けに来たんだろッ」

羌？は瞳を閉じて思考を回転させて可能性を探るが、結論としては否であった。

「私たち全員は無理。たぶん信。信を助けるために動いてる」

「そ、そんなあ……。俺達は罅り殺されろっていうのかよお」

彼らの多くは、希望を得た先にあつた絶望的な答えに膝をつき両手を地面に落とした。

「膝をつくなッ まだ決まったわけじゃない」

普段から声を荒らげるようなことがない羌？の姿に皆が顔を挙げた。

「一つだけ助かる策がある」

また違う場所では、虎豹たちが信の搜索をしていた。

「姉さん。追っ手は全部始末したよ」

朱錐たちがいる場所を正面として、左側から回り込むようにして奇襲を仕掛けた虎豹は、趙軍の虚をついて見事に成功して、包囲されている山へと侵入していた。

「ああ、象。よくやった。これで一息つける」

虎豹は劳いの言葉を述べると周囲に見渡して思考していた。

山はそこまで大きなものではない。だからと言ってやみくもに捜すのはさすがに無理がある。幸い趙軍は松明を焚いて移動していて、位置は掴めている。それに、朱錐たちに対して攻勢に出ていないことと、いまだに山裾を包囲していることから対象はまだ殺されてはいないだろう。

「どうするの」

「そうだな……ッし。上に何かいる」

虎豹は山頂方向で動く影に目を止めた。

「どこ。夜目は聞く方だけど見えない」

「おそらくだが、向こうも私たちに気付いて姿を隠したのだろう。だが、ある程度の場所は把握している。象、頼めるか」

玄象は虎豹から大まかな場所を指示されると「任せて」と気配を消して移動を開始した。

「我らはここで待機だ」

闇夜に溶け込むように気配を消した玄象は、指示された場所まで移動をすると傍にあつた木に音もなく登つた。

姉さんはこちら辺だつていつてたけど、今の所は誰もいないかな。……、つていうか私よりも先に気付くとかどういう視野をしてるんだろう。姉さんは面白くて優しいし、それでいて凄く強い。白凰がないのもあるけど、私の巫舞では勝てないかもしれないな。ふふツ、それに冗談で？みたいなに振舞つたら「象みたいな妹なら歓迎するよ」つて凄いい男前だったなあ。女前かな。つといた。一人、だな。

玄象は怯えるように茂みに隠れている男が様子を見るために腰を上げた瞬間に後ろから拘束した。

「動くな。声も出さな。逆らえば首を刎ねる。分かつたら領け」

背後からの声に、無言でコクコクと頭を動かす男。

「お前は秦か趙か。秦なら一度、趙なら二度領け」

男はコクと一度だけ動かした。

「所属はどこだ。小声ではなせ」

「ひ、飛信隊だ」

「嘘なら殺す。心して答えろ。隊長の名は」

「し、信だ。し、信とは城戸村出身の幼馴染なんだ」

「……………嘘は言っていないようだな」

玄象は男の様子から真実を話していると判断して、拘束から解放すると、男は両手を地面につけて膝をついて「殺されるか思ったあ」と息を吐くように言葉を発した。

「率直に言うが、私たちはお前たちの隊長を助けに来た」

その言葉に男は上体を戻すと振り返った。

「な、た、助けっっていうのは本当なのか」

「そう言った。どこにいる」

「う、上だ。追っ手が来たから信は弟の尾倒に任せて、お、俺が囨に……………」

「分かった。少し待て」

玄象は尾平を落ち着かせるとすぐに虎豹のもとに戻ると今の話を伝えた。

「よし。対象は上だ。ここからは遮るものすべてを殲滅する。行くぞ」

虎豹は飛信隊の尾平と名乗るものを先導にして山を駆け上がった。途中追っ手とも遭遇したが、虎豹隊はそれらをものともせずに一瞬のうちに殲滅した。

「び、尾倒ッ 俺だ。尾平だ。た、助けが来たんだ。返事を、返事をしてくれッ」

趙将万極は、自軍に喰らいっしている一軍を追い払うために、山裾まで下りてきていた。

「万極様。敵はぎつと見て三千程度です。部隊を集結して殲滅してやりましょう」
「ま、待て。ち、趙莊からはう、迂闊にせ、攻めるなど」

「ですが、敵はこちらを舐めてかかるかのように、突撃しては旋回、後退を続けています」
「わ、我らをつ、釣ろうしている、のだ。ぎや、逆に、し、守備にす、す、隙間をつ、作つて、つ、か、まえろ」

第二、第三波と続けて突撃を繰り返した朱錐たちは、さらに第四波を終えて第五波に向けて編成を行っていた。

「先の突撃の際に陣形に歪みができたのか、突破できそうな場所があった。そこを狙ってはどうか」

朱錐は洪の言に「ふむ」と頷くと李豹に声を掛けた。

「李豹はどう考える」

李豹は「そうですね」と数瞬の間、思考すると答えた。

「畏、であると考えます」

「どういった理由からだ」

「合計で四度の攻撃を加えました。ですが、反撃こそすれ、乱れなどはなく、そういった隙は一度もありませんでした。それはつまり、対峙している趙軍はよく訓練されてる兵であるという証。ということ、それが突如として明確になったというのは、少々不自

然かと考えます」

朱錐は馮たちと目配せしながら、李豹の推察にうなづき合った。

「その通りであろう。趙将万極が山を下りて指揮に入ったと考えて間違いない。だが我らは敢えてそこに飛び込む」

李豹は理解できないとばかりに朱錐に尋ねた。

「罨とわかつていながら、ですか」

「それが罨だと、わかっているからだ」

第31話

趙将万極は、対峙している一軍を殲滅するために守備陣形に歪をうませて狩場に誘い込もうとしていた。

「か、狩場にて、敵がは、はいったらほ、包围解いて、しゅ、周辺の兵をあ、集めよ」

万極は罨を張ったうえで、すでに倍近い兵数の差あれど、念には念を入れて増員する判断を下した。そうしているうちに、対峙している一軍が全軍で突撃してくる姿を確認した。

「よ、よし。て、手筈通りに、しろ」

趙軍は、あたかも突撃に崩されたように隊列を割って、一軍を目的の場所まで誘導した。秦軍が突破したと勘違いさせた先には、守備大隊が現れて脚を止めさせた。

「よ、よくきた。秦の犬ども、よ。し、屍をさ、さらすがい、い」

一方その頃、その様子を身を隠して山を下りて付近まできていた羌？は、悪態をついていた。

「あの軍の将は馬鹿なのか。この数の差で無策に突撃するなんて無謀すぎる」

羌？の言はもつともであり、奇襲をするわけでもなくおよそ五千に三千に満たない数

で突撃しており、さらには山を包囲している兵はその倍はくだらないからだ。

「どうすれば。私があそこにいる趙将を無理にでも討つべきか。けど呼吸が持つかの賭けになる……………」

羌？は冷静に自身状態と五千の指揮を執っている将との距離を測って先に討てるかどうかを思案していた。

「きよ、羌？。や、やっぱり無茶だったんだよ。ふ、麓の軍の突撃に併せて脱出するなんて」

「うるさいだまれ。あの将がもう少しまともなら機会はあったんだ」

麓の一軍を突撃させたまともじゃないと評された朱錐は、敵の狩場に入ると冷静に号令をかけていた。

「円陣を組め。敵の侵入を許せば一気に瓦解するぞッ」

盾隊を円状に展開させその後ろに弩兵、槍兵と配置させた。

「来るぞ。弩兵構え、盾用意。射ッ」

趙軍は前後左右から突撃を開始した。

「秦兵を殺せえええッ」

趙兵は狩場に嵌った愚かな秦兵を勢いのまま討ち取るために、我先に突撃していた。が、突然秦前列の盾が斜に傾くと弩兵が現れて、一斉に矢を撃ちだした。

「構うなッ 弩兵はすぐに二射目は撃てない。敵は少数であるぞ討ち取れえええ」

趙軍は弩兵により前列の多くが倒されたと言えど、二射目を撃ちだす隙をあたえないように屍を踏み越えていった。

「見よ、弩兵が下がった、ぞ」

その時、趙兵は頭上から自身に向かって飛来した槍を目視して、絶命した。

屍を踏み越えた前列が秦軍の盾隊と衝突した直後、押しつぶせとばかりに詰め寄った後方部隊には、手槍が投げ込まれていた。こうなると中心に密集するように突撃をしていることがアダとなり、趙軍は、投げられた槍に面白いように突き刺されていった。

「怯むなッ 無数に槍があるわけがない。構わず突撃を続けよ」

だが、槍は途切れることなく勢いを殺すように絶妙な間で投げられ続けた。前列は秦軍盾隊を突破しようともみくちやになりながらも押し込もうとして、かたや突撃を支援するはずの後方部隊は降り注ぐ槍に、躊躇する兵の姿が見られるようになっていた。また、敵中央から甲高い音が響くたびに、部隊指揮者付近の護衛の躰が鎧ごと穿たれる事態に、指揮者の動きも鈍り始めていた。

「あ、慌てるな。じ、じつくりとせ、攻めたて、ろ」

万極は予想外の反撃にも冷静に、敵一軍の包囲とともに付近に配置していた兵も集結させて、攻勢にでる時期を窺っていた。

「て、敵のしゅ、守備は堅い。が包围したわ、我らのゆ、優位はゆ、ゆるがない。やつらのめ、命運はき、決まってい、る」

そして、ついにその時はやってきた。飛来していた槍が途切れたのだ。万極はこの機を逃すさずに全軍に攻勢にでるように号令を発した。

「お、押し潰せッ」

羌？は敵将を討つにはこの機しかないと判断して「私が行く。他は隠れている」と言葉を残すと、万極に単身で向かった。羌？は自身の存在に気付かれる前にすこしでも先に進むため、他には目もくれずに直走った。

「なに、も……………」

羌？はそのまま直線上にいた趙兵に、誰何する暇を与えずに首を刎ねていく。だが、敵將の姿がはつきりするほどに、趙兵の密度も上がっていく。それはつまり

「し、侵入者だあああ。万極様をお守りしろッ」

当然のように気づかれることになった。

「ツチ」と羌？は小さく舌打ちしながら、すぐさま今はいる場所から趙將の位置までを逆算しても、己の巫舞で届く距離とは言い難かった。

「トーン タンタン」「トーン タンタン」

だが、羌？は考えている暇はないと判断して、賭けに出た。

「トーン タンタン」「トーン タンタン」

拍を刻みながら趙將に迫る羌？。

「トーン タンタン」「トーン タンタン」

遮る趙兵の首を一瞬にして刎ねていく。

「トーン タンタン」「トーン タンタン」

そして、趙將万極にあと一步と迫ったところで、呼吸が限界を迎えた。

「トーン タンタ ぐふッ」

趙兵は、飛ぶように舞っていた正体不明の侵入者が突如地に膝をついたことで、その姿を視認すると一気に群がっていった。

「妙な動きをする前にそやつを仕留めよッ」

羌？は群がる敵兵の隙間に見えた万極に向けて呼吸を振り絞り拍をとった。

「まだうごけ、る」

手前いた趙兵を刎ねるとさらに万極に向けて剣を振り切った。

しかし「ま、万極様ツ」と、身を挺して万極を馬から押し落とすように被さった側近が代わりに剣を受けたことで羌？の奇襲は失敗に終わった。

羌？はそのまま地に落ちると地に伏せ、立ち上がることをできなくなっていた。動かなくなるとはいえ、容易に近づくとが躊躇われた。そこに落馬したものの、軽傷

で済んだ万極が立ち上がると命令した。

「き、切り刻んでこ、ころせ」

万極が位置する場所から山頂に目を向けると、そこには、虎豹たち精銳三百の姿があった。

「悪くない。何かあったかはわからないが後方の陣形が乱れたままだ」

そこから戦況の全体を見渡した虎豹は号令を発した。

「今より趙将万極の首を獲る。全軍突撃だッ」

虎豹率いる騎馬隊は高所の理を存分に發揮して、万極軍後方の乱れた守備陣形を一気に切り裂いていく。すでに羌?の決死の突撃によつて綻びが生まれていたことも味方していた。

対して、万極は先の羌?の襲撃により警戒心が増しており、この状況こそが己を討ち取るためのものであると瞬時に察すると脱出を試みた。

「に、逃げる、ぞ。う、馬だ」

万極は倒れ伏している羌?を無視して馬に跨ると、正面から向かつて右に馬を走らせた。

「や、やつらはひ、左からし、少数で、侵入し、た。すでにあ、穴は塞がれてい、る。こちら敵はい、いない」

虎豹は駆け出した趙將を追うように馬首をそちらに向けたが、万極が念を入れて集めていた軍が壁となり追撃の速度を緩めざる負えなかつた。

「ツク さすがに鋭いな。象ツ」

「行つてみるけど、期待しな……………なツ。嘘。ツごめん、姉さん」

玄象は視界の隅に移つた倒れ伏す見慣れ羌族の衣装に目を奪われていた。そして、追撃部隊から離れると倒れ伏している妹の姿を確認した。

「?。あんたなんでこんなところに……………」

そうして玄象は、倒れ伏す羌?を護るようにならぬ場から動かずに佇んでいた。

一方、虎豹は玄象の離脱によつて万極を討ち取ることが困難であると即座に判断すると、追撃を断念。そこから、朱錐たちを包圍していたために、退却の銅鑼に遅れて下がる趙兵の殲滅に切り替えた。

「趙將万極はすでに恐れをなして逃げたした。残りは烏合の衆だ。殲滅しろツ」

虎豹の檄に応えるように、精兵三百は敵を大いに討つた。また、守勢に回つていた朱錐は、趙軍の退却する方角を確認すると、その反対側の盾を退かせて武器を振るつて道を拓いた。

「こちら側から追撃に入るぞ。皆の者続けツ」

朱錐はまず反対側をこじ開けることで、趙兵の背後をとると追撃に入らせた。

その結果、朱錐は二百ほどの損失に対して、趙軍には千を超える損害を与えることに成功した。

第32話

「あなたには戰場から消えてもらいます」

龐煖の殺戮と万極の出現で血の夜が明けた五日目の早朝。

朱錐たちは、救援した飛信隊を連れて昨夜の爪痕が残る野営地に戻っていた。

「おう。帰ったのか朱錐」

「ああ、すまないな。録鳴未。後事を任せてしまって」

録鳴未は「気にすんな。無事ならいい」と出迎えたあと、王騎からの言葉を渡した。

「王騎様より呼び出しを受けた。虎豹。指揮は任せる。馮は部隊の編制をすませてか

ら、兵には休息をとらせてくれ。濯と洪は付いてきてくれ。あと玄象のことなのだが

……」

「すまない。でも、妹が見つかったんだ。それに、もとより万極の動きは早くて確でも

あったんだ。象が悪いわけじゃないよ」

「いや、隊規違反のことではない。それに象はもとより虎豹付きだ。私から言うことは

何も無い。ただ、したいようにさせてやるといい」

「ん、わかったよ。ありがとう」

そうして朱錐は「あとは任せた」と虎豹に目配せして頷き合うと王騎の下へと馬を走らせた。

その頃、力を使い果たしたまま眠りについた羌?の傍には、玄象が寄り添っていた。

「この馬鹿は、巫舞を使い過ぎて戦場で眠り込むなんて、ほんとにお馬鹿なんだから」

玄象は、すやすやと眠る羌?の姿になつかしさからか視界が少し滲んでいた。そうしてしばらく頭をやさしく撫でてから、気を取り直すと勢いよく「ベシツ」と頭を叩いた。

羌?が「痛ツ」と目を開けて上体をおこすとそこには……………。

「象姉がいる……………死んだはずなのに。えっ、え?ほんとに象姉なの」

「生きてちゃ悪いのか。この寝坊助がツ」

と再び羌?の頭を叩いた。

「痛い。それにこの叩き方は象姉だ」

玄象は羌?の言葉に呆れるような顔になると言葉を発した。

「つたく、あんた私をどういふうに覚えているんだい」

「しよ、象姉ツ」

玄象は涙でぐしよぐしよになりながら抱き着いてきた羌?を「よしよし」とあやすように背中を叩いて落ち着くのを待った。そして、落ち着いた頃を見計らって、これまでの経緯を話した。

「そういうわけで生き残ったってわけさ。ちなみに里ではなんて聞いてたんだ」

「祭で幽連たちの徒党に囲まれて、最後は首を刎ねられて焼き殺されたって。死体のそばに白鳳もあつたからってつきり」

「概ね間違っちゃいないよ。ただ必死に逃げて拾われてたまたま里と仲介できるお大臣がいてね。だからもう私は羌族とは名乗れないんだ。ただ衣装については言われてないから、色だけ少し変えてあとはそのままさ」

と話して最後に「なんて幸運なんだろうって思わない日はなかったよ。姉もできたし」と締めくくった。

羌？は割とざつくりとだけ話しを聞いてあとは流していたが、最後の一文だけは聞き逃さなかった。

「姉？象姉に姉がいるの」

「うん？もちろん血は繋がっちゃいないよ。あんたと私のようなもんさ」

「ふーん、わかった。それでどんな人なの」

「物凄く強くて、奇麗で、格好いいよ。多分もうすぐ来ると思う」

噂をすれば影が差すとまではいかなないが、朱錐を見送った虎豹はそのまま玄象たちの様子を見るために顔をだした。

「ん。おつ、妹は起きたのか。良かったな。象」

「はい。ちょうど姉さんの話をしていた所です。ほら、？も挨拶して」

「羌？は虎豹の姿を認めるとじつと眺めてから呟いた。

「はじめまして、羌？です。虎のお面を被った変な人」

「すかさず玄象の拳が羌？の頭を捉えた。

「痛い。象姉。私は本当のことを言っただけ」

と悪気もない様子で言い放つ羌？とそれを嗜めるように言葉を重ねる玄象の姿に、虎豹は本当に仲のいい姉妹であることを確信した。

「ふふッ 変なお面か」と虎豹は徐に面を外した。

「羌？はさらされた魅力あふれる虎豹の素顔に思わず「きれいなひと」と言葉を発した。

「だから言っただろ。かっこよくて綺麗だって。それにものすごく強いから。姉さんは」

「それは姿を見ただけで分かった。隙が見えない。でも私の巫舞なら負けない」

「あんたは何で張り合ってるんだよ」

虎豹はなんとなくだが羌？の気持ちに察せられた。

「羌？はね、自分の姉が私に取られたような気がしてるんだよ」

虎豹の指摘が凶星だったのか「そんなことない」という言葉とは裏腹に、頬は朱を注がれたようになっていた。

「まったく。私が羌族でなくなっても、あんたはいつまでも私の妹。わかった？」
と玄象が羌？の頭をぼんぼんと叩くと「……………うん」と羌？はそっぽを向いた。

ところ変わって、信は医務室として使われている天幕で目を覚ましていた。

「こ、こは。それに俺は……………ッ」

信は状況を思いだすと瞬時に上体を起こしたが、同時に躰に走る痛みに顔を歪ませた。それでも、持ち前の反骨心からか言葉を発した。

「いってえ。龐煖つつたか。あの野郎は今度会ったら絶対ぶつ殺してやる」

そこに、信の様子を見るために訪れた尾平の姿があった。

「し、信。気が付いたのか。よかったあ、このまま目を覚まさないかとおもったぜ」

と信は馴染みの出っ歯の壮健な姿に安堵の息を吐くと、気になっていたことを尋ねた。

「尾平。弟の尾倒のやつはどうなったんだ。俺の隣にいたはずだ」

尾平は信の言葉に顔を歪ませると言葉を発した。

「あいつは、お前を護るために……………役目を果たしたんだ。顔を見て笑ってやってくれ」

尾平はそう言葉を発すると、信がいる寝台の隣で白い布を顔に掛けられた躰に視線を向けた。

「う、嘘だろ。び、びとう」

悪い夢なら覚めてくれとばかりに、信は顔に掛けられて布をまくった。

「おい……………、何に寝てんだよ。尾倒。俺が大将軍になるところを見届けるって言つてたじゃねえかよ」

そして信は、「おい、起きろよ。なあ」と尾倒と躰を叩いた。

「……………何泣いているだよ。信。痛みで目が覚めたじゃねえかよ」

と尾倒が声を発した。「ツ!」と驚き距離をとる信に「見たか。いまの信の驚いた顔」と尾平は天幕から覗く飛信隊の生き残りとともに、にやにやと笑っていた。

すべてを察した信は「びくへくえく」と怒りを充電するかのように言葉を発すると爆発した。

「てめえ冗談でもやっていいことと悪い事つてのがあるだろうがああああ」

と信の怒声は天幕に響き渡ると尾平に制裁を加えるべく駆けだした。

その頃、実践を観戦するために高台にいた蒙毅や河了貂などの軍師候補生は、突如昨日現れた李牧と名乗る男の勧めでその護衛カイネとともに、より戦場を見渡せる城跡にいた。

「このようなところに古城跡があるとは知りませんでした。李牧殿はこの辺りに御詳しいのですね」

「いえいえ、そのようなことはありませんよ。たまたまです」

蒙毅は、李牧とカイネが帯剣していた剣を念のために預かり、そのうえで少しでも素性を探ろうとしていた。

「蒙毅殿はそのご年齢からして聡明であられるようだ。私も見習いたいくらいです」

と李牧と名乗る男は万事そのない返答をして、名以外をさらさなかつた。そんな二人の応酬とは縁がないように、河了貂は李牧の護衛であるカイネと会話を重ねていた。

「ふーん。やつぱりカイネはいいね」

「うん？なにがだ河了貂」

「だってカイネは戦えるんでしよう。俺にはどうしたってそんなことできないから、みんなとは一緒にいけないし」

「あー。まあ私は戦わないといけなかつたから自然とだ。それにお仕えすべき人に出会えたからここにいる」

「あの李牧ってひと？」

「李牧様、だ。まあなんだ、お前だって戦場に立つために軍師の勉強をしてるんだろ。まずはやるべきことをやりな。文句ばかり言っても仕方ないだろう」

河了貂はその言葉に「それはそうだけどさあ」とわかつてはいるけど、なんだかなあという気持ちの抜けなかつた。そんな様子にカイネは、知り合つたばかりとはいえ、少し情が移つたのか忠告するように言つた。

「いいかい、河了貂。一緒に戦場に立ちたい奴いるのはわかったけど、戦場はそんな甘い場所じゃないよ。朝笑ってたやつが昼には死んでる。ましてや軍師なんてものは、そこにそいつを送り出す側だぞ。あんたの知り合いがどんな奴か知らないけど、そういう覚悟はちゃんとしときな」

カイネの真剣な忠告に、河了貂は少し俯きながらも「わかつてるよ」と元氣なく答えた。

「はい。この話は終わり。で、どんな奴なんだ、そいつは」

と、カイネは少し言い過ぎたなど反省しながら話題を変えることにした。

「……………信っていうんだ。でも、馬鹿だし、粗暴だし、勢いだけはある馬鹿。それに鈍感」

とりあえず、碌な男じゃないなどと考え始めたカイネはそのまま思ったことを口した。

「あんた、なんでそんなやつのために戦場に出ようなんて考えたんだい」

「やさしい所もあるんだ。馬鹿だけど。……………たまに頼りになる」

カイネは「この子悪い男に引つ掛かるような娘じゃ」と少し心配になりながらも大人しくきくことにした。

第33話

朱錐たちが野營地に帰還を果たした頃。

夜明け前に移動を始めていた蒙武率いる蒙武・隆国の連合軍は、趙本陣を捉えていた。「あれが奴らの本陣だ」

太陽が顔を出し始めたのを確認した蒙武は、眼前に拡がる趙本陣を見下ろすと自軍三万の兵に向けて猛りを解き放つように号令を発した。

「決着の時だ。趙莊を討ちこの戦を終わらせるぞ。全軍で突撃する。俺に続けえッ」
蒙武・隆国連合軍三万は号令とともに趙本陣に突撃を開始した。

同刻。

蒙武と行動をともししていた隆国が上げた狼煙によつて 事態を把握した王騎は、本陣からの進軍を開始した。

「敵本陣発見の報せですが、随分と奥深くに構えたものです」

王騎は、思考を纏めるように声を発しながら次の一手の下準備を始めていた。

「録鳴未に伝令です。同様に、本軍が通過後、鱗坊、同金にも出しなさい」

太陽が頂点をむかえた頃、王騎は本軍の移動速度を緩めると本陣から上がる旗の確認

をさせた。この旗は、本陣を起点にして各軍長に情報を伝えるものである。また軍長から上がった旗で情報を集約する役目も担っていた。

「殿。隆国からの反応がないようです」

「趙本陣発見の狼煙から、随分と時間が経過していますね」

王騎は副官騰からの言に、敵本陣に突撃しているであろう蒙武・隆国軍の動静がわからないことに、違和感を覚えていた。

「騰」

「ハッ、こちらからの呼びかけに隆国からの返答がない。ということは、殿の禁を破つてさらに奥へと分け入ったと推察されます」

「その通りです。隆国が付いていてなお、そのようになる事態となれば答えは一つでしょう」

「龐煖です」

王騎は騰との会話を重ねることで己の考えを補完すると「蒙武・隆国の両軍がよくないう状況に置かれている」との予測は間違っていないと判断した。ゆえに、録鳴未からの返答を受けた王騎は行軍速度を速めた。

そして、王騎は本軍一万とともに、狼煙が上げられた場所に到着した。そこは確かに趙本陣であったが、趙軍、秦軍のどちらの姿もなく、戦いの爪痕だけが残されていた。

王騎は、軍を一旦そこに留めめて斥候を放ち、状況の把握に努めた。そして、斥候が戻るにつれて、この場所で何があったのかを知ることになった。

それによると、蒙武・隆国軍の強襲は成功して、序盤は優勢に戦いを進めたが、本格的に迎撃にでた趙軍により勢いは衰えたこと。さらに、現れた龐煖の背を追う形で更なる山奥へと両軍は消えたことがわかった。

王騎は簡易的な軍議の場で参謀として連れてきている幕僚の言に耳を傾けていた。

「先ほど帰ってきた斥候から、蒙武・隆国軍は落石の計でおよそ半数を失ったことが判明しました。その後も龐煖の追撃はつづけているようですが、さらなる罠に苦しめられていることは容易に想像がつきます」

「敵総大将が目の前に現れれば、誰であろうと追ってしまいうことに不思議はない。殿、如何為されますか」

「……………今、蒙武が受けている罠は本来ならば私に使うべき策のほずです。それを惜しみなく蒙武に使われているとすれば、最悪、蒙武は死ぬことにもなりかねません。ですが……………」

王騎は、今語った自身の言葉とは裏腹に、仮に、己が蒙武の状況に置かれたと思考して、この罠に嵌るほど引き込まれたであろうか、と自問をしたが、答えは否であった。龐煖という存在は確かに趙軍総大将として、大きな首級である。

しかし、両側を断崖に遮られた狭路といういかにもな地形に入り込んでまで追跡する要因足りえるだろうか、と自身に置き換えて考えた時、些か頼りない印象を抱いていた。「殿？」

言葉を発してから微動だにしない王騎を心配した幕僚の一人が声を掛けたが、騰は口の前に人差し指を立てて静かにするようにと無言で訴えた。

どこのどなたかがこの絵図を描いたのかわかりませんが、私と龐煖の因縁を利用して、ここまでの舞台を用意した上、さらには、戦場にすら姿を見せていない事実は賞賛に値します。もし仮に、今のこの状況すらその者の手の平の上であつたとするならば、この先に、私を確実に仕留める仕掛けがあるのは明白でしょう。

ですが

「どうやら、一つ、思い違いをしているようですねえ　ンフッフ」

王騎は、思考を纏めると蒙武・隆国軍の救援と併せて趙軍、さらには趙莊を葬るために進軍することを決断した。

その頃、蒙武・隆国軍は、趙莊の仕掛けた策に嵌り、徐々に窮地へと追い込まれていった。

蒙武・隆国軍三万による突撃当初は、強襲したこともあつて優勢にことを進めていた。しかし、状況を理解した趙荘の行動は素早く、突撃の勢いそのままに駆けてくる秦兵を張り巡らさせた防御柵に巧みに誘導しては、反撃に転じて、その勢いを殺していった。そして、総大将龐煖を囿に使うという大胆な策で蒙武を狭路へと釣り上げると落石の計を使つてその多くを葬った。さらに、狭路で身動きが限定されている蒙武・隆国軍を伏兵で前後に分断しては、殲滅していた。

なんとか狭路を抜けた蒙武・隆国軍であつたが、すでに当初三万いた兵は三千にまで減らされて、さらには、包囲されるまでに至つていた。

「敵と距離を空けずに戦うのだ。空ければ弓に射られることなるツ」

狭路のなかで幾度となく伏兵にあつて重傷者を多数抱えたの状況で乱戦を続けることは、愚策であるにもかかわらずに、隆国は即座に殲滅される事態を避けるために、苦肉の策ではあるが乱戦の状態を保たせていた。

「この私が付いていながら、何という様か」

隆国は、自虐を多分に含んだ物言いしながらも、状況を好転させる策を模索していた。が、

「この状況では、もはや時間の問題か……」

狭路を抜けた先にあつたのは、断崖に囲まれた釣り鐘状の形をした平地であつた。す

でに入ってきた狭路は塞がれ、背には断崖を背負っている。また、初日に力で包囲をうち破った蒙武にも幾度となく襲つてきた伏兵によりその力は奪われていた。

蒙武・隆国軍は三千、二千五百、二千と削られ続けて、すでに千にまで迫ろうとしていた。

「……までか……。ッ、あれは」

隆国は砂塵の先に見える旗には秦の文字を風に靡かせた王騎本軍の姿をみた。

「来たか。……が貴様の死に場所になるのだ。王騎よ」

趙将趙荘は、王騎がこの地に出現したことに歓喜していた。それは、開戦から五日目の今に至るまでの過程、そのすべてがこの場所に集約されているからに他ならなかった。

「もはや死に体の蒙武は捨て置け。ここからが本番だ」

趙荘は決意を言葉に乗せるように、号令を発した。

「大天旗を掲げよ。この地にて王騎を討つッ」

趙国の大天旗とは、かつて列国にその名を刻むほどに猛威を振るつた三人の大將軍のみが使用することを許された旗のことで、趙国の武の象徴が存在する証の旗でもある。それを掲げたという事実は、この場に比肩する人物いるという証明に他ならなかった。

故に、趙軍の士気は大いに盛り上がることになった。

「大天旗ですか。ソッフ 龐煖さんが三大天を名乗るとは、どんな茶番なのでしょうねえ」

王騎の目からみて、龐煖という存在が軍を率いることはない、と断言できた。

「まあその飾りにも効果あるのだから、存外に侮れない所が妙ですが」

実際には軍を率いなくても「大天旗を趙王から授かった」という事実があれば、兵を鼓舞する力となり、つまりは、それだけかつての三大天の名が凄まじい力を示していた証左であつた。

「こちらにも六将旗を掲げましょうか」

「ソッフ そんなものはありませんよ、騰。ですが、久しぶりにあれをやっておきましょうか」

信とその信が隊長を務める飛信隊は、録鳴未軍の野营地から、王騎將軍に合流する動きを見せた兵に混じる形で、この地の戦いまで足を運んでいた。

そして、対峙する趙からの士気が爆発したような歓声に身震いをしていた。

「あつちはすげえ騒ぎだ。こつちも向こうみたいになんかやるべきじゃないのかよ」

信が敵の雄たけびに少しばかり気圧されていると、自軍の端から歓声が沸き、それが徐々に自身に近づいていることに気付いた。

そして、なにが起こっているのかわからないままに歓声のような雄たけびに飲み込ま

れた頃、悠然と矛を掲げた王騎の姿を信は目にした。それは、ただ本当に、王騎が矛を掲げて駆けているに過ぎない姿であるのに、信の胸の奥にあった闘志に火を点けると熱く燃え上がらせた。

胸の内から湧き上がる力に背を押される。

「これが、大將軍ってやつなのか」

信は王騎大將軍という存在の大きさを肌で感じとっていた。

第34話

趙国による馬央侵攻から始まった戦いは、ついに両軍総大将が対峙する刻を迎えていた。

「開戦から五日。……いえ。因縁からは九年ですか。生きしぶといあなたには、ここで消えてもらうとしましょうか」

「囀るな、王騎よ。貴様に敗れたのは我がまだ未熟であつた。ただ、それだけだ。天に我を示すがため、ここで貴様を殺す」

「三大天など、どんな茶番かと心配していましたが、安心しましたよ。お変わりないよう
で」

王騎は、徐に目を閉じると、熱く輝いていた「……大王様」あの日々に惜別を告げた。

「貴様を殺す」

「もはや、あなたに言葉は意味を為さないのでしょうねえ」

時は両軍の士気が鼓舞された場面まで遡る。

「では、始めましようか。騰。行きなさい」

王騎は士気が最高潮に高揚していた瞬間を見極めると副官騰の騎馬隊に突撃を命じた。騎馬隊は趙軍が迎撃のために放った矢を右へ左へと転回して二度躲すと左、中央、右軍の三軍からなる趙軍の左軍に飛び込んでいった。

王騎は、騎馬隊の突撃に合わせるように、信を含めた歩兵部隊を左軍に突撃させた。歩兵部隊もまた迎撃のために放たれた矢を左に転回して交わすと進路を変えたまま中央本陣に目がけて進軍した。

けれど、騎馬隊とは違って歩兵の速度では奇襲とはなり得ず、逆に敵前列の部隊が進んで信たち歩兵部隊の横から喰らいつく形となつて打撃を与えた。

信たち歩兵部隊は敵の横からの攻撃によつて分断されることになつたが、そこに、一切の悲観はなかつた。

「すげえ。本当に王騎將軍の言つた通りだ」

敵味方入り乱れる乱戦となつた最中、信は、ただただ、王騎の思い通りに進む戦いに驚きを隠せなかつた。

ただ、趙莊の判断はあながち間違っているわけではなかつた。

敵歩兵部隊が弓矢を嫌つて転回したことで、隊列の弱点の一つである横腹をこちらに見せた所を正確に攻撃しただけである。

ただ、それは王騎が騎馬隊を突撃させた瞬間から、趙莊ならこの策に掛かると過程を踏むように軍を動かしていなければ、である。

敵左軍と中央軍前列が信たち歩兵部隊に釣られて前進したことで、本軍の守備は薄くなり、その敵の後ろを回り込む形で王騎本軍は本陣目掛けて突撃していた。

「歩兵の皆さんは良い仕事をしました。次は私たちが仕事をする番です」

王騎が先頭を駆ける本軍は、趙中央軍をもともせず切り裂いて、趙莊に迫っていた。

「王騎めッ。……………俺では及ばぬか。だが、まだ終わらせはしない。最後まで付き合ってもらうぞ」

趙莊は迫る王騎軍からすこしでも距離をとるため、釣鐘状になっている窪地の奥へと本陣の移動を開始していた。劣勢に立たされた直後に、実質的に戦の采配をしていた将が背を見せるように移動するのは、士気低下につながる愚策ではあるが、趙莊は構うことなく実行した。

すべては王騎を討ち取るという大義のために。

逃げる趙莊、追う王騎。すべての力関係を示すような構図は秦軍を大いに盛り上げ、翻つて、趙軍には敗戦の気配すら漂い始めていた。

そこに、水を差すように王騎の前に姿を見せたのが、さきの龐煖であった。

「我こそが武神龐煖也ッ」

己を鼓舞するように声を挙げて王騎に突撃して矛を振り下ろした。

両軍総大将は、一騎打ちとなって剣戟を交わしていた。自らを武神と名乗り、こと個の武芸においては無双を誇る龐煖に対して、秦国六大將軍の一人であり、その名を中華に轟かせた王騎の一戦は、一進一退の攻防が続いた。

その間にも、戦は進んでいく。

王騎が龐煖に足止めされたことで、一息をついた趙莊であったが、それもつかの間のことであつた。左軍に食い込んでいた王騎軍副官騰の騎馬隊が迫っていたのである。

「奴も化け物の類か……」

本陣を後方深くに布陣しなおした趙莊であつたが、騰騎馬隊を前に数では勝っていないながらもなお劣勢に立たされていた。

「龐煖様が王騎さえ討てれば、勝利が決まるというのに……」

趙莊は、同じく趙本陣に控える側近の言葉に反応して言葉をこぼした。

「馬鹿をいうな。今、この趙軍の指揮系統はこの本陣がすべてだ。もちろん、龐煖様が王騎を討てるのが最善ではあるが、その逆は最悪でない。この本陣さえ残っていれば、我らの勝利が決まるのだ」

「なつ、ちよ、趙莊様ぞ、それはどういふことでしょうか」

「いや、今のは口が過ぎた。忘れる。それよりも、奴らの突撃を留めることの方が先決だ。守備隊を進路に並べて時間を稼ぐぞッ」

王騎、龐煖の拮抗していたかにみえた戦いの天秤は、動き出そうとしていた。

「二人山に籠っているあなたには、理解できないでしょうが、この双肩には数え切れないほどの想いが背負われているのです」

「語るに足りぬッ。武は想いなどに左右されぬ。弱きは地に伏し、強きは天に示す。それが世の理だ」

苛烈に続いていた剣戟は、技量で勝る龐煖を王騎の蓄積された経験が上回り、龐煖は一方的に受けに回る展開となつてからは致命傷を避けるので精一杯となつていた。二人の強さは端的にいつて、個と個で見れば間違いなく龐煖が勝つていたであろう。それほどまでに、龐煖は武というものを突き詰めてすべてを捧げていた。けれど、群として中華を駆けていた王騎が持つ数多の経験は、それを陵駕していた。群を経て個となつた王騎の矛は、個を突き詰めた龐煖の武を上回つていたので。

天秤を動かしたのは他ならない想いの重さであったのか、ついに王騎の矛が龐煖を捉えようとしていた。

「お別れです。趙軍総大将の龐煖さん」

「……………」

だが、振り被った矛を王騎は振り下ろさなかつた。なぜなら、手を止めざる負えないほどに大地が震動を示したのに気づいたからだ。

「ここで新手の登場ですか。これは骨が折れますねえ」

王騎は自身の予測を超えて、今この時に現れた敵援軍を見据えると、矛で「トントン」と肩を叩きながら思考を先に進めて、全体図を作り変え始めていた。

釣鐘状の窪地となった戦場に蓋をするように現れたのは、趙の援軍、およそ四万であつた。これにより、現在の状況は、釣鐘の奥に趙莊本陣、次に騰騎馬隊、その先で王騎と龐煖が一騎打ちの形で左右に分かれている同数の両軍の姿、そして、その蓋として現れた趙軍四万である。

「大天旗を掲げよッ」

新たに現れた趙軍がまず示したのは、趙三大天の存在であつた。二人目の三大天の出現に釣鐘奥に追い詰められていた趙軍の士気は大きく鼓舞された。

「大天旗ですか……………。ソフフ。なるほど、あなたはそこにいるのですねえ」

翻つて、秦軍の士気はどん底へと陥っていた。戦い終盤の盤上に覆いかぶさるよう出現した大軍は、すでに多くの疲労を抱えた彼らから戦う気力すら奪い去さろうとしていた。

「ようやく、ようやくこの時がきましたな。李牧殿」

趙援軍四万の本陣には李牧を含めて三人の姿があった。

「魏加殿、はい。すべては王騎を確実に討つために、廩門からの情報を封鎖したのですから」

李牧とは、蒙毅や河了貂たちとこの戦を観戦するために、帯同していた人物と同一である。また、趙が誇る大將軍、趙三大天の一人である。また、隣に並ぶのは、中華十弓が一人、魏加であった。

「それにしても、彼らには申し訳ないことをしてしまいました。戦ですから承知してもらう他ありません」

李牧は、王騎を討つ盤面が揃ったことで、ふと一晩だけとはいえ帯同することになった者たちのことを案じていた。

「李牧様。あいつらだつて、命があるだけマシでしょう。李牧様じゃなかったら殺されてる所だつたんだから」

「カイン。そうかもしれませんが、秦人だからと無暗な殺生をしては、新たな争いをうむだけです。ですので、私が特別なわけありませんよ」

カインは、李牧のこの穏やかな気性を好ましいと感じてはいる。が、実際の問題として、趙人の秦人に対する怨念とも呼べるものを少しでも理解している側としては、李牧はやはり特別な思考をした人物であり、慕うに値する人だと改めて想っていた。

李牧に彼らと呼ばれた人物に目を向けてみよう。

時刻は、王騎本軍が釣鐘状の窪地に到着する前まで遡る。

「残念ながら、この戦の趨勢は、ここからでは望めそうもありませんね」

李牧が発した言葉に蒙毅は「それは仕方ありませんよ」と返してさらに続けた。

「今の所、両軍の大隊はそれぞれが睨み合つてほとんど動きがない上に、趙本陣は、完全に視えなくなりました。秦本軍もそれ追うように到達後、さらに奥へと消えていきましたから」

「ええ、その通りです。この戦いのすべては、ここから視ることのできない両本軍が対峙している場所にこそあります」

「こそあります。とは、李牧殿は、何をお知りになられているのですか」

「ふむ。蒙毅殿は本当に聡明な方ようだ。あなたは将来立派な方になられることでしょうね」

「茶化さないで頂きたい。李牧殿。ことの次第によつては、このままお返しできなくなりますよ」

蒙毅は佩いていた剣の柄に手を駆けて李牧を見据えていた。それに河了貂とともに近くで座っていたカイネが「李牧様になにをツ」と立ち上がろうした。が、李牧が手の平を見せて制止させた。

「そうですね。では、少しだけお話ししましょうか。今なら何か一つだけになります。正直にお答えすると誓いましょう」

蒙毅は、李牧の言葉は本心であると察すると、提案に乗る形で剣の柄から手を放して、思考の海に沈んでいった。

何を聞くのが正解だ。

もとより李牧という人物の得体はしれない。だが、李牧殿の見識の高さにあの身のこなし、さらにはカイネという護衛が付いている点から見ても、どこかの名家の当主や王宮の要職についていたとしても、驚きはしない。けれど、寡聞にして李牧という名をきいたことすらない。ということ、少なくとも秦人ではないのは確かだ。それに、この地に詳しい事に加えて、この戦いを観戦に来たということ、趙人の可能性が高いこともわかる。だが「何が目的か」をきいたとしても、それは核心と言えるのか。或いは、魏人、楚人。だめだ、どれが正解かわからない。

だが、蒙毅が思考の海から帰還を果たす前に、事態は動いた。遠くから近づく振動によつて、思考から浮上した蒙毅が古城跡から下を眺めると、そこには、趙旗を掲げた軍の姿があつた。

「趙軍がなぜここに。いや、李牧殿が趙人という証左。ならば聞くことは一つ。貴方は何者だ」

「何者、ということですが、もちろん、李牧という名のことではないでしょうね」

「ツ趙軍が迎えを寄越すほどの人物であるあなたの正体をお教え願いたい」

「よい質問です。私は、趙の三大天の一人である、と言えば今のあなたにはすべてが伝わるでしょう」

「李牧殿が三大天、その軍がここに。そんな……まさか」

蒙毅は李牧の先ほどの言葉からその目的を察したように顔色が変わっていった。

「あなた方は最初から私の手の平の上にあったのですよ」

第35話

「私を欺き、これほどの兵を、今、この時に到着させるその技量は敵ながら天晴です」

両側が断崖に囲まれた釣り鐘状の平地に蓋をする形で出現した趙軍の数は四万にも及んだ。それは、この平地に秦、趙両本軍が到着した時点での総数を上回る数であり、勝敗を決定づける伏兵といえた。また、同時にそれだけの規模の軍を誰にも悟らせることなく出現させた李牧という漢の手腕も如実に物語っていた。

このあまりの出来事に王騎の側近でさえ、思考が停止してしまい立ち尽くす中、王騎は敢えて敵を褒めると不敵な笑みを浮かべた。

「ソフフ。見事としか言葉がありません。ここまでしてやられたのは、実に二十年ぶりくらいでしょうかねえ」

王騎は敢えて先に結論を言葉にはせずに語り掛けるように続けた。

「血が沸き立つ感覚を持つのは久しぶりですねえ。この私を欺いた策士の顔を是が非にも拝んでおきたいところですよ」

そうして、王騎は兵の意識を自身に向けさせると仕上げに入った。

「さて皆さん。いつまで呆けているつもりですか。この程度の危機など、私たちがかつ

て潜り抜けていきいた戦いに比べれば、どうというほどではありません。そうではありませんか、この王騎に付き従う精兵どもよ」

王騎の言葉に歴戦の兵士ですら気持ち下がを向いていたことに気付くと、恐れを、あきらめを振り切るかのように声を、拳を、掲げた。

「よろしい さあ、立て直しますよ」

王騎は満足そうに大きく頷き息を吐くと、矢継ぎ早に指示を飛ばした。だが、それ遮る者が姿を見せた。

「王騎。 どこへ行くつもりだ。 我との決着はついてはいないぞッ」

先の一騎討ちによって、朦朧としていた意識が回復した龐煖は、雑兵を斬り払うと再び王騎の前へと歩み出していた。

「おや。 決着もなにも、先ほどの事をもうお忘れになられたようでー」

「ツまだ勝負はついてはいない。 我を殺すまではなアツ」

龐煖は王騎の言葉を遮り勢いに任せて矛を振り下ろす。対して、王騎も「仕方がありませんねえ」と言葉をこぼしながら矛を強く握り構えたが、遮る影に手を止めた。

「ムうツ、邪魔をするなツ」

龐煖は、突如として現れた何者に向かつて、激情に駆られるまま止められた矛にグツと力を込めた。が、微動だにしないことに驚き動きを止めてしまった。

「邪魔なのは貴殿のほうだッ」

朱錐は受け止めた矛を力の限りに振り払った。彼の者の膂力に任せた振り払いによつて龐煖は矛を持つ腕ごと軀を持っていかれて、騎乗のままにたたを踏み後退を余儀なくされた。

「王騎様。よろしいですね」

朱錐が落ち着いた静かな声を掛けると王騎もまたその意を汲んで言葉を返した。

「ええ、久しい感覚に血が滾っていたようです。あとは頼みましたよ。錐」

「諾」

「我に背を向けるつもりか王騎いッ」

龐煖は、王騎の視線がすでに己を捉えていないことに、強い憤りを覚えていた。

「ソッフ 先ほどまでとは違って、今のあなたと殺りあつてもわりにあわなんでしょうよ。

ねえ 龐煖さん。どうしても、とおっしゃるならば、この、私の盾を抜いてからにしてくださる？」

王騎は、龐煖の意識をさらつと朱錐に仕向けて悠然と背を向けると、本軍を適切な形に変更するために動き出した。

「どけえッ 我の邪魔をするなッ」

龐煖からすると、かつて敗れた因縁の最中に割つて入られた挙句、あまつさえ背を向

けられたことで怒り心頭であった。それゆえに、立ちはだかった邪魔者を一刀のもとに切り捨てようとしたが、対して、朱錐は威力のみで単調に過ぎたそれを押し下げられながらも受け止めると、再び力の限りに振り払った。

「どうであれ、しばしの間付き合ってもらおうか」

朱錐の介入によって一騎討ちの体が崩れると一気に両軍入り乱れる乱戦へと移行した。

「我らは王騎様の背後を守護する。馮ツ。盾の配置を見誤るなよ。重装盾は私の指示に従え。李豹は回り込む敵を迎撃。各員、ぬかるなよッ」

龐煖から距離を置くことに成功した王騎は、全隊を立て直すにあたり、現在の位置取りのまずさを理解していた。ゆえに、敵援軍の突撃をそのまま受けるこの場に留まることを良しとせずに、元より対峙していた敵左軍を障害物に見立てて、その後方に拠点を作らせるように指示を出すと同時に移動を開始した。

当然、王騎が移動をすれば「逃がさぬぞ。王騎いッ」とばかりに龐煖が再び迫ろうとしたが、そのたびに朱錐が毅然と立ちはだかったために近づくことは叶わなかった。

「龐煖の武は群を抜いている。それゆえに、我らは戦いはしない。重装盾、一丸となりそ

の身を盾と為せッ」

朱鉦は龐煖が王騎に目を奪われていることを利用して、巧みにその進行方向に重装盾を展開しては行く手を阻んだ。

「盾では我は倒せぬぞッ」

龐煖は、絶对的に揺らぐことのない武への自尊を宿しているからこそ、今、この時に廻り道をするという選択肢を思い描くことができなかつた。

だからこそ、大いにこの足止めに掛かつていた。

「ぬッ」

龐煖の一刀を受け止めた重装盾隊は、揺らぐのみで、道を切り拓くことはできなかつた。

「だからどうだというのだッ」

面で突破できないのならば、点を突くのみ。と自身の軀を回天させながらの特異な気を込めた逆突きを放つた。これには、重さと頑強さが売りである重装盾ですら形を保てずに碎ける結果になった。

龐煖は、そこから左右にいる盾を押しつけようと力を込めようとしたが、不意に背筋に走つた不穏な気配に、軀を捻りながら後ろに飛び下がった。と同時に轟音が響き渡る。

「重装盾を砕くとは、流石。だが、我らを楽に通過できるとは思わぬことだ」

回天と特殊な気を込める逆突きは一点を叩く大技であり、突き出した矛を収めるまでは、消すことのできない隙が存在していた。

「貴様ツ どこまで我の邪魔をする」

龐煖は、朱錐の振り下ろしを辛うじて躲して距離をとったが、その隙に開けた穴は塞がれて、再び壁となつて行く手を阻んでいた。

「貴殿が諦めるまでだ。ここが正念場である。一瞬の隙が死を招くと心せよツ」

朱錐の檄に部隊は「二応ツ」と大きな熱を放つとそれを共有し、一つになると敵を怯ませる威を発していた。

「さあ我らと根競べと行こうか」

龐煖はその熱量に当てられたのか、厚く堅い扉を護る鬼の姿をも幻視してしまった。

また、龐煖にとっては、この塵芥のような何者でもない者たちに躓かされている状況に理解が追いついてはいなかった。そしてそれは、次第に歩みを重くさせ、遠ざかる王騎の背には焦燥感すら覚えさせる結果となつた。

武において、およそ人外の極みに立たんとする「個」である龐煖だからこそ、「群」として立ちふさがる敵を打破する術を見いだすことができずにいた。

それはまさに、己が武を天に示さんとするがゆえの立ち往生であつた。

王騎と龐煖の一騎討ちがうやむやになった頃、実質的な総大将であった趙莊に王騎の副官である騰の刃が届いた。

「この趙莊が死のうとも、もはや勝敗は揺るがない。先に待っているぞ。王騎いッ」
騰騎馬隊に貫かれた趙莊は、件の言葉を叫び、その生涯を終えた。

ひとまずの目標を排除した騰騎馬隊は、次なる目標にむけて馬首を揃えていた。

「趙莊は討った。殿には朱錐が付いているから問題はない。敵はこちらの数倍は居よう、ゆえに我らは新たに出現した敵本陣まで貫く。隙を作るぞ」

騰騎馬隊は隊列を整えると再び死線のさきに身を投げ出すように駆けだした。

この戦場に蓋をした趙指揮官李牧は、第一陣を出撃させてからも刻々と動く戦況の動きを静かに頭の中で組み立てていた。

「龐煖様は、王騎を討ち果たせるでしょうか」

その思考の泉に一石を投じたのはカイネであった。

「そこはおそらく、としか」

李牧はカイネの一言で、一騎討ちをしているはずの龐煖に関する報告がないことになつて気に掛かっていた。

「誰か二人の一騎討ちの行方を知るものはいませんか」

すると「この者が詳細の報告に参りました」と一人の兵を連れてきていた。

「龐煖様と王騎の一騎討ちは敵將の介入によつて、決着はつきませんでした。その後王騎はその場を離れています」

「ふむ、王騎は龐煖の相手をしませんでしたか、流石ですね。では、龐煖は王騎を追っていますか」

「いえ、追うことは叶わず足止めをされております」

李牧は「龐煖を足止め、ですか」と呟きながら、自身の知り得ない何かが起こっている。とふいに胸騒ぎを覚えた。

「それは何者によつてですか」

「名前まではわかりません。ですが、足止めを行う重装盾の姿が見受けられましたので、初日に涉孟様を討った部隊ではないかと」

「報告では、第六軍副官の虎豹、でしたか」

と李牧は魏加とカイネに視線を送るが両者とも首を横に振っていた。

「誰かその第六軍の將の名を知るものはいませんか」

李牧は少しでも正確な情報を得るために問いかけた。しばらくすると、前線から帰還してたであろう傷だらけの兵から「朱錐と呼んでいるのを聞いた」と報告があつた。しかし、李牧には心当たりがなく、再び両者に視線を向けた。カイネは先ほど同様に首を

横に振っていたが、魏加は「朱錐？どこかで聞いた名だ」と首をかしげていた。

「魏加殿には心当たりがある様子。その者になにか特徴はありませんでしたか」

「はつきりとしたものでしたら、鬼の面でしょうか」

魏加は「鬼…の面、朱錐」と言葉を並べるとよりわけられていた記憶が一つにまとまるのを感じた。

「その者が鬼面の朱錐と呼ばれていた者であるなら、覚えがあります。当時は昌文君という将の副官であったはず。中央が主戦場でしたので、北方が拠点であられた李牧殿が知り得ぬのも無理はないかと」

李牧は魏加の言葉通り、寡聞にして鬼面も朱錐という名も記憶に存在していなかった。「そうであったとしても、龐煖を止めるほどの手練れの名が多少なりでも流れなかったとは考えにくいのですが……………」

「李牧殿。その者が件の人物であるなら、納得はできません。私の知る限りこの五年、いやおそらくはもつと。その名が挙がったことはないはずです」

「……………そうですか」

李牧は新たに知り得た情報を精査しながら言葉を続けた。

「将の名は朱錐。涉孟殿を討ったのはこの者の副官の虎豹で間違いありませんね」

側近が肯定を示すように頷くと、確認するように、さらに言葉を発した。

「軍の規模はどの程度でしたか」

「昨晚、万極軍が接触した相手は、重装盾隊と盾隊が多く配置されていたとのことで、件の第六軍であると推察されます。規模で言えば二千、多くて三千と報告を受けています」

「二千から三千ですか。軍というよりは隊と言った感じですね。あの、李牧様は何か気になることがありませんか」

「カイネ。一人は龐煖を足止めにして、もう一人は涉孟殿を一騎打ちで討ち取るほどの手練れ。警戒するのは当然のことです」

そこで李牧は少し視線を下げると瞑目した。

「李牧様？」

「……………、ここにきていない大隊に伝令を出します。急いでください」

李牧は得体のしれない将が紛れ込んでいるという事実、今一度、何かを見落としてはいないかと、一人警戒心を強めていた。

第36話

「このまま崖を背に、左方に進行しながら敵の綻びを探します」

王騎は龐煖から距離を置くと、新たにつくられた指揮拠点に入ると各所に指示を飛ばした。そして、先んじて突撃を開始した敵第一陣との衝突を凌ぎ始めた自軍を前にしながら、思考をこの場からその先へと進めた。

一先ずですが、これで第一陣はしのぐことができるでしょう。ですが、敵援軍はおよそ四万、それに、趙莊の残兵が六千といったところ。対して、我が軍は、離れている蒙武・隆国軍の千程度を合わせても七千と少し。蒙武、隆国の所も気に掛かりますが、今は彼らの力を信じる他ないでしょう。

打開策とまではいきませんが、敵本陣に対して、意図的に左方向に我が軍をずらさせています。狙いを読まれていますね。鈍い方ならこれだけでも効果は期待できるのですが、この様子では無駄骨となりそうです。厚みも距離も均等にすることで指揮による誤差を生じさせない手腕は流石ですね。

さらに、兵力差を活かしての力技ではなく、どっしりとしたこの動き。こちらの戦力

を削りつつ疲弊させる狙いでしよう。

この状況では、時間の経過はこちらにとって不利。どうか打開したいところですが、まあ、易々とさせてくれるような将なら、こんなことにはなっていないからねえ。まったく、机上だけの策士とは違い、実を知る智将というのはやっぱりいいものです。今できることは一つですね。

「今は耐える時です。機は必ず訪れます」

「ンフフ、？公さん的には火の起こし所を探す感じですかねえ。」

李牧は、王騎の読み通りに無暗な力技に出ることなく「大軍に奇なし」と平地戦の常套手段を用いて王騎軍を徐々に削り取っていた。

そこにカイネは、ちよつとした疑問を呈した。

「李牧様。いくら過去に猛威を振るつた秦六将の一人とはいえ、数倍の兵の差があるというのに慎重すぎではないですか。匈奴相手でもここまでのことはされてなかったのに」

李牧はその疑問に簡潔に応えた。

「カイネ。兵力の差はもちろん承知しています。今は、無茶をせずじつくりと戦うことに意味があるのです。半端な策では、逆に、挽回の機を敵に与える可能性があります」

カインは「なるほど……」と呟いてはいるが、どこか納得しきれていない様子が窺い知れた。そのため、魏加はもう一つ付け加えるように言葉を発した。

「李牧殿は、策を用いないという策を使われているのだ。王騎程の傑物となれば、策一つでこの場を逃げ切る所まで描く可能性すらある。だが、策を用いないことでつけ入る隙をなくし、さらに、万事満遍なく兵をぶつけることで身動きすら封じる。これならば、どのような策士がいたとしても肝心の策を差し挟む隙間すら作らせることはない」

「つまり、今のまま続けられれば、必ず勝てるというわけですか」

李牧はカインの言葉に頷きながらも付け加えた。

「私は、必ずという言葉は好きではありません。なぜなら、戦の勝敗に必ずという言葉は存在しないからです。ですから、常に思考を働かせて、相手の変化を見逃さないように心掛けています。今も敵騎馬隊がこちらに進路を向けていること、そこから何を描けるのかを考えています」

李牧が最後に指摘した通り、趙荘を討った敵騎馬隊は、馬首をこちらに揃えて突撃を敢行していた。

「ふむ、では、私が牽制しておこうか」

「魏加殿。ならば、よろしくお願ひします」

魏加は言葉を残すと敵騎馬隊に弓を射るべく高台を設置させた。

「中華十弓が一人。魏加の弓を御覧に入れよう」

「ムッ」

騎馬隊の先頭を駆ける騰は、不意に飛来した弓矢の軌道を剣で変えることで事なきを得た。

「皆の者、射手がいる。おそらくは手練れ、気よ付けよ」

「騰様。騰様は我らの影にお下がり下さい。万が一があつては——」

「よい。この距離で、ましてや方角すら判つていて、私に当たることはない。前をみよ。次が来るぞ」

騰は敵射手の存在を無視して本陣を目指した。

「この魏加の矢が見えているのか。面白い、受けてみよ」

魏加は興が乗つたように、第二射、三射と矢継ぎ早に放つていった。

対して、騰は飛来する第二、第三の矢を顔色を変えずに受け流した。

「うむ。見事だ、秦将よ。だが、お主以外はどうか」

魏加は己の矢を苦も無く受け流す騰に執着することなく、標的を変えた。

次の瞬間には、騰の横を走っていた者が矢を頭に受けて落馬した。

「つム そうきたか。私が狙いならどうとでもなる。だが、この状況で止まるわけにはいかぬ」

魏加は騎馬隊が進路を変更しないことをみてとると、笑みを浮かべた。

「なるほど、止まらぬか。ならば、こちらは射つづけるのみよ」

中華十弓の名は伊達ではなく、弓が弧を描くたびに、騰騎馬隊の精兵が一人、また一人と脱落していった。

王騎は高台の射手からの攻撃を一身に受けている騰騎馬隊の姿に「まずいですねえ」と状況の悪さを察した。

それは、騰騎馬隊の構成に起因していた。

騰本人は言うまでもなく統率者として、人体であれば、頭脳を担う。では、全身に血液を巡らせる心臓部。その正体が突破力を維持できる最小単位を率いて戦える指揮官級の精鋭たちであった。彼らが隊を変幻自在に動かす原動力を担うことで、騰騎馬隊は、どのような困難な戦場であったとしても即時対応を可能にして活躍してきたのであ

る。

けれど、趙莊本陣の突撃に加えて援軍本陣への度重なる突撃によつて数を減らした今、隠されていた心臓部がさらけ出されていた。

ただ、中華十弓の一人、魏加は、そのようなからくりを承知しているわけではなかった。というものも、彼がこれまで戦場で培つてきた眼力を持つてして、先に射るべき敵を見極めていただけであつたのだが、それが、結果として指揮官級の精兵が撃ち抜かれる事態に発展していた。

ところ変わつて、秦趙両軍が入り乱れる局地では、波のように押し寄せる敵との激しい白兵戦が繰り抜げられていた

「どおツうりやあああツ」

信は咆哮を挙げながら押し寄せる趙兵を切り伏せていた。

「ツ　しつげえぞツ　邪魔だどけええツ」

己の力を振り絞り多くの敵を斬り伏せていたが、致命傷を受けてなお食い下がる敵の気迫に押され始めていた。

「はあ　はあ　はああ、くそがああ　斬つても切つても終わらねえ」

いまだに闘志は熱く燃え上がつてはいても、躰は正直なもので、疲労による限界を迎

えようとしていた。

それは、躰が呼吸を欲して、意識がうちに向いた一瞬のことであった。

「死ねえええ。秦の糞餓鬼めッ」

意識が再び外を向いたときには、剣が頂点から降下する直前であった。

「ツしまっー」

躰は動くことを拒否するように硬直、ただゆつくりと落ちる死を眺めるだけになっていた。

「油断するな」

敵の首がゆつくりと躰から離れていく。次の間には、付近にいた趙兵が斬り伏せられた。

スツと地に降り立つのは見知った後ろ姿。

安堵ととに声を掛けようとした信の目の前では、膝から崩れ落ちる羌?の姿があった。

「ふうッ……ふうッ……ふうッ……」

荒い息は躰の限界を如実に表し、額から零れ落ちる汗は尋常な量ではなかった。

「羌?ッ。お前無理してんじゃねえよ」

慌てて駆け寄り、抱き起そうとした信の腕を払う羌？。

「む、無理じゃない。ふうッ………まだ戦える。約束……した」

「ツ痛、なんだよ。ん、なんだ約束って」

「ふう………ふう………こつちの話だ。お前にかんげ、ふう………ない」

羌？は何とか呼吸を落ち着けて立ち上がると戦場を見渡した。横には「ツチ なんだよ心配してやったつてのによお」と愚痴を吐いてはいるが幾分か呼吸の整った信の姿があった。

そして、羌？はふと龐煖がいる方角に目を向けた。

そこには、重装盾で前面を抑えて、回り込むとする敵は軽装盾で足止めを行いそれと同時に、狩場に巧み誘い込んで、遊撃隊が丁寧に刈り取る部隊がいた。そして、時折、大地を穿つ音を響かせる指揮官であろう男の姿に目を止めた。

「……………あの面の男、どこかで」

「どうした、羌？。龐煖が気になんのかよ」

「違う。確かに龐気にはなるが、今は別だ。あの指揮官だ」

羌？の指指す方角には、棍棒を片手に全体の指揮を執る男の姿があった。

「確か干央軍長とかと同じ軍長って話だぞ」

「お前を助けた部隊だぞ。名ぐらい覚えてろ。朱錐とかいうやつだ」

「おい羌？、その話本当なのかッ。その朱錐だかの部隊のおかげで尾倒のやつは助かったんだぞ」

羌？は「普通はすぐに聞くだろう」と信じられないとばかりに目を見開き言葉を返した。

「……………知らずにいたのか、お前」

流石の信もバツが悪い表情をすると理由を語った。

「尾平のやつが弟が死んだなんて下らね悪戯しやがったから、シメてたんだよ。そして、すぐにこうなったから聞く暇がなかったんだつつうの」

羌？は「呆れたやつだ」と言葉を吐くと、やれやれとした雰囲気醸し出した。

「羌？。おい、それは尾平にいつてんだよな」

羌？は、プイツと背を向けると「どっちもだ」と呟くと再び戦いに身を投じていった。
「待て おいッ ツチ あとで問い詰めてやる」

局地戦が激しさを増していく最中、秦軍では一つの動きが出ていた。

「合図を出します。旗を掲げなさい」

第37話

「あれは——」

李牧は王騎本軍の位置から上がった秦旗に見入っていた。同じように旗の存在に気付いたカイネは、李牧に尋ねた。

「何かの合図でしょうか」

「わかりません。ですが、変化はあるはずですよ」

戦場を俯瞰してみると李牧の言葉通りに一つの変化が起きていた。

「敵騎馬隊は方角を変えています。どうやら、この本陣への突撃を諦めて、脱出を図っているようです。第4陣隊と第5陣隊の継ぎ目をうまく抜けられています」

李牧は、物見からの報告に耳を傾けながらも、違和感を抱いていた。

「王騎の副官、名は騰でしたか。的確に弱い所を突いてきますね。ですが、今の王騎軍にとって、あの騎馬隊は死中に活を求める一手を指す部隊であるはず。それをただ横切らすように脱出させるのは……」

李牧はぬぐえない違和感を前にして、起こり得る可能性を思案していた。

「……………敵に援軍の気配はありますか」

「いえ、今の所は確認されていません」

「引き続き敵騎馬隊の動向を注意深く追ってください。なにか動きがあるはずですよ。それと、念のためですが、本陣の位置を少し中央に動かして、厚みを作ります」

「秦の大隊は各将軍が抑えていると云うのに、どこからか援軍が来る？」

背後から聞こえた声は牽制とは名ばかりに騎馬隊を射殺した魏加であった。

「魏加殿。戻られましたか。はい。数は多くないでしょうが、可能性はあるかと」

「恐いお方だ、李牧殿は。これほどの智謀を持ち得ながらも一切の油断を感じさせない」
「それは買いかぶり過ぎですよ。私は小心者なだけです。だからこそ、仮にこの状況を覆せる一手があるとするならば、奇襲からのこの本陣の強襲である、と判断しただけです」

騰騎馬隊は、釣鐘状の平地の底である最奥付近で趙莊を討つたのち、目標を新たに現れた援軍の本陣に定めると突撃を開始。対して、趙軍は王騎本軍を正面と定めて布陣していた。そのため、趙軍の隊列は釣鐘の底から見て王騎本軍がいる左の崖に沿うように斜めに布陣する形となっていた。つまり、騰騎馬隊は趙軍から見ると左方斜めからの突撃になっていた。そこから前線を切り分けて侵攻を果たしていた最中に、魏加の弓を受けることになった。そのあとすぐに、本軍から退却の合図があったために進路を変更。

この場から最速となる退却経路というのが趙軍を横断する形であり、騰騎馬隊は継ぎ目を縫うようにして趙左方から右方への横断を果たすことになった。

「我らはこのまま蒙武、隆国の両名を拾って退却する」

騰の言葉に、真意を問わねばならぬと側近の一人が声を挙げた。

「騰様ツ それでは殿が孤立してしまいます。我らなくしてこの戦況の打破は難しいと言わざる負えません」

騰は側近の言葉に想いは同じであると肯定を示したが、答えを変えることはなかった。

「それは、わかっている。殿の指示なのだ。聞き入れよ」

「敵騎馬隊は蒙武軍の生き残りと合流して、退却に入った模様です」

李牧は、その報告を受けると眉間にしわを寄せて言葉を発した。

「退却……………。蒙武を助けるのわかる。ですが、なぜ、今なのだ……………」

カイネは思考を整理するように言葉を発する李牧に声を掛けた。

「少しでも有能な将を生き残らせるためではないですか」

その言葉を数瞬吟味した李牧であったが、その可能性を切って捨てた。

「それはありえませんが。確かに、詳報を聞く限り、蒙武、それに敵騎馬隊の指揮官騰、こ

の二人は傑物の類でしょう。ですが、こと中華という舞台から目を向けた時、王騎という存在は彼らとは一線を画します。彼らが生き残ることよりも『王騎は存命である』という事実一つのほうが、はるかに重い。趙三大天然り、秦六将とはそういった存在なのです」

「追撃は、如何いたしますか」

李牧は王騎の意図を読みかねていた。しかし、王騎本人がこの場にいるという事実から最善と思われる手を打った。

「三千をだして追ってください。ただし、深く追う必要はありません。敵が反転してきた場合は守勢を保ってこちらに介入できないようにして頂ければ十分です。極論になります。此度の戦は王騎さえ討てればよいのです」

この少し前。山深い戦場で秦軍とにらみ合っていた趙軍の各大隊長は困惑の最中に落として込まれていた。

「敵大隊が右翼の万極軍側に移動しているだどッ」

報告をうけたのは、趙左翼の将として、鱗坊・同金軍と対峙している、李白と公孫龍であった。

「どう考える、公孫龍。先ほどの話からも、我らは奴らをここに釘付けにする役目である

う」

李白はこの少し前に、王騎という存在の大きさを鑑みて、趙莊の援軍として軍を動かそうとしていた。だが、駆け付けた公孫龍に制止させられて、この戦の裏、つまりは全貌を知るに至っていた。

「その通りだ。李白。やつらが右方に軍を動かすというなら、我らも移動する。間を抜けられるわけにはいかないからな」
「相分かった」

鱗坊・同金軍は、そのまま万極軍と対峙する録鳴末軍に合流を果たすと、間髪入れずに万極軍に激しい攻撃を始めた。

突如として、秦兵の数が膨れ上がる形となった戦いは、一方的に秦軍が攻め立てる展開となり、趙将万極は幾度となく綻びる陣形を立て直し、突破された場所には、すぐさま予備兵を投入して穴を塞ぐなど、対処に奔走する羽目になっていた。

だが、それも一時ほどのこと。初動を取られたうえに、遅延を狙った奇襲にあったことで出遅れていた李白・公孫龍軍が到着すると、秦軍は果敢に攻め立てていたのが嘘のように一斉に退くと、静かに守備に徹し始めたのだ。

「え、援軍か、感謝する」

「万極、我らは我らの役目を果たしたのみだ。しかし、やつらめ。奇襲でもつてして一気に万極軍を抜くつもりであつたか」

「うむ。多少は突破を許したようだが、戦況を左右する数ではない。それに、我らに奇襲は二度も通じぬ。全隊に通達しろ。やつらの動きからひとときも目を離すな、とな」

この時、趙軍大隊を率いる三将は、先ほどまで思惑が一致していたように動きを見せなかつた秦軍が、突然、この奇抜な策を用いた真意を凶り損ねていた。

秦軍の突破が成功したとしても、その先には趙軍四万に対して秦軍一万の戦場である。そして、仮にだが、秦全軍が突破を果たしたとしても、その後ろには万極・李白・公孫龍軍という同規模の軍が追撃することになる。戦況を俯瞰できれば、確かに、瞬間的に、王騎本軍一万対李牧軍四万対秦軍五万という形で挟撃する形は成立する。だが、あくまでも瞬間的に、である。なぜなら、すぐ後ろから迫る趙軍五万は李牧軍が壊滅する前に、軍の弱点である後方から秦軍を一気に壊滅に追いやることになるからである。

つまりは、この策が成つたとしても圧倒的に時間が足りていないのは明白であつた。彼らの思考がそこまで至つていたならば、この策は、賭けとして成立させるにはあまりにも分が悪すぎる。と気づいたはずであつた。これには、秦軍の大隊を率いる三人の将が、あえて姿をさらしていることも思惑を勘違いさせる一役を買つていた。

「おい、本当にこれでいいのかよ」

秦将の三人は敵兵に姿をさらすように見渡しの良い丘に陣取っていた。

「録鳴未。あの方に任せておけばなんの心配もいらんさ」

「鱗坊の言う通りである」

「ツチ お前らの、その謎の信頼はどこから来てんだよ。確かに殿からの伝令に従ったけどよお。朱錐の副官ってだけだろうが」

「……………同金」

どこか「まだ気づいていないのか」と呆れそうな顔を必死に真顔に戻す鱗坊の姿と、いづきが付くのか楽しみだ。と「……………」口を噤んむ同金の姿が、そこにはあった。

「おいッ 何を隠してるんだよ。お前ら」

再び戦場に目を向けよう。

李牧が放った伝令は、各大隊からの情報を受け取り帰還を果たしていた。

「敵大隊がすべて万極軍側に移動を……………。ふむ、突破を図るための奇策にしては少々拙いものを感じますね」

「ここに王騎が捕まっている影響ですかな」

「考えられなくてもないですが、それを王騎直属の将がした、ということに魏加殿は何か感

じませんか」

「……………確かに。違和感はありますな」

李牧と魏加がうんうんと頷きあう最中、カイネだけは別の見方を示した。

「そうでしょうか。お二人ともに、王騎という存在を買いかぶり過ぎただけではありませんか。もしかしたら、単純に人を見る目がなかったってことかもしれないよ」

「買いかぶり過ぎ、ですか」

李牧は、カイネの言葉に敵の存在を大きくし過ぎているのではないかと、今一度、戦況を頭の中に描き始めていた。

現在、我が軍三万七千に対して王騎の持ち兵は五千と言ったところ。

早々に退却した敵騎馬隊は多く見積もっても千二百でしょうし、それには倍を超えて三千を出しているのです、余程のことがない限りは、問題ないでしょう。

外の戦場では、公孫龍、李白、万極の三将が敵大隊を抑えています。こちらはほぼ同兵数同士が対峙していることもあって、早々に決着がつくことはないはずです。ただ、一気に万極軍を壊滅させて進軍するという奇策が気になるのも事実です。ですが、カイネが言う通り、愚将によるただの失策である。という可能性も捨てきれません。

「あの、李牧様?」

カイネに呼ばれたことで、李牧は思考の渦から意識を拾いあげた。

「すいません。少し考え込んでいました。カイネの言う通り、愚将による失策のかのうせ……………」

ふいに李牧は口を止めた。

「どうされましたかな、李牧殿?」

李牧は魏加の呼びかけにも応じずに、違和感の正体を探っていた。

「……………おかしい。王騎はこの場にいる。できるはずがない」

「なにがですか。李牧様」

「カイネ。それに魏加殿。後方にある戦場は山深い地です。そのために視界は効きませんし、即座に連携をとることは困難な地形と言えます」

「ええ、だからこそ、王騎をこの地に誘い出した」

「その通りです。ですから、なおさら妙なのです」

魏加は腕を組むと一人「ふむ、山深い地…連携…敵大隊の動き」と言葉を並べた。

「それで、妙、とはなんです」

「カイネはおかしいとは思いませんか。総大将不在の状況で敵大隊が二つ同時に動き出したことを」

カインネは、そこで初めて先ほどの詳細に違和感を抱いた。

大隊が二つ同時に、さらに片側に動くということは、戦場の全体図が大きく傾くほどの出来事である。

「あれ。それならどうやって……。あッ。あの本陣の旗ではないですか」

「いえ、旗には見える範囲に限りがあります。それに複雑な命令を伝えることは困難です。ましてや、それらを集約する役目の王騎がこの場においては意味がありません」

王騎はこの場に釘付けであり、山深い別の戦場の状況を鑑みずに大きく動かすことは危険であり、同時に困難極まりないといえた。事前にそういった指示を出していた可能性がないわけではない。けれど、それは現実的であるとは言えなかった。それができるとしたら、この策を一から描いた趙側でなければならず、事実上は不可能であった。

「うむ。そうであるならば、先程の奇策の意味が変わってきますな」

「はい。明確な狙いがあったはずですよ。先ほどの報告をもう一度、詳しく、お願いできますか」

李白、公孫龍軍と対峙していた二つの大隊が万極軍に移動をしました。これを追うために両將軍は軍を動かしました。ですが、敵大隊が放った奇襲により大きく出遅れることになりました。そのため、一時的にですが、万極軍は移動した敵二軍からの激しい攻撃を受けることになりました。少数の突破を許したようですが、遅れていた二將の大隊

が到着したことで、敵大隊は一斉に退きました。そして、万極軍と対峙するように敵大隊が元から布陣していた山に再布陣。こちらも、それに合わせて万極將軍が布陣していた山に李白、公孫龍の両將軍も布陣しているとのことでした。

「待つてください。敵二軍といたしましたね。それは、三軍ではないのですか」

「いえ、確認いたしました。移動した二軍だと報告を受けています」

「まずいッ 急いで布陣しなおります。各將に速やかに指示に従うように厳命してください」

「り、李牧様」

「説明は後です。敵が来ます」

李牧は瞬時に全体図を書き換えると、間髪入れずに多くの指示をだして、陣形の変更を急いだ。

「ソッフ これは、いけませんねえ 誰を相手にしているのかを忘れてはいませんか」

第38話

「さあ、反抗の機です。今こそ力のすべてをこの王騎に託して付き従いなさい」

王騎は、敵軍が陣容を変形させる隙を逃さなかった。敢えて、自軍の守陣を崩しながら敵陣容に流れを作り出すと、李牧による後方の陣容変更の流れに戸惑い薄くなった継ぎ目を見極めると、力技での突撃を敢行した。

一方、その守陣を指揮していた朱錐は、重装盾隊を端から控えさせていた騎馬隊に同乗させると、退かせる間を稼ぐために奮戦していた。

「李豹は退避する部隊を掩護をツ　馮隊は私とともに殿だ」

「アレの相手は良いのか」

馮の視線の先には沈黙した龐煖の姿があつた。

「動かないのならば、好都合。馮、今なら奴に一撃を入れるぞ」

会話の最中も薙ぎ払われる棍棒に鎧を砕かれ、吹き飛ばれていく趙兵たちと

「真つ二つになる先しか見えんわ」

と近づいてきた趙兵を矛で確実に仕留める馮の姿があつた。

「何かは判らないが、己と向き合っているのではないか」

龐煖は、幾度かの突破を図ろうとしたのちに、構えを解いて動きを止めると、立ち尽くしていた。

「戦場でなにしてんだよ……………」

「実際の所はわからんさ。さあ、今の内に逃げるとしようか」

朱錐たちは李豹たちの退避を見届けると馬首を翻して退却を開始した。

「敵増援が現れました。その数三千から四千ツ」

物見からの報告を受けた李牧は、敵の狙いを読み解きながら言葉を発した。

「想定より少ない……………。騎馬のみで先行しましたか、賢明ですね」

敵騎馬隊を戦場から締め出すために出した三千の追撃部隊の奮戦もあり、ここにきて趙軍に時間的な猶予を齎していた。

「結果的にですが、先に出した追撃部隊に時間を取られたようです。代償はありましたが、七割方の準備が叶いました」

李牧が口にした代償とは王騎本軍のことであった。

「示し合わせるとまではいかなかったようですが、こちらが動けない隙を見事に突かれました」

当初、李牧は、王騎本軍は守勢を堅持させたまま、徐々にだが、確実に削り取る計画

であつた。しかし、敵増援の影を掴んだことで、早急に全体図を書き換える必要に迫られていた。そのため、王騎本軍と当たる前線は維持したままで、中盤から後方部隊のみで隊列の変更が行われていた。だが、急な陣容の変更は、本陣に近いほど早く完遂され、遠くなるほど、その動きは緩慢になつていく。前線と中盤の継ぎ目となる箇所では特に顕著であり、王騎はそこを正確に突いていた。

つまり、李牧が言葉にした代償とは、趙本陣が一時的に指揮不全に陥つたことで、王騎本軍によつて崩される部隊を取り繕うことができずに守勢から攻勢に出られたことであつた。

「こちらに向かっているようですが、如何いたしますか」

「向かつてくるのなら迎え撃つまでです。カイネ、抜かれた部隊は無理には追わせず、蓋をするよう伝えてください」

「李牧殿。それでは敵増援と挟撃される形になりませぬか」

「その通りです。今の段階では、中盤に至るまでは陣形が整っていないため抜かれるのは、この際、致し方ありません。ですが、それ以降にぬかりはありません。ここで圧殺します。魏加殿は王騎の隙を作っていたください」

「なるほど、任せよう」

李牧は最後に龐煖のここまでの動向について尋ねたが、「沈黙して佇んでいる」と返答

を受けると「……矛盾ですね。陥りましたか」とこぼした。そして、しばし思考を重ねると言葉を発した。

「龐煖はそのまま構いません。問題は王騎です。どこからこちらの存在に気付いて、この増援を仕込んでいたのかはわかりませんが、ここで討つという目的に変わりはありません。まずは敵増援を受け止めます。それまでは、王騎の足止めを行います。北真（ホクシン）、北歴（ホクレキ）、関斗（カント）を要の配置に付けてください。侵入してきたら動きに併せて分断します」

カインは李牧の言葉を理解すると驚くように口を開いた。
「待ってください、李牧様。いまからでは間に合わないのではないですか」

李牧はカインの言葉は正しいと頷き肯定しながらも、本当の目的はそこではないと告げた。

「完全である必要はありません。その先に大きな『策』があると匂わせるだけで十分です」

「匂わせる、ですか」

「ええ、それだけで王騎は足を緩めざる負えません」

その頃、王騎は力技でこじ開けた道の先頭を駆けていた。

「どうやら、ここから先は易々と行かせてはくださらないようですねえ」

先程までのどこか曖昧な動きをしていた敵とはことなり、はつきりとした意思を持っていることが遠目からでも窺い知れた。それでもさらに、少し踏み入れると、こちらを誘い絡めとするよなねっとりとした気配を漂わせはじめたことで、警戒心を嫌でも刺激されることになった。

王騎が軍の脚を緩めると、すでに突撃して崩してきた後方の陣形は修復されて、容易には抜け出せなくなっていた。

「やりますねえ。この私が先手を取られ続けています。ソッフ。ですが、私に気を取らばかりではあつと言う間に貫かれますよ」

「これより敵本陣に突撃を開始する。全軍ツ 私に続けッ」

騰騎馬隊を追っていた敵兵を蹴散した虎豹率いる四千は、勢いそのままに突撃を開始した。

「騰は王騎様のもとに、私はこの戦いを描いた者の顔を見に行く」

「ご武運を………摺様」

周りの者に聞こえないほどの声色でそう告げた騰に、虎豹は仮面の奥で笑みを浮かべた。

「ツフ。私は虎豹だ、騰。王騎様のこと、頼んだぞ」

「ハッ」

そして、合流を果たしていた騰騎馬隊は突入後に二手に分かれた。

「り、李牧様」

焦るように声を出したのはカイネであつた。

「ツ、何者ですか、虎豹とは……………」

李牧は、この地に増援の可能性があると思ひ浮かべた時、初日に涉孟、四日目夜には、奇襲により万国を狙つた虎豹が現れると読んでいた。というのも、五日目朝から、この戦の最中に二度も決定的な役割を担つた者の姿が一度も確認されていなかったことからである。そこで、李牧は彼の者の武に疑う余地はないことを想定した上で、他国の大將軍級の攻勢であろうとも十分に受け止められる陣容を整えていた。

だが、虎豹はその予測をはるかに上回り、整えられた陣容を切り裂き続けた。

虎豹は李牧が配した要となる守将や部隊を瞬時に見極めると、隊を小出しに走れさせて排除、或いは隊列に亀裂を入れて乱しては、的確に突いて瓦解させていた。

「李牧様は後方にお下がりがり下さい。私たちが時間を稼ぎます」

「それはできません。この本陣を下げては、大きな策がないことを王騎に見抜かれます。」

それでは、挟撃を受ける羽目になりかねません。そうなるくらいならば、ここに留まり迎え撃つべきです」

「ですが李牧様……」

カイネはなんとか李牧だけでもと説得を続けようとしたが、刻がそれを許さなかった。

「来ますよ。カイネ」

虎の面を付けた将は、最後の守陣を貫いたあと、静かに趙指揮官を見据えた。

「虎豹だ。貴殿がこの軍の指揮官で相違ないな」

「李牧です。まだあなたのような勇将が控えていたとは、思いもありませんでしたよ」

「今は時間がおしい。その首もらい受ける」

李牧はどのような言葉をもつてもこの状況からは逃れられないと覚悟を決めると「致し方ありませんね」と呟き、佩いていた剣を抜くと構えた。

「あなたに私を討てますか」

ここに、趙三大天李牧と第六軍副官虎豹が激突した。

二人が激しい剣戟を交わしはじめた横でも、一つの戦いが始まろうとしていた。

「り、李牧様ツ 今行きます」

カイネは少しでも李牧の力になりたいと剣戟を交わす二人と距離を詰めようとした、

が

「そうはさせないよ」

言葉を示すように、カイネの前に立ちふさがる影が一つ。

「ツク、そこをどけ、女ッ」

カイネの目には、女の肩越しに映る李牧と虎豹の剣戟に、技量の差は感じられなかった。

「お前も女だろうが。玄象という。お前は？」

「ツ、カイネだ」

「李牧とかいう奴を助けに行きたいなら、私を倒すんだな」

玄象の挑発を交えた言葉に、焦りの隠せないカイネは双剣を抜くと構えた。

「誰であつても私の邪魔をするなら斬るぞッ」

「はつきり言つてやる。お前に私は斬れないよ」

こうして、側近同士、女同士の剣戟が開始された。

第39話

「殿。遅くなり申し訳ございません」

「騰、それに隆国。あなたもよく来てくれましたね」

「いえ、私が不甲斐ないばかりに禁を破ってしまい、このような罫にまで……：……：申し訳ありません」

「隆国、あなたはよくやってくれました。もし蒙武軍単体であつたなら蒙武は死んでいただしよう。これはあなたの功績です。胸を張りなさい」

騰たちは虎豹とともに突撃して、すぐに、馬首を王騎達がいる方角に向けると敵陣に横断するように、突き抜けていた。

趙本陣は虎豹に対して正面に配置されていることもあつて、騰たち騎馬隊は、敵を横方向に貫く形で駆け抜けることができた。最終的には王騎本軍と対峙している敵を背後から切り裂いて今に至る。

「この機を逃すわけにはいきません。全軍ツーンします」

王騎のこの決断に側近は驚き「今こそ本陣を強襲した部隊と挟撃するべきではッ」と進言する者もいた。が、

「どこまでいっても、ここは敵の手の平の上であることに変わりはありません。敵本陣が動けない今こそが脱出する最後の好機でしょう。騰」

「ハッ、敵は相当な策士であり、いつこの地が死地に早変わりしてもおかしくありません」

「ということですよ。よろしいですね」

王騎と副官騰の意見は一致していることが確認されると、王騎軍は脱兎の如き速さで退却へと舵を切った。

「先陣は私がいく。我らの殿の道を切り拓くぞッ」

騰の檄に応えるように、騰騎馬隊は咆哮を上げた。

「それ以外の騎馬隊はできる限り歩兵を拾いなさい。隆国、あなたに頼みましたよ。取り残しは我が軍の恥と知りなさい」

激戦に身を投じていた信たち歩兵は、王騎が放った騎馬隊の介入によつて内側へと誘われた。

「や、やられっぱなしでッ、逃げるっていうのかよッ」

「馬鹿か、お前。数を差を見る」

「信が納得できないと声を挙げるが羌？は「状況を見ろ」と冷静に言葉を返した。そんな二人の様子を見ていた王騎は一言だけ告げた。

「隣は聡明なご様子ですが、童信はまだまだのようですねえ」

「ツな」と言葉を失くす信に

「当然」とどこか誇らしげな笑？。そして

「ツク」と何も言えない信の姿があつた。

「さあ、あなた方はあちらの馬に乗りなさい。朱錐は殿です。行きますよお」

先頭に騰騎馬隊、中腹に王騎、殿には朱錐隊となつた王騎軍は、混乱冷めやらぬ敵陣に再突撃を開始した。

もう一つの主戦場と化した趙本陣では、苛烈な一騎討ちが続いていた。

「はあああああッ」

虎豹は己のうちから燃え上がる闘志を声に乗せて、止まることない連撃で攻め立てていた。

「くッ ……………」

李牧はいなすことで受け続けていたが、いくつもの手傷を負っていた。

周囲の目には、虎豹が李牧を押ししているように見えていた。が、実情は逆であつた。

虎豹と李牧の技量はまさに互角であつた。それは、剣を交えた二人も瞬時に理解すると、勝敗は天運を味方に付けた者、そう両者が認識をするほどであつた。けれど、剣戟

を重ねてしばらく経つと、状況は一変。わずかにでる差を悟った虎豹は、苛烈に連撃を繰り返すことで、その差を埋めようとしていたが、李牧は冷静に受け止め続けて、逆撃の機を窺っていた。

「と、と、…ッ！」

虎豹の虚と実が幾重にも織り交ぜられた剣筋をさばいて受け流しながら、李牧は一重の隙を見切り「ここですッ」と一刀を刺し入れた。虎豹は躰を捻ることで致命傷を避けたが、脇腹を抉られていた。また、咄嗟の回避行動で躰が流れ、後退を余儀なくされた。「ツチ やはり、ただの策士ではなかつたか」

「あなたこそ、その腕前には驚愕します。ですが、その怪我では、もう私を討つことは叶いませんよ。諦めて投降することをお勧めします」

「ツフ 怪我、か。わずかな一押しでも差は差だ。認めよう」

勝敗を分けたのは、剣先を相手に押し込んでいく一押し、その差であった。

「では投降——」

「投降する気はない。それよりも、あちらはいいのか」

「何が——で——」

李牧は虎豹の視線の先に気付くと声を挙げた。

「カイネツ」

そこには、首筋に剣を向けられたカイネの姿があった。

「つく、くそッそこをどけえッ」

カイネは李牧の力を信じていたからこそ、互角に渡り合う虎豹の存在に驚き、あまつさえ、李牧が手傷を負っていく姿には、助けにいくことができない焦燥感に駆られていた。「あんた、向こうに気を取られている場合なのかい」

カイネは自身の双剣を難なく受け止めた上で、的確に剣を差し込んでくる玄象の剣技に徐々に追い詰められていた。そして、李牧を案ずるがあまり単調になっていた剣筋を讀まれると、右手に持つ剣を叩き落とされて劣勢はさらに顕著になった。

「残念だけど、あんたはここまでだよ」

玄象はカイネの残る左手にある剣も同じように処理すると首筋に剣を置いた。

「何か言い残すことはある？」

玄象の肩越しに、李牧が剣戟の隙を縫って敵将に傷を負わせた姿がみえていた。

「ああよかった。李牧様は平気」と心の内で安堵した。そして、今、この時に彼の足を引つ張るくらいなら、……………いっそ。

両腕から力を抜いたカイネは一言だけこぼした。

「ない。李牧様、申し訳ありません……………わたしは——」

カインネは、そこで言葉を止めると瞳を閉じて沈黙した。

「そう、じゃあね」

「カインネッ」

ふいに聴こえた愛しい人が呼ぶ声に、内から溢れた言葉は一つだった。

「いつまでもお慕いしています」

騰騎馬隊が決死の突撃を開始すると続くように王騎本軍が動き出した。

「殿の路を、死力を尽くして切り拓くのだッ」

先陣を切る騎馬隊は、己の軀すら武器として投げ出さんばかりに全霊を持って駆け抜けた。

「と、殿………」

一人。

「先に逝くことをお許し、く、だ、…い」

また一人。

「…ッ、武運、を…」

死に逝く同志を踏み越えて王騎軍は駆け続けた。そして、多くの犠牲を出しながらも

敵陣を突破することに成功した。

趙軍の追撃を受けながらも遠ざかっていく戦場。

王騎は、後ろ髪を強く引かれている自身に気付くと、数拍の瞑目をした後に、一つの決断を下した。

「騰は、戦えない者を引き連れて速やかに本陣を目指しなさい」

「ハッ では、殿は——」

「騰。ここら先の指揮はあなたが取りなさい。そして、もしもの時は、あなたにすべてを託します」

「な、なにをッ」

動揺を隠せずに声をあげたのは隆国であった。そんな隆国に王騎は淡々と告げた。

「私は虎豹の退却を支援します」

「お待ち下さい、殿ッ。殿は騰とともにお退きください。その役目はこの隆国に——」

王騎は優しい目目で隆国を見据えると言葉を綴った。

「隆国。貴方は証人です。よいですね」

説得は叶わないと王騎の目が告げていた。

「……………承知しました。殿」

「まったく、儘ならないものですね。……………私はもう、糝を残してこの地を去れないよう

です」

そして「フフ これでは昌文君に怒鳴られそうですねえ」とふとこぼしてしまったあとに我に返ると、言葉を発した。

「騰、あとは任せましたよ」

追撃にでていた趙軍は王騎は全力で退却すると考えていた。そのため、その首級を挙げるために必死の追撃に入っていた。しかし、突然、王騎軍が二手に分かれて、その一方が間延びし始めていた趙軍に反転攻勢を仕掛けたことで打撃を与えられることになった。また、そこに王騎の姿が確認されたことで、騰たちへの追撃の手は緩まることになった。

その王騎の目には、退却を凶っているものの勢いが失われ始めた虎豹隊の姿が映っていた。

ひと時とはいえ、動きを止めた王騎に「王騎の首級を挙げろツ」と幾重に群がった敵を薙ぎ払って現れたのは朱錐であった。

「王騎様」

「錐。これは私の個人的な決断です。あなたは付き合わなくてもよいのですよ」

「虎豹は私の副官、理由はそれだけで十分です。それに、私はあなたの盾なのでしょう」

王騎は、その言葉に目を見開いてから笑みを浮かべると「ココココツ」と笑った。

「確かにその通りですねえ。いいでしょう、許可します。ですが、この先は死地。脱落することは許しませんよお」

王騎の言葉通り趙軍は多数を減らしたとはいえ、三万数千。対して、包囲を受け始めた虎豹隊が二千と少しとここにいる千にも満たない騎兵のみ。数の差は歴然であった。

「承諾しました」

王騎と朱錐は追撃に出ていた一部隊を逆に打ち破ると、虎豹隊に向けて動き出した。

第40話

「いつまでもお慕いしています」

玄象の剣はカイネの首を確かに捉えていた。

「象ツ」

「ツ!!」

魏加の矢が玄象を射抜かんばかりに放たれていなければ、だ。

玄象は瞬時に射手の位置を把握するとカイネの陰に隠れるように動いた。また、この急な回避行動は馬に嘶きを起こさせ、カイネに異変を報せることになる。そして、すぐに目を見開いて状況の変化を察したカイネは、隠していた短剣を引き抜き、陰に入るために接近していた玄象に突き出した。

「ツン、とーー」

正確に突きだされた短剣は、玄象を捉えるかの視えた。だが、玄象は焦ることなく剣を持つていない腕で冷静にカイネの腕を絡めるように巻き上げると今度は手首を掴み、捻り上げた。

「ツク」

「この手のことは？と死ぬほどしたからね」

玄象が少しの力を込めれば、カイネの意思とは関係なく、短剣は自然と手から零れ落ちた。

「痛みがあるけど我慢してね」

そして、少しばかりの贖罪の言葉を添えると、剣で躰の芯を貫ツ「殺すなツ」かなかつた。しかし、すでに剣は鎧を穿ち、わずかにだが躰に突き立てられていた。

「殺すなつてことは……………」

虎豹の言葉の意味をくみ取った玄象は、剣を引き抜くと行動を起こした。対して、カイネは自身に剣が突き立てられたことで走る痛みにも躰が硬直して、咄嗟の反応はできずに、顎を打ち抜かれて意識を飛ばした。

「カイネツ、今たすーー」

「私に背を向ければ容赦なく斬り殺すぞ」

李牧は、虎豹の傷の具合から、すでに脅威度は小さいと認識していた。だが、それを覆すように発せられた虎豹の威を吐いく言葉に、李牧は足を止めざる負えなかつた。

「ツク その怪我では私に勝てないことは承知しているはずですよ」

「相打ちになったとしても李牧、貴様には消えてもらおう」

この男の才覚は、これからの秦国にとって大きな災いになると虎豹は確信していた。「どうあつても譲つてはいただけのないのなら、押し通るまでです」

それゆえに、その身を投げ出してでも李牧を仕留める腹づもりであつた。そのために、側近であらうカイネという女に示した反応から、何かに利用できるかと踏んで生かす判断を下していた。

だが、ここで両者の思惑の外から介入者が現れたことで事態は急展開することになる。

それは、虎豹が連れていた精兵が上げた号令のような叫びに端を発していた。

「我らは虎豹殿をここで失うわけにはいかん。皆の者、今こそ敵将を討ち取る刻ぞッ」

この叫びのような号令は戦場に劇的な変化を齎した。

虎豹が連れられた精兵の一人が李牧に駆けだせば、『李牧様』『虎豹様』を「討ち取れッ」「お護りしろッ」と秦、趙、両軍が群がるように一気に集結すると、一騎討ちの態は崩れて、乱戦へと切り替わった。

突然の号令に怒りをあらわにしたのは虎豹であつた。すぐに発した者に詰め寄ると激しく詰問した。

「なぜだッ 貴様は私の覚悟を無駄にするつもりかッ」

虎豹の面越しにも伝わる怒気溢れる血相にも、件の兵は表情を変えることなく応え

た。

「お許してください。虎豹殿」

「許しを請うぐらいならば、なぜ行動を起こしたッ」

激しく詰め寄る虎豹の姿に動じることなく、初老に差し掛かる精兵はその瞳を見据えた。

「私は……九年前のあの場所にいました」

それは、九年前、馬陽攻略の前夜。突如出現した龐煖により六将摎が命を落とした出来事を示唆していた。

「ッ、お前」

「私はその生き残りです。あの時、多くの仲間があなたを護るために命を散らしていく最中、一歩も動けなかった」

「……………」

「昌文君殿の言葉に我に返ったものの、すでに遅く。無様にも、ここまで生き残ってしまいました」

「ッ……………あれはお前たちに相手ができる存在ではなかった」

「承知しています。ですが、あの日を悔いなかった日はありません。それは後ろにいる者たちも同じです」

そこには、虎豹が引き抜いた古参の者たちの姿があつた。

「あなたに声を掛けられた時、その仮面の下を察した時、これは天命だと確信しました」
「馬鹿なツ そのような天命などあつてたまるかツ」

「ツフ。そうかもしれない。ですが、我らはあの日を繰り返すわけにはいかないのです」

虎豹は進み出ていた者たちを強く見据えたが誰一人として揺らぐことのない瞳でこちらを見返していた。

「馬鹿者どもが……………」

「我らが時間を稼ぎます。どうか、どうか虎豹殿はお逃げください」

それは一瞬の瞑目。すぐに号令は発せられた。

「象ツ 退却する。そいつは連れて行くぞ。趙兵よ、追えばこの娘の命はないとおもえツ」

虎豹は宣言をすると馬首を翻し「お前たちの武運を祈る。……………馬鹿者が」言葉を残して駆け出した。

「痛み入ります。……………我らの死に場所をここだツ 今こそすべてを懸ける時だと心得よ、兵どもよツ」

こうして、精兵は死兵と化して李牧に襲い掛かかることになった。

そして、死兵と化した精兵の奮戦は、李牧の足を止める結果となった。

数の差を理解していた死兵たちは、李牧に狙いを絞って突撃していた。そのため、李牧を護るために間に入ってきた自国の兵たちが、皮肉なことに、今度は壁となって李牧に立ちほだかることになってしまった。そのため、彼ら殲滅したころには、すでにカイネと虎豹たち姿は遠ざかっていた。

「カイネッ……」

「李牧殿。追われないので。最悪、カイネを失うことにはなりません。王騎に突破を許した今、虎豹なる者だけでも討たなければ立つ瀬がありません」

「魏加殿。……わかっています」

全軍での追撃に移行すること李牧は決断した。

一方、退却を図った虎豹であったがこちらも当初とは違って、苦戦を強いられていた。それは、二つの要因から起こっていた。まず、本来ならば、だれよりも苛烈に先頭を駆ける虎豹が受けた傷のせいで、思うような力を発揮できないことが一つ。次に、敵の隊列を乱す役割を担っていた玄象がカイネを抱えているために動けないことが大きかった。

「その怪我じゃ無茶だよ。わたしが前に出るから姉さんは下がって」

勢いの止まりそうな隊を心配した玄象の言であったが、虎豹は応じなかった。

「いや、その女からは離れるな。奴の思考のキレがわずかでも落ちる効果があればそれでいい」

玄象はその言葉に担ぐ女に視線を向けてみるが、とてもそうなるようには見えなかった。

「そうかな、私はただの女将校って感じしかしないけど」

「勘だ。あてになるかはわからないけどね」

玄象は「ふーんそういうものか」と一応の納得を示すと下がった。

「それに迎えが来たからな」

虎豹の視線の先には、右に左に吹き飛ぶ趙兵の姿が映っていた。

「まだ無事のようだな」

敵軍を薙ぎ払って突き進んでいた一団が姿をみせると先頭の男は、開口一番にそう発した。

「すまない。手間取ったあげくに、劣勢の最中に飛び込ませてしまった」

脇腹の傷を片手で抑えている虎豹の姿に察すると言葉をこぼした。

「まあ迎えは私だけではないのだがな」

虎豹は隆国辺りがきたのだろうと軍長の後ろに視線を向けた。

「おや、怪我をしているようですね」

「お、王騎様ツ　な、なぜこのような場所に」

「これは異なことを」

王騎は首を傾げる仕草をしたあと、真つすぐに虎豹の瞳を見据えると言葉を続けた。

「私に、あなたをここに置いていけというのですか」

王騎の言葉は、摺の、キョウの深奥に響いていた。

王騎は確かにキョウを妻に迎えた。王騎はキョウを慈しんだし、キョウも王騎を慈しみ、そして、愛した。それが、どれほど幸福のことかをキョウは理解していた。けれど、あの日受けた傷で摺は死に、代わりにキョウが妻となった。全く同じ『わたし』であるにもかかわらずに、幼き日に約束を交わした『摺』の存在が、キョウにとつては、抜けることのない棘となって胸の奥深くに留まり、かすかな痛みを与え続けていた。

「ツ、……………ですがー」

その棘をやさしく抜いたのは他ならぬ、王騎であった。

「あなたがどう感じていようと、私はあなたのすべてを肯定していますよ」

「ツ　王、騎さ、ま……………」

いま、仮面の下で涙を流しているのは、「摺」でも「キョウ」でもなく、王騎を愛する

『ただ一人の女性』であった。

だが、そこに無粋にも割つて入る者がいた。

「二人には申し訳ないが、ここは死地となるやもしれない戦地ですので、すぐに退却に入ります」

朱錐であった。

「その通りです。無粋な錐の言に従い、逃げますよ」

「ッ。はい。無粋な朱錐の言に従います」

「……………お二人とも、私に付いてきてください」

面の下には、どこか納得はいかない顔をした朱錐の姿があつたとかかなかつたとか。

第41話

「どうやら、無粋な方は一人ではないようですねえ」

朱錐を先頭に王騎たち一団は、趙軍による包囲からの突破を図っていた。

「はああああッ」

先頭を朱錐が駆けたことで、押しとどめようとする趙兵は、その悉くが薙ぎ払われて粉砕されていた。

「朱錐って守りの将じゃなかったの」

普段は、隊を預かる軍長として、後方から前線にでることのなかった朱錐の猛進は、玄象に驚きを齎していた。

「ああ、そうか。最近でいえばそうだろう」

虎豹からすると驚くに値しない話であったが、確かにその姿を見るのは久しぶりであった。

「自覚がないようですが、それはあなたのせいでもあるのですよ」

王騎の言葉に虎豹はふと思考に耽ると応えた。

「……………だつて好きにしろつて、じいみたいにきつちり働くんだもん」

あなたねえ、とどこか呆れた顔をする王騎であったが、納得はできませんと頷き「昌文君の副官でしたからねえ」とこぼして、さらに続けた。

「錐は、元々、その武を用いて敵主攻を押しとどめていました。それすなわち、敵軍のもつとも突破力に長けた者を相手取っていたことを意味します。そして、苛烈なあの時代は猛々しい将の宝庫でした。それらと互角に渡り合ったと言えば、その実力は推し量れるでしょう」

「その割に、名はそこまで通つてないように感じるのは気のせいなの」

玄象の疑問に応えたのは虎豹であった。

「それは簡単だよ。戦つてのはどれだけの敵首級を挙げたかが重要なんだ。その点、あいつの相手は総じて手練ればかりで、首級を挙げることも自体が少なかった。でも、敵主攻の動きを止めるんだ、評価はされてたよ。現場連中には特に、ね」

「虎豹の言う通りです。我々の評価と本營の評価は必ずしも一致するわけではないということです。昭王はそういった所も評価してくださいましたから、私からの推挙ということで、將軍位には付いていきますけどね」

当時、昌文君は自身が文官への路へと舵を切った後は、朱錐に保持していた軍のすべてを託すつもりであった。しかし、いざ打診をすると、朱錐はこれを固辞。仕方なく、一

定数は己のもとに置き、さらなる戦いを望む者は知己でもあつた王騎のもとへと送り出した。朱鉦は私兵団の一兵卒として残ろうとしていたが、昌文君はそれを許さず、王騎に託した経緯があつた。

「フーン。だつたら將軍になつたらよかつたのに」

「鉦は昌文君の副官であること、そのことに誇りを持っていましたからねえ。それは、騰にも言えることですが一」

その時、王騎は後方左方から一直線にこちらに向かつてくる影を一つ視認すると、件の言葉を吐いた。

「王騎いいいいッ」

咆哮とも叫びともとれる声を張り上げながら、脱出を図る一団の左方から割つて入つた一つの影。

「良い馬をお持ちのようですが、あなたは本当にしつこい人ですねえ。龐煖さん」

王騎は並走した龐煖に言葉を投げかけたが、龐煖はそれには応えずに「貴様を殺す」とこぼすと斬りかかった。騎馬を駆けながらの状態でありながらも両者の剣戟に陰りはなく、激しい応酬が繰り広げられた。

「王騎いいいいいい」

ただ王騎の名を叫ぶ龐煖であつたが、変化は確実に起こつていた。それは、実際に矛

を受けている王騎にははつきりと断言できた。

「タガがはずれてきてきているようです、ねッ」

王騎は、一撃、一撃の重さが増していく龐煖の矛をいなしながらも、一撃を叩きこむべく矛を振るった。

「むうッ フンッ」

それを紙一重で躲した龐煖は、次は一撃でさえ入れさせまいと縦横無尽に矛を躍らせるように攻め立てた。それでも、王騎は冷静に受け止め続けた。が、徐々に、押され始めていることも自覚していた。

「武神とはよく言ったものです、ねえッ」

武に全てを捧げて、天に示すキレに至っては、王騎をして受け止め続けるのが困難になるほどであった。

「ハアああああッ」

その上で、息の付く間すらもたずに連撃を放ち続ける驚異的な体力は、もはや人外の域といつて相違なかった。

そして、ついに龐煖の矛が王騎を捉えることになる。

「王騎いッ」

龐煖は己の持つ技量のすべてを出し切るように、およそ人が打ち込める角度のすべて

から絶え間なく打ち込み続けた。そして、徐々だが、王騎の受けに遅れが見え始めたことを察した龐煖は、機を見極めて、胴を切り裂く横風を放った。

「ぐッ ふう」 「ッ、王騎様ア」

王騎は遅れながらも差し入れた矛の脇腹で、龐煖の矛を抑えると、致命傷になるのを押しとどめた。

「ご安心なさい。私はまだ戦えますよ」

虎豹を安心させるように王騎は落ち着いた声で言葉を発した。

「王騎いいい」

その間にも龐煖の矛は「ギチギチ」さらなる力を込めて王騎の矛に、軀に、押し付けられ続けていた。

「ぐふッ ……ッ風」

王騎は愛馬の名を呼び横腹を叩くと風は意を汲んだように龐煖の騎馬に急接近して体当たりした。風の勢いに怯んだ騎馬は自らの馬体を風から遠ざけるように距離を空けた。王騎と龐煖が離れたことで、歩兵を乗せた騎馬隊がその隙間を埋めると「馬だ 龐煖の馬を狙えッ」と龐煖に殺到した。

流石の龐煖も騎馬のみを狙うように投擲される槍や剣の対処に追われることになった。

「嵐……………よくやりま　グウツ」

「王騎様ッ」

王騎は虎豹の呼ぶ声に応えるように、口から流れでた血を拭うと言葉を発した。

「問題ありません。ンッフ、さあ、皆で帰りますよ」

王騎の躰からは深く斬りこまれた傷から多量の出血が認められていた。

「王騎に包围を突破されました。ですが、龐煖様が王騎に重傷を負わせたとのことですよ」

その報告に李牧は眉をひそめた。

「重傷、ですか」

この時、李牧は瞬時にいくつかの可能性を模索したが「この地で王騎を討つことはできない」という結論を覆す要素を見つけ出すことはできなかった。しかし、それらをおくびにも出さずに追加の指示を出した。

「龐煖はよくやってくれましたね。部隊は、そのまま追撃させてください。ただし、伏兵にあつた場合は即座に後退するように、と」

駆け出した伝令を横目に、魏加は言葉の真意を尋ねた。

「伏兵、ですかな」

「ええ、私の推測が正しければ、虎豹は最低でも一万の兵を連れていたはずですよ」

李牧の言葉通り、虎豹は数にして一万を超える兵を連れだしていた。

「四千程がここに現れたことから、あと六千はいる、と」

時は、当初趙莊本陣が敷かれていた場所から、王騎本軍が山深い地に進軍にする時刻まで遡る。

「録鳴未に伝令です」

この時、王騎は「朱錐の精兵を本軍に合流させる」と「全軍の指揮権を虎豹に委ねる」という二つ指示を出していた。それは、この地に自身を討つための大掛かりな何かがあると確信に近いものを抱いたことに端を発していた。

「そうなります」

そこには、いくつかの理由があった。

一つ目は、戦局を見る目を持つ馮忌、さらには、敵を打ち破る武を持つ涉孟、この二人をすでに失っていることにある。馮忌、涉孟の消失は、趙軍の目と武器を持つ腕を失くしたに等しく、侵略軍としては、機能不全に陥っていることを意味していた。だが趙莊は、退却ではなく山深くに後退することを選択した。これが、趙莊という人物が目に見えるほどに愚鈍なれば、自然に視えた可能性はあった。しかし、残念なことに、趙莊はそこそこに名の知れた将であり、この状況の不自然さを際立たせる要因になっていた。

「では、追撃は控えさせますか」

次に、蒙武に帯同していた隆国が上げた狼煙の場所。

急遽、下げたはずの趙本陣は、想像を超えた奥地に移動されていた。さらには、すぐに追跡に出た蒙武たちが敵に遭遇しなかったこと、この二つが、あまりにも手際の良すぎる印象を与えていた。

本来、状況を覆せる、或いは進軍を遅延させるなどの目的がなければ、本陣を下げる意味はない。仮に、ここがもし、彼らの領土であったとしたらその限りではないが、生憎、山陽近辺は秦の領土であり、その付近で大がかりな仕掛けを施させるほど、秦国の警戒は甘くない。そうでありながら、実際に趙本陣を山深い地、その最奥付近に敷いた。それはつまり、元より退く算段があつた証左であり劣勢を覆す「何か」があるという意味でもあつた。

「できるならばそうしたい所ですが、難しいでしょう」

そして、この時王騎は、己を討ち果たす策がこの先にあると仮定したとき、一つの疑念を抱いていた。

「趙莊に己を討てるほどの策を捻る出せるであろうか？」と。

これは、王騎が慢心しているわけでも、或いは、趙莊を侮っているわけでもなく、中華をまたにかけて戦つた経験から来る純然たる疑問であつた。

「それは、なぜですか」

此度の戦を最初から視点を変えて考察しても、趙荘の采配は『可』よりは『優』であるが『秀』とは言い難かった。

そこから、もし仮に「この盤上すら下に隠されたもう一つの大きな盤の『駒』のひとつに過ぎない」としたら……………」。

王騎はそう思考したとき、血が沸き立つような錯覚を覚えることになる。それと同時に、もし仮にそれほどの策を張り巡らせる敵がいるとするならば「相手の目がこの地から反れてからが勝敗の分かれ目になる」と。

「魏加殿も察しておられるでしょうが、あの憎き王騎が、目の前を、それも重傷の状態で逃げ出しているのです」

虎豹は、「指揮権の移譲」その意味を察するとすぐに行動を起こした。

「確かにその状況では「追うな」と命令する方が難しいですな」

まず、録鳴未が陣を敷いた山、特に敵に視認される前方部隊の層を、敢えて、厚くさせた。

「はい。誰もが功に焦る状況が揃っています」

そうすることで、攻撃を仕掛けるかの様相をみせ、迂闊な奇襲すら許さない姿勢を同時に見せつけていた。この配置に敵の目が前方に集中する頃合いを見計い、録鳴未の主力となる騎馬隊の四分の三にあたる三千を下山させると、次に同じ要領で歩兵部隊六千

程度を下山させた。

「目の前にぶら下がっているのは餌となる、極上の首、ですか」

そのあと、鱗棒、同金に左方への移動と正面に陣取る万極軍への攻撃をさせるために、伝令を走らせた。これを受けて両将は、作戦の肝を察して奇襲部隊を編制するとすぐに軍を進発。録鳴未軍と合流と同時に、後ろ顧みないほどの攻勢を仕掛けた。

「言い得て妙ですが、その通りです。それに――」

二人が期待通りの働きを見せたことで、敵の目は欺かれて、虎豹たち騎馬隊は趙将万極の左側を悠々と駆け抜けていった。

「王騎の首ともなれば、国の英雄として一生を遊んで暮らせるほどの褒賞が期待できま
すからね」

「なるほど……。では、その口ぶりから察するに、ここで王騎を討つことはもう叶わない。ということですね」

「……残念ながら。「確実に王騎を討つ」そのためだけに、これだけの準備を擁していな
てなお達成できないとは、我が身を恥じるばかりです」

「そう卑下なさるな、李牧殿。討ち取れなかったとはいえ、王騎を完全に嵌めた上で、重
傷を負わせて敗走させたのだ。これは、十分な戦果ですぞ」

李牧は静かに天を仰ぐと「……はい」とだけこぼした。また、魏加は李牧からカイ

ネの名が出ないことが気に掛かっていたが、敢えて言葉にはしていなかった。

「魏加殿」

が、李牧はそれを見透かすように謝辞を述べた。

「カインを助けて頂き、ありがとうございます」

「助けた。とは言つても連れ去れたのだ。礼を言われることではないですぞ」

「いえ、氣を利かせるようなことになり、申し訳ありませんでした。あの時、魏加殿の弓矢がなければ、確実にカインは死んでいました。今の状況は、それに比べれば、はるかによましであると言えます。それに――」

李牧は昨晚をともししていた者たちを浮かべていた。

「彼らとの約束を破る形にはなりません、幸いにして、交渉の余地はありますからね」

その後、深追いしすぎた部隊が伏兵の餌食になったという報告とともに、敵全軍の退却が開始されたと報せが入った。すぐに三将による追撃を開始したが、思うような戦果を挙げることは、ついに叶わなかった。

第42話

退却した王騎軍が馬陽に入城を果たしてから、数刻。

「趙軍は引き上げていくみたいだ、………馬陽を、馬陽を守り切ったぞおおお」

馬陽城壁から「うおおおお」と挙がる歓声は、戦が終結したことをすべての者に報せた。

それから、数日。

馬陽中央にある城の一室には、礼を述べる蒙毅たちの姿があった。

「私たちのために骨を折って頂いたこと、感謝の念に堪えません」

部屋に、蒙毅と河了貂、それに朱錐の姿があった。

「蒙毅殿。私は王騎軍所属のいち軍長に過ぎない。それは殿にすべきことだ」

「承知しています。ですが、朱錐殿の副官殿が捕らえた捕虜との交換であつたとお聞きしておりますので、その長であるあなたにも礼をするのは、筋であると私は考えます」
「なるほど。その礼、謹んでお受けしよう」

面の下の朱錐は、これが無骨な蒙武將軍の息子かと若干の驚き隠して接していた。

「その、虎豹殿にも直接お礼を述べさせて頂きたいのですが……」

「うむ、打診はしたのだが「ただの結果に過ぎないから気にするな」とのことだ」

「承知しました。では「いつか必ず、このお礼はする」と繰り返しになりますが、お伝え願いますか」

そこに合わせるように声を挙げたのは河了貂であった。

「わ、私からもありがとうございます、お願いします」

朱錐は、文官スイとして河了貂とは顔見知りはあるが、今は軍長朱錐であり、あくまでも初対面として接していた。

「うむ。君の言も承ろう」

と朱錐は意識することなく応じていた。しかし、蒙毅は朱錐とは捉え方が異なるようで、河了貂が割って入るように言葉を発したことに「河了貂ツ」と少し強く呼ぶと、厳しい視線を向けて窘めた。

「今は、僕と朱錐殿が会話をしている。朱錐殿はそういつたことに寛容であられるから良いかもしれないけれど、注意しないといけないよ」

河了貂は蒙毅の言わんとすることを理解したように「ごめんなさい」と素直に謝罪の言葉を口にした。

このやり取りに一つに蒙毅の聡明さが窺い知れていた。

「朱錐殿はそういったことに寛容であられる」

まず初めに窘めうるように強く名を呼ぶことで場を制して、すかさず、この一言を入れることで、朱錐は度量を試されることになっていった。当然、ここから河了貂の行いを不可と断ずることは可能であるが、それは、己は狭量であると示すようなものであった。ただ、武官朱錐からすると気にするに値しない事柄ではあるが、文官スイの目からすると、「蒙毅の言は正しい」と断言できた。

礼とは、相手（文化）を敬うものである。

だからこそ、時に、古式に則ったものが重宝される機会もある。また、正しい礼を習得することは、相手の文化に寄り添うことになり、その心は、相手に通ずるものになる。いつか河了貂が軍師として他部隊と交流を図る際にも、礼を疎かにしないように、という蒙毅の心配りであろう。

「私は気にしてはいない。とはいっても、細かな知人がいるのも確か。蒙毅殿は、良い指導者であられるようだ」

「いえ、私など先生に比べれば、日々、未熟をさらしているに過ぎません」

「軍総司令殿ほどの人物を引き合いに出されては、未熟ではない者を探すほうが難しいのではないかな。蒙毅殿」

「いえ、私自身が日々の精進を欠かさないために、先生を目標にしているという話です

よ。朱錐殿」

振る舞い一つ、言葉一つに蒙毅という人物の姿が写し出されていた。

「蒙武殿の子息は良い志をお持ちのようだ」

朱錐は、ふと李豹や信、そして蒙毅。次代を担う芽は、清々しいほどに上だけを見て育とうとしている。そのことに想いを馳せて、胸の内での一つの決断を下した。

「いえ、志というほどに大層なものではありません。私はただ、父にも、兄にも恥じない人間でありたいと精進しているに過ぎませんから」

「それも立派な志ではないかな。さて、それでは、蒙毅殿の一番弟子、河了貂殿にもなにか一つお聴かせ願おうかな」

「えッ……オレ。え、えくと」

蒙毅は、突然の指名に驚いて何を話せばいいのかわからずに言いよどむ河了貂に声を掛けた。

「河了貂。難しく考えなくていいよ。きつかけでもなんでもいいんだ」

河了貂は蒙毅の言葉に「きつかけ、きつかけかあ」と呟くと言葉を続けた。

「オレは、正直蒙毅みたいに立派な考えがあつて軍師になりたいわけじゃないから……」

と俯く河了貂に、朱錐は自身のことを話した。

「少し私の話をしようか。私は大將軍の英雄譚に憧れて、文官の子でありながら、武官になった身だ。ほら、蒙毅殿の話に比べてどうか。ひどく子供っぽい理由だろう」

「そう言われると、なんだか信みたい」

「少年が見る夢なんてそんなものだよ。ただ私は「私」に対して真劍だった。君の言う信殿と同じようにね」

「真劍……………かあ」

「河了貂殿は、軍師に真劍かな」

「殿、なんてこそばゆいから、オレのことは呼び捨てでいいよ。オレ、家族はいないし、唯一仲間っていうのかな。信つ、と、もう一人いるんだけど、そいつの帰りを待つだけなんて、なんか置いていかれるみたいで嫌だったんだ」

「そうか」

「ねっ、オレの理由なんて大したものじゃないでしょ」

「それは立派な理由だよ。信殿の後ろじゃなくて、追いつきたい、隣に立っていたい。そういうことだろう」

「違っ…いや、…でも…」

どこかもしもじと言いよどむ姿を見かねた蒙毅が再び声を掛けた。

「河了貂には前にも言ったと思うけど、目指すものを言葉にすることは、とても大事なこ

となんだ。恥ずかしかることじゃないよ」

「つ、恥ずかしいってわけじゃないけど………」

河了貂の声は尻すぼむように小さくなっていた。

「いまだ形は定まらず、か。ではこうしよう。いつか言葉にできるようになったら御聴かせ願うということでしょうか」

「……………話さなきゃだめ？」

「二人に話をさせて、一人だけ聞き逃げする、と」

「二人で勝手に話してたんじゃん。あくもうう、わかったよ。いつか話せるようになってたら話すからー」

「そうかそうか、期待して待つとしよう」

「いやそんな期待されてもさあー」

この時、蒙毅は二人の会話を拾いながらも別の事を考えていた。

僕が知る限り、河了貂は年齢の割には、かなり警戒心の強い娘だ。ただ、カイネがそうであったように、同性にはそこまで強くはないようだけど、僕や先生には自身のことをこれまで話していないはず。それが、朱錐殿には自身の事を普通に話している。……………わからないな。解放されてから、戦いの詳細を聞いたけれど、朱錐殿の評価がまったく定まらない。確かに、趙将涉孟を討つたのは彼の部隊になるけれど、実際に討

ち取ったのは副官の虎豹殿と聞く。それに部隊救出のためとはいえ、倍以上いる敵軍の罨に自ら飛び込むなんて無謀としか言いようがない。こうして話をしていても、面を除けば平凡な将の一人という印象だ。

「蒙……どの。蒙毅殿。」

蒙毅は自身の名を呼ぶ声に我に帰ると応えた。

「つと。朱錐殿、申し訳ありません。少しぼんやりしていたようです」

「数日とはいえ捕虜であられたのだ。疲れがでもおかしくはない。この辺りでお開きとしようか」

「そうです、……。朱錐殿、最後に一つお聞きしたいのですが——」

蒙毅は朱錐の申し出に頷きかけたが、訊くことを失念していた事柄を口にした。

「カインはなぜあのような姿であの場に現れることになったのでしょうか」

「ああ、それは——」

ことは、捕虜交換前に遡る。

玄象によつて意識を飛ばされたカインは、そのまま馬陽城の一室まで運ばれていた。

「ツ!?」

ハッと意識を覚醒させて、上体を起こすと声を掛けられた。

「気が付いたね」

カイネは聞き覚えのある声に驚くと寝台から飛び降り剣を――

「ないッ 私の、剣が」

その様子に、玄象は呆れた顔をすると言葉を発した。

「あんたは捕虜なの。帯剣させたままなわけないだろうが」

「つア、……………そうだった」

「はああ」と腕を組んだまま大きくため息を吐く姿に、カイネはなぜか憤りを感じて声を出した。

「な、なんだよッ」

「だめだ。この感じ、どこかの妹みたいで、肩が重くなりそう」

「……………」カイネは玄象の言葉の意味は理解できないでいた。

また、それとは別に、敵意もなにもない玄象の雰囲気にも疑問も覚えていた。

「お前は、私たち趙人に対して、なにか思うことはないのか。それに捕虜の私はなぜ牢じゃなくて寝台に寝かされている」

「趙人に対してって言われてもねえ。私は秦の人間ってわけでもないから、どうでもいい。ここにいて理由なら、もう少しすればわかるさ」

カイネは玄象の「秦人じゃないからどうでもいい」という言葉に反応して声を挙げた。

「秦人じゃないなら、なぜ、長平で数十万を生き埋めにするような秦に協力するッ」

どこか熱を帯びたように声を挙げたカイネに対して、玄象は小難しいことを考えているように眉をまげ宙を見上げて「んー」と唸ると言葉を並べた。

「長平の話は知ってるよ。まあやりすぎだとは思ったけど、互いの生き死にを賭けて戦争してるんだろ、あんたらは。なら、その結果じゃん。っていうかさ、それならなんで戦うの？」

「ナっ!?だつて、それは、秦が攻めてくるから………」

「いや、昨日までの戦いつてそっちが攻めてきたでしようが」

「そ、その前に、秦が攻めてきたからであつて、だから、仕方なくー」

「じゃ、受け容れなよ。互いに攻めぎあつて、結果の一つに長平つてのがあつたつてさ」

カイネは、玄象の軽い言葉に思わず声を挙げた。

「数十万の命はそんな軽くないッ」と。

それに対して、玄象は特に思うことがないように言葉を続けた。

「あー、わかつた。でもさ、結局は仇を、相手を皆殺しにしたいつて話でしょう」

「ち、違うッ。少なくとも李牧様はそのようなことを考えてはおられないッ」

「李牧様でもなんでもいいけどさあ、あつちが攻めた、こつちが攻めたつて言つて何百年も争つてきたわけじゃん、あんたらは」

玄象の言葉はひどく簡素化されていたが、言わんとしていることをカイネは理解がで

きた。

「……………。否定はできない、けど、向こうが攻めてこなければ……」

「それ。向こうがつてやつ。いつまで続けるつもりなの？」

「そ、それは……………」

「ね？黙らすために皆殺しか、あとは属国にして虐げる以外の路なんてないんでしょ」

さらに、ふううと息を吐いた玄象は、続けて言葉を発した。

「私からしたら、あんたらはどっちもどっちなんだよ。だつて意味わかんないよね。自分たちで争つという、責任は擦り付け合うなんてき。だからさ、少なくとも、今生きている自分の命くらいは責任持ちなよつて話」

「ッ……………。——」

何かを言わなければならないとわかつてはいても、言葉にすることができずにカイネは俯くと沈黙した。

その姿に、玄象は、悪いことをしたかな、と「ぱんッ」と手を叩くと努めて明るい声をだした。

「はいっ、この話は終わり。だいたいさ、私とあんたとじゃ生きてきた場所も時間も違うんだから、私の言葉はただの戯言つてことで真に受ける必要なんてないよ」と。

しかし、効果はなかったようで、部屋には気まずく重苦しい空気だけが漂い始めてい

た。そこに、救いに声が響いた。

「入るぞ」

「あつ、入っていいよ」

と朱錐を中に通すと「いい所に来た。あとは任せる」と言葉を残すと玄象は、素早く部屋をあとにした。

「？」

朱錐が去り行く玄象から視線を戻すと、そこには、こちらを睨み上げるカイネの姿があつた。

第43話

「? 玄象がどうかしたのか」

朱錐は疑問符を浮かべたまま、カイネに話しかけた。

「……………なんでもない」

カイネは玄象を睨みつけていたが、その姿が見えなくなるとそっぽを向いた。

「ふむ、なにかはわからないが、私はこの件を預かることになった朱錐という。貴殿は——」

「カイネだッ」

朱錐は返事になにやら怒気が込められていること察すると、こちらから話すのではなく、質問に答える形に会話を変更することにした。

「うむ。それではカイネ殿。貴殿の聞きたいことに応えるので、質問があれば訊こう」

カイネは、朱錐の穏やかで落ち着いた声に、ふと我に帰ると言葉を正して、気になつていたことを尋ねた。

「……………。どうして私は牢ではなく、この部屋に留められているのでしょうか」

「なるほど、まずは、こちらを読んでもらいたい」

朱錐は「許可を得て中身は改めさせてもらっているよ」と声を掛けながら、懐から竹筒を取り出すとカイネに手渡した。竹筒を開いたカイネは、これが李牧の書き記したものであることをすぐに察した。

「……………李牧様」

竹筒には、「捕虜交換という形で交渉するので、短慮を起さないように」と綴られていた。

「そういつた経緯から、捕虜である貴殿に万が一があつては、いけないからね。怪我の治療と経過をみるために、牢ではなくこの部屋になつたというわけだ」

カイネは、その言葉に剣を突き立てられていた鳩尾のあたりに手を当てた。

「治療していただき、感謝します」

「大分落ち着いたようだね。あと、治療をしたのは、玄象であるから、もし礼をするならば彼女に言うといい」

「あいつが……………」

カイネは言い負かされたとまでは言わないが、さつさと逃げるように部屋を出ていった玄象の姿を浮かべていた。

「他に、なにかあるかな」

少し俯くと、意を決したように「朱錐殿は、趙人に対してなにか思うことはあります

か」と言葉を発した。

「これは、不思議な質問だね。……なぜかを窺っても良いかな」

「先ほど、玄象から、お前たちは責任を擦り付け合って争い続けている。と言われました。それに私は答えることができず……秦人はどうなのかが、気になりました」

「ふむ。なぜそのような議論になったのかは気になる所だが、ひとまず応えらるとうしよう。まず、玄象の言は正しいと言えらるう。国同士の争いとは、元より、そういうものだ。それは君にも理解できているのだらう」

「……どう言葉を取り繕ってはみても、否定はできない、と理解はしてます」

「うむ。なぜなら、国同士が争うのは、憎しみなどによる所ではなく、あくまでも、国益に沿う所にあるからだ。例え、そこに個人的な恨みが利用されることはあつても、だ。さらに、数百年も戦い続けているのだ。もはや、責任の所在などみつけようもあるまい」
「では、朱錐殿は、趙人と秦人は争い続けるしかない、とお考えですか」

「カイネ殿がそうであるように、私も秦国の将として、国の御旗のもと戦い続けるのみだ。ただ、私、個人としての見解は少し違う。カイネ殿は、商人をどう思われまますかな」
「商人、ですか」

「うむ。彼らのなかには「利」を求めて、国を跨ぐものもいると聞く。それはなぜだらうか」

「それは、より多くの「利」を求めるところですよね」

「そう、国の色を背負う形になるであろうが、彼らからすれば、秦人であろうと趙人であろうと「利」の前では同じ人なのだ」

「同じ、人……………」

「そして、秦人に罪人となるような罪を為すものがあるように、趙人にも同じような輩はいるであろう」

「同じ趙人としては、度し難いことですが、いないとは言えません」

「ならば、その逆も然り、とは考えないかね」

「その逆……………。趙人でも秦人でも同じように良い人が……………いる？」

「うむ。では、彼らを色分けているのは、何であろう」

「えっ、く、国？」

「そう。国だ。長年、争い続けた我れらが、これからも争い続ける要因はく……………」

カインは朱錐が言葉を止めたことに疑問符を浮かべて「どうかしましたか」と声を掛けようとしたが、機軸を制するように「この話はやめておこう」と朱錐は言葉を発した。そのことに、真意を問おうとしたカインであったが、朱錐は「カイン殿の上官にでも訊くと良いだろう」とそれ以上は話さなかった。

「この話は……………までだが、一つだけ付け加えるなら、だからこそ、しっかりと守るべきも

のを己の芯に据える必要があるということだ」

「守るものを芯に据える、ですか」

「……………ん？ どうやら準備ができたようだ」

言葉を示すように入室の許可を求める声が外から掛かり、朱錐がそれに応じると数人の女性が入室した。

「捕虜交換の話はすでに済んでいる。この女性たちは、カイネ殿の身支度を整えるものだと理解して頂きたい」

その言葉に、カイネは「身支度ですか」と多少の疑問を抱いたものの、女性たちが「よろしく願います」と頭を垂れるので「お願いします」と応じるのであった。

「よし。カイネ殿。これで私は退出するが、あとのことは彼女たちに任せておけば問題ないので、従うように」

そうしてカイネに女性たちがススツと近寄り、そつと両腕を抑えたために「えつ、ちよ、朱錐殿ツ ちよつと待つてください。さて、なんで脱がそうとするツ」とカイネは声を挙げていたが朱錐振り返らずに「カイネ殿においては、短慮を起さないように」と言葉を残して部屋をあとにした。

「お前も悪いやつだなあ 朱錐」

部屋の外には壁に背を預けた虎豹の姿があった。

「悪い奴もなにも、あなたの指示でしょう。それに、怪我をしているのですから出歩かないように、と念を押されていたように思います」

虎豹は穿たれた脇腹の傷の具合よりも、こちらのことが気になり出向いていた。

「問題ないよ。象も付いていてくれるし」

ビクつとしたように応えのは、玄象であった。

「えつと、ついているというか、部屋を出た所で捕まった、というのが正しい、かな」

と、どこか朱錐の視線を避けているのは、先程カイネを押し付ける形になつた気まずさであった。それに、朱錐は「氣にすることはない」という意味も込めて名を呼ぶと、今行われている事象について、虎豹に尋ねた。

「象が付いているのなら、安心だろう。それで、これの意図はどこにあるのかお聞きしても」

「おつ、何気に朱錐が象って呼んだの初めてじゃないか」

と茶化すように言葉を発すると「ほんとにそう。呼んでいっていったのに、一回も呼ばなかった」と玄象も同意した。

「気軽に女性の名を呼ぶのは、それはそれで問題があるでしょう。それよりも、先程の意図をお聞きしたいのだが」

「大きな意味はないとは言わない。ただ、象の話を聞いてな、少しばかり想うことがあつ

た。その程度のことだ」

朱錐は虎豹の言葉にふと考えたが、害をなす行いではないので、黙認することにした。しばらく三人であれこれと会話を重ねたあと、朱錐は「捕虜交換に使う馬車の確認をしてくる」とその場をあととした。そうして「準備ができました」と部屋内から声が掛かると二人は中に入った。

「へえ、そう、ふーん」

と、興味深いようにまじまじと眺める玄象と

「随分と様になってるじゃないか」

と満足げに頷く虎豹の姿があつた。

「ツク 私になにをさせるつもりでこのような真似をしたつ」

カインは、慣れないのかどこか恥ずかし気に声を荒らげた。

「何もさせないよ。私からの、ささやかな贈り物、つてところだ」

と虎豹は応えた。

場所は、馬陽近辺にある街道上の平地。

そこには、李牧と魏加の二人の姿とその護衛、そして、不測の事態で退却せざるを得なくなつたときの支援のために趙国近辺で待機させていた趙将の姿があつた。

「李牧殿、無事にことが運びそうで一安心ですな」

「ええ、魏加殿。こうして貴方に残っていただけで、心強く感じております」

「カイネとも知らぬ仲ではない故に、な。まあどちらも了承した交換であるのだ、大事はないでしょうがな」

「それでも、ですよ」

二人の和やかな会話の外では、悶々とぶつくさと愚痴を吐いている男がいた。

「ツチ カイネにもしもがあつたらあんたをぶつた斬つてるところだったつてのによお」

その言葉通り、李牧からの報せを受けたこの男傅抵は、自身の部隊を置き去りにして李牧のもとに駆け付けけると恐ろしほどの劍幕で言い募り、返答如何では李牧に対して劍を抜くことすら辞さない覚悟であつた。

「どうやら傅抵の奴はまだ納得がいかない様子ですな」

「いえ、これは私の不徳によるものですので、ただ、受け入れるのみです」

「李牧殿が討たれるようなことになっては、私も傅抵を射らざるを得なくなりますから、努々お氣よ付け願いたいものです」

「ええ、そうならないように更なる精進を誓います」

彼らがそうして会話を重ねているうちに、複数の騎兵に囲まれた一台の馬車が、遠くからこちらに向かう姿が見えてきていた。

第44話

遠くに見えていた馬車が到着すると、進み出た朱錐と李牧は言葉を交わした。

「この件を預かった朱錐という」

「私は李牧と申します」

李牧は、朱錐という名に思い至ると、気づかれない程度に注視することにした。

「まずは李牧殿。お互いの捕虜を、この場にて平和的に交換する。ということ、よろしいかな」

「はい。それで相違ありません。私にとつてもあなたにとつても平和的であることを望みます」

「了承した。それでは、まず無事な姿を確認したいのだが、よろしいか」

「ええ、かまいませんよ」

李牧が後ろに顔を向けて頷くと、近くに停車していた馬車から一人、また一人と合計四人の者が地に足をつけた。

朱錐は四人に無事な姿を確認すると気になったことを李牧に尋ねた。

「こちらは一人の将校に対して、そちらは四人だ。なにか条件をつけてもよかったですので

はないのか」と。

「もとより、彼らは戦が終結した段階で解放する予定でした。そういった意味では、こうして交渉に使うこと自体は、本意ではない。ということですよ」

「なるほど。李牧殿はできた方のようだ」

「私など、できた、というほどに何かを為した者ではありませんよ。それよりも、こちらを確認したいのですが、よろしいでしょうか」

謙遜というだけはないな。と胸の内で言葉をこぼした朱錐は、李牧という人物は、慢心や油断を期待できるような将ではないと感じていた。

「朱錐殿？」

李牧はこちらを見据えたまま反応を示さない朱錐に再び声を掛けた。

「む、そうであったな」

朱錐が合図を出すと馬車の戸が開き、一人の女性が姿を見せた。

そこには、普段の姿とは違い、髪を綺麗に結びあげられた上に化粧をほどかされ、さらに、白を基調とした華やかな衣類に袖を通したカイネの姿があった。

「……………、これはどういうことでしょうか」

しばし唖然とした李牧であったが、冷静さを取り戻すと尋ねた。

「李牧殿の言はもつともだと理解できる。これは私の副官虎豹の言であるのだが、ささ

やかな贈り物。であるそうだ」

「虎豹殿からの、贈り物、ですか」

「詳細については、私も聴き及んではない。カイン殿が所持していた物品は、あちらの者が持つているので、受け取られよ」

「そう、ですか」

李牧は狙いを察していたが、それを言葉にすることはなかった。そうして、お互いの捕虜は無事に交換された。

「り、李牧様。この度は私のせいでこのような交渉をさせてしまい、申し訳ありませんでした」

李牧は、華やかで美しい衣装に身を包んでいようと、一武官として滞りない所作を見せるカインの姿に、傷の具合は悪くはないようだと言った。安堵した。

「あなたの無事が確認できて、何よりです。カイン」

「李牧様……………」

とカインが感じ入るのを邪魔するように声を掛けたのは傅抵であった。

「お前、なんだその恰好はッ ついに俺の嫁になる決意ができたってことだろう」

と冗談半分本気半分で言い放って肩を組もうとした傅抵をカインは「馬鹿が」と一撃を

喰らわせて一蹴した。

「傳抵、それにカイネもその辺にしておけ。ことが無事に済んだとはいえ、いまだ秦の勢力圏であることを忘れるな」

「あツ、と、魏加殿も私のために申し訳ありませんでした。それと、ありがとうございますす」

「うむ。無事ならばそれでよい、気にするな」

李牧はひと段落着いたことを見計らうと声を掛けた。

「さあ、皆で趙国に帰るとしましょうか」

李牧は朱錐に最後の挨拶を済ませると踵を返して歩き出した。そうして、初めにその目が捉えたのは、出発のために帰り支度をしている皆とはべつに、李牧が戻るまでその場にとどまっていたカイネの姿であった。

「どうかしましたか。皆が待っていますよ」

カイネは、俯きながら何かを言いたげにしているが、その先の言葉が外にでてこないようであった。

「あ、あの、り、李牧、様……………」

その様子に、李牧は手でカイネの言葉を押しとどめると言葉を発した。

「あなたには、白の衣装がよく似合いますね。とても綺麗ですよ。カイネ」

「あ、あ、ありがとうございます(ぎ)ございますっ」

カイネの美しく着飾った姿に普段はあまり見せない反応。それらに少しばかり感じたおかしさに表情を緩めた李牧は言葉が続けた。

「さあ、皆が待っていますから、行きましようか」「はいッ」

李牧のやさし気な表情に見惚れていたカイネであったが、その実、李牧の瞳の奥には、誰にも知り得ない燦りが生まれていた。

順調に捕虜交換が行われていた舞台裏では、怪鳥王騎が重傷を負って敗走した。という一報が列国に衝撃を走らせていた。

秦国本営は、あくまでも趙の侵略を退けた王騎大將軍の活躍を褒めたたえて、国内の士気向上に努めた。だが、人の口に戸を立てることはできずに、聡い者たちは「六大將軍王騎の敗走」が齎す列国の侵略戦争を想像して、その身を震わせていた。

同時に、一時代を席卷した大將軍でさえも過ぎ去る歲月には勝てぬと悟らせ、列国が恐れていた六大將軍王騎という名への恐怖心は、大きく後退することになった。

それは、秦国領土に向けて盛んに行われるようになった侵攻作戦によつて浮き彫りになつていくことになる。

また、王騎は秦本営に対して、此度の失態を理由に、大將軍の位を返還する意思がある旨を通達したことで、「王騎は完全に前線から退くつもりだ」という憶測を生み、さら

なる混迷が巻き起こることになった。

当初はその申し出を固辞していた本営であったが、列国の侵攻作戦が頻発するようになると、王騎の名はすでに過去の遺物であると判断されて、承認される運びとなった。

そして……

「俺になんの用だ」

咸陽に戻っていた蒙武を呼び止めたのは、騰であった。

「殿より伝言を授かった」

蒙武はその言葉に興味を持つと「話せ」と先を促した。

「ソフフフ、蒙武あな——」

「待て」

「——たの課題はめい——」

「俺は待てと言っているッ」と騰に掴みかかった。

「む、何だ」

とぼけようする騰であったが、蒙武の射抜く視線は真剣そのものであった。

「わかった。まじめに話す。手を放せ」

解放された騰は、蒙武に王騎の言葉を伝えた。

その頃、別の場所でも一つの出来事が起きていた。

「私の名は朱鉦という。信殿で間違いないかな」

「うん？あツ、その鬼の面は俺を助けてくれた部隊の軍長だよな。ありがとな。尾倒のやつも助かったし、この借りは俺が出世して大將軍になつたら、いつかぜつてえ返すからよ」

信の言葉からは、大將軍にたどり着けないという負の感情を一つも感じさせないものであった。

「期待して待つことにしようか」

「おう。俺は絶対に成るからな、待つてくれ。それで俺に何の用なんだ」

「うむ。私は王騎様の命を受けて、これを渡すために来た」

と朱鉦は後ろに控えていてた者に視線を送ると、布に包まれた矛とともに前に進み出した。

「お前、李豹じゃねえかツ あの時のごとは忘れてねえからなツ」

「ツフ お前は変わらないようで安心したぞ」

と、李豹は、熱くなっている信とは対照的に、王騎より預かっていた矛を静かに渡した。

「つと、なんだこの糞重たい上に、古くせえ矛は」

「いらぬというなら、私にそれを譲つても良いんだぞ。なにせ、王騎様が若かりし頃に振

るわれていた矛らしいからな」

「まじか、王騎将軍が………この矛を」

李豹から矛の由来を聞くと、信は、たちまちとても価値のあるもののように思えてきて、思わず身震いした。

「李豹の言は正しい。が、王騎様が鍛錬のために使われていたものだと聞いている。その重さで分かる通り特注品ではあるが、売つても二束三文にしかならない品物のようだ」

一転、信は朱錐の言葉にがっかりした様子を見せた。

「なんだよ。期待させといて価値なしかよ」

朱錐は、その様子から、大將軍から矛を授かるということの意義を語った。

「矛自体の価値はそうかもしれないが、王騎様がその矛を授けた。という価値は、信殿が考えるよりもずっと大きいぞ。それと「まずはそれを自在に操れる程度には成長なさい」との言を王騎様より授かっている」

「自在に、つてこの重たい矛をかよ」

「無理なら私に寄越してもいいんだぞ、信」

李豹の言葉は、信をうまく焚きつけたようので、威勢のいい言葉を引き出した。

「つな、………俺はすぐにこの矛を使いこなして、將軍への道を駆けあがつてやるから覚

えとけよッ」

「その言葉を忘れるなよ、信。まあ俺はお前よりも早く將軍になってやるけどな」

「なんだとツーーー」

面一つとはいえ素性を隠してはいる李豹からすると、気の知れた信との掛け合いは、あの頃の自身を思い出せたのだろう。一人称は「私」から「俺」へと自然に変わっていた。

躍動する者たち

第45話

王騎敗走の一報が中華を駆け巡ってから半年。

列国と領土を接する地は、度々、侵略の憂き目にあっていた。

秦本営は各地に將兵を走らせて絶え間なく迎撃していたが、奪われる地も少なくなかった。また、ただの小競り合いが折り重なって、突発的に万を要する大戦が起こることもあり、その対策に日々頭を悩ませていた。

そして、小規模とはいえ各所で戦いが頻発するようになれば、頭角を現すように、名を挙げる小隊の姿が各地に散見されるようになっていた。

「今、各地で名を挙げている小隊は、主に四つです」

今、戦略図を前にして報告を受けているのは、軍総司令昌平君を筆頭にした軍部の面々と長年武官として前線を支えてきた経験を持つ昌文君であった。

「まず始めは、蒙？將軍の孫にあたる蒙恬率いる楽華隊。次に王翦將軍のご子息王賁が率いる玉鳳隊。それに、先の大戦で趙將馮忌を討った飛信隊の信。最後に、元王騎軍所

属であつた李豹の豹騎隊。この四隊の活躍は目を見張るものがあります」

昌平君は、報告の一つ一つを吟味しながら、自身の知識と照らし合わせていた。

「うむ。蒙恬、王賁の二人はもとよりその活躍は期待していた。飛信隊は王騎將軍の名付けであつたな。豹騎隊の李豹は、聞かぬ名だな」

「李豹は、王騎の、今は騰になるのか。そこにおける儂の副官であつた朱錐の元にいた者じゃ。少し前になるが、朱錐本人と会おうたときに「将としての才はある」と報告は受けておる」

「ふむ。それでは、昌文君の副官であつたという朱錐についてお聞きしたいことがある」
「ん？朱錐がどうかしたのか」

「何かしたというわけではない……」

と、昌平君は、そこで言葉を止めると言葉を選ぶように声をだした。

「私は総司令として、各地から上がる報告を適時まとめている。そこから、各将の力量を推し量っているのだが、挙がつてくる報告と実際の戦略的価値が釣り合っていないのだ」

「む、朱錐が不正な報告をしているとでもいうのかッ あやつは——」

昌文君は、自身の副官であつた朱錐が、そういつた不正に手を汚すはずはないと声を荒らげたのだが、昌平君は落ち着かせるように手を軽く上げて制すると言葉を続けた。

「落ち着かれよ。逆なのだ」

昌平君の常と変わらぬ声に、昌文君は逸つた気を抑えると謝罪の言葉を口した。

「ぬ、逆、じゃと。すまん。……それで、逆とは一体」

「うむ。私が独自に派遣した者から「戦の詳細に間違いはない」と詳細の裏付けは済んでいる」

昌文君にして、軍総司令は何を注視して、この会話をしているのかを掴むことができてはいなかった。

「ならば、なにが問題なのだ」

「これは口で説明できるものではない。例のものを」

と別の戦略図を拡げさせると、そこには朱雫たちが転戦した地が記されていた。

「ここが初めに配置された地、次がこことここ。そして、今いるのがこの地だ。そして、転戦する前のおおよその勢力圏を記すところなる。最後に現在の勢力圏は——」

「? 大きく勢力圏を取り戻しているではないか」

「その通りだ。では、昌文君に聞くがこれだけの失地回復を成し遂げるならば、どのような武功が考えられるであろうか」

「各地でこれほどの勝利を収めているからには、その地の大将か副将の首、あるいは名だたる将兵の首級などではないのか」

「うむ。私もそれは考えたのだが、首級はさほど挙げたてはない。それも名のある将というわけではない。せいぜいが千人将と言ったところだ」

「んん。それはどうということじゃ。ならば、将は健在なままで、朱錐のいた地の軍だけが大きく後退しているというのか」

「うむ。さらには第一功を挙げているわけでもなかった。敵軍に何かを仕掛けているのは間違いないのだが、ここからでは詳報以上のことを知る術がないのだ」

「ふくむ。敷いて挙げるならば、あやつのもとには虎豹なる者がおる。かなりの腕と戦略眼の持ち主だと聞いておるから、そやつの活躍やもしれん」

「先の大戦で趙將を討つて名を挙げた第六軍の副官でしたか」

「どのような者は儂も知らんが、朱錐のやつが副官に据えたのだ、相当に信を置ける者じゃろう」

「張っている者の帰りを待つ以外にはない、か」

「こうして、戦略図を前にした面々は、総司令よりもたらされた戦の詳報と現地で起きている現象との差異に頭を悩ませていた。

ところ変わって問題となつてゐる地では、秦本営からの通達に沿つた形で頻度を増していく侵略軍に対抗していた。それは、激しさを増ししていく戦いのすべてを本営の判断待ちにしては、機を逸してしまふために、各將軍に細かな采配を委ねるものであつた。

そこには、その地を委任された将兵が実際に、武に秀でていのか、智に秀でていのか、或いは、采配する力を有しているのか、などをあらゆる角度から正確に見極めようとする軍総司令の狙いが秘められていた。

「敵軍退却していきませう」

「追撃は必要ない。野営地に戻るぞ」

朱錐率いる第六軍は小規模の戦いに勝利する帰途についた。

「これで、この一帯は随分と楽になるだろう」

現地では、朱錐たちと対峙した敵軍は、総じて弱体化した挙句に、大幅な後退をせざるを得ない状況に追いやられていた。

「魏との隣接地が酷く押し込まれているそうだから、次はそこになるだろう」

言葉を返したのは、傷の癒えた虎豹であった。

「魏か。こうも各地に転戦となると、休む間もないな」

「それは仕方ないだろう。我らは、騰軍において独立遊軍となった身だからな」

虎豹の言葉通り、朱錐たち第六軍は騰軍中の指揮化に置いては、自由な機動を許されていた。

「うむ、亡き録鳴未の分まで働くとしようか」

先の大戦で、虎豹が録鳴未の主力騎馬隊を借り受けたことで、録鳴未は軍の再編に追われることになり、防衛戦には参加していなかった。それにより、録鳴未が担当する地域の大半を第六軍が受け持つことになり、多忙を極めてることになっていった。

「そういうな。あれから、二千を加えて、五千に増員されているだけマシだろう」

大戦後、朱錐軍は三千から五千へと増員されていた。

「確かに。新兵の練兵だと考えれば最適の環境か。これも、騰將軍の戦略の一部なのだろうな」

「ああ、だから丁度いい。散らせてしまった馬鹿者たちに顔を向けできないような隊を作るわけにはいかないからな」

「……………そうだな」

二人が会話を重ねていると横から声が掛かった。

「まッ、姉さんの身は私が護るから心配いらないけどね」

そう声をだして、自身の帰還を報せたのは、別動隊として行動していた玄象であった。そこで、気になってはいたが機会を逸していた話題を虎豹は尋ねることにした。

「よろしく頼みたいところだけど……………、よかったのか、象は、李豹に付いていなくても」「うん。訊いたけど、私を超える男になるために軍を離れるのに、守られるわけにはいかない。つてさ」

朱錐は、信や蒙毅たち次の世代を担う若者の姿を目の当たりにしたことで、李豹の飛躍的な成長には、己という庇護は足枷になると判断していた。そこで、大戦の後処理が落ち着いた頃に、軍を離れるようにと提案するつもりで、李豹を呼び出たのだが、逆に李豹からその旨を告げられた、という一幕があった。

「少年はすぐに男になつていくな。ん、そうは思わないか、朱錐」

「なんのことを言っているのかは、知らないが、李豹のさらなる成長に期待している」
「まつたく、この男は」

一部を除いて和やかに進んだ会話は野営地まで続くことになった。

そして、次なる戦地に移った朱錐たちが勝利を収めると、敵軍は判を押したように大幅に後退していくことになる。

「此度もうまく嵌ったようだなによりだ」

命からがら逃げだした敵将を眺めながら朱錐は言葉をこぼした。

「確かにな。なまじ頭が回るものだから、引つ掛かる作戦というのがいやらしいな」

虎豹のこの言葉通りに、それなりに頭が回る将ほど、見事に引つ掛かつては甚大な被害を被っていた。

それは、敵主攻を誘い出して壊滅させる。この一点に絞った作戦であった。

まず、虎豹率いる主攻が敵陣を縦横無尽に切り裂き、被害を与える。そうすると、は

じめの内は、虎豹を止めようと動くのだが、虎豹はこれを易々と突破していく。敵軍はこの時点で退却を視野に入れ始めるのだが、ここで一つ目の仕掛けが発動する。朱錐がいる本陣は手薄である。という報告が敵軍に入るのである。

この時、朱錐本陣は、わかりやすいほどに孤軍となれる場所に陣を敷くように心がけていた。

そうすると、頭の回る将ほど、強力な虎豹という主攻に頼って油断してる愚将だと判断して、虎豹の足止め専念。そして、逆転の一手として、自身が抱える精鋭を用いて朱錐本陣への強襲を狙ってしまうのである。

朱錐本陣は、敵強襲に驚くように、急いで陣形を整えようとするのだが、これは、二つ目の仕掛けである。朱錐たちは、どこから来るのかは承知の上であり、すばやい陣形変更を実戦の地で行っているに過ぎないのだが、敵強襲部隊の眼には、そうは映らない。朱錐たちの慌てように、勝機を見出して全力で突撃してしまう。

対する朱錐本陣は、対突撃用の守備陣形を組み、突撃の勢いを押し止めて乱戦に発展させてしばらく戦う。

しばらくすると、本陣強襲を救うべく現れた（隠れていた）玄象の別動隊が敵強襲部隊の後方を一気に貫いて壊滅させる。

作戦の失敗を知った敵将は、敢え無く退却する。

という流れであった。また、足止めに掛かっているような態をとりながら、その実、虎豹は、じっくりとしかし確実に敵兵を削り取ることに専念するという徹底ぶりであった。

この作戦の肝は、敵將に自身の判断が誘われたものだという自覚をさせないところにあった。

「敵主攻は強力であり、一矢報いるために孤立した敵本陣強襲を執行したが、想像を超えて敵本陣の守備は堅かった」

という印象を持たせることで、結果は失敗であったとしても、反撃を選択した判断は「必ずしも間違つてはいなかった」と証言させるに至っていた。

総じて、強襲などを務められる部隊とは精銳であり、その壊滅は、その軍の武器を奪うことと同義である。そうなると、敵將は戦略の幅を大きく狭めざるを得なくなるわけだが、それが消極的な策としてみられて、軍の士気は落ちる。結果として戦の継続が難しくなってしまう。という悪循環を敵軍中に作り上げていた。

しかし、この方法には大きな欠陥があった。

「敵精兵の壊滅は叶うけど敵首級は挙げられないから、手柄は薄いつてのは、軍としては、どうなの」

玄象の指摘にあるように、軍としては潰れ役に等しく、他隊に第一功を獲られること

になっていた。

「手柄は重要なのだが、最後にものをいうのは、軍そのものの力だ」

朱錐は、この場での武功よりも、戦場の盾として、最後まで生き残ることを前提に軍を練り上げていた。

「ツフ そうだな。幸いにして、我らは大きな武功を求める理由はないからな」

虎豹もまた同様に考えており、軍の練度を上げることが念頭に置いて采配を振るっていた。

「ふーん。まあそれに私はついていくだけだけどね」

朱錐たちが各地に転戦しているうちに、本営は王騎の意を汲む形で、大将軍位の返還の申し出を承認。これを受けて、王騎は、軍の全権を副官であった騰に委ねると「王騎として前線からは身を引く」旨を本営に伝えた。

それから少しの月日が経過した頃。

虎豹に呼び出された朱錐の姿は、拠点となっている城塞都市の一室にあった。

「わざわざこのような場所に呼び出さずとも、演習で顔を合わせるのだから必要ないのではないか」

と、朱錐は理由も告げずに呼び出した虎豹に苦言を呈した。

「あく、とだな、朱錐。理由はある。あるのだが、その、なんだ」

朱錐は、何かと言ひ淀みながら一向に話を始めない虎豹の姿に、何か既視感のようなもの覚えていた。

「なんだ。言いにくい事なら後日でも構わないぞ」

「あー、と。そうだな。ごじつ………というわけにいかないようだ」

だが、何かに気付いた虎豹は、覚悟を決めたように言葉を発した。

「朱錐に紹介したい方がいる」

「紹介したい、方、ですか………」

朱錐はこの時、虎豹の「紹介したい「方」がいる」という表現が非常に気になっていった。というのも、王騎が治めるこの城塞都市において、虎豹が気を遣うほどの人物は、一人しかいなかったからだ。

「なんででしょうか。とても後ろを振り返りたくない感覚があるのですが………」

「そういうな。私も驚いたのだから、お前も驚くといい」

「驚くもなに、も………」

と振り返れば予想を裏切らない人物が龍を模した面を付けて佇んでいた。

「あ、あの………」

朱錐はなんとか言葉を絞りだそうとしていたが、彼の者の眼は訴えかけていた。

可以外の返答は受け付けない、と。

「青騎です。以後お見知りおきを 軍長殿」

そこには、頭を抱えた朱錐の姿があつたとかかなかつたとか……。

第46話

始皇4年。

中天に轟いていた怪鳥王騎の名が、三大天李牧の策略によって地に墮とされてから、一年が過ぎようとしていた。

その間に「王騎は先の大戦での怪我により前線を退かざる負えなくなつた」という報が、各地に流れていた。それにより、趙三大天李牧の名はさらに名声を得るようになり、逆に、かつて六大將軍によって築かれていた武威は大きく失墜することになった。

秦国各地では、領土を掠め取るうする列国の侵攻作戦が激しさを増していたが、新たに台頭してきた將兵たちの活躍によって押しとどめられていた。

その頃、秦国本営は、とある一報を始まりとした騒ぎによつて、戦場と同等の色めきを立ち昇らせていた。

「大王の許可も得ずに、あの男はなんてことをしでかしおるんじや　こんな暴挙、許されるはずがないぞッ」

昌文君の怒気の籠つた言葉が回廊に響き渡る様子を、此度の騒動の首謀者は、楽しむ

ように王宮の上階から眺めていた。

「猛つておるのお」

他人事のように言葉を発したのは呂不韋であった。

「ヒョツヒョツヒョ 丞相の悪ふざけのせいではございませんかな」

言葉を返したのは、呂氏四柱の一人、蔡沢であった。

「先生。私はなにも悪ふざけをしているわけではありませんぞ」

真意は掴ませない呂不韋の言葉であった。

「ヒュツヒョ さようかさようか。そう言うことにしておきましょうかのお」

ことの顛末はこうであった。

呂不韋は、昔馴染みである、趙王の寵愛を受ける春平君を「両国の友好のため」と称して極秘に呼び出すとこれを捕縛。その後、趙王に「返して欲しければそちらの宰相をこちらに赴かせよ」と要求した。

これにより、現三大天であり、同時に趙国の宰相である李牧が趙王の命を受けて、来秦する運びとなっていた。

「さてさて、李牧という漢はどんな人物であるのかのお」

李牧来秦の報の影響は、各地に散らばっていた将兵たちにも及んでいた。それという

のも、丞相呂不韋は会談にあたって趙国に対して帯剣を許したことにあった。大王が臨席する場に他国の將兵に帯剣を許すということは、陰謀を図りやすい状況であったからだ。

「大王様を手に掛けようとしたので、皆殺しにした」

など、他国の誰もが信じない内容であろうとも、事実を証言できる者がいなければ、糾弾し続けることは難しい状況を呂不韋は意図的に作っていた。

もちろん、そんなことをすれば、他国の信用は地に落ちることは明白である。しかし、李牧という人物がそれ以上の存在であるならば、十分に元は獲れるという算段があつたのであつた。

そのため、李牧と因縁のある蒙武や元王騎軍である現騰軍の者を中心に招集が掛けられていた。そこには信や羌?の姿もあつた。

「俺はそんな卑怯でくそみてえな真似は絶対にしねえッ」

そんな声を張り上げているのは、階段の中腹あたりで軍総司令である昌平君と対峙している信であつた。

「ん、あれは信殿か」

朱雖もまた騰軍の一員として招集されていた。

「なんだ、あの餓鬼も来てやがったのか」

録鳴末の言葉に反応したのは、騰であった。

「ふむ。あの者というよりは、その横の者が本命であろう」

騰は立ち振る舞いから瞬時に羌？の力量を察するとそう言葉を発した。

「なるほど。蚩尤か」

「蚩尤つてのは、刺客の一族つて話じゃなかったのか。なんであの餓鬼とここにいるんだ」

「あの娘は信殿と行動を共にしていると聞いている。名を羌？という」

「羌？ねえ、お前んとこの玄象と出が同じなら相当やる、つてわけか」

「お前がやらずとも他の者たちが斬るぞ。蚩尤であるお前はどうか」

昌平君は、騰の読み通り飛信隊の隊長である信を餌にして呼び出し、羌？という人物を見定めようとしていた。

「私は状況をみてから決める。お前に指図される謂れはない」

この羌？の言葉は、上官に対する言葉使いではないのだが、昌平君にして羌？に求めるものはそれではないため、気にするに値しなかった。

「つつ、そうか」

軽く流した昌平君の視線の先に気付いた信が振り返ると騰たちの姿があった。

「騰、それに録鳴末に朱錐のおっさん。つてか、王騎將軍が前線から引退したつてマジなのかよッ」

騰「……………」録鳴末「……………」隆国「……………」鱗坊「……………」同金「……………」干央「……………」朱錐「ソノトオリダ」

昌平君「……………」

「まじかよ、朱錐のおっさん。なら、俺は絶対に王騎將軍を超える大將軍になるつて伝えといてくれ!!」

「うむ」

「ツハ、威勢だけでなれつかよ。糞餓鬼が。てめえはさつきと帰れ」

と、鼻で嗤った録鳴末であるが、その実「こういうのはお前には向いてない」と小さじ程度の情が見え隠れしていた。

「なんだとっ」

そんなことを知るゆえもない信が即座に反応したことで、言い争いになるかと思われたが、先頭を行く騰が歩みを再開したことで、二人の距離は離れていった。

そうして、様々な思惑とともに、謁見の間は埋まっていくことになったが、結果としては、暗殺まがいの刀傷沙汰は起きることなく秦趙同盟は為されることになった。

「うむ、事はなつた。秦趙同盟成立じや」

ただし、丞相呂不韋の弁舌により、李牧が前線拠点と定めて建設していた韓皋城を明け渡させるという一幕があつたことをここに記したい。

韓皋とは、近年の軍事境界線の変動によつて隣接する趙、秦、魏にとつて重要度が増した地であつた。そこに目をつけた李牧は、宰相となつて初めに、この地に巨大な城を完成させることで、楔を打ち込むつもりであつた。

呂不韋は、その重要拠点韓皋と、春平君やこの場に誘い出された李牧たちの命を天秤に乗せることで、強引に取引を成立させたのだ。

これはまさに、春平君の拉致から始まる騒動を見事に操つた呂不韋という漢の偉業といつて差しさわりなかつた。

その後、両国は同盟成立の宴の席についた。

宴は、大なり小なりの騒ぎはあつたが、それなりに盛り上がりを見せて終宴、李牧たちは帰国の途につくことになつた。

「李牧様はどこか嬉しそうですね」

李牧達は、丞相と別れの挨拶を終えて宮廷へと続いていた階段を降りていた。

「カイネ、会談がうまく纏まつたのですから当然ですよ」

「いえ、会談は思惑通りに纏まるべくしてまとまつたのですから、李牧様がそれを嬉しく

「思うことはないはずですよ」

李牧はカイネの言に少し驚いたように視線を向けた。

「それは鋭いですね。ええ、まだ、どうなるかはわかりませんが、興味深いものを見つけましたからね」

「それは——」 「カイネっ」

と、カイネは自身の名を呼ぶ声に視線を向けると、そこには、先の大戦で知り合った子どもの姿があつた。

「ん、お前は河了貂ッ、と朱錐殿ではないですか」

李牧は「先に行つてますよ」と声を掛けようとしていたが、朱錐の名に足を止めた。

「カイネ殿は傷は良くなったようだなによりだ」

「はい。それで、あの、玄象は一緒ではありませんか」

「ん？」と朱錐はカイネの言葉で後ろを振り向いたものの、玄象の姿はそこにはなかった。

「ふむ。さきほどまでは一緒にいたのだが、どこかではぐれたようだ」

「それでは、治療のお礼だけでもお伝え願えますか」

「承ろう」

と二人の会話が途切れるのを待っていた河了貂は「もういいかなあ」と遠慮気味に声

を掛けた。

「おっと、此度の私は河了貂のつきそいであつた。すまんな」

朱錐は言葉のあとに身を引くように後ろに下がつたが、別のところから向けられる視線に気づいて顔を向けた。

「いいよ。それよりも、カイネ達は無事に帰れるみたいでよかつたあ」

「当り前だろ。まあ会談の最中は——」

河了貂とカイネがとりとめのない会話を重ねはじめた横では、朱錐と李牧が言葉を交わそうとしていた。

「朱錐殿とはあの時以来ですね」

李牧は、そう言葉を投げかけながらカイネから相談を受けた日のことを思い浮かべていた。それは、捕虜交換が為つて、趙に帰り着いてからしばらくしての事。

「あの……李牧様にお聞きしたいことが」

この時、普段は勝気な言動の多いカイネが、どこか鬱屈とした様子であることに李牧は疑問を覚えていた。

「どうしました。私でいいなら悩みを聞きますよ」

「あ、あの、実は——」

カイネは捕虜として目を覚ましてからのことを話した。

「なるほど。朱錐殿が言葉をそこで止めたのは、自国の王を批判するも同然であつたからです。密室の会談ならまだしも、そのような場所で容易に口して良い内容ではありませんからね」

李牧の言葉に納得を示しながらもカイネは「李牧様も、我々、趙人と秦人はこれからも争い続けなくてはならないとお考えですか」と尋ねた。李牧は少し思考すると己の考えを述べた。

「否定はできません。私個人としては、争いなど捨てて、両国間で恒久的な和平条約でも結んでしまえば良いと考えはしますが、複雑に絡み合った怨嗟の念の前では、それは難しいでしょう」

「ではやっぱり、争い合うしか路はないんでしょうか」

「いえ、二国間でできないのであれば、他国を巻き込めばいいのです。趙人である我々からすると長平は許しがたい暴挙になりますが、楚や魏、或いは燕や斉から見ればどうでしょうか」

「……………戦いの過程の一つ、でしょうか」

「こう言つては何ですが、我々からすれば許しがたい出来事であっても、他国からすれば概ねその程度の認識でしょう。もちろん、軽いわけではないでしょうけどね。ですが、恨みやそれに付随する堪えがたい痛みも、やがては薄れていきます」

「その間だけでも、良い、と」

「無論、恒久的に続けば良いとは考えます。それが難しい事だとわかっていても……。私は、今こそ時間を空けるべき時であると考えています。カイネにもわかるのでしようが、戦国の世になって、すでに五百年は経過しています。中華は、もううんざりするほどに争いに争った。私はそれを止めたい。それが、どのような手段であろうとも、です」

「そう、ですか」

「私の考えをカイネに理解してほしいとは願いません。ですが、戦を止めるためには、戦に強くなくてはならないのが戦国の世の習わしと言えます。超大国である楚、近年大きく勢力を伸ばした秦、そして、我が愛すべき趙。燕と斉であつても、拮抗する力は必然として、大戦を起こしにくくします。なぜなら、他国を攻めるといふことは、自国を手薄にするということに同義だからです。そして、仮にでも七雄で盟を交わせれば、大きな戦がない世は実現できます」

「ですが、拮抗する力同士が盟を結ぶことで戦がなくなるとしたら、もつとも勢力が低いとされる韓はどうなるのですか」

「良いところに気が付きましたね。残念ですが、力のない国は淘汰されることになるでしょう」

「なぜですか 七国で同盟を結べれば争いは起きないとおっしゃられたじゃないです

か」

「ええ。ですが、なにも争いとは血を流すことだけをいうのではありません。国力を高められない国は、遅かれ早かれ併合の路を歩むことになります。確かに、国がなくなることに痛みは伴うでしょう。ですが、人は生き続けることができます。それは、戦争のよつて滅ぼされるよりも、はるかに平和的に、です」

「それでは、何のために盟を……………」

「可及的速やかな戦のない世を実現するためです。カイネ、盟も万能ではないということです。残念ですが、七雄の国益が揃う盟など存在しないのです。それでも、いくばくかの刻を稼ぐことはできます。いつの世か、私にすら考え付かない方法で、平和な世が訪れることを、私は切に願うばかりです」

「……………」

俯き言葉を失くしたように佇むカイネに李牧は声を掛けた。

「幻滅しましたか。賢しそうな振りをしていても、私はこの程度ことしか考え付かない愚者の一人なのです」

「そ、そんなことはありませんッ 李牧様はッ 李牧様は、匈奴に脅かされていた私たち雁門の民をお救いしてくださった。これはあなた様にしかできないことです。今も、これからも李牧様をお慕いしてる私たちに、そのようなことはおっしゃらないで

ください」

「……………そう、でしたね」

李牧は雁門での日々に想いを馳せると、強く言葉を発した。

「私には皆を、雁門の民を護るために、戦う決意があります。そして、これが「守るべきものを芯に据える」という朱錐殿があなたに掛けた言葉の意味になるでしょう」

「李牧様にとって守るべきものが、私たち雁門の民。それでは、私は——」

「ん、…牧殿。どうかされたのか」

朱錐の声に追憶から意識を現実に引き上げた李牧は、焦ったように返事をした。

「つ、これは申し訳ありません。朱錐殿がカイネに薫陶を授けられたとお聞きしまして、その時のことを思い起こしていたのです」

「薫陶、などではなく私的な話であつたと記憶している。今の彼女の雰囲気を見る限り、どうやら吹っ切られたようだがな」

「いえ、何事も他者から聞かされる言葉には、人となりが現れるものです。それを薫陶として受け止めるかは、各々によりますけどね」

「ふむ。その言葉、私もあなたからの薫陶として受け入れるしよう」

李牧は目を見開き、それから笑みを浮かべると「フッフ」と声を漏らすと言葉を続け

た。

「これでは、わたしも迂闊なことを口にできなくなつてしまいますね」

二人の会話が和やかに進むかと思われたが階段の上方から拳がった声で中断することになった。

「おいっ なにやつてんだそんなやつと気安くしゃべつてんじやねえぞ 貂ッ」

声の主は信であり、その横には差?の姿があつた。

「飛信隊の信ですね。どうやらここまでのようです。それでは、私たちは帰国します。

あなたとは、いつかゆつくりと言葉を交わせればと思います。カイネ、行きましょう」

李牧はそう言葉を残すと踵を返して、歩みを再開した。

「はいッ じやあな 河了貂」「バイバイ カイネ」

「で、なにを話してたの」

遠ざかつていく李牧達とは対照的に、すぐ傍で聴こえた声に振り向くとそこには玄象の姿があつた。

「象。どこに行つていた。カイネ殿が礼をしたいとー」

「柄じゃないからいいつて。それにそもそも傷を作つたのも私だし」

「む、そうか。話と言つてもー」

と朱雫は言葉が続けようとしていたが、玄象はそれを遮るように声をだした。

「あ、やっぱ待って、馬鹿妹が来たから。おい、なに下を向いているんだ馬鹿妹」
信と河了貂の姿はいつのまにか見なくなっていた。

「…………、馬鹿じゃない、馬鹿って言ったほうが馬鹿だから象姉のほうが馬鹿」

玄象に気付いた羌？からどこか寂し気な表情が消え去ると、姉妹による口喧嘩が開始された。

「なにおうツ この娘はほんとああいえばこういう。生意気なんだから——」

「私は生意気じゃない」

「ほら、口答えばかりして。こっちきな。私が礼儀を教えてやる」

「やだ。横暴には抵抗するから」

朱雫はそんな二人の姿に「象、帰ってくるのはゆっくりでいいぞ。虎豹には私から伝えておく」と声を掛けた。

「あ、ごめんね。馬鹿妹に礼儀っていうものを叩きこんでから帰るって伝えといて」
「断固抗議する」

「ほんツともう——」という玄象の声を背に、朱雫もその場をあとにした。

幕間 夫婦と姉妹

「私は朱錐殿の使いの者です。これを夏様にお渡し頂きたい」

虎の面を被った武官風の者は、懐から取り出した書簡を二人いる門兵の一人に手渡した。

「しばしの間、お待ちください」

書簡を受け取った門兵の一人は、そう言葉を残すと門の中へと消えた。

「咸陽は随分と変わったものだな」

虎の面は辺りを見渡すと言葉をこぼした。

「あなたにとつてはそうかもしれないねえ」

言葉を返したのは龍の面を被った大きな漢であった。

「……………あつという間のようで、それでもなかったようにも感じます」

「十年です。短いはずはありませんよ。それに、あなたも私も随分と立場が変わっています。まずでしように」

と応えて「ココココ」と笑った。

「フフ 確かにそうですね」

門兵の一人は、二人の和やかな会話に聞き耳を立てながらも、龍の面の漢を知っているような、そんな既視感を覚えていた。

そこで怪しまれないように二人に対して「名をお聞きしてもよろしいでしょうか」と声を掛けた。

「ん？私は、朱錐の副官の虎豹だ。こちらは、作戦参謀の青騎になる。それがどうかしたのか」

門兵は「虎豹殿に青騎殿ですか」とこぼすと真意を話した。

「いえ、申し訳ありません。青騎殿とどこかでお会いしたような気がしましたので、お伺いさせて頂きました」

「おや。ソッフ それは残念でしたねえ。私は咸陽にはめつたに訪れませんので、人違いでしょう。ついでのので私からも一つ——」

と、王騎は疑問に感じていたことを尋ねようとしてたが、書簡を渡した門兵が戻って声を掛けたことで中断を余儀なくされた。

「夏様はお会いになられます。私の後に続いて下さい」

そうして二人は、門の中に踏み入れることになったのだが、屋敷の内にも複数の兵の姿があり、ある種の物々しさすら感じさせてた。

兵から屋敷の者に取り次ぎが行われると「こちらでお待ちください」と一室に案内さ

れた二人。しばしの刻のあと、昌文君の妻である夏が姿をみせた。

「朱錐殿の使いで参りました虎豹と申します。こちらは、青騎です」

夏は拱手をする二人の様子を眺めると笑みを浮かべて言葉を発した。

「ウフフ 虎豹殿に青騎殿ね。皆は出て頂戴。私は彼らと重要な話がありますので」

その言葉に慌てたように声を掛けたのは、夏の後ろに控えていた護衛の一人であった。

「お待ちください。我々は護衛として夏様お一人だけにするわけにはい——」

という言を、夏は予想していたかのように言葉を被せた。

「あら、それじゃあ 孟には残ってもらうわ。それでいいわね」

「ハツ 失礼致しました」

と孟を残して他の者が退出すると、部屋に夏と護衛の孟、それに、虎豹と青騎になった。

「離れに移動しましょう。孟、許可あるまで誰も近づけないように徹底して頂戴」

「ハツ 周知させます」

虎豹と青騎は夏に連れられるままに屋敷の離れに移動した。

「さて、と。もういいんじゃない」

と、夏の視線は虎豹の瞳をまっすぐに射抜いていた。

「フフ やつぱりバレてたか」

虎豹は徐に面を外した。

「あらあら、ひさしぶりねえ。キョウちゃん」

「フフフ 夏様もお変わりないようで安心しました」

夏とキョウの関係は、王騎とキョウが結ばれたことで生まれていた。摺とキョウの繋がりとは極一部の者しか知らないことであり、さらには、キョウには家の者と呼べる身内がいなかった。そのため、キョウは夫人という立場への理解は乏しいのではないかと心配していたじいこと昌文君のお節介により、夏とキョウの交流は始まることになった。

「それに王騎様も朱錐ちゃんみたいに面を被つてどうなされたのかしら」

「ソフフ 流石ですねえ」

と青騎も仮面を外すと「随分と妻が世話になったようで、感謝申し上げます、夫人」と声を掛けた。

「ウフフ 私にとつてキョウちゃんは娘みたなものよ。私は娘のお世話をしただけ、楽しかったわ」

「夏様……………」

「ほら、こつちにきなさい」

と夏はキョウをやさしく抱擁した。

「ウフフ 懐かしいわ。朱錐ちゃんにも小さい頃はよくこうしてあげていたわね」

「フフ 朱錐にですか」

「そうよ。手のかからない子だったけど、ずっと鍛錬を続けるような無茶をするから、こうでもしてやめさせないといけなかったの」

「ウフフ」「フフ」

と二人がほほ笑み合う姿を王騎はしばし眺めたあと、声を掛けた。

「夫人。一つお聞きしたいことがあります。門兵を含めて随分と屈強な者たちが多く配置されているようですが、なにか、不穏なことでも」

「あら、そうじゃないのよ。いつだったかしら、朱錐ちゃんから提案があったそうなの。大王様の方が一に備えておくべきではないですか、って」

夏は大王暗殺事件があつた当時のことを簡潔に話した。

「確かに、その通りですねえ」

王騎自身も王弟成？と丞相謁氏の乱の際に、昌文君の私兵と一戦を交えていたこともあつて、実情はよく理解していた。

「今は外にいる孟を中心に、朱錐ちゃんが見込んだ者が百人位かしら」

「朱錐が見込んだ者……、王騎様、それって」

「なるほど、錐の調練の姿を浮かべれば察しはつきますねえ」
奇しくも、二人が浮かべた兵士像は一致していたという。

舞台は変わり、同日の夜。

咸陽近くの山中には、焚火を囲う二つの影があった。

「ほら、焼けたよ。たべな」

差し出された手には、櫛代わりに小枝を刺されたウサギの素焼きがあった。羌？はそれを受け取ると、口に運びながら言葉をこぼした。

「……………、象姉とこうしていたのが、もう遠い昔のことみたい」

「遠い昔っていうほどでもないだろう。……………まあ、オバアと遠出した日が最後だから、それなりには経ってる、か」

「そう。祭の直前だった。でも、単純に楽しかったから良い思い出。……………あとの、祭は最悪だったけど」

羌？は、その時のことが胸中に浮かんだのか、言葉を綴ると俯いた。

祭とは、蚩尤を名乗るにふさわしい者を選びすぎるための儀式であり、その中身とは、現蚩尤の死が確認されるたびに各氏族の代表が二人ずつ集められて行われる殺し合いのことであった。

「祭、か。私らの代は、結局、幽連のやつが勝ち残ったんだってね」

蚩尤族の名は、それぞれ、族名に名という形であり、羌？は、羌族の？であり、幽連とは、幽族の連のことである。

「そう。幽連。象姉の仇」

「待て、私を勝手に殺すんじゃないよ」

「死んだって聞いたから、仇は仇。………だけど、正直、わからなくなった。何に変えてでも幽連を殺すつもりで里を出たけど、こうして生きてる象姉に再会できたから、気持ちの整理がつかない」

「私は生きてるんだから、仇討ちもなにもないだろうが」

「わかってる。わかってるけど………」

羌？は行き場のない感情を持って余すように言葉を続けた。

「千年の掟なんて不確かなもののために、象姉が殺されたと知ったあの刻を、なかったことになって私にはできない」

「結果をみなよ、結果を。私は生きてる。まあ逃げただけただけなんだけどさ………」

「象姉………」

言葉のあとに少し俯いた玄象であったが、顔を上げると意を決したように言葉を発した。

「言つとくけど、私はあの時の判断に後悔なんてしてない。生きたかったから、逃げたんだ。その何が悪いっていうんだ。あと、ついでだから言うけどさ、？だつてそう。私の仇を討ちたいっていう心意気はうれしくは思うけどさ、自由に生きていいんだぞ。私は、そんなこと望んでない」

「……………」

「あんたには言ったことあるけど、私はさ、どうしても、外の世界に踏み出したかつたんだ。だから、死にたくなかった。まあ、さ。里の者からしたら私は許されない存在だろうけど、そんなことは、もうどうでもいいんだ。里がすべてじゃないって知ったからさ。自分はなんてちつぽけな世界に生きてたんだつて心底思ったし、そんなもんなんだよ、実際。あんただつて蚩尤つて名にも羌族の里にも、興味なんてないし、戻りたいとも思つてないだろ」

「思つてない、かな。バアはよくしてくれたけど、あとはどうでもいい」

「識と礼は」

「あつ……………忘れてた。あれも一応大事」

「一応つて、あんたは、もう……………。あえては止めないけどさ、あんたが幽連を討てば、祭はまた始まるつてことは頭に入れときな」

「わかつてる。でも……………」

羌？はあの日のあげた慟哭の置き場が見つけれず心を彷徨わせていた。

「まあよく考えなよ。つと、ほら、あんたが変に執着するから焦げちゃったじゃないか」
「……………それは象姉のせい」

と羌？は焦げていない方の肉を素早く手に取るとかぶりついた。

「あッ、？。それは私のだろうが」

「早い者勝ち」

と、澄まし顔の羌？に象は呆れを多分に含んだ顔をして言葉を発した。

「あんたは食い意地だけははつきりしてるんだから……………、他のこともちゃんとやりなよ」

「象姉……………、それは負け惜しみ」

「なんだとおッ」

妹の余計な一言は、容易に姉妹喧嘩を勃発させた。

けれど、焚火に写し出された二人の影は、じゃれつくように楽し気に揺らめいていた。

第47話

秦趙同盟が結ばれたことで、対趙国に向けて配備されていた部隊は、最低限の軍力を残して配置転換がなされていた。

「この同盟で、対魏国戦線に部隊の多くが転地となったようですね」

第六軍軍長を務める朱錐である。

「秦趙同盟か、李牧は思い切ったものだな」

副官虎豹の言葉に応えたのは青騎であった。

「趙には燕という目の敵がいますからねえ。匈奴を大敗させた今、この機を利用して、そちらの領土を大きく削り取るつもりなのでしょう」

三者は馬首を揃えて、練兵の様子を窺いながらも現況の確認をしていた。その後ろには、朱錐を傍で支えてきた二つの影があった。

「馮……普通に話されているがあれはいいのか」

三者の後ろに控えていた馮に声を掛けたのは濯であった。

「俺にきくなよ」

「けどよ、俺達はどうしたらいいんだ」

青騎の加入に馮と濯の二人が困惑しているのも無理はなつた。なぜなら、この状況は朱錐からしても、寝耳に水の事態であつたのだから。

加入表明後、当然のように三者での話し合いが行われた結果、青騎は参謀という形に収まることとなつていた。

「二武官に立ち戻つて戦場を駆けてみたくなりましたので」

と、朱錐に向ける視線に容赦はなかつた。

「でも、あまり目立たれるとすぐに目を付けられませんか」

それに虎豹は気づかず、純粹に他のことを心配していた。

「ええ、虎豹の言はもつともです。ですので、私は裏方に徹しようかと考えています」

と凄みを利かせた笑みを見せてから「そういうことでよろしいですね？ 朱錐殿」と

言葉を発した青騎の姿に、朱錐は最後まで沈黙で応えたという。

こうして第六軍は、軍長朱錐、副官虎豹、副官付き玄象、そして参謀青騎と相成つた。

また、秦趙同盟が結ばれたことで、秦の大本営は対魏大戦略に向けて「各将校は兵力を増強せよ」という通達を出すに至り、物資が拠出された。

それにより第六軍は、兵二千を追加、さらに、青騎が新たに発足させた弓騎兵三百を加えて、総勢七千三百となつた。

「全軍中より選りすぐりましたが、さすがに三百が限界でしたねえ」

青騎は、弓騎兵を発足させることを決断すると、元王騎軍中から馬上弓に秀でた者を見つけたでして、根こそぎ引き抜いていた。

「人員もそうですが、八千の予定も変更せざる負えませんでしたよ」

朱錐の言葉は、弓騎兵の発足にあたり、馬、弓、鎧と必要物資が増加したことで、残りの七百を増員できなかったことを指していた。

「そう文句は言うな。それ以上の戦果は期待できるのだからな」

養護するように言葉を紡いだのは虎豹であった。その言葉通り、機動力をもった弓兵の存在は、敵軍にとっては大きな脅威となる存在である。ただし、数が揃えられればの話ではあるが。

「間合いの外から攻撃しては、退く。数は少なくとも囿になり、攪乱にも大きな効果が期待できますよ」

別の場所では、いざれ始まる対魏大戦略を内々に知ることができた若武者たちが、躍動しはじめていた。

飛信隊は、戦場で玉鳳隊の王賁と遭遇したことで、農工夫と貴士族との差を叩きつけられていた。

玉鳳隊は貴士族で構成されており、彼らの騎馬を従えて甲冑を着こなす洗練された姿

は、農工夫の自分たちからすれば、憧れるほどに立派な姿であった。この明らかな生まれの差には、意気消沈する隊員が多く存在した。けれど、信は「貴士族だが高んだかいらねえが、やつらにデカイ面させねえほどの武功を俺達で獲りにいくぞッ」と檄を飛ばすことで隊に闘志を灯すと、誰もが取らないような戦法を用いることで危険な任務を熟し、必死に食らいついて武功を挙げていた。

対する玉鳳隊の王賁は、はつきりと対抗する意思は見せずに、着実に功を積み上げていた。

飛信隊と玉鳳隊の二隊が競うように武功を挙げている頃、別の場所では、大きな武功を挙げる二つの部隊があった。

「へえ、やるねえ。全部取るつもりだったけど、向こう側は持っていかれちゃったみたいだ」

と蒙恬は言葉をこぼすと馬脚を緩めた。

その視線の先には、歓声を上げる味方の将兵の姿があった。

「蒙恬様。隣でもっとも武功を挙げたのは豹騎隊なる隊だそうですぞ」

言葉を発したのは、楽華隊副長兼お目付け役である胡漸（コゼン）であった。

「豹騎隊？最近ちよくちよく聞くようになったけど、どこかの直系なの」

「どこかの血筋というわけではないようです。隊長は蒙恬様と同じくらいの若者で、名

を李豹。もともとは王騎軍第六軍所属である、と聞き申しております」
「ふくん、元王騎大將軍の所属ねえ」

蒙恬は氣のない返事をしながらも、思考を回転させていた。

「ねえ、第六軍つて対趙戦で名を挙げた虎豹がいるところだよな」

「そうです。確か副官ですな」

「だよな、じゃあ隊長…軍長つてだれなの」

「軍長は鬼面の朱錐ですな」

蒙恬は鬼面？と疑問符を持ちながらもはつきりと答えたじいには、面識がありそうだなあと軽く考えながら訊いた。

「じいはその鬼面？の朱錐殿は知ってるの」

じいは心なしか胸を張ると言葉を発した。

「私も若かりし頃は白老様と轡を並べておりましたからな。当時は昌文君の副官でしたが、何度か戦場を共にした経験があります」

「へーえ、じゃ、強いのか？」

「強さで言えば間違いなく。はて……、そういえば最近になるまで噂にもあがることありませんでしたな」

蒙恬は会話を重ねながら新たに見聞きした名の人物の情報を纏めていたが、これ以上

訊いても仕方がないと思考を切り替えると言葉を発した。

「まあ、いいや。一先ずは挨拶がてら、豹騎隊の李豹の顔でも見に行こうか」

「李豹殿 バンザーイ 万歳ッ バンザーイッ」

そこには、勝鬨を挙げる千を超える将兵の姿があつた。

「ふう。まさかこんなことになるとは」

と、李豹はため息一つと本音をこぼした。

「くくくつ、お前はよくやつた。結果は上の上だ。それでいいだろう」

そんな李豹に言葉を掛けたのは、副官として帯同している朱錐の側近の一人であつた洪であつた。

「洪さん、絶対面白がつているでしょう」

「そりゃあそうだろ。ただの三百人将が千人以上を率いて、さらにはこの地を平定させる活躍しちまうんだからな。これは笑うしかないだろうが」

それは、この地に赴いていた三千人将の一人が敵の術中に嵌り、敢え無く戦死したことから始まつた。

この将の戦死は、結果として戦線を大きく乱すことになる。

「()は要の地である。なんとしても死守せよ」

と敵命を受けていた三千人将であったが、敵大将が少数の側付きと姿を見せた上で「こうして、わずかな手勢しかつれていない私が姿を見せたというのに、秦国の下の猿は、陣に縮こまつているぞ。秦の猿は臆病者でもあるようだ」などと挑発したことで事態は動くことになった。

最初こそ我慢していた三千人将であったが「あの調子に乗っている糞どもを討ち取って戦を終わらせてやる」と制止を振り切つて出陣してしまう。挑発に乗せられるがまさに突撃を開始して結果、当然のように伏兵に襲われてあえなく戦死。敵大将は、将を失つて混乱冷めやらぬ秦軍を蹴散らすと、速やかに軍を進めて、これを占拠した。

敵軍は、この日を決戦の刻と定めていたのだ。

敵軍は、要所である交差路に布陣すると、迅速に強襲部隊を編制して各所に出撃させることになる。

対して、秦軍は、突如として現れた強襲部隊に自軍の横、或いは、後方から攻撃を受ける形になるのだが、これらに、間一髪ながらも気づいて交戦に入れる部隊もあれば、息を付く間もなく首級を挙げられる将も存在していた。

そして、李豹がいた地の将は後者であり、指揮していた三千人将を失つた軍は大混乱に陥っていた。

「おいおいおい。やばいぞ李豹。こゝは退くべきだ」

洪はこの場に留まることは得策ではないと進言したが、李豹は別の考えを示した。

「これはここだけの話ではないはずだッ 我らはここに留まり敵を迎撃する」

李豹は出現した敵兵の方角から、事態は最悪に限りなく近づいていると察していた。

「そうかよッ それで俺達になにをさせる」

洪は李豹の判断の速さに舌を巻きながらも、その考えを支持した。

「この乱戦は、我らの好機になる。一息に敵将の首を挙げるぞッ」

「「応ッ」」

豹騎隊は、朱錐軍の新兵の一人として李豹が参加した練兵時からの者たちで構成されていた。彼らは一様に李豹の輝きに魅せられた若者であり、李豹のもとにで戦いたいと志願した者たちである。それゆえに、常に士気は高く、わずかな年月とはいえ、練度は精兵に迫るとまで言われていた。

余談を許さない状況であると迷いなく駆け抜ける李豹を隊長に、経験豊富な副官の洪、そして、短期間で精兵の迫るほどに軀を苛め抜く覚悟を持った豹騎隊三百は、乱戦によつて乱れた隊列のすき間を縫うように駆け抜けると、首級を挙げてで東の間の喜びに浸る敵兵を押しつけて、将の首をさもあつさり刈り取ることに成功した。

李豹が敵首級を挙げるまでの時間は、敵強襲の混乱すら利用した電光石火的一幕であつた。

「敵将はこの豹騎隊隊長李豹が落としたッ　いまこそ逆撃の機だ。立ち上がれ秦の兵よッ」

李豹の檄は、敗戦の空気が漂う戦場を一変させた。

「うおおおおおおお」

李豹は、檄に応えるように挙がる歓声に、将を討たれた衝撃で動きを止めていた敵兵の怯えを見逃さなかった。

「もはや、敵は烏合の衆である。私に続けえッ　この劣勢を一気に覆すぞッ」

その後、さらに勢いの増した李豹たちは、その場の敵兵を退却に追い込むのと同時に、敵大将本陣への強襲に移ることになる。

李豹は、規模が三百からおよそ二千程に膨れ上がった隊の先頭を堂々たる姿で駆け抜けた。

この奮戦は、各所で戦っていた秦軍を大いに盛り上げることになる。

豹騎隊が敵大将本陣を強襲したことで、指揮系統が麻痺に陥ると、各所の隊は、敵軍を大きく押し返した。

「退却の銅鑼を鳴らせ」

本陣強襲から始まった劣勢を正しく把握していた参謀の判断は素早かった。それに待ったを掛けたのは敵大将を務める者であった。

「お待ちを。まだ粘れば巻き返しは可能です」

「確かに、この劣勢を巻き返すことは可能だ。俺にはその策がいくつも浮かんでいる。だが、変えのきかない将兵を損耗させてまで固執する地ではない」

「ですが、それではあなた様の名に傷が――」

「黙れ。俺を退き時を見誤るような愚か者にするつもりか」

「ッ、申し訳ありません。すぐに行かせます」

参謀は戦場に鳴り響く退却の銅鑼に背を向けるとつぶやくように言葉を発した。

「今回は譲ってやる。豹騎隊の李豹。その名は、忘れんぞ……」

こうして、劣勢を大きく覆した豹騎隊李豹の名は、中華に薄つすらと、だが、確実に響くことになった。

魏国山陽一帯攻略戦

第48話

年を跨ぎ、始皇五年。

秦は秦趙同盟の効力を最大限に活かした魏国侵攻を開始することになる。それは、秦にとつては中華に躍り出るための要衝山陽、その一帯を一気に攻略するという大規模侵攻作戦のことである。秦から派遣された兵は実に二十万を超えており、秦国大本營の本気度が窺えていた。

この山陽攻略戦を指揮するのは、秦の白老こと蒙？大將軍であつた。

「ふおつふおつふお、皆の者、戦はこれから、急ぐでないぞお。それでは全軍前進じゃツ」
蒙？將軍が進軍の合図を出すと全軍は魏国山陽攻略に向けて出陣した。

進軍を開始した幾ばく。

蒙？大將軍は、普段通りの必勝戦術である、蒙？本軍と二人の副將の二軍。合計三軍に編成すると山陽一帯の同時攻略に乗り出していた。この一帯の同時攻略こそが、？公ではなく、蒙？がこの軍の総大将に任命された理由でもあつた。

その蒙？本軍には、この一年数か月のうちに頭角を現した四隊の姿があつた。

「うつひよー、さすがは白老蒙？大將軍だぜツ。俺達の実力をちゃんと見抜いてやがる」
ご機嫌そうに声を挙げたのは飛信隊の信であった。

「予備隊の前方に配置されたということは、我ら飛信隊の活躍が蒙？大將軍にも届いていたということですよ」

言葉を返したのは、もともとは壁と信とを結ぶ連絡係であった淵副官である。

「俺はこの戦いで武功を挙げて一気に昇格してやるツ」

そう鼻息の荒く宣言するように声を挙げた信に、冷や水を掛けたのは、後方を騎馬でかき分けるように横を通った王賁率いる玉鳳隊であった。

「ん？ 誰かと思えば下僕あがりと飛信隊か」

王賁は信たちに気付くと登場の勢いそのままに、言葉を続けた。

「俺から一つ、忠告してやる。貴様たち歩兵部隊は、我らを支えるためにある。小さな戦いで武功を挙げたからといって、大きな武功を狙おうとするな。この大戦、諸君らは与えられた役割だけを全うすること勧める。さもなく

ば、先の対趙戦を上回るこの戦いに最中に屍をさらすことになるぞ」

冷たいようにも感じる王賁の言葉であるが、それは、飛信隊を軽んじているからでない。ただ貴士族出の精鋭と百姓出の農工兵とでは、熟す役割が同じであるはずがないと、区別しているだけである。ただ、言葉に棘があるのは若さ故ともいえた。当然、そ

んなこと言われて黙っている信ではない。

「王賁。俺はてめえよりでつかい武功を挙げてお前の上官にでもなつてやるから、覚悟しとけッ」と。

王賁は、信の啖呵に動じることなく、その様子を眺めてから、言葉を発した。

「早々に死なれてはいい迷惑だ。精々、分をわきまえることだ」

王賁は言葉を残すと馬を先へと進めた。

それからしばらくして。

蒙？は最初の城である高狼城（コウロウジョウ）を目前にして、城の四方を攻める東西南北の四軍とその四軍の予備兵として、さらに四隊を編成した。

飛信隊は東壁予備隊の前方を射止めていたが、玉鳳隊はその最前列であった。つまり、もつとも評価されたのは、王賁がいる玉鳳隊であることが暗に示された形である。そのことに、不満を口にしていた信であったが「まあまあ、先は長いんだし気楽にいこうよ」と声を掛けられたことで愚痴を中断して、そちらを振り向いた。

「ん。あ、ごめんね高い所から」

信の視線に気づいた漢は、馬から下りると自己紹介をした。

「俺の名は蒙恬。飛信隊とは同じ特殊三百人隊で楽華隊っていうんだ。よろしくね」

信と蒙恬が挨拶を交わしている頃、豹騎隊李豹の姿は彼らとは別の予備隊の先頭に

あった。

「先の功績は認められていたみたいだな」

李豹に声を掛けたのは副官洪であった。

「そうですね。位では千人将になりましたけど、部隊編成の都合か、いまだに三百人隊のままですから、その埋め合わせのようなものでしょう」

この李豹の言葉は、半分は正しかった。まず、その半分となる表の事情は、大戦間近の大功による昇格ということもあって、千人将として慣れないままに大戦にだすことを良しとしなかった蒙？將軍の判断があったことが一つ。

そして、裏にあるもう半分の事情には、蒙恬の存在が深く関わっていた。

先に登場した蒙恬なる者は、蒙？大將軍の孫にあたり、李豹よりも一つ年上で、すでに千人将の位を授かっていた。けれど、そんな孫に対して蒙？は、「そなたに千人将はまだ早い」と若干の過保護も入り混ぜながら、三百人将に据え置かせていたのだ。そういった経緯から、孫と同世代で千人将へと駆け上がった李豹にも、同様の判断が下されたというわけである。

「急遽増員されたらされたで、足を引っ張られるのはまちがいないから、いいんじやねえか」

隊の連携とは、蓄積された経験がものをいう。そのため、半端な増員は帰って隊の力

を落とすことが、戦場では、しばしば見受けられることであった。

「おそらく、その辺りも考慮された結果でしょうね」

かくして、蒙？本軍の予備隊には、今巷を賑わす、楽華隊、玉鳳隊、飛信隊、そして、豹騎隊の四隊が揃うことになるのであった。

その頃、秦の大本営にいた昌平君の元には、一つの書簡が届けられていた。

昌平君は書簡の中身を確認してから、数拍ほど瞑目すると言葉をこぼした。

「やはり分が悪い、か」

その声に、戦略図を眺めていた昌文君は気づくと声を掛けた。

「どうかしたのか」

昌平君は、昌文君の言葉に反応したように目を開くと、書簡を持ち込んだ者に声を掛けた。

「返書を出す故、しばし待て」

「なんじゃ、昌平君よ」

昌平君は素早く返書をしたためると、応えた。

「書簡は王騎元大將軍から」

「ん？ 王騎じゃと。軍総司令に前線を引退した奴から、一体、何の用じゃ」

「元將軍は独自の情報網をお持ちのようで、此度の魏国山陽戦に廉頗大將軍が出陣するとの報せだ」

昌文君は廉頗の名に驚くように声を挙げた。

「廉頗がでるじゃとツ。廉頗は魏王に冷遇されておるのではなかつたのかツ」

「そう伝え聞いてはいたが、そうではなかつたというだけのこと。蒙？將軍には、それだけの陣容を持たせている」

昌文君は、軍総司令の備えてはしていた。という言葉に一抔の不安を感じて声を掛けた。

「……………総司令は廉頗の恐ろしさをわかつておるのか。付け焼刃が通じるほど甘い相手ではないぞ」

「重々承知している」

「むツ、それでは、王騎の書簡には他に何か書いていなかったのか」

それは、王騎は廉頗の力を見誤ることはない。という信頼から、書簡の中身が出陣の報せだけのはずはないと勘どつたゆえに口に出た言葉であつた。

「……………、書簡には増援を送る余地はある、と記されていた」

「余地じゃと。王騎は誰を送れと書いておつた」

「あなたの良く知る人物だ。昌文君」

昌平君の言葉から、王騎に連なる人物で、なおかつ自身の良く知る者となれば、一人しか浮かばなかった。

「朱錐か」

「いかにも。訓練を終えた第一軍の戦場復帰で、穴埋めをするとのことだ。さらに、ご丁寧にも、派遣すれば蒙？軍の弱点を補完できるとも書かれていた」

「蒙？軍の弱点？」

「……………これは本人に掛けるような言葉でないが、蒙？將軍は至つて凡庸な将だ。それは良くも悪くも言える。だが、脇を固める副将王翦、桓騎の才は他を圧倒していると俺は読む。それゆえに弱点ははっきりしている」

「蒙？本軍がもつとも弱いということか」

「その通りだ。蒙？軍は、これまで守りを破られる前に、その両腕が相手を打ち崩して勝ちを収めてきた。だが、敵が六将のような存在、元三大天の廉頗だとすれば、不安があったのも事実」

「ならば——」

「要請を承諾した」

それから一か月。蒙？軍の姿は二つの城を落とすと三つ目の城である近利関（キンリ

カン)の攻略に励んでいた。

「お前らなにやっつてんだッ 早く登ってこい。手柄は上にしかねえんだぞッ」

声を挙げた信の姿は城壁の上にあつた。その声に触発されたように、王賁たちが用いていた井闌車に多くの兵が殺到することになった。

「ッ、登れッ我らの力で城を落とすのだあッ」

手柄を求めて殺到しはじめた兵たちの勢いは凄まじいの一言であつた。

「ここまで大した武功を挙げられず鬱憤の溜まつていた兵たちには、もはや「それは我ら玉鳳隊の井闌車、勝手に登るでないッ」と掛かる制止の声に、耳を傾ける者はいなかつた。

「よせ、やめよ登るなッ これには人数制限がー」

玉鳳隊の番陽は、ミシミシと音を上げる井闌車を前に顔面蒼白となつていた。

蒙?軍が山陽一帯の攻略に乗り出してから一か月と少し、蒙?本軍にようやく追いついた朱錐たちは、本軍の後方で待機すると、近利関の城攻めを観戦していた。

「あの声は信殿か。よく響いている」

「童信の声は、一つの才能ですなえ」

「確かに戦場でもよく透る声は局面を左右することもありますな」

軍長朱錐を中心に右には副官虎豹、左には参謀青騎の姿があった。

「私は、夕暮れを待つて蒙？ 將軍に到着の挨拶をします。二人はどうしますか」

「副官として、私は顔を出すことにします」

「そうなさい。さすがに將軍と私は幾度となく顔を合わせていますので、陣で待機することになります」

朱錐は二人の意思を確認すると、戦場を静かに見つめる玄象にも声を掛けた。

「象はどうする」

「ウーン、私は姉さんについていこうなあ」

「私に付いてきてもしようがないだろう。せつかく同じ戦場にいるんだから、李豹に会いに行つてやればいい」

「いや、でもさ……………」

迷いをみせた玄象の背を押したのは、朱錐であった。

「象。我らは明日をも知れぬ場に身を置いている。会いたいならば我慢せずに会いに行くといふ」

「……………、そうだよ。わかつた会いに行くよ」

その様子を、やれやれとした顔をしながらも、どこか暖かく見守る青騎の姿があった。

「まったく、世話がやけますねえ」

第49話

蒙？本軍が攻める近利関城は、東壁を攻める玉鳳隊の井闌車によつて敵の目が奪われている隙をついた南壁軍郭備隊の活躍により陥落していた。

「蒙？將軍。増援軍の將が着陣の挨拶をしたいと」

蒙？は、戦勝に湧く本陣に迎え入れるように指示した。

「フオ？ おうそうかそうか、こちらに通すとよいぞ」

天幕の前に待機していた二人は、案内に従い中へと通されることになった。

「ツ、な。鬼の面に虎だ、虎の面だ」

と側近たちの囁き声を小耳にはさみながら、二人は挨拶をした。

「軍総司令の命により、着陣いたしました。騰軍所属第六軍軍長を務める朱錐です、後ろは、副官の虎豹と申します」

朱錐たちは、静かに拱手をすると軽く会釈した。

「ふおっふおっふお」

と朗らかに笑う蒙？とは打つて変わつて、側近たちは、朱錐たちを値踏みするように各々に声を出した。

「軍司令もこのような面妖な者たちを送ってくるとは、なにを考えているのか」や「まったくだ。戦勝を続ける我らに増援が本当に必要のか」と。

それをぴしやりと遮るように声を出したのは、蒙?の最側近ともいえる羅元將軍であつた。

「お前たちは黙っている。さらには、殿のお言葉を留めるとは何事かつ」

羅元の言葉に静まり返ると、蒙?は言葉を発した。

「フオッフオッフオ　羅元よ、そう言うでない。儂の言葉がちと遅かつただけのことよ。朱錐よ、随分と久しいそなたに言葉がでなんだわ。儂も歳をとつたということかのお。そなたと戦場をともにしたのは、もはや遠い過去のようじやて。のう羅元」

「ハツ　真にその通りです」

二人に対して懐疑的な言葉を口にしていた側近の一人は、蒙?、羅元の両名が知る者であつたということで、顔を青ざめながらも声をだした。「なツ、お、お二方はこの者をご存じだったのですか」と。

「ふおふおふお　朱錐の戦働き、儂は忘れてはおらぬぞ」

「ハツ　お覚え頂いていたとは、光栄です」

「うむ。して、朱錐。軍総司令殿は、なにを意図して、諸君らをここに派遣なされたのか、訊いておるのかのお」

「軍総司令より書簡を預かっております」

朱錐が懐から取り出した書簡を受け取った側近は、蒙?に手渡した。それを開いた蒙?は「むうう………」と難問を抱えたように、普段ならだすことがない唸り声を挙げた。その異変に側近の一人が声を掛けた。

「蒙?様、その書簡には何が書かれていたのですか」

蒙?は数拍黙したのち、朗らか声で言葉を返した。

「なあに、大したことではないぞ。元三大天であった廉頗が出陣したというだけのことよ」

「れ、廉頗ですとおツ」

一人の幕僚の驚きの声は、天幕にいる側近すべてに伝播していく。

「あの廉頗が」「これは難しい戦になるぞ」「あの白起將軍すら攻めきれなかった元趙三大天の廉頗がでるッ」

祝勝の宴に酔いしれていた彼らの心持は、驚愕のあまりに「地に足がつかない」と正しく言える様子であった。

彼らの動揺を取めたのは、他ならぬ蒙?の言葉であった。

「ふおつふおつふお。皆の者。何を狼狽えておる。廉頗のことは、あらかじめ想定されていた事態の一つじゃ。副將たちにも周知してあるぞ。皆の者よ、その様に浮足立って

おつては、戦勝の酒がこぼれ落ちてしまふぞ。ふおつふおつふお」

蒙？は、暖かで良く透る声を発することで、彼らを落ち着かせてから朗らかに笑った。

「さ、さすが殿だ」

「廉頗の名にも動じておられないぞ」

「これは秦国の武威を取り戻す戦になるぞ」

蒙？は、側近たちの面持ちが変わったことを認めると、朱錐に労いの言葉を掛けた。

「うむ。よくぞ報せてくれた。感謝するぞ。これならば、今からじつくりと対策を練ることができる。そなたらは、行軍の疲れもあろう。軍議は明日の夜からじゃ。今宵はゆるりと身を休めるとよからうて、ふおおふおつふお」

朱錐たちは、蒙？の言葉に従い踵を返して天幕をあとにすると自軍の元へと歩き出した。

「言葉ではああ言われていたが、はたして、その心境はどうであろうな」

「そうだな。なにせ、あの廉頗だからな。はつきり言つて、生半可な強さではない。さらに、奴の脇を固める廉頗四天王と呼ばれた輪虎（リンコ）、羌燕（キョウエン）、玄峰（ゲンポウ）に介子坊（カイシポウ）。いずれも油断ならない歴戦の将たちだからな」

廉頗は、かつて趙国の武の象徴、三大天の一角を担っていた漢である。その中で廉頗

は、秦六将筆頭である白起が総大将を務めて、さらには、副将に王騎がついた大戦においても、二年に渡り守りの戦い続け、ついには、敗北を喫しなかつた英傑である。だが、それを弱気と取つた当時の趙王に更迭されるという一幕もあり、自国の王家との折り合いは最悪であつた。

「まさか、対魏戦でかの大將軍と対峙することになるとはな」

ではなぜ、趙三大天であつた廉頗が、魏国に亡命することになつたのか。

「悼襄王（トウジョウオウ）か」

その原因は、現趙王である悼襄王その人にあつた。悼襄王は太子の頃から、廉頗が何かと諫言してくることを疎ましく思つていた。それゆえに、先王の崩御にともない趙王に即位すると「老将に大役は任せられない」と理由を付けて、將軍位をはく奪、つまりは、趙王家によつて、再び更迭される憂き目にあつたのだ。

「衰えているなら、ありがたいのだがな」

当然、廉頗は激怒して、これを拒否した。

「そうであれば、増援にくることもなかつただろうな」

結果、趙王は廉頗に対して五万の軍勢を興すと、廉頗の討伐に乗り出した。

「元趙三大天廉頗、か。」

この異例の同国同士の戦いは、趙王が興した五万の軍勢を廉頗率いる八千の兵が退け

ることになる。当然、王命に逆らい、自国軍に牙を剥いた廉頗に、自国に留まる選択肢はなく魏国に亡命することになったのだ。

近利関陥落の夜。

その夜、李豹は近利関陥落の立役者となった千人将から軍議に参加しないかと誘いを受けていた。

その将曰く「君は本来であるのなら、俺と同じ立場である千人将だ。今宵、次の戦にむけて、我が隊を含めた数隊で集まり軍議を行うゆえ、よければ君もどうだろうか」と。

李豹は、軍議の場所が少し離れていることもあって、一人、馬の準備をしていた。

「実力はあつて、嫌味もない。おまけに自身の出自を卑下しない、か」

李豹は一つの目指すべき将の形を体现している千人将に好感を抱いていた。

「よし。そろそろ行くか」

と、いぎ、馬に跨ろうとしたその瞬間

「みつけた」

という声に驚いて後ろを振り返った。が、そこに人の姿はなかった。

「気のせいか」とあたりを見渡して口した瞬間、李豹は背筋走った悪寒に従って前に転がった。さらに立ち上がると同時に佩いていた剣を抜き放つと構えた。

「つ、な、だれもない」

それは、李豹の最大限まで高まった警戒心をあざ笑うかのように、後方から聴こえた。「どこ」を見ている」

即座に声の方角に反応して、剣を振り向きぎに横に薙いだ。だが、何の感触もなく、李豹は視線を彷徨わせることになった。

「まだまだだな」

と、振り向いた方向とは、逆の肩口に何か乗った気がして、李豹は顔を向けた。

「ッ」

「久しぶりだね、豹」

と、玄象はサツと？を横した面を獲ると顔を近づけた。

頬に何か当たるとの感触した。

李豹が動揺しながらも視線を向けると「よっ」と軽い挨拶を交わすように手を挙げる。玄象の姿があった。

「な、なんでここに君が」

「増援だつてさ。顔、朱いぞ、豹」

「えっ、あ、いや、だつて、な、増援？」

李豹は混乱する頭を冷静に保ち直そうと必死に頭を回転させていた。

「そつ。ぞーえん。さつき着いた。ていうか、真つ赤　フツ」

だが、頬が真つ赤だと指摘されて、再び思考を乱されることになった。

そのとき、月にかかる薄雲が晴れて月明かりに照らされた玄象の顔に目が留まった。

「えッ、何？」

「象だつて真つ赤じゃないか」

と李豹は頬を指さした。

「えっ、嘘」

と、手で抑えた頬の熱さに気付いて悶える姿は、李豹に落ち着きを取り戻させた。

「増援か。確かに到着したつて話は聞いてたけど、第六軍だったんだね。おっと、面は返

してもらおうよ」

「あ、そうだな。ふう、あつい、あつい」

手をパタパタとさせて涼みながら、まだ少し落ち着きのない玄象から面を受け取る

と、李豹は再び素顔を隠した。

「ちらつとみたことあるけど、そんなに似てるかなあ」

この玄象の言は、李豹が面を付けている理由そのものであった。

「これをしておく必要があるくらいにはね」

李豹は、言葉のあとに、大王様の身代わりとなった日のことを浮かべていた。

とある日の某所にて、秘密裡に昌文君よつてに連れてこられた李豹の姿を認めた大王は言葉を發した。

「フツ　まるで俺の現身のようだとまで言わしめたお前に興味を持っていた。なるほど、俺は他者からはこのように見えているのだな」

昌文君は、自身の「現身のようだ」と言つた意味を別の形で解釈されたのかと心配になつて言葉を掛けた。

「この者は漂という若者でして、下僕の恰好をしていますが、決してそのような意図はございませんぬ」

「ん？　昌文君。そうじゃない。実際、下僕よりも下の生活をしてきた俺からすれば、下僕は立派な人だ。こう見えるというのも、悪い意味ではない。俺が俺を知るとでもいうのか、自分というものを客観的に他者から見ることができないからな。これだけ似ていると、同じ恰好をすれば、お前でさえ区別ができないかもしれんな」

「お戯れを。ですが、儂ほど大王様と近くで顔を合わせている者はおりませぬ。ですの

で、他の者にはできようもないでしょうな」

「フツ　それもそうだな。漂と言つたか、お前の働きに期待しているぞ」

「ご期待にお応えできるように誠心誠意、お勤めを果たします」

「改まり過ぎだ。もう、俺とお前は表と裏の関係と言つていい。年も近い、もつと普通でいいぞ」

「はっ」

李豹は、あの日から、まだ数年しかたつていないというのに、妙な懐かしさすら感じていた。

信と出会い、剣に見立てた棒で語り合つた大將軍になるという夢。

どこにでもいる下僕の身であつた自身が、大王様の身代わりとなり、わずかでも王宮にいたこと。

そのあとすぐに、政争の末に身代わりとして、死にかけたこと。

朱錐様に助けられて、一人の兵として大將軍への道を、たしかに、歩き始めたこと。

そして、象と出会えたこと。

今がいる場所が、奇跡のような現実の上に存在していることに、言葉が溢れた。

「奇跡は起こつていた。俺の夢は、いまここにある」

「ん？豹、なにか言つたか」

李豹はこぼしてしまつた言葉に少しばかりの恥ずかしさを隠しながら、言葉が続けた。

「なんでもないよ」

「フーン、そっか」と玄象は背を向けると「私は豹のほうが一と一と思うぞ」と小さく呟いた。

「えッ、いまなにを一と一」

と、李豹が尋ねようとする、別の所から声が掛かった。

「李豹、早くいかなくていいのか。ん？ 玄象か」

それは、豹騎隊に「少しでる」と伝えて戻った洪であった。

「少し待っててください。象、すまない。千人将たちの軍議に参加することになっているから、もう行くよ」

「ん、そうか。それなら……、私は戻るよ」

背を向けたまま振り返らずに歩き出した玄象の背に李豹は「象ッ」と名を呼ぶと同時に駆けだした。

「象ッ」

と自身の名を呼ぶ李豹の声に足を止めたその時、あたたかなぬくもりが背中を包み込んだ。

「ありがとう。象、会えてよかった」

そこには、肩越しに後ろからやさしく抱擁する李豹の姿があった。

「豹……………」

と甘い空気が漂いそうであったが、我慢ならない漢の言葉によって、霧散した。「お前らッ、おっさんにみせつけてんじやねえよ。さっさとしろ、遅れるぞ」と。

玄象は李豹たちと別れたあと、先程の余韻に浸りながら、人通りのない路地から屋根へと駆け上がった。

「フフ、ふふふ」

李豹の体温の温かさをおもいだすと自然と笑みがこぼれた。

「初めての感覚だ。胸の内からあたたかさが溢れくるみたいだ……、ん？」
その時、視界の隅に映った影が路地裏にサツ消えるのを見逃さなかった。

男は、一仕事を終えたあとなのか、一息つくくと、言葉をこぼしていた。

「首尾は上々。あとは、帰還を待つのみか」

油断したというほどではない。それは、束の間に吐いた息を吸う間の出来事であった。

「ねえ、なにしてんの」

不意に掛けられた言葉にも、男は驚くことなく剣を引き抜き放ち、声の方角に向けて最速の突きを繰り出したのだが、視線のさきには………人影一つ存在していなかった。

「まあ、敵だよね」

漢がその声を認識した時には、背から刺し込まれた剣が胸を貫いていた。

「ぐふうツッば、馬鹿、な」

「はいはい、そういうの良いいから、目的を言いな。すぐに楽にしてあげるよ」

「だれ、が。死を、秦に死、を……………」

男はそれ以外の言葉を最後まで紡ぐことなく事切れた。

「はあ、人が良い気分浸つてるときに限ってこれだ」

美しい輝きとともに、あたりを照らし出していた月は、薄雲に覆われ始めていた。

第50話

近利関陥落の夜は続く。

「今日はひさしぶりのでっかい武功だぞッ 皆で、祝杯だあッ」

飛信隊は、魏国大攻略戦始まって以来、目に見えた武功を挙げられずにいた。だが、ここ、近利関攻略戦では、偶然鉢合わせた名のある部隊を撃破したことで、高い武功を挙げることに成功していた。これは、三つ目となる城攻略において、玉鳳、楽華隊を上回る初の戦果であり、喜びの祝杯であった。

その様子を少し離れた所から眺めている者たちがいた。

「ここは賑やかだな。ん？ そうか、彼らが噂の飛信隊か」

「そのようです。郭備様、軍議の時間が迫っております」

「お前たちは先に行つて準備を進めておいてくれ。俺は彼らに少し話がある」

郭備は指示を出すと飛信隊の元に向けてゆっくりと馬を進めた。

「あん、だれだあの騎兵殿は」

それは、少し酔いに回つた飛信隊の一人が口にしていた。

「ん、俺の事か。俺は千人将を任されている郭備と言う。君らが飛信隊で間違いないか」

「え、はいッ、か、郭備千人将と言えば、今日、大将首を挙げられたかたではッ」
「よく知っているな。その通りだ。隊長の信殿はいるかな」

落ち着いた郭備の姿とは対照的に問われた隊員はあわあわとしながらも、隊長の信を指さした。

「あれだな。宴会の最中にすまなかつたな。さあ俺のことなど気にせず楽しんで良
い」

郭備は自身の想像通りの隊長信の姿に頬を緩めながらゆつくりと近づいた。

「ん、あんた俺達に何の用だ」

「俺は郭備という。千人将だ。君が隊長の信で間違いないか」

「そうだ。で、その千人将様が何の用だつてんだよ。俺たちをからかいに來たつてんなら容赦しねえぞ」

と威圧するように啖呵を切った姿に「ツフ」と笑う郭備に、信は声を荒らげた。「てめえ何嗤つてやがる」と。

「嗤つてはいないさ。君は下僕の出だそうだな」

「だからなんだ、てめえも俺達に文句でもあんのかよッ」

食つて掛かる信を諫めるように「飛信隊長信」と名を呼ぶと、郭備は続けて言葉を
発した。

「君の威勢の良い所は評価できる。だがそれだけでは、いつか隊を殺すことになるぞ」
「なッ なんだと」

「今は若いのがゆえに許されている所があることを自覚すべきと言っている。さらにいうならば、高狼城では狼藉を働いていた乱闘を切ったそうだな」

「俺は糞野郎を切っただけだッ 悔いはねえ」

「そういう所だ。此度は大事には至らなかつたが、次は、隊を巻き込んだ処罰が下るかも
しれないと、頭の隅に置いておくといい」

「ツチ、なんだよ、説教ならよそでやれよ」

郭備は信のその言葉に「おっと、そうであつた」と頭をかくと謝罪を口にして、本題を語りだした。

「すまない。君の言葉の通り、説教に来たわけではないのだ」と。

その後、郭備は高狼城で信が雷胴を切ったことで起こつた軍中の変化を飛信隊の皆に
伝えた。

「君たちの若い力が軍を変えたことに、一言、礼を言いたかつたのだ。ありがとう。飛信
隊の信、そして、隊員の諸君」

郭備の言葉は、確かに、飛信隊の皆の心に響いていた。

「君たちは間違つてなどいない。そのまま真つすぐに進め、飛信隊。さあ、夜はこれから

だ。大いに騒ぐといい」

郭備の言葉だけが響いてた宴は、一気に活気を取り戻すと、先程よりもさらに大きな盛り上がりをもせていた。

「俺、あんたの事誤解してたみたいだ」

「気にするな。俺が誤解を招いたようなものだからな。つと、すまない、そろそろ、行かなくてはならない。信、君のこれからの活躍に期待しているぞ」

「ああ、すぐに千人将になってあんたに並んでやるから待つてろよ」

「ツフ、ならば俺は二千人将を目指すでしょうか」

飛信隊の宴から離れた郭備は、軍議が行われる自隊に向かっていた。

「次の世代にも、立派な芽が育っているようで何よりだ。俺もうかうかしている場合ではないな」

郭備の誰に掛けるでもない言葉は宙へと消えていった。

「郭備千人将」

そんな、郭備を呼び止めた声は、長い騒乱の夜の幕開けとなった。

「ん？」

郭備は自身の名を呼ぶ声に振り返った。

「ツ」

「？」

「振り返りざまに君の面、？だったかな。情けないことに、それに驚いてしまったよ。ところで、君がここにいるということは、来てくれるのだな」

「そのいたのは、副官洪を連れた李豹であつた。」

「はい。ちやうど向かう道中にお見掛けしたので声を掛けました」

「そうか、軍議の時刻に遅れ気味だ。話は歩きながらにしよう」

「ん？なんだって………。うゝん。順調だったんだけどなあ、どうしようか」

「漢は報告を受けると状況を整理し始めた。」

「六人か。あと数人はいきたかつたんだけど、手練れが紛れ込んでるみたいだしなあ」

「漢は、両手を頭の後ろで組むと、悩みを晴らすように空を眺めた。その様子に、作戦を続行するのかどうかの判断を促すように「如何いたしますか」と部下は声を掛けた。」

「しようがない、殺られてない兵は全部退かせて。あと、ココから一番近い標的をおしえてよ。それを最後にしよう」

「薄雲を抜けた月あかりに照らし出された姿は、少年のように若く見えたという。」

「こいつで三人目、か」

玄象の目の前には、今しがたこの世のものではなくなった黒衣を纏った亡骸が横たわっていた。

「狙いは秦の將つてところか。ほんとは、どこかに報せるのが正しんだらうけど、私も忍び込んだ手前、間違ひなく疑われるよなあ」

朱錐たちは本日到着したばかりということもあつて、蒙？軍中においては、余所者というほかなかつた。

「朱錐の名を出せば、いずれは解放されるだらうけど、そんな悠長な状況つてわけでもない所が痛いんだよな」

建物の角からそつと顔を覗かせた先では、倒れた秦將を発見した巡回兵が敵襲を報せる怒声を発していた。

「じゃあないか」

玄象は身を翻すと闇夜に紛れて姿を消した。

その頃、朱錐たちの姿は、近利関攻略の際に使われた本陣跡地の野営地にあつた。

「どうですか、蒙？軍全体の戦況は」

朱錐の言葉に返したのは青騎であつた。

「そうですねえ。まずは、私の見立てた通り、蒙？將軍の副將王翦、桓騎の二人は図抜け

た逸材と言えますねえ」

青騎は、拡げた戦略図を前に収集した情報を元にした配置駒を並べ始めた。

「蒙？本軍が城3つに對して、二人の副將は、すでに合せて11の城を落としています。明朝にも詳報が届くでしょうが、さらに増えたとしてもおかしくはありません。特に、王翦の進軍速度は異常と言わざる負えないでしょう」

虎豹は青騎の言葉を肯定するように会話に加わった。

「ええ、すでに七つですからね。青騎様は、以前、二人は六將級だと表現されたことがありましたが、相違ないようですね」

「ええ。どちらもそれなりの問題を抱えはしていますが、今、秦国において最も六將に近い將と呼べるでしょう」

朱錐は、六將の名がでたことで、六將制度の復活を上奏したという漢のことが気になる口にした。

「六將といえば、蒙武殿はどうですか」

青騎は、数瞬の思考のあとに、私見を述べた。

「ソフ 蒙武さんですか。そうですね、あれからの戦を直接みたわけではありませんから、断言はできかねます。しかしながら、対趙国馬陽戦を経て変わったとも耳にします。もとより、蒙武の武は、秦国においても突き抜けたモノがありました。だからこそ、突

出する弱さがあつたわけですが……。仮にですが、それを見事に収められる器を手にしはじめているとするならば、十分にその可能性はあるでしょう」

青騎は、私見を述べ終わると胸のうちで想いを口にしていた。

「貴方がどう変わったのか、相まみえる刻を楽しみにしていますよ。ねえ、蒙武さん」

三人が戦略図を眺めながら言葉を重ねていると、天幕の外から城門が閉門したと物見からの報告が挙がった。

「城門が閉じられた、ということは外か、或いは、城中に残党の存在が確認されたようですね」

「その通りでしょう。ここからすべてを知ることにはできませんが、城壁の見張りからの報せがない所を見ると、外ではなく、中とみるべきでしょう」

「城門の中、ですか。あッ………象は中にいます」

虎豹はふと玄象が誤って敵と誤認されたのではと心配になったが、青騎はそれを否定した。

「あの娘は十分に聡明です。技量においても、そのような失敗をするような者ではないでしょう」

朱雫は青騎の言葉に肯定を示しながらも、不測の事態に備えは必要であると言葉を発した。

「確かにそうですね。とはいえ、念のため、城門付近まで軍を動かします」

青騎は、朱錐の言に頷きながらも、軍編成に關しての助言を一つ口にした。

「中で何があつたのかが不明である以上は、機動力を優先するべきでしょう」

「それならば、私は騎馬隊の編制に入ります」

虎豹は言葉を残すと早々に天幕をあとにした。

「青騎様、不測の事態があつた場合はここの全権をお任せします。濯は残していきますので、参謀としての助言と指揮をお願いします」

「ソッフ 承知しました。朱錐軍長。あと、私に對しての敬称は不用です。あなたの性分では難しそうですね、無理にとは言いませんが、場に即した判断を望みます。よいですね」

「ハッ それでは失礼します」

朱錐の変わらない対応に少しばかりの呆れの表情を見せた青騎は、言葉をこぼした
「あなたは本当に……、まあいいでしょう」

青騎は、天幕から外にでると待機していた濯を代理の將として立てて、全体の指揮を執りはじめた。

第51話

闇夜を映し出していいいた月明かりは、拡がり始めた薄雲に覆いかぶさられるように、陰りを見せていた。

「もう少し遊んであげたいけど、生憎、そろそろ時間なんだよね」

李豹は、不敵な笑みを浮かべる少年のような幼さを残した襲撃者に終始圧倒されていた。

「ツ、ツク」

李豹の傍らには、辛うじて息をしている郭備の姿。

彼らに、一体なにが起こったというのか。

話は、郭備千人将と李豹たちが馬上での会話を重ねながら、他の千人将が待つ軍議の場に向かっていた時まで遡る。

「李豹。君の活躍は早くから耳にしていた。当然だが、蒙？大將軍も君の才を高く評価してくださっていたよ」

郭備は馬首を横に並べて歩く李豹に言葉を掛けた。

「それは、恐れ入ります。私はただ、その時やるべき事を懸命に行つたに過ぎません」
郭備は、李豹の無難な返答を受けると、自身の考えを述べた。

「その時やるべきことをやる。言葉にすれば当たり前のように感じるであろうが、実際はそうじゃない。これまで、俺を育ててくれた郭家よりも名家で、将になるべく一から育てられた優秀な者たちと幾度となく会ってきた。彼らは、確かに私よりも武や智に、優れていた。だが、同期を含めて、もつとも早い出世を果たしているのは、俺だ。それがなぜだか、わかるか」

「郭備様の言葉からすると、機を逸しなかつたからですか」

郭備は李豹の言葉に肯定を示すように頷くと言葉を返した。

「その通りだ。彼らは優秀な指導官に教えられたこともあり、決して戦いに弱いわけではない。むしろ、強いと言つていいだろう。護衛としてつけられた専属兵は、いずれも精兵ということも、その理由に挙げられる。普通ならば、私よりも早く出世を果たす彼らが足踏みするのも理由がある。彼らは決して常道を外せないのだ」

「常道、ですか」

「ああ、常道だ。彼らは、当たり前に戦つて当たり前に勝つことを前提としている。それは、名家の跡継ぎであるがゆえに、危険を冒せないことの現れだ。単純な言葉にするなら、奇策を基礎戦術の中に取り入れられる者は多くないのだ」

「よく言えば、手堅く、悪く言えば、読みやすいということですか」

「うむ。さらに言葉をつけ足すのなら、彼らは失敗するという経験を極度に恐れている」
「失敗の経験……、そういう見方もできますね」

「名家には、名家としての面子があり、その嫡男には、常に結果が求められている。そして、手堅い戦いに身を投じている者ほど、機に対して鈍感になり、一步目が遅くなつていく。その点、俺は出自が下僕であつたからな。貴族としての失敗などいくらできてきた。だからこそ、失敗の経験が成功に繋がることを知っている。機を掴むことができる者とは、相応の努力に裏打ちされた失敗の経験を活かせる者だと、俺は信じている」

李豹はこれまでの会話を振り返りながら、思考を纏めると言葉を発した。

「努力に裏打ちされた失敗の経験を活かす者。なるほど、良い言葉ですね」

「才能の過多は確かにある。さらには、家柄差など顕著であろう。だが、機は始めない者には訪れはしないし、研鑽を積まない凡人が掴めるほど甘くもない」

「私も研鑽を怠らないように心がけます」

「フツ 君は怠るような者ではなさそうだが、先輩千人将からの忠言の類であると心の隅にでも残して置いてくれ」

そうして、馬首を揃えて言葉を重ねていた郭備と李豹であつたが、突如「二人とも止まれッ」と声を挙げた洪に驚きその歩みを止めた。

「洪さん？」

李豹は二人の後ろに控えていた洪が制止を求めた真意を問うべく振り返ると、洪は佩いていた剣を抜き放っていた。

「お前たちも早く抜けッ。なにかいるぞ」

それは危機への察知能力の高い朱雒とともに、戦場を掛けてきたことで培われた経験からくる勘であった。

だが同時それは、襲撃者にとって最も先に殺すべき敵であると認知させることになった。

「えッ」

と郭備は困惑の声を挙げたが、李豹は疑うことなく剣を抜き放ち臨戦態勢をとった。

「な、ふたりとも、どうしたというんだ」

そうして困惑を示しす郭備であったが李豹の「郭備様も早くッ」という強い言葉に従って剣を抜いた。

「いるのは分かっているぞ。出てこいッ」

それは洪の怒声に応えるように、襲い掛かった。

突如、背筋を凍らせるようなゾクつとさせる濃密な殺気に身を怯ませてしまった三人に向かって、正面左にある家屋の隅。そこから正体不明の騎兵が飛び出した。

「困るなあ、もう」

その襲撃者は、馬首を並べて前方にいる二人ではなく、その彼らを庇うようにすばやく前に躍り出た洪を一合のもとに切り捨てた。

「グう……」

「僕が気配をけどられるなんて、いつ以来かな。やるね、君」

洪の躰は糸の切れた人形のようにぐらりとぶらつき、馬上から頽れた。

「洪さ——、郭備様ッ」

さらに襲撃者は急変した状況に対応できていない方に狙いを定めると右手に持つ剣を振るつた。

「ッ。ハ、ク………しま、ッた」

郭備は遅ればせながらも剣を構えたが、想像を超える重い一撃に構えをくずされ、二刀目で胴体を斬られることになった。

「君が声なんて出すから、すっぱり無駄なく殺してあげられなくて、かえって、彼を苦しませちゃってるよね」

襲撃者の言葉の後ろでは、胴体を深く斬られたものの間一髪のところ腰を捻り一命をとりとめている郭備が「ぐううう」と呻き声を挙げて地に伏せていた。

「ック」

「さてと、あとは君だけ。あつ、彼の心配はいらないよ。ここでみんな、仲良く死ぬんだからさ」

李豹は、襲撃者に対して最大限の警戒を持つて身構えていた。だが、「ぐっう」という郭備の呻き声に一瞬だけ、視線を外した。

「だめだよ。視線を外しちゃあー」

李豹の視線が郭備から戻るその間に、襲撃者の剣は振るわれていた。そして、それは確実に李豹の首を捉えていた。だが。

「へえ」

剣は鈍い金属音に阻まれたことで、届いてはいなかった。

「今のを防ぐとはね。いや、これは誘われた、のかな」

そう軽い口調で語る襲撃者の言は正しかった。李豹は、敵の力量が自身を上回っていることに気付いて一瞬の勝負に持ち込むために、あえて視線をそらして襲撃者の攻撃を誘導していたのだ。

「つつう」

李豹の狙いは、襲撃者の攻撃を誘導して受け止め、返す一撃ですべての片を付けることであつた。

しかし、想像を超えた襲撃者の怪力を前に、受けた剣ごと軀をもつていかれたために、

その機を奪われる結果になっていた。

「いいね。僕の一撃を誘って、そこから討ち取ろうつていう狙い。うん。将来に期待が
できそうだ」

襲撃者は悠然と構えながら、自身が感じた李豹の評価を言葉すると、再び、李豹に斬
りかかる。

「もう少し遊んであげたいけど、生憎、そろそろ時間なんだよね」

李豹の剣技は玄象との打ち合いをへて磨かれており、そのおかげもあって、襲撃者の
剣戟をなんとか凌いでいた。しかしながら、怪力を持つてして振るわれる一刀の対処は
それだけで神経を要するもので、次第に押し込まれる形となり大小、様々な傷を負い続
けることになった。

「ッ、クッ」

剣戟の間。襲撃者は仕切り直すように距離をとると声を発した。

「ふう、これは僕の腕が落ちたのかな。君、よく凌ぐよね。でも、そこのお連れが寂しそ
うじゃないかい」

そう言葉を発して、李豹の視線を誘導し、さらに判断を鈍らせるように言葉を操る。

「……洪さん」

「ん？ 彼、洪っていうの。残すとなんだかうざそうだったから、先に死んでもらったわ

けだけど、君も、そろそろ同じところに往くといひ」

襲撃者は右手にある劍とは別に、左側に佩いていたもう一刀を抜き放った。

「この通りに、僕は両刀を使う。その年齢で僕を相手によくもつたほうだ。君は誇つていい」

「ツク、……………俺は負けないツ」

李豹は、いたるところをから出血が認められる軀を押して、再び闘志を燃やすように劍を構え直した。

「フフ。まあまあ悪くはなかったよ」

「俺はツ　こんなところで終わるわけにはいかないんだツ」

李豹の裂帛の気合のもとに発した言葉にも、襲撃者はさざ波一つ立っていないかのようにならうに飄々と言葉を口にした。

「そういえば、君の名を聞いてなかったよね。僕は輪虎。廉頗四天王の一人といえりかいいかな」

「……………李豹だ」

「そう、ちよつと待つてね。……………おや、君の名前はまだないようだけど、特別に、付け足しておいてあげる」

輪虎はサツと拵げた竹筒を仕舞うと抑えていた殺気を解放した。

「またせたね。さあ、やろうか」

ちょうどその頃、各所で拳がる騒ぎ声の位置から敵の行動を追跡していた玄象は、ついにその姿を捉えることに成功した。のだが、それは同時に想い人の最悪の一步手前の姿でもあつた。

「豹おおおッ」

李豹に振り下ろされた一刀が上段から斜めに切り裂こうとしていた。

「豹おおおッ」

その刹那、走馬灯のように聞こえる声に李豹は自身の最後を覚悟した。

「ぐう、ふう……」

天下の大將軍になるべく強く握りしめられていた剣は手からスツと滑り落ちて転がり、その躰は、馬上から頰れどさりと地に倒れ伏した。

「……………」

輪虎は倒れ伏した李豹を一瞥すると別方向に視線を向けた。

「正直、その傷で立ちがるとは、流石にびつくりしたよ」

そこには、己の身を顧みずに立ち上がった郭備がいた。郭備は瀕死の重傷でありながらもわずかに残る力を振り絞って立ち上がり剣をふるって輪虎の馬に傷をつけることに成功していた。

そのため、輪虎は自らの馬を御すことにわずかでも力を割かざるおえなかった。

「ゴフオ　ゴフ　ゴッ」

そして吐血とともに力尽きて倒れた郭備の姿は、まさに死に体といえた。その時、輪虎は脇腹にふと痛みを幻視してさする自身に気付いて言葉を発した。

「死にぞこないに邪魔をされたのは、これで二度目だね。まあ君は彼ほど化け物じゃなかったみたいだね」

この郭備の己の死をも恐れぬ行動は、怒りに震える神墮としの一族がこの場に現れる刻になった。

「貴様ああああッ」

輪虎は、敵が怒声をあげて斬りかかってくるのを横目で確認すると早々に仕留めるべく打ち込みやすい隙をみせて待ち構えた。

「面倒だなあ」

のだが、狙い通りに飛びかかってくるかに見えた敵は、あさつての方角に跳躍。

それに対して、輪虎が疑問符を浮かべたのも一瞬。

玄象は家屋の側面を蹴ると輪虎に斬りかかった。

「ツわ、まづツ」

輪虎は、想像のはるか上を行く空中機動を為した玄象の一撃を受けとめきれないと即座に判断して、その一撃の勢いに押されるがまま馬上から転がるように着地。

そこから即座に態勢を立て直して、隙なく両刀を構えた。

対して、玄象は一撃の勢いを流して着地した敵に容赦なく斬りかかった。

「ツ——つと、ツク。つち」

輪虎は、玄象の舞うように変幻自在な剣を前に防戦一方となっていた。

一方の玄象は怒りに任せるままに斬り掛かっているように見えて、緻密な計算のもとに輪虎に傷をつけて追い詰めていた。

「つと、と、く。いい加減、にツ ハアアツ」

だが、連撃の隙間を縫った輪虎の一撃を躲すために距離をとることになった。

「痛てて、楽な仕事だったのに、君のせいで傷だらけだ」

輪虎は飄々とした態度を崩さないように言葉の口にしていたが、その裏では、力のすべてを護りに回してさえもギリギリの攻防になっていることに冷や汗を流していた。

「安心しろ。すぐに傷など気にならないように楽にしてやる」

玄象もまた、この攻防で仕留めきれなかったことに内心で舌打ちをしていた。

「君のような手練れがいたとはね。正直、計算外だよ。だけど残念。時間切れみたいだ」結果的にだが、輪虎はこの場所に長く縫い留められる形となったことで、索敵すべく送り出された巡回兵に発見されていた。

そのため、ここを包囲すべく多くの兵が動員されている兆しが周囲にみられていた。

「私が逃がすと思っているのか」

「だよ。でも、いいのかい——」

輪虎は剣先である場所を指し示しながら言葉が続けた。

「僕を追ってもいいけど、彼、早く手当しないと、死ぬよ」

輪虎は、玄象が叫んでいた名に当たりを付けて、その視線を李豹に仕向けると、同時に、洪が落としていた剣を足で蹴りつけた。

「ピュ——ッ」

甲高い音が発せられるなか、玄象は、不規則な回転をしながら飛来する剣を冷静に処理したのだが、その間が、敵の逃走の一助になった。

輪虎は、指笛で呼びつけていた愛馬に飛び乗ると、すぐさま馬首を翻し「君のことは覚えておく」と言い残して、駆け出した。

遠ざかっていく背に追撃をかけられないわけではない。が、倒れ伏す李豹を置いていく選択肢をとることはできなかつた。

玄象は、闇夜の路地に消えた敵を一旦忘れて、李豹に歩み寄った。

「待つてろッ 今手当やるからな」

この場に駆けつけていた巡回兵たちは、闇夜に消えていく襲撃者を目撃していたことで、その夜は執拗なまでの搜索が行われたが、ついに、その者を発見に至ることはなかった。

第52話

蒙？軍の兵に囲まれている玄象は、いら立ちを抑え込むように胸の前で腕を組んで佇んでいた。

「ツ、李豹……………、朱錐はまだなのかッ」

時は少し遡る。

玄象は、最初の攻防で仕留めきれなかつた襲撃者が路地に消えていくのを臍をかむ思いで見逃すと、重傷を負っていた李豹に応急処置を施していた。だが、駆け付けた巡回兵は、手当がひと段落着いたのを見計らうと、所属が不確かな玄象を怪しみ、身柄を抑えに掛かつた。

「私に触るなッ 早く二人を治療できる所に運べ。生死にかかわるぞ」

玄象の視線の先には、辛うじて息をしている二人とは違い、すでに息絶えている洪の姿があつた。

「むッ 承知している」

巡回兵の長は、手で息のある二人を運ぶように指示をだすと言葉を続けた。

「だが、そなたは身元がはっきりするまで拘束させてもらうぞ」

「ツチ 朱錐を呼べ。私は本日到着した第六軍所属副官付きの玄象だ。軍長の朱錐を、早くツツ」

その頃、近利関をうまく抜け出した襲撃者である輪虎は、馬で駆けていた。

「やられたよ。油断したわけじゃなかったんだけどなあ」

腕に巻かれた包帯の下には深い傷が刻まれていた。その様子に、部下は労わるように声を掛けた。

「輪虎様にそのような手傷を負わせるとは、そやつは何者でしょうな」

「どうだろう。増援が来たって話だし、そつちの将かもね。うゝん正直、腕は僕と互角か、或いは、上かもね」

「つな。輪虎様よりですかツ」

「いやいや、腕だけだよ。なにも一騎討ちで勝負するわけじゃないだからさ、驚くほどじゃない。それに、僕ぐらの腕なら、そう多くはないだろうけど、いないわけじゃないよ。個で敵わないなら群で勝てばいい。それだけさ」

「いえ、たしかにそうでしょうけど……」

「ん？ 納得できないのかい。まあ僕も玄峰様からの教えを受けてなかつたら、君によろしく考えていたかもね。戦いは勝つことがすべてなんだよ。どんな手を使ってでもね」

と不敵な笑みをみせた輪虎は、敵に負わされた手傷のことには執着せず、戦全体のことを思案すると言葉を口した。

「とりあえず、殿に報告しとこうか」

まどろみから覚めた世界は、何も無い空間であった。

軀をみても確かに受けたはずの傷はなく痛みもない。周囲を見渡せど、ただ白く薄く拡がる世界があるだけ。

「俺はなぜここにいるんだ」

出したはずの声は宙へと消え、耳にも残らない。

「……………、だれか、だれかいらないのかッ」

ふと、去来した寂しさに声を張り上げようと、声はどこかに届くこともなく消えていく。そのとき、ふと、顔に手を当てるときわり慣れた面がひとつあった。

「面……………、なぜ俺はこんなものをしてるんだ」

そう思つて手に取つた面は霧にのみ飲まれるように手から消えていく。

「なんだつたん……………、いやたいしたことでもないな」

ただただ拡がる白い薄い世界は、少しずつ「李豹」の世界を消して景色と同化していく。

「私は、わたし？　いつから私と。俺は俺といつてなかったか」

引つ掛かった記憶の隅に引つ張られるようにだした言葉は、その間にも拡く薄く白く消えていく。

「俺はどこにいこうとしているんだ」

いつの間にか遠くに出現していた構造物にも「漂」は、何一つの違和感も抱かない。

その時、何かが聴こえた気がした。

「……………」

誰かの声が聞こえる。

「……な、戻って……豹」

「豹……………漂……………ヒョウってだれだ。すまないが、俺は行かねばならないんだ」

声を無視するように……は歩みはじめた。少しずつ露わなる構造物。

「あとすこし……………なのに、進めない」

前方から肩を抑えられたような感覚を受けて歩みを止めると、今度は、なにかに後ろから抱きとめられたように、躰は前へと進むことができなくなっていた。

再び、誰かに声がした。

「お前はッ　大將軍になるんじゃないのかッ」

聴いたことのある声だ。

「だいしようぐん？」

けれど、何を言っているのか理解できない。

「わからないのかッ 私ガッ お前はッ私がわからないのかッ」

抱きとめた腕は次第に鮮明となり、背中には確かな温かさが生まれていく。

「……………あれ、象。なんでここに？」

「豹、行くなッ 私を置いていかなくてくれ。お前がどうしても行くというなら、私もともいくからッ」

「……………、俺が、象を置いていくわけがないじゃー、なにをー」

李豹が振り返えると、そこには玄象の姿があり、それと同時に、二人を包み込むような光が発せられた。光に視界が覆われた世界の先に人影が一つ。

目を開けば、そこは、どこかの建物の中であつた。

「……は」

「李豹ッ 目覚めたのか」

「え……………、しゆ、朱錐、様」

「ふう。一先ずは、意識が戻つたようですよ。象はお前を助けるために無茶をしたらしい。あとで礼をいってくように」

「象が……………、俺は斬られて？」

意識の混濁が見られる李豹に、不機嫌さを隠さずに言葉を発したのは見知らぬ者であつた。

「お前の命は、この世から離れようとしていた。象姉はそれを止めるために禁術に手を出した。ただの伝承だつたはずな——」

李豹は見知らぬ者の言葉に理解がおよばずとも、よからぬことが起こっていると直感したのか、慌てるように声を発した。

「き、きんじゅつ？ 象は、象は無事なのかッ」

見知らぬ者は、自身を顧みないように姉の安否を気に掛ける李豹の姿に、姉が何を想つて禁術に手をだしたのかを少しだけ理解ができたがゆえに、不機嫌さを抑えて現状を告げた。

「……………、たぶん大丈夫。息はしてる。だけど詳細は私にもわからない。あとは、目覚めるまで待つしかない」

「象……………」

事は、朱雫たちが玄象の身元の照会をした後まで遡る。

そこは、とある家屋の一室であつた。部屋には、朱雫を含めて、六人。一人は玄象であり、残りは、巡回兵の長に護衛が二人、それに詳細を記録している者が一人であつた。

「お前が拘束対象になるなど、一体なにがあった」

朱錐の言に、玄象は時間が惜しいばかりに口早に経緯を語りはじめた。

「李豹に会ったあと、怪しい人影に気付いた。そいつを殺るついでに情報を聞きだそうとしたけど、それなりの手練れで口を割らなかつた。黒衣を纏った亡骸はそのままにしてあるから、三つ見つかるはずだよ」

朱錐が視線を蒙？兵に向けると静かに頷き「今の所、黒衣を纏った二つ死体が確認されていきます」と口にした。

「その壁面上にもう一つあるはずだから、よく探しな。それから、敵の狙いが秦将だつてわかつたから、首魁を捕まえるつもりで、騒ぎが起こつていく場所から、おおよその位置を割り出して通りに出た所で、豹が……」

玄象はギチリと歯を食いしばり、怒りを露わにしながら続きを口した。

「斬られる寸前だつた。あとは、そいつを殺るべく突っ込んだんだけど、殺しきれなくて逃げられた。その辺は、そこにいるおっさんも見てただろう」

「ああ、確かにみた。だが、そなたの身元が不明であつた以上は、間者かどうかを疑わねばならなつたのは、理解してほしい」

と巡回兵の長は語つた。

「なら、もういいだろう。私は豹のそばに行く」

と歩き出そうとしたのを留めたのは、先程の長であった。

「羅元様の裁可が下るまでは、待機して頂きたい」

「ツ、どー」

その言葉で、頭に血が上った玄象が暴発しそうなのを察した朱錐は玄象の両肩に手を置いて押しとどめた。

「落ち着け、象。すでに虎豹が事情を説明するために走っている。もう帰ってくる頃だろう」

朱錐の言葉が示唆した通りに、虎豹が伝令を引き連れて姿を見せた。

「行け。南の救護室だ」

部屋に入るやいなや虎豹は入り口を明け渡すと玄象を走らせた。

「な、なにをツ」

と慌てる巡回兵の長に、虎豹は伝令を指さした。

「事情を聞くといい」

朱錐は、巡回兵の長の視線が伝令に移ったのを確認すると虎豹に訊ねた。

「それで、羅元殿はなんと」

「なんてことはない。何かあれば責任をとれ。だそうだ」

朱錐は「なるほど、承知した」と口にする、伝令から報告を受けている巡回兵の長

に声を掛けた。

「すまないが、敵の容姿について窺ってもよいか」

家屋から飛び出してきた玄象を視認した馮は、叫ぶように言葉を発した。

「南の救護所は城門通り沿いにあるッ」と。

「すまないッ」

玄象は、馮が指し示した方角にある家屋の屋根に駆け上がると、一気に加速して街を横断していった。

「豹ッ……………」

そうして、全速力で駆け抜けた先にあつた救護所に飛び込だ玄象を待っていたのは、治療を受けたとはいえ、弱弱しい呼吸音を響かせたまま、横たわる李豹の姿であつた。上半身にまかれてある包帯からは、斬られた箇所を沿うように、朱い血が滲んでいた。

「豹……………、死ぬんじゃないぞ」

横たわる李豹の手を両手で握ると祈るよう言葉を紡ぐ。

「豹、行かないでくれ。私を置いていくな」

救護室にむなしく言葉が消えていこうとも、言葉は溢れていく。

「頼む。死ぬな、戻ってこい。豹ッ」

すがるような願いもむなしく、玄象の直感は告げていた。今まさに消えてしまいうような命の灯が消えてなくなろうとしていることを。

玄象は記憶にずっと留めていた術を試す決断を下した。

「必ず、かならず、助けてやるからな。もし……だめだとしても一緒だからな」
そうして、玄象は、記憶にとどめていた口伝の禁術を紡ぎ始めた。

「第一の門くぐり——第二の——盤古の——天は地へ——人の命は連華の光、人の命は」

「唯 唯 光」

玄象の視界は光にまみれた。

ここに、常人には気取ることのできない気の流れの中に一つの特異点が生まれた。

そして、この特異な気の流れに気付いて、すぐさま駆け出した者が一人いた。

だが、ついた頃には、重傷で横たわる者に両手を添えて寄りかかったまま意識のない姉の姿があるだけであった。

第53話

近利関陥落夜の暗殺騒ぎは首謀者逃走のままに、朝が訪れていた。

「うむ。では此度の暗殺は、廉頗四天王が一人、輪虎の仕業であるということかおう」
秦の白老こと蒙？大将軍である。

「ハッ 昨夜、件の襲撃者と交戦した我が軍所属の者や目撃した巡回兵からの聞き取りをした限りでは、間違いないかと」

朱錐は、昨夜拘束された玄象の件も含めて、蒙？に面会を申し込んで、事の経緯を語っていた。

「むう、そなた所属の者を一時的とはいえ、拘束したことを謝罪しよう。じゃが、俄然の問題は輪虎じゃ。狙いが実働部隊の千人将であつたのは間違いなさそうでお、嫌な手を使いよるわ」

蒙？は、普段と変わらぬ表情であつたが、その声色には、苦虫を噛み潰した顔を覆い隠しているであろう姿が垣間見られた。

「いえ、こちらも手続きを踏まなかつたことを、謝罪致します。此度の騒動は、大戦にお

ける下準備、というのが我が軍参謀の意見で、私も同じように愚考しています」

「うむ。謝罪を受け容れよう。やはりそなたもそう感じておるのか。儂の側近たちも優秀ではあるが、輪虎を知らぬ。これでは先の行軍も油断はできません。羅元。守備を厚くするよう全軍に通達を」

「御意」

「うむ。そなたらも周囲を厚くして襲撃に備えるのがよからうて」

「ハッ 肝に銘じます」

朱錐は蒙?とも面会を終えると、李豹たちが眠る救護所に顔を出していた。

「目覚めたのか」

救護所の扉を開いて、中にある一室を覗くと玄象は目覚めていて、李豹の手を握って寄り添っていた。

「朱錐か。今煩いのが帰ってな。豹は疲れたみたいで、さつき眠った所だよ」

と言葉を口にした玄象は、朱錐に向けていた視線を李豹に戻した。

「そうか。李豹を助けるために、随分と、……………無茶をしたそうだな」

「ん。ああ、?から聞いたの。別に無茶ってほどじゃないよ。あれは、私たちに伝わる術の一種でね、本来は死者すら生き帰すことができるらしいけど、実際はわかんない。たださ、あの時、なんていうのかな。李豹はここにいないって感じた。もう目が覚めるこ

とはないつて。だから、昔、バアから聞いた術をだめもとで試した」

朱錐はただ聴き入るように「……………そうか」と声を発した。

「うん。術は発動したよ。記憶は曖昧になつてるけど、私は確かにここじゃない場所で李豹を見つけて帰つてこれた。ただ言い伝えでは、寿命が縮むつてことらしいからさ、多分そうなつてるかもしれない」

「躰になにか変わったことはないのか」

「ん。なんだろう。内から湧き上がる力？みたいなモノが感じ取れなくなったから、おそらくけど、同じことはもうできないと思う」

朱錐はしばし瞑目したあと、これからのことを尋ねた。

「ならば、少し先のことを話そうか」

「先のこと？」

「ああ。先のことだ。象はどうする。私たちは、このまま行軍を続けることになる。李豹は助かりはしたが、この戦は離脱することになるだろう」

「ああ、そのことね。私は朱錐たちについていくよ。さつき豹とも話したけど、私の足は引つ張りたくないつてさ。助けられた自分が情けないだと。私としては、生きててくれるだけでいいんだけどさ」

「李豹の意地だろう。受け入れてやるといい」

「意地もいけどき、こんなに良い女がいるんだからさあ、傍にいてほしいって一言いえばいいのに、頑固だよ、男って」

「フツ そうかもしれないな」

「あ、笑ったな、もう。それで出発はいつになりそう」

朱錐は少しばかり思索すると応えた。

「昨夜の騒動もあつて、軍の編制もある。今しばらくは掛かるであろう」

「ん、わかった」

「私から虎豹には伝えておくから、傍にいてやるといい。何かあれば使いを寄越す」

朱錐は踵を返して歩き出した。そうして、部屋の入り口に差し掛かると立ち止まり

「象」と名を呼ぶと続けて言葉を発した。

「随分と虎豹が心配していたぞ。象を大事に想う者がいることを忘れるなよ。……………」

無事でよかった」

玄象は、背を向けたまま足早に去る姿に朱錐の心境を察すると言葉を口にした。

「ふふツ 照れるくらいなら言わなきやいいのに」

朱錐は、救護所を背に向けて、第六軍の野営地に向けて馬を歩かせていた。

「李豹についていくと聞いたぞ」

「おう、そうだけ朱錐。俺達の軍で育った初めての隊だ。誰か一人くらいお目付け役がいたほうがいいだろうよ」

「お前には側近として軍を支えてもらいたかったのだがな」

「よせつて、お前に子守は必要ないだろうが。俺はな、あいつがどこまで行けるか、みてみたくなつたんだよ」

「随分と買っているんだな」

「よく言うぜ。お前が一番だろうがよ。それと、まあなんだ。年甲斐もなく魅せられんだよ。あいつといると若い頃を思い出すんだ。なんの覚悟もなく、戦場にでた餓鬼の頃をな」

「無謀に無策。よく生き残つたものだ」

「ああ。だからこそ、ついてやりたいと思った。李豹は馬鹿じゃねえが、まだ若い。知らねえことも、知れば……辛い現実もある」

「ああ、そうだな」

「俺はな、朱錐。あいつがどんな選択をしたとしても、背中を押してやりたいんだ」

「フツ 親かお前は」

「うるせえよ」

在りし日の戦友の姿は浮かんでは、蘇り、そして、記憶の底へと沈んでいく。

「洪……………」

陽が登りはじめた天に向けられた名は、戦友に届くことはなく、静かに空へと消えていった。

蒙？本軍は、さらなる襲撃に備えるために軍編成にしばしの時間を費やすと、山陽に向けて順次進発した。

それは、これまでの行軍とは一線画したものであり、嚴重の一言に尽きた。

蒙？大將軍を含め、各將軍の周囲は重装兵たちががちりと脇を固めていて、いかなる侵入者も許さないとばかりに整然とした隊列を組んでいた。

そんな最中、いつもと違う雰囲気を感じたまま歩く人物に声を掛ける者がいた。

「なあ、信。お前、あの夜から、なんかおかしくねえか」

飛信隊の一人であり、隊長とは同じ村出身の尾平である。

「ア×ツツ!! ……………いや。なんでもねえよ」

と信はいら立ちを隠すように言葉を濁した。

だが、隊員の中で誰よりも信と馴染みの深い尾平には一目瞭然であり、自身のもやもやとする気持ちを解消させるために、尋ねるように言葉を発した。

「なんでもねえってことはねえだろう。何隠してんだよ。信」

「うるせえツなんでもねえつつつてんだらうがッ」

思わず耳を抑えた尾平は、信から距離をとると「なんだよ。怒鳴るこたあねえだらうがよお」と愚痴を吐いて、尋ねる相手を近くにいた隊員の一人に変えた。

「なあ、昂。信のやつなんであんなにカリカリしてんだ」

昂もまた信や尾平たちと同じ村の出身で、幼さのある小柄な人物であった。

「知らないよ。尾平さんがまたなにかしたんじゃないの。尾倒さんが死んだなんて嘘ついた時みたいにな」

「あつ、あの時は大変だったんだぞ。信のやつが鬼みてえな形相で追いかけてくるしよ、挙句に俺は殴られたんだぞ」

「あれは誰だつて尾平さんが悪いっていうと思う。尾平さんだつて実は思つてたでしよ」

「んぐツ。確かにあれはやりすぎたつつうか。うん……」

と尾平がぼつが悪そうな顔をしていると昂は何かを思い出したように声を出した。

「……………、あ、そういえば郭備千人将と一緒にいた李豹つて三百人将もやられたつて聞いてから変だったかも」

「李豹？ああ、いつだったかそんな奴と会ったとか言つてたな。ん、そういえば、瀕死の重傷だつて聞いていて、飛び出してつたな」

「そうそう。帰ってきてから今みたいな感じだった気がする」

尾平は腕を組むとに感心したように昂に言葉を掛けた。

「お前、信のことよく見てんのな」

その言葉に、昂はなんだかんだと言いながらも信の変化にいち早く気づく尾平に、そのままでの感想を伝えた。

「尾平さんほどじゃないとおもうよ」

昂としては、誉め言葉として発した言葉であつたのだが、尾平には別の意味に聞き取れたようで、食つて掛かるように声を挙げた。

「あん、お前俺が信のやつにゾツコンだともいつもりか。言つとくがなあ、俺は東美ちゃん一筋だからな」

尾平は威勢よく本心を宣言した。

確かに、嘘は言つてはいないだろう。だが、彼の日頃の行いを知っている昂からすると、まったくもつて感銘を受ける要素はなかつた。

「そんなこといってさあ、この前綺麗なお姉さんに鼻の下を伸ばしてたじゃんか」
凶星である。

「あッ 昂、てめえ今はそんなこと関係ねえだろうがッ」

と自身の日頃の行いを棚に上げて、昂を小突く尾平であつた。

「ツチ うっせえな」

信は周囲の喧騒をよそに自身の中にある葛藤に悶えたまま行軍を続けていた。

その時、山裾にいた飛信隊よりも上部を行軍していた蒙？軍中枢から異変を報せる声
がこだました。

「ら、羅元將軍が、羅元將軍が討たれたぞッおおお」

第54話

「ら、羅元將軍が、羅元將軍が討たれたぞッおおお」

秦軍は、突如として降りかかった凶報によって動揺が伝播していく。その隙をつくように、襲撃者は行軍の合間を縫うように駆け抜けた。

「秦は若く良い芽が多いみたいだ」

その最中、襲撃者は逃走経路にいた小隊を勢いそのままに押しつけようとしたのだが、一人の少年だけは果敢に襲撃者に挑みかかっていた。

「何を言つてやがるッ」

道すがらにいた少年は、馬を駆つて逃げる襲撃者に飛びかかつて一撃を加えようとしたのだ。

「独り言。ところで、僕は輪虎つていうんだけど、君のお名前は」

だが、それを防がれた少年は、輪虎に腕を掴まれると、引き摺られるように人気のない場所まで連れ出されていた。

「飛信隊の信だッ」

少年は飛信隊の信であった。

「ははッ 秦は素直な子ばかりだ」

信は襲撃者の言葉に何かを感じとって声を挙げた。

「ッ、お前かッ、お前が豹を斬った刺客なんだな」

輪虎は、飛信隊の信の言葉に少しばかり思案すると言葉を発した。

「ひょう？ ああ、この間成り行きで斬った李豹、だったかな。あれ、斬ったってことは、

彼、生きてるんだ」

「あつたり前だッ あいつはこんなところでくたばるようなヤワな奴じゃねえんだよッ」

信は怒声混じりに言葉を発したが、輪虎はどこ吹く風とばかりに懐から取り出した竹筒を拵げた。

「そう。生きてるんだ、彼。……あれ、君の名前もないや。じゃあ、どうしようかな」

と、途端に面倒そうにそっぽを向いた輪虎の姿に好機を得たと信は行動を起こした。

「どうしようもなにもねえッ てめえは今からこの俺にぶつ殺されるんだからなッ」

信は、威勢の良い啖呵とともに跳躍すると、斬り掛かった。

「わお君って単純」

輪虎は、狙い通りの信の一撃を引き抜いた一刀で受け取めると、すかさず腰に佩いていた二刀目を抜き間に薙いだ。

この数瞬の攻防によって、信の着物は横難によって切れ目が走り、腹筋には薄っすらと走る剣筋を辿るように血が流れていた。

「ツ、つてえ」

信は輪虎の挙動から攻撃を察して、間一髪、腰を引かせて致命傷になるのを避けていた。

その様子に、輪虎は「……………まいったなあ」と言葉をつぶやくと、引き抜いていた二刀を鞘に戻して背を向けた。

「今日は見逃してあげる。じゃあね」

言葉を残した輪虎は、馬首を翻すと少しずつ加速させはじめた。

「ま、待ちやがれツお前はツ何者なんだツ」

輪虎は追いつがるように駆け出した信の言葉に、馬脚を緩めると言葉を返した。

「ふふつ、何者つてさつき名乗ったんだけどなあ」

信は絶妙に追いつけない速度で馬を走らせる輪虎に、怒鳴るように声をあげた。

「そういうことをいつてるんじゃねえツ」

輪虎はその返答を待つてましたとばかりに言葉を返した。

「だよね。君の問いにこたえるなら、僕は歴した將軍さ」

「ツんな、そんな嘘に騙されるわけねえだろうがツクソガキ」

「嘘つて酷いなあ。それに僕、三十代だよ。まつ、そういうことだから。またね、飛信隊の信君」

「な、三十？　ち、ちよ待てよッ　待ちやがれーッ　リンコーッ」

輪虎は、後ろから響く怒声に耳を傾けながら森を疾走していた。

「ははっ、よく響く声」

と弾む声をだしたあと、左腕に巻いた包帯の下から滲むように湧き上がる痛みにも、少しばかり顔をしかめながら続けて言葉を発した。

「まつ、本番までには、慣れていれば問題ない」

そうして、しばらく馬を疾走させながら後方の気配を注意深く探り終えると、人気のない木々の隙間で馬の脚を止めた。

「来ないみたいだね」

独り言のように呟いた言葉に、木々の隙間から姿を見せた兵が応えた。

「左様ですな」

輪虎は、蒙？本軍の中樞を狙うことで弱体化を図るついでとばかりに、一昨日に傷を負わされた人物を釣り上げて仕留めようと伏兵を配していた。

「あわよくば、ここで仕留められれば楽だったんだけど、とんだ無駄足かあ」

「しからば、今一度、どこかで仕掛けてみますか」

輪虎は配下の兵の言葉に数拍ほど思索したが、廉頗のもとに帰還することを決めた。「面白そうだけど、今回はやめておこうか。調べた結果を殿にも報告しないといけなからぬ」

輪虎は徐に蒙？本軍の後方に顔を向けると言葉が発した。「本番が楽しみなのは、久々だな」

その頃、魏国王都、大梁（ダイリヨウ）では、元趙三大天の廉頗が戦略図を前に思索に耽っていた。

「この山の名はなんだ」

魏国領土を知り付くしているわけではない廉頗のために付けられた文官は、廉頗の眼光の鋭さに怯えながらも応えた。

「え、は、はい。その山は満山、かと」

廉頗は戦略を立てる段階での緻密さを重要視していた。そのため、この文官の曖昧な表現では納得できず、物申すように「かと？」と訊き返した。

「ひッ、ま、満山でまちがいありません」

これに対して廉頗は満足したように「うむ」と応えた。

そこに慌てた様子の使者が姿を見せると、廉頗に駆け寄り言葉を伝えた。

「廉頗將軍。秦軍に、増援の軍が進発したという情報が入りました」
「むッ。増援じゃとお……………」

廉頗は数拍の思案のあと言葉を続けた。

「この時期の増援となると、どうやら、敵に儂の出陣が知られていたようじゃのお」
使者は廉頗の言葉に驚くように声を挙げた。

「ツな、廉頗將軍が出陣する情報は秘匿されていたはずですッ」

だが、廉頗は特段に驚く様子を見せずに豪快に笑つて魅せた。

「ガハハハッ 情報戦では後手に回つておるといふことじゃな。のお姜燕」

廉頗が視線を向けた先には廉頗四天王の一人である姜燕のすがたがあつた。

「そのようです、殿。して、使者殿。何者が率いているのかをご存じであろうか」

「姜燕殿。残念ながら、続報を待たねばまだ何とも。ただ、元王騎軍の方で動きがあつたという報は受けておりますので、もしかしたら程度ですが、そちらからかと」

廉頗は使者の言葉に含まれていた人物の名に反応するように呟くいたあと、怒声のような声を挙げた。

「元、王騎軍、か……………。じゃが、王騎の奴め、一体何を考えておるのかツッ」

廉頗が自身に内包する威を乗せた言葉は、姜燕以外の者たちにとつては、腰を引かせて後ずさるほどのものであつた。

「殿。使者殿が怯えております」

廉頗が姜燕の言葉を受けて使者に視線を向けると「ひッ」と慄き、仰け反るようになり立ちすくんでいた。

「ンンんッ」

その様子に、ちと頭に血が上りすぎたかと、喉を重く唸らせると気を落ち着かせた。

「殿は、王騎が破れたことにそこまでの憤りを感じておられたのですね」

「ああ、農にとつて奴らは皆そうじゃ。刎頸の契り（フンケイノチギリ）を交わした藺相如（リンソウジョ）を兄弟とするならば、王騎ら秦六将は、死ぬほど憎たらしい最大の敵でありながら、同じ苦しみや悲しみ、そして怒りを分かち合いながらも、ともに時代を駆け抜けてきた戦友とも呼べた。だからこそ、六将筆頭であった白起が自害した時は涙を流し、縋がどこの馬の骨ともわからぬ輩に斬られた聞いた時は、怒りに震えもした」

「とつ、と、友、ですか」

怯えるように声を出したのは、件の使者であった。

「意外か。数万、数十万の兵をぶつけ合った我らにそのような情があることが」

「は、あの、いえ……………」

と言葉を失くしたように俯く使者に、廉頗は「そうであろうな」と言葉を残すと、興

味を失くしたように視線を戻そうとしたところで、第三者からの声が掛かった。

「お前たちの感情は理解に苦しむ。難敵が勝手に死んだのなら素直に喜ばないだけのことだ」

それは、腕を鉢の前で軽く組んで現れた優男の発言であった。

「ぬっ、お主は確か……………」

「趙三大天の廉頗か。敵として直接対峙したことはないが、その武勇は聞き及んでいたので」

「ふむ。全員死んだとの噂であったが、まあ、実際の所はどうでもよい。ここに来たということは、魏王の要請、ということ、相違ないか」

「ああ。だが、基本は何も変わってはいない。秦増援の報に慌てた魏王の措置であろう。私は不甲斐ない弟子が結果を残し損ねたことで、引つ張り出されただけのこと。戦の全権は廉頗殿に。私は精々、後方支援をするだけであると認識して頂こうか」

この優男の言葉に対して、廉頗は、鋭い眼光を向けて本当に他意はないのかを探ろうとしたが、表情からはなにも読み取れないと判断すると言葉を発した。

「相分かった」

羅元將軍が凶刃に倒れた襲撃騒動からあとは、より厳重な警戒と警護がなされること

になつたが、新たな襲撃が起こることはなかつた。

そのことに、蒙？將軍の側近たちは安堵の息を吐いていたが、蒙？の孫にあたる蒙恬だけは、そこから、さらに思考を先々のことにまで伸ばしていた。

「ちよつといいか」

蒙恬が声を掛けたのは信であつた。

「あん、またお前かよ。今は考えごととしてんだ。用件が終わつたら、さつさと行つてくれ」

信は、何かと話しかけてくる蒙恬に若干うんざりする感情を抱いていた。

「ああ、そうするよ。でだ、信。俺が訊きたいのは、お前がやり合つたていう輪虎の話だ」

蒙恬からでた言葉に反応するように信は言葉を返した。

「お前ツ あの輪虎つてやつのかを知つてんのかっ」

「じい様に聴いてね。実際の所、実力とかはどうだったのかなあつて」

「じい様？ それに、実力？ あいつは、餓鬼みてえななりしてやがったけど、俺が言えるのは、俺の一撃を顔色変えずにと受け止めたつう話ぐらいだぞ」

「信の一撃を顔色一つ変えずにと受け止める、か」

蒙恬は信の実力がある程度認めていた。その信の一撃を輪虎は易々と受け止めたという。そのことで、輪虎の実力は自身の予測よりも上であると認識を改めていた。

その後、蒙恬はまず、趙三大天の廉頗について語り、輪虎は廉頗が誇る四天王の一人であり、その實力は、並みの將軍とは一線を画すほどであると告げた。そして、信に自身の出自を明かすと蒙？本軍の陣容についても簡単な説明をした。

「王翦將軍に桓騎將軍ねえ。つていうか大丈夫なのかよ。謀反？だっけを起こしそうな奴と盜賊の頭なんて將軍にしちまってよお」

と信は自身も下僕から大將軍を目指す身ではあるが、蒙？大將軍の両腕ともなる將軍が、ともに首を傾げるような問題を抱えていることに一抹の不安を口にしていた。

「信の不安は判らなくはないよ。ただね、それを差し引いてでも余りあるほどに、彼らは戦に強い。俺も気になって二人の戦歴を調べてみたけど、正直、化物級だ。今の俺達ではどうあつても太刀打ちできないと確信できるほどにな」

これまで、どこか柳のように気を流す雰囲気を漂わせていた蒙恬が、突如として、真剣な眼差しで語った言葉に、信はゴクリと息をのんだ。

「そ、そんなに強えのか」

「ああ、彼ら二人の實力に疑う余地はない。だからこそ、俺はこの戦いが時代の節目になるんじゃないかと期待している」

「時代の節目？」

「そうだ。秦六將王騎將軍が李牧という無名の將に敗れ、今、それこそ、秦六將と鎬を

削っていた元趙三大天廉頗と対峙しているのは、じい様の両腕、王翦、桓騎という若い世代の傑物だ。じい様がいる以上は、負けるわけにはいかないが、この戦いは、間違はなく旧世代が新たな時代に飲まれていくのかの趨勢を占うような戦いになるはずだ」

「時代の趨勢を占うような戦い、か……………。おい、蒙恬ッ」

「ん、どうしたんだ。信」

「つは、元三大天だあ 上等じゃねえかッ。俺は王騎將軍を超える大將軍になる漢だ。廉頗も王翦も桓騎も関係ねえッ。いつかそいつらをぶち抜いて、俺は天下の大將軍になってやるんだからなッ」

と、信は胸のあたりに挙げた拳を握りしめて、天に向けて高らかに宣言した。

「はは、凄いな、信は。……………、そういう所は尊敬するよ。ふっ、そうだな、なら俺も天下の大將軍を目指してみるのもいいかな」

蒙恬には大將軍を目指すというようなはつきりとした意志を示すほどに、熱く強い想いは存在していなかった。しかしながら、信の真つすぐな信念とも呼べる言葉に、少しだけだが、目指してみるのも悪くないかもしれないと感じたゆえの言葉であった。

だが、蒙恬は気づいてはいなかった。

うつかりこぼした言葉を聞き逃さなかった胡漸副長が「蒙恬様……………ついに、ついに、ご決断なされたのですね」と少し離れた木陰で涙を流して、さらなる忠節を誓っていた

ことに……………。

このあと、蒙恬は楽華隊の隊員から、いままでにならない熱い眼差しを受けることになるのだが、当の本人がそのことに気付くのは、もう少し後のことであった。

第55話

「ここは、魏に隣接する趙国の地、環甘（カンカン）である。

「まずいですね」

そこには、李牧を含めた趙国の参謀たちが戦略図を拡げて議論をかわしていた。

「やっぱり、秦が山陽を獲得するようなことになれば、大変なんでしょうか」

と言葉を発したのは、李牧に付き従っていたカイネであった。

「ええ。もし秦が山陽一帯を獲得するようなことになれば、秦は中華への大きな足掛かりを手にするようになります。本来なら、それを阻止するために、我々趙国は、魏を援護するような形で軍を進発させるのですが、それも、同盟が邪魔をして叶いません」

李牧の言葉に応えるように、この場にいる参謀の一人は声を掛けた。

「この戦いを推進したのは、やはり、昌平君でしょうか」

「ええ。昌平君で間違いないでしょう。さすがに、今この時にしか打てない、大きな一手を仕掛けてきますね」

李牧は言葉を発した後、何かを思案するように戦略図の一点を見つめていた。

カイネは、そのことに気付くと声を掛けた。

「李牧様。なにか気に掛かることがありませんか」と。

「いえ……………。ふむ、そうですね。この際ですので、ここで共有しておきましょう」

戦略図に指を添えた李牧は、言葉を発しながら動かし始めた。

「はじめに、蒙？軍は本軍、左軍、右軍の三軍に分かれて進軍を開始しました。次に、行軍速度なのですが、蒙？本軍は私の予想通りです。ですが、残りの二軍は別です。桓騎軍もさることながら、王翦軍の速度は、あきらかなまでに異常と言えます」

参謀の一人は、李牧の言葉に頷きながらも疑問を口にした。

「王翦と桓騎……………、聞かぬ名ですな」

李牧は正鵠を得る（セイコクヲエル）参謀の言葉に応えるように声を発した。

「ええ。まさに、私もそこが気に掛かりました。詳細を聞く限りですが、この二軍は、蒙？本軍をはるかに上回る実力を秘めているのは間違いないささうです。ですが、そうなるのと、それほどの実力者の名がこれまで通っていないかつたということが、私には疑問でありません」

「確かに——」

その時、秦魏山陽戦の続報を携えた伝令が声を挙げて入室した。

「急報ですッ 廉頗將軍は山陽に入城せずに通過。通過です」

カイネは伝令の報を受けて、李牧に視線を向けると言葉を発した。

「李牧様の仰つていた通り、廉頗將軍は山陽に入城しませんでしたね」

「……………廉頗將軍の強さは本物です。彼の將軍が進軍を選ぶことは容易に想像がついていました」

カインネは李牧の言葉を受けて、その意図を読み取るように言葉を発した。

「では、李牧様は今回の大戦は魏が勝利するとお考えなのですか」と。

だが、李牧はそれに対して、肯定は示すものの断言を避けるように言葉を返した。

「ええ。十中八九、と言いたいところですが、両国が派遣したという増援の報が気に掛かります」

この言葉に、カインネは増援を含めてもほぼ同数同士の戦いとなる今戦が、それによって左右されるほどの要因になるのであろうかという疑問を、そのまま口にした。

「増援は確かにそうですけど、結局は、ほぼ同数同士の戦いです。ですので、戦いに大きくは影響しないようにも感じるのですが……………」

カインネのこの疑問に対して、李牧は自身の考えを告げた。

「カインネ、それは違います。今、この時に増援が派遣されたということは、秦は事前に廉頗將軍の出陣に感づいてたことになります。そして、それを送り出したのは、秦軍総司令の昌平君です。此度の戦略を描いた彼の者が、半端な人選を送り出すとは考えにくいです。加えて、大軍同士の戦いとは、一軍の將の資質が大きく問われる戦いでもあります。」

ゆえに、蒙？の両腕となる王翦、桓騎の実力もさることながら、両国増援の正体如何では、大きくもつれる可能性も視野に入れておくべきでしょうね」

と、李牧は馬陽での経験から、見えていない敵を安易に推し量る危険性を口にする、カインは、不甲斐ないとばかりに頭を垂れると謝罪を口にした。

「李牧様の仰る通りです。私が浅はかでした」

李牧は、カインの猛省する姿に、そのような意図で言葉を返したわけではないと言葉を続けた。

「いえ、カイン。あなたを責めているわけではありませんよ。あの戦、浅慮に過ぎたのは、私のほうなのですから」

李牧は、過去の反省を口にしたあと、室内にいる者たちに視線を送ると続けて言葉を発した。

「そういうわけですので、増援の正体はなるべく早く探らせるようにしてください。仮にですが、秦が山陽を獲るようなことになれば、大きく動かねばならない可能性もでてきますので、早急に願います」

そして、秦が魏の山陽一帯の攻略に乗り出してから二月と少しが過ぎようとした頃、ついに、廉頗は戦場となる流尹平野（ルイヘイヤ）に姿を現すことになった。

流尹平野とは、魏国山陽にある四つの城のさらに西にある平野である。しかしながら、平野とは名ばかりで、山や川、林に森、さらには湿地すら含む複雑な地形を擁している。

それはつまり、単純な平地での戦いとは大きく隔たりがあることを意味しており、廉頗のような戦の玄人ほど好む地であるといえた。

そうして、到着した廉頗率いる魏軍であつたが、ここで、進軍を停止することになる。「ふつ さききに満山に布陣しおつたか」

魏国大將軍廉頗は、この流尹平野で最も理のある地を本陣として構える予定で進軍していたが、物見からの報を受けて、選定していた別の地に布陣することを決断した。

「まずは合格点、と言ったところかのお」

と、秦将を評価すると「ヌツハハハハツ」と豪快に笑いながら踵を返して、頭内の戦略を書き換え始めた。

その頃、臨時の千人将に任命された飛信隊の面々は、馬首を並べながら、戦術についての話し合いを行っていた。

「中鉄。そつちじゃねえよ。俺から見て右に二つだ。違う、三つじゃなくて二つ。だから——」

隊長信は中鉄という大柄な男に戦術版を持たせて指示をだしていたのだが、あまりうまくは伝達することができずに苦戦していた。

「ところで、羌？殿はどこで戦術を学ばれたのですか」

信と中鉄がやり取りに苦戦している合間に声を発したのは、臨時千人隊となつた飛信隊に組み込まれた元郭備隊副長楚水であつた。

だが、それを遮るように、隊長信から言葉が掛かつた。

「そうそう、そこだ。 んんで羌？、次はどうすんだ」

臨時千人隊とは、輪虎の襲撃によつて隊長を失つた部隊を千人将以下の将を臨時で格上げした措置によつて生まれた千人隊のことである。

「それで、そこから第三部隊が右から回り込んだら、こちらの勝ち。 ……、どこでつて、別にどこでも学んでない。 しいていうなら、勘」

郭備隊は隊長である郭備が斬られたことで、楚水が引き継ぐ予定であつたが、楚水は飛信隊が臨時千人将になるという蒙？大將軍の任命を目の当たりにしたことで、急遽、隊員たちと話し合い、郭備千人将が目を掛けていた飛信隊に手を貸すことを決めていた。

「勘、ですか……………」

今、戦術版を前に行われているのは、三百人隊であつた飛信隊が新たに千人隊となつ

たことで「これまでとは違いより確かな戦術が必要になる」という楚水の言に従ったもので、戦術の見直しである。なのだが、信たちに比べると、羌?の指摘はすべてが的を得ており、多少なりとも戦術を理解している楚水をして「これが天才、というものか」と唸るほどのものであった。

「そう、勘。千人隊になっても勝つためにすることは変わらないのだから、当然」

と、平然と言いつつ羌?の姿に「そんなはずはないだが」と楚水の胸の内でごぼしていたが、言葉にはしなかった。

「それに……、実績をあげないと隊は解散になるから、勘だけっていうのは、少し嘘。ちよつとは考えた」

「ちよつとって……いえ、凄いですね。それにしても、解散ですか。蒙?將軍も厳しい条件をつけられたものだ」

臨時千人隊になった飛信隊であったが、それは順当な実力で勝ち取った位とは言い難い部分があった。実の所、実績によって千人隊に格上げとなったのは、蒙恬の楽華隊と王賁の玉鳳隊の二隊のみであった。

だが、とある出来事で蒙?將軍と知り合ったことが一つの縁となり、將軍が有する裁量権によって、急遽、飛信隊を臨時の千人隊として編成するという経緯があった。

「なに言つてやがるんだ、楚水。三段階降格が怖くて、大將軍なんて目指せるわけがねえ

だろうがッ 千人将の首三つなんて小っせい目標なんかじゃねえ。俺が、飛信隊が目指すのは大將軍廉頗の首だけだッ」

蒙？は、飛信隊を千人隊に昇格させる条件として「この戦で隊として千人将の首三つか、將軍の首一つを獲れなれば、信を三百人将から伍長にまで降格させる」と宣言していた。

伍長とは五人一組の長のことであり、仮にはあるが、信が目標を達成することができずに、伍長まで降格となれば、三百人隊である飛信隊を信は率いることができないことになる。

つまりこれは、事実上の飛信隊解散を意味していた。

「そうでしたな」

楚水は、無謀だと誰もが判断するような宣言をしたにも関わらず、不思議とできそうな気にさせる信という少年の魅力に、惹かれている胸の内に気付いていた。

だが、それに、平然と冷や水を浴びせかける者がいた。

「大言壮語。見合うものを身につけてから言え」

羌？である。

「うっせえぞ 羌？」

「お前が黙れ」

楚水は、そんな二人を宥めながら、無謀でも勇敢に突き進もうとする信と独学にもかかわらず、高度な戦術を理解する羌？。この二人の歯車が噛み合ったとき「この隊は、大きな力を発揮するのではないか」となんとなくだが感じていた。

魏山陽攻略 開戦一日目

第56話

始皇五年（紀元前242年）

秦国に端を發した魏国山陽一帯攻略戦が開始されてから二ヶ月と少し。

ついに、決戦地となる流尹平野に両国本軍が到着を果たすことになった。

「久しぶりじゃの、廉頗よ。この戦いに勝ち、最後に笑うのはこの儂じゃ」

蒙？は、幾度となく辛酸をなめることになった廉頗との対戦の過去の清算を目論見、廉頗は、敵総大将であり、出来の悪い古馴染みに引導を渡すついでに、その両腕と称される王翦、桓騎という傑物を見極めようとしていた。

「蒙？よ。貴様に用はないが、再び儂の前に立ったことが間違いであつたと、あの世で反省するがいい」

両者は、届くことのない言葉を戦場となる流尹平野に残すと、それぞれの思惑を胸に本営となる陣に着陣した。

だが、ここで一つの大きな事実が判明することになり、両陣営に衝撃が走ることにな

る。

「魏国総大将は廉頗にあらずッ 廉頗にあらずッ 敵総大将は白亀西なりッ」

この報は、秦軍に大きな衝撃をもたらしたが、それは、魏軍にいる廉頗四天王の面々も同じであつた。

「魏国に亡命を果たしてから三年、儂は魏王の信任を得られなかつたことになつておる。それゆえに、儂が総大将では、魏軍の士気を大きく上げることができません。それならば、別の者を仕立てた裏で、儂が操るほうが効率が良いという判断からじや」

廉頗は、遠い祖国に目を向けると言葉が続けた。

「まあ、他にも理由がないわけがないがな………」

とは、四天王に向けたの廉頗の言であつた。

そうして、両軍の将が各所で配置に着いたことが確認されると、ついに、開戦への火ぶたが、切つて落とされようとしていた。

え

「先鋒隊は前えッ」

「我は將軍土門也。大秦国に連なる兵どもよ。今こそ老将廉頗に引導を渡し、この地を平定する刻だッ」

第一陣八千を指揮する土門將軍は、高らかに振り上げた矛を振り下ろすと同時に号令を發した。

「第一陣は我に続けッ 全軍ッ突撃だッ」

一方、対峙する魏軍第一陣を指揮する輪虎は、自軍の士氣の高まりを確認すると氣負いなく第一陣八千に号令を發した。

「用意はいいね。先鋒隊」

「「応ッ」」

「うん。いいね」

輪虎は、腰に佩いた一刀を引き抜くと天に掲げた。

「これから秦国を撃滅する。先鋒隊を突撃さえて」

と、振り下ろされた一刀と同時に、輪虎側近より「突撃だッ」号令が發せられると、魏軍第一陣が突撃を開始した。

断崖に左右を守られた蒙？本陣前方には、本陣を護る最後の盾として、配置され第六軍面々の姿があつた。

「どうやら序盤は我ら秦国が優勢のようですね」

第六軍軍長朱錐である。

「そのようだな。土門將軍か、名を轟かしているわけではないが、本軍第一陣を任せられるだけのことはある」

言葉を返したのは、副官である虎面の虎豹。

「ええ、まずまずの出だしですねえ。とはいっても、序盤も序盤です。廉頗さんのことですから、このままということは、まずないでしょうねえ」

二人の言葉に肯定を示しながらも、廉頗を深く知る青騎は、これから戦場は荒れると口にした。さらに、現状を確認するように言葉を続けた。

「どうやら、敵右翼には姜燕、敵左翼には介子坊が配置されているようですなえ」と、斥候からの報告を青騎が言葉にすると反応を示したのは、虎豹であった。

「姜燕か……………」

「ソフ あなたはやはり姜燕の名が気になりますか」

「はい。私も奴も互いに攻めに偏重していましたから、毎回、万の死者を出す激戦になりました。ですので、気にならないといえは、嘘になります」

「ソッフ そうでしょうねえ。ですが、今回対峙することはないでしょう。私たちは中央本軍から、遠く離れるわけにはいきませんから」

虎豹は、青騎の言葉に「確かに」と呟き頷くと過去の戦いの記憶を隅に置いた。

「そうなるよ、こちらの左翼である蒙？大將軍麾下王翦將軍の実力が気になりますね」

二人の会話の切れ目に投じられた朱錐の問いに、青騎は簡潔に応えた。

「ソフ、どうでしょうねえ。王翦將軍の実力は承知していますが、左翼は山々に囲まれた地であり、これを主戦場に行っている限りは、姜燕の攻めを受け止め続けるのは非常に困難と言えます。なにせ、あの方は、弓矢の音を使つて部隊を動かしますから、視界の遮られた地形では、どうあつても、一手遅れるのは避けられません。そういう意味では、彼の將軍がどのように戦うのかは、非常に興味深いとも言えます」

「では敵左翼はどうでしょうか」

という朱錐の言葉に反応するように虎豹は言葉を返した。

「ソフ、敵左翼の介子坊と言えば、朱錐とは因縁があつたな」

「因縁、というほどではない。互いに戦場で会敵したのだから、戦うのは当然であろう」

それは、とある戦場でのこと。

総大将摺を補佐する形で昌文君が戦場を駆ける傍らで、その麾下であつた朱錐は、いち早く敵影に気付くと自隊を転進。迎撃に向かつた先にいたのが、介子坊率いる本陣強襲部隊であつた。

「そうか？　朱錐に足止めされたことで、退却に追い込まれたのだから、向こうはそうは考えてはいないのではないか」

その時、介子坊は迫る敵部隊を勢いよく粉碎してから敵本陣を壊滅させる目論見その

ままに猛進した。

「退却というよりは、機を逸した上で、自軍本營の危機を知って踵を返した。という方が正しいでしょう」

だが、結果は粉碎することは叶わず、大いに足止めを受けることになった。

時を同じくして、廉頗が敵本陣強襲を狙って介子坊を送り出したように、総大将であつた摺もまた自らが先頭に立つて廉頗本陣の強襲を敢行していた。

そのため、介子坊は六将摺による自軍本陣強襲の報せを受けて転進した過去があつた。

この出来事に対して、どのような見方をするかは、当事者たちにとつても異なつており、結論の出ないやり取りでもあつた。

そこに、戦場を俯瞰するように眺めていた青騎から言葉が掛かつた。

「二人ともその辺しておきなさい。そろそろ動きがありそうですよ」

戦場では、青騎の言葉を示すように、早々に千人将二人が討ち取られたという報が駆け巡つていた。

「フフフ、統率された隊とそうじゃない隊は、少し見定めるだけですぐにわかる」

輪虎は、近利関城では襲撃者として千人将の多くを討ち取つていた。

これには、明確な狙いがあり、それが今収穫の時を迎えていた。「前者は強く、後者は驚くほどに弱い。今の、君の千人隊みたいだね」

千人隊とは、戦を動かすほどの力を持っている反面、隊の意思疎通や連携如何によつては、ただ千という人の集まりになり下がってしまう難しさがあつた。

「さらには、僕の隊は前者だ。君たちでいう六将全盛期時代から戦い抜いた精鋭中の精鋭。趙三大天廉頗直下兵の輪虎隊だ。相手が悪かつたと思つて、逝くといいよ」

ましてや、急造千人隊というこの状況では、細かな連携などできるわけもなく、中核となる部隊とのズレは顕著であつた。

「フン 俺の千人隊の動きが多少鈍かろうと貴様を討てれば、なんの問題もない。俺が相手をしてやるから掛かつてこい」

と挑発するように槍を構えてみせたのは、玉鳳隊隊長王賁であつた。

王賁は、先鋒隊の一員として戦つたことで、急造千人隊の難しさを正しく理解していた。それゆえに、隊としての戦いではなく、個としての戦いに持ち込んだうえで敵将を討ち取り、隊を立て直す算段をしていた。

だが、輪虎は敵の狙いを見透かすように言葉を発した。

「一騎討ちを所望かい？ 素直に求められるのも悪くはないけど、バラバラの隊を率いる名もない将に、興味はないね。さっさと殲滅して、次に行くとするよ」

輪虎は一騎討ちを拒否すると殲滅を指示した。

「い、いかん。ほ、賁様を護れッ」

声を挙げたのは玉鳳隊副官番陽であつた。

「ははっ 精々守つてみなよ」

輪虎の意を汲むように動き出した兵たちは、王賁率いる玉鳳隊を目掛けて突撃を開始した。対して、王賁は群がるように殺到してくる敵兵を弛まぬ鍛錬のもとで練り上げた槍捌きで一蹴すると号令を発した。

「俺に護りは必要ないッ 隊の指揮を執れ、番陽。俺はこいつを倒して、さらなる高みを目指す」

王賁の力量と気概に触れた輪虎は「仕方がないなあ」と呟きながら二刀目を抜くと言葉を続けた。

「君がそこそこやるようなのは、一目みたときから察しはついていたけど……」

輪虎は言葉を一旦そこで止めると、殺気を解放するように言葉を続けた。

「時期が悪かったね。今の僕には一分の隙も期待できないよ」

「ぬかせ。俺の槍で貴様を貫いてやるから覚悟しろ」

こうして、廉頗四天王輪虎と玉鳳隊王賁が激突した。

第57話

玉鳳隊王賁が廉頗四天王輪虎と激しい打ち合いを演じている裏では、早々に千人將の二人が討たれた影響が秦軍第一陣に出ている。

「ぬう、いかん。儂自らが先頭に立って戦ったことで、幾ばくは持ち直しがしたが……」

と苦々しい声を出したのは蒙？軍第一陣を率いる土門將軍であった。

輪虎の強襲を受けて、千人隊の指揮官である千人將を失った二隊は、大きく乱された指揮系統での戦いを余儀なくされていた。

「やはり、急造千人隊では十分な戦果は期待できぬかッ　儂自ら劣勢の隊を鼓舞して回る」

もとより、彼らは急遽編成された千人隊であり、千人將という頭を失えば、隊としての形態を保つことすら難しいと言えた。また、指揮系統が乱れて身動きができなくなつた隊を周到に刈り取っていく魏軍の配置は、常に的確であり、輪虎の采配能力の高さを示していた。

「我らの勝敗は、両軍の士気に直結する。なんとしてでも状況を覆すぞッ」

と、一人気炎をはく土門であったが、秦軍第一陣八千の内四分の一が早々に機能不全に落ちた影響を一將軍の奮戦で覆せるほどに、甘くはなかった。

これにより、八千同士でぶつかつた二隊の兵数差は、徐々にだが、確実に開き始めていた。

「その若さでこの槍捌き。熟練すら感じさせる。つと、右から趙田隊を回らせて裏を突こうか」

輪虎は王賁の槍捌きをこう評しながらも、自隊の指揮を執りづづけていた。

「その油断が貴様の命取りになると忠告してやる」

「フフツ その気概は認めるけど、そういうことは、僕に槍を届かせてから言つてほしいものだね。ほらほら、しゃべつてる間にも君の隊は、どんどん削られているよ。僕を倒すつもりなら、急いだほうがいい」

先の攻防しかり、輪虎の言葉が示す通りに、幾度となく突き出される王賁の穂先は、輪虎の躰にかすり傷一つ付けることができてはいなかった。

「あの世で後悔するがいい」

「恐い怖い。何を見せてくれるのか、楽しみだな」

王賁は、輪虎と打ち合いを始めた当初から、全身の気を巡らせながら、勝負を決する

一撃を突き立てるべく集中力を高めていた。

それは、突き出される一槍ごとに現れており、己の限界の先を打ち破るような激しいものであった。互いの武が交錯する一瞬の攻防は、両者に距離をとらせた。

「いんげん」

気の充実を確信した王賁は、勝敗を決める一手を内に秘めて、再び輪虎との打ち合いに臨む。

硬い金属音が数瞬の内に幾度となく響き渡り、およそ常人には不可能な速度で連続して突き出される槍は横殴りの雨のように激しく打ち出され続け、時に、糸を通すような正確さをもつて、急所を貫かんとしていた。

「と、つとと、おツつと。……まだ早くなるのか。やるね」

「その軽口を塞いでやる」

王賁は狙っていた。激しく突き出す槍に、一つ一つ意味を込めることで、護りの意識を外へと逸らし、必殺の一撃を確実に輪虎の急所に突き刺す瞬間を。

「やってみなよ」

そこには、激しさを増す王賁の槍捌きを前にしても、不敵に笑う輪虎の姿があった。

「言われなくともツ（龍指）」

龍指とは、槍が大きく撓って見えるほどに穂先を軌道変化させる必殺の一撃であつ

た。

「ツク、な、ばかなっ」

けれど、その穂先が輪虎に届くことはなかった。

「だから言ったでしょ。今の僕に一切の隙は期待できないってね」

輪虎は王賈が弛まぬ修練の末に身に付けた龍指を讀んでいたかのように、右の一刀の腹で槍の軌道を逸らすと、残る左の一刀を首筋に滑らすように走らせた。

「ほッ 賈様——ッ」

響き渡る番陽の声は、最悪の刻を示すかのようであった。

「ふーん。よく今のを避けられたね」

「くう……………ッ」

王賈は首筋から流れる血を片手で抑えながらも、なんとか馬を後退させた。

「この前の李豹君、信君といい、やっぱり、秦の若手は優秀みたいだ。まあ、だからこそ、ここで刈り取ることになるんだけど、ねッ」

輪虎が王賈を仕留めるために振るった一刀は、たたらを踏むように馬ごと下がった王賈の躰を切り裂く一撃であった。が。

「ぬぐうッ」

番陽が王賈の危機を救わんととった咄嗟の行動は、輪虎との間に馬ごと躰を滑り込ま

せることであつた。同時に、自身の槍を滑り込ませたことで、番陽は、輪虎の右の一刀をも受け止めることに成功していた。

だが、輪虎の右の一刀は、およそ常人に受けめられる強さと重さではなく、受け止めた槍はひしや曲がり、軀にめり込むように押し付けられ続けたことで、番陽は、身動きが取れなくなっていた。

「邪魔だなあ」

面倒そうに言葉を口にした輪虎は、左の一刀を「ッ！」振るつて番陽を斬り伏せた。

「グフツ……ほ、賁さ、ま」

「番陽ッ」 「「ば、番陽副長おおおっ」」

馬上からゆつくりと力なく滑り落ちた軀は、ドサリと音を立てて、無情にも地へと伏せた。

「さつ、あとは君だけ、と言いたいところだけどー」

「ッ、この音は」

劣勢極まりない玉鳳隊の面々であつたが、一つの転機が訪れたことで事なきを得ることになった。

「どうやら、君は、運がいいみたいだ」

それは、秦軍第一陣後方より響き渡る轟音。つまりは、秦軍第二陣の突撃を告げる音

であつた。

「急いで第二隊を退かせて、第四隊、第五隊を前に出して敵第二陣の突撃に備えさせて。あとのことは、僕が中央に戻るから、ここは任せたまよ」

輪虎は、矢継ぎ早に指示をだすと、すでに深手を負わせていた王賁には、視線を向けることなく馬首を翻すと、言葉を発してから移動を開始した。

「僕はもう行くよ。じゃあね。若き千人将君」

屈辱に表情を歪める王賁であつたが、追撃に移ることはなく、倒れた副長の救護と部隊の再構築を図る姿がそこにはあつた。

「この借りは必ず返す。番陽の手当を急げッ 戦線を立て直すぞ」

魏軍本陣がある丘の上。

「廉頗將軍ッ 敵第二陣が突撃したようです。我らも第二陣を送るべきでは」

一人は魏軍総大将白亀西である。

「ふん。そう慌てるな、白亀西。不完全な軍をいくら送り出そうとも輪虎には通用せん」
二人目は元趙三大天であり、現魏軍の大將軍を務める廉頗であつた。

「いや、しかし、八千同士で始まつた第一陣の戦いに、さらに、敵八千が加わるのですぞ。窮地となるのは目に見えて――」

白亀西の心配は杞憂であると廉頗は大きく笑うと自身の考えを告げた。

「又ハハハッ！ 白亀西よ、戦は数だけでないぞ。機を見極めなければ、いたずらに兵の損失を増やすだけじゃ。まあ、見ておれ。そのうち面白いものが見れるであろう」

「いくぞッ 飛信隊。狙うは廉頗四天王輪虎の首だッ」

「「応ッ」」

秦軍第二陣もまた、急造の千人隊の動きが鈍く、その隊を支援するために、軍全体が歪な構造となつてしまい、キレのない動きになつていた。

「旗を掲げろッ」

そんな最中、同じく第二陣に組み込まれていた飛信隊の面々だけは、隊長信の檄に応えるように猛進した。

「俺についてこいッ 狙う敵部隊はあそこだッ」

それは、作戦も何もない。ただ、隊長信が決めた標的に一丸となつて突撃するというおよそ作戦とも呼べぬ単純なものであつた。

「敵将はすぐそこだッ 蹴散らせ、飛信隊ッ」

だが、突破力のある飛信隊三百に、蒙？軍主力級の元郭備隊の精兵七百が一丸となることで、破壊力が生まれて、他を圧倒する力を発揮していた。

「我ら飛信隊が敵將を討ち取ったぞ。いまこそ反撃の刻ッ 秦の兵たちよッ我らとともに魏軍を押し返すのだッ」

声を張り上げたのは、飛信隊結成当初から副長を務める澗（エン）であった。

飛信隊の一丸となった突撃力をこの乱戦のなかで止めることは難しく、魏軍を大きく苦しめることになった。

また、この飛信隊の活躍は、徐々に戦場へと波及していくことになる。

「信殿。これが千人隊の力です」

新たに飛信隊副長の一人となった楚水が指し示した方角には、飛信隊の活躍によって苦戦を強いられていた秦軍が盛り返していく姿があった。

「楚水。すげえんだな、千人隊って」

「そうです。今はまだ形こそ定まってはいませんが、練り上げれば、もっと大きな力を発揮できるようになります」

「ありがとよ、楚水。あんたら元郭備隊が来てくれたからだ」

「ツフ 我らは郭備様の意を汲んだだけです。話は戦いが終わってから、ゆっくりしましょう」

「ああ。そうだな、楚水。 旗だッ 旗を掲げろッ」

信は周囲を見渡すと、目に付いた部隊に狙いを付けて、再び号令を発して突撃を開始

した。

「いくぞお 飛信隊ツ!!」

一方、その頃。

「おやおや。左翼側が随分と押し込まれているみたいだね」

魏軍第一陣の中央本陣に戻った輪虎である。

「なにやら飛信隊なる部隊に、かき乱されているとの報が」

輪虎は側近の言葉に「飛信隊? どこかで聞いたなあ」と呟き、首を傾げたあと「ああっ!」と声を挙げて手を打つと言葉を続けた。

「あの時の信君か。フーン なかなか、活きが良いみたいだね」

「はい。ですので、調子に乗せる前に、早めに刈り取ろうかと」

「それには及ばないよ。あとのことは、次の人に任せるとしようか」

「ツハ では、作戦開始ということでしょうか」

「うん、そうしようか。どのみち敵は倍の数はいるんだから、その程度は、誤差の範囲だよ。それじゃ、押し込まれている方から、順に後退させていこうか」

輪虎の指示にあわせて、魏軍は押し込まれている中央左翼からの後退を始めることになる。

対して、敵左翼を押し込んでいた飛信隊の面々は、退いていく魏軍を一気に崩すべく更なる攻勢を仕掛けた。

「このまま敵を押し込んで、輪虎のいる敵中央軍本陣の側面に襲い掛かるぞッ」

攻勢を強めた秦軍中央右翼は、後退を続ける敵左翼を押し込み続けて、ついに敵中央軍本陣の側面を捉えることに成功した。

「このまま一気に、輪虎を討つぞ 飛信隊ッ」 「応ッ」

と、ころ変わって、蒙？本陣。

「蒙？様。第二軍が敵中央軍左翼を押し込み、輪虎がいる敵中央本陣の側面から攻撃を開始したとの報告がありましたッ」

「おおッ」

と湧く秦軍本営にいる幕僚たちに対して、蒙？は一抹の不安を抱いていた。

「と、殿。お聞きになれましたか。我らの優勢は揺るぎませんぞ」

あの廉頗が放った第一陣の力が、この程度であるはずがない。と

「わかつておるわ。ここらでも良く見えておる。敵第二陣の動きはどうじゃ」

だが、全体の士気を向上させる機でもあるため、そのことを言葉にすることはなかった。

「今の所、その気配はありません」

「ぬう。……動かぬのなら一気に叩き潰すまでよ。第三陣に突撃の準備をさせよッ」
と蒙？が追撃の一手を放とうとしたその時、急報を告げる複数の使者が姿を見せることになる。

「敵左翼後方の山より、敵増援が出現しましたッ」

「「な、なんじゃ（だ）とおッ」「」

第58話

「なるほど、これが殿の言っていた生真面目な性分を持つ魏兵の強みか」

秦軍は、第一陣に続いて第二陣を投入したことで、中央の戦いを大いに優位に進めていた。対する廉頗四天王輪虎率いる魏軍第一陣は、正面に側面と二方向からの攻勢を受けているにも関わらずに、粘り強い戦いを続けていた。

「でも、さすがにそろそろ限界かな」

輪虎は、自軍の限界点を見定めると新たな指示をだした。

「ここまで来たら、もう十分でしょ。合図をだして」

その頃、秦軍第三陣に配属されていた蒙恬？将軍の孫にあたる蒙恬は妙な胸騒ぎを覚えていた。

「おかしい。いくら何でも、あの廉頗が放った先陣が、この程度のはずがない」

蒙恬の言葉に反応を示したのは、副長の胡漸であった。

「しかし、若。今から後ろに控える第二陣が動き出したとしても、間に合わぬのではないですか」

胡漸の言葉が示すように、敵第二陣はいまだに距離を詰めることもなく整然と隊列を組んだまま、動き出す気配は全くと言つていいほどになかった。

「そう、じいの言う通りだ。間に合わない、とまでは思わないが、軍としての損失をまったく考えていないかのように動きがない」

蒙恬は、魏軍が第二陣を参戦させずに、第一陣がずるずると下がり続ける状況に対して「なにかがおかしい」と胸の内でごぼしながらも、その正体を掴むことができてはいなかった。

「廉頗は一体、何を狙っているんだ」

「若ッ、第六軍の騎馬隊が号令もなしに動き出しましたぞ」

「第六軍が? ……じい、あの軍はあくまでも騰軍麾下だ。この戦いも独立遊軍という立場であると同じ様は言つてた。だけど、なぜこの時に。ん、あれは。じい、楽華も第六軍に続くぞッ」

蒙恬が敵の狙いを察して、自隊を動かす少し前。

「これは……、先陣を切つた第一、第二軍は、引き込まれているのではないか」

「ええ。どうやら、そのようです。本来なら、敵中央左翼側が押し込まれて側面を突かれ

ているのですから、敵は右翼後方に押し出される形になるはずの所です。ですが、後退はしても左翼側から離れるような素振りが見られません。これは、明らかに狙った上での後退でしょう。ンフツ 私ならば第二陣後方の山中に、伏兵一つくらいの用意はしているでしょうね」

朱錐は、青騎の見立てから機動力を優先した部隊を編制すると、自らも出陣することを決断した。

「虎豹、馮」

「ああ、我が騎馬隊三千は、いつでも行けるぞ」「こつちも問題ない」

「よし。出るぞッ」

朱錐は後事を青騎に託すと、朱錐隊千、虎豹隊三千の騎馬隊に号令を発して、移動を開始した。

そうして、青騎は、駆けていく朱錐たちの背に視線を向けると、面越しに笑みを浮かべて、言葉をこぼした。

「こうして、また、廉頗さんと対峙する日が来るとは、多少なりとも感慨深いものがあります。とはいっても、私は、ただの参謀で、あなたも趙ではなく魏国の大將軍。ンフフ 戦乱の世とは真に複雑怪奇。だからこそ、面白いのですけどねえ」

その頃、魏軍本陣の丘にいる総大将白亀西は、自軍の左翼側の動きに驚きを隠せなかった。

「なツ………、あれは、左軍を任せていた介子坊殿ではツ　な、なぜこの中央に」

「又ツハハハツ　どうじゃあ、白亀西ツ。驚いたであろう」

「は、いや、確かに、でも………」

と、混乱隠せない白亀西に廉頗は簡潔に事のあらましを語った。

「なに、簡単なことじゃ。こちらの情報が洩れておるようであったからのう、ちと細工をしただけのことよ」

それは、実に、単純な話ではあるが、左軍に介子坊を配置したという情報を流した上で、左軍本陣に介子坊の軍旗を掲げさせただけであった。

「な、なるほど。そ、それでは、介子坊殿が抜けた左軍には、どなたがお付きになられたので」

「それは、玄峰じじいに決まっておろうが。だがまあ、ぐちぐちと軍略がどうこう文句をいうとつたがな」

と言葉を発した後「又ハハハツ」と豪快に笑い、さらに言葉が続けた。

「秦は目にものみるであろうなあ。介子坊に生半可な守備は意味を為さん。さらには、奴らの後方からの出現じゃ。秦は、対処を誤れば、先陣のすべてを失うことになるぞ」

廉頗は、言葉を発したあと、胸の前で両腕を組み鋭い眼光を戦場に向けた。

一方、秦軍第二陣は、後方に出現した敵伏兵の突撃によって、大混乱に陥っていた。「ど、どうなつてやがるんだッ」

狼狽するように声を挙げたのは飛信隊長の信であった。

「あれは魏軍の伏兵です。それも、恐ろしく強力な……」

と、信の言葉に応えるように声を発したのは、副長の楚水であった。その視線の先には、秦第二陣後方を無人の野を駆るように喰い破つていく魏軍の姿が見えていた。

「旗には『介』とある。となれば、話に聴いた四天王の一人、介子坊と考えるのが妥当だ。だが、……あれはヤバイ。今の飛信隊では、敵う見込みは一つもない」

これは、冷静に敵伏兵の力を見定めた上での差？の言であったが、信は、義憤に駆られるように、次の号令を発した。

「廉頗四天王が何だつてんだッ 味方やられているのを黙って見ておけるかよッ 聞けえッ、飛信隊。俺たちはあの伏兵を迎え討ちにいくぞッ」

「馬鹿なッ よせ。死ぬぞ」

「差？ッ 敵が強えからつて背なんか向けられるかよッ。行くぞ、お前えらッ」

「「応ッ」」

「ツチ」

羌？は、信の号令に従つて動き出した飛信隊に、表情を険しくさせながらも追従する決断を下した。

「死ぬ、秦軍ツ 魏兵よツ 立ちはだかる者をすべてを跳ねのけよ」

魏軍の伏兵として現れた介子坊率いる精兵五千は、秦軍第二陣の後方から立ちはだかる敵兵の悉く粉碎、殲滅していた。秦軍もただやられるわけではなく、對抗すべく咆哮を上げて果敢に挑んでいく部隊も存在していたが、介子坊率いる精兵五千の前では、なんの痛痒ともならなかつた。

「……………しくじつたか」

その様子に、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべているのは、第二陣を預かる將軍栄備であつた。

「だが、ただではやられんぞツ。我を見よ、秦兵よツ 我こそは第二陣を率いる栄備である。今こそ大秦国を支えるそなたらの力を發揮する刻ツ 抗え、秦兵よツ 魏軍に好きにさせる出ないぞツ」

この栄備の渾身の檄は、兵たちを奮い立たせることに一役買ったが、そのことが、栄備の命運を決定づけることになつた。

「そこにいたかッ 秦將。 覚悟ッ」

將軍榮備に迫っているのは、鬼気迫る表情を浮かべた精兵五千の將介子坊であつた。
「やはり、こうなるわな。 殿、ご武運をッ」

己を顧みぬ榮備の勇は、自軍の士氣向上に一役買ったが、翻つて、敵軍に対しては、自身の所在を明確に示す行為になつたのである。

「この榮備ッ ただではやらはせんぞッ」

一人氣炎を吐く榮備であつたが、迫りくる介子坊の武を前に、己の死を覚悟していた。
「死ねえッ 秦の犬めがああッ」

両者を遮りものがなくなり、一つの決着が付こうとしていた。

「んな簡単に將軍をやらせるわけねえだろうがッ」

だが、別部隊が横から介入したことで状況は混沌へと向かう。

介子坊隊の横腹に突つ掛かつたのは大声を張り上げた隊長信を先頭にした飛信隊であつた。これには、快進撃を続けていた介子坊も足を緩めざる負えなかつた。

「むう、小童がッ 行く手を阻むなら粉碎するまでッ」

「やれるもんなら、やってみやがれッ」

横からの不意打ち気味な突撃によって、敵の足を止めるとに成功した飛信隊であつたが、時間の経過は、残酷なまでに両部隊の力量の差を浮き彫りにしていった。

「――隊 壊滅。壊滅です」「――より救援の要請が」「――が討たれましたッ」

これらの情報が洩、楚水両副長のもとに続々と寄せられたことで、刻一刻と飛信隊の苦境を鮮明にしていた。

「信殿。もう持ちませんッ 今はまだ、羌？ 殿が押しとどめていますが、他はもう崩壊寸前です。今、退かなければ全滅はさけられません」

と洩は言葉を発すると救援要請があつた部隊に向かつて馬を駆けさせた。

その言葉通り、飛信隊の苦境は誰の目にも明らかであつた。

「ツク。敵将は見えてるつてのに、一步も近づけねえなんて………ツ、楚水。一瞬の隙を作ってくれ。俺がああ敵将の首を獲る」

「無茶だツ 今あなたを失えば、隊は崩壊するんですよッ ツハ、う、うしろッ」

楚水が言葉を発したその時、飛信隊の隙間を縫うように信の背後に迫る魏兵の姿があつた。

「なッ!?! ツ、しま――」

「戦場で隙を見せるとは何事かあッ」

と一喝しながら差し迫る敵兵を切り捨てて、信の危機を救つたのは、采備将軍であつた。

「ムハハッ なかなかどうして、やるではないか、急造千人隊の飛信隊。おかげで助かったぞ」

「栄備、將軍……………」

「だが、お前たちの役目はここまでだッ ここからは儂の隊が引き受ける。お前たちは直ちに退くのだ」

「なッ おっさんじゃあの敵将には勝てっこねえ」

「そんなことは百も承知しておるわ。だが、童のケツに隠れて退くなど、この栄備がするわけなからうが。馬鹿者がッ さっさと退け、飛信隊」

栄備の覚悟に反応するように声を挙げたのは、楚水であった。

「行きましよう、信殿。我らは、もはや限界です。口惜しいですが、隊が壊滅する前に、將軍の命令に従うべきです」

「け、けどよう」

信にも解っていた。今の飛信隊と介子坊率いる精兵五千との練度の違いが明らかであることは。けれど、戦の経験の浅い信にとつて、今、敵に背を向けて逃げると言う行為が、容易には受け入れがたい出来事であるのも事実であった。

「きよ、羌？が倒れたッ み、みんなで羌？を護りぬくんだった」

しかしながら、そんな信であってもはつきりとわかっていることが一つだけあった。

「信殿ッ」

「ツ羌?.....」

今まで、何度も飛信隊の危機を救ってきた羌?が倒れたということは、隊の余力が完全に尽きたことを意味していることを。

「羌?を助けて、俺たちは退却する」

信は苦渋に満ちた表情を浮かべながらも、隊を第一に考えて退却することを決断した。

「ムハハハッ そうだ行けえッ 飛信隊。お前たちが大きく芽吹くことを儂は期待しておるぞッ」

こうして、敵に背を向けた飛信隊の背後では、將軍の旗が静かに戦場から消えることになった。

第59話

「秦将栄備ツ この介子坊が討ち取ったぞツ」

高らかに掲げられた戦果に、魏軍の士気は最高潮に達しようとしていた。

「このまま敵先陣を粉碎だツ 私の背に続けええツ」

介子坊は、将が討たれたことで右往左往する秦兵を蹴散らしながら、先陣を務めるもう一人の将土門の側面を突くべく進軍を開始した。

「ははっ さすが、介子坊さん。うかうかしてたら、このまま戦が終わっちゃいそうだ。こっちの攻勢も緩んだことだし、もう一働きしようかな」

輪虎は、介子坊の出した戦果によって、敵の攻勢が緩んだことを確認すると、再び先頭に立ち、対峙する秦将を討ち取るべく馬の腹を蹴って駆け出した。

「急報ツ 急報です。 え、栄備將軍ツ 討ち死にツ 第二陣は敵伏兵を前に潰走を始めた」

「くッ 栄備……………」

第一陣の将を務める將軍土門は、急報を前に一つの選択を迫られていた。

「栄備將軍を討った部隊は、こちらの側面を突くべく進軍を開始したとのことですよ」
「もはやこれまでか。我が隊が殿となー」

第一陣を指揮する土門が退却に舵を切ろうとしたその時、新たな伝令が姿を見せた。
「我が隊後方より、味方騎馬隊が駆け付けているとのことですよ」

「間に合わなかったか……」

朱錐率いる第六軍騎馬隊は、敵の策を察して素早い出陣を果たしていたが、視線の先にある戦場から將軍の旗が消えるのを目撃していた。

「ああ、第一陣は辛うじてまだ戦線を保っているが、第二陣は指揮系統を失ったことで、軍として死んだも同然だ。ん？朱錐。我らの後方に別の騎馬隊、千ほどだが、追走しているな」

虎豹の言を現すように、第二陣では、なおも抗戦を続ける隊や退却を始める隊、或いは、そのどちらの判断もできずにただとどまっている隊など、各々がてんでばらばらな行動をとっていて、とても軍とはいえない様相を呈していた。

「ふむ。我らは、このまま指揮官を失った第二陣に喰らいついている敵部隊に突撃する。馮、後方の隊にはーと伝えてくれ」

「なるほど、すぐに伝令を送る」

虎豹は、馮がすぐさま行動に移ったのを確認すると虎の面の下でフフツと笑みを浮かべると佩いていた剣を高らかに掲げて櫓を飛ばした。

「この大戦、緒戦の勝敗は我らの働きに掛かっている。者ども己が肝に気合を入れよッ」

「「応ッ」」

虎豹の櫓に応えるように一丸となって挙げられた咆哮は、地平を揺るがすように響き渡った。

「……………」

「どうしたんだ、朱錐」

「いや、なんでもない」

朱錐は頼もし過ぎる副長に視線を送りながら、戦いの展望に目を向けていた。

その頃、介子坊隊の元には、自隊の側面を突く形で敵騎馬隊の接近の報が伝えられていた。

「むっ、あと一息という所で邪魔が入ったか……………。後のことは、輪虎隊に任せるとする。急ぎ我が隊は敵増援に備えて反転するッ」

第二陣の残党を蹴散らしながら進軍を続けていた介子坊であったが、敵増援の報に馬首を翻して、迎え撃つべく陣形の構築に移った。

「騎馬四千程で我が精銳部隊の相手をしようなど、片腹痛いッ 逆に、喰い破つて將の首を頂いてくれるわッ」

飛信隊が退却を開始して、まもなく、背から將軍の旗が消えて、蹂躪され始めた第二陣の姿に苦渋の表情をうかべているのは、隊長の信であった。

「將軍……………」

「信殿。あのまま我らが留まっていたとしても、結果は変わらなかったでしょう」

「楚水。そんなことは判つてるッ わかつてるけどよお……………」

大戦に高揚していた信の心持は、敗走の最中では整えようもなく、周りを見る余裕すら奪い去っていた。

「戦は始まったばかりです。今は一兵でも多く生き残ることを考えましょう。それに、あそこを御覧ください」

と楚水が指し示す方角には、味方騎馬隊が飛信隊と入れ違うように突撃する様子が見て取れた。

「あれは——」

「旗には、『朱』とあります。増援の軍でしょう。しかし、第三陣の後方に配置されていたはずの軍がここにいるということは、敵の伏兵が現れる前には、動き出していたとい

うことになります。ならば、相当に軍略に長けた者がいるのは間違いないでしょうね」
「軍、略か、朱錐のおっさん……………」

魏軍本陣の丘では、戦場の異変に一人狼狽える白亀西の姿があった。

「なッ、なんだ、あの軍は一体。廉頗將軍、介子坊殿の脚が完全に止められてしまつてお
りますぞ」

と言葉を発した白亀西であつたが、先程までは、すぐにあつた応答がないことに疑問
を覚えて隣に顔を向けたのだが。

「れ、廉、頗、將軍？」

「ハアあああああッ」

純粹な膂力で振りぬかれる棍棒は、行く手を遮るように展開されていた魏兵の悉くを
薙ぎ倒して軍を貫いていた。

「この機に敵將の首を獲るぞッ」

朱錐の檄に勢いを増す隊の勢いを止めにはいつたのは、他ならぬ、その敵將の一撃で
あつた。

「私の邪魔をしたのは、鬼面ッ 貴様であつたかあああッ」

と、己を護る魏兵をかき分けて最前線に踊り出た敵將は、勢いそのままに朱錐を打倒すべく武器を振るつた。

「ッ!?!」

戦場に両者の衝突を示すかのように硬い金属音が高らかと響き渡る。その衝撃に、たたらを踏むように後退した朱錐の視線の先には、鬼氣迫る表情を見せる介子坊の姿があつた。

「これは、介子坊殿。いつぞや以来か」

控えめな声量とは裏腹に、しかと介子坊の眼をまつすぐに睨みつける朱錐。

「鬼面。あの時を含め、もう随分と我らの邪魔をしてくれたな」

介子坊は、眼に映る鬼の面を被つた漢を討ち滅ぼすために、己の漲る力を愛刀に込める。

「戦場で会敵した以上は当然でしょう」

「ああ。ゆえに、ここでそなたを討ち滅ぼし、魏国の勝利に貢献させてもらうぞ 鬼面ッ」

「それはこちらも同じことだ 介子坊ッ」

互いが己が武をもつて敵を討ち滅ぼさんと第六軍軍長鬼面の朱錐と廉頗四天王が一人介子坊が、ここに、激突した。

両将が激突した裏側では、この中央の戦場にいるもう一人の四天王が躍動を始めていた。

「向こうは、ばちばちやり始めたみだいだ」

戦場に響く音、その一つ一つを噛みしめるたびに笑みを深める輪虎の姿が、そこにはあった。

「ふふッ 僕は僕の仕事だ」

輪虎は、騎乗しながらも両刀を自在に操り、敵兵を切り裂き、秦軍第一陣を預かる土門の本陣に迫っていく。

「無駄、むだ。その程度の陣形じゃ、君たちの言う六将時代を生き抜いた選りすぐりの猛者ばかりの輪虎隊を止められやしないよ」

だが、そんな勢いついていた輪虎隊の脚を緩めさせる者が現れる。

「借りは返すぞッ」

「つて、と。おや、また君か……」

横槍から一呼吸の間に数度の連撃を放ったのは、玉鳳隊隊長王賁であった。この奇襲に近い形での連撃であったにも関わらず、輪虎が受けた傷は、かすり傷と呼べる程度であった。

「その傷で、君も懲りないね」

やれやれと呆れたような仕草で言葉を発して挑発する輪虎に、王賁は「ぬかせッ」とカツとなったように槍を突き出してしまふ。

「そういう所が若いつていうか。経験の差、かな」

と、冷静に右の一刀で槍をさばいた輪虎は、王賁の命脈を断つべく左の一刀に力を込めた。のだが。

「油断、したなッ」

王賁の言葉に一瞬の思考を取られて、輪虎の反応が一步遅れる。

「ッ!？」

そして、視界右隅から飛び込む敵影が一つ。

「その首ツもらった」

戦場に似つかわしくないひらひらとした目立つ出で立ちの襲撃者が振りぬいた一刀は、輪虎の首を正確に捉えていた。

「ッ!!」

だが、続く金属音は、それを否定した。

「今のは……………、本当に危なかつたよ」

咄嗟に、輪虎は力を込めていた左の一刀を右から飛び入りした敵の攻撃との間に滑り

込ませていたのだ。

「あれを防ぐのかッ この、化け物め」

この奇襲は、王賁にとって輪虎を討つ完璧な機であったと自負できるものであった。

「化け物、とは、心外だなあ。ほら、ちゃんと怪我もしてるでしょ」

その言葉通りに、輪虎の額からは、受けた一刀がはずみで接触したことで、できた傷から朱い血が流れ出ていた。

「いやいや、あれでその傷だけで済むなんて、十分に、化け物でしょう」

と軽い口調で言葉を発しながら、どうにか動揺を隠しているのは、襲撃をした蒙恬である。

蒙恬の動きはこうであった。

蒙恬は、朱錐たち第六軍の動きから、敵の狙いを同じように察すると追従するように楽華隊を伴って駆けだした。当初は、朱錐たちに追従するように動いていたのだが、朱錐から伝令が来たことで、その動きを変更することになる。その内容は「我々は右から大きく廻って後方から敵将を狙う。貴君らは、左から廻り、敵第一陣の将を側面から狙え」と。

その意図を正確に理解した蒙恬は、進路を変えて輪虎の視界から消えるように動き始める。蒙恬のこの動きに、いち早く気づいたのは、隊を立て直すために周囲に気を配つ

ていた王賁であつた。そして、蒙恬の動きを最大限に活かして、輪虎を確実に葬る必殺の一撃となすために、自身が囷になることを決断したのであつた。

また、綿密な打ち合わせなどする術がなかつたにもかかわらずに、この王賁の囷としての動きに合わせて、最高の機を見極めての襲撃を為せたのは、偏に、蒙恬の才によるところが大きかつた。

「ふふつ。誉め言葉として受け取っておくよ」

「ああ。だからこそ、あんたには此処で退場してもらおう」

と不敵に笑う蒙恬に対して、輪虎は訝し気な顔をすると言葉を返した。

「君が僕を？ いいね、試してみるといい。まっ 無理だと思うけ、どー」

その時、輪虎は対峙する蒙恬の副官らしき将の視線が、己の後ろに向けられていることに違和感を覚えた。

そして、この一連の流れそのものが「僕を討つための策だったとしたら？」と胸の内でごぼした瞬間、輪虎の背筋に戦慄が走つた。

第60話

「元趙三大天とは、名ばかりなのか」

と言葉を発したのは、魏軍本営に姿を見せた優男であつた。その声に、後ろを振り返つた白亀西は、その姿を視認すると姿勢を正して、その者の名を呼んだ。

「れ、靈鳳様ツ」

優男こと靈鳳は頷いて見せると、総大将である白亀西に矢継ぎ早に指示を飛ばした。
「白亀西とやら、第二、第三陣をすぐに動かせ。敵もすぐに動いてくるぞ」

靈鳳とは、かつての戦乱を彩つた魏国が誇る大將軍、魏火龍七師の一人である。その深淵なる策謀を巡らす姿から大軍師靈鳳と恐れられていた漢であつた。

「え、あつ、は、はい。た、ただちに取り掛かります」

此度の山陽防衛戦の総大将は白亀西である。しかしながら、魏火龍とは、秦における六大將軍に匹敵する力を有する者たちに魏王が贈つた称号であり、白亀西との格の差は明確であつた。そのため、白亀西は後方に控える幕僚に、靈鳳の言葉を正確に伝えるために奔走することになる。

それに入れ替わるように、本営の丘から戦場を一瞥した靈鳳は、つぶやくように言葉

を發した。

「とはいえ、あの伏兵を読んだ、というのだから、侮れる相手ではないか」

また、その靈凰の後ろには、フウツフウツフウツと荒い息を吐き顔全面を仮面で隠す大男が付き従っていた。

「フツ なるほど。私は、もう古い人間だ。あの王騎は無名の將に敗れ、今、廉頗の策に對抗する者が敵にいる。私が囚われている間に、時代は、確実に次の世代へと移り変わっている、か」

ところ変わって、秦軍本營。

「むう、朱錐の救援によつて、どうにか戦線は保たれたか」

と顔をしかめ難しげな表情をして言葉を發したは秦軍総大将蒙？であった。

「はい。独断専行ではありますが、結果だけ見れば、我が軍の先陣は救われた形になります。ですが、栄備將軍を救うまでは至らず……」

という幕僚の発言に、蒙？は「栄備よ……」と呟き、しばし黙した。

その沈黙を破るように、新たな報を携えた伝者が姿をみせる。

「れ、廉頗が中央の戦場に現れましたッ」

との報は、蒙？に驚きの声を挙げさせた。

「廉頗がでたじゃとッ」

この蒙?の驚愕をよそに、さらなる詳報が伝えられた。

「敵左翼後方より、両軍が入り乱れる乱戦に姿を見せたとのことですよッ」

それに対して、普段ならざる決意をもっていた蒙?は即断即決すると大声を挙げて指しを出した。

「ここが勝負所、出し惜しみはなしじゃ。ここで、廉頗の首を獲るぞッ」

そして、舞台は激戦の最中へと。

「君が僕を? いいね、試してみるといい。まっ 無理だと思っけ、どーっ」

輪虎がふと「敵副官の視線の先にあるものが一連の流れの本命であったとしたら」と戦慄した一瞬の間は、致命的な隙となつて、輪虎に振り掛かるとしていた。

「もう遅い。俺じゃないよ。討つのは、ね」

蒙恬の言葉を示すように後方から迫っていた虎の爪牙は、輪虎の命脈を断つ――

「伏せえええいッ 輪虎おおッ」

「ッ!! ちい はあぁッ」

には、至らなかつた。

それは、一瞬の交錯であつた。

朱錐の伝令から始まつた一連の流れは、朱錐による介子坊への突撃から始まり、輪虎の裏を掻く蒙恬の動き、それを受けた王賁の機転、そして、そのすべてを囿とした輪虎を討ち取る必殺の策は、完全に魏軍の意識の外側であり、成就するはずであつた。

この、廉頗の介入さえなければ、である。

廉頗は、介子坊の奇襲の前に動きだした軍の姿を見逃してはおらず、それに、追隨するように動き出したもう一つの敵の隊を見た時、最悪となる凶を頭内に描き出していた。

そこから、廉頗の動きは早かつた。

廉頗は、中央の指揮が白亀西では難しいと即断すると、己の恥など持ち合わせてはいないかのように、後方待機をしていた靈鳳に伝令を走らせ、自身は常に付き従う百騎の精兵を連れると、すぐに出陣。全速力を持ってこの場へと馬を走らせていた。

当然、その動きを視界の隅に捉えていた虎豹であつたが、物理的な距離から廉頗の介入は不可能と判断、確実に輪虎を仕留めるために意識を標的に絞っていた。

結果的に、それが裏目となる。

廉頗は、間に合わぬと判断すると侍る兵から槍を受け取り、輪虎に当たるように、膂

力に任せて投擲したのだ。

廉頗の飛槍は正確に輪虎を捉えていた。それはつまり、虎豹が輪虎を討つために交錯すれば、虎豹に飛槍が当たれることを意味していた。

声と同時に飛来する槍は、仕留めるために意識を集中していた虎豹の動きを阻害するようにかすめ、輪虎は廉頗の声に従い身を馬と一体化するように伏せに入った。

飛槍は、確実に交錯する寸前の一瞬という間を稼ぎ、虎豹の奇襲を遅らせた。

しかしながら、それは、まさに一瞬という間であり、さしもの輪虎も無傷とはいかずに、深手を負うことになる。

虎豹は手応えから即座に仕留めそこなったことを理解して、馬首を翻して追撃に入ろうとしていたが、今度は廉頗当人が割って入り、それを赦さなかった。

廉頗は飛槍を投擲した勢いそのままに追撃に入ろうとしていた虎豹に向けて全力で矛を振るった。対して、虎豹はその一撃をまともに受けたことで、馬ごと吹き飛ばされる結果となった。飛ばされながらも馬を御すことで、踏ん張ると、敵意を持って廉頗に視線を向けて今に至る。

「ほう、あれ受け止めるか」

と廉頗は呟くと虎豹を睨みつけた。さらに、視線は虎豹から外さずに、輪虎に声を掛けた。

「無事か、輪虎よ」

「………いててて、無事です。とは言いがたい、かな」

廉頗の介入により、虎豹の一刀は輪虎を仕留めるには至らなかつたが、背中に深い傷を負わせていた。

「フン それだけしゃべれるのであれば、大した傷ではないわ」

とは廉頗の言であるが、実際の所、輪虎は重傷と言つて差しさわりなく、すぐに戦闘に復帰できる状態ではなかつた。

「……… もちろんです」

死に体とまでは言わないが、己の身を押し、矜持のみで構える輪虎の闘志に陰りはみられなかつた。

「しかし、まあ この儂を初日から引き出すとはもう」

と泰然とした物言いをしながらも、廉頗の眼は、最初の奇襲を画策した王賁、蒙恬ではなく虎豹を捉えていた。

「お主、何者じゃ。儂の槍を避け、気取られることなく輪虎の背を突き、さらには、儂の一撃をも受け止めたその手腕。とてもではないが、ただの一介の将とは思えぬ」

「ツフ 私が誰であるかなど、些細なことだ。者どもツ 廉頗と言えど、引き連れている兵は少数である。この機に廉頗を討ち一気にこの戦を終わらせるツ ゆくぞツ 廉頗

の首を――」

と高らかに劍を掲げ号令とともに振り下ろそうとした虎豹であったが、周囲の異変に気付くと、動きを止めた。

「又ハハハツ、その意気や良しツ　じゃが、儂をそう簡単に討ち取れるとは思わぬことだ」

廉頗の言葉を肯定するように、魏軍の後方より響くのは敵増援の報せであった。

「さあ判断せえツ　ここに留まれば、或いは、儂を討てるやも知れぬが、貴様らが全滅するのは避けられはせぬぞツ」

廉頗の言葉を肯定するように、魏軍は、魏火龍靈鳳の指示を受けた総大将白亀西が動かした魏軍第二、第三陣総勢一万六千が突撃を開始していた。対する秦軍も、近年、稀に早さで決断を下した蒙？の指示によって、第三陣八千に加えて中央軍一万が突撃を開始していた。

これにより、中央の戦場では、初日にして両軍合わせて六万に迫る兵が入り乱れる乱戦へと発展した。

第61話

戰場に蒙？、廉頗の両将が新たに軍を投入した余波は、壮絶な打ち合いとなった一騎討ちの場にも及んでいた。

「死ねえツ 鬼面ツツ」

ただ響き渡るのは、両者の声と互いの得物が幾度となく衝突する重い金属音。

「介子坊ツ」

朱錐、介子坊の両名が膂力の限りに打ちあう得物は、衝突の反動で逸れた得物に触れるだけで余人を死に至らしめるほどに激しいものであり、兵たちは自然と二人と距離を空けて、円の形をとるのであった。

「ハあああツツ」

そうして、敵兵を軽く吹き飛ばすほどの膂力で振るわれる朱錐の一棍一打にも、対峙している介子坊は動じることなく、その勢いを受け流し、反撃の武器を振るう。

「ぬウツ」

だが、朱錐もまた同じように受け止めては、反撃の鉄棍を振るった。

「グツ ぬう流石に一息とはいかぬか。鬼面めツ」

両者の實力は拮抗しており、決着を見るには時間が足りはしなかった。

そして、両者の得物が幾度目かの衝撃音を打ち鳴らしたその時、周囲の異変に気づいた二人は得物の動きを止めることになった。

「ぬッ なぜ今。殿ッ」

と介子坊は後方より味方増援が進軍する音に廉頗の意図を読みかねて手を止め、対して、朱錐は

「……………」

と、無言に徹しながらも一向に自軍側から挙がらない歓声に、奇襲の失敗を悟っていた。

こうして、動きを止めた両者であったが、さきに、この一騎討に見切りをつけて、声を挙げたのは介子坊であった。

「こうなつてしまつては、もはや、一騎討ちに拘る理由はない。魏兵よッ、今こそ、総力を用いて秦の犬どもを殲滅しろッ」

「そうなるか。全軍で後退するぞッ」

朱錐は現状を鑑みて素早く後退の指示を出すと、側近の名を呼び、さらなる指示をだした。

「馮ッ いまだ將軍を失つて動きの定まらない兵を纏めろッ」

「はいよッ　それで、副長はどうする」

「虎豹に特別な指示は必要ないッ　今は我らがすべきことを為す」

この動きに、介子坊は激しい追撃を仕掛けていくことになる。対して、朱錐は全体の後退を促しながらの難しい後退戦を強いられることになった。

「彼ら歩兵隊を見捨てては、この戦には勝てないッ　隊を分けるぞ。我らに釣られて間延びした敵の側面を叩けッ」

朱錐は、ただ後退するのではなく騎馬隊を使つての反撃を仕掛けることで、敵の攻撃を緩めさせて時間を稼ぎ、懸命な指揮を執つていた。しかしながら、將軍を失つて纏まりに欠けた兵を引き連れての後退戦は、まさに苦戦と称して偽りない状況であつた。

この秦軍先陣部隊が崩壊するのも時間の問題であるかに見えた後退戦は、まもなく終わりを告げることになる。というのも、秦軍総大将である蒙？が、近年、稀に見る速さで中央本軍を動かす決断を下したからである。

「フンッ　逃げ腰蒙？にしては、良い判断をしてきおつたな」

この言葉が示すように、廉頗は輪虎たちの戦いに介入した後、魏軍増援とともに敵先陣を粉碎する腹積りであつたが、蒙？本軍の素早い反応に、追撃の手を止めることになつた。

「蒙?の分際で、本気で、この儂を討ち取るつもりであつたか」

と言葉を残した廉頗は、蒙?がいる本陣の丘を睨みつけると馬首を翻し、増援の軍の後方へと動きを変えた。

この日、両軍、合わせて六万という兵たちがぶつかることになったが、夕暮れまでに決着が付くことはなく初日を終えることになるのであつた。

その夜、秦軍野営地。

「チクシヨウツつ!!」

飛信隊長である信は、内からこみ上げる感情を溢れ出させていた。

「な、なあ。落ち着けて、信」

と声を掛けたのは信と繋がりが深い尾平であつた。

「うるせえッ 俺たちは負けておめおめと逃げ帰ってきたんだぞッ」

「怒鳴んなつて。んなこと言つたつてよお、信。將軍が討たれちまつたら、俺達には、どうしようもねえだろうが」

尾平の言葉を肯定するように続けて声を掛けたのは、飛信隊副長を務める洑であつた。

「そうですよ。信殿。我々の戦いが悪かったわけではありません。むしろ、隊という規模で言えば十分な働きでした。千に——」

「そうじゃねえよ 瀏さんツ 俺を、俺達を助けるために將軍は犠牲になったんだぞツ たかだか千人将になったばかりの俺みたいな餓鬼を助けるために……………」

「信ど、の」

此度の敗走は、信に今まで感じたことのない様々な感情を溢れ出せていた。

「……………なんで俺なんかのために。栄備、將軍」

と信は内から溢れでる負の感情を滲ませるように呟くと顔を下に向けた。その姿に、生き残ったことを喜びあっていた飛信隊の面々の顔も自然と下を向いていく、その時だ。

「頭を下げるなツ 前を向けツ 飛信隊。そして、隊長の信ツ」

突如として木霊した大喝によって、飛信隊の隊員たちはビクツと反応を示した。

「あなたは何を見ていたツ 何を託されたツ あなた方は、將軍の雄姿を無駄にするつもりですかツ」

そういう言葉を発したのは、敢えて、ここまで腕を胸の間で組んで黙っていた副長楚水であつた。

「そ、楚水」

「敗戦の将として下を向きたい気持ちも理解できません。ですが、信殿。あなたは皆を導く隊長なのです。ならば、命がある限り、戦い、戦って、將軍の言葉に報いるべきではないのですか」

信は、楚水の言葉に己の在り方を顧みると反省の言葉を口にした。

「ッ、……………愚イ。確かに、その通りだ。楚水」

また、信は歳の若さなど関係なく一人の将として真摯に向き合おうとする楚水の姿勢に、自身の不甲斐なさを痛感していた。

そんな、信に向けて、楚水も己の胸の内を言葉にして表した。

「いえ、偉そうなことを申しましたが、私も、郭備様ならどうしていたか、と自問するこ
としかできない愚か者の一人です」

それは、近利関で郭備を一人にしてしまったことへの慚愧の念とその郭備が目を掛けていた飛信隊を僅かでも良い方向に導かなければとの想いからの言葉であった。そんな、楚水が抱える想いに応えるように、信は声を挙げた。

「楚水。そんなことはねえよ。あんたの言葉、胸にグツと来たぜ。なあ 皆なッ」

信の言葉に、飛信隊の面々は下げていた顔を挙げて、声を揃えた。

「「応ッッ」」

「……………皆さん」

「ありがとよ。楚水。おかげで見失わずに済んだ。俺はこんなところで立ち止まつてるわけにはいかねえんだ。天下の大將軍になるついでつかい夢があるからよ」

「天下の大將軍、ですか。それは、大きな夢ですね」

「応よ、子どもの頃に友と約束したからよ。だから、楚水。できれば、あんたみたいな頼りになる漢に側で支えてもらいてえ」

「……………そう言つて頂けることは、うれしく思います。ですが——」

「ああ、分かつてる。無理にとは言わねえ。ただ、そう思つたつてだけの話だ。それに」
と言葉を続けようとした信のもとに、一つの報が届いた。

「羌?の目が覚めたぞッ」

「羌?がッ わかつた、すぐに行く。……………あんたにも支えたい人がいるのは判つてる。だから、この戦だけで構わねえ。俺は、この戦いで最低でも千人将にならなきゃならねえからよ。解散なんてさせるかつてんだ」

「ええ。私も副長の一人として、貴方を支えさせて頂きます」

所変わつて、朱錐たち第六軍の野営地の天幕内では、虎豹が謝罪の言葉を口にした。
「すまない。これは、輪虎を討ち損ねた私の失態だ」

と頭を下げた虎豹に朱錐は労いの言葉を掛けた。

「いえ、初日に廉頗の右腕とも呼べる輪虎に深手を負わせたことは、十分な戦果と言える

だろう」

また、その言葉を肯定するように、青騎も口を開いた。

「ええ、その通りですよ。虎豹。こちらも第二陣の将栄備とともに多くの兵を失うことにはなりましたが、結果としては、五分、と言ったところでしようねえ。それに、早々に廉頗さんを引つ張り出せたのは、殊の外、大きい」

と言葉を発すると青騎は視線を虎豹に向けた。

「はい。此度の戦いにおいて、廉頗がどこに姿を現すかは、一つの焦点でした。その廉頗からすれば、自身を引きずり出した我らを置いて、この中央の戦場から離れるという選択は難しいでしょう」

「ソッフ ええ、まさに。この広い流尹平野での戦い。その両翼のどこかに、忽然と姿を現わせられては、対処のしようがありませんからねえ。そういう意味では、輪虎に負わせた深手は、決定的な仕事であったと言えます。ただ、気に掛かることがない、というわけではありません」

「急遽、派遣された敵増援のことですね」

「ええ。斥候の話では、どうやら、死んだはずの人間が現れたようですからねえ まったく、困ったものです」

との言葉とは裏腹に、青騎はどこか愉し気な空気を纏っていた。

「魏火龍、靈凰」

と呟いた虎豹に付け加えるように朱錐も言葉を発した。

「靈凰がいる、ということとは、狂戦士乱美迫もいる可能性がありますね」

青騎や虎豹は將軍として、朱錐は一人の將として、魏火龍とは、幾重の戦場で対峙した敵であり、決着を付けられなかつた強者であつた。

「やっかいな奴らが、地の底から舞い戻つたものだな」

魏山陽攻略 開戦二日目

第62話

流尹平野の戦い、二日目の朝。

秦軍総大将蒙?は、昨夜、軍議の最中に両副将からのあつた提案により、土門が指揮する第一陣に、榮備を失つた第二陣、さらに、第三陣を合流させることを決めた。そして、同じく、両将からの獻策を採用する形で抛出された五千ずつを一人の将に預けることを決断した。

「朱錐。守りを得手とする、そなたに、亡き榮備に変わり、中央右翼の指揮を任せたい」
これにより、両副将から抛出された総勢一万に及ぶ兵が朱錐たち第六軍の指揮下に加わることになる。

「謹んで拜命致します」

そして、蒙?は、中央本軍全兵の前に姿を見せると語りかけた。

「皆の者ツ 昨日の働き、真に見事であつた」

その蒙?の声は、穏やかでありながらも力強さを感じさせて、よく透る声であつた。

「じゃが、戦いは、まだまだこれからである。儂には、頼りになる副将王翦、桓騎の両将がおる。よつて、本日、儂がそなたら全兵に伝える戦術は一つ」

これらの言葉に、本日の行動指針が話されると察した全兵士が息を飲んだ。

「それは、守備じゃ」

昨夜、軍議中にあつた献策の内容は、兵の抛出や軍編成だけではなかつた。

「儂の両腕とも呼べる両将の力は本物じゃ。必ずや、対峙する敵を打ち破つて敵本陣を突くであろう。よつて、儂は、敢えて、護りを固めて機が熟すのを待つことにする。皆よ。戦とは、なにも、自らが攻めこむだけが戦いではない。軍略とは、そういうものじゃ」

両将は、昨日の中央本軍の戦いに廉頗が顔を出したことで、単純な力押しのみでは、天秤がどちらに傾くかを予測することは難しいという結論に達していた。

「儂が王翦、桓騎両將軍を信じるように、皆も両將軍を信じよ。仮に、もし知りもしない二人を信じるのができぬというなら、この儂の言葉を信じればよい」

そのため、中央本軍は守備に徹することで刻を稼ぎ、両翼に配置されている両將軍が対峙する敵を打ち破るといふ蒙？軍が誇る必勝策を上申していた。

「よいな。秦国を支える我が子らよ。儂とともに、戦おうぞ」

決して、激しく感情を掻き立てるような檄ではなかつた。だが、蒙？から発せられた

朗々として偽りない言葉は、兵たちの心の芯を確かに打つていた。

「うおおおッ」

その証拠に、一人が胸の高まりをそのまま声に乗せて挙げれば、それは、波紋のように広がり、大きな歓声へと姿を変えていった。

「おっしやッ　いくぞ、皆ッ」　「「応ッ」」

飛信隊長長の信も胸を打たれた一人であり、昨夜のことを吹っ切るかのように声を挙げると、配置場所へと向かうのであった。

時間は遡り、両軍が激突した一日目の夜。魏軍。

魏軍中央本陣の天幕内で、一人杯を傾けていた漢は、入ってきた大柄な漢の姿を視認すると声を掛けた。

「どうじゃ」

その声の主は、魏軍大將軍であり、元趙三大天の廉頗であった。

「ハッ　殿。命に関わるほどではありませんが、万全とは言い難く、それでも、明日も戦場に出ると」

と、言葉を返したのは、廉頗四天王筆頭である介子坊であった。

「フッ　左様か。輪虎が出陣するというのなら、好きにさせればよい。あやつは、できぬ

ことを口にはせぬ。しかし、じゃ。策を読まれたばかりか、輪虎に傷まで負わせることになるのはお。儂は、些か敵を侮り過ぎておったか」

との廉頗の反省の弁に対して、介子坊は、別の考えを示すべく口を開いた。

「殿。その様な事はないと、私は愚考します」

廉頗は、その言葉に興味を示すと、杯を机の上に置いて先を促した。

「ほう。なんじゃ、子坊。申してみよ」

「ハッ 殿の策に抜かりはなく、確かに、成っております。その証左に、敵は、私の出現に酷く狼狽しております。途中、生意気な小僧の隊に横腹を突かれたこと、また、その隊にいた面妖な者との交戦で、思わぬ足止めを食らうことになりましたが、敵將軍の首までは、容易であつたと断言できます。と、するならば、殿の策が、ではなく、殿の策ごと喰らいつくそうとする新たな敵が現れたと考えるべきではないかと」

つまり介子坊は、慢心などの己の内からくるものによつての結果ではなく、廉頗という個を脅かす外敵が出現したのではないか、というものであつた。

「ふむ。汝（ウヌ）の言、一考に値する。儂は、王騎の言葉にあつた王翦、桓騎という名に、少し気を取られ過ぎておつたのかもしれない」

と重く受け止めるような廉頗の言葉に、介子坊は「あくまでも、愚考ですが」と小さく口にした。すると、廉頗はそれに反応して、さらに、言葉を続けた。

「子坊、何を言うか。現に、王騎は李牧という当時ほぼ無名な将の前に敗北を喫しておるではないか。王騎にして、儂に起きえないなどと驕るほど、耄碌しておらんわ」

介子坊はその言葉を受けて感服したように、流石は殿です。と口にする頭を垂れた。

「フン 世辞などいらんわ。まあよい。それで、久方ぶりに対峙した鬼面はどうであつた」

「正直に申しまして、手間、ですな。打ち倒すことは難しく、趙として対峙していた頃よりも、力は増しているかと思われまます」

「フツ お主にそこまで言わせるとは、あの奇怪な面を付けた小僧が随分と成長しよつたものじゃな」

「……………私としましては、奴の武器をへし折つたあの時、始末していればよろしかったように感じておりますが、なぜ、お見逃しになられたのですか」

「昔の話じゃ、大したことではない。ただ、儂を前に一步も引かぬ気概にな。許せ」
それは、英傑特有の強者となる者を欲する悪癖の一つと言えた。

「いえ、私の出すぎた発言こそ、お許しください」

「よい。実際、長い戦乱の中で、ここまで生き残つてくる者など稀とはいえ、儂の咎じゃ。しかし、初日にして、輪虎が傷を負い、子坊の前には、鬼面の奴が現れ、さらには、儂

の一撃をも受け止める虎豹なる者、か。驚くことばかりじゃな」

「それでは、殿。如何いたしますか。私に号令を下されば、必ずや前線を突破してみせませうが——」

との言葉に、廉頗は腕を胸の前で組んで姿勢を正すと言葉を発した。

「それも悪くはないが、まずは、両翼に伝令じや。それと、靈鳳にも使いをだせ」
「御意に」

こうして、魏軍の夜は更けていった。

明けて、二日目の朝。

廉頗は、中央の左右軍となる左軍介子坊、右軍輪虎に対して、両翼と中央本軍から拠出させた兵を補充して、それぞれに二万の兵を持たせていた。

「さて、そろそろ始めようかの。介子坊ッ」

「ハッ 殿。いつでも行けます」

「うむ。では、輪虎ッ」

「僕も問題ありません」

「うむ。戦はこれからじゃ。汝は、くれぐれも無理はするでないぞ」

輪虎は廉頗に向けて拜手をすると答えた。

「もちろんです。殿。ご心配になられずとも、僕には、できないことを口にする趣味はあ

りませんよ」

廉頗は、その鋭い観察眼で輪虎の傷の具合を察していたが、この漢が判断を誤るはずはない、と止めはしなかった。

「ふん。そうであつたな」

そして、廉頗は秦軍が布陣を始めた戦場を睨みつけると続けざまに言葉を発した。

「とはいえ、今日に限つて言えば、中央はそう難しい戦いにはならぬ。奴らの狙いは、六将もかくやの力を持つという両翼からの戦線押し上げじや。じやが、その狙いに乗つてやるほど、儂は、甘くはないぞ。蒙？」

介子坊は、高まつていく戦意と号令を間近にして、声を掛けた。

「殿、武運を」

そして、舞台は、秦軍朱錐率いる第六軍軍中に移る。

「ねえ、昨日はなんで私を此処に配置するように進言したの。私が姉さんたちと一緒に行つてたら、輪虎つてやつ、確実に討てたんじやない」

と、問いかけるように声を挙げたのは、玄象であつた。

「おや、それは結果ですよ。あの場面、追隨する部隊があつたからこそその奇策と言えます。ですので、本来であるならば、伏兵の部隊を止めるのが精々、敵將を討ちに行つた

のはおまけです」

玄象の言葉に対して、論すように応じたのは、青騎であった。

「それはわからなくはないけどさあ、なんか、置いてけぼりにされた気分」

「ソフ あなたの实力は理解してはいますが……」

と青騎は言葉を止めると玄象に視線を向けた。

「なに？」

「あなた、本調子ではないのでしょうか」

「ッ!？」

咄嗟にこちらを仰ぎみた玄象の姿に青騎は龍面の奥で笑みを浮かべて言葉を発した。

「ココココ その様子では、事実を肯定しているようなもの」

「ッ、どうして」

「どうして、もなにも、あなたなら想像がつくではありませんか」

その言葉に、即座に浮かんだのは妹の名であった。

「……………? やつだ、余計なことを」

と、苦虫を潰したような表情を見せてた玄象の姿に、青騎は氣遣う言葉とともに別の理由もあることを告げた。

「ソフ あなたのことを心配してのことでしょう。それに——」

青騎の視線の先には、玄象に付けられた新たな小隊の姿があった。

「本調子ではないあなたでは、彼らが窮地に追いやられた際、不覚をとる可能性がありません」

小隊である彼らとは、隊長、副隊長の両名が脱落したことで浮いた三百人隊の隊員たちであった。

「…………それは、そう、かも」

彼らは、玄象が襲撃者を撃退した功として、朱錐が蒙?に申し入れた結果である。ただ、その功績によって、というわけではなかった。

では、なぜ実現したのか。

それは、蒙?の視点でみると理解がしやすい。

これから始まる戦いとは、蒙?にとつては、生涯を賭けるに値する大戦である。その戦いを前にして、増援である朱錐たち第六軍の要請を聞き入れることで恩を売り、それによる士気の上への期待、さらには、元が同じ軍ということで受け入れやすく、急造でも戦力として期待できる点などを熟慮した結果であった。

「言わずもがな、彼らは仇敵を前にしても冷静ではいられないでしょうねえ」

「ああ、わかった。納得した。もういいよ」

確かに、と理解はできるものの、感情までは御しきれずに、玄象は少し不貞腐れたよ

うにして、その場をあとにした。

「おやおや、困ったものですねえ」

ものなく、流尹平野二日目の戦いが始まろうとしていた。

第63話

流尹平野の戦い、二日目。

秦、魏の両軍ともに、両翼から兵力を拠出させていた。

秦軍中央左翼の土門兵一万八千、同じく、中央右翼の将朱錐兵一万五千。合計三万三千。

魏軍中央右翼の輪虎兵一万五千、同じく、中央左翼の将介子坊兵二万二千。合計三万七千。

兵力差にして、四千。

これはまさに、廉頗の策、伏兵介子坊軍の戦果による死傷者数の差がそのまま表れた形となっていた。

そして、二日目となる中央軍の戦いは、初日の両軍合わせて六万にもおよぶ乱戦とは打って変わって、秦は守、魏は功と判断は分かれたものの、どちらも特出した動きを見せない単純な戦力の削り合いへと姿を変えていた。

「ふむ。いやに堅い。守に長けるといふ話は真のようだ。とはいえ、対峙する介子坊とやらも、突破する気はなさそうではあるがな」

その者は、秦左翼から中央の戦いに送り込まれた五千の内の一人であり、千人を預かる千人将の一人であった。

「王翦様の予測が外れたこと自体も珍しいことではあるが、なにゆえに、私を遣わせたのか、見当もつかん」

その者が独り言ちるように、両軍どちらも大きな動きを見せないこの戦いは、それゆえに、単純な勝敗が付くようなものではないはずであった。だが。

「……………おかしい。互いの損耗の度合いは、先程までは、ほぼ五分だったはずだ。わずかにだが、差が開き始めている」

その者の言葉が示すように、五分五分であった戦いは、誤差程度の差から徐々に敵側が劣勢となっていた。

「第二隊と第四を前にだせ、第五、第七隊は、前にでた二隊の側面の護りだ。第三は中央に突撃、第六は機を見て右からいくぞ」

徐々に押し始める前線には、この場を預かるであろう将が指揮を執る姿あり、その後方には、外衣を纏い躰を覆い隠した龍面の者の姿があつた。

「この軍は、一体。軍長の朱錐にして鬼の面で顔を覆い隠し、副長は虎で、先ほどの龍。こうして、見渡してみれば、ほかに、チラホラと面を被った兵も見受けられる。異様ではあるが、王翦様をして、面で表情を隠されていることを考えると……………、いやこの、

異様さ、こそが、この軍の特色なのかもしれん」

ふと湧いたこの疑問は、己が主君の在りようを思い浮かべれば、それもまた然りであろうか、といくつもの戦術を巧みに操る高い理解力が仕事をしたことで、霧散してくのであった。

「よし。中央の攻勢で右が揺らいだぞ。今だッ第六隊は突撃。端から潰していけッ」

それは、およそ戦術というものを理解できると自負する者ならば、誰もが舌を巻くほどに、機制を制する者特有の鋭さがあつた。

「あの将には、戦いの先が視えているとでもいうのか……」

観察する者を驚嘆させた将の名は、濯。

「おお………ッなんてこつた。俺は戦術の天才だったのか」

と、感嘆の声を漏らし、さらには、己に酔いしれているかのような言葉を吐いた濯に声を掛けたのは、龍面の者であった。

「あなた。お馬鹿なことを言っている暇はありませんよ。第二、第四隊の側面を護らせていた第五隊を揺らいだ右に投入です。同じく、第七隊は左から右に救援に向かおうとする敵部隊の横腹を突かせなさい」

「御意。第五隊は——」

濯が全体の号令を発している後方では、静かに真情を吐露する青騎の姿であった。

「この私が、馬陽では遅れを取りましたからねえ。やはり、戦いの揺らぎを間近に目にすることができ、この距離は、鎧を落とすのに丁度良い具合です」

そして、青騎は愉しげに笑うと言葉を発した。

「ソフフ　愉しませてもらいますよ、介子坊さん」

一方、対峙する魏軍中央左翼。

「むう、……強。強い。私が前線に出られれば、状況を一変させることは可能であろうが、それを差し引いたとしても、動きを誘導されているかのように打つ手、打つ手の先を行かれています」

中央左翼後方に位置する本陣にて、騎乗したまま腕を組んで唸っているのは、中央左翼軍の将介子坊であった。

「如何いたしますか、介子坊様」

それに応えたのは、介子坊と同じように、前頭部を剃り上げ、後頭部の髪を伸ばして三つ編みとする辮髪（ベンパツ）の側近であった。

「うむ。殿より、私が前線に出ることを禁じられている。ここは、現状維持だ。輪虎の状況は」

「ハッ 右翼側は一時的に押し込まれていた模様ですが、押し返すことに成功したようです」

「うむ。あの怪我の具合だ。若干の不安がなかったわけではない。輪虎はよくやってるようだな」

と胸を撫でおろした介子坊は、さらに言葉を続けた。

「……………殿は、輪虎が深手を負ったことを重く受け止められていた。私に動くな。と申されたのも、より慎重になられた結果であろうな。そして、それが策にも生きてくる。殿の深淵なる智謀に火龍の息吹が加われれば、秦軍を滅する力となるはずだ」

同じ刻、魏軍中央本陣。

「あの、靈凰様。廉頗將軍はどちらにいかれたのでしょうか」

「さあな。私に、好きなようにせよ。とだけ残して、そのまま駆けていったからな」

「で、では、靈凰様がこちらの、中央の指揮を執られるのですね」

「勘違いしているようだが、私は承諾などしていません」

「……………、そ、それでは、どなたが指揮を」

「白亀西。お前がいるだろう」

白亀西はその言葉の意味を瞬時に理解できずにいたが、脳内に情報が染み渡ると慌て

て応じた。

「えッ、……………あ、ぎよ、御意にッ この白亀西にお任せ下されッ」

そこには、喜色満面に応じる白亀西の姿があった。

この白亀西の在りようは、打てば響くように応じる弟子を持つ身として、靈凰に一抹の不安を覚えさせた。だが、そこまで世話をしやる義理はなく、ましてや、魏王からは「此度の軍に帯同せよ」程度の命令しか受けていないこともあって、放置してもなら問題ない、と判断していた。だが、俯瞰していた中央の戦場の潮目が敵軍の戦術的な差によって変化していく姿を目の当たりにすると、態度を改めるように声を発した。

「フッ」とは言え、お前にすべてを任せる。というのは、少し酷というもの。僅かばかり、私の知恵を貸そう」

「わ、私のような者に靈凰様が直々にッ あッ有難き、幸せッ」

「気負い過ぎだ。なにも特別なことを授けるといふわけではない。さて、こうなることを奴は予想していたというのか。……………まったくもって不本意ではあるが、私も、戦場に出ねばならんようだ」

こうして、靈凰は、白亀西にわずかばかりの入れ知恵を行々と、中央の戦場へと出陣の準備に入ることになる。

そして、戦況を脳裏に浮かべながら、この戦いの絵図をひいたであろう魏、秦の両将

の思惑を看破するように言葉を漏らした。

「どちらも兵力に偏りをもたせて誘いに出る。とは、な」

魏は、輪虎が深手を負った事実を利用して、敢えて、兵力を減らすことで、弱っている様を強調。それに対して、秦は朱錐側を少なくすることで、兵数の少ないこちら側を攻めてこいと誘うような采配であった。

「両者の思惑の起点は同じだが、意味するところは全くの逆。フフツ 秦の白老蒙？と言えば聞こえはいいが、凡庸な漢であったはずだ。となれば、この構図を描いた者が別にいるということになる。さて、どこの誰で——」

と、その時。靈鳳は、ふと、自然と笑みを浮かべていることに自身に気付くと「ふむ」と声を漏らした。そして、自戒するように言葉を吐いた。

「戦場の空気に、少しばかり高揚していたようだ。この私にして、らしくはないな」

そして、瞑目すること数瞬。僅かに浮つていた気持ちを見事に落ち着かせると、一人の戦士の名を静かに呼んだ。

「乱美迫」

乱美迫とは、大軍師靈鳳の強力な鍼となる巨軀の戦士のことである。

「ふう×ウウツ!!」

靈鳳は、仮面の下から血走らせた目を覗かせる狂戦士の応じの声を聴き受けると、戦

場へと馬首を向けるのであった。

第64話

新たな戦いの揺らぎが中央の戦場で起ころうとしている頃、秦軍右翼の戦いも、大きく動き出そうとしていた。

「……こんなもんだろ」

そこには、赤く黒い汚れが染み出した大きな袋がいくつも並べられていた。

「ケケツ 軍略家だか、なんだか知らねえが俺達にやられつばなしのただのジジイじゃねえか」

赤黒い染みの入った大きな袋は、停めてある荷馬車の荷台に一つ、また一つと乗せられては、一つの目的に向けて発進していく。

「……………」

走り去っていく荷車を遠目に、ただ静かに木々が生い茂る山々を見据える漢に声がかかる。

「山なんか見つめて、どうしたんですかい、お頭あ」

手下の男が漢の視線の先に顔を向けても視界に映るのは、空と山と生い茂る木々のみであった。

「フツ なんもねえよ。いくぞ」

所変わつて、魏軍左翼。

「ま、またです。こ、こんどはめ、眼、がお、送られてきております」

と、青白くした表情そのままに、おぞましき敵の所業を報告しているのは、魏左翼軍幕僚の一人であった。また、そこには、その報告を眉一動かさずに受け取り、黙々と戦略図に印をつけている老将の姿があった。

「フンツ 何じゃお主らはッ まだ一日やそこらの話じゃ。お主らとききたら翩られた躰の一部が送られた程度で青臭い童のように動揺をしようてからに。儂らは戦をしておるのじゃ。この程度のことは、常、戦場の些事と捉えぬかッ」

玄峰の一喝に静まりかえる魏左翼本陣。

「も、も申し訳ありません」

参謀の謝罪の言葉だけが響いた。

殊更、戦乱の世で名を馳せた玄峰にしてみれば、死体を弄ぶ敵の所業は、程度こそは目に余るほどではあるとはいえ、似た行為が行われた事例など、いくつでも思い浮かべられるものであった。

「で、ですが、このような行為を続けられては、とても………」

しかしながら、それは、戦場を盤として捉えて策を弄する玄峰の感覚であり、一般兵や多少の策を用いる程度の経験の浅い者たちにとっては、脅威と映って差しさわりはなかった。

「ひよつこどもが狼狽えおつて、儂の足を引っ張るでないぞ」

本来、敵の死体を蹴るといふ行為は、為された側に怒りを点す場合が多い。それは、魏軍にしても同じであり、最初こそは怒りに満ちて、打倒秦国と士気の高まりを齎していた。しかし、蹴られた部位が間を置かずに次から次へと、休む間もなく送り届いてくる様は、おおよそ、常人としての感覚を持ち合す者たちにとっては、奇異であり、それが、忌避へと変わるまで、さほどの時間を擁しなかった。

沈黙という名の帳を下ろす本陣の様相は、秦右翼の将桓騎の策が着実に魏軍の士気を削ぎはじめている証左でもあった。

だが、魏左翼本陣の沈黙を破るように本陣後方から現れる集団がいた。

「玄峰よ」

廉頗である。

「……………なんじゃお主、こちら側に来ておつたのか」

それは、当初の右翼を攻めあがるという計画に支障がでたのかという確認の言葉でもあった。

「少しばかりしくじつての。おかげで、この戦の絵図を一度すべて破棄する羽目になったわ」

その言葉に、玄峰はため息一つを吐き出すと苦言を呈するように言葉を発した。

「主は、せっかちでいかん。初日にしてもそうじゃ。策には、十分に時間を掛けよと教えてたであろうが。……まったく、蘭相如なんぞに毒されおつて」

蘭相如とは、刎頸の契りを交わした廉頗の友であり、軍略に長ける天才であつた。けれど、二人の在り方には大きな違いあつた。廉頗が戦いの前に緻密な策謀を巡らすことで戦場を操るのに対して、蘭相如は、その戦場の在り方を肌で感じとることで、まったく新たな策謀を戦地で巡らせることができる天才であつた。

「又ハハ　まあそういうな、玄峰。こうして、儂に説教を垂れるのは、もはや、又シだけで寂しい限りであるとはいえ、の」

その言葉を発した廉頗の表情に特別な変化があつたわけではない。

「……………戦場に余計なものを持ち込む出ないわ。この未熟者が」

だが、長い付き合いである玄峰には、内心を推し量ることは容易であつた。

「又ハハハッ！　この儂がまだまだ未熟者か」

玄峰の言葉が琴線に触れたのか、言葉の後にも愉快に笑い声を挙げる廉頗の姿がそこにはあつた。

「ハア、まったく、何を笑うておるか。まあよい。そこが、主の良い所じゃろうて」
いまだに、声を挙げて豪快に笑う廉頗の姿は、沈黙の帳に遮られた魏軍左翼本陣に穏やかな風を送り込んでいた。

そうして、一頻り挙げていた笑い声を収めると、姿勢を正して本題に入った。

「それで、こちらの首尾はどうじゃ」

「桓騎、か。儂の撒いた餌に、馬鹿の一つ覚えのように襲撃を仕掛けてきよつてな。おかげで、ネズミどもの巢の特定は簡単じゃったわい」

と、玄峰は戦略図のとある一点を指さすと「ここじゃ」と静かに告げた。

「うまく隠したようじゃが、これを見る限りでは、儂も、そう読む。しかし、随分と奥に陣を張ったものじゃのう」

廉頗の言葉通り、示しだされた桓騎本陣の位置は、こちらが想定していた場所、それよりもさらに奥にあった。これは、魏左翼軍が桓騎本陣に攻め込め込んでしまうと他の戦場への介入が難しいギリギリの距離であると言えた。

「こちらの索敵を躲し、最悪、単体での戦いに落とし込む狙いもあったのであろうが、自ら居場所をさらしてくるような阿呆じゃ。気に掛けるほどではなからうて」

この玄峰の言葉の中に、ある種の兆し、巡らされた策の匂いとも呼べるものを敏感に感じ取った廉頗は「ふむ」と声を漏らすと、言葉を続けた。

「で、あれば良いが。……玄峰よ。襲撃を仕掛けるのにあたって、儂から二つほど注文がある」

その内容を告げたあと、廉頗と玄峰は、しばしの間、無言のまま視線で会話を交わすように睨み合っていたが、玄峰は先に視線をはずすと、言葉を紡いだ。

「ようかろう」

その頃、魏軍本陣から出陣した靈鳳の姿は、中央の戦場、介子坊本陣にあつた。

介子坊は、靈鳳の姿を認めると恭しく拱手をして出迎えるて言葉を発した。

「これは、靈鳳殿。我が本陣に何用ですか」

靈鳳は、介子坊の用意されていたような言葉に、軽く鼻を鳴らすと応じるように言葉を返した

「ツフ 白々しいものだ。用件は言わずとも理解できているのであろう」

介子坊は、暗にすべて承知している。という靈鳳の言に、感服したように言葉を発した。

「なるほど、流石ですな。確かに、殿より承っております。魏火龍七師が一人、大軍師靈鳳殿」

靈鳳は、仰々しい名称をだしてきた介子坊の意図を読み取り、興味はない。と断じた。

「氣遣いは無用だ。私は長い間、ただ囚われていただけのつまらない漢の一人に過ぎない」

靈凰が吐く自虐の言葉とは裏腹に、漂わせはじめた気配は一介の将にあらず。

「ご謙遜を」

介子坊は、廉頗から密かに『ヌシからみて、靈凰が使い物にならぬ』と判断したならば、従う必要はない。との言を受けていた。その介子坊からみて、靈凰の『持つ者特有のソレ』に一切の虚飾は感じ取れなかった。

「ならば、これより、前線の指揮は私が預かるが、問題はないな？」

「ご随意のままに。右翼にいる輪虎も同じ命を受けておりますゆえ、存分に」

「廉頗か。随分と用意の良いことだ。まあいい。言葉通り、好きにさせてもらおう」

靈凰は、介子坊の受け答えに満足すると己の鉞である乱美迫の名とともに命を出した。

「征け。乱美迫」

乱美迫が「フウツ」と咆哮に見紛う呼吸音を出したあと、精兵千と共に駆け去るのを見届けると言葉を発した。

「少しはやるようだが、さて、乱美迫を受け止められる程度の力量は備えているのか、確かめさせてもらおう」

第65話

「フウウウウウウツ」

靈鳳の号令によって動きだした乱美迫という名の鉞は、魏軍にまとわりついた敵部隊の命運を容赦なく刈り取っていく。

「ヴァルツ」

ひとたび矛を振れば、首が飛び、両断される敵兵の躰だったものが残骸となつて横たわっていく。

「ヒイツ 来るなああああッ」

乱美迫の暴威を前にして留められる者はなく、纏わり付くは、亡き者になつた者たちの朱き血のみ。

「フウウウウ」

粗方、眼前にいた手頃な獲物を片づけた乱美迫が一息吐いたあと、次に、血走らせた眼で捉えたのは、秦軍中央右軍の前線を指揮する将兵であつた。

「フウウツ!!!」

乱美迫は、視界に獲物を捉えると本能のままに馬の腹を蹴りこみ、突進していく。

「むッ、旗だ。旗を掲げよ。皆の者ッこれより、乱美迫様は敵前線部隊に突撃為さる」

と、声を挙げたのは、この、おおよそ知性を感じさせない狂人ともとれる乱美迫の副官を務める鉄仮面の漢。

「乱美迫様に続けッ 解らない者は、この魚燕（ギョエン）の背を追うて来い。敵は前にありだッ」

この魚燕という漢は、脳筋的な思考を持ちながらも声を用いない乱美迫の意を汲み、尚且つ、それを戦術として行使できる者であつた。

「者ども続けえええッ」

「急報ッ突如として魏軍後方より強引に割つて入つてきた新たな騎馬隊より、味方部隊が壊滅的な被害を受けたとのことッ」

「ッな!？」

急転を告げる伝令に、驚きの声を挙げたのは、将である濯であつた。

「馬鹿な。さつきまで押しまくッ」

と、濯が内心をそのままに言葉を発しようとしていた所に控えていた後方から声を被せたのは、馬首を揃えるように進み出ていた青騎であつた。

「報告、ご苦勞様です。下がつてよいですよ」

青騎は、伝令が下がるのを見届けると私見を述べた。

「濯、あなたは落ち着きなさい。後方から騎馬隊が割って入るのは視えていました。ただ、ここまでの強軍を強引に投入してくる。というのは、こういつた時に、慎重に行動する介子坊さんらしくない大胆な戦術です。と、いうことは——」

その時、青騎の言葉の先を示すように、急報を携えた伝令が姿を見せた。

「ツ前線を突破した敵騎馬隊が、こちらに向かつてきます。また、左翼側にも別の敵騎馬部隊が突撃を開始した模様です」

伝令の背後にある戦場には、『乱』の文字を旗に掲げた騎馬隊の姿があった。

「おや、そちらができましたか。濯、あなたは部隊を後方に下げる準備をなさい」

「了。あなたは何を」

「私ですか。もちろん、足止め、ですよ。ンフッフ」

「乱美迫隊。敵右翼前線を突破後、前線指揮官を強襲。同じく、敵左翼に味方騎馬隊が突撃を開始した模様です」

魏中央軍を預かった霊風の元には、逐一最新の情報が齎されていた。

「報告しますッ」

「乱美迫様ツ青騎なる者と一騎討に入った模様ですッ」

靈凰は、馬上で今しがた受けた報告に対して、関心を示すように、ほうつと息を吐くと言葉が続けた。

「乱美迫を留める者が鬼面の他にもいたか」

そして、元から組んでいた腕の片方を持ち上げて手で口元を隠すように添えると、数瞬、何事かを思案したのちに、さらに、言葉を発した。

「なるほど、廉頗の側近が手を焼くわけだ。上から見ていた限り、対峙する前線指揮官の戦術理解度は相当に高い。さらには、乱美迫と張り合えるほどの武を備えている将も複数いる、か」

仮に、靈凰が凡百（ボンピヤク）の将であつたならば、必殺の鉞となる乱美迫という存在が必殺には足りえず、尚且つ、そのような敵が複数も現れたと知れば、狼狽の一つでもしたくなるであろう。

「厄介な相手になりそうだ」

だが、秦六将時代、魏国随一の軍師として名を馳せていた靈凰にとつて、敵に想定以上の猛者が現れることなど、幾度と経験してきた程度のことであり、特別な感情を露わにすることはなかった。

「とはいえ、私のやることに変わりがあるわけではないがな」

そう言葉を発したあと、視線を戦場に向けた靈凰は、新たな命令を発した。

「乱美迫に本陣まで後退するように伝令を出せ」

「靈凰様」

と、そこで声を発したのは、この戦に参陣するために、急遽、魏王の要請によつてつけられた随分と年若い幕僚の一人であつた。

「あと、もう少しでも待てば、乱美迫様が青騎なる者を討ち取つて、それが、前線を押し上げるきっかけとなるのではありませんか」と。

すると、靈凰はその者に視線を向けると、己の側近の名を呼んだ。

「周鉞」

と、名を呼ばれたのは、靈凰側近の武官であり、応じるように言葉を発した。

「ハッ この者は、王よりつけられました若手の有望株とのことです」

靈凰は「ふむ」と一拍思考すると、物怖じせずに発言をしたその者に、私見を述べた。「敵が愚鈍であるならば、それでも良い。だが、生憎、そうではない。敵が私の想定している通りの力を持っている。とするならば、今、特出している乱美迫など、絶好の狩り刻であろう。私なら強力な部隊で後方を遮断しに掛かり、確実に仕留める」

つまりは、この者の年齢や経験、それらがこの大戦に参集された者としては、敵の力量の値踏み、それに、戦の流れに対する読みも浅く、圧倒的な経験不足を感じさせるものであつた。けれど、そのことで、靈凰は別の視点から今の状況を鑑みることができ、あ

る一つの事実に行き当たることになる。

「なるほど、そういうことか」

それは、この戦いに自身が帯同することになった経緯にあった。

基本として、魏王は戦に関することで何かを強く要望することは、これまでほとんどなかった。それが、今回に限っては、敵増援の報を受けてから、靈鳳を軍に帯同させること、また、王自身が持つ有望な若者を側近として、こちらに付けてくるなど、普段とは違う迅速な行動が目立っていた。

ということとは、答えは一つ。

「鳳明め。私をも利用するつもりであったか」

靈鳳は、強かな弟子の思惑に思い至り、自らの師すら活用しようとする貪欲な姿勢が、いずれ魏を牽引する者に成長するであろうと胸に抱かせるのであった。

そして、先に放った靈鳳の言葉は、預言となり現実となつて魏軍に齎されようとしていた。

「見よ。僅かにだが、敵軍後方から砂塵が舞っている。あとは、わかるな」

この時、靈鳳はこの者を付けた魏王、いやこの者を付けさせた者の思惑すら掬い上げていた。

「ッ、急いで靈鳳様の命を乱美迫様に届けなさいッ」

若すぎる幕僚の姿を横目に、靈凰は言葉を漏らした。

「まったく、師であるこの私を扱き使おうとは、何たる弟子か。だが、まあいい。それくらいでなくては、この戦乱の世に呑みこまれるだけだ」

激闘の地となつた秦前線部。

「ンフツ」

青騎が外衣に隠されていた矛を膂力を込めて存分に振えば

「フウツ ヴァアルツ」

乱美迫は矛を撓らせながら受け止めると、青騎の膂力の倍に比するかのように己の全靈を込めた一刀を素早く返す。

「ンンツ フウツ」

青騎も当然のようにそれを受け止め、次には、命脈を断つべく矛を差し込む。

「ンフ フフツ フフフツ ンフフフフツ」

一手を打てば強烈な一手が返り、二手目を打てば、素早い二手目が差し込まれる応酬は、止まずに、劍戟となり完全なる一騎討の態を為して、戦場という舞台を彩ることになつた。

「ヴァルヴウツ ウウツ ウウヴァアルツ」

最早、二人の舞台であるかのような戦場で、副官魚燕は驚きの声を挙げていた。

「馬鹿な。乱美迫様と互角だとッ いや、まさか、僅かだが、乱美迫様が押されているようにも……………」

魚燕は視界に二人の壮絶な打ち合いを収めながらも副官として周囲の状況の確認を怠つてはいなかった。

「ムッ、乱美迫様ッ 敵後方に砂塵がアリ。あれは、我が部隊の退路を断つ気やもしれませぬ。後退の下知をッ」

乱美迫は、魚燕の声が聴こえているのかいないのか、数息吐き出し、仮面の下でニイと青騎という強者の存在に壮絶な笑みを浮かべると再び斬り掛かっていく。

「フウーっ フウーっフウヴァッル!!」

より強く。

「ヴァッ!」

より速く。

「ツツッル!!」

狂ったように矛を振りかざして襲い掛かる様は、正に狂戦士と渾名される乱美迫という人物の真骨頂とも呼べる姿であつた。

「乱美迫様ッ。 ック 霊凰様に至急伝令だッ」

けれど、それはつまり、生半可なことでは、乱美迫の行動を留めることができないことをも意味していた。

「フフフッ フッ フフッ」

「フウツウウヴァるツツ」

副官魚燕の心配を他所に、乱美迫の眼は青騎のみを捉えており、二人の激突は留まるどころを知らずに続いていく。

「お聞きください、乱美迫様ツ！ 乱美迫様ツ!!」

だが、副官の必死な呼び声が届くことはなく、空しく響くばかりであった。

「……………ムう、致し方ない。我は退路の確保に動く。お前たちは乱美迫様から決して離れるなツ」

このまま呼び掛けても主である乱美迫に声が届くことないと判断した副官は、退路の確保に動き出そうとしたその時。

「靈鳳様より伝令ツ 本陣まで後退せよ。との命令です」

との、報が届いた。

「ヴァアアツル!!!」

一際大きな矛盾士の激突によって開いた両者の距離。

「乱美迫様。お聞きになりましたかツ 靈鳳様より後退の指示ですぞ」

「フウウ フウウ フウー」

敵に向けて眼（マナコ）を剥きだし、ギチギチと強く握りしめられた矛の音がそれを拒否するかのように響いた。が。

「フウウ!!」

乱美迫は、躰に滾る熱を吐息として大きく吐き出すと馬首を翻して、駆け出した。

「皆ツ退くぞおおおツ」

青騎は、隊列を組み素早く撤退していく敵を追撃することなく、乱美迫隊が撤退していく先、魏中央軍である介子坊、輪虎両軍の中央に昇り立った火龍旗『靈』の旗を見据えていた。

「魏火龍靈凰。流石に、衰えてはいないようですねえ」

と矛をゆっくりと下した青騎。

「ええ。乱美迫の突撃に併せて、前線を一つの軍として編成し直したようです」

と隣に並び立ったのは、青騎の伝令を受けて乱美迫の裏を遮断しようと駆けていた虎豹であった。

「彼の者がこの場を動かす。ということとは、現在の廉頗さんの動向を知る術がなくなつたことを意味します。そして、困つたことに、あの方は、神出鬼没。さて、どうしたものか」

という言葉とは裏腹に、龍面の下にある表情は実に愉し気であった。

「懸念されていることはもつともですが、今は、目の前の敵に集中する刻ではないですか」

「確かに、あなたの言う通りです。視えぬ敵にばかり目を向けていては、足元は疎かになりますからね」

と、青騎はその言葉に肯定を示しながらも、虎豹のわずかな変化を見逃さずに声を掛けた。

「虎豹、どうかしましたか」

「あの、こうしてまた、同じ……あ、いえ、なんでもありません」

と口を噤んだ虎豹の言葉の先、それを汲み取るように青騎は応じた。

「私も、気持ちと同じですよ。——」

「はいっ 私もですッ」

ふとした拍子に二人が重ねたのは、決して、他の誰かには伝わることのないものであり、お互いだけに共有できる心からの言葉であった。

「さあ、私は濯と合流します。あなたも隊列に戻り、次の戦いに備えなさい」

「はい。ご武運を」

「ええ、あなたの武運を祈ります。なにせ、ここからが正念場ですからね」

流尹平野の戦いは、次の幕、終幕へと移ろうとしていた。

第66話

二日目、開戦時、魏中央軍は、魏左軍介子坊兵一万八千、魏右軍輪虎兵二万二千という形で別々の指揮権の元に軍事行動をしていた。

そこから陽が昇り、中天に差し掛かる頃。

靈凰が魏中央両軍前線部の指揮権を掌握する形で参戦した。靈凰がまず行ったのは、魏軍にまとりつく秦兵の排除であった。それには、乱美迫を含む強軍の二部隊を用いることで一気呵成に殲滅した。また、迅速な殲滅がなされたことで、戦意が大いに高まった二部隊を今度は秦中央軍の隊列を乱す目的で突撃させた。この強軍二部隊の攻撃は激しく秦中央軍はその対応に追われることになった。その隙を突く形で、靈凰は前線部の隊列を大きく編制し直し、前線部を完全に掌握した。それにより、靈凰麾下となった前線部は兵二万三千で横陣を展開、その中央のやや後方に靈凰本陣。展開された横陣の後方左右に介子坊兵五千、輪虎兵五千がそれぞれ配置する構図になった。対する秦軍は、全体で三千の損失があるものの秦左軍に土門兵一万六千。秦右軍に朱錐一万四千の二軍計三万となり、兵数だけを見れば、僅かにその差は縮まっていた。

「乱美迫隊が帰還しました」

敵前線から帰還を果たした乱美迫であったが、その様は、いまだ敵陣の最中のように殺気だつており、強く握りしめられた矛は、まるで唸り声を上げるかのように小刻みに震えていた。

「フヴウーッ フヴウーッ フヴウーッ」

靈凰は、常よりも激しさを増した乱美迫が、眼で「すぐにでも再度の突撃を命じろ」とばかりにこちらを凝視し続ける姿に疑問を覚えると、乱美迫の副官魚燕に声を掛けた。「随分と猛つているようだが、何があつた」

「ハッ 一騎討となつた敵将、これと対峙、切り結んだことが一因である、かと……」
と、そこで言葉を留めた魚燕は、一度、徐に視線を靈凰に合わせると何かを含むように再び視線を外した。

「どうした。歯切れが悪いな。それとも、私に報告できないことでもあるのか」

「ハッ ありますぞ。ですが、語れぬ理由もまたあり申す」

などとハツキリとこの先を語ることはできない。と宣言する魚燕の様子に、靈凰は、何を思慮しての事かを読み解くと言葉を掛け始めた。

「確かに、私は虚飾を好まない。それは、多分に脚色されたお前たちの主観による情報で鵜？みをする愚を犯さぬためだ。だが——」

「フヴウーッ」

靈凰は乱美迫が出す音にも耳を傾けながら思考を回転させていた。

戦とは生き物だ。頭を獲れば、そこで終わる。だが、敵の頭を切り落とすその瞬間に、自らの手足が十全に動かないようでは、いい笑い者だ。だからこそ、部隊を任される者は、常に敵、味方両方の状況把握に努めなければならぬ。特に今回のような大戦であるならば、なおさらだ。本来なら、何かがあると感じ取れた事柄などは、私自身の目で確かめるべきことではある。が。

「今の時、尋常ではない乱美迫の様をこのままにしておくことは上策とは思えん」

私の鉞でもある乱美迫は、狂戦士と揶揄されるほどに気性に難はあるが馬鹿ではない。その乱美迫が、ここまで猛々しい様を維持したまま訴えかける事態など、実はそう多くはない。あるとすれば、今まさに敵を殲滅するために矛を振るっている最中か或いは…………。

それらを勘案した靈凰は、言外に、どのように不確か情報でも構わないので話すようにと申し付けた。

「魚燕。お前は何を見た」

「ハッ それでは報告致します。顔は龍の面、軀には全身を覆い隠す外衣。それ故、確信を持たずにおりますが、青騎なるこの者、この私、魚燕の目には王騎にみえ申したツ」と、その瞬間、まるでその言葉を肯定するように、乱美迫から「ヴウウツ」と吐き出

された音が響いた。

「乱美迫……………。王騎か」

と靈凰は視線を乱美迫に向けると呟き、そして、その可能性を言葉にして現した。

「ふむ。お前の言が正しければ、奴が素性を隠してこの戦場に舞い降りたということか……………」

靈凰は、乱美迫と視線を混じり合せながら、魏国の都大梁にて各国に潜らせた諜報員から吸い上げて得ていた情報の中から鬼面の朱錐についてのものを精査し直していた。

ここ幾年月の消息は不明ではあったが、趙国馬陽戦では王騎軍麾下の将としていくつかの戦功を挙げたと報告にあった。消息が不明であった時期、というのも気にはなるが、問題は王騎軍麾下の将という点だ。趙国馬陽の戦いにて、王騎自身は李牧の策に嵌り、重傷を負った上で敗走した。その責を取る形で大将軍位を返還、軍を騰に引き継ぎ、奴自身は、前線から完全に姿を消したとされていた。が。

「秦の怪鳥。とはよく言ったものだな。あれが早々に前線から身を退くような漢であろうかと考えてはいたが……………。なるほど。これは、方策を練り直す必要がありそうだ」

二日目、中天を跨いだ陽がわずかに傾き出した流尹平野中央の戦いの最中に、魏中央軍に火龍旗が昇り立ったことで齎された変化は、魏に巻き起こる大歓声であった。それすなわち、かつての魏国大將軍であつた火龍という存在が、いまだに健在であるという証と秦軍に受け止めらるることとなつた。

それ故に、対廉頗のみを想定していた蒙？本陣の動揺は如何ばかりか。総大將蒙？は、靈鳳出現の急報に慌てだした幕僚を横目に、己の内心を抑えると「急ぎ警戒を強めよ」と前線の將兵に向けて命を飛ばした。それよつて、前線の將兵たちは警戒心を高め、敵のあらゆる動きに対応するべく万全の備えをみせた。だが、対する魏軍は、それをあざ笑うかのように、大きな動きをみせることなく、場所や規模を変えながらも単調で、連携など皆無な突撃を繰り返すことになる。これには、対峙する誰もが呆氣にとられたのは言うまでもなかつた。

やがて陽は傾き、夕の刻に焼ける流尹平野。刻々と迫る闇は、自然と戦士たちに戦いの休息を促した。

此処は、秦左翼軍本陣。

そこに到着する馬の影が一つ。

「王翦様。中央に潜らせた田里弥より早馬です」

王翦は、到着した使者から渡された竹簡を静かに検めると言葉を発した。

「やはりか、ご苦勞であつた。田里弥には、戦況を鑑みて適宜必要な行動を取るよう伝えよ」

「御意」

王翦は、翻り去っていく使者を尻目に、初日、二日目と姜燕を囲地に誘い込むべく後退していた現状を大きく変更することを決めた。

「全隊に命令を出す」

別の野営地。

「なあ、魏火龍ってどんなやつらなんだ」

飛信隊の信である。

「魏火龍ですか。私も噂程度でしか知りませんが、彼らは魏国が誇る七人の大將軍の称号であつたはずです。ただ、彼らはすでに亡くなつていて、と……………」

と信の言葉に応えたのは、前日夜に、意気消沈する彼らを叱咤激励した楚水であつた。

「はア!? じゃあ今日の騒ぎはなんだつたんだよ」

「……………詳しいことは私にも」

そんな、困惑の表情を浮かべる二人に、声を掛ける者がいた。

「ならば、実際の生死はともかくとして、魏の火龍について、儂が知っていることを語るとしようか」

と声を出したのは、飛信隊最年長であり、多くの戦いの歴史を知る魯延じいであつた。「まず一つ、魏火龍靈凰とは、ただの魏国の大將軍にあらず。当時、儂が伝えきいた靈凰といえ、魏国一と謳われたほどの大軍師じゃ。さらに、秦国六大將軍であらせられた王騎將軍らと、幾度となく戦つたとされる大人物のはずじゃ」

「ツな!? お、王騎將軍とツ じゃあ靈凰っていうのは、今戦つてる廉頗みたいな奴だつていうのかよ。そんな奴がもう一人なんて、やべえなんてもんじゃねえじゃねえか」

そう驚きを露わにする信の姿を横目に、魯延は靈凰の出現における秦軍全体の影響についても触れた。

「その通りじゃ。死んでいなかつたというその事実一つで今日の騒ぎじゃ。本陣はまさに蜂の巣をつついた状況じゃろうなあ」

という魯延の言葉が浸透するにつれて、狼狽えるようにざわつき始める飛信隊の面々。

「嘘だろ おい」 「廉頗級の火龍つてなんだよ」 「おらは絶対に生きて帰つて幼馴染と結婚するだ………」

などと各々が不安を口している最中に、馬を操り颯爽と姿を見せる若者の姿があった。その者は、周囲から漏れ聞こえる声を拾いあげると言葉を発した。

「あれ？　せつかく良い情報を仕入れたから、信にも教えてやろうかと思ったのに、この様子だと、もう知っちゃった感じ？」

と声を掛けたのは、蒙？將軍の孫にあたる蒙恬であった。

「あッ、お前は蒙恬。靈凰の話ならもう聞いた。魏国の大將軍なんだろ。つってもお話を割には、今日の所は全然大したことなかったじゃねえか。攻めだつて単発で単調だったしよ。大軍師なんて名ばかりじゃねえのか」

「ああ、それは俺も気になってたんだよねえ」

と蒙恬は軽い口調で言葉を漏らしながらも、胸の内では「ただ、もしかしたら………」と考えを巡らせ、次に起こり得る事態を想定していた。が、さすがに憶測が過ぎると頭を振ると付随する別の内容へと話を切り替えるのであった。

「そっか。なら、その靈凰が従える狂戦士の話は知ってるか、信」

「狂戦士だあ、なんだよそりゃあよ」

「狂戦士乱美迫。靈凰の戦いでは常に先陣を切る猛将で信にも解りやすく言うのだな、王騎將軍たちが手を焼くほどの豪傑つてこと。それと、今日も前線の部隊を殲滅して、朱錐軍の青騎つてのと激しい一騎討をしたつて話だ」

これは、昨日、介子坊によつて散々にしてやられた信、そして、延いては飛信隊に注意を促すための言葉であつたのだが。

「ツは！ 上等じゃねえか。そんな強え奴がいるつてんなら、是が非でも、この俺が叩き斬つてやるぜつ」

と早々に息巻く信の言葉に、蒙恬は「初日に惨敗したわりには強気だなあ」と軽く冷や水を浴びせる一言添えながらも「でも、その立ち直りの早さは、お前の良い所かもな」とその心の強さを讃えた。

「あつたりめえだ。俺は大將軍になる漢だぞ。いつまでグズグズしてる暇なんてねえんだよつ。それに……………」

と、普段の信なら威勢よく締める言葉の尻がわずかに萎んだことで蒙恬は「そういうえぼ」と納得したように声を漏らすと言葉を続けた。

「ああ、あれだ。最低でも条件を満たさないと事実上の解散だつたな」

その言葉に反応した信は、不退転の決意を口にする。

「男に二言はねえ。絶つツてえにやりとげてやるツ」

信の清々しい決意の言葉に蒙恬は頬緩ませながらも、実現できなかつた場合の処分について、一応ながらも触れることにした。

「ははつ、二言もなにも、じい様そういう所は厳しいから、達成できなければ、間違いな

く降格、解散まったなしだから」

「ツな。そこはお前、お前がなんかこううまいこと言つてー」

「無理、無理。その時は諦めて出直せ」

「ツチ 使えねえなあ」

「あツ、お前ちよつと凶太くなつたんじやないか」

「俺はこいつらと大將軍まで駆け上がりなくちゃならねえんだ。だから、使えるもんは、お前だろうが何だろうが使うに決まつてんだろうが」

悪ぶりもせず言い放つた信に、蒙恬は口を開いた。

「…………いやほんと、凶々しいっていうか。知り合つたばかりの大將軍の孫に、その態度がとれるお前に、俺は、逆に感心するよ」

と呆れた表情と仕草をみせる蒙恬であつたが、よく観察すれば、僅かに上がっている口元にその本心は現れていた。

蒙恬にとつて蒙？は、秦国の大將軍であり、自身を可愛がつてくれた大事な祖父でもあつた。そして、父蒙武もまた豪傑としてその名を広めており、当然、その偉大な家系に生まれた蒙恬に取り入ることで、蒙家と関わりを持つとうとする輩は数多く存在した。

そのため、自然とそういった者を見極める目が養われた蒙恬には、気の置けないほど友を作ることは容易ではなかつた。

その点、信は下僕上がりという出世には明らかに不利な立場でありながらも、ある種の権力を有する自身に気に入られようなどという下心を見せることは微塵もなく、ましてや、大將軍の孫である事実を明かした今でも、はつきりと利用してやると公言するほどであった。この裏表のない真つすぐな信の在り方を蒙恬が気に入るのは自然なことと言えた。

「フツ　じゃあな、信。俺はまだ行くところがあるから、行くよ」

そして、この流尹平野において、最大の戦いとなる三日目の朝を迎えた。

魏山陽攻略 開戦三日目と終戦まで

第67話

流尹平野に朝陽が差し始めると、朱錐軍陣営に立つ三人の躰を明るく照しだした。

「魏の布陣……、昨日と同じだというのに、軍から発せられる圧はその比ではありませんね」

三日目。魏中央軍は、早朝から動きだすと厳かに、そして、整然と隊列を組み上げた。その様は、自然と空気を張り詰めさせていた。

「ええ、魏からの殺気がビンビンです。どうやら、隠すつもりは毛ほどもないようですねえ」

魏軍から発せられる圧に、仮面の奥で笑みを深める青騎。その隣で、虎面の将は、二人の言葉に耳を傾けながらも魏軍の布陣に視線を移して、言葉を口した。

「靈凰はどこを狙ってくるでしょうか」

「ソフ そうですねえ。私の存在に気づいてはいるでしょうから、こちらに。と言いたところですが、相手は靈凰、そう単純ではありません。彼の者ならば、策をもってして必勝の刻を作り出し一気に仕留めに来るでしょう」

「そうなる」と狙いはやはり……………」

青騎は、虎豹の言葉に応えるように秦中央左軍に視線を移すと言葉を発した。

「ええ。この一日、雛鳥たちとつてとつてもなく苦しい戦いになるのは、疑いようがありません。もちろん、それは我々にとつてもです」

「……………そろそろ時間です。配置につきましよう」

そして、両軍が出揃い今か今かと高まる緊張感の中、両総大将、蒙？、白亀西の号令をもつてして、堰き止められていた水が一気に流れだすように、両軍が動き出し、流尹平野の戦い三日目が開始された。

先手を切つて大きく動いたのは、靈風であった。

靈風は指揮下にある兵二万三千の内、横陣を敷かせていた兵一万六千に突撃を命じて秦中央両軍にぶつけた。これにより、朱錐（兵一万四千）土門（兵一万六千）両軍には、およそ敵兵八千ずつの圧力が掛かることになる。また、靈風は、その後方に、右に乱美迫隊兵三千と同規模の予備隊を左に配置。そして、さらにその後ろ靈風本陣兵千。並ぶように右に輪虎兵五千、左に介子坊兵五千という構図であった。

これに対して、秦右軍朱錐側は、前日同様に前線部に将として濯、参謀に青騎という形で兵八千を配置。後方予備隊として、虎豹兵三千、朱錐兵三千とした。その前線部では、実質的な差配を青騎が執ることで、拮抗していた。

その逆側、秦左軍土門側では、魏火龍の名のもとに土気高さを保った魏軍の攻勢に呑まれる形で、一時押し込まれる形になっていた。けれど、一昨日、大きく活躍した蒙恬楽華隊が後方予備隊の立場を大いに活用する形で各所を支え、時には、数的優位を作り出しては、攻勢に転じさせることで戦線を支えた。この楽華隊の働きによつて、一時の猶予を得た秦左軍は、態勢を立て直して、五分の状態へと押し戻すのであった。

「出だしは上々。問題は、ここからです」

最前線で魏軍の動静を窺う青騎の言葉は、このあと、現実となつて動き出し始めることになる。

同刻、魏中央靈鳳本陣。

「ふむ。そこか」

靈鳳は戦全体を俯瞰しながら、突くべき所を見定めると指示をだした。

「乱美迫をだせ」

「フウーーーーーッ!!!」

乱美迫が雄たけびの音とともに矛を高らかに掲げて馬を駆けさせると、副官魚燕を含む兵三千が追隨して突撃を開始した。

「皆の者おッ 乱美迫様に続けえええッ」

靈凰は、突撃していく乱美迫隊三千を見届けると次の一手を打つために各所に伝令を飛ばした。

「この一手で楔を打ち込む」

秦中央左軍は、開戦当初押され気味であった戦線を蒙恬楽華隊らの活躍によつて押し戻したことで、盛り上がりをもせていた。

「敵をこのまま押し返す。みんな、俺に付いてきてくれ」

蒙恬の激しさを伴わない柔らかな檄は、ある意味で、蒙?の一面を引き継いでいたのであろう。大きく飾ることのない言葉は、的確に現状を示し、やるべきことを明確に伝えて、隊の意識を一つにしていく。そして、それらを実現させる蒙恬の行動力は、楽華隊の導となり戦場で華開く力となっていた。

この楽華隊の躍動は、秦左軍にいる千人隊を盛り上げる起爆剤となっていた。特に、同世代である楽華隊の活躍に触発された飛信隊の活躍は目覚ましいもので、初日に隊を大きく削られた敗走などなかったかのような活躍であった。隊の先頭を隊長自らが駆けることで補充兵に信の勇猛さを示して奮い立たせ、その良く透る声が目標を明確にしていく。戦場において、迅速に隊の意識を統一するというもつとも重要な素質を信が自覚なく備えていた結果であった。こららの要因が重なり、魏軍を大いに押し返す力に

なっていた。

「左の信の所は、大丈夫そうだな」

蒙恬は、五分にまで戻した戦線を前に、そう言葉を零して一息ついていた。それに反応を示して言葉を返したのは、楽華隊副長胡漸であった。

「そうですね。隊長信を中心に纏まり、飛信隊には勢いを感じ取れます。逆に、我らと同等の力を有しているはずの前線右方に配置されている玉鳳が、若干、苦戦している印象ですな」

事実、王賁の玉鳳隊は苦戦していた。その有する力は、楽華隊と互角であるというのに、だ。当然、そこには理由があった。

「王賁のそこは、ほら。初日に副長の番陽殿が王賁を護って負傷離脱したからね。まだ慣れていない千人隊な上に、隊全体の事も一人で見なくちゃならない。当たり前だ。まだ、それは、容易になせる事じゃないさ」

蒙恬の指摘通り、急遽、千人隊に昇格したことで三百隊に新たに七百人を迎え入れたのだ。例えそれが、鍛えられた兵であったとしても連携に乱れが出るのは、仕方のないことでもあった。それに加えて、将である王賁を陰から支えて、円滑な隊運営を担っていた副長番陽が離脱したことで、王賁に掛かる負担は激増していた。

「蒙恬様は、戦場でも個々をよく視ておられますな。しかし、主を護つての負傷とは、流

石は番陽殿。この私も若の危機を救うためならば、この命、投げうってでも救つてみせますぞ」

「ハハハ。できれば、俺のために命を捨てるようなことは、やめてほしいかな。じいには長生きしてほしいし」

「何を仰いますか。蒙恬様は蒙家の宝。この私一つの命で救えるなら何度でも飛び込みますぞ」

と胸を叩く胡漸の姿に、蒙恬は、自戒を込めて言葉を発した。

「そつか。じゃあそうならないように気を引き締めてことに当たるとするよ」

秦左軍は、楽華、玉鳳、飛信隊という若き千人将が率いる部隊の活躍によつて戦線を押し戻すことに成功した。だが、この流れそのものが次の一手のために仕組まれたものであることを、この後、彼らは知ることになる。

「急報ツ 魏軍より騎馬隊です。その数、およそ三千ツ」

そこには、秦左軍の左側面を突くべく回り込む敵騎馬隊の姿があつた。敵の狙いを察した左軍指揮官の土門將軍は、すぐさま対応策を講じるべく指示をだした。

「急ぎ左方後方の予備兵二千を出して左軍側面の盾に。さらに、右方の予備兵二千のうち千を左に向かわせて厚みを作らせよッ」

それは、前線を支えるために配置していた予備兵を当てる順当かつ素早い判断であつ

た。この迅速な対応によつて動き出した予備兵二千は、敵騎馬隊の突撃よりも先の配置を成功させることになる。

だが。

「来るぞツ 盾兵前えツ 構え」

号令によつて整然と盾を並べて一枚の壁となつた秦軍に突撃するのは魏軍騎馬隊兵三千。

「フウウウウ ヴアルツツツ!!」

咆哮一閃。先頭を駆ける仮面の大男が振りぬいた矛は、一枚の壁となつた秦兵の盾を容易く崩壊させた。

「うあ」「ぐはッ」「あが」

盾兵などモノともしない膂力と武の力を前に、無残にも吹き飛ばされる秦兵たち。

「者ども、乱美迫様に続けえええッ」

敵将乱美迫が崩壊させた一点を突き抜けていく魏軍は、ここに配置された予備兵を大いに屠ることになる。

「むう あれが敵将か。皆よ、ついて来いッ、この私があやつを討ち取つてくれるわッ」

戦いの流れを奪われまいと威勢よく駆ける部隊長も複数いた。が

「グフツ」

「ヴあアルツ！ フウウウルツ!!」

「…ガ……無ね……ん……」

一合、或いは、二合も打ち合えずに、その軀を地に沈めることになる。こうして、乱美迫によつて齎された左方の劣勢は、そのまま、左軍の劣勢へと繋がっていくのであつた。

その状況を好転させるべく果敢に飛び出していく部隊がいた。それは、左方寄りに配置されていた飛信隊である。

「信殿。ここは、私に任せて左方の救援に向かつてください。今なら、右方の予備隊が介入する機に乗じて、一気に敵将までの路が開けるやもしれません」

と、声を挙げたのは、戦況を冷静に見定めていた飛信隊副長の一人である楚水であつた。

「……………俺達が持ち場を離れて、ここは大丈夫なのかよ」

「ええ。私に三百ほどお預けください。何としてでも、この前線をこの場に留めてみせます。今はまだ、左方の予備隊が踏ん張つてはいますが、おそらく、時間の問題でしょう。左方が崩されれば、この左軍は、正面と側面からの挟撃を受ける形になり、圧倒的に不利な状況に陥ります」

この楚水の提案を信の傍らで聞いていた古株の副長は、それに異を唱えるように声を挙げた。

「待つてください。楚水殿は信殿について救援に向かうべきです。代わりに、私がここに残ります」

と自身がここに残ると主張する副長の意図を聞くために、信は言葉を紡いだ。

「どういふことだよ、瀏さん」

「信殿。私と違つて、楚水副長には郭備千人将の下で培つた確かな経験があります。そして、今、この飛信隊は、急造に次ぐ急造部隊です。そんな中、仮に、私が向かつたとして、何か不足の事態が起こつた場合に不安が残ります。ですが、ここに残す三百人程度なら、これまでの経験で、私でもなんとか保たせることができるはずです」

信は、瀏の言葉に筋が通つていることを理解できたが、この場所から自分たちが抜けるあと、当然のように激戦となるこの場に仲間を残していかなければならないことを決断できずに声を出した。

「そうはいふけどよお……………」

そんな躊躇いをみせる信に対して、羌？は背を押すように言葉を掛けた。

「それなら、私もここに残ろう」

「ツな。なんでだ、羌？」

「大した話じゃない。私は、初日に少しばかり無茶をし過ぎた。象姉のおかげである程度は回復できたが、いつものような大きな力を何度も使えるほどじゃない。だから、残る。それに、ここが崩されては、本末転倒だからな」

信は、初日に羌?の言葉を無視して隊を窮地に追いやってしまったことを猛省していた。もつと他にやりようがあったのではないかと。そのため、信頼できると感じた者からの言葉をよく考えるようになっていた。しばしの沈黙のあと、信は心を決めると言葉を発表した。

「……………わかった。溯さん、ここは頼んだぞ」

「はい、任せてください。信殿、ご武運を」

「溯さんもな。羌?、溯さんを頼んだぞ」

「ああ、死なない程度には守ってやる」

「フっ、そうかよ。よっしゃ、それじゃ行くぞ。この戦いは、絶対に負けるわけにはいかねえっ　行くぞ、飛信隊!!」

隊長信の檄に応えて、皆が声を張り上げた。

「応ッ」

そうして、飛信隊は、掛け声のあと向きを変えると動き出していく。その最中に「皆なッ　隊長が戻るまで私たちがこの場をなんとかしてでも死守するぞおおお」

と背に響く漕の声に、信は心をより奮い立たせて、馬を駆るのであった。

第68話

魏火龍靈風の鉞乱美迫隊の猛攻によつて劣勢となつた秦中央軍左方の救援に飛信隊が動き出した頃。

森林を挟んだ秦右翼の山間では、魏左翼軍の將玄峰によつて桓騎軍包圍網が縮められていた。

「玄峰様。前方の敵部隊の排除が粗方完了したとのことです」

その報告に、玄峰は魏左翼の戦略図から視線を上げると言葉を発した。

「流石に、元野盜というだけある。隠れることに関しては一級品であつたか。獲りこぼさぬよう執拗な索敵させたとはいえ、これほどの時間を要するとはかう」

魏左翼の戦略図には、桓騎本陣と予測される場所を後方中央にして×印が扇状に数多く記されていた。この×印は、敵部隊の発見と交戦をした位置であり、つまりは、桓騎が伏した兵の配置図とも言えた。

「玄峰様。如何為されますか」

玄峰は鼻を「フンツ」と鳴らすと呆れたように言葉を返した。

「飛び回る蠅を一掃したのじゃ、しからば、やることは一つじゃろう」

そこに具体的な指示は含まれてはいなかったが幕僚に選ばれるほどの者ならば察することはできる。

「ハッ それでは敵本陣の包囲殲滅を開始します」

「うむ。さつさとやれい」

時は少し遡り、魏左翼の玄峰軍が桓騎本陣を包囲すべく索敵に力を入れている頃。

「お頭。隠してきた奇襲部隊が発見、殲滅されているそうです。この調子だと伏兵は全滅、敵本軍が本陣に迫るのも時間の問題って話です」

秦右翼軍の将桓騎は、斥候を担う手下からの報告を受けると言葉を発した。

「……………本陣を固めさせろ。前は雷土だ。あとはなんつつたか、五千人を任せたあの真面目そうなやつ。そいつが前だ」

この言葉に、手下は急遽五千人を任せられた真面目そうであるが、同時に、頼りがいのなさそうな面をした将を浮かべて疑うように言葉を返す。

「あいつツスカ。雷土はともかく、任せて大丈夫なのか」

桓騎は言葉を発することなく外していた視線を手下の漢に合わせると言葉を発した。「俺が間違ったことがあったか」

言葉のあと、数拍の間であったが手下と桓騎の視線が交錯。

その後「ツスね」と声を出した手下は、背を向けると近くに預けていた馬に跨り姿を消した。

「ニンじゃあまあ、こつちも始めるぞ」

同じ頃。魏右翼軍を率いる姜燕と秦左翼の王翦軍が激しい攻防を始めていた。

「姜燕様。中央を走らせた第二部隊が挟撃を受けているとの報告です」

「同じく、右翼に展開していた第六部隊も伏兵からの挟撃を受けて苦戦とのことです」

「左翼正面からは、敵部隊による味方の犠牲すら厭わない猛攻を受けて大きく押し込まれているとの報告です」

それらの報告は、前日まで姜燕の猛攻に対して後退を続けていた王翦軍の姿とは打って変わったものであった。そしてそれは、姜燕が一瞬呆気にとられるほどの猛反撃と言える様相を呈していた。

これらの報告に姜燕は、それ故、しばしの間沈黙を挟むことになったが「早急な対処が必要です。ご指示をツ」と促す幕僚に言葉に反応して言葉を発した。

「落ち着きなさい。これより、それぞれに部隊を派遣します。私の合図に注視して行動するよう通達をだせ」

自身の命を受けて各地に散っていく伝令の姿を背に、姜燕は独り言ちていた。

「蒙?の片腕、王翦か。この攻勢、さらには、私の意図を先読みしてるかのような敵の配置。六将に匹敵するという話も満更ではないか」

これまで、六将級と称されるには、随分と物足りなさを感じさせていた敵の動向に変化が生じたことで、姜燕は警戒心を強めると言葉を発した。

「部隊を動かします。私に付いてきなさい」

姜燕は己が手にある弓の感触を確かめると馬を走らせた。

所変わって、秦右翼の将王翦本陣。

「ご報告します。中央、それに両翼。それぞれに兵二千ほどの敵増援が出現したのとことです」

王翦は脳内に描いていた戦況を更新すると言葉を発した。

「……………なるほど、守りへの対処も早い。これが中華十弓の姜燕だけが持ち得る鎗矢を使った用兵術か。矢によって視界の効かない山間の各戦場を跨るように指示を出せる強みを最大限に活かしている」

「王翦様。こちらもなにか策を弄するべきかと愚考いたしますが」

「必要ない。戦況に関わらず、全戦場に同数の増援がほぼ同時に現れたという事実は、敵の配置が合理的な距離関係を保っていることの表われだ」

王翦は、開戦当初から姜燕の猛攻に押される形で後退しながらも細かな采配を執り続けていた。と同時に、それは、三日目に至る二日間を使つての姜燕の戦い方を読み解いていく時間でもあつた。

「そして、我らが苛烈に攻め立てる限り、姜燕は対応に追われることになる。よつて、各戦場を繋ぐ中継地との関係を密にするだけで問題ない」

この時、王翦は、中央、両翼軍の間に当たる後方地点に兵の集積所となる中継地点を作り出した上で、王翦本陣とを繋ぎ、敵増援兵数に呼応する形で同兵数を送り出すことで戦況が拮抗するように操つていた。

「姜燕よ。今度は私の戦いに、付き合つてもらおうぞ」

秦軍蒙？本陣。

「左翼王翦軍は、これまでの後退を止めて、大きく反撃に出た模様ですッ」

「右翼桓騎軍ッ 敵左翼玄峰軍を前に劣勢。敵軍に本陣を包囲されつつあると報告です」

蒙？本陣の幕僚たちは、左翼王翦軍の大反撃に「おおっ」と声を挙げて盛り上がりを見せた。が。続く右翼桓騎軍劣勢の報には、悪態をつく者がいた。

「桓騎め。普段からデカい態度をとつておるわりに、この体たらく。所詮は、元野盜風情

か」

それは、普段なら心の内に押し込まれている本音であつたのだろう。その幕僚がぼろつとこぼした言葉を拾つたのは、蒙？であつた。

「元野盜。そののどこに問題があるというのじゃ」

その言葉は、決して強く発せられたものではなかつた。けれど、件の幕僚の視線の先。蒙？という漢から静かに発せられる庄は、この者から言葉を奪いさるには充分であつた。

「へッ、え、あ、……………」

と、口を動かせど、声にすることができないほどに狼狽した件の幕僚の姿があり、その様を見て取つた蒙？は、己の意識を落ち着かせるために、口から息を吐きだす要領で鼻から大きく空気を噴き出すと一言だけ苦言を添えた。

「以後、軽率な発言は控えよ。よいな」

そうして、蒙？は深く頭を下げる幕僚から視線を外すと戦況報告の続きを促した。

「……………それで、中央はどうじゃ」

「中央左方土門軍は、左側面から侵攻した敵乱美迫隊を止めるべく予備隊をぶつけたようです。劣勢の模様。右方朱錐軍は敵軍を押しとどめて戦線は拮抗しています」

「むう 靈凰か。廉頗だけでも手に余るといふのに……………」

と眉間に皺を寄せて蒙？がこぼしたすぐあと、さらに、皺を深くさせる報告が入ることになる。

「物見より報告ッ 敵中央後方に大きな動きありとのことです」

そして、舞台は中央の戦場に戻ることになる。

飛信隊の信は、自分たちの持ち場を差？、瀧副長他兵三百を残して離れ、劣勢の左方に向けて移動して敵部隊との交戦を開始していた。

「俺達が飛信隊だあああつ」

信は、騎馬の勢いそのままに乱戦に突入して乱立する敵兵を切り裂いていく。

「俺に皆ついて来いッ!!」

そして、己を奮い立たせるように檄をとばす姿は、部隊の指揮を高めて、隊の皆の躰を軽くしていく。さらに、常に隊の先頭に立ち続けて、漂から託された剣を自らの手足のように使つて敵兵を斬り倒していく信の姿は、劣勢に喘ぐ他味方部隊の意識を上向かせる力になっていった。

「もはや、急造などではない。立派な千人将の一人になられている」

と楚水は眩くと眩しいものを見るように目を細めて言葉を続けた。

「信殿は一日ごとに成長しておられる。私もうかうかしてはられないな」

日増しに、将としての才覚を目覚めさせていく信の姿は、戦う力を楚水の躰に伝播させ腕から手へ、そして、矛先へと力を宿らせていく。

「ハあッ！ ハアアアアッ!!」

矛を振り切り眼前の敵を仕留め、返す刀で次の敵を切り裂く。流れるような矛捌きは、楚水の確かな実力をしめしていた。

「流石だな楚水ッ」

掛けられた声に視線を向ければ、顔を合わせた初日より明らかに纏う雰囲気は泰然としたものに変わった信の姿。その姿にふと笑みが漏れた。

「あなたは不思議な方だ。いまだ知り合って間もない私にすら力を与えてくれる」

楚水の言葉に信は「そうなのか」と首を捻る仕草をしたあと、言葉を返した。

「難しいことはわかんねえけど、俺はこの戦いが始まってからずっと飛信隊のみんなの力を前よりも強く感じてるぜ。俺がそう感じるってことは、皆もそうなのかもしれない。ってことはだ、俺たち飛信隊は全員で一つ。だから、皆が力をもらい合って戦う俺たちは強いってことなんじゃねえか」

楚水はやつと理解できたような気がした。

信の言葉は本心であり、隊長の信に足りない部分は、皆で補う。皆に足りない部分は、信が補う。そして、信が走れば皆が駆ける。飛信隊とはそういう隊なのだ、と。

「なるほど。確かにそうかもしれません。信殿。この劣勢、我らの手で覆しましょう」
「ああ。行くぞ、楚水ッ」

二人の視線の先には、一際目立つ体躯を荒ぶらせて矛を振るう仮面の将の姿があった。

第69話

「ヴァアルツツ」

矛先から滴る血は、地に朱黒い染みを作りだし、倒れ伏す敵兵の躰の周囲には、大きな血だまりが拡がっていく。

「ブツフウツ あ、ああ………」

敵兵だったものは、断末魔ともよべないなにかを吐きだし、躰にあつた熱とともに大地の一部に。

「フウー フウー フウー」

血塗られた矛を強く握りしめた狂戦士は、鋭い血走らせた視線を仮面の奥に忍ばせながら、荒く激しさを纏った息を吐きだす。

「フウー フウー フウー」

「乱美迫様、敵予備隊です。他にも、転進した部隊がこちらに」

乱美迫は、言葉に反応を示すと、標的を探すように視線を彷徨させた。そして、勇ましい雄たけびを挙げてこちらに駆ける者に狙いを定めると、自馬の手綱を手繰って馬首を合わせ、その腹を脚で力強く蹴り込んだ。

「上等じゃねえか。魏火龍の鉞だが高んだか知らねえが、俺が叩つ切つてやるッ」

と血氣盛んな叫び声を挙げた飛信隊信の視線の先には、こちらを正面に見据えて迫る魏將の姿があつた。その傍らでは、副長楚水は隊の方針を言葉で明示した。

「信殿。私たちが敵の護衛を受け持ちます。信殿は、乱美迫を倒すことに集中してください」

「ああ、まわりは任せませ」

信と楚水は、互いの視線を合わせると頷いた。

「いくぞ、野郎どもッ」

隊長の檄に、飛信隊は「応ッ」と声を張り上げ、気炎を挙げて駆けだした。

大將軍になるという大望を叶えるために戦場を駆ける少年と己が血潮に身を委ねるように矛を振るい続ける狂戦士が、ここに激突した。

近づく両者。

「うおおおおおッ」

天に立ち昇るかのような二人の雄たけびが木霊する。

「フウウウウウッ」

ただ、全てをこの一撃に。

鈍く光る互いの得物は、無数の命が散つていく戦場の隙間を駆け抜けた。

「おらあああッ」

そして、二人の距離は消失、激突した。

「ヴァルツ」

片や剣、片や矛。響き渡るは重い金属音。

二人の間に流れるギチギチとした連続音は交錯してままた拮抗している武器の所在を示していた。

「な、馬鹿なッ あのような小僧に乱美迫様の矛が受け止められただどッ」

と、魏兵はあり得ないと目を見開き、そう言葉をこぼす。

光景としては異常の一言。

少年然とした体軀をしてる信の剣が魏でも巨軀を誇る乱美迫の矛を正面からのぶつかり合いで、押し負けることなく拮抗を示しているのだから、目を疑う光景であったのはいうまでもない。体軀の差は、誰の目にも明らかであり、正面から打ち勝てるはずがないのだ。

そう肯定された現実すら覆してしまいそうなほどに、少年の剣には、確かな、重さが備わっていた。

それは、乱美迫という魏国の武を担う将の一撃と張り合えるほどに。

今、信が持ち得る全力全開の力を込めた一振りは、一時とはいえ、乱美迫の矛を抑えて離さなかつた。

だが。

「ぬぎぎぎぎッ」

必死の形相で矛を押し切り、相手の姿勢を崩そうとしている信に対して、乱美迫は、面の奥でニイと笑みを浮かべていた。それは、信を嘲り笑うような感情からきたものではなく、己の矛を止めてみせた信を、これまで斬り去ってきた雑兵ではなく、矛を振るい戦うべき敵の一人であると認識したからであつた。

この両者の内心の差は、そのまま力の差として現れることになる。

「フウウウ」

乱美迫は、全力で押し切ろうとする剣の重さを矛先から感じ取りながらも呼吸を整え、と一気にその力を解放。直後に、乱美迫の矛は信の剣の束縛から解放されて振り抜かれていた。


その結果、剣を弾かれた信の躰は大きく仰け反つた状態になり、乗る馬は、信の重心に引きずられる形で、たたらを踏むように後退することになる。

これにより、信と乱美迫の間に距離が生まれることになった。つまりは、剣ではなく、

矛の間合いに。

その明確な隙を乱美迫が逃すことはない。

振り切った矛先を素早く反転させると馬の踏み込みに合わせて全力の一撃を信に向けた。

「ウウ ヴァルツ」

その一撃は、これまで数多の敵を馬ごと両断してきたものである。

直後に響く「ガキインツ」と重く鈍い金属音。僅かに聴こえた叫び声とほぼ同時に地面と衝突する音、そして、舞い上がる土煙は視界を滲ませた。

「フウー フウー フウー」

乱美迫の視線の先には、馬上から一瞬で放り出されて地を転がり、その先で、這い呻く信の姿があった。

「グ、あ…、あ…あ」

咄嗟の判断であった。

信は、剣を弾かれて躰が伸び切った状態から乱美迫の矛を避けることができないと判断して、自身の躰と矛と間に剣を差し込んでいた。この行動によって、両断される事態こそ避けることはできたが、伸び切った姿勢のまま受け止められるほど、乱美迫の矛は軽いものではなかった。重く、そして、鈍く響いた金属音のあと、信の躰は一瞬で馬

上から消え去り、宙を舞って地へと叩きつけられ転がることになった。地を一転。二転つ、勢いよく転がった信の姿は、乱美迫が振るった矛のすさまじさを物語るには十分であった。

「ッ!?! し、信殿おおッ」

思わず叫び狼狽えた楚水の視線の先には、土埃にまみれ地面に横たわる信の姿があった。

「ッ いかん。信殿を護るのだ。敵を近づかせなッ」

と、正気に戻った楚水は指示を出すと、すぐに駆け出した。

その信はというと。

「グ、あ、あ、ああ……………」

と吹き飛ばされて地面に落下した衝撃に加えて、勢いよく転がった痛みにうめき声を挙げていた。

「いつてえ……………。クソが…ッ 負けねえぞ」

それでも戦う意思は一寸も削がれておらず、信は立ち上がろうと四つん這いの姿勢になると、気合を入れて一気に立ち上がった。しかしながら、その躰は強い意思とは関係なく、地面と接触した時の衝撃により三半規管は麻痺していて、大きくふらつくことになった。

「うおつ、と、ととッ」

そんな、信の躰を支えたは、楚水であった。

楚水は、指示をだしたあと、信のすぐ傍まで馬で駆け寄ると下馬。四つん這いの状態から勢いよく立ち上がった信の姿に、一瞬、安堵の息を吐いたが、すぐにふらついて倒れそうになる信の姿に、素早く己の躰を寄り添わせると、脇から手を入れて抱き上げるように支えた。

「大丈夫ですか、信殿」

「あ、ああ。すまねえ、楚水。あ、あいつは………」

楚水は、信がいったあいつがいる方角に顔を向けると言葉を返した。

「今は大丈夫です。敵は、信殿が飛ばされた直後に入ってきた一団によって、足止めされてる状態です」

「そ、そうか。正直、助かったぜ。王騎將軍たちとやり合えた敵の實力は、やっぱり、半端ねえ」

信は感覚の戻ってきた利き腕を動かすことで、先の一撃で残った衝撃の凄さを噛みしめていた。

「単純な馬鹿力つてだけじゃねえ。受けた腕だけじゃなくて、躰の芯にまで衝撃が届いてくるみてえだった」

信はそう言葉を発しながらも自身の躰に感覚がしつかりと戻ったのを確認していた。そうして「もう大丈夫だ。助かったぜ」と楚水に礼を述べると己の脚で直立した。

そして、自身を気遣うように寄ってきていた自馬に騎乗した。騎馬となったことで高くなった目線から見えるのは、ヒラヒラと目を惹く衣装に身を包んだ蒙恬が声を挙げている姿であった。

「あれは蒙恬と楽華隊。それに……………」

蒙恬は、先に乱美迫と対峙した信が吹き飛ばされた場面を目撃したことで、今、乱美迫を討ち取ることは困難であると判断して、意識を攻めから守りを切り替えていた。

「乱美迫の相手をまともするのは危険だ。楽華隊は、今、後方で展開している重装盾兵が前面にくるまで時間を稼ぐぞ」

と指示を飛ばす蒙恬楽華隊の後方には見慣れない部隊を率いた将の姿があり、旗には、『馮』の文字があった。

「いくぞッ 俺達が前線を支える盾だ。皆の者、気合を入れろッ」

重装盾を主軸とした部隊は、楽華隊が稼いだ時間を用いて、素早く整然とした隊列を組み上げるとゆつくりと前進を開始した。

「弓騎兵は、その機動力と高さを生かして乱美迫を集中して狙え。奴の動きを制限する」

それは、前面に重装盾兵。後方に騎乗した弓隊を率いた部隊であった。

「あれはたしか、朱錐のおっさんの所の隊。なんでこっちに……」

そう、信がこぼしたのは無理はなかった。

本来、第一軍は第一軍、第二軍は第二軍であり、それぞれは別の軍である。そのため、この二軍が戦いの最中に連携を取ることはあつたとしても、第一軍の持ち場に、第二軍の者が勝手に乱入することは、その軍を率いる将との軋轢を生みかねない行動である。当然、朱錐の側近である馮がここにいるのは勝手な判断によるものではない。

それは、前日夜の軍議に遡る。

「土門様。右軍の将朱錐殿がお越しになりました」

「入ってもらえ」

朱錐が促されて中央左軍にある天幕に入ると、軍議のために用意された戦術版を前に思案するように腕を組んで佇む土門の姿があつた。

土門は、朱錐の姿を認めると、組んでいた腕をとき、躰を向けると言葉を発した。

「ご足労頂き、感謝する」

と拱手した土門に朱錐も拱手をして言葉を返した。

「いえ。第一軍の将であられる土門將軍の元に私が足を運ぶのは、当然のことです。

……第二軍の勇将采備殿に比べれば若輩の身であります、精一杯に務めさせて頂きます」

朱錐の言葉に、土門は瞼の裏に「ムハハ」と朗らかに笑う亡き同輩の顔を浮かべると言葉が発した。

「うむ、お心遣い痛み入る」

こうして始まった軍議は、夜中まで及んだものの、おおむね良好に推移、いくつかの策を為して終了する運びとなった。

つまり、朱錐軍所属の馮が重装盾を連れて左軍後方予備隊に配置されているのは、左軍の将土門に申し出た編制を用いた策の一つであった。

「乱美迫が来るぞ。構えろッ」

朱錐が自ら鍛えあげた重装盾は、乱美迫の一刀をも見事にいなし、さらに、突破できずに動きの鈍った乱美迫に対して弓矢を集中させた。

「弓、放てッ」

弓騎兵は、重装盾隊の後方という位置取りでありながら、馬上弓という高さを活かして一斉に弓矢を射出した。

「そのまま乱美迫を狙い続けろッ」

直線的な軌道で飛ぶ百を超えるの弓矢に、さしもの乱美迫も守勢に回らざるを得な

かった。

「フウウツ」

迫りくる百数十の弓矢に対して、乱美迫は手に握る矛を縦横無尽に振り回して切り落とした。このままの状態が続くのなら、いつかは、乱美迫に幾重もの矢を生やすも可能であろう。が、それを黙って見過ごすほど、乱美迫隊副官の魚燕は愚鈍ではない。すぐに、對抗するべくいくつもの指示を飛ばした。

「盾だ。いますぐに盾を用意しろツ 騎馬兵は何をしている。乱美迫様を護らんかあツ」

指示を受けた騎馬兵は、乱美迫と重装盾の間に入り込むと主を一気に取り囲み、その躰をもってして盾とした。

「そうだ良おしツ 次は手槍だ。手槍を投げ込めえツ 敵弓兵に自由に打たせるでないぞおツ」

騎兵から「死ねえ秦の侵略者どもめツ」と次々と投げ込まれる手槍は、重装盾を飛び超えて、弓騎兵に襲い掛かるのだが。

「手槍程度、想定済みだ」

馮から特別な指示がなくとも弓騎兵は、前後左右に馬を逃がすための隙間を取っており、三百人の弓騎兵は、各隊ごとに投げ込まれた手槍を巧みに避けては、反撃の矢を放

ち続ける。

「むうッ、重装盾隊に弓騎兵隊。どちらもかなり鍛えられおる。これでは、こちらの損害が増すばかりか。だが、これはこれで、我らの重要な使命は果たされたも同然」

と、乱美迫隊の苦境に険しい表情を見せる魚燕であったが、そこには、焦りの感情は全くなかった。

「いま一刻を耐えよッ。転機は必ず訪れようぞ」

秦中央軍の戦いは、ここからさらに、激化の一途を辿ることになる。

第70話

「盾兵ツ 我らはこの場を堅守する。隊列を乱すことなく敵を押しとどめろ」

中央左軍左側面の戦いは、朱錐の側近である馮が率いる重装盾兵と弓騎兵が防壁の役割を担うことで、戦況は劣勢から膠着状態へと移り変わっていた。

「弓騎兵は乱美迫の動きを見逃すなッ」

戦術的には、乱美迫が前線の突破を図ろうと顔を出せば、集中して矢を射て勢いを削ぎ、突破自体は重装盾で押しとどめ、隊の動きとして陰りの見えた所で、さらに矢を射かけることで、連続した攻撃を封じに掛かっていた。

その様子を少し離れた場所から眺める者たちがいる。

「すげえ、あの乱美迫ってやつが自由に動けてねえ」

飛信隊長信と楚水であった。

「ええ。守りに偏重した部隊のようですが、あれがしつかりと訓練を施された隊の強さです」

「俺はあいつの矛を受けたから良くわかる。あいつの攻撃は、生半可な威力じゃなかった。それをあんな風に……」

信の眼に映るのは、乱美迫の矛に晒されながらも隊列を乱すことなく押しとどめる重装盾兵の姿と矢を射かけ続けることで続けざまの攻撃を許さない弓騎兵の姿があった。

「戦場において、強力な武を有する将の存在は、殊更に強大です。ですが、その強力な将一人によつて戦のすべてを決することができないのも戦いなのです」

「ああ。それなら、わかるぜ楚水。初めて人を率いた時にも感じたけど、はつきりとわかつたのは、三百人隊になつたときだ。皆の力が一つになつたからこそ、馮忌つて將軍のところまで俺の剣が届いたんだ。個の力だけじゃねえ。皆と力が合わさつた時に発揮される集の力の凄さ、そう言うことだろ」

「その通りです。隊の力を結集することができれば、どんな困難な状況であっても活路を見いだせるはず……」

と、楚水はそこまで話してから、徐に言葉を止めて視線を落とした。そのことに疑問を感じて、信は視線を向けるのだが、楚水が何かを伝えようとしてると感じて、静かに待つことにした。そして、一拍ほどしたあと視線を再び上げた楚水は思いを口した。

「いえ、正直に申し上げます。私は、六将とやり合えるほどの武人の強さを侮っていた。一丸となれば、どんな敵であろうと互角以上にやり合える、と。……私の間違つた判断が信殿を危険に晒してしまったことを謝罪します……、また私は——」

その時、楚水の言葉を遮るように信は声を張り挙げた。

「お前は間違っちゃいなえッ」

「ッ、信殿」と、それに驚いた楚水は信を見た。

「お前の話を聞いて、隊長の俺が決めたんだ。お前だけが責任を感じることにじゃねえよ。例え、それで俺が死んでいたとしても、それは俺の力が足りなかったからだ。なあ、楚水。俺たちは全員で一つなんだ。そこには、古参も新参もねえ。ましてや、成功も失敗も関係ねえ。そういうの全部をひつくるめて飛信隊なんだ。だから、二度とそんなことをいうんじゃねえ」

信の真つすぐで芯のある声は、あの日以来、楚水の胸の内に留まり続けていた気持ちの淀みに清らかな風を吹き込ませた。

「俺たちは前だけを見て進む。いいな」

「……………はい」

信は熱くなった躰から熱を逃がすように息を吐いた。その後、少し間を空けると改まるように楚水に声を掛けた。

「俺たちはどうすればいい」

乱美迫隊と正面から衝突した飛信隊であったが、隊長同士的一幕のあと、楽華隊の強襲、馮隊重装盾の参戦をへて、すでに乱美迫隊の意識は飛信隊から離れて、戦線を守護するように展開する馮隊と突いては離れる楽華隊に移っていた。そのため、隊の損耗は

軽微に留まっていた。

楚水もまた、信とは違った形で気持ちを落ち着かせるために数瞬瞑目。それから目をゆつくりと開くと言葉を返した。

「はい。楽華隊の動きに合わせるべきかと愚考します。いかに、この戦線において乱美迫が強大であろうと、将一人にできることに限界はあります。ですので、乱美迫を護る兵を減らして、数でもって将を討つ。回りにくいようですが、これが最善かと」

信は楚水の眼をしつかりと見据えてから頷いた。

「よし。それでいく。俺たちは、ここから仕切り直した。いくぞ、皆なッ」

そうして、飛信隊が再び戦線に加わったことで、左軍左側面の戦いは、秦に傾き始めることになったが、それもわずかな間に過ぎなかった。というのも。

「そろそろ、いいだろう」

魏中央軍を指揮する靈凰が、その知略を活かして本格的に動き始めたからだ。

「楔を打ち込む」

靈凰は、秦軍を正面に見据えながら、右腕を右方に向けて水平に掲げると、指示をだした。

「右から合図をだせ」

戦況を見定めた靈凰の冷酷無慈悲な瞳は、この一手で、秦中央軍が大きく軋みを挙げ

て歪む姿を明確に捉えていた。

一方、靈凰の合図の先、右方の将輪虎は、待ちわびていたかのように笑みを浮かべていた。

「やれやれ、ようやく僕らの出番か」

輪虎は、怪我の具合を確かめるために軀をほぐしたときに、少しばかり眉を顰めることになったが何事もなかったかのように、靈凰の合図に応えて号令を発した。

「輪虎隊。出撃だ」

輪虎の号令は、決して張り上げたものではなかったけれど、皆の耳には確かに届いた。そして、戦線に加わるべく移動を開始した輪虎隊であったが、その最中、輪虎に声を掛ける者がいた。

「輪虎様、お待ちを。どうか、先頭ではなく二列目にお入りください」

そう声を掛けたのは、輪虎とその直下の少数精兵部隊で構成される輪虎本隊と、魏兵部隊とを繋ぐために付けられた魏国生え抜きの将魏良であった。

「なんだい、魏良。僕の邪魔をするつもり」

輪虎は魏良の言葉に対してそれほど不快に感じたわけではなかったが、意図は知っておくべきかな。と先を促すように視線を向けた。

「いえ、そういうわけでは。ですが、万が一にも、あなた様が討たればこの隊は消滅し

ます故、どうか」

魏良の眼差しに一点の陰りもなく、実直な魏人の姿そのものであった。

「……わかった。そうしよう」

輪虎が素直に了承の意を表したことを意外に感じたのか、趙国時代から付き従う側近の一人が声を掛けた。

「よろしいのですか、輪虎様」

「別に。確かに、怪我の具合が芳しいってわけじゃないからね。彼ら（魏兵）が頑張るっていうなら、僕は任せるだけさ」

輪虎はそう口にしなから道化した仕草をしたあと、含むような笑みを浮かべた。

「フフツ 介子坊さんも動き出したみたいだし、楽しくなりそうだ」

輪虎隊は、配置位置から靈鳳本陣のある左に流れる形で移動を開始すると、秦軍から見て靈鳳本陣と位置関係が被さる形、すなわち、秦左軍と右軍との継ぎ目になる場所に向かって突撃を開始した。

「急報ツ 左方にいた敵後方部隊が、両軍中央付近を目掛けて突撃してくる模様ですツ」
王賁は思うように動かすことのできない自隊に苦戦を強いられていたが、急報を受けて、意識を乱戦の先に向けた。

「中央に……、まずいな」

この場から見える敵前線の後方から挙がる砂塵は、敵部隊の位置とその勢いを如実に示していた。

「現状で五分。ましてや中央はどちらからも予備隊を出しにくい場所だ。左軍の後方予備隊だけで敵部隊の突撃を防ぎきけることは難しい。右軍も呼応すれば……」

そこまで思考を進めたあと王賁は、自身が全体の指揮を執れるほどの立場にないことに唇を噛みしめた。戦況を理解しているからこそ最善な策を取ることができない己への憤りを覚えたのだ。

そのうちにも敵部隊は着実に迫っている。一拍の瞑目のあと目を見開いた王賁は声を挙げた。

「聴けッ 玉鳳隊。我らはこれより突撃してくる敵部隊の迎撃に移る。だが、この持ち場を放棄することはできない。よって、隊を二つに分ける。一つはこの死守、もう一つ俺に付き従い、敵部隊の迎撃だ」

そう決断を下してからの王賁の行動は速く、この場を死守する部隊兵七百と敵迎撃部隊兵三百に分けて、自身は転進を始めた。

その最中、王賁に懸念の声を掛けたのは、玉鳳隊の古参兵のひとりであった。

「王賁様。たった三百では、あつという間に踏みつぶされますぞ」

王賁は、わかっていると肯定しながらも決して無策なわけではないと示すために語気を強めて続けた。

「だからこそ、転進している」

隊の機動に意識を向けた古参兵の顔に理解の色がひろがるをみた王賁は、さらに続けた。

「勝負は一瞬。一撃で屠り、敵部隊の足を止める」

手の内にある槍の感触を確かめた王賁の眼は、獲物を狙う鷹のように鋭く研ぎ澄まされていた。

かわつて、秦右軍。

「朱錐」

と、名を呼んだ虎豹は、朱錐と視線を合わせた。

「ああ。こちら側にいた敵後方の部隊も中央に入るようだ。中央は任せるぞ」

言葉の後に朱錐は、武運を祈ると思念を込めて拱手を掲げた。虎豹もそれに応えるように拱手を返し、二人は互いに視線を合わせて頷く。そしてすぐに、虎豹は部隊とともに駆け出した。朱錐はその背を見送り、改めて、現在の戦況について思考を巡らせた。

靈凰の意図はなんだ。

乱美迫の左軍左側面への強襲によって中央の予備隊を割かせて薄くし、左右両軍の継ぎ目を正確に突くであろうこの突撃。一見、横陣の中央突破が狙いにも見える。それだけなら、虎豹隊と保険として土門殿が残っていた予備隊を集結させれば押しとどめることはできよう。前線は濯と青騎の指揮によって乱戦による膠着状態は徐々に優勢に傾いている。左軍の側面を突いた乱美迫の進撃も馮たち重装盾隊で押しとどめられ、全体として大きな危機が迫っているとは言えない。さらに、私と土門殿は、いまだに自由な機動が可能である以上よほどのことがない限り、早々に崩されることはないはずだが……。

靈凰はなにを狙っている。

などと朱錐が鬼面の奥で靈凰の狙いを見定めようと試みている頃。当の靈凰は、輪虎、介子坊隊の順に並んだ背の先にある秦軍に向けて、熱をもたない笑みを浮かべつつどこまでも冷酷な眼差しのまま静かに呟いていた。

「私の仕事は策をなして将を討つことにある。果たして、お前たちに止められるのか。見ものだ」

三日目、昼。この日一番に激しい攻防の幕は今まさに開こうとしていた。

第71話

「さあて貫いてみようか」

輪虎隊兵五千は、部隊の形を先頭を頂点に左右の後方に線が流れる隊列を組むと秦軍の中央に向けて加速していく。

その輪虎隊の先頭を司るのは、魏国生え抜きの将魏良であった。

「今こそ魏国の怒りを示す刻。火龍靈凰様の加護がある限り我らは決して負けはしない」

魏良が天に向むけて、矛を、声を高々と挙げれば、応えるように天地に木霊するは魏兵の咆哮であった。

それは対峙する秦兵の躰をも揺るがすほどに響き渡っていく。

「ハハッ 凄いね。この士気の高まり。さすがに魏の火龍の名は伊達じゃない」

輪虎は感嘆するように声をだしたあと、これならいけそうだと呟き側近の一人に声を掛けた。

「僕の旗を掲げる用意をしておいて」

秦と魏の中央軍がぶつかる平野を見渡せる丘の上、蒙？本營。

「魏兵およそ五千が突撃を開始しました」

蒙？は物見の報告を耳に留めながら、むううと息を吐きながら魏兵の動きを凝視していた。

「やはり敵は中央突破を仕掛けてきたか。いやしかし、なんじゃこの形は……」

蒙？を含めた幕僚たちは動き続ける戦いとそれに伴う陣形の変化を丘という高所から眺めていてさえ、魏の隊列の意図が読めずにいた。

「なぜ主攻になりえる五千もの部隊を縦に配置しておるのじゃ。あれでは突撃の効果は前列の働き如何になるのではないか。前列がとめられてしまえば後列は玉突きのごとく前のめりになってしまい咄嗟に動くことすら難しいのではないか」

蒙？の疑問はもつともであった。

単純な中央突破を図るのなら、輪虎、介子坊という猛者を同時、或いは、時間差を使つて行うことで突破の可能性は大いに跳ね上がるのは明白であった。にもかかわらず、後列の兵五千は錐型で突撃している前列のすぐ後ろに引つ付く形で、分け目のないきれいで縦に長い隊列を組んで追従していた。

これでは後列の動きは前列の突撃の成否に大きく左右されることになってしまい、この突撃において後列の力はまったくもって寄与しない形といえた。

そうして丘の上の本陣で蒙？たちが魏の隊列の意図を読みきれずに表情をしかめているその丘の下では、魏の火龍が鉞を振るう瞬間に向け酷薄な笑みを浮かべていた。

「戦いとは生存競争。強き者が弱き者を討つ。私の策に運などという曖昧なものはない。」

蒙？らが敵の軍容の在り方を理解できず疑念に頭をもたげる間にも戦況は進んでいく。

「敵後方に動きあり。左方に向けて戦線に平行する形で兵一千ほどの歩兵部隊が移動しています」

「歩兵が千か」

この兵一千という微妙な数が蒙？たちの判断を鈍らせることになる。

「左軍左方面はややこちらが優勢……そこに千、兵一千か。土門に伝令じや。敵後方の動きに注意をはらえ、とな」

蒙？は、土門であれば千ほど敵が増えたとしても戦線を崩すことなく持ちこたえるのは可能であると判断を下しながらも、この動きには何かがある。と警戒の色を強めた。

この時蒙？たちは魏の縦に長い奇妙な隊列に気を取られてある一つことを見落としていた。

同じ頃。秦右軍前線部。

「中央は敵の突撃にもちこたえられるでしょうか。ここは我々も動くべきでは」

と問うのは表向き右軍前線の指揮官である濯であり、そのやや後方で待機していた青騎は馬を前進させて馬首を並べると静かに言葉を返した。

「こちらからは虎豹が。それに、蒙？將軍の先陣を任される土門さんが鈍いお方なはずがありません。ですので、ひとまず中央は問題ないでしょう。それよりも気がかりなことが一つ」

「気がかり、ですか」

青騎はさきほどから覚えていた違和感を言葉にした。

「ええ。まず、こう言つては難ですが、私は戦術に関して一家言あると自負しています。その私からして、いまこの前線の状況は非常に不可解です」

現在秦右軍前線部では、秦右軍が魏軍の機制を制する形で、大きな打撃を与え始めていた。

当然、濯の眼から戦場を語るのならそれはとても良いことであつて、気がかりなるようなことは一つも浮かばない。そのことを表情から察した青騎は続ける。

「わかりやすく説明しましょう。私と靈凰。この二人が真つ向から軍をぶつけ合うとす

るのなら私たちの力は、ほぼ互角です。戦術のキレならあちらが、やや上でしよう。まあわたくしには靈凰が持ち得ない武がありますので、結局のところは互角。両者に明確な差、というものは存在しません」

龍の面で素性をかくしてるとはいえ元六大将軍である青騎がそこまで評した靈凰の持つ力というものに、それほどですか……、と濯は驚愕を現すようにやや上ずった声をもらしてゴクリとのを鳴らした。

「理解できたようですね。つまりは私たちの間にそのような明確な差というものが存在していたのであれば、当の昔に、私が靈凰の首級を挙げています」

さらに青騎はもう一つ事実を付け加えるように言葉を続けた。

「また私を含め、戦の最中に戦術における失策というものは大なり小なり、必ず存在します。それすらを逆手にとって反撃してくるのが大軍師とまで評された靈凰さんなのですが……」

だが、いままさに青騎が見据える戦況にその面影を見て取ることはできない。評するならぎりぎり及第点、という程度であった。

「あまりにお粗末です。ここまできると畏の存在すら疑いたくなります」

そのとき魏軍の戦線を改めて見渡した青騎は、秦、魏軍がぶつかる前線を飛び越えた先、縦に長い隊列のさらに後方で舞うわずかな砂塵、それを視界の左端に捉えたとき、先

程から覚えていた違和感が確かな形になって浮かび上がるのを感じた。

「濯。朱錐に伝令を出す準備をなさい」

秦左軍左側面では、楽華隊の蒙恬が騎馬隊の機動力を活かして乱美迫隊を翻弄していた。

「重装盾隊が敵の侵攻を押しとどめる限り、俺たちは陽動に徹する。敵が俺たちを追ってくるなら距離を保って戦いから引き離し、俺たちに背を向けるならその背を突く」

楽華隊は乱美迫隊に狙いを定められていながらも蒙恬の機転と少し後から復帰した信たち飛信隊の活躍によつて大きな損害をだすことなく乱美迫隊の足止めに成功していた。

「決して正面から乱美迫隊と向き合うな。俺たちを追えば、飛信隊がその背を突く。その逆も然りだ」

乱美迫隊が蒙恬の術中に嵌った経緯を知るには、時を少し遡る必要がある。

「尋常じゃないな……」

蒙恬は間近に見た乱美迫の武の力に、いまの自分たちではあの力を正面から受け止めるに足る力はない、と早々に見切りをつけていた。

けれど、その後あえて敵の意識を向けるために乱美迫隊の端の兵を掠めて討ち取ると自らの脚を止めて言い放った。

「飛信隊なんてよわよわな隊じゃなくて次は、俺たち精兵である楽華隊の相手をしてもらおうか。噂の狂戦士さん」

信が訊いていればブチ切れそうな言葉を吐きながら蒙恬は、挑発するように劍先を乱美迫に向けた。

「こいよ。若造の俺が怖いのか」

蒙恬は程よく強弱を付けた声色で耳目を集めて乱美迫に向けていた劍先をゆらゆらと弄ぶ。

そのあからさまな挑発行為に引っ掛かったのは、乱美迫本人ではなく、意外にもその副官魚燕であった。

「そ、の小僧を殺せえ！ 貴様のようなヒラヒラとふざけた格好で戦場にでてくる輩が乱美迫様と戦おうなどは十年早いわア!!」

魚燕の挙げた声に乱美迫隊の騎馬衆は堰を切ったように一斉に駆け出し、その脚音が地鳴りのように音を鳴らし始めた。

「これは……、ちよつと火を付きすぎた？ って後悔しても遅いか」

と蒙恬は騎馬の腹を蹴り込むと怒りを露わにしている敵の突撃に向かつていく。

「先頭の小僧を殺せええ!!」

敵が怒声が響くなかでも蒙恬は、冷静に敵の動きを見極めると声を発した。

「俺の挑発で敵は我先にと言わんばかりに陣形が崩れている。これなら、正面からぶつかり合うことを避ければ切り抜けられるぞ。皆な、俺について来いッ」

そうして蒙恬は馬を正面からぶつかり合わないように敵の凸面にたいして撫でるような向きに馬首を向けて走らせた。

この狙いは的中する。

なぜなら、敵は挑発に乗せられたことで隊列は早々に乱れて隊としての機能が著しく低下してしており、楽華隊の絶妙な機動に対して有効打を打つことなくすれ違いを許してしまうかに見えた……

「よし。なんとかなりー」

それは敵集団の半ばを越えた辺りでのこと。あとはこの状態を保ったまま切り抜けるだけだ。と内心に安堵を浮かばせていた蒙恬に降りかかった。

そこは激流のような騎馬の河。

蹄で踏み鳴らされる重低音は腹の底にまで響いて揺らす世界。

そんななかを連なる音を乱して進み血潮の瞬きを身に纏って迫る影があった。

「ヴァッ」

他を強引なまでに押しつけて、それは忽然と現れた。

予期せず、わずかに陰った視界によって身の毛のよだつ感覚が蒙恬を襲う。

「ルツ」

その刹那に振り下ろされる矛。

それは瞬の間の出来事であった。

本能のままに蒙恬が剣を盾にみたてて身を馬の背にのせるように大きく仰け反ろうとする間「ガツアキン」もなく、重く響く金属同士のぶつかる音。

「ぐッう……」

と同時に剣に伝わる衝撃が蒙恬の躰を突き抜けた。そのまま馬の背に叩きつけれることになった蒙恬が苦悶の表情を浮かべて身動きができないその隙を見逃すことなく乱美迫の矛がせまる……。

ことはなかった。然しもの乱美迫であっても一撃を放ったあとは、馬の流れに逆らうことはできず濁流に吞まれる形で二人の距離は離れることになった。

「ハハ。びびったあ……」

こうして蒙恬の躰の芯に鈍く響いた金属音はしばらくの間消えることなくその心胆を揺らすのであった。

その後馮たち重装盾隊が隊列を組んで前線の盾となったことで蒙恬たち楽華隊は、敵

の動きを制限するように突いては離れ、離れては突きを繰り返すことになる。それは飛信隊が復帰したことにより効果を上げるのだが、一つの報せが齎されたことで状況は変化していくことになる。

「蒙恬様。こちらに敵歩兵部隊兵一千ほどが向かっております」

第72話

今、蒙恬の目に映るのは戦場の中央に縦長に配置された敵軍の姿とその後方から出撃したのであろう歩兵部隊の姿。そしてその敵歩兵部隊が自身のいる場所である左軍左方に向かつてきている姿であった。

「ここは重装盾隊と信たち飛信隊の遊撃でしばらくはもつ、か」

蒙恬は戦況を鑑みて乱美迫隊の足止めから敵歩兵部隊の迎撃へと舵を切った。

「よし、俺たちは向かつてくる敵歩兵部隊の迎撃に移るぞ。遮るものがない平地の戦いなら楽華の騎馬隊で敵歩兵を一気に刈り取れる。この機を逃さずに一気に叩く。行くぞ、楽華隊」

この蒙恬の判断は的確で平地を移動する歩兵を騎馬隊で攻撃できる状況は、騎馬の特性がもつとも活かされる場面であった。

まず馬というものは、一度駆け出してしまえばそれだけで強力な武器に変わる。馬の持つて生まれた馬体からくる重量然り、人の何倍もの速さで駆けられる脚の速さ然り、速度に乗った馬というものは人間にとつてそれだけで脅威といえた。さらには平地で、なおかつ障害物のない戦いならばその攻撃力がもつとも発揮される場面である。また、

敵歩兵はただっ広い平地を移動していることもあり、騎馬の機動力を用いれば四方どの方角からでも攻撃可能であった。

つまりは、敵が守備陣形を築いたあとに方向転換して脆い場所から攻撃を仕掛けてもよいし、部隊を二つに分けて挟み込んでもよい、という攻める側にとって圧倒的に有利な状況なのである。

そうして楽華隊が敵歩兵部隊に接近、攻撃を開始しようと狙いを定めたとき蒙恬は、一つの違和感を覚えた。

「妙だな。敵に守る素振りが視られない。俺たちが攻撃してくることが分かっているはずなのに、対応しようとしなれないのはなぜだ」

蒙恬の言葉が示す通り、敵歩兵部隊は接近している蒙恬たち楽華隊に見向きもせず、いつそ存在自体に気づいてはいないかのように、ただ目的に向けて邁進しているように見えていた。

そんな蒙恬がいわゆる思考の引つ掛かりに気を取られていた所に突然、側近より慌てた声が掛かる。

「も、蒙恬様。新たに出現した敵騎馬隊が我らに向かってきております」

この味方の声に思考から現実に復帰した蒙恬は状況を把握すべく視線を周囲に向ける。

「あれか……。まずいな、俺たちは誘い出されたのかもしれない」

視点は、新たに現れた敵騎馬隊に移る。

「我が軍の歩兵部隊に攻撃を仕掛けようとしていた騎馬隊が転進を始めました」

視線の先には急いで転進してその場を離れようとしている秦の騎馬隊の姿があった。

「ほう。平地の歩兵に素早く狙いをつけられる視野の広さに危機を察知してから転進までの速さ。ふむ。有利な状況であつても固執せずに離れる判断も悪くない。旗の名は『蒙』か。あの蒙？の孫にしてはなかなかどうして、的確な上に判断も早いようだ」

と騎馬隊を率いる優男は微塵も表情を揺るがすことなく呟いた。

「追いますか」

それは彼の側近が放った抗戦的な言葉であつたが、優男はとくに感情を見せることなく、放っておけと小さく応えた。

「しかし、それでは後々我が部隊のまわりに張り付かれませんか」

そう問う声にも何の心配もいらないと込めるように優男は一言を返した。

「ほんの一時の事だ」

そのまま魏の騎馬隊は転進して離れていく秦の騎馬隊に見向きをせずに乱美迫隊が戦う戦場へと向かう。そうすることで先に出た歩兵部隊に追いつき、彼らを追い越して先に騎馬隊が突入していく。

この騎馬隊が先に突撃することによって乱戦上の空白を作り出し、遅れて着く歩兵部隊が戦線の腰となる指揮所の土台を作り上げていく。

そうして出来上がった土台に乱美迫を呼び寄せることで指揮所は完成することになる、のだが。

「周鋏」

と名を呼ばれた漢は「承知しています」と拱手をして返しすのだが、その間にも

「でるで、乱美迫」

と戦場の息吹を深く吸い、満たされぬ空腹に喘ぐ野獸のごとき呼吸音を奏でる乱美迫を先頭に部隊はすぐにこの指揮所にをあとにしていく。

この一連の動きは、一切の滞りをおこさずに行われ、敵を引き離すために転進して距離をとっていた蒙恬やこの場でつかず離れずの戦いを繰り広げていた信たち飛信隊、そして戦場の壁となつてゐる馮たち重装盾隊にも敵部隊が何を狙つてゐるのかを把握する機会と時間を与えなかつた。

というもの、敵の指揮所が形成されていく段階で彼らは、敵はこの戦場に対して本格的な攻略を仕掛けてくると身構えてしまったことで各部隊の動きにある種の緊張による固さがうまれていた。であるのに、その形成された指揮所はすぐに解体され、同時に別の敵騎馬隊がこの場に出現したことで指揮所を中心として整理されそうであつた戦

線は、彼らの思考を押し流す激流となつて一気に流れ出したからだ。

目まぐるしく動く戦況は彼らの思考と脚を止めさせ、動き出した乱美迫隊の初動を捕捉することを困難にさせた。

「まさか敵の狙いは——」

蒙恬は戦線から距離を空けていたために、この戦いの全体像が掴みやすい位置にいた。そのため敵の本当の狙いにいち早く気づけたのだが、距離をとつていたがゆえに、標的に向けて走りだした乱美迫隊の背をただ眺めるだけしかできなかつた。

「ツ迷っている暇ない！」

「も、蒙恬様お待ちを!!」

と叫ぶ隊員を背に蒙恬は戦場に向けて駆け出した。

蓋を開けるなら、魏が仕掛けた策は極めて単純であり、中央後方から合計で三千の兵を順に、歩兵、騎馬、騎馬とこの場に派遣しただけである。

ただしそこには、進行速度の差を用いたからくりがあつた。

先に歩兵隊をだし、その進行速度に合わせて騎馬隊を出撃させ、あとに出た騎馬隊が歩兵隊を追い越すことで騎馬隊による最初の突撃をする。

これによつて戦場に敵の少ない空間が生まれることになり、あとに到着した歩兵隊は

敵の妨害を受けることなく指揮所の基礎を完成させていく。

そして突撃前、歩兵隊を追い越す段階で歩兵に合流していた靈凰がその中に納まることで指揮所を機能させ乱美迫を招集することで守備を万全にする。そこから、次の機を作るために旗を掲げて合図を出し、さらなる騎馬隊の乱入を促した、という流れであった。

一連の流れには、これらは別に隠された狙いが存在していたのだが、ここでは割愛する。

靈凰は至極当然に戦場でおおくの経験を有した王騎のような存在たちをただ一つの策で倒し切ることは難しい、と理解していた。それゆえに素性を隠した王騎の存在を知ったときから戦の全体像を書き換えていき、そこにいたる瞬間を作り出すべくいくつもの策を弄していた。

それは単純で明快な論理。個を討つなら数という基本戦術。

そのために靈凰は、まず敵の正確な陣容の把握に乗り出したのである。

それが戦に介入して陣編成を変更した日のことであり、連携を視野に入れない単純な突撃を繰り返したのは、敵部隊の個体差を測っていたのだ。

そこからさらに高い反応を示してくる部隊位置を面として捉えて軍の境目を見定め

ると秦の両二軍の編成差を見て取ることに成功していた。

そこから靈風の思考は飛翔していく。

それは単純な立場的の違いからの差ともえるものでもあるが、蒙恬や王賁、信たちが隊として捉えていた思考を靈風は、戦場全体に対して常に思考しており、それこそが彼らとの明確な差を生み出す要因になっていた。

乱美迫の左軍左方側面への突撃から、横陣の中央を貫くような突撃、密集した縦長の陣形。そして、小分けにした三千の兵。

そのすべてがこの刻のために施された策略であり、中央の戦いの趨勢を決定づける一手であった。

「ど、土、門將軍……」

戦場の風に揺れていた馬の鬣に媚びれ付いていく鮮血の色。

「ど、どもんしようぐん、が……」

そこには朱く染まりゆく鬣に力なく預けられた躰と空しく握られまま鈍く光る矛の姿があつた。

すべての事の起こりは、蒙？からの伝令であつた。

左軍の将である土門が左軍後方でその奮闘を見守っていたときの事。

「土門將軍」

名を呼ばれた土門は、視線を声のした方角に向けた。

「蒙？様より敵兵一千ほどの歩兵隊が中央から左軍の後方を移動しているゆえ、今後は敵

後方の動きにも注意されたし、とのことです」

それは蒙？が本營の丘の上から出した指示であつた。

「中央から歩兵が一千。敵後方の動き……」

と土門が考えを纏めるように眩き、秦と魏が戦う戦線の先に視線を飛ばしてみれば、確かに部隊が動いている兆候を感じ取ることができた。

「うむ。相分かつた」

これにより土門の意識は、中央の戦況を鑑みながらも左軍の左方側面に加えて、戦線の後方にも向けられることになる。

「土門様。敵後方に新たな砂塵です。動きの早さからみて騎馬隊、同じく左方に向かつている模様です」

「なに。さらに騎馬隊だと……。もしや敵の本当の狙いは」

この報告は土門に、敵は左軍左方側面を早期攻略して秦軍を横から崩すことにあるのではと思案させた。

「土門様。すでに歩兵が一千、それに今、騎馬隊が一千です。すぐに左方へ兵を送るべきではありませんか」

そう進言した側近に対して土門は分かっていると頷くとすぐに行動に移した。

それは、左方側面の戦線が崩壊したとしてもすぐに対応できる位置へ自隊を動かす真つ当な選択であつた。

土門が戦線を維持するためにした選択。それが、靈鳳よつて用意され、答えを誘導されたものとも知らずに……

こうして左方に寄る形になつた土門のちにそのことを悟つたのは、自身が斬られる寸前のことであつた。

それは、苦戦の最中には自らが先陣を切り部隊を鼓舞する土門の気質すら読んだ策略。

そう、靈鳳の狙いは、左軍の将軍土門を早々にかつ効率的に討ち取ることで秦の左軍を崩壊へと導き、その流れのままに、右軍すらも本日中に討ち滅ぼすという算段であつた。

あとは、その道筋にむけて少しばかりその背を押しやればよい。

「秦将の首を晒して敵の戦意を挫く」

秦将の首を晒し敵左軍が右往左往する際に、正面と側面、そして自らがいる後方の三

方から攻めたててやれば、兵士の逃げ場は自然と右方に限られる。そして戦場で戦意を失くした兵士ほど厄介な存在はいない。ただ必死に生き延びようと逃げる彼らが勝手に味方右軍の隊列を乱して混乱を招き、その混乱は右軍の戦意を奪っていく。そうして崩壊へと動き出した歯車は、もはや何者であつても止めることはできない。

「決着の刻だ」

靈風の命に従うべく魏兵がゆつくりと馬の鬣にうなだれたまま動きをみせない秦將に近づいていく。

「王騎よ。この戦いの敗因は、私と同等の視点を持った貴様がその私と同じ立場に立っていないかつたことにある。王騎、それに鬼面の屍を晒して、戦に華でも添えてみようか」
ここまでほぼすべての流れは靈風の思惑通りに進んでいた。

土門將軍の力なく動かぬ姿は側近であつた者たちの思考する力を失わせ、ただ「将、ぐん……」と呆然とうなだれる案山子にさせていた。

が。

その時、ひとつの影が魏兵の騎馬が乱立する隙間を縫うように駆け抜けた。

その影が土門の首を挙げるために近づいていた魏兵に肉薄した瞬間、その魏兵の躰は

糸の切れた人形のように馬上から崩れ落ちることになった。

そうして現れた影は叫ぶ。

「何を呆けている。顔を挙げろ秦国の兵たちよ」

その高く凜とした声は、うなだれるだけで動きを止めていた秦兵の顔を挙げさせた。

そして声の方向にむければ佇むのは美しい一人の女戦士の姿。

女は、そこから跳躍して馬上で伏せる土門の背後に降り立つとさらに続けた。

「將軍はまだ死んではない。矛を握りしめているのがその証拠だ。お前たちの將軍はまだ命の狭間で戦っているんだぞ」

そう叫んだ女戦士は、羌族として培った知識と呼吸法を頼りに強制的な目覚めを促すべく強引なまでの賭けにでるのであった。

「戦いはまだ終わっていないッ」

それは、李豹を救うために禁術を使い、生死の狭間から連れ戻した玄象だからこそ感じ取れた命の機微であった。

「刮目せよッ」

そうして剣を収めて「一か八か……」と小さく息を吐き、意識を、気を、集中させて解き放った。

第73話

「目を、覚ませっ!!」

玄象は己の内に廻らせた力を両の手の平に集めて骸のような土門の躰の内にむけて打ち付けた。

とたんに、土門の躰がビクンツとうねるように動いて跳ね「グ、ガフツ」と吐血した。「視よっ。將軍は息を吹き返したぞ。矛を、盾を挙げて戦え!まだ我々は負けてはいない!!」

その声は、ほぼ死に体とはいえ土門が生存している事実を示し、彼の側近らにわずかな希望の火をともした。

「しよ、將軍を、將軍をお救いしろッ」それはかすかな可能性に縋る側近の悲痛な叫びであった。が同時にその叫びこそが、彼ら土門隊の失われていた躰を動かす意志を呼び覚ますしらべとなった。

彼らがいち早く土門のもとに駆けだすと、戦場の片隅で起きた一つの奇跡によつて止まっていた刻はふたたび怒濤の勢いで動きだすことになる。

「早くその死にぞこないの首を獲れ」と声を荒らげ殺到する魏兵に対して「なんとしても

將軍をお護りするのだ」と主を護らんと躰から体当たりしていく秦兵とが一緒くたになつて激しくぶつかりあつた。

「死にぞこないの息の根をとめるのだッ」「いか、……グフツ、せ……ぬ」「殺せえ」「ども、ん様……」「邪魔だどけえ」「將軍を、將軍を守りきるのだッ」

こうして両軍の入り乱れた戦場では、秦將土門を護らんと命を賭す秦兵の姿と戦いの終焉をもたらず鐘になる土門の首に殺到する魏兵の姿であふれて大混戦の様相を呈していた。

そして当然のように、この流れを招き入れ、瀕死の土門のそばにいる玄象のもとには、蟻のごとく群がる魏兵が姿があつた。

「来るなら、来い。貧弱な貴様らがいくら集まろうと、私の敵ではないと知れ」

と玄象は澆刺と挑発めいた言葉を発して、敵の目を惹きつけた。

「女狐めがあッ 貴様を切り捨てて化けの皮を剥がしてくれるわ。隊列を組めッ 一息に突き殺すぞ」

そうしてすばやく隊列を組んだ魏兵が槍を構え刺し殺すべく突撃していった、のだが――。

次の一瞬のさきで魏兵は槍を突き出す姿勢を保ったまま物言わぬ屍となつて馬上から転げ落ち戦場に伏せることになつた。

「ぬうッ 面妖な術使いか」

一人で幾人もの敵を瞬時に打ち倒す玄象の姿は敵に畏怖を植え付けもしたが、禁呪によつて乱れた気脈は呼吸の乱れを誘い、羽のように軽やかに舞っていた玄象の躰は、徐々に地に縛り付けられていった。

そして敵はその様を見逃すほど易くはない。部隊後方で周囲を護衛で固められた優男は、冷酷な眼差しを玄象に向けていた。

「……すこしは手は打っていたようだな。ふむ、私の知る武人とは違った強みがあるとも見える。とはいえ、それだけの事。際限もなく動ける者など存在しない。そして、私はお前たちのような存在を討つ術を心得ている」

そこから魏兵は優男の指示に従い、それまで無軌道に襲い掛かっていた動きを唐突に止めて、隊列を整え始めた。

「聴けえ。魏の勇猛なる戦士たちよ。そやつがいかな面妖な術を使えようと絶え間なく動き続けることは何者にも出来はしない。休む間を与えず緩急をつけた攻撃を仕掛け続けて押し潰せ」

敵指揮官の指示を代弁した部隊長の声が響くなか、玄象は絶え間なく流れ落ちる汗と乱れ始めた呼吸に躰の限界が近いことを察しはじめていた。

「ふーう……、当たり。敵に幽連みたいなきざかいのがあるみたいだ。せめて本調子な

ら……つて考えてもしょうがないか」

そこから敵は近すぎず遠すぎない絶妙な間合いをとり不規則な間隔で攻めよせはじめたが、それでも玄象は力を使い敵を斬り続けた。

「死ねえ」と一人は剣をかざして振り下ろす敵。

「我が槍の錆となれッ」と自慢の槍を強く握りしめ突き出す敵。

「うおおお」と少し後方で矛を大きく振りかぶる敵。

そうやって間断なく襲い掛かる魏兵たち、そのすべてを玄象は斬って捨てた。

「これはかなり、きついな……。ふう？に、無茶するなって言われたばっかなんだけどなあ」

そうしている間にも襲いかかってくる敵に限界を超えてでも戦うと剣をぐつと強く握りしめた玄象のもとに、魏兵に横槍を入れる形で駆け寄る騎兵衆の姿があった。

「姐御おツ」

現れた騎馬衆はすぐさま「玄象の姐御を護れ」と円陣を展開して玄象を中心に据えた。たったの五十騎に満たない騎馬衆であったが皆が精兵といって差しさわりのない動きを見せた。

そんな彼らに玄象は「だれが姐御か」と憤るような声を返したが、李豹の兄貴の女で

兄貴より強えあんたは俺たちにとつては姐御だ。となにひとつの躊躇なく応える騎馬衆に玄象は眉を寄せて微妙な表情を見せた。

彼らは李豹が率いる豹騎隊の面々であり、豹騎隊の発足時から李豹とともに成長してきた者たちでもある。けれど輪虎の襲撃に際して隊長李豹が重傷を負い、副官洪は戦死。それらの要因によって隊自体の存続すら危ぶまれる事態に陥っていたのだが朱錐が一計を案じたことで隊は存続され、此度の戦においては、玄象付きの小隊として参戦していた。

彼らの「姐御」呼びに玄象は頭を抱えそうになりながらも、押し寄せてる敵の一騎が土門に向かうのを認めて意識を切り替えた。

そこから玄象は馬の鬣に軀を預けて辛うじて息をしている土門に肉薄した敵騎兵に向かつて跳躍した。

それは瞬という間の跳躍。

あまりの動きの早さに敵騎兵は斬られたことに気付かぬまま馬上から崩れ落ちるのみであった。

敵を一瞬で葬り去った勢いのまま地に足を付けた玄象はそこからもう一度飛翔して、主が崩れ落ちたことで立ち止まっている敵騎馬の馬の背に悠然と降り立った。

玄象の圧倒的な力は敵兵に畏怖を与え襲い掛かる手を止めさせた。

のだが「フヴウーツ」と声なき声を挙げた鉄仮面の大漢が駆けだすと、命令を思い出したかのように魏兵はふたたび戦いに身を投じ始めた。

これに玄象は「ちい」と舌打つような吐息を漏らしたあと「お前たちは將軍を安全な場所へお連れしろ」と騎馬衆に矢継ぎ早に告げた。

それはこの地の劣勢は覆しようがないという判断であった。

「わかった。姐さんは」

その声に玄象は一際存在感のある朱い鎧に身を包んだ敵を見据えやや張り詰めた声で返した。

「私はアレの相手をする」

玄象の視線の先。巨軀の漢が遮る者を両断する矛を片手に迫っていた。

「ヴァア」

敵を斬り倒す。乱美迫はただその一念に染まった一刀を振り下ろす。

「……………ふう」機を逸すれば『死』

玄象は意識を風のように静かにそして深く落としていく。

乱美迫の矛が眼前に迫るも、瞳を閉じたまま動かない玄象。

ただ意識と躰を一つにしていく。

「ツル」

矛が白い薄肌を切り裂き皮膚から溢れだした血は最悪の結果を――。

それは矛先が肉を切り裂く瞬間の間の出来事。

「カツ」と、目を見開いた玄象の姿が消える。

乱美迫ですら捉えきれない瞬間であった。

「ツ!?!」

矛先にいた獲物の消失と同時に乱美迫の生存本能がほとぼしる。

なに、か。が、い、る

「はアアあッ」

無意識な行動であった。乱美迫の生存本能が矛をもたない腕をひかせた。

とたんに腕にはしる痛み、に獲物の位置を察した。

「ツな!?!」

たちまち玄象は驚きに身を包むことになった。

それは現状で最速の一撃。

深層に触れる瞬間の舞。

蚩尤の巫舞をもとにした業であった。

が、その一撃は乱美迫を死に至らしめることはなかった。

手の甲から肘に掛けて深く切り裂かれた乱美迫はすぐさま斬られた腕の痛みを無視して手綱を操作し馬を反転させにかかった。そこから勘を頼りにためらいなく矛を振るう。狙いなどつけてはいない、懐にいた敵が通り過ぎた線の先に向けた一撃であった。

この間髪を入れずに放たれた一撃は、玄象の予測を上回ることになる。

この時、玄象は最速の一撃に反応されたことに小さな驚きが胸のうちにひろがっていた。それでも、すぐさまそれを胸の内に押し込めて着地、そこから反転して追撃を――のはずであった。

しかし、わずかな心の機微のみだれば、そのまま繊細な心身の繋がりを必要とする業に歪みをうみだし、一定の拍の間に遅れをもたらした。

瞬の間の世界におけるわずかな拍の遅延。それはおおよそ常人からして隙とは呼べぬ間であったが、闘争本能に身を委ねている乱美迫の執念は逃さなかった。

反転した玄象のさきには、馬首を翻しながら強引にそれでいて的確にこちらに矛を振るった乱美迫の姿であった。

予測を上回るということは、ただしく不意を突かれたということである。

追撃のために前のめりな姿勢を取ろうとしていた玄象に、すでに避けるという選択肢は残されていなかった。また、この場の機制を制するために、万全でない体調のもと巫舞に近い業を連続で使用した反動は、玄象に重くのしかかっていた。

それでも玄象は鍛えあげてきた技量を用いて眼前に迫っていた乱美迫の矛の力を受け流してみせた。

これにはさしもの乱美迫も馬上から躰が転げ落ちそうになるほどに体勢を崩すことになった。

当たり前だが、強引なまでの反転から振り向きざまの一撃を放ったのだ。あとの躰の在りようなど考えたものではない。ただそこにいる敵をいまここで討つという一念の現れであった。

傍からみれば、この瞬間の攻防は乱美迫の腕を切り裂き、追の一撃すらさばいて見せた玄象に軍配が上がっているかに見えたが、実像はそうだとは言い難かった。

というのも、闘争本能のままに乱美迫が放った追撃の一刀は、深層に触れる業を使いすでに限界を踏み越えていた玄象の両の足にさらなる負担を強いていた。この限界を越えたさきの一步は、結果として次に繋がる跳躍を許さず、玄象の両の足は地に縛り付けたからだ。

そして動きの止まった標的に敵兵が群がるのは必定といえた。
「面妖な女の動きが止まったぞ。その女狐を串刺しにしてしまえッ」

第74話

乱美迫の矛による一撃を捌いた玄象であつたが足に力なく、躰をよろめかせていた。その様子を見て取つた敵部隊長は声を荒らげ号令を発した。

「その女狐を串刺しにしてしまえー！」

とめどなく額から流れ落ちる汗は黒く艶やかな髪をつたい地面を濡らしていく。

「ふう……ふう……ふう……」

玄象に余力はほとんど残されていなかった。全身は泥沼に浸かつてしまったように重くなり、腕は劍の重みで肩から削ぎ落されてしまいそんな気怠い感覚に襲われていた。

「……………ふう……………ふう……………」

それでも玄象は呼吸をわずかでも整えようと試みていた。しかしながら、敵が悠長に待つてくれることはない。敵騎兵は槍を片手に握りしめ標的に向かつて勢いよく突き出した。

「死ねええええ」

それは満足に躰を動かすことすらできない玄象に狂いなくせまりくる。玄象はふら

つく自身の躰に鞭をうち、それまで片手で軽々と扱っていた剣を両の手でなんとか持ち上げると、敵騎兵の槍にぶつけて軌道を逸した。

「ふ、は……ツ、はあ……はあ」

ゆらゆらと揺られる髪をつたって流れ落ちる雫が地面にひろがっていく。もはや玄象の躰は体幹を安定させることすら難しくなっていた。そして目の前にあったひとつの危機はそれまでも新たな危は間断なく襲い掛かっていく。

「化け物がッ」

「……はあ……はあ……はあ」

息も絶え絶えの躰。あげることすら叶わない両腕の感覚……。

もう、剣は、扱えな、いな。なら——

「ツな!」

と敵は空を切る穂先に驚きの声を挙げる。

「……くツ——、ふうは……はあ……はあ」

玄象はふらつく躰を風に揺れる草木に見立ててわずかな緩急をつけることで敵の穂先を惑わせるも、身を残る力では踏ん張ることができずに地面を転がることになった。

そこには、さきほどまで宙を華麗に舞っていた玄象の姿はなく、戦場の土にまみれて薄黄土色に色付く衣を纏って伏せるひとりの少女だけであった。

「ちよろちよろとあがきよって。この儂自ら葬ってくれるわッ」

倒れふした敵の姿に痺れを切らしたように部隊長は自慢の愛槍を振り上げ止めをさすべくと駆け出した。

「……まだ、だ。まだ……し、ぬわけにはいかないー」

伏した躰を、もうどこからわいたかもわからないちからで玄象はたちあがろうとしていた。

漂……ごめん。だめかもしれない

目前にせまる己を絶命せしめる槍の脅威に動かぬ躰。

それでも最後まであきらめない、から

「…………って、ね。？も、ごめんね」

たちあがってかおをあげたさき。

もう槍の穂先は敵を貫ぬかんとすぐそこにまでせまっていたがなにかに気が付いた玄象は口元にちいさく笑みを浮べた。

「遅いぞ……。朱錐」

そのとき戦場を切り裂く甲高い音が鳴り響き「ドスッ」と背に矢を受けた部隊長の男「が、ふっ。矢……どこ、か、ら」と馬上から崩れ落ちた。さらに「ピューイーイー」と

つづぎまに戦場に響く甲高い音は矢の存在を大きく示し、そこにいる者たちの意識を音の方角にむけさせた。

「な、た、隊長が、ツて、敵だ。右から敵が来るぞお」

ふいに部隊長が矢に射られて戦場に散った動揺に加えて右方よりせまる敵援軍の影。それらに気を取られた魏兵のもとに、さらなる一報が加わることになる。

「急報ツ 突如左方より現れた敵小隊により部隊後方が攻撃を受けています」

強襲を仕掛けた部隊の名は飛信隊であった。

「いくぞツ おれたちが狙うのは魏火龍の首だけだ」

こうして玄象が身を削ってつくりだした僅かな刻は、決まりかけた戦いの趨勢にかすかな変化をあたえはじめることになった。

続けざまに届いた報を隊の中心部で護衛に囲まれながら受けた霊凰は敵小隊が現れた方角を見やり一考すると敵が突如この場に現れたからくりを察した。

「なるほど。少しは考えたものだ。小隊の利を活かして味方の中を強引に突っ切ってきたか」

とくぼした霊凰に側近は「如何なさいますか」と尋ねた。

「左の小隊は放っておけ。ここでするべきことは、すでに終えた。それより乱美迫の負

傷の程度は」

「乱美迫様の御怪我の手当は済んでいます。しかしながら浅いとは言い難く……」

靈凰は乱美迫の様子をちらりと窺うと言葉を返した。

「そうか。……この十数年、秦という国には優れた個が集まる傾向があるようだ。あの六将然り、乱美迫に傷を負わせた年若い女戦士然り……」

とそこで言葉をとめた靈凰は何かを思い出したように「フツ」と声を漏らすと続けた。「我が教え子をまがりなりに破った李豹とやらも秦に生まれた若芽であつたな」

と、どこか愉快気に語る靈凰にゆつくりと近づくと大きな影。それとは別に側近は己の考えを声にのせて発した。

「左の小隊を蹴散らして退却致しますか」と。

それに対して靈凰は腕をあげ進行すべき方向にむかつて手のひらを向けると号令を発した。

「退路はそこにある。ゆけ、乱美迫」

乱美迫は靈凰の命に応えるように「フウーーツ」と雄たけびを挙げて駆けだして行く。向かう先は、右でも左でもない。

それは、戦線を保つべくこちらに背を向けて魏軍と戦う秦兵の後方であつた。

「う、うしろから、敵襲だああああ」

浅くはない怪我をもものともせず激走する乱美迫によつて後方を突かれる形となつた秦軍の戦線は、おおきく左右に割れることになる。

そして靈凰が退却にむけて動き出したその時。

一本の飛矢が靈凰に迫つた。

「魏火龍だかなんだが知らねえが逃がさねえぞツ」そう声を挙げ靈凰に接近していたのは飛信隊の信である。

信は仲間たちの援護を受けて単騎に近い形になりながらも火龍を討ち取るべく勇ましく駆けて靈凰に迫っていた。

「天下の大將軍になる俺の邪魔をするんじゃないやねえ」

信はそう息まき剣に力に込めて立ちをはだかる魏兵をひとり、つぎのひとりと倒して火龍靈凰に肉薄していく。

はずであつたのだが……

「小僧がツ 靈凰様に易々と近寄れるとでもおもつたか」

そう言葉を吐き奇襲の勢い乗つて突き進んだ信の剣を受け止め進撃を妨げたは、靈凰直下の精銳であつた。

「ツク、なんだこいつら、さつきまでのやつらとは違つて、俺の剣を受け止めやがつた」
いかに強力な飛矢であつても一度勢いを失われてしまつては、もはや火龍の首に届く

ことはない。それどころか――

「その餓鬼を困つて殺せッ」

靈凰の周囲をかためるのは、苛烈な時代を生き抜いた歴戦の精鋭たちである。それに襲い掛かる敵を排除すべく的確な行動を瞬時に行つていく。

結成からの年月から鑑みれば一際強烈な攻撃力を誇る信たち飛信隊といえども、羌？ という強力な札を欠いた状態で大將首に差し迫るにはまだ力は足りてはいなかった。

信は大手柄を前にして届かぬ剣に悔しさをにじませた。

「大將首が目の前にいやがるつてのに、とどかねえ。く、糞ッ があああ」

靈凰は歴戦の護衛に護られながら、すぐそばにまで近づいてみせた威勢の良い少年を一瞥すると駆け出した。そうして馬上で薄い笑みを浮かべてふと呟く。

「困つたものだ。かの六将は王騎を残して過ぎ去り、あの三大天もいまや廉頗を残すのみ。私が戦を離れているあいだに傑物たちは過去に消え、次は鳳明らの時代かと思えば、その下で活きの良い者どもが名乗りを挙げる」

魏、秦軍がしのぎを削る戦線を縦断する靈凰の目に映るのは、今も昔も変わらぬ戦いの世の真理であった。

「大功を求め戦に夢を描くか。まったく、戦乱の世のなんと愚かなことよ」

もはや乱美迫や靈凰をとどめるものはなにもなく、彼らは一つの報を喧伝しながら撤収、退却することになった。

信は目前の敵と刃を交えて攻防をしながらも遠のく靈凰たちの姿を垣間見ていたが、敵精鋭が囲んで自身を討ち取るう能動的に動き出したことでその視線をきつて目の前の脅威に意識を移して吠えた。

「てめえらに簡単にやれるほど俺はヤワねえぞ。どつからでもかかってこい」

と威勢よく啖呵をきつたものの周囲から発せられる殺気にすぐに包囲まれていることに気付いた信。

「小癩な小僧が。貴様はすでに死に体だ。すぐにもで葬つてくれる」

そうして彼らは歴戦の精鋭らしく「一気に殺るぞ」と目配せだけで意識を疎通させると各方向から一斉に襲い掛かった。

それはどんな達人であと一度に対処することはできない全方位から信にむけての刺突であった。精鋭の名に恥じない一糸乱れぬまま狂いなく突き出された槍の穂先に信の躰は串刺しに——「ッ!？」

「おりやあああ」

はならず信の姿は馬上から消えて宙にあった。その声に彼らが顔を上げれば、さきほどの小僧が両手でもった剣を振り下ろす瞬間であった。

敵兵は信に肩から腹部までを勢いよく切り裂かれ「な、ばか、なッ……」と驚愕の表情を浮かべたまま馬上から崩れ落ちることになった。

なんと信は敵の一斉攻撃の間隙に身軽で丈夫な躰のおもむくままに馬上から宙に飛び出し一番偉そうだった敵にむけて剣を振り下ろして切り裂いたのであった。

そしてさらに着地と同時に近くの敵をひとり、ふたりと斬ったあと異変に気付くことになった。

「どうだッ 俺の実力は……、つて、やべえ」

いつならこの調子で敵を切り倒して敵が動揺している隙に脱出するところであったが歴戦の精鋭が易々と標的を逃がすことはなかった。それは既視感のある状況であった。信を取り囲むのは敵兵。中心にいるのはもちろん信。そして飛信隊の仲間はこちらまで信を送り出すためにいまだ敵にその足を止められていない。

さきほどと唯一の違いは信が騎乗していないこと。つまりは、さっきはあった宙という選択肢がなくなり、信に残された逃げ場と呼べる空間が存在しないということであった。

敵もそれは承知しており、じりじりと包囲を縮めていく。それでも信は剣を構えたまま周辺にむけて視線を彷徨わせて活路を見出そうとしていた。が。

「……ッチ、これはやべえな」

しかし敵に一切の油断や慢心といった隙は見当たらなかった。ただ肅々と確実に標的である信を仕留めるべくにじり寄っていく。

「ッ、俺はただじゃやられねえからなあ」

信はいまの状況を打破する術がまったく浮かんでいなくても、生を諦める気は微塵もない。

「命のいらねえ奴から掛かってこいッ」

そうしていよいよ襲い掛かってきそうな敵の気配に、覚悟を決めた信が目を「カッ」と見開き敵兵を睨みつけて決死の勢いで後の先ではなく機制を制しようと飛びかかろうとしたその時であった。

「ゴシヤッ」となにかが物凄い勢いでぶつかりつづれるような音とともに信を囲う敵兵だったものの躰が数体吹き飛び散った。

「よくぞもたせたな。信殿」

現れたのは、騎乗した並みに者ではまともに扱うことが困難で重厚な肉厚で形つくられた鉄昆を片手で振りぬいた鬼の面の将であった。

「貴様はあッ」と憎き敵に漢に表情を変える敵精鋭に朱錐は極めて平坦な声で言葉を発した。

「信殿に刻を掛け過ぎたな。すでにお前たちに退路はないぞ。投降しろ」

その言葉に敵があたりを見渡せば到着した朱錐隊によつて自部隊は先を行く乱美迫本隊と分断されている事実が見て取れた。

しかし、彼らに投降する意志は存在しない。

「なにを馬鹿なことを。貴様を討ち取ればもうはや退路など必要ないわツ」と朱錐に特攻をかけようとする敵に信も上等だ、と言葉を発して地面を踏みしめようとしたとき「下がっている」と朱錐の声が掛かった。

それに信が「えツ」と戸惑う間に馬を数歩前に歩かせた朱錐は「残念だ」とこぼして鉄昆を握りしめると敵対する者を悉く土へと還していくのであった。

第75話

朱錐は取り残された残存兵をなぎ倒すと、おおきく息を吸ってこの場にいる全兵に語り掛けた。

「聴けえッ 土門將軍の兵たちよ。將軍は負傷のために離脱された。よってこれより、右軍を預かるこの朱錐が左軍全体を預かる。各隊は残存する敵を掃討し、次の戦いに備えよ」

朱錐の穏やかでいて包み込むような声は、將軍不在となったことで動きに迷いある土門直下の兵に明確な行動原理を与えることに成功した。また瀕死の土門を護り切った將軍の側近たちが率先して指揮系統の再構築に尽力したことで、この場の動揺は最小限にとどめられ、戦線の修復に乗り出すための陣容は急速に整えられていくことになった。

それらの様を間近で観察していた信は合間を見計らって朱錐に声を掛かけた。

「朱錐のおっさんって、すげえんだな」

と信は朱錐の武の片鱗と部隊を掌握する力を目の当たりにして驚きのまま隠さずに述べた。それに対して朱錐は視線を信に向けると簡潔に応えた。

「これでも私は元王騎軍、そして現騰軍の第六軍を預かる身だ。そして、軍長六人の皆が相応の力を有している」

「そうなのか」と口にした信はそれぞれの軍長の顔を浮かべてからさらに言葉をつづける。

「やっぱ軍長くらいになればちげえんだな。じゃあさ、あのすぐ怒鳴って絡んでくるおっさんもやっぱりずい実力をもってるってことか」

朱雖は信の言葉から「怒鳴って絡むおっさん」と録鳴未をすぐに結びつけると応えた。「録鳴未のことであろうが、はつきりいつてあいつは強いぞ。だてに第一軍を任されてはいない。戦歴も豊富で軍も精強だ。騰軍中でも攻撃力だけなら軍長一といつて過言ではないほどにな」

信はその評に「あのおっさんがなあ」といまいちピンツと来ていない様子ではあったが、そのあと「でももともと王騎將軍の軍だもんな」とつぶやくと一応の納得をみせた。その様子に、朱雖は仮面のうちで録鳴未は性格で損をしているな、と苦笑を浮かべていたが、すぐに気を引き締めて次に向けての言葉を発した。

「さて、このまま話していたいのは山々だが、準備ができた次第私は戦線を押し戻すため前線に立つ。信殿は元の持ち場に帰り戦線を支えてもらいたいのだが、かまわないか」

「ああ、わかつたぜ。俺たちはすぐに動く」

と信が副長である楚水に指示を伝えようと振り返ると隊列はすでに整えられて「準備はできております」と待機している状態であった。信は楚水の「ご指示を」と早々に段取りを整えて促す頼もしさに背を押される形で「おっしや！ それじゃいくぞ飛信隊!!」と声を張り上げると全隊が揃って駆けだしていった。

その様は元下僕の十四、五歳の少年が隊長を務めているとはとても思えない光景であった。

「信殿を中心に乱れがない。昨日今日できた急造の部隊をここまで纏めあげているとは。なるほど、天下の大將軍になる漢、か」

と朱錐が見届けていたところに不満を述べるひとつの声が掛かった。

「到着が遅いぞ朱錐。あやうく、死ぬところだった」

朱錐が視線を声のほうに向けると、そこには戦い疲れた表情をみせる玄象が佇んでいた。

「象か。すまなかつた。私の頼みのせいで随分と無茶をさせた」

と朱錐は玄象に謝罪とをねぎらいの言葉を口にしてから「誰か、玄象に馬を」と促した。

「ほんとだよ。すぐに駆け付けけるっていったわりに遅いし……。まあ、それだけ相手が上手だったてことだろうけどさ。それに……」

とそこで言葉をとめ、少し眉をよせてバツが悪そうな表情をみせる玄象の言葉の先を察した朱錐は、その意を汲んで言葉を掛けた。

「土門將軍のことは、象のせいではない。これは昨夜、將軍を説得できなかった私の咎だ」

それは昨夜行われた軍議的一幕であつた。

そこでは土門と朱錐の二人により中央軍全体での作戦目標やそれに伴う隊列の組み換えなどを話し合つていた。それらは概ね揉めることなく決定されていくのだが、ただ一つ、朱錐が挙げたある一つの事案のみ両者の見解が噛み合わず、部分的な変更がなされるに至つた。

土門が唯一難色を示したのは、玄象と豹騎隊三百を土門隊に加えて万が一の襲撃に備えるというものであつた。

「悪いが朱錐殿。その提案は断らせてもらおう」

土門は極めて冷静に言葉を発していたが、その内心には確かな怒りがあつた。

「我が部隊は精強を自負している。そこにどこの馬の骨ともわからぬ者たちを入れては、隊列に乱れを生じさせてしまう。そうであろう、朱錐殿」

土門の声は固く眼にも内に秘める怒の感情から力がこもつていた。

その段になつて朱錐は、襲撃に備えるためとはいえ一個の武に誇りをもつ將兵に対して護衛を付けたいという提案自体が侮辱に値すると捉えられてもおかしくない事実になり、朱錐は、このまま撤回すれば明日に憂いを残すことになりかねないため、土門の言を肯定しつつなお、提案を引つ込める気はないと示すために後半に向けて語気を強めた。

そうして朱錐から発せられた庄の意を汲みとると「このままでは平行線か」と土門は一旦胸にある怒りを収めるように、ふうふうと長めに息を吐いて理由を問うた。

「ならば如何なる思案によるものか、窺つてもよろしいか」

そうした土門の将器に触れる形になつた朱錐はその懐の深さに感銘をうけながらも、ここが交渉の正念場になると内心で腹をくくつて口を開いた。

「土門殿の言葉は理に適つています。ですが敵はその理を自在に操り戦場を股にかけて名を轟かせた魏が誇る大軍師靈凰です。そして、過去の戦いからも、靈凰はしばしば戦の最中に直接將を狙う戦術を使うことがわかっています。そうなれば狙われるのは、右軍と左軍を預かる私か貴方のどちらかになります」

そうして朱錐は願ひ出る意を込めて、両手を胸の前に挙げて組み拱手の姿勢をとつて「どうか、〴〵再考を」と発した。

「……我らだけでは不足がある申されるのだな」

「そうではありません。かの靈凰には、狂戦士と渾名される乱美迫という猛将の存在があります。乱美迫とは、六将であった王騎將軍や繆將軍らでも手を焼くほどの武人。実際に私自身も打ち合い、その経験からして、できる備えは万全にしておきたい強敵であるということですよ」

土門は朱錐の言に内包されるまじり気のない警戒からの忠告に、むうと唸り声をあげた。それから情報をゆっくりと咀嚼すること数拍。言葉を返した。

「すまぬ。我らが侮られているのかと少し頭に血が上っていたようだ。しかしながらだ、我らの武の誇りに掛けて

朱錐殿の言をすべて受け入れることはできない。連携こそが部隊の生命線。よって、小隊すべてではなく、その武に長ける玄象なる者と供回りだけならば、おおきな支障はないと判断する」

言葉のあと、土門の眼光はより一層鋭さ増して朱錐に向けられることになった。それは、朱錐に対してこれ以上の譲歩はしないと暗に告げるものであった。

「……わかりました。ですが、敵は強大にして狡猾。知らぬ間に誘い込まれていることもありますゆえ、土門殿に置かれましては常にご自身が狙われているという意識を持つて警戒の色を薄めることがないようお願い申し上げます」

これにより、土門に玄象を付けることは成功したが、土門の全幅の信を得られなかつ

たがために玄象は隊の端に配置されるにいたり結果、土門の窮地に遅れることになったのであった。

「うむ、承った。けれど、朱錐殿。将が狙われるのは戦の常だ。警戒はするが、将である私が縮こまつていては全体の士気にかかわるのだ。我が身を案ずる提案を嬉しく思うが、許されよ」

そして開始された三日目中央軍の戦い。霊鳳は朱錐らの對抗策を嘲笑うように巧みに戦場全体を操ると正確に土門の首元に迫ったのであった。

話は現在に戻る。

「正直、将軍が助かるかは天にまかせるしかない。豹のときと違って外から強引に気を身に流して息を吹きかえさせるっていう無茶なやつだから。あれは永い羌族の歴史のなかにある先人の知恵っていうか、掟に逆らった無謀な記憶っていうか……。伝承によればだけど、隠れて大事にしていた動物を助けるために使ったってことらしい」

「……そうか。もとより致命に至る傷であつたのだろう。例え最悪の結果がまつていようとも、象の働きが無に帰ることはない。実際に土門殿は息を吹き返した。この事実が土門兵の戦意をギリギリで保つたのだ」

そうして労いともに気遣う言葉を掛ける朱錐にも玄象は自責の念が頭をもたげるの

か「……わかつてる」と声を落とした。そこで朱錐は話題を変えることにした。

「それで、おおきな外傷は見受けられないが、体調はどうだ」

「これくらいはどうってないよ。……って言つていいんだけど、しばらく無茶は遠慮したいかな」

「分かった」と返事を返した朱錐のもとに全隊の準備が整ったという報せがちようど入ったことで、それを受けて朱錐は号令を発した。

「よしッ これより敵が開けた前線の穴を塞いで一気に押し返す。朱錐隊、出るぞッ」

そうして玄象には後方待機を命じて朱錐は自隊を率いて前線に向けて動き出した。

「土門兵は戦線修復に努めよ。敵は我らが蹴散らすッ」

こうして朱錐隊は割れた前線に群がっていた魏兵を排除していき、その後ろでは土門兵たちが戦線にあいた穴の修復をはじめることになった。

この朱錐という将自らの奮戦は、近場の兵たちの士気を盛り上げることには成功した。

のだが。

「さすがに嫌な手を使ってくる」

それがそのまま左軍全体の士気の回復に導くことはなかった。

というのは、霊凰が去り際に喧伝した「左軍の将はすでに討ち取った」という部分的

に実をともなう虚報がおおいに効果を發揮していたからだ。実とは土門の負傷離脱のことであり、戦線後方からの敵襲に加えて姿をみせない左軍指揮官。

この二つがあわさったことで、戦線の修復に乗り出した朱錐たちの奮戦はあれど、そこから距離が離れるほどに虚報は効果を持続させて兵士たちを惑わさせ、彼らの胸のうちには、半信半疑に疑心暗鬼がまじわった複雑な状態の迷走状態に陥っていたからだ。

これにより朱錐は、前線の士気低下による崩壊を防ぐために、この場を離れることができずに釘付けになるのであった。

所変わって時刻は秦の両左右軍の境目に魏が突撃したあとまで遡る。

魏の中央軍突撃を指揮するのは、廉頗の飛槍輪虎であった。

「この突撃の勢いのまま、行ける所まで行くよ」

輪虎は突撃の初撃が問題なく行われたことに笑みを浮かべていた。

「魏良は魏人らしく任務を忠実に遂行しているみたいだね。それに火龍の名もある」
その言葉を拾い、側近のひとりは言葉を返した。

「さすがに自国の大將軍級である靈鳳の策ともなれば、魏人に与える影響は大きいよう
ですな」

「だね。近年行方をくらしましていたって話だけど、だからと言ってその名声が地に落ち

るわけではないからね」

輪虎の言葉に側近は、我々にとつて廉頗將軍らがそうであるようにですね、と言い、そうだね、と輪虎は抑揚に領き「それで首尾はどう」と側近に訊ねた。その返答に対して輪虎は続けた。

「よしよし。それじゃそろそろ敵の抵抗が激しくなるころだから準備をしようか」

そうして、初撃を成功させた輪虎隊の進撃を迎撃するべく出陣した虎豹隊とが激しくぶつかり合うことになった。

「絶対に抜かせるなッ 我ら虎豹隊の前に敵は存在しない」

と勇ましく高い声を張り上げたのは、朱錐の副官である虎豹であった。この時は虎豹は、普段とは異なり部隊の前列先頭付近ではなく中列から部隊に檄を飛ばしていた。

それは二つの理由が存在していた。

一つがこの場における全体の戦線修復の陣頭指揮をとるため。もう一つは、靈風による隊列の大きな変化によつて輪虎、介子坊といった敵主力級部将の動きを捉えることが難しくなっていたためであった。

「奴らの狙いでなんであろうと、一歩たりともここを通すなッ」

虎豹が天に向けて剣を片手に掲げて行つた檄に対して隊から返るおおきな「応ッ」と

いう声の大きさは、そのまま虎豹隊の士気の高まりを示していた。

そして六将時代に培われた高い経験値で兵士を鍛えあげ備わる超一級品の統率力で虎豹が率いる虎豹隊とは、朱雒軍中の最精鋭であり、その戦いぶりは、常に先陣を駆けて勝利を積み重ねて、歴戦の猛者に引けを取らない姿へと変貌を遂げていた。

その実力は多少の兵力差などものともしないもので、魏の突撃を悉く押しとどめていった。

そんな虎豹隊の動きを察知して、この輪虎、虎豹の両二隊の激しい衝突からすこし距離をとって機を窺う部隊が一つあった。

「……なんなのだ、あの隊は。俺の想像をはるかに超えて強い。まだ秦に俺の知らぬあのような将が存在していたのいうのか」

とわずかに目を見開いた表情をみせたのは、玉鳳隊の王賁であった。

王賁は虎豹隊の突撃力のすさまじさに驚きを示しつつも、すぐに気を落ち着かせて引き締めるという言葉が続けた。

「だが、あの隊の予想を超えた強さが敵の進軍が滞りさせた。ゆえに、今はまさに好機と呼べる。動くぞ、玉鳳」

王賁は早々に敵の中央を突く突撃を押しとどめることは難しいと判断を下すと部隊を二つに分けたのち、そのうちのひとつとともに突撃を指揮する敵將を横撃からの奇襲に

よって屠るために持ち場は離れていた。

「ここらは一気にいく。狙うは輪虎の首だ」

この王賁の読みは、虎豹隊の突撃力によってわずかに外れることになったのだが、戦況としてはむしろ悪くなく、好転していた。それすなわち、当初の作戦目標である敵部隊の長が虎豹隊によって動きを押しとどめられたことで、敵将の位置が把握しやすくなったからである。

こうして中央部の戦いは、突撃をした輪虎、迎撃の虎豹、奇襲を狙う王賁という三者それぞれの思惑や狙いが重なり合う複雑な戦いと化していった。

一方、朱錐が土門の救援に向かったことで将が不在となった秦右軍では馮と青騎が後方に下がることで戦線の均衡を保っていた。

「まったく、やってくれますねえ」

と青騎は感心するような声を漏すとさらに続けた。

靈鳳さんは今日、この刻にそなえて一体いくつの策を弄してきたのか。大軍師の名に恥じないこの策略のキレ。腕は落ちていないようですねえ」

青騎はこれまでの戦場から読み取った戦況からそう評した。その評に馮は、顔から冷

や汗を流しながら声をだした。

「私には想像もつかないのですが、このやり込められている状況すべてが敵の思惑通りだとすると恐ろしくなります」

濯の言葉に青騎は、あなたもよく理解できたようですねと示すように鷹揚に頷くと言葉をつづけた。

「靈凰とは、まさにそういう存在です。因縁のある私の存在をほのめかすことで狙いを絞らせられればと考えたのですが、靈凰はその逆。私という存在から我ら右軍の強さの幅を危惧したようです。そこから、もつとも効率的に私たちを壊滅するの術を構築した。それは陣容の大幅な変更からはじまり、中央への突撃、秦左軍攻略のために必要最少数の隊の派遣。そして朱錐が救援に動いた機をみたように攻勢をしかける介子坊さんの存在。後方予備隊をこちらに残している辺りにも警戒している度合いがよくでています」

「それはつまり——」

「ええ。すべては我ら右軍に気取られぬように策が施されていた、ということですよ」

「それは、あの奇妙な縦に長い隊列もですか」

「あれにも意味はあります。が、それよりも陣形を大きく変化させたことにこそ大きな意味があったのですよ」

濯は続きを促すように青騎を見つめた。

「ソフ　大きな陣形の変化は、無意識のうちに人にそのあとの形へと目を走らせます。そして、それは仕方がないことです。敵の陣形を知るということは、そのまま戦いにおける敵の狙いを知るも同然なのです。そういう意味では、丘の上から眺めていた蒙？さんは随分と頭を悩ませたことでしょうねえ。なにせ、あの縦長の隊列に直接的な戦いにおいての価値はさほど存在しませんからねえ」

とそこまで話した青騎は「おや」と口すると続きを話すのを止めた。

濯もまた異変に気付いて視線を戦場に戻すとそこには、こちらまで聴こえてくるほどの大声を挙げる介子坊の姿があつた。

「ようやく我ら介子坊隊の本領を発揮するときがきた。全兵は迷わず、この介子坊についてまいれッ」

そこから介子坊はさらに息を吸い込むと甲高く響かせた声で大号令を発した。

「秦の糞どもは一人残らず皆殺しだッ　つづけえええッ」

そうして先頭を駆けだした介子坊の全身から発せられる威は、趙と魏という異なる氣質を持った二つの兵の垣根を超えて伝播し、強大な威となつて秦に襲い掛かることになつた。

「話はここからです。私が介子坊さんの相手をします。あなたは戦線に穴が開かないよ

うに落ち着いて指揮を執りなさい」

こうしてぶつかり合つた両者の戦いは夕暮れまで激しく続くことになる。それは他の戦場である秦左翼の王翦对姜燕の戦いも同様であつたが秦右翼の桓騎軍对玄峰軍だけは様相を転じる機が訪れることになつた。

「又ハハッ やはりな。仕掛けて来ると思つておつたぞ、桓騎よ」

第76話

「又ハハツ やはりな。仕掛けて来ると思っておつたぞ、桓騎よ」

このとき廉頗は、魏左軍玄峰本陣に奇襲を仕掛けた桓騎軍に対して配していた伏兵を率いて横撃していた。

「妙な場所に本陣を隠したとおもうつておつたが、なるほど。儂らの動きを読んだかのような見事な采配じゃったぞ。じゃが、どのように見事な采配であろうが先を読まれてしまえばそれも台無し。無様なものじゃ」

この廉頗の言葉通り、桓騎軍の奇襲部隊は敵本陣を強襲するために展開した直後に、唐突に横から現れた伏兵からの攻撃に慌てふためき大混乱に陥っていた。

「徹底的に皆殺せえッ 再び集結されてはたまらんからのお」

そう声を張り上げた廉頗は、桓騎が仕掛けた誘いに敢えて乗ることで、逆に、敵戦力を分散させた上で各個撃破を行い、懸念事項を完全に取り払う心積りであった。

そして、廉頗の読み通り桓騎は、この木々が生い茂る山々を主戦場に決めた段階から初手で相手を翻弄し、敵が業を煮やす頃合いを見計らって本陣の情報を流して進軍を促し、敵が溜まった鬱憤を晴らすべく勢いよく攻め立てる隙を突く形で、おおきく迂回さ

せていた別働部隊の時間差を用いた奇襲の一撃で頭を素早く刈り取るという算段であった。

そのため、桓騎軍の本陣を中央の戦場から遠く離れた位置に配置させたのだが、今回のこの遠すぎる本陣が仇となることになった。

玄峰はそれを他軍の介入をなくすことで、両軍だけの決戦に持ち込む算段のひとつであると読み解き、廉頗は初日から頻繁に行われる奇襲自体が魏左軍を狩場に誘い込むため算段ではないかと勘繰っていた。

玄峰、桓騎の両軍のみがぶつかるといふ点において、両者の考えは一致していたが、玄峰が早々の幕引きを図る策を口にした段階で廉頗は、妙に、いや、遠すぎる敵本陣に、別の思惑を微かにだが感じ取ることになる。

そして桓騎の動きはこうであった。

まず敵の周辺を引つ掻き回すことで敵の警戒心を高めさせて行動範囲を狭めさせる。つぎに敵の躰の部位を切り取って送り付けることで桓騎軍の残忍さを示して、末端の敵兵士たちの自発的な行動を委縮させて戦意を削ぐことであった。

初日に関してこの狙いは的中していた。しかし、二日目半ばに廉頗が左軍に姿を現したことで状況に変化が訪れた。

魏左軍本陣では廉頗の登場によって急遽軍議が開かれ、廉頗、玄峰の両名によって擦

り合せた情報によつて桓騎軍本陣の位置は、正確に捕捉された。そこから、玄峰が初日から続く桓騎軍の動きから敵の狙いは上記の通りであると断定して、敵が戦力を分散させて奇襲を仕掛けてくるのであれば、露わになつた敵本陣は手薄であるとして強襲を思い描いたのに対して、廉頗はこの周辺の索敵と掃討をまず優先するべきである、という意見に別れた。

この方針の対立によつてしばし睨み合つた両者であつたが廉頗の、初日にあつた輪虎の深手を負つた事実などを重く見ている姿勢を支持する形で玄峰が折れ、索敵が開始されることになった。そのおかげで、桓騎が周辺に配置していた奇襲部隊は次々と発見されては攻撃を受ける結果になり、配置されていた奇襲部隊は壊滅的な被害を受けて撤退するにはめになつていた。

そこから玄峰本陣は、遠くに隠されている桓騎本陣に向けて前進を始めて、ついに包囲するに至る。

「オラあツ 気合入れろテメエら。馬鹿な敵がこのこ殺されにきやがつたぞツ」

しかしながら桓騎は、分散させて配置した奇襲部隊が発見されることや本陣が強襲を受けるであろうことも最初から可能性として織り込んでいた。そのため事前に雷土と、本陣に帰参する最中に陣の弱い部分を補完するように部隊を展開していた壁を見つけて臨時の五千大将に抜擢した上で本陣を守るように命じていた。

「なにがあつても桓騎將軍は我らの手でお守りするのだ。壁隊、構えろッ」

そして桓騎は、目論見通りに奇襲部隊が敵に発見されては壊滅、撤退していく様を気にも留めずに、その分散した奇襲部隊を殲滅するために敵が掛けている時間そのものを利用して、本命となる別動隊を敵の索敵範囲をおおきく迂回させる形で移動を開始させていた。

つまり桓騎は、中央から遠く離れた位置に本陣を隠すことで戦場自体を意図的に大きく拡げて隙の間を増やしていたのだ。

そうして敵が桓騎軍本陣を陥落させるために本腰を入れた頃合いを見計って別動隊となつた本命の奇襲部隊で敵本陣を速やかに壊滅するという二段構えの奇襲作戦であつた。

だが、しかし。

廉頗はそれを読んでいた。

玄峰が桓騎本陣の攻略にむけて本軍を動かし戦闘が開始されてから一刻ほどが経つたところ玄峰本陣に急報が入つた。

「突如出現した敵部隊が本陣に接近中とのことです。その数はざつとみて三千はいるとッ」という報告を受けて顔を青ざめさせた側近が「い、いますぐ攻撃中の本軍を戻し

て迎撃しましょう」と慌てふためく姿に玄峰は眉をひそめて苛立たし氣に一喝した。

「喧しいわい。すこし黙つとれ。この馬鹿どもがッ」

「し、しかしながら、この本陣は手薄。こッこ、このままでは」

さらに言い募ろうとする側近に対して、玄峰は説教を垂れるように言葉を荒らげた。

「いま本軍を戻したとして、結局は挟撃されるだけじゃとなぜわからんッ」

そうして、おおきく見開かれた目をギョロリと動かして睨みつける玄峰に側近は言葉をなくした。その姿に眉をひそめて玄峰はため息を吐くと「ああ もういいじゃろう」と眩き、言葉が続けた。

「儂らが動かずとも、きややつが始末をつけよるわ」

そうして時刻は冒頭にもどる。

「又ハハッ 取りこぼすでないぞ。皆じゃ、皆殺せえッ!!」

廉頗の命を遂行しようと思気込む魏国兵を前にして桓騎の奇襲部隊はただただ慌てふためき「や、やべえ、い、いったいど、どうすれば」と対策を練る暇もなく討ち取れていった。

こうして廉頗の伏兵は、桓騎軍の横腹を抉りとつて瓦解に追い込み、いよいよ遁走していくこれを執拗なまでに追いかけて駆逐していった。

「玄峰様。廉頗様より、あとはようように追い込み、悉く殲滅せよ。との言伝です」
それを聞いた玄峰は、はあ、ため息を吐き出し、続けた。

「儂の戦術をぶち壊しておいて、さっさと先にいきよつたか。勝手な奴め」

そうして「あ奴はやんちゃ坊主のままじゃな」と首をやれやれとに左右に振ると全軍の前進と桓騎軍本陣の包围を命じた。

そうしてしばらく。秦兵の断末魔の声が途切れ、桓騎軍本陣付近での小競り合いのすえに包围が済む頃、陽は傾き三日目は幕を閉じることになった。

三日目、夜。舞台は秦中央軍の野営地。

「なんで俺がお前についていかなくちやなんなんだよ。お前一人で勝手に行けよ」

と嫌そうな声を挙げる下僕あがりの少年の姿とその少年の腕を掴んで離さず、半ば強引に連れ出した某將軍の孫がどこかに向かっていた。

「あつ、そういう？ まあまあ、そう言わずに。なんだかんだ言つても王賁のことが心配でしょ。それに、聞いた話だと、けっこう重傷らしいよ」

と某將軍の孫から告げられた情報に、下僕あがりの少年は一瞬だけ安否を気にする素振りを見せたが、記憶にある小憎らしさが勝つたようで顔を背けて言い放った。

「ッ、だからなんだってんだよ。あいつがどうなろうと俺には関係ねえ」

某將軍の孫こと蒙恬は、下僕あがりの少年信の内心を見透かしたように、フツと笑うように小さく口角上げると「またまたあ」とおちやらけるような声を出して軽快に笑った。

その姿が癪にさわって少し頭に血が上った信が、ツチと舌打ちをして「もういいだろうが」と手を振りほどこうとするよりも早く目的地に着いた蒙恬は「王賁、入るよ」と他隊の隊長の天幕に押し入るには、気楽すぎる口調で中へと踏み入った。

するとそこには、牀にできた傷を隠すように痛々しく包帯を巻いた王賁の姿があった。ただし、手に愛槍を握りいつでも突き出せるように構えた姿であったが……。

「なんだ貴様ら。俺を笑いに来たのか」

と威嚇するような交戦的な目つきで問う王賁に、蒙恬は「わお、元氣そう」とは口には出さず別のことを声に出した。

「いやいや、なにがあつたのかなあつて、気になつてさ。あとは、お見舞い」

と年頃の女性なら思わずときめかせてしまう爽やかな口調で言葉を返す蒙恬。

「いらん。後ろの下僕を連れてさっさと帰れ」

そう言つて構えていた槍こそ下ろしたものの、いぜん王賁の機嫌は下火のようであり、付く島もない様子であつた。のだが、その態度にカチンとくる少年もまたいた。

「なんだとてめえ、重傷だがなんだかしらねえが、戦場にでられねえようにとどめをさし

てやろうかッ」

信であった。あとは、売り言葉に買い言葉。

「上等だ。怪我の具合を見るには貴様程度が丁度いい。身の程を知って村に帰るんだな」

と両者が武器を構え険悪な空気が場を染めようとした所で蒙恬は慌てて仲裁に入った。

「まって、違う違う。落ち着け。俺はこんなことをするためにここに来たんじゃない。二人とも冷静になれ」

もちろん二人も本気ではない。いや、場合よつては……。ゆえに互いに武器を下ろす「ツチ」「フン」とそっぽを向いて。そうして、どうにかその場は収まることになった。

「はあ……、まあいいや。それで、実際のところはどうなの。俺と信はずつと左軍側面だったから中央の戦いについては、わからないんだ。だから教えてほしい」

「……わかった。一度しか話さんから心して聴け。とくに、その下僕」

「ああんツ」といきり立つ信を蒙恬はすばやく「はいはい、ね。信も、な」と宥めて座らせると先を促した。

そうして王賁は中央の戦いの詳細について語ることになった。そして淡々と語ることにしばし。最初に口をひらいたのは蒙恬であった。

「なるほどねえ。怪我を逆手にとつて狩場におびき寄せる、か」

と輪虎の手管に舌を巻くように声をだし思案する蒙恬に対して信はサツと立ち上がると、ざまあねえなど言わんばかりに捲し立てた。

「つは。なんだよ王賁ッ。さんざん俺たちのことを馬鹿にしといて、自分はまんまと敵の策に嵌りましたつてか。笑えるぜ」

そう悪態をつく信に、普段の王賁の調子であれば「黙れ下僕」とでも言い放つ場面であつたが「……そうだ。判断を誤つた」と己の失態を粛々と受け止めているように座したまま微動だにしななかつた。その様子に毒気を抜かれた信は「なんだよ。やりずれえな」とこぼすと顔を背けながらもその場所に腰を落ち着けた。

それらを思案しながらも窺っていた蒙恬は、珍しいものをみたように「へえ。随分と殊勝な態度じゃないか」と王賁に声を向けた。

すると王賁は、当然のことだというように言葉を返した。

「己の失態を隠すなど、恥の上塗り以外の何物でもない」

「フツ。さすがは王賁。下手な名家の子息とは下地が違う」

その蒙恬の言葉に疑問を感じたのか信は声を挙げた。

「あん。自分の失敗を認めるなんて当たり前のことだろうが」と。

「ん、ああそうか。貴族出身じゃない信には馴染みがないかもしれないけど、意外と多い

んだ。自分の失敗を隠したり、なすりつけたりする馬鹿」

「な、なんだよそれ。いいのかよ」

「これが困ったことに、じつは罷り通るんだよ。言っちゃうとやろうと思えば俺や王賁くらいの立場ならいくらでもできる」

「て、てめえらッ」

「待つて。俺も王賁も、もちろんそんなことはしないよ。まあ、俺は誰かを助けるためにとか明確な理由があれば使うことにためらいはないけどね」

と信に向かって片目を閉じる仕草をした蒙恬に信は怪訝な表情をした。その様を王賁は呆れた眼付で睨みつけると言葉を発した。

「貴様はもう少し周囲に気を配るんだな」

そこから少々の悶着を乗り越えた頃、蒙恬はずっと気になっていたことを口にした。

「ねえ、王賁は第六軍の副官虎豹殿について、どう思う」

その言葉で王賁が浮かべたのは、今日の己の顛末であった。

王賁は、輪虎隊と虎豹隊が激しくぶつかったことでできた停滞を利用して両隊の合間を縫って駆け抜けて輪虎の首級を狙っていた。しかし、いざ『輪』の旗を目印に突入を果たしてみれば、そこに輪虎本人の姿はなく名を知らぬ将兵のみであった。それによつて誘い出されたことを把握した王賁は素早く離脱を試みるのだが、すでに退路は輪虎隊

に抑えらえていた。

「また君かあ。まあ、君でもいいか」

味方の隙間から姿を見せた輪虎。

「もう勝ったつもりか。この俺の槍を墮とさぬ限り、俺に負けはない」

その強気な様に輪虎は「ははっ」と笑うと「大した自信家だ。なら、生き延びてみなよ」と言い放つとその場にとどまり静かに動静を見守るのだが、その様子は、先日まで隊を先頭で引つ張っていた姿と打つて変わっていた。ことさら周囲は頑丈なまでに守られており、輪虎に至っては剣すら抜かずにいることから怪我の深さは窺い知れていた。

しかし、まずは包囲されている状態を打破せねば全滅は必至。王賁はそうした歯がゆさを抱えながらも円陣を命じて刻を稼ごうとしたとき、不意に路が開けることになる。「ハアアアアッ」と己の内に秘める威を全身から発するように声を挙げて踊りだしたひつの影。

それは敵の包囲網を断絶して乱入を果たした虎豹であった。

虎豹は部隊の中列から全体の指揮を執っており、横槍を入れるために駆ける王賁の動きを的確に取られていた。そして、それに連動するように蠢きだした敵の動きをも見て取っていた。

「ツと。もう来たのかい。動きが早いね」

「私を出し抜けるなどと思わぬことだ。ここで貴様の首をもらい受ける。総員かれッ」

虎豹の号令は付き従う精鋭を解き放ち、相對する敵を喰いつくさんと襲い掛かった。輪虎本隊と虎豹隊の精鋭の激突である。その激しさは、頑強に輪虎の周囲を固める護衛兵の陣形にすら綻びを生じさせていった。

そして、そのわずかな隙を突いたのは他でもない王賁であった。兩部隊が入り乱れる戦いの最中に垣間見えた輪虎へと続く道。

「視えた」と王賁は己に宿る槍術のすべてを懸けて輪虎に突貫を仕掛けた。輪虎は自らの護衛のわずかな隙間を押し入ってきた王賁に対して堪らずに劍を抜き放つて応戦したが、そこに精彩さはなく、すこしの攻防の間だけで、手傷を負うことになった。

その輪虎の様子に、王賁は確信を得ていた。

「その傷ではもう俺の槍は受けられん。静かに地に眠るがいい」

そう槍を構える王賁からあふれ出る覇気は、一角の将のそれであった。

「ツ、君もか。けど、僕も舐められたものだ……ねッ」

と、そのとき輪虎は片手に持つ劍を投げつけてあと背を向けた。対して「ちい」と唐突に投げつけられた劍を槍で弾いた王賁が眼にしたものは、背を向けて逃げ出した輪虎

の姿。それを認識したとき、王賁は刹那の間にその背を追った。追ってしまった。

この戦いで幾度も辛酸をなめる羽目になった敵を。千人隊となった玉鳳の門出にケチをつけた廉頗四天王を。番陽を斬った輪虎を。

王賁は追ってしまった。

「釣れたのが君だけなのは、残念だよ」

今にして思えば輪虎直下の護衛にしては緩い守りであったとわかる。けれど、そのときに気付けなかった。

輪虎の首を獲るべく決死の覚悟で抜けた先にあったのは、誘いだした敵将を射殺すために配置された弓隊であった。

それは、弓から射出された無数の矢がゆっくりせまりくる世界であった。このとき王賁の頭を駆け巡ったものは罨に嵌った後悔ではなく生きるために為すべきことであった。無数の矢の嵐から致命傷にいたるものだけを正確に選別して払い落とす。王賁は体感にすれば一秒とない刹那の判断とこれまで培ってきた槍術の粋を結集することで迫るくる死の瞬間を振り払った。「ツぐ……ツ」しかし受けた矢傷も多く躰は馬から零れ落ちた。「かはッ……ぐ」とっさの身動きすら難しくなった王賁を再び救ったのも、虎豹であった。

「世話が焼けるッ 激動の刻を戦い抜いた歴戦の将を甘く見るなッ 馬鹿者が」

「……救われた身だからこそわかる。得てこそ知れないがその抜きんできた實力は、この戦場随一といつて過言ではない」

「だよ。俺も弟から聞いた趙の馬陽侵攻を戦術盤を使つて確認したから、良くわかるよ。彼の将は、ここぞという大仕事を確実に熟す武の力も然ることながら、李牧が仕掛けた王騎將軍を窪地の罠に誘い込んだ策を後方の盤上を動かし、敵の三將軍を出し抜いて將軍を救い上げた戦術眼。そして隊を率いれば、敵本軍の守備すらをも貫く突破力。どれをとつても超一級品だ。なのに、それほどの人物でありながら、来歴が謎の人物なんて笑えるだろ。だから方々に探りを入れてみたんだけど、これがまったたくつて言つていほほど、何もわからなかつた。信は会つたことあつたつけ」

「朱錐のおっさんには何度が会つてつけど、副官はしらねえな。なんか面を被つてんだろ」

「そうそう、虎の面ね。そのせいで素性もまったたくわからない。王騎將軍の所はほんと謎ばかりだよ。今度は龍の面が増えてるし」

と頭を悩ませる素振りをする蒙恬を横目に、王賁は話を先に進めるように私見を述べた。

「……どうであれ、蒙？將軍の目ぼしい將のほとんどが戦場を去った今、恐らく明日の戦いの指揮はその第六軍が執ることになるだろう」

それに反応した信が「朱錐のおっさんが中央の大將かよ。よし、だったら明日こそ敵をぶちのめしてやるぜ」と左の手の平に「パシツ」と拳を打ち付けて期待する声を挙げたところで、蒙恬は口をはさんだ。

「ん、意気込んでる信には悪いけど、たぶん明日の戦いは守備一辺倒のガチガチの戦いになると思う」

その言葉に信が、なんでだよと顔を向ければ、蒙恬は信にもわかりやすいように説明した。

「今日の戦いこそ何とか乗り越えたけど、正直ギリギリだった。あの場面で土門將軍が息を吹き返さなければ、すくなくとも左軍は終わっていた。右軍の玄象殿の機転と朱錐殿が早々に駆けつけたことで前線こそ保つことに成功はしたけど、その代償もおおきかった。具体的に挙げれば、左軍の損耗の激さだ。俺の楽華隊は他に比べて被害は軽微だけど……。たしか信の所はかなりやられたってきいたけど」

「……ああ。俺たちが持ち場を離れたあと、副長の瀏さんが踏ん張ってくれたみたいだけど將軍がやられたって話が流れた辺りから大変だったらしい」

「ふむ。信に同行してなかったもう一人の副長は」

「ん、羌？ならいま休んでる。隊がどうにもならなくて、かなり無理しやがったみたいでぼろぼろだ」

「つてことは信のところも結構な痛手か」

「つつても羌？の姉つていうのがきて、二人だけでなんかよくわかんねえけど、気だかなんだかをまわして躰を回復をはやめるとかって話だ」

「気、ねえ。ふーん。ちよつと気になるけど、いまは明日の話を進めようか」

「おう。思いついたんだけどよ、前みたい副将から借りられたりできねえのか」

「うん。それなんだけど難しい。俺がきいた話だと、左翼の王翦將軍は敵の姜燕と五分五分の熾烈な戦いになってるらしい。加えて、右翼の桓騎將軍のほうは頼みの奇襲作戦が敵にバレて、すでに本陣を包囲される状態だ。とてもじゃないが援軍を出せる状況じゃない。あとは、じいちちゃん……、蒙？將軍の本陣だけけど、やつぱり本陣の守りを疎かにはできないから、期待はできない」

「なツ、もうどうしようもねえじゃねえかよ」

「そつ。だからガチガチの守備固めになるつてわけ」

とここまですつと黙っていた王賁が口を開いた。

「それは向こうも同じだ。こちらは数こそ削られたがかわりに、敵は主力になる将がそれぞれ浅くない傷を負った。輪虎に関して言えば、かなりの重傷だ。実際に手合わせし

た感覚からそれは間違いない。それに左軍を荒らした乱美迫も腕をおおきく斬られたと聞く」

「なるほど。つまりはガチガチに守る秦に対して、攻勢にでるには不安が残る魏で膠着に近い形になるっていうんだね」

「ああ。恐らくはこちらの疲弊を狙って着実な手だけを打ってくるはずだ」

「やっぱり王賈もそう考えるか——」

と蒙恬は声をだしたあと、顎に手を添えて「うーん」となにやらを思索しては、いや、と声を漏らしては再び考えに耽けていった。そして考えを纏め終えたのか徐に口を開いた。

「うん。ちょっと聞いてくれるかな。仮にただけど——」と。

こうして三人の会談はしばし続いて、三日目の夜は更けていった。

姉の御心

三日目の夜 飛信隊野営地。

「ちよつとそこの、そこの出っ歯の君。そう、君」

そう声を掛けられた出っ歯の君こと尾平は仲間のところに向かう足を止めた。

「へっ? お、おれ、のことか」

「そう、君。飛信隊の人だったよね」

そうして声の主をみた尾平は、キリリと表情を引き締めると、見目麗しい女性に言葉を返した。

「お、おう。俺は飛信隊の中でも一番のいい漢と噂の尾平です」と息をするように少しばかり?の嘘を織り交ぜて……。

「あ、そうそう。尾平だったね。あのあと、弟君は無事に回復できたの」

女性の言葉は明らかに尾平のことを知っている風であったのだが、当の尾平はというと「へ?」と疑問符を浮かべて「あの、どこかでお会いしましたっけ」と尋ねる始末であった。

「ほら、趙国。馬陽。真夜中の山中」

「趙国の馬陽の真夜中、山中。弟……あれ……」

尾平はゆつくりと思ひ出す。死が間近に、指先に掛かるほどに身近に感じられた恐怖の夜を。そつと蓋をしていた記憶に触れる。

それは死への恐怖と隣り合わせになりながらも必死に生き延びようと足掻いていたあの夜のこと。龐煖と対峙した夜だ。敵の追つ手は執拗なまでに激しく、次々に見つかつては殺されていく仲間を置き去りにして、見て見ぬふりをして、山中を彷徨つた一夜のことを、尾平は思ひ出す。言葉の意味を、ひとつ、またひとつと認識して、言葉は記憶に触れて形を鮮明にしていく。このままもう少し時間を掛ければ記憶は蘇るはずだ。

しかし、女性には待たなかつた。そして「再現したほうが早いか」と尾平の前から姿を消すと次の瞬間には背後に回つていた。

「動くな。声も出さな。逆らえば首を刎ねる。分かつたら領け」

背後から齎されるのは、背筋がヒヤリとするほどに冷徹な声色であつた。尾平の全身を駆け巡るのは恐怖であつた。けれど、その瞬間におぼろげであつた記憶は形を取り戻して鮮明に。

「ヒツ、ひいいい、い、いっ……あ」

それは軀に刻み込まれた記憶によって、脳の記憶が強烈に引き寄せられた結果であつ

た。

その時点で解放された尾平は、すぐに女性に向き直ると、先程とは打って変わって真剣な表情を見せて言葉を発した。

「あ、あの。あの時は、ほんとに、ほんとに助かりました。ありがとうございます。お、弟の尾倒も片足を悪くしちまつたけど命を取り留めて、あの手当がなかつたらつて。ほんとうに、ほんとうにありがとうございます」

そう深々と頭を下げる尾平の姿は、声を掛けた時にみせた軽薄さを感じさせない真摯なものであった。

「そう、それはよかったよ」

「はい。倒のやつも会つたら絶対にお礼がしたいと、ずっとー」

二人がそうして会話を重ねているとそこに馬の嘶きとともに数名の部下を引き連れた楚水が姿をみせた。その楚水から話を聞くと、野營地の見回り中に尾平ら会話を認めたので、こちらの進路を変えたとのこと。

「あんた、あのときの……。そうか、ちょうどいい。私は第六軍副官付きの玄象という。昼間は助かった。礼をするのが遅れて申し訳ない。そして、ありがとう」

と玄象は所屬と名を告げて謝辞を述べると頭を下げた。それに楚水は応じながらも相手を立てるように言葉を返した。

「飛信隊副長の楚水です。いえ。たしかに結果として救出する形になりましたが、あなたの孤軍奮闘、獅子奮迅の働きは多くの敵の目を引きつけていました。そのおかげで我々の奇襲は、より敵に深く迫るまで気取られることがありませんでした。そう意味では、こちらこそお礼を申し上げたいくらいです」と。

「なるほど、それなら受け取っておくよ。だからそちらも、そうしてほしい」

「承りました」と拱手をした楚水は、その後、気になっていたことを口にした。

「それで、こちらにはどのようなご用件でお越しに」

「うん。ちよつと羌?に用があつてね。会いに来た」

その言葉に、楚水はびくりと反応を示すととたんに表情を引き締め、わずかにだが警戒の色を見せて訊ねた。

「羌?殿はいま……。失礼ですが何用かお伺いしても」

それは今日、相当な無理をしてまで戦い仲間を護った末に倒れて眠りにについている羌?に、無用な雑事を舞い込ませたくないと思ふと氣遣うものであった。

「ふふ。大事にされてるみたいだね。妹は」

「妹……。あなたは姉君なのですか。羌?殿の」

「そつ。血の繋がりがこそないけど、里の出は同じで、姉妹として過ごした。倒れたつてきたから、見舞つてやろうかと思つてね」

「なるほど」と口にした楚水は、次に尾平に目を向けた。すると、尾平はその意を汲んだように頷き声を挙げた。

「この方は馬陽戦のときに、俺たち兄弟や信を救ってくれた恩人だ。だから、おかしなこととは決してしないはずだ」

尾平の言葉を聞いた楚水は、なにも案ずる必要性はないと判断して任務に戻ることにした。

「……わかりました。わたしはまだ見回りがありますので、尾平殿。お願いできますか」
「おう。まかしとけ」

そうして尾平に案内された玄象は差？が眠りにつく天幕に着いた。

「ここだ。でも眠ったままはずだから、静かにな」

そう言つて天幕に一緒に入ろうとする尾平に、玄象は声を掛けた。

「ああ、ありがとう。でも、二人きりにしてもらいたい。ほら、？の汗とかも拭つてやりたいからね」

尾平はそこで「あ、そうだよな」と差？の性別が女であることがわかった昼間の出来事思い出して「じゃあ終わるまで、ここで待つてるからゆつくりな」と言葉を続けた。

「すまないな。あと里に伝わる術で躰の回復を早めるものがある。それは凄く集中しないといけないから、しばらくは誰も入れないでくれると助かる」

「わかった。この尾平様に全部まかせてくれ」と勇ましく胸を叩いた。

「ふふ、ありがとう。よろしくね」

天幕のうちには、中央に敷かれた敷物の上で、すーッ、すーッ、すーッと規則正しい寝息を立てる羌？の姿があった。羌？の側に座った玄象は、慈しむように頭を撫でることしばし。

「……ずいぶん、頑張ったみたいだね。？」

そのとき玄象は、羌族の里にいたときは考えることもできなかった成長していく妹の姿に愛しさを覚えていた。

「里にいたときは、あんたが見ず知らずの他人のためにこんなになるまで軀を張る無茶をするようになるなんて、思いもしなかった。良い仲間に恵まれたみたいで、うれしいよ」

そうして視線を傍らに置かれた羌族に受け継がれる緑穂（リヨクスイ）と名付けられた剣に向けた。

「これからも？のことを護つてやってくれ。緑穂」

それから玄象は、気持ちを整めるように深く息を吸ってから吐くと声を挙げた。

「それじゃあ、まっ、起こしますか」と徐に体内の気を活性化させて拳を握ると拳骨の要領で振りおろーー、すことはできなかつた。なぜなら羌？によつてその腕を止められ

たからだ。

「象姉……、それはやり過ぎだとおもう」

「おつ、？。ちゃんと起きたね。偉い、えらい」

「……それは頭が割れるからやめてつて、前に言った」

「んー。でもさ寝てても殺気に反応できないようじや、どうせすぐに死ぬ。ならいつそ、

その役は私がつていう姉心だよ」

里でも玄象は割と無茶ぶりを差？に課していた。それというのも、放っておくとサボりがちになる妹分をそれなく鍛えるためであった。また、その秘める才能をだれよりも認めているがゆえの行動でもあった。

「そんな心、聞いたことない」

「いいや。いま聞いたね。あんたは才能はあるんだから、ちゃんと修行を積みめばもつと強くなれるんだ。ならそれを促してやるのは姉のたしなみつてね」

そこでボソつと「……屁理屈ババア」と呟いた差？を玄象は聞き逃しはしなかった。即座に拳を振り上げると「ほんとに拳骨落とすよ」と凄んだが、差？は退かず「……」と沈黙とジト目で応戦した。睨み合いが続くかと思われたが、玄象としても本気でもなく「はア。まあいいや」とあつさり引いて言葉を続けた。

「私も昼間に無茶をしたから無駄な力は使いたくない。ほら、起きな。躰、辛いんだろ」

玄象が言わんとするところを察した羌？は、普段よりかなり重い躰をなんとか起き上がらせると脚を蓮を模した座りに組み、両手はその膝の上にそつと添えた。玄象もまた同様の座りをみせて、羌？と両膝をつき合わせると、その両の手を取った。

そうして、二人は呼吸を合わせて視線を通わせると同時に目を瞑った。

それは、深い瞑想の中で二人の精と神を疑似的に同一化させることで気の総量を増やし、それを循環させることで躰の回復を促す術であった。

そうして、静かに深く、ふかく。ゆつくりと刻が過ぎていった。

第77話

月は落ち、陽は昇る。

そして、長い戦いの旅となつた魏国山陽一帯攻略戦の四日目。

流尹平野の戦い。

この四日目は、早朝から各戦場において大小様々は出来事から始まつた。

まず一つ目は、魏軍白亀西本陣丘の後方で、それは起こつた。

「貴様らそこで止まれッ。ここは我ら魏国軍の本陣である。何用か申せッ」

本陣後方を見張る守備兵は、森の隙間から姿を見せた数人の男たちに向けて、その声を張り上げた。

「えー、と。なんだっけ。あーう、ん？」

彼らの風体は、先頭をよくいえば人畜無害そうで、悪く言えば馬鹿っぽい男を除けば盗賊然としており、とてもではないが友好的な使者にみることはできない。しかし、その先頭の男の風貌が髪を三方向にだけ巻き上げて伸ばし、上半身は裸。さらに胸元に妙な文様をあしらひ、そのうえで丸腰の男のせいで、高い緊張性や警戒感を持つには、どうにも理由が乏しかった。

「さっさと見え」と急かす守備兵に慌てる素振りを見せた先頭の男であったが、言葉は出てこない。そうして焦らされること、しばし。

先頭の男は「あつ」と声を挙げると、いかにも思い出しましたという感をまる出しにしてしゃべりだした。

「ここらは、我ら大（オオ）ギコ盗賊団の縄張りだ。そつこく退去するかもしくは、貢物をだせ。さもなければ、われらと戦いとなるぞ。だ」

「お、大ギコ盗賊団？　なんだそれは、耳にかすつたこともないぞ。誰ぞ知っている者はいるかッ」

唐突に現れた嘘か真か、大ギコ盗賊団なる闖入者の登場とその要求に、守備兵は困惑の色を強めながらも周囲に確認を求め、さらに念のため「本営にも一報を入れろ」と伝者を走らせた。

バタバタと慌ただしくなる守備兵らを尻目に、当の大ギコ盗賊団は「オギコ、ちゃんと言えた。ギャカ。褒めて」「オギコ エライ」とまったく緊張感のない会話を繰り広げていた。

それらを見ていた守備兵は、オギコの名に耳をとめると声を掛けた。

「おい。まさか、そこにいるのが大ギコ盗賊団とかいう集団の頭なのか」

そう視線を向けるのは、オギコその人であった。

「? そうだよ。大ギコ盗賊団はオギコが大頭（オオカシラ）だよ」

彼らの疑問に対して純粹に返答したオギコを守備兵は品定めをするようにつま先から順に上へと見定めると侮蔑するように声を挙げて嗤った。

「ブツ、ブハハハッ。盗賊団なぞとじゃべりおるから警戒してみれば、貴様のような馬鹿な恰好をした奴が頭だと。笑わせよるわ。ハハハハッ」

「? おかしい? オギコおかしくないし、間違つてないよ」

「ブハハッ なんだ言葉もよく理解もできんのか。貴様らは盗賊団ではない。ただの馬鹿どもの集団だ。なぜならそんな馬鹿そうな頭を担いでいるのだからな。なあ、皆な」

とオギコを指さし嗤う守備兵は侮つていた。オギコの見た目やその言動から大した輩ではない、と。ゆえに気づかなかつた。傍らでブチ切れている側近の姿に。

「バンシ ツグエ」

片言の言葉を紡いだ瞬間の間に間合いを詰めて両剣を抜き放つた側近は、眼前で侮蔑していた守備兵の肘から先を切り落とし、さらに悲鳴を上げる間を与えることなくの字型に曲がつた曲剣を首筋に添えていつきに引き落とした。

当の守備兵の視点は「ハハ、は、は?」と何が起こつたのか理解できない表情のまま傾き、そのまま視界は暗転。ポロツと零れた首から先はゴロリと地面を転がり、躰は糸の切れた人形のようにドサツと音を立てて倒れて骸と化した。

そこに、さきほどまであつた唾いの声ない。ただこの一帯に魂を喪失した物言わぬ屍のような静寂が漂うのみである。

そのシンとした空気を破るように「ギャカ、凄い。凄いや」とはしやくオギコの姿に我に返つた魏軍守備兵たちは、一斉に声を挙げた。

「お、大ギコ盗賊団なる者どもを殺せ。仲間の仇をとれえッ」

大ギコ盗賊団を名乗る者たちを殺そうと武器を掲げて迫る魏守備兵に対して、オギコは慌てることなくどこかに向けて声を張り上げた。

「おーい皆、出番だよーッ」

すると、魏軍後方の木々の隙間から、ぞろり、ぞろりと現れる大ギコ盗賊団の姿が。それらの山林の奥にも複数の部隊が蠢く兆候が見えはじめ……。

「なな、て、て敵襲だ。す、す……い数だぞ。ほ、本営に、本営に応援の要請をッ」

そうして、静寂の朝は混沌の渦へと飲み込まれていった。

慌ただしくて騒がしい。そんな魏軍本陣後方の様子をその丘上から愉し気に見据える集団があつた。

「大ギコ盗賊団で……。それじゃあ名前がギコになるじゃないですか。というか、単純ですがオギコ大盗賊団でよかつたんじゃないですか」

と丸みを帯びた似非紳士がひとり。

「知るかよ。オギコの好きにやらせておけ」

とは艶やかな黒髪を後ろで束ねた魅惑の美丈夫。

「いいじゃないか。大ギコ盗賊団って名前。私は好きだぞ」

というのは、ちよつと変わったモノが好きな弓を背負いし女戦士であった。

「そんなじゃまお前ら、オオカシラのオギコ様が戦つてるうちに、さつさといくぞ」

そうして、不敵な笑みが見据えるのは丘の頂上部で風にはためく魏国旗のある場所であった。

大ギコ盗賊団の騒ぎを皮切りにして、次は魏軍右翼姜燕のもとで、それは起きた。

「なに。その報告に間違いはないのか」

と眉を少しあげて僅かばかりの驚きを露わにしているのは、魏右軍の将姜燕であった。

「間違いありません。夜明けとともに異変に気付いて各方面に向けて斥候を放ちました。まだどこからも……」

四日目の戦いはすでに各戦場で始まっていたが、姜燕はいまだ本陣から動けずいた。

そういうのも、昨日まで対峙していた王翦軍が忽然とその姿を消したからである。そ

のため、この状況が何らかの策ではないかと警戒の色を強めた魏右翼軍は、思いがけない足止めを強いられていたのだ。

「……ふむ。ならば我々に気取られることなく、昨夜のうちに全軍を退かせたということか」

「はい。そうとしか考えられません。姜燕様。如何いたしましたでしょう。敵の姿がない以上は、このまま進軍するべきかと愚考致します」

この急激な状況の変化に、姜燕は口をいつたん嚙むと戦況を鑑みながらこれからの動きを思案することになった。そこから瞑目すること、しばしの間。思案をまとめおえた姜燕は言葉を発した。

「いましばらく、ここで斥候の報告を待つ。王翦軍は警戒に値する敵だ。昨日の戦い、我らの進軍を経路を読んだ伏兵に加えて、味方すら躊躇なく踏みつぶして進む非情なまでの突撃戦法。そのどちらも、不意を突かれて行われれば大打撃になりかねない。したがってまずは索敵を徹底させよ。そののち進軍を開始する」

「ハハッ」と姜燕の命令を受諾した声が魏右翼本陣に響いた。

ところかわって相對峙していた王翦はというと。

「王翦様。姜燕はすぐに追ってくるでしょうか」

そう声を発したのは王翦軍の将亜光であった。

「奴がすぐに動くことはない。そのための種は、すでに蒔いてある」

この言葉ですべてを察した亜光は、かすかに笑みを浮かべると言葉を返した。

「流石は王翦様。それならばこの戦い、温存されるはずでした我らが動いた甲斐がありましたな」

仮面の奥で視線を亜光に向けた王翦であったがその眼はすでに、ここではなく次に向かっていた。

「いくぞ。こちらの思惑に気付かれる前にことを終えておく必要がある」

そうして馬を駆る王翦の鋭い眼光は、この戦いの行く末を見据えていた。

そして最後は、蒙?の本陣丘の後方で、それは起こった。

「蒙?おーっうッ 儂、自らが来てやったぞ。さっさと姿をみせんか。逃げ腰蒙?よッ」

それは、廉頗来襲の報せであった。

「フオフオフオ。いじり方が変わっておらんわ。……のう廉頗よ」

蒙?は弱腰になりそうになる内心を押し殺して動揺が走っている守備兵たちに向けて声を挙げて語り掛けた。

「皆の者ツ 廉頗が現れようとも慌てるでないぞ。この事態はすでに想定済みじゃ。そなたらは、我が命を受けた各守備隊長の指示通りに行動すればよい。そして、この本陣は絶対におちぬ。皆よ、肅々と戦え。さすれば自ずと我らが勝つ。これは、そういう戦いじゃ」

そして最後に蒙？は、大きく息を吸い込み胸を膨らませるとこの戦場全体に向かつて叫んだ。

「儂はここにござるぞ、廉頗よ。この儂の首、易くはないぞ。欲しければのぼつてみよ。逆に貴様を討ちこの戦いに終止符を打つてくれるわツ 総員、戦の準備に取り掛かれツ」
蒙？の檄は本陣守備兵の心に火を点した。三大天廉頗なにするもので、と高まつた士気そのままに練り込まれた防御陣が次々に設置されていった。

「蒙？の分際で吠えおるわ。フンツ いいだろう。うぬのすべてを打ち砕いてその首、野に晒してやるわ」

これらの出来事が複雑に絡まり合い、戦いは遂に終局を迎えることになった。

第78話

流尹平野からほど近く魏の国境を越えた先にある趙の城、環甘。

「秦はどう動くのか……」

李牧は城の大広間に座したまま幾度目かの思案をしていた。その視線の先にあるのは、戦国七雄の名と主要な城郭におおよその国境線を記された大きな戦略図であり、その大きさをゆえに床に拡げられていた。その横には、流尹平野の戦いを読み解くうえで必要となる山々の起伏など戦場を模した造りの戦術盤があり、その上に部隊を模した駒がいくつも置かれている。

この大広間の様相は、さながら軍司令が軍略を練る一室そのものであった。

そんななか、李牧は戦略図のある一点を見つめていた。

「よもや、あの廉頗將軍が敗れるとは思ってもありませんでした」

山陽である。廉頗が敗れたということは、秦が山陽一帯を奪取したという事実の表われであった。

「あの、李牧様……」

声を掛けたのはカイネである。カイネは、このところ大広間に籠っている李牧の身を

案じてこの場に訪れていた。そして許可を得て入室して間もなく、李牧が独り言のように呟いた言葉に耳をとめると、その名を呼んで気遣うように言葉を続けた。

「そろそろ一度、休まれてはいかがですか。もう二日もともに休まれていないではありませんか。それに、すでに王都に帰還する行程を一日延ばしています。明日中にはどうあつても帰還しなくてはならないのですから、移動も馬車ではありません。この調子で続けられては、李牧様がお休みになられる時間がありません。それでは、李牧様のお体に障ります」

李牧は思案の淵を歩きながらもそれら言葉に反応を示して、安心させるように穏やかな声で言葉を返した。

「ん。私は大丈夫ですよ。カイネ。特段に無理をしてるわけではありません。ただ……私にしてこの形での決着は予想外でした。ですから、こうして今後の対応策をいくつもの可能性を探りながら練っているわけです。あと、さらに並行して、もう一つ。流尹平野の全容をなるべくはやくに知るためにギリギリまでここに滞在しているのも理由の一つです。この戦いの全容を知るほどに対秦国を想定したとき、將軍が敗れるほどの事態を招いた敵。中華にまだ知られざる、王翦、桓騎という存在の大きさを早急に推し量っておく必要があると感じましたからね」

「……李牧様は、王翦と桓騎がそれほどまでの敵であるとおっしゃられるのですね」

「ええ。かなりの警戒を要する敵になるでしょう」

それから李牧は、述懐する。

「秦魏山陽戦が秦の勝利で終結して、早二日。ようやく戦いの詳細を携えた斥候が戻り、この戦いの全体像を把握することができるようになりました。王翦、それに桓騎。どちらもこれまで名を馳せていなかったのが不思議なほどの人物です」

カイネはそこに一つの疑問を呈した。

「李牧様。それに付いて一つお聞きしたいことがあります。今回の戦、手段こそわかりませんが、結果的に秦右翼の桓騎によつて魏本陣が制圧されたことが勝敗の決め手だったように感じています。それに比べて左翼の王翦は、姜燕將軍と互角以上に渡り合った三日目の戦いこそは評価できますが、そのあとは逃げるように後方まで大きく後退して、勝敗に直結するほどの働きをしたのかと言われれば疑問が残ります」

「なるほど。確かに桓騎が魏の本陣を四日目早々に占領した事実は大きい。ですが、実際に決め手になったのは、王翦が蒙？本陣の後方に現れたことにあります。これによつて蒙？本陣を強襲していた廉頗將軍は前後を挟まれる形になりました」

「李牧様、そこです。わたしはそこが一番気になっていました。あのととき廉頗將軍は、蒙？本陣を強襲して後方守備隊を蹴散らし、蒙？本人を追い詰めていたと聞きます。なのに、そのあとすぐに和睦の申し出を……。私はあのととき將軍は、蒙？を討ちとり自らが

総大将となつて魏軍を率いていけば、まだ勝機はあつたのではないかと」

カインの私見を李牧は静かに精査し、それから言葉を返した。

「……おそらくですが、將軍は勝敗の見えない泥沼の消耗戦になる事態を避けたのだと思いません」

李牧は立ち上がると横に設置されている戦術盤の前に立ち部隊を模した駒を並べ替えていく。

「あの当時の戦況を俯瞰してみると、唐突に持ち上がった魏の本陣陥落の報せは、魏軍に大きな動揺を与えました」

そして中央の平野ある駒を手や木製の鍬に似た道具などを用いて動きを再現した。

「その期を逃がさず攻勢にでた秦中央軍の勢いは、数で勝る魏の中央軍を後退させるほどであった。加えて、魏軍全体の情報を司る本陣の陥落は、遠く離れた秦右翼桓騎の本陣を包囲していた玄峰軍を孤立させることになります」

カインは李牧の語る全体像を耳にして、驚きに目を見開いた。

「……まさか。右翼の桓騎はそこまで考えて行動していた、と」

「ええ。私はそう読みます。すくなくとも右翼の戦場に関しては、彼の者が思い描いた通りの結果でしょう。初日から行われた度重なる奇襲攻撃に敵兵の遺体を苛烈に弄ぶ所業。そして不自然に遠い本陣。私はそこに、幾重にも張り巡らされた策謀の糸

の気配を感じています。魏の左翼軍はあの場で伏兵のあぶり出しを優先したようですが、仮に、彼らが短期決戦に出ていたなら、桓騎の配していた伏兵によつて玄峰將軍は討たれていてもおかしくありませんでした」

李牧の語る桓騎像にカイネは動揺の色を濃くして訊ねた。

「なつ、なら桓騎は一体どこからその構図を描いていたと李牧様はお考えですか」

李牧は全体の戦況を鑑みて桓騎の思考を読み解き、私見を述べた。

「おそらくですが、初日から。それに、中央軍の戦果。この辺りだと思えます」

李牧が口にした通り、初日の中央軍の戦報を受けた段階で桓騎は、意図していた流れに変化を加えていた。

「しよ、初日からですか。で、では中央軍の戦果は何を意味していたのですか」

カイネに見当もつかないことであったが、桓騎は、初日の流尹平野における中央軍の奮戦よつて敵軍の重心に歪みを生まれると睨んでいた。

「初日の中央軍の戦いは大荒れでした。どちらにも相応の損害はでていますが、目を付けたら廉頗將軍自らが出陣することになった側近輪虎の一件でしょう」

それは廉頗にして、攻を是とした策中に齎されたわずかながらの守の意識であった。

「そんな初めから」

そして桓騎は初日と同様に戦場に赴いていたが魏軍の動向に生じた変化を鋭敏に感

じ取ると、すぐに本陣に帰還を果たした。そこから雷土と帰陣の際に目をつけた壁に伝令を飛ばして本陣付近に待機させると、あとは着陣した姿を十分に印象づけて、裏から本陣を離れていた。

「そうでなければ、四日目の早朝に魏軍にまったく気取られることなくあれほどの兵を展開できるはずがありません」

流尹平野中央から遠く離れた本陣。それを囿にして、桓騎は元より伏させていた兵を連れて、さらに大きく外側に進路を取って二日目の夜を迎えた。そして三日目を移動に費やし、部隊を展開させた。

「では、魏軍の後方に現れたという大ギコ盗賊団というのは桓騎軍……」

「ええ、ギコという名に心当たりはありませんが、十中八九、桓騎の策略でしょう。そして、桓騎は騒ぎに乗じて白亀西本陣を制圧した。総じて評するのなら、捕虜となった者たちを亡き者にしたことを除けば、見事な手腕と言わざるを得ません」

初日のうちに生まれた攻守のわずかな意識の差。そのわずかな差異は、四日目にして確かな刻の差となって現れることになった。

そう、廉頗が蒙？本陣の攻略に本腰を入れた頃には魏の本陣は陥落していたのだ。

「で、ですが、策のためとはいえ……、あまりにも自国の兵を見殺しにしていませんか」
事実、カイネの指摘通りに伏兵となった秦の奇襲部隊には何の助けもだされることは

なく、無残なまでに屍を野に晒していた。

「この戦の価値。それを天秤に乗せるのであれば、上策です」

「つ……。それでは秦の左翼、左翼はどうなのですか。王翦は姜燕將軍の猛攻からどのようにして逃れていたのでしょうか」

李牧は盤上の秦右翼に向けていた視線を秦左翼に向けて意識を切り替えると言葉を続けた。

「……いくつかの可能性は浮かびます。王翦は一日目、二日目と姜燕將軍に押される形で後退しながら戦っています。ですが、三日目。王翦は攻勢でます。それも恐ろしいまでに激しい反転攻勢であったと聞きます。対峙している將軍もこれには面を食らったことでしょうか。そして、そこから読み解けるものが一つあります。王翦は、將軍の実際の強さを知り得ませんでした。そこで、この後退戦です。これは、被害を抑えながら將軍の戦い方をつぶさに観察するためだったのでしよう」

「あの後退にそんな意図が含まれていたなんて……」

「これらの出来事から、王翦はかなりの慎重を期す人物であることがわかります。そして、そこから四日目。王翦軍は一気に後退します。これは姜燕軍からみると五分で対峙していた敵が忽然と姿を消したようにみえたことでしよう」

そこでカイネは、疑問に感じていたことを率直に訊ねた。

「……なぜ王翦はそのような動きをしたのでしょうか」

李牧は視線を戦術盤からあげるとカイネに向けた。

「カイネ。それは自分が將軍の立場であったとして考えてみてください」

その言葉を受けてカイネは、それぞれの手で反対の肘を覆うように組むと真剣な面持ちで思案を始めた。

「私が、將軍の立場なら……。私は、下がった敵をすぐに追います。それはもちろん斥候を放ったうえですが、すぐに追うべきだと思います」

「それはなぜ」

「左右どちらかの軍が素早く敵本陣の裏を衝くことができれば、より戦況が有利になるからです」

「そうですね。姜燕將軍も同様に、ですが、もう一つ先を思慮した」

「もう一つ、さき」

「畏の存在です」

事実、姜燕はその可能性を潰すために留まることになり、すぐに軍を動かさなかつた。王翦軍のあまりに手際の良い後退劇が姜燕を慎重にさせた。

そして斥候に王翦本軍の追跡をさせ、索敵をより細やかにすることで敵小部隊の潜伏をあぶりだそうとした。

「ところで、ここまで聞いてカインは將軍が慎重すぎるように感じてはいませんか」

しかし、そのどちらにも空振りに終わる。敵はいなかったのだ。少なくとも蒙？本陣後方までの路には。

「えっ。……それは、たしかに」

「王翦の恐ろしい所はそこです。開戦当初から撤退するまでの流れは非常になめらかであり、それでいて対峙する敵には容易に飛び込みさせない心理的な罠を仕掛けています」

「ええ。三日目の苛烈な反転攻勢は、その布石です。それを実際に目にした將軍からすると、おおきく視界を確保できない自身の有利な山間において、自軍の戦い方を讀まれ進路に伏兵を配置された。そのうえで、強軍による激しい攻勢で中央は押し込まれる形になったのです。この王翦の智謀の鋭さと軍の精強ぶりを目の当たりにすれば、否が応でも警戒せねばなりません」

カインは左翼で目に映らないところで繰り広げられていた計略の深さに、ゴクリつと息を飲んだ。さらに李牧は続ける。

「そこから索敵をおえた姜燕將軍は進軍を開始します。そして発見する。蒙？本陣より後方に位置した王翦の造った砦を。しかも一日や二日で落とせるようなものではなく堅牢に造られた砦です。私も含めて、これには將軍も相当に驚き、脚を止めています」

「王翦は、開戦前から砦の準備を……」

「やっかいですよ。唐突に地図にない堅牢な砦を出現させるのですから。この砦一つで軍略の幅はおおしく変わってしまいます。これだけでも王翦は中華有数の才の持ち主。そう認めざるを得ません」

姜燕は予想外の砦の出現により動きを止めた。というのも、まず砦の包围を続けながら蒙？本陣を襲撃するには兵数に不足がある。加えて、姜燕は危惧していることが一つあった。それは昨夜敵の動向を完全に見失っていたことに起因していた。

「そして私が疑問を感じたように、将軍も感じたはずです。この砦にいる王翦軍は本当にすべてなのか、と」

「えっ。それは全軍が後退したのだから砦に在るのはすべ、て……あつ」

「気づきましたね。そう、王翦は砦に籠ってはいなかった。でなければ、廉頗將軍の後方をとることなどできません。こうして後から戦いを読み解いていくと、白老蒙？が抱える両腕王翦、桓騎の異常さをはつきりと目にすることができます。ですが、いまこれを知れたことは、とても有益なことでもあります。そして最後に、中央です」

そして李牧は視点を秦の左翼から中央に移した。

「大荒れだった中央の戦いも注もー」と李牧が口したところで、大広間の扉が勢いよく開いた。そこにいたのは李牧の秘書官であり、慌てた様子であった。

「李牧様。王宮より早々の帰還を促す書状が届いております」

その言葉ですべてを察した李牧は、ため息を押し殺すように軽く息を吐くと了承の意を示した。

「…ふう、来るような気はしていました。王と出立の前に会談したことが裏目にでたようですね。わかりました。ただちに出立の準備を。カイネ、お願いします」

「ハッ」と拱手したカイネは「すぐに取り掛かります」と大広間をあとにした。

李牧の言った出立前の会談とは、この戦いの展望について問われたものであった。そこで李牧は王に対して、多少の波乱はあれど廉頗將軍の勝利は揺らぐことはないと言っていた。けれど、実際の勝敗はその逆であった。

趙王はそのことを直接李牧に聞いたのだすつもりであったが、李牧が帰還の行程を延ばしていると聞きつけたことで届いたのだが、この書状であった。

「いずれにせよ、王にこれから始まるであろうあらたな中華の騒乱の話をしておかなくてはなりません」

そう口にした李牧の目は、山陽を起点としてこれから起こる血生臭い中華の動乱の影を捉えていた。

それぞれの路

第79話

魏の都大梁に建つとある屋敷。

「うぬらに肩身の狭い思いをさせたのは儂の不徳の致すところ。許せ」

まず廉頗は、自身の四天王と呼ばれる側近たちを自らの一室に集めると開口一番にそう口にした。

それに真つ先に反応を示したのは、この場においてもつとも老獪な策を用いる軍略家玄峰であった。

「まったくその通りじゃ。此度の敗戦で大戦に立つ機会が遠のいたではない。この阿呆め」

「なんじゃ、玄峰じじいは手厳しいのオ」

「当然じゃろうが。儂が用意した策をぶち壊して戦を進めおつてからに、なにを言うてるか」

「うぬは根にもつのお」とぼやく廉頗に四天王筆頭介子坊と随一の突破力を誇る輪虎が間を取り持つように声を掛けた。

「玄峰様。敗戦の責は、中央を抑えきれなかった我らにあります」

「そうですよ。そもそも初日に大怪我をした僕の責が大きい。そうでなければ、間違いなく僕たちが勝っていました」

玄峰は二人を一瞥すると、自戒の意味も込めて言葉を返した。

「フンッ そんなことは分かっているわ。それに、儂であれ姜燕であれ敵の策に嵌っておったんじゃからな」

「……申し開きもありません。敗戦の責は、王翦の姿を見失った私に」

それぞれが自責の念に包まれて沈む部屋の空気に廉頗は「嗚呼ああ」と唸るように腹から声を出して続けた。

「もうよいわ。儂ら皆が嵌められておった。つまりは蒙?のひよっこが儂らの想像を超える者たちを従えておった。そういうことじゃ。それに中央にせよ鬼面に虎の面、極めつけは王騎やつじゃ」

廉頗と王騎は両国の和睦が済んだあと言葉を交わしていた。

「此度は負けてやる。さあ皆よ、帰るぞ」

蒙?と和睦を成立させた廉頗は、秦の本陣丘を正面からを魏に向けて移動を開始する。その丘の下、廉頗は中央の戦場で矛を振るっていた介子坊らと合流を果たした際の

ことである。

その介子坊より王騎が隠れて参戦していたことを耳にしたのだ。

「うぬらは先に行け。儂は少し用ができた」

と廉頗は馬首を翻すと朱錐たちのいる場所に向かう。そこには、廉頗が来ることを予期していたように朱錐と虎豹、そして青騎が朱錐軍の前に揃って並んでいた。

「随分と久しいの、鬼面。いや朱錐よ。子坊とやり合つたそうじゃな」

「これは廉頗殿。介子坊殿に決着は次の機会にとお伝え願いますかな。それと貴殿にも、一つ。あの借りはいずれ必ず返させていただくのでご覚悟ください」

朱錐の強気な言葉と内包される威の圧に廉頗は「ふはっ」と愉快げな様子をみせると続けた。

「又ハハ。よいぞ。やれるものならなア」

そうして不敵に笑みを浮かべた廉頗は視線を虎豹に移し、そして青騎に向けた。

「それで、うぬはコソコソとここで何をしておる。おうー」

青騎は名を呼ばれる前に言葉を被せた。

「これは初めまして。廉頗大將軍。わたくし、朱錐軍の参謀を務めさせていただいてる青騎と申します。以後お見知りおきを、ねえ將軍？」

と威圧を込める青騎に、廉頗は意図を図りかね一先ず名の件は置くことにした。

「……貴様。なにを企んでおる」

「ソフ 何も」

瞬間。廉頗のこめかみに筋がはしり周囲の空気が重さを纏った。

「ふざけておるのか」

一触即発。和睦が何だと言わんばかりの殺気は軍馬にも伝わり怯えをまじえて嘶（イナナ）かせた。

そんな殺気の矛先を向けられた青騎もとい王騎はというと。

「んふっ んふふふ。あなたには敵いませんねえ。廉頗さん」

それはじつに心持ち愉快であると声から察せられたほどであった。

「では、少しばかりお話します。まず本当に、私が戦場に立っていることに企みなどありませんよ。ただ一人の武人にかえり、戦場を駆けてみたくなった。それだけです」

「なにをつまらぬことを。それが儂ら三大天と争った漢の言葉か」

「納得できませんか。それではもう少し。一昨年のことです。あなたの祖国と戦ったあの一戦です」

すぐに浮かぶのは趙国、馬陽。そしてあらたな三大天。

「……李牧か」

「ええ、見事にしてやられましたよ。趙軍十数万を動員した目的は、すべて私を討ちとる

ため。そのために練り込まれた策謀は、正直に私の想像を超えた場所にありました」

「ふん。なんじやお主。儂に敗戦の弁でも聞いてほしいのか」

「ンフ それも一興ですが、またの機会に」

そうして、天に仰ぐと言葉を紡いだ。

「……たしかな、時代の移り変わりを感じました。私とあなた方が鎬をけずったあの狂乱とも呼べる刻のはざまからの」

それに廉頗は憤懣を噴出させた。

「どう時代が移り変わろうとも強者は死ぬまで強者。弱いから死ぬ。それが変わることのない戦乱の世のしきたりじやろうがッ。貴様ア、敗けて腑抜けおったか」

「んふふ。あなたならそう仰ると思っていましたよ。ですが、私はなにも弱かったから負けた、と考えるはしません。矛を交える戦場だけが戦いではなくなっただけということですよ」

「……ふん。なるほどのオ。言いたいことはわかった。じゃが、それを含めて戦じやろうが。うぬが呆けておる間に李牧は準備をしておった。そういうことであろうが。なにを甘えたことをぬかすか。この馬鹿が」

その言葉は青騎に「んふふふ」と漏れ出るような声と微笑みをたたえさせた。

「あなたのそういうところ嫌いではありませんよ」

それに対して「フンツ」とそつぽをむく廉頗の姿があつた。

「さて、お話はまたの機会に。そろそろ往かれて如何ですか。將軍」

「ん。それもそうじゃのオ」と口した廉頗は、鋭い眼光を青騎に、つぎに朱錐、そして虎豹にむけた。

「次に戦場でおうたときは貴様らを細切れにしてやるゆえ、肝に銘じておけ。じゃあのオ」

と馬首を翻した廉頗は魏に帰還する軍列に向かつて駆けた。

「なにがまたじゃ。あやつめ。ふざけた書簡を寄越しおつて」

「書簡……」と口にしたのは姜燕であつた。

「その様子からして、うぬらにも届いておるのであろう」

「ハツ　こちらに」

廉頗は差し出された書簡をざつと読んだ。

「又ハハ　先の戦のばかりだというのに、大胆なことを思い浮かべるものじゃ。のオ、子坊」

「いえ、まったくの論外かと。生涯、私が殿の元を離れることはありませんゆえに」

「お主はそうであらうなア　あとは」

「私も。殿に忠誠を誓ったあの日から、この心持ちが変わることはありません」

「ということじゃが、玄峰じじいはどうじゃ」

「儂か。儂は決まっておろう。この話に乗るつもりじゃ」

「ツな」と驚きを露わにする介子坊と姜燕、そして声には出さずに驚いた表情をみせた輪虎らに、玄峰は言葉を挟ませることなく続けた。

「儂は古い先が短いでな、好きにさせてもらおう。それに儂は、お主ほど趙国に愛着をもつてはおらぬ。このままお主に付いておつても大戦にありつけそうもなさそうじゃからのお」

それに介子坊は「と、殿。よろしいのですか」と驚きを浮かべて訊ねた。

「又ハハ そうかア。うぬもただの軍略家に戻るつもりか、玄峰じじイ」

「あと付け加えるとしたら、馬鹿王にはもううんざりしておる」

その言葉で、この場にいる皆が察した。

「この年齢になれば地位に名誉、金。そんなくだらぬものにさほどの価値は見出せぬ。ただ儂が求めのは、この脳髓の隅々余すことなく用いられる戦場だけじゃ」

姜燕は玄峰の真意を耳にして静かに「……玄峰様」と名を漏らし、廉頗は視線を玄峰から残す一人にむけた。

「うぬの考えは理解した。最後は輪虎。お主じゃ」

「僕は……もちろん殿の御側にー」

とそこで廉頗は言葉を被せた。

「輪虎よ。なにか思う所があるのであろう」

それに輪虎は「ハハ、殿……。やっぱりばれちやいましたか」と失敗したなあと頭を垂れた。

「ふんツ 当然じゃ。いったい何年の付き合いじゃと思うておる」

そうして、輪虎はふだんの飄々としたなりを抑えりと床に片膝をついて携えていた宝刀、その両の剣を手のひらの上に乗せて「殿にこれをお返しします」と差し出した。

輪虎の行動は、場に沈黙のときをつくった。廉頗は話のさきを促す。

「……理由をきこう」

「僕は戦によって行き場を失い死にかけていたところを殿に拾われ、この命を繋げました。それから、殿ため全力で励み側近に。そして、ほかの皆と並べられる榮譽を承りました。そして、僕の命すべてを殿のために使い切る。その誓いは、いまこの時にあつて微塵にかわりはありません。つて聞いてます？」

「前置きがながいわ。さっさと言わんか」

「ハハハ。そうですね……僕はこの中華の天を、地を、この目で一度確かめてみたい、と考えています」

「六国を旅する、と申すか」

これまで輪虎は多くのことを教わった。

「そうなります。僕にとつて「国」というものにさしての意味はもちません。僕は殿がい
て皆がいて、その恩を返せる戦があればよかった」

玄峰から智を授かり、介子坊から戦う力を学び、姜燕からは忠節の意味を。

「ですが、その役は介子坊様と姜燕様にお任せしようかなど。やっぱり……、勝手ですか
ね」

だからこそ輪虎は引け目を感じていた。

「なんじゃ、お主。胡散臭い顔をしてそんなことを考えておったのか」

「あつ、殿はひどいなあ。僕のこと、そんな風に見ていたなんてがっかりです」

「又ハハ 家臣の分際で言いよるわ」

と廉頗は笑みを浮かべながら顎をさすった。

「そうじゃのオ、まずはひとつ。はつきりさせておくか」

廉頗の目が輪虎の曲剣にとまる。

「儂がその剣を受け取ることはない」

そうはつきりと口にした。廉頗が示したのは申し出への拒絶であった。

「……だめですか」

輪虎は残念に思いながらも「仕方ないか」と意識を切り替えようとしたが、廉頗の真意はそうではなかった。

「その曲剣じゃが、儂に、死ぬまで使うと申したであろう」

輪虎と廉頗の記憶。他愛もない日常のやり取りであった。

「殿、覚えていてッ……。まだ僕が、この剣を持つことをお許しくださいませか」

暗に、廉頗は言葉でそれを示したのだ。

「フン、その曲剣はそのように大層なモノではないわ。使えなくなったら、どこぞの野にでも捨てればよい」

「ふふ、殿に頂いたこの宝刀。僕は絶対に手放しませんよ。この宝刀に誓い、僕は殿の窮地に必ず駆けつけることをお約束します」

「儂に窮地など存在せぬわ。うぬは気の済むまでこの広大な中華を見渡してくるがよ
っ」

その後廉頗は魏王と謁見した。そして、山陽一帯の戦いひいては流尹平野での敗戦の責を問われ魏国を追放された。

第80話

魏の都大梁。廉頗追放の前日。

かつて魏火龍七師のひとりとして名を馳せた大軍師靈鳳は、自室の入り口付近で拱手をする人影に向けて声を掛けた。

「ん、戻ったか鳳明。どうであつた」

「ハッ。申し訳ありません。師匠（センセイ）。王の裁可を覆すことは叶いませんでした」

そう謝罪の言葉を口にしたあと入室したのは、その一番弟子である呉鳳明であつた。それに対して、靈鳳は特に気に掛ける素振りなく返した。

「そうか。王がご決断なされたのなら、仕方ない」

「王は今しばらくの逗留を許そうとされていたのですが……。私に、もうすこし発言力があればと悔やまれます」

靈鳳と呉鳳明とともに元趙三大天廉頗を魏の駒として、これからも有用に扱うようにと王に進言していた。

「フツ それは敗れたわたしへの当てつけか」

しかし、廉頗が魏王の庇護のもと三年に渡り軍を率いようとはしなかったことと此度の敗戦によって、魏の重臣たちの間に溜まっていた憤懣の矛先がむいたことで、二人の意見が取り入れられる隙間はなくなっていた。それを靈鳳は揶揄したのだ。

「そのような意図はありません」

「フフ、ただの戯言だ。敗れた私の言が取り入れられないことはわかっていた。それには、投獄されていた過去もある。やはり戦に出たことない宮廷の文官どもに、廉頗の価値を押し量れようはずもない、か」

靈鳳がそうであったように呉鳳明もまた、山陽戦以前の敗走による発言力の低下を回復しきれていなかったのもその要因の一つであった。

「……師匠」

「気にするな、鳳明。魏にはまだ眠ったままの火龍がいる。お前は引き続き王を説得するといい」

呉鳳明は「ハッ」と拱手をみせ承諾の意を示すと気に掛かっていたことを言葉にした。

「……師匠。先の大戦に王騎が出陣していたというのは本当ですか」

「ああ。本当だ。どういうつもりかまで知る術はないがな」

「それは王騎が前線を退いてはいなかったということですか」

「フム。それは少し違ふと私はみる。奴は素性を明かしておらず、秦の連中もその事実をほとんどの者が知っている様子はなかった」

呉鳳明は顎に手を添えて思案する。

「……そうなるよ、気に掛かります」

「そうだな。お前はどうみる、鳳明」

靈鳳は弟子を試すように視線を向ける。

「王騎は、李牧に敗れたことで武名をおおきく墮としました。ですが、だからと言ってまったく無くなったわけではありません。ですので、どのような場面であろうと王騎が大將軍として立てば高い士気は得られるはずですよ。そうしなかつたのですから、目的はこの戦いそのものではない。と考えます」

靈鳳は「悪くない」と口すると弟子に向けていた視線をはずして、魏の周辺を模した戦略盤に目をやった。

「それで師匠はどのようにお考えですか」

「端的に、王騎がその素性を隠して戦場に現れたこと、それ自体が問題なのだ」

即座に呉鳳明は戦略盤に向けられた視線の意味を理解して応える。

「……確かに。王騎程の大物が將軍という地位を捨てて、どこからともなく秦の戦に介入してくるとなれば、厄介なことになります」

靈凰は静かに頷く。

「では訊くでしょう。お前ならこの大駒をどう扱う」

「はい。私なら——」

靈凰はしばし弟子の見解に耳を傾けると纏めるように言った。

「……秦の怪鳥か。王騎の戦略的価値は膨大だ。奴自身の武勇も然ることながら、いかなる戦場においても戦果を挙げ続けた経験値は、戦いの急所を的確に衝くであろうな」

呉鳳明は言葉の意味することを察した。

「……すぐにも対秦国の戦線を大きく見直すよう王に進言します」

「鳳明。やはりお前は私の一番の弟子に相応しい。お前はそのまま献策をもつてして王を支え、第一の臣になれ。そうでなければ、いかなる策謀を巡らせようと意味を為さんぞ」

「理解っています」

と語気を強めて決意を示した才覚豊かな若き弟子の姿に靈凰はふと浮かんだことを口する。

「天下の、大將軍になる、か」

ふと靈凰は思い耽る。

そう叫んでいたのは血気が盛んそうな敵の少年。名をなんと叫びたか。

「信ッ。飛信隊千人将の信」

信は後方からの声に気付くと歩みを止めて顔を向けた。

舞台は変わり秦の都咸陽。刻は論功行賞のあと。

「ん。ああ、蒙恬か」

蒙恬は返事をした信の声にどことなく張りがないように察して訊いた。

「あれ、どうしたの信。せつかく論功行賞で正式な千人将になれたのに浮かないを顔して」

蒙恬の言葉が示すように信は、山陽一帯攻略の功績によって臨時千人将から正式な千人将へと昇格を果たしていた。もちろんそれは信だけでなく玉鳳隊王賁も同様であった。

ちなみにだが、楽華隊蒙恬はもとより千人将であったために別の褒賞を授与されていた。

「……狙うは大将軍廉頗の首だつて勢い勇んで、その下の四天王に將軍首の一つ獲れずに終わつて昇格だつつてもよ。素直に喜べねえって話だ」

それに蒙恬は「いやいや」と声を出すと、お前は何を言っているんだとばかりに言葉を返した。

「信。將軍の首なんてそうそう獲れるわけないだろう。確かに、この前みたいな大戦になれば両軍が入り乱れて運よく遭遇できたりもするだろうけど、普通は俺たち程度がその瞬間にありつけることなんて稀なんだぞ」

「それは……その通りなんだろうけどよ」

信の目標は天下の大將軍である。それを前にすれば、此度の戦は昇格こそ認められたものの、どことなく物足りなく足踏みをした心持ちになっていた。

「ふうん、なるほどね。信、あえて言っておくけど敵將の首を挙げるだけが戦じゃないぞ。そこに至るまでに、他の皆が血を流している。あの四日目の攻防だってそうさ。俺たちが先駆けなつたことで空いた穴がある。それを埋めるために尽力した人間、部隊がたしかにいるんだ。そして、そういう影ながらの功績は、陽の目を見ることは圧倒的に少ない。信。お前は誰もが認める天下の大將軍を目指しているんだ、わかるよな」

「あ、ああ」

「だから結果はどうであれ、今回千人将になった俺たちは、そんな彼らの働きの分までより一層に前線で戦う姿勢をみせていかなくてはならない。なぜなら、それが彼らの戦いに報いることになるからだ。成つたからには示してみせろ」

「……そうか、そうだよな。千人将はもう俺たちだけの戦いじゃなくなつちまうんだよな」

「うん。千人は戦全体に影響を与える力がある部隊数だ。それと、いままで言わなかったけど、お前のところは実際。降格、解散の危機の方が現実問題だったことを忘れるなよ。敵中央軍を大きく後退させた功はあれど、三日目にお前の所の副長が無茶して敵の千人将の一人を獲っていなかったら、最悪解散だったかもしれないんだぞ」

「ウグツ……羌？おかげか」

「そういえば、その副長を今日はまだ見てないけどどうかしたのか」

「羌？なら飛信隊をいま離れてるよ」

「えっ、飛信隊を辞めたのか」

「ちげえよ。あいつは目的があつてうちにいたんだ。それで、その目的のために離れただけだ。全部が終わったら必ず帰ってくるさ」

「……そっか。戦術が分かるって話だったから少し話してみたんだけど、いないならしょうがない」

「ん、あつ。そうだ。すまねえ蒙恬。ちよつと用を思い出したから俺は先に行くぜ」

そうして「じゃあな」と背中を見せて颯爽と駆けて行く信に、蒙恬は「落ち込んでるのかと思つたら、もう切りかえたのか。いそがしいやつ……」と見送った。

さらに場面は変わり、豪華な屋敷の一室に朱雒はいた。

「ようこそおいで下さいました。敵から鬼面と渾名される朱錐殿」

「……商人より内々にとの仰せでしたので此度は従いましたが、なぜ私に声をお掛けになつたのですかな」

「それは、わたくしの口から申さなくてもお判りになつていゝのではありませんか」

「……」

探るような視線を向けた朱錐に対する者は、真摯な願いを告げた。

「私にお力をお貸しください」と。そうして言葉を続ける。

「あなた様ならどの陣営からの介入も心配する必要がありませんので適任だと判断致しました」

朱錐は「ふむ」と一応の納得を示して、つぎに試すような言葉を返した。

「私の所屬からすれば確かにそうなりますが、来歴はご存じか」

暗に示された言葉の意味に、対する者は、そんなことは愚にもつかないほどに承知の上であると微笑みをまじえて返した。

「ふふ、これはお戯れを。あなた様をお招きした手段からして、すでに察しはついでいますでしょう」

こうして始まつた会談により一つの取り纏めが行われることになつた。

第81話

「呼び出してすまなかつたな」

そう声を出した郭備の躰は包帯が厚く巻かれ、その傷が重度のものであったことを物語っていた。

「郭備様。ご無事で何よりです」

郭備は寝台に腰かけおり、眼前で片膝をつけて拱手の状態で応えたのは郭備隊副隊長の楚水であった。

「ああ。ありがとう。お前には随分と心配を掛けた」

「いえ。郭備様なら必ずご生還されると信じておりました」

そう言葉を発した楚水の目には喜びの色が浮いていた。

「ふふ、そうか。俺は、お前の期待を裏切らなかつたことを素直にうれしく思うぞ」

そうして郭備は輪虎に胴体を斬られて生死の境を彷徨っていたあの夜を浮かべた。

「……今にして思い返してみても本当なら俺は死んでいたのだろうか……。出血により意識は途切れ、覚醒したかと認識した場所は、この世ではなかったように感じている。何も無い。けれどどこかに引き寄せられるような魔訶不思議な空間だった。あのまま

よるべき導もなく歩き続けていたならば、お前とまたこうして話せる日は来なかつたであらうな」

「導、ですか……。郭備様、それはどういったものだったのでしようか」

郭備はおぼろげながらも魂に刻まれている境目の記憶を語る。

「うん。そうだな、なんとさえいいかの、か、そう。何か、いや、何者かに、俺は引き留められたのだ」

自分はどこかに向かつて歩いてきた。うまく表現することはできないけれど、往くべきだと。

「引き留められた、ですか」

漠然とした、けれど、決められていた路であつた気がする。

「そうだ。そつちいくな、と。俺は引き留められた。そして……」

郭備は言葉の最後を口に中に留めると、瞑目した。

「どうされました、郭備様」

そこで郭備はフツと息を漏らして笑みを浮かべると楚水にはつきりと宣言した。

「今日をもつて郭備隊は解散だ」

それは楚水にとつて青天の霹靂とも言える宣言であつた。

「か、解散。か、郭備隊をですか。な、なぜッ」

郭備は楚水の心の底から驚いているとわかる表情に向けて言葉を続けた。

「俺の怪我の具合、お前もわかっているのだろう」

そう言った郭備は、輪虎に斬られ落馬した際に、地面に激しく打ち付け機能不全に陥った部位を擦った。

「それはツ……勿論、承知しています。ですが、我らが隊ならば郭備様が前線に出られずとも後方から指揮して頂くだけでその手足となつて十全な活躍をしてみせます」

郭備は楚水のその本心からなる言葉を受けとめて「ふふ。嬉しいことを言ってくれ」と頬を緩めた。しかし次に郭備の口から出た音は肯定しない言葉であった。

「そうだな、いまはそれで機能するかもしれない。けれど、隊が千から二千、二千から三千になったときはどうだ。俺はその位に足るほどの智謀を持ち得ていると言えるか。前線には出ず、知略のみを活かして万の敵を打ち破れる将になれると言えるか」

「ツ……………」と口を噤んだ楚水の表情は、理解、つぎに苦悩が順に浮かび上がっていた。「楚水。お前なら言わずともわかるはずだ。ひとは、俺を智勇兼備の将だと持て囃してはくれるが、俺は智と勇を兼ねていたからこそ、俺たりえていたと考えている。勇陰れば智活きず、智曇らば勇目を見ず。どちらかを欠いては、もう俺ではない」

「そ、そんなことは」

「本当にそう言えるか」

郭備は楚水に苦渋の言葉を吐かせることを申し訳なくおもいながらも口調を強めた。「俺と、お前の間にそれほど差があると、断言できるか」

「ある……とは、申せません」

「そうだ。お前は実直で真つすぐな漢だ。俺とお前に大きな差などない。そして、郭備隊が破竹の勢いで千人隊に駆け上がったのは間違いない、楚水。お前が俺をいままで支えてくれたからだ。ありがとう」

郭備の言葉に、交えた目に、楚水は知った。郭備の意思はすでに固まっていることを。「私には、もつたいなきお言葉です」

郭備は見取った。相棒とも呼べる友の目に理解の色が映るのを。

「楚水。それでは、改めて宣言するぞ。いまこの刻をもつて郭備隊は解散とする」
楚水は静かに頭を垂れ拱手すると言った。

「……承知いたしました。私は貴方にお仕えできた日々を誇りに思います」
郭備もまた鈍く弱弱しい左腕を挙げて右拳を包みこむ拱手をみせた。

「ふっ それは俺もだ、楚水。よく俺に仕えてくれた。心よりの感謝を」

そうして視線を交えることしばし。郭備は、楚水が「皆にはいつ話されますか」と隊の者たちのことを案じ始めたところで、すべての種明かしをするように朗らかに語り始めた。

「ふふ。実はな、この話をするのはお前で最後ののだ。他の皆にはすでにしてある」

郭備は自身の言葉に一瞬呆けて驚きの表情を見せた楚水に考える間を与えることなく続けた。

「さらにな。彼らはそうであるならば飛信隊にとの要望を受けてな、隊長の信にもすでに話は通してある。そして、決めるのはもちろんお前次第ではあるが、どうする。飛信隊の信はまだまだ粗削りだ。だからこそ、お前のような漢が必要であると俺は思うのだが、どう思う」と。

この郭備のすべてを知った上で提案してみせる姿に、楚水は己のうちにあつた想いのまま、心の赴くままに判断をしようと思意を固めるのであつた。

「あなた云う人は……。本当に、敵いませんね」

「フフ、そうだろう。これであとの憂いもなくなり、俺とお前の間には上下もなくなったな。さあ。ゆつくりと、友として語らおうか」

「……そうしよう」

この日、二人はながく時を忘れて語らうのであつた。

続いて、ある屋敷の一室にて書物に注釈を加えていた漢のもとに訪問者を報せる声が掛かった。

「若君。こちらに下僕のような装いの少年が、若君の知己であると参っておりますが如何為されますかな」

「私にか……。その少年の名は」

「城戸村の信と。にわかには信じられません。若と同じ千人将であるとも申ししております」

「ふむ。わかった。その者は私の知り合いだ。元々は昌文君様が連れてこられた者でもある。失礼のないように客間に案内を。私もすぐに行く」

「畏まりました」と屋敷の者が部屋を去る背を壁は一瞥した。

「信が私の屋敷に……。うむ、一体何の用であろうか」

壁は幾ばくかの思案ののち立ち上がると客間に向かった。壁が姿を見せると信は相好を崩して声を挙げた。

「よつ、壁のあんちゃん。あんちゃん、いいところに住んでんだな。びつくりしたぜ」

壁は良家である壁家の敷居をまたいでもなお、いつもと何ら変わらない様子。信の肝の太さに少しばかり感心を覚えた。

「おう。よくきたな、信。というか、どうやってここにたどり着いた」

「ん、知ってそんな奴に片っ端から声を掛けた。そしたらそのうちひとり壁のあんちゃんの知り合いだっつってここを教えてくれた」

「お前はなんとというか、型破りだな。そういうことなら洩に言えばすぐに繋がったであろうに」

「ああ………忘れたぜ。洩さんはもともとはそうだったな」

壁は「フツ」と笑みをみせると言葉が続けた。

「それほどに洩は飛信隊に馴染んでいるということだろう」

「ああ。洩さんは俺たち飛信隊に欠かせない大事な存在だぜ」

「そうか。洩は頑張っているんだな。よかったよ。それで、今日は俺に何の用なんだ」

「そうだった。俺が今日来たのは、戦術つてやつを教えてほしいって思ったからなんだ」

「ほう、戦術をか………」と壁は信の申し出に少しばかり目を見開き驚きを浮かべた。

「ふむ。なんとというか意外であるな。だが、考えればたしかに今回の論功行賞で信も千人将になったからには、いままでよりも、もつと全体の事を考えなくてはならなくなるのだから当然かもしれないな」

壁の言葉に信は、流尹平野で行われていた数々の戦いの流れを浮かべて言った。

「この間の戦いで知ったよ……。俺たちは、いままで自分たちの事だけを考えて戦ってこられていたんだって。だから敵がどうこうっていうよりかは、敵が他の奴らに気を取られている隙に突破したり裏に廻ったりして手柄を立てられた。でも千人将っていうのはそういうものだけじゃないだろう」

「ああ。その通りだ。もちろん信がいま言ったような戦いをすることもある。けれど千人将になれば、それを自分の隊だけで完遂する任務も出てくる。そうならば当然隙を突くために隊を二つ、あるいは三つに分けることもあるだろう。そうなった時でも全体を視て明確な意思のもとに動いていなければ、逆に、敵に各個撃破されて壊滅する危険性がある」

「だよな。だからこう今日明日とは言わねえけどパパッと身に着ける方法とかないのかとおもつてよ」

壁は「はア……」とため息をついてから信に言った。

「お前なあ、そんな簡単に身に着けられるはずがないだろう。俺であっても幼少の頃より指導官からの教えを受け学び続けていまがあるのだぞ。それを一か月やそこら学んで実践できるほど戦術は甘いものでないぞ。信」

「やっぱりそうだよな……」とガシガシと頭をかく信に向けて壁は、代案になるかも、とふと気づいたことを言葉にした。

「たしか、信の飛信隊には郭備千人将の隊がそのまま加入することになっていたのではないのか」

「ああ、そうだけ。郭備千人将が治療に専念するってことで隊は解散になって、隊員についてはやければ、そのまま飛信隊として認めてやってほしいってことで、もちろん、喜

んで受け入れたんだけど……」

「だけど、どうした。郭備隊ならば戦術が分かる者が一人くらいはいるだろう」

「いや、それが実はさ——」

そこから信が語ったのは、郭備隊は郭備千人将がおもに戦術を楚水副隊長が戦術補佐および後方支援などを兼務していて、他の者は門外漢であるという事実であった。

それらをきいた壁は、ふむ、と思索すると言った。

「そういつた隊があつても不思議ではないぞ。それほどに全体の戦術を理解して実践できる者は貴重なのだ。隊長が頭脳の役割を担い、後方の支援、つまりは兵站などを副隊長が行うことでうまくまわしていたのであろうな。しかし、そうなると後手つ取り早いのは外部から招くという手段しかないぞ」

「外部、隊の外から……か」

壁は信の表情にどうにも納得しかねると浮かび上がっているのを感じとって、さらに言葉を綴った。

「うむ。飛信隊も結成からもうそれなりに長い。そして隊というものは、年月を重ねて結束を強めていく傾向がある。それゆえに外部から加入してくる者に抵抗があるのはわからないではない。けどな、信。これからお前が大将軍の道を目指すのであれば、それこそ多くの、さまざまな考えを持つた者たちを一手に纏めていかなければならないのだ

ぞ。ならばこそ、これはお前たちに与えられた試練のひとつとして、考えておくことではないか」

壁は「……………」と沈黙して少し俯く信に向けて言葉が続けた。

「信。すぐに納得できなくてもいい。だが、これはいずれかならず必要になることだぞ」
「……………考えておく」

「フツそうか。さあ、それはそれとして、いまどの道あての一つもない状況だ。ならば一先ずはできることからはじめようか」

「できること、つてなんだよ」

「外部の者を頼りたくないというのであれば、お前が身に付けるしかあるまい」

「俺が、戦術を」

「そうだ。いまならとなりの部屋に戦術盤が設置してある。ついて来い。まずは、いまのお前の実力を確かめてやろう」

「えっ。い、いいのかよ。壁のあんちゃん」

「ああ来い。俺とお前の仲だ。それに、ちょうど俺ひとりでやるには味気ないと感じていた所だ。相手をしてやる」

そうして壁は信を連れて先程まで戦術について検討をしていた部屋に移動した。

そこで壁と信が戦術盤で対峙することしばし……………。

「ど、どうだ。そんなに悪くはねえだろ」

壁は頭を抱えていた。そして、普段とは違い自信なさげな信に視線を移すと言葉を発した。

「……………信。俺とて戦術に明るいとはまでは言わぬが、これは酷いぞ。どういえばいいのか…………。致命的に向いてない者でももう少ししましたぞ」と。

この結果に壁は早急になんらかの手を打たなければ大変なことになると確信を抱いていた。

「……………まずは基本の『き』を叩きこむ。そこからだな」

壁は信に基本的な隊の連携を繰り返し教えながらも手のかかる弟のような信の助力となる術が何かないか昌文君に訊ねようと心にとどめるのであった。

第82話

「な、なんじゃ……、なに、が。なにがおこつておるのじゃああああ」

老婆の叫びが木霊する山深く未開に等しい山林の地を影が舞う。

「我らが里にたつた一人で襲撃をかけるとは、愚かなやつめ。皆で切り刻むぞ」

それは、たつた一人の襲撃者であつた。

「よ、よせえッ　よすのじゃ。その者と戦つてはならん」

手には大矛。

「いくぞ。一族の者の仇は我らが手にッ」

扱う者は、いつそひとであるかを疑わねばならないほどに禍々しい気を発し続ける大男。

「死ねえええ」

里の者は舞う。それは「瞬」であり一時の刹那を齎す舞いであつた。常人の目では負いきれぬ速度に一息に達して敵を殺す舞い。

が、である。

禍々しい気を発する大男は躰を本能に即してずらし、躲して切つた。防いで打つた。

掴んで地に叩きつけた。

そして、余すことなく生命を刈り取っていく。

「ぐツ……、このば、ばけものめ……」

そこには死に即していく里の子らにむけた慟哭だけが響く。

「ああ、ああ、あああア。なんて。なんて、ことじゃ。さ、里が、我らの里が、ほ、滅んでゆく……あ、あ」

さらには祭という覚悟をする死ではない終わりに己の命を惜しむ声が消えていく。

「や、だよ、ま、だし、にたくな、い、お……」

そうして半刻も経へた頃、山深い地に秘された里に立っているものは、ただのひとりになっていた。老婆は惨憺たる里の状況に目から絶望の涙を流して天を仰いでいた。

「お、おとおお。みなが、さとの、さとのみながああ……ア」

この老婆の叫び声も首筋で「ヒュツ」と過ぎる音とともに奥深い人里離れた山にひっそりと響いて消えた。

そうして、中華の地から一つの里が姿を消した。

話は移り替わり、此処は、秦軍総司令昌平君が手筈から整えた軍師養成機関の一室。

「それじゃあおさらいだ。敵は僕たちの裏を狙うために、敢えてこの場所を守り薄くし

て誘い込んで……、聞いているのか。河了貂」

そう後ろ手で組んで強い口調で問いかけたのは、白老蒙？の孫にして蒙武の子、蒙恬の弟にあたる蒙毅であつた。

「……え。ごめん……、聞いてなかつた」

蒙毅は、河了貂の心ここにあらずにハツとした様子をみて厳しく叱責した。

「河了貂。現を抜かすためにこの軍師学校にきたのであれば、即刻に村に帰るといい」「ツ、いや。ごめんつて。ちゃんと、ちゃんとするから……」

蒙毅は河了貂の語気が弱まる様と表情に浮かぶ憂いを感じ取つて、息をひとつ深く吐いて空気を落ち着かせてから訊いた。

「フウ……。なにか心配事かい。僕としては、同門の先達として妹弟子の話はきくよ」
蒙毅の落ち着いた雰囲気促される形で河了貂は話し始めた。

「え、つと。じゃあひとつ訊きたいことあるんだ」

それに蒙毅はふむ、と頷いて続きを促した。

「言つてみて。僕に答えられることならいいけどね」

「せ、先生から特別軍師認可つていうのをもらつたら戦場にでられるつてきいたんだけど、本当なの」

「特別軍師認可。ふむ、たしかに得られるのであれば、戦いの場にでる許可は下りる可能

性はあるよ」

「じゃあさ、それってすぐに受けられるものなの」

「受けられるかどうかなら、先生の都合さえつけば受けられる」

「な、なら」

「ただし、一度受けて特別軍師認可を得られなかった場合は、次は半年は待つことになる。さらに挑戦できるのは二度までだ」

「えっ、そ、そんな。なんでー」

「……戦場で僕たち軍師が扱う策を間違えれば、それだけで、数百数千、はては万の兵の命が一日やそこらで消えていく。そんな僕らが自分たちだけはすぐに何度でも挑戦できるなんて虫のいい話があるとでも思っているのかい」

「……………ごめん」

「いや、怒っているわけじゃない。ただそういう甘さは捨てて臨む試練だと認識したほうがいい。それで、河了貂。君は年の割に頭の回転はとても早い。そんな君が、こうして逸るだけの理由があるんだろう」

蒙毅は河了貂から事の経緯を聞いて、起点は飛信隊の信の窮状を報せる文、か。呟き、言葉を続けた。

「なるほど、状況は理解したよ。でも厳しいことを言うようだけど、河了貂。いまの君の

実力では十に一つ、よくて二つ。拾えるかどうかという所だ」

その言葉の現実に意気消沈して俯く妹弟子に、蒙毅は励ましの言葉を掛けた。

「そう落ち込むことはない。いまは一つ、二つある可能性を三つ、四つにするために学ぶときだ。それと友人の窮地を救いたいと逸る気持ちはわからないわけでない。けれど、半端な実力で助けに行つたとしても、最悪は仲間を殺すだけの結果になる。だからこそ、着実に一つずつ学んで実践できる実力を身に着けることがもつとも最短で、君が進むべき道だと僕は思うよ」

蒙毅の言葉は事実で最も実行するに値する話であることは河了貂にも理解ができた。同時に、いま自身が修めようとしているものの重大性を改めて思い知つて不安を口にした。

「おれに……、できるかな」

蒙毅は「ふむ」と呷くと励ましと発破をかける意味を込めて声を掛けた。

「なら君は、私に『軍師に向いていないから諦めろ』と言われたら、素直に従うのか」
「嫌だつ。おれはあきらめない。おれは……。もう、後ろでひとり待つているなんてこ
とできない。おれはみんなと肩を並べて一緒に歩みたいんだつ」

「ふふ。その意気だ。君に教えるということは、僕にとつてもおさらいになるし、新しい
視点を得るきっかけになる。君に学ぶ意思があるのなら、僕は喜んで協力するよ」

「ほんとに、蒙毅。ありがとう」

「うん。まあそうはいつても、僕もこれから少し忙しくなるから、あまり期待はしないでほしいかな」

「なにかあるの」

「そうか、河了貂はまだ聞いていないんだね。実は、この度あたらしく軍略の師を迎えられることになったんだ。僕は先生より世話係を仰せつかったから、しばらくはそつちを優先しなくちゃならない」

「フーン。軍略の師、か……どんな人なんだろう」

「ん、僕も詳しくは聞いていないけど、先生が招き入れるほどのひとだ。相当な御仁なのは間違いない」

「そっか、だよね」と口にした河了貂は、そのあと、少しばかりバツの悪い表情を浮かべながらも言葉を発した。

「じゃあさ、虫が良い……ように思われるけどさ、さっきの続きのお願いしても、いいかな」

蒙毅は片側の口角を少し上げて「ふっ」と微笑み応えた。

「わかった。僕たち目指すところは同じだ。だから、これからは今までよりもより厳しくいくから覚悟して。河了貂」

「のぞむところだつ。おれは絶対に軍師になつて信を助けに行く」
「それじゃあ、再開しようか」

蒙毅は先ほどまで気後れを露わにしていたとは思えないほどにはつきりと意思を言葉にした河了貂の様に、自分もうかうかしていられないな、と改めて気を引き締めるのであつた。

「怪我の具合はどうだ」

王賁は山陽戦で負傷離脱をした老将で自身の教育係でもあつた副長の番陽を見舞つていた。

「これは賁様、ツう」と番陽は寝台から背を起こしかけたところで負傷した傷の痛みを表情を歪めた。

「無理をするな、番陽。そのままでもいい」

「この程度の傷ごときで……。申し訳ありません、賁様」

「何を謝る必要がある。お前は俺を守る役目を果たしたただけだ」

「……そう仰つていただけなら、この老骨の身に負つた傷も報われます」

「それで、傷の具合は」

「傷、ですか。やはり、若い頃に比べれば治りが遅いように感じております。復帰につい

ては、まだだいたい先のことになるかと」

「……そうか」

「そのことで、儂から賁様に一つ提案がございます」

「なんだ」

「今回の怪我で思い知りました。儂は、いつまでも賁様をお守りすることこそ与えられた使命であると考えておりました。ですが、此度とは違っていつかは、この怪我での離脱然り、儂自身が隊の重荷になってしまいう日を想像しないわけにもいかなくなりました」

王賁は沈黙のままにさきを促した。

「ですので、儂の代わりになる者、つまりは副長として動ける人員をあらたに任命なさってはいかがでしょうか」

王賁は数瞬の思案のあと訊いた。

「それでお前はとうする」

「勿論、お許しいただけるなら怪我が治り次第復帰いたします。ですが、一考の余地はあるかと」

「わかった。用件はそれだけか」

「……それだけです」

そして王賁は「もう行く」と踵を返して背を見せて歩き出した。けれど、部屋の入り口の前で立ち止まって副長の名を呼んだ。

「番陽。お前はいつか自分が隊の重荷になると言ったが、俺は違うと思っている。俺の隊はまだ若い。全員が隊のために厳しい鍛錬を積んで強くなつてはいる。だが、若さは時に無謀を生む。その轍を俺が踏むとはないが、全ての者がそうであるわけではない」
「賁様……」

「お前は隊の重荷にはならない。多くの経験を積んでいるお前こそが、隊の腰を据える重しだ。外せば腰が浮きあがつて敵に隙をみせることになる」

王賁はさらに言った。

「必ず帰つてこい。俺の玉鳳に番陽。お前が必要だ」

番陽は本心をあまり明かさない王家にして嫡男である王賁の真意に触れてとめどなく流れでていく涙をおさえることなく応えた。

「ウグ……ハッ。こ、この番陽、この程度の傷ッ、すぐにも治して参上してみせますとも」

「もう行く。副長の件はしばらく預かる」

そうして王賁は去っていった。あとに残るのは、主王賁へむけて元よりあつた忠義の火が、一段とおおきくなり、炎となつて燃え盛っている番陽の姿だけであつた。

幕間 天の計らい

「旦那。私に頼みたいことつてなんだい」

そう女性はもとより備わる気風の良い雰囲気そのままに、椅子に座して茶を啜っている御仁に声を掛けた。

「おや。これははるばるようこそ。まずは、そこにお座りなさい」

御仁は女性と視線を合わせると対面にある椅子を指し示した。

「これでも、色々忙しいですよ。私は」

女性の苦言に御仁は朗らかな笑みをみせた。

「ソフフ もちろん存じています。なにせ、私が雇い主ですからねえ」

「わかつているならいいですよ。それで、今日はわざわざ城にまで呼び出して、私になにをさせるおつもりですか」

「ふむ。では、率直に。あなたに頼みたいことは二つあります。一つは、私の噂を国内にそれとなく流しておいてください」

「旦那の噂を、内側だけにか。それくらいなら、うちの者を使えば難しい話じゃないね。すぐにでも取り掛かれそう。ちなみに、内だけでいいのかい。なんなら国外でも構わ

ないよ」

「いえいえ。国内だけでというより、どのみち、どこの国にも余計な草は生えています。ただ抜くよりも、薬草のように有用に扱えるものは、この際ですから使つて差し上げましょう」

「なるほど。さすがに旦那は意地が悪いね。それでもう一つは何だい」

「んふ 褒め言葉として頂いておきます。もう一つは、ある人物の搜索です。先日、私が放つている諜報のひとりから目撃情報が上がりましたね。まず、ない、とは思いますが敵性の意思を備えていた場合、どれほどの人的被害が出るかわからない危険人物でもあります。なので、先んず発見したとしても近寄らず、監視に留めておいてください」

「旦那ア。そんなに危ない奴なら私なんかじゃなくて、軍なりなんなりを動かして拘束に動いたほうがいいじゃないかい」

「それには及びません。もし仮に、そういった意思をもった敵であつた場合、発見の報告よりも先に、被害が出ていますから」

「それはそれでどうなんだろうね。私らからしたらまったく信用できない話なんだけど。あとは、そこまで旦那に言わせる人物つての興味が湧いてくるね」

「あなたには馴染みのある名だとおもいますよ」

それから幾月日。いまにも降り出しそうな曇天模様ななか、山里にある集落からさらに山深い集落へとつながる山懐な峠道の一つで、小柄な男の道を遮るように立つ三人の男の姿があつた。

「やいやいやい。そこのお前、止まれえ。いまなら身ぐるみ全部置いていくなら命だけは助けてやるぞ」

そう言葉を発したのは、薄汚れた兵装姿に刃先が所々掛けた剣を手にした男であつた。それは、脱走兵の成れの果て、山賊、盗賊、野盗の類に身をやつした姿そのものであつた。

「やつぱり、ここの輩はどこにでもいて、変わりがないかア」

常人なら武器を手にした三人もの男たちに囲まれたこの状況は、窮地といつて差しさわりなかつた。しかし、この小柄な男に気負いなど一切なくただ、面倒だなア、とさらにこぼすのみであつた。

「なに余裕ぶつこいてやがる。まさかおめえ殺されねえとか考えてんじやねえだろうな」

そう男の一人が声を挙げると抜き身の剣をその男に向けた。さらに、残りの二人も武器を構えると「グヘヘツ」と威嚇するように距離を詰めていった。

そんなとき剣先をその男に向けていた兵士崩れは、その男が佩いている剣に目を止め

た。

「ん、なんだおまえ。餓鬼みてえなりのくせに、みたこともねえいい劍をぶらさげてんじやねえか。おら、ちよつとその劍をよこせ」

兵士崩れの男がその男の劍に手を伸ばした瞬間であつた。唐突に小柄な男から立ち昇つた濃密な殺氣に当てられた兵士崩れの男は、ひい、とか細い悲鳴をあげて地面に腰をつくはめになつた。

このとき、兵士崩れの心の内は「はなれなければにげなければこのおとこからいっばでもとおくにツ」と悲鳴にも似た声をあげていた。しかし、肝心の躰はとうとうとまつたと言つていいほどにうまく動かすことができずに、ただ地面をじたばたと腰ををひきずりながらにじり下がるだけで精一杯であつた。のこりのふたりも同様で、恐怖に全身が震えてしまい、まるで地に足を縛り付けられたように一歩も動くことが出なかつた。ただ口元だけはひたすらに齒をがちがちと音を鳴らす機械のように動かすのみであつた。

「僕に劍を向けたうえに、殿から授かつたこの宝刀を奪おうとするなんてね。その愚かさは、死んで噛みしめるいい」

小柄な男は、眼前の男の首を滑らかな劍筋でスツと刎ねると返す刀でもう一人を同様に刎ねた。ごろんごろんと転がる顔に浮かぶのは眼球が飛び出さんばかりに見開かれ

た恐怖に彩られた表情であった。

その光景は残るひとりに躰を動かすための正気を束の間になだがり戻させた。けれど逃げ出そうとして躰を翻しては転び、立ち上がろうとしては前のめりに顔面を地面に打ち付け、それでも男は、うまく回らぬ足をばたばたと動かしなんとか逃げ出そうとしていた。

「は、はわ、わわわああああ」

それは、いつそ哀れな感情を抱きかねないほどにみつともない姿をさらしていたが男が逃げ切ることにはなかつた。

「逃がさないよ」

男が最後に見た景色は「ドスツ」という音ともに走つた痛みのさき、胸から生えるぼろぼろの槍であった。槍に貫かれた男は口から朱い血をゴボつとこぼすと崩れ落ち、絶命した。

「あああもう、降り出す前にしのげるところを探すつもりだったのに、ほんとに無駄な時間をつかつちやつたなア」

小柄な男が空を見上げると曇天はしとしと降りだす雨模様へと移り変わって、あたりを濡らし始めていた。

「まあ、いいや。どこに向かうでもないあてのない旅だし……」と小柄な男は鞘に剣を納

めようとして動き止めた。そして視線を少し離れた茂みに向けると声を張り上げた。「いい加減出てきたらどうだい」

しかし、それに何らかの反応がしめされることはなかった。ただ峠道から聞こえるのは、今しがた降り出した雨が木々を打つ音だけであった。

「そう。そういうつもりなら、余さず死んでもらうことになるよ」

そう小柄な男が口にしたかと思えば、先程の殺気など稚児が発していたのかと見まがうほどに強烈な、もはや狂気とも呼べる代物があたり一帯に立ち込めた。

その瞬間であった。

「がさっ」という音とともに木々の間の茂みから姿を現す者がいた。

「ま、まって、てきい、は、ないっ」

小柄な男はその者を見咎めるとある種の確信を抱いて口を開いた。

「おや。君、もしかしてーと同郷だったりする？」

「ーを、しっ、ている、の。よかつ、た」

知っている名を口にしたこの男に、その者が安堵の息を吐いたのもつかの間であった。

「ふむふむ。なるほどねえ。僕が手を下すまでもないけど、これも天のお導きかな」

そう小柄な男は自己完結するように数度頷くと結論を口にした。

「よし。君に恨みはないけど死んでもらうよ」

そして、小柄な男は天に剣を掲げるとその者に振り下ろした。

場面は変わり、秦趙国境付近。

そこには、畦道を並んであるく姉妹の姿があった。

「じゃあ私はここまでだから、十分に気を付けていくんだよ」

そう肩をならべて歩いていたうちのひとりが立ち止まると言った。

「わかつてる」とその数歩先で背中をみせたままの少女は応えた。

「祭を……、祭をくぐりぬけ、蚩尤となった幽連の強さは、もうわたしたちが想像する域を超えているかもしれないよ」

「大丈夫。私の巫舞は絶対に負けない。象姉だつて知っているはず」

いっしょに姉妹として育った羌?の言葉に姉である象は苦言を呈した。

「あんたねえ。そういうのは慢心っていうんだよ。いまの敵の力量もわからないんだ。それに幽連は、私を嵌めるくらいに狡猾だぞ。慎重にこしたことはない」

「……そう、だった。慢心はしない。でも、幽連と向き合えたら、私の勝ち揺るがない。私の最深の巫舞は、最強だ。確実に殺せる。いや、殺す」

この羌?の言葉に象はわからないなどため息を吐いてから続けた。

「フウ。どうしてそう執着するのかね。私がしなくていいって言うてるんだから、あんたはもう関わる必要はないんだよ」

それに羌？は拒絶を示す言葉を並べた。

「それはできない。ここに来るまで何度も言ったけど、私は象姉を陥れて蚩尤となった幽連をどうしても赦すことはできない。本当の勝負だったなら、絶対に象姉が勝つてたんだ。それを私が証明する」

そして、はつきりと宣言した。

「象姉は負け犬なんかじゃないっ」

瞬間、象のこめかみに力がいった。そしてあげる怒声。

「だれが負け犬だっ。このダメ妹がっ」

象は拳骨を振り上げた。

が、しかし。象はその拳骨を落とすさずに留めて羌？と視線を合わせた。そうして、妹、？の姿を目におさめること数拍のとき。

さきに声を発したのは羌？であった。

「……じゃあ、行ってくる。待ってて象姉。羌族が最強だつて証明してくるから」

それは、出立の言葉。苛烈な戦いとなるであろう旅のはじまりを告げる言葉であった。象はふり挙げていた拳を開いて羌？の頭に乗せるといとおしそうに数度撫せてか

ら言った。

「ちやんと……生きて帰ってくるんだよ。もうあんたを待ってるやつは私ひとりだけじゃない。ほかにもいっぱいいるんだろ」

「……うん。絶対、生きて帰るよ」

第83話

「こは、先の秦魏の大戦山陽一帯攻略戦で秦が得た城のひとつ微子城。

「蒙恬様。一番隊、ただいま帰還致しました」

「おつ、陸仙。帰ったのか。ご苦労さま。敵さんはどうだった」

「そうですね、今日はやけに敵の当たりが弱かったので森の奥まで強行偵察を行ったのですが、敵はどうやらこの地域からの撤退をする可能性がでてきました。というのも、その奥にあった敵本陣と思われる場所を発見したのですが、もぬけの殻になってましたから」

「へえ。判断が早いな。もうちよつと粘ってくるのかと思つてたけど、他の場所でないかあつたかな」

「それなのですが、敵は別の場所に戦力を集中させているのではないかと」

「別の場所、ね。どのあたり」

「里井です」

「つて、飛信隊が援軍で入ったあたりじゃなかったっけ」

「そうです。どうやら、大負けはしていないようですが、里井全体の戦況自体も芳し

くないようで、何とか踏みとどまっている状態だと耳にしました」

「ああ。やつぱりか。そんな気はしてたんだよね……。つてそういうことか」

「はい。おそらくここを陥すことをあきらめて里井の地を一気呵成に奪い取り、そこから反転攻勢をしかけてくるのではないかと思われませう」

「……とはいっても、この守備兵を向かわせるわけにもいかないよね」

「そうですね。撤退したとみせかけて、城から兵が出払った瞬間に戻ってくるのは常套手段ですから、周囲一帯の偵察が終わるまで動かない方がよろしいかと」

「だよ。飛信隊はわかったけど、ほか連中のことは何か知ってる」

「それなら、まずは玉鳳隊ですかね。こちらも以前ほどの鋭さがなくなっている様子です。なにやら現体制の見直しを凶っているみたいですよ」

「副官の番陽さんがまだ復帰できてはいないだろうし、王賁のことだから本格的に將軍を目指す前に中核となる部隊の洗練でも施しているのかもしれないね」

「なるほど。なら、うちもやりますか、部隊のさらなる洗練を」

「ちょうどその時「蒙恬様」と遠くから耳馴染みのある声でした。

「必要ないよ。うちのじいじはあのとおり元氣だし、一番隊の陸仙をはじめ、みんな優秀だからね」

蒙恬の視線のさきにはこちらに馬で向かってくる副官胡漸の姿あった。

「ふふ、そうですね。では必要になったときにしましょうか。あとは、豹騎隊ですね。あそこは先の大戦で隊長の李豹殿が瀕死の重傷を負い加えて副官殿は戦死でした。そのため現状は戦線に部隊が復帰したばかり。千人部隊に慣れないのか、ほかと同様に苦戦を強いられるとのことですよ」

「なるほどねえ。どの隊も先の大戦の傷痕がまだ尾を引いてる感じか」

と蒙恬が視線をずらせば馬の脚を緩めて近寄る胡漸の姿があった。

「どこにおられたのです、蒙恬様。随分と探しましたぞ」

「ごめん、ごめん。ちよつとね。それで、じイはどうしたの」

胡漸は懐から書簡を取り出すと言った。

「おっとそうでございました。こちらが弟君の蒙毅様より届いておりますぞ」

蒙恬は受け取り書簡の封蝋を確認すると中身を検めた。

「ん。蒙毅からね。なんだろう」

そして、書簡の内容を理解すると口元に手を当てて思案をするような仕草をした。その様子に、陸仙はなにか不測の事態が起こったのかと危惧して蒙恬に声を掛けた。

「蒙毅殿はなんと」

「……うん。いや、蒙毅も思い切ったことをするなと思つてね」

蒙恬が自身の弟蒙毅の決断に感心を覚えていた頃、飛信隊の駐屯地では車座になって喧々譁々な様相を呈している信たちの姿があった。

「だアかアア、敵が左の側面を衝くためにこう動いてくんだから、田有んらのとこで足止めしてその隙に俺が前線を突破しちまえばあとは本陣だけだろうがッ」

そう己の考えを口にしたのは飛信隊長の信である。

「馬鹿やろう。それは一昨日やろうとして失敗したやつだろうが。松左が機転をきかせて退路を確保してなけりや、田有とこが壊滅して完全に負けてただろうがよ」

と異議を唱えたのは血の多い漢田永であった。

「ンンだどつ。じゃあてめえが勝てる作戦つてやつを考えやがれてんだ」

「アアアア、バカ信の癖しやがって何が考えろだ。てめえは隊長の癖に一昨日の失敗も覚えてねえじゃねえかッ」

お互いに立ち上がると額をぶつけ合うほどに接近する信と田永。

「嗚呼いえばこういいやがってッ。もう我慢ならねえ」

売り言葉に買い言葉。信が口火を切れれば田永も黙ってはいない。

「上等だ。掛かってこいや。俺がお前の頭に一発ブチ込んでそのバカを取り除いてやるぜッ」

そうして今まさにお互いの胸倉を掴んで離さず喧嘩に発展しそうになった二人の眼前

に木剣を差し込んで制止する者がいた。

「落ち着け。お前たち。取っ組み合いの喧嘩をしている場合じゃないぞ」

それは飛信隊きつての剣術の使い手崇原であった。また、その崇原に同調を示して言葉が続けたのは冷静沈着な槍使い松左であった。

「崇原の言う通りだ。この地に援軍にきて俺たちはまだただの一度も勝っちゃいねえ。というかなんとか負けちゃいねえってな具合だ。援軍にきてこの様じゃ風当りも強くなつてじゃねえのか、信」

信は松左に水を向けられると田永の胸倉から手を放して言った。

「ツチ。……たしかに結構にらまれちゃいるが、俺たち以外の所も似たようなもんだからそこまでじゃねえよ」

信の言葉で現状のまずさがある程度理解した皆が静まる中、信と同じ城戸村出身の少年兵昂が弱気な言葉と現実的な案を口に出した。

「やつぱりぶつつけ本番で実戦を迎えるのは無理があつたんだよ。いまからでも楚水副長にこつちへ来てもらつて作戦を考えてもらったほうがいいんじゃないかな」

「昂。そんなこと言つてもよ。しかたねえだろうが。飛信隊千人の食いもんやら何やらの手配を確実にできるのが楚水しかいなかったんだからよ。だからそんななかで俺たちにできる最善つてというのがなにかつて考えたのが、壁のあんちゃんからもらったこい

つを元にして隊の作戦を立てようぜってことだろうが」

壁の名に反応するように、飛信隊副長瀧は自身の考えを述べた。

「そうですね。もし我々にこれがなければもつと酷い状態だったと思います。壁様には私から改めて丁寧な謝辞を伝えておきます」

澤圭はそれに補足を加えるように言葉が続けた。

「お願いします。そしていまの私たちの問題は、飛信隊のために用意してくださったこの書物の内容を理解して実践する力が私たちにはないことにあります」

「澤さんの言う通り、俺たちには学がねえ。だからつてなにもしないってわけにもいかねえ。結局はできることをやっていくしかないってことだろ」

「それはいいけどよオ、そもそもその壁千人将に直接教えを受けたはずのばか信のせいどころなつてじゃねえのかよ」

「田永ッ しつげえぞてめえはッ」

「俺は事実を言っただけだろうがッ信のボケがッ」

そうして再び胸倉を掴み合う信と田永に、これまで黙っていた田有は声を挙げた。

「お前らやめろ。そのくだりを何回やるつもりだ。いい加減にしねえと俺や竜川らで強引にでも取り押さえるからな」

「ウツス」と立ち上がる竜川、中鉄ら怪力衆の威容に流石の二人も距離を空けた。

そうして沈黙がおりることしばし。口を開いたのは飛信隊の古参隊士である沛浪であつた。

「俺も田有に一票だ。だけど、信だけが悪いわけじゃねえ。俺たちだつて飛信隊の隊員なんだ。こうして皆で考えても勝てねえつてことを、一旦認めることは必要なんじゃないのかとおもう」

信は沛浪に視線を向けるとその意味を問うた。

「沛浪。何が言いてえんだ」

「お前だつて言つてただろうが。外部から人間を入れるつていう手もあるつてよ」

「そ、そうだぜ、信。少し間前に来てたんだろ。中央から人を送るつて話がよ。ちよ、ちようどいいいじゃねえか」

「なにがちようどいいんだツ 尾平。俺たちは百人隊から一丸となつて戦つて、それでいくつもの窮地をみんなで乗り越えてここまで来たんだぞ。いまさら他所のやつに飛信隊の命を預けられるかつてんだ」

この信の氣勢にたじろぐ尾平を横目に百人部隊からの古株去亥は声を挙げた。

「おい、信。俺はありだと思うぜ」

「な、去亥。お前も反対だつたんじゃねえのかよ」

「ああ。最初聞いたときはな。けどよ、俺はもともと馬陽んときはお前から第四軍と違つ

てほぼ全滅した第二軍にいたのは知ってるだろ。なんでか、あん時の感じがするんだよな。うまく言えねえけどよ……」

「どういうことだ」

「ああ、となんだ。そう。昨日あたりから空気がひりつくつつうか、重苦しい気がしてんだよ」

一方、対峙する魏軍里井攻略軍本営では。

「クハハ。山陽奪還に向けた里井攻略の援軍に来てみれば、かの山陽戦でハネておった若造が率いる飛信隊なる千人部隊がこの地にいるという。山陽奪還の狼煙をあげるにはちょうどいい首だとは思わぬか。魏・軍師八指がひとり水鬼よ」

「フツ 左様でありますな。間永將軍」

「よし。この地に部隊は着々と集結してきておる。明日から本格的な里井攻略に入るので。先陣は道清。お前だ」

「ハツ しかと先陣を承りました。この道清、必ずやご期待に応えてみせますぞ」

魏軍が里井攻略に向けて各地の部隊を続々と集結させて動き出そうとしていた少し前。

蒙毅は、一足早く目的の地にたどり着いており着任の挨拶を行っていた。

「僕の名は蒙毅。名が示す通り蒙？將軍の孫にして蒙武の子。そして、ご存じかもしれませんが、蒙恬は僕の兄にあたります」

蒙毅は部隊の長と立ち並ぶ隊員たちの前で会話を交わす。

「この部隊を選んだのは、あくまでも僕の判断によるものです。それと僕に敬称は不用です」

蒙毅は部隊長から兄蒙恬の話を振られると自身の思いを口にした。

「そうですね。兄はひょうひょうとしていているようで、常に先のことにも目を向けられる人間です。僕もそうありたいと考えていますが、まだまだ修行の身。どうぞよろしくお願ひします」

そして蒙毅は部隊長の申し出を快諾する。

「ええ問題ありません。早速軍議を開きましょう。この地に赴く間に、必要な情報はすべて頭に叩き込んでありますから」

蒙毅は部隊に快く迎えられると、この地に到着するまでの間に纏めていた策を速やかに実行に移すべく動き始めた。

第84話

魏、韓、楚の三国それぞれの国境からほどよい距離にある秦国内の野营地。

朱錐は自身の名を冠した軍とともに防衛を支える任に着いていた。その本営となる天幕に朱錐はいた。

「届けてきたぞ」

その声に朱錐は目を通していた書簡から顔を挙げた。

「虎豹、巡回兼運搬の任務ご苦労だった。向こうの状況はどうであつた」

「まず録鳴未から援助品への感謝を伝えて欲しいと。敵に関しては、木っ端兵ばかりで張り合いがないわ、とボヤいていた。まあそれもつきり魏軍が本腰を入れて山陽奪還のために揺さぶりをかけると警戒していただけに肩透かしを食らつた格好になるからな。干央はいつも通り黙々と任務に、だな」

「録鳴未は血の気が多い。そのさまが容易に浮かんでくるな。録鳴未と干央が並んでい
る以上は、滅多なことになるまいが、こちらは南にすこし変化があつた」

「ん。まさか楚が動いてきているのか」

「いや、秦に攻め入るといふ様子ではない。が、前線兵力の増強してきているようだ。楚

側の警戒に当たっている隆国の見立てでは、秦による山陽攻略。それによる余波のひとつではないか、と」

「なるほどな。山陽は秦が中華に出るための要所になる。楚はそれを重く見て圧力をかけてきているということか。そして万一、大国楚が動くとなれば秦楚大戦は免れないだけに警戒も怠れない」

「ああ。それを騰將軍も危惧されて周辺国一帯に向けて目をひからせている。この動きは、ここら一帯の兵力を山陽に向かわせないようにするためのものと騰將軍と隆国の見解も一致している」

「そうだな。遠回しだが魏の援護にもなる。あとは韓の動向になるが……」

「そのための我らであろう。この三国のうちどこが動いて来ようと即応する部隊としての役割を担っている」

「部隊も一万にまで増員されたしな……つと、そうだ、そのことで朱鉏に聞きたいことがあった」

「なにかあったか」

「今回の増員に伴って重騎兵を編制しただろう。そして、その少し前から隊全体の装備の拡充が行われていたこと。この二つを同時に行うのは相当な元手が必要になったはずだ。どこからでている」

「なるほど、そのことか。隠しているわけではないが、元手はある大家からの援助金によるものだ。今回録鳴未たちに届けさせた嗜好品も同様にな」

「相当に名のある大家だな。お前が受け取るということは、ちゃんとした協力関係の相手ということだろう」

「その通りだ。これらの対価となる条件を満たすためにも繋がるのでな。大家の名は聞かぬのだな」

「必要ない。じいの片腕であつたお前だ。そこは信頼している。それよりよかつたのか。その大家から送られてきた嗜好品を他の隊にまで分けてしまつて」

「我が隊への援助物資ではあるが、与えられたものをどう扱うかはこちらの裁量だ。それに一隊の士気によつて得ることのできる益はそう多くはない。それくらいならば全体に分け与えて各隊の士気を向上させた方が、結果として損失を減らせるうえに、これを各隊への後々の貸しとして、いつか返してもらうさ」

「フフ そうか。お前らしいな。青騎の姿が見えないということとは、また城に戻られたのか」

「ああ、少し前にな。ここでは得られぬ情報をお纏めになられるとのこと、しばらくは時間が掛かるやもしれんな」

「そうか。臆からは何かあつたか」

「將軍からは、嗜好品の札と引き続き周辺警戒を怠るな、と。あとは、さきほど軍司令部から作戦の指令書が届いたくらいか」

「軍司令部から朱錐にか。内容は」

朱錐は手元に置いてあつた書簡を虎豹に手渡した。虎豹はサツと目を通すと所感を述べた。

「フム。なんとかいうか軍総司令らしくない命令だな。たしかに我らは前線に張つていないから適任ではあるが……」

「青騎によると、軍司令部に新たに加わつた軍略家による賜物でしょう、とのことだ」

「ああ、あのジジイか。それにしても、ほんと王騎様は大胆な手を使われたと思わないか」

当時六将として最前線で戦つていた者たちからすれば相応に因縁の相手である。それらを意に介さずに登用を仕掛けた王騎の器に虎豹は感嘆のため息を言葉のあとに漏らし、それに朱錐は「そうだな」と同意を込めて言葉を発した。

「夫人としては、気が気ではないか。しかしながら、敵国であつた秦の侵攻に幾度となく抗いその蓄積された経験は疑いようがない。そしてそれほどの人物を口説き落とした王騎様は流石としか言いようがないな」

その頃、魏の中樞で鋭敏な手腕を振るつていられると思われていた呉鳳明と靈凰は宮殿中央でなく、その控えの間の席にいた。

「先生、本当によろしかったのですか。いまも中央で行われている軍議に参加をなさらずに」

靈凰は目を細め薄い笑みを浮かべて言った。

「鳳明、お前も理解つているのであろう。私が何を意図してこの場に留まつているのかを」

「はい。先生は魏・軍師八師。その有用性を図られておられるのかと」

「その通りだ。あれらが組織化された概要は耳している。あとは、どの程度の者であるのかをはつきりさせておきたくてな」

「それは、先の大戦。あの本陣陥落の一件からですね。ですが、私は総大将であつた白亀西がひとときわ愚かだつたとは思いません」

「ほう。それはなぜだ」

「私は白亀西がというよりは、一介の將軍ならあの大戦の最中盜賊風情に尻を叩かれたなどと騒ぐこと自体を恥だと考えるのは自然な流れかと愚考するからです」

「そうだな。本当であるなら白亀西はすぐにでも本陣敵襲の合図を挙げるべきであつた。そうしなかつたのは、偏に自軍の優勢の報を信じて疑わなかつたこと。そして、白

亀西が盗賊程度であれば本陣の精兵で対応は十分に可能であると思ひ込んだことだ」

「それでしたら、なぜ今回彼らを試そうとなされているのですか」

「それはな、鳳明。私は助言をしていたのだ。本陣の守備をくれぐれも疎かにすることのないようにな。だが、現実はどうであつた」

「白亀西は早々な解決を目論み多くの守備兵を迎撃に費やしたことで手薄になつた本陣を桓騎に強襲、占領されました。そして、結果としてそれが戦の勝敗を決する状況を招きました」

「難しいものだと思わないか、鳳明。私たちにどれほどの才覚が備わつていようと実行に移す者たちの思慮が足りなければ、与えた策もそこから破綻していくのだ。私はな、最後に策の成否を決めるのはいついかなる時であろうと人であると考えている」

「それが以前に仰られていた戦は部将の取り合いであるというお考えに繋がるのですね」

「そうとも言える。が、これはただの教訓でもある」

「教訓、ですか」

「そう、遠い過去の教訓だ。まつたく。下らぬ男のもとに有能な人材が存在したがゆえに起きた無用な争いであつたわ」

そこで靈鳳は瞑目すると過去の出来事を逡巡してと「ふっ」と声を漏らして言った。

「百の戦略、百の戦術、百の策謀を張り巡らせようと、人を見誤ればすべては台無しになる。策に情は不用なれど味方に足を掬われることもあるということだ。努々忘れるなよ、鳳明」

魏里井攻略軍本陣には、この軍を指揮する將軍である間永と軍師である氷鬼の姿があつた。

「氷鬼よ。飛信隊の攻略は順調だな」

氷鬼は応えた。

「左様ですね。多少はやるようですが私の敵ではないかと」

「フフ 頼もしい言葉がきけて安心だ」

「敵がこのまま粘ってくれば、裏手をとらせるべく回らせた別働隊が退路を遮断。そうなれば、今日中の壊滅も十分に可能でしょう」

「飛信隊は袋の鼠か。隊長信の首を挙げて山陽奪還の狼煙としようか」

そう間永と氷鬼のふたりの目論見通りにことが進むと思われていた戦場で、変化を告げる伝令の声が挙がつた。

「敵部隊は後退ッ 後退です」

即座に反応をしめたのは、軍師氷鬼であつた。

「なに……、全部隊か」

「はい。交戦中の敵全部隊であります」

この戦況の変化に間永は軍師に意見を求めるべく声を掛けた。

「おい、氷鬼」

「問題ありません。將軍。敵が退くのであればこちらは前進するのみ。この地の戦局がこちらに傾くということは、ここと隣接する戦線にも良い影響を与えることになりません。また、この先には土地を隔てる川が流れています。ですので、敵はこの周辺で唯一かかっている美仁橋を拠点に定めて後退するつもりであるかと。將軍。追撃のご命令を」

間永はうむ、と納得の声を出すと指示をだした。

「道清に追撃に移るように伝えよ。ただし、追うのは橋までとする。いけ」

この日飛信隊は、これまで死守していた前線地を捨てて川のさき、橋の向こう側まで大きく後退した。

「こんなに退いちゃまって本当によかったのか」

そう声をだしたのは隊長の信。声のさきにいるのは、さきの戦いの最中に赴任した旧知の河了貂であった。

「信。さつきも言ったけど、もうあそこで戦える状況じゃないんだ。いまこの一帯では、

各地に配備されていた魏の小隊が次々にこの里井に集まってきている。だから例え、あの場所で粘ったとしても、部隊を展開しやうい場所だったから、単純な兵力差で押しつぶされてたよ。それに最悪、裏をとられて今日渡ったあの橋を占領されて、全滅の憂き目にだってあつてたのかもしれない」

当初、唐突に姿をみせた河了貂が「信。すぐに部隊を後退させるんだ」と声を挙げたことに驚き動揺をみせた。しかしながら、現在の戦況を河了貂が的確に言い当てながら毅然とした態度で現況のまずさを語ったことで、守りやすい防衛拠点まで部隊を下げようという河了貂の提案を受け入れたのであつた。

そのため、里井における前線守備拠点を失うはめになつたが、その反面、飛信隊の損耗は軽微にとどまることになつた。

「貂。それはわかつたけどよ。ここだつて川があるぶん守りやすさはあるけど、いまのその兵力差つてのは埋められないじゃねえのかよ」

河了貂は里井の戦略図から視線を上げると意外そうな声を挙げた。

「へえ。信もちよつとは戦術のことがわかるようになったんだね。前の信なら全部ぶつ倒すだけだつて叫んでそうだよね」と。

信は少しばつの悪そうな表情を見せて言った。

「……壁のあんちゃんのおかげだ。こいつをもう自分は暗記してあるつてくれたんだ」

信は懐にしまつてあつた書物を取り出して河了貂に手渡した。河了貂は「フーン」と声を漏らしながらなかを検めると驚くように声をだした。

「……つて、よくこんなもの壁は譲つてくれたね」

信はきよんとして言った。

「へ、いや。特別だぞつてわりと普通にくれたぜ」

その様子に、河了貂は兵書と言えるこの書物について語つた。

「信。わかつてないみたいだから教えるけど、こういう個人の注釈をつけた書物っていうのは、本当に貴重なものなんだよ。書き入れた人物が優れていればいるほどに、その人物の考え方が反映されたものになって価値あるものになるんだ」

それに信は「そ、そんなに価値があるもんなのか、それ」と驚きの声を挙げた。

「うーん。まあそうは言つたけど、これは本当に部隊運用における初心の書つて感じだから特別なことは書かれていないとおもう。でも、文体を分かりやすくするために、ほら。こことか書き入れてあるでしょ」

河了貂は書物の一文に分かりやすいように指を這わせた。その示された一文を見た信は声を挙げた。

「おう、それか。学がねえ俺にもわかりやすく、めちやくくちや役に立つたぜ」

「ね。そういうこと。それに、この書の端々の汚れ具合からして何度も読み返して書き

加えていたんじゃないかな

「そんな……、壁のあんちゃん。そんなに大事にしたものを俺に渡してくれてたのか」
「そうだよ。だから壁に、ちゃんとお礼を言っとかないとだめだよ」

「おう。けどそれはちゃんとここで勝つてからだ。それに、今日は貂。お前の言葉に従ったけど、次のが納得できねえような策なら俺は承知はしねえからな」

「ああ分かつてるって。我に策ありだ。ここに来るまでにある程度の段取りは整えてある。たぶんそろそろー」

その後、飛信隊の野営地にひとつの書簡がとどけられた。

そして、この戦いは軍師河了貂のしての門出であり以後飛信隊の軍師として同行していくことになる。もちろん軋轢がまっただなかつたわけではない。

しかし、壁が信をおもって譲った書物によつてそれぞれの隊員が問題意識を抱いていたことや隊長信の旧知の者であること。また、その河了貂がその力量の一端を早々に示したことで懸念されていた摩擦は、ほとんど起こらなかつたのである。

河了貂は書簡の中身を確認すると意を決して言った。

「よし。信、主だったひとを集めて。明日の作戦をみんなに伝えるから」

第85話

里井に降りていた夜が明けると、両軍は周辺でかかる唯一の橋、美仁橋を境に対峙した。この橋をめぐる激しい攻防の幕が上がるうとしていた。

「魏の強者ども押し込こんでいけ。美仁橋を占領すれば我らの勝ちだ」

岸の向かい側では、敵指揮官の檄に応える鬨の聲が唸りをあげている。

その様子に、美仁橋の守備の要大工の棟梁かつ怪力衆の顔役田有は声を挙げた。

「おうおう。随分と敵さんはやる気のようにぞ」

それから田有は右後方に立つ巨躯の戦士に視線を向けて言った。

「俺はこつち側を受け持つ。そつち側は任せたぞ、竜仙」

「うつつ」と竜仙は先端にむかって丸太のように太い棍棒を肩に担ぎ上げた。

そんな二人に隊長信は檄を飛ばす。

「前は任せろぞ田有。竜仙。きつくなつたらいつでも俺や中鉄の隊が交代ではいる。ふたりとも最初から全力でいけ」

それに力強い「応ッ」と声が響く。次に信は各持ち場の長に指示を飛ばした。

「崇原は左。松左は右だ。こつちに地の利はある。敵が川を渡ってきたら容赦なく叩き

落としてやれ」

「おう」「なんとかやるさ」と左右の川岸に立っているふたりの声が返る。

「去亥と田永は貂の指示に従って各持ち場の支援にまわってくれ」

「ああ」「わかった。信、てめえ死ぬんじやねえぞ」

「あつたりめえだ。野郎ども、絶対に押し負けるんじやねえぞ」

飛信隊は美仁橋に重量級の怪力衆を並べて敵の行く手を阻み、橋を渡らずに渡河しようとする敵に対しては川べりで待ち受けて叩く作戦を立てていた。

その作戦を後方より指揮する河了貂は、隊長の檄に飛信隊全体から「応!!」あがる闘いの声に戦う準備はできたと声をだした。

「よし。ここちらの士気は十分。あとはこつちの作戦がはまるかどうか勝負の分かれ目だ」

里井周辺を模した戦術盤を前に、河了貂は軍師として初めての实战を控えて、自身の早まる心臓の鼓動に動かされるように吐露した。

「作戦は充分に練った。想定していないことが起こった場合のことも考えてある。失敗はしないはず……なのに、手の震えが止まらない」

河了貂は震える手を抑えるためにお腹の前で腕を組んで気持ちの整理をつけるために言葉を口にしていく。

「戦いが始まったら、オレの立てた作戦で敵味方をふくめて何人も人間が死ぬ。でも、オレは味方を救うためにおおくの敵を殺さなくちゃならないんだ」

されど、震えが止まることはない。

「そうだ。オレは自分の意思で信をたすけるために軍師になったんだ。これは、これからずっとオレが受け容れていかなくちやいけない現実なん、……だ」

頭では理解している。けど、簡単に割り切れるものじゃない。……いや違う。割り切っているはずがないんだ。誰にだつて命はひとつしかない。でも、ここは戦場なんだ。みんなを。みんなを生き長らえさせるために、これはオレがやらなくちやいけないことなんだぞ。震えをとめろ、しっかりするんだ。黒牟村の河了貂。

河了貂が心のうちで自問と自答を繰り返し善悪の正否の葛藤に囚われて苦惱な表情を浮かべていると、その様子を見かねて声を掛けた者がいた。

「貂殿、大丈夫ですか」

それは柔らかく気遣うような声であつた。

「え。……あつ、うん、ごめん。なに。ちよつとぼおとしてたみたい」

と河了貂の動転したような反応に飛信隊副長の楚水は「そろそろ戦いがはじまりま

す」と落ち着いた声をだすと言葉を選びながら続けた。

「信殿から、あなたが軍師としては初実戦であると聞き及んでいます」

その言葉に、河了貂は少し俯きかげんで訊いた。

「楚水副長……は、やつぱり、オレみたいな初出な新参者が軍師じゃ頼りないっておもう」と。

楚水は言葉の意味を正確に理解すると、河了貂と視線をしつかりと合わせてから嘘を交えることなく言った。

「そうですね。まったくなかったとは言えません。が、到着直後の後退の判断もさることながら、今日の戦いにむけた作戦立案の様子をみれば、そんなものはなくなりました」

河了貂は落としていた視線をあげて言う。

「それはここに来るまでに時間があつたから、事前に用意できてたのが大きいよ」

「そうかもしれないですね。ですが、今日提示された作戦は、私たちが逆立ちしたとしても頭から零れ落ちることのない大きなものです。ですから、自信を持つてください」

「自信はある。あるけど……。失敗したらみんなを悪戯に死なせるかもしれないってどうしても考えてしまふんだ」

楚水は、「河了貂がいま抱えているものが手に取るように理解できた。なぜなら、それは自分自身が以前の戦いで知らぬ間に抱えてしまつていたものと同様なものであつた

からだ。

「なるほど、そうですか。それなら、私が信殿に教えられた言葉を今度は信殿の旧知であるあなたに贈ります」

河了貂は意外そうな表情を浮かべて言った。

「えっ。信に楚水副長を教えらえるような教養なんてあるの」

「フフ。教養とは違いますが、信殿はあれで本質をよく捉えておられます」

「そう、かな。あつ、でもたしかに、ごく稀にハツとするようなことは言ってたかも」

「そうでしよう。ですので私から貂殿に贈れる言葉は一つ。それは――」

楚水の言葉を聞いた河了貂は「ハハッ」とはにかむと「たしかに信っぽいね」と笑みを浮かべた。

「どうですか。肩の力は抜けましたか」

その言葉、声色は、楚水が備え持っているどんな相手も気遣える人柄を如実に表すものであった。

「うん。ありがとう、楚水副長。少なくとも手の震えは止まったかな。そうか、もうオレは飛信隊の一員なんだな。だから、いまはただ全力を尽くすよ」

「そうしてください。どうやら戦いが始まったようですので私も持ち場に戻って、自分の任務に全力を尽くしたいと思います」

そう言うのと楚水は馬に跨って川に沿って植生している木々の隙間に消えていった。

「オレはまず、オレのできる精一杯のことをする。あとのことはぜんぶ戦いが終わってから考えよう」

こうして開始した美仁橋攻防戦は、兵士の数で劣る飛信隊が必死な防戦を強いられる一方、魏軍は数的優位をたよりとして間断なく攻め寄せ將軍間永の指揮下のもと魏・軍師八師氷鬼の差配と精鋭道清千人部隊によって攻勢を強めていた。

「氷鬼。前線突破の報がいまだ来ぬようだが、どうなのだ」

「そうですね。敵は橋の守りを強固にして封鎖を行い、後方に防柵を置くことで騎兵の乱入を抑止しているようです。また川岸に兵を展開させることで上陸を阻んでいると報告があがっております。全体として定石通り、面白味がないぶん堅い守備陣形であり、上策と言えるかと」

「やけに褒めるな。そうなると突破するのに時間が掛かりそうか」

「いえ、將軍。特段に褒めたわけではありません。定石通り。つまりは戦術を学んだ者ならば誰もがとれる策です。このことから、敵に戦術を理解する者が加わったことが分かります。だからといって問題はありません。私はそういった事態に備えて、昨夜のうちに、この川の上流付近で対岸に渡れる浅瀬の搜索、発見をし、強襲部隊を配置も済ませてありますので、どうかご安心を」

「ふむ。それは昨夜だした捜索隊がそのまま強襲部隊と化したということだな」

「ご明察です。流石ですね、将軍。敵の索敵に引つ掛からぬように十分な距離をとらせましたので、もうしばらくは掛かるでしょうが、強襲部隊さえ到着すれば川岸に展開している秦兵を蹴散らすことができます。そうすれば、あとは堰を切ったように端から雪崩れこむ我らが兵によつて、敵は総崩れになりましょう」

「そうか」と間永はにやりと口角を挙げると続けた。

「ククク 氷鬼よ。奴らは橋の攻防だと思ひ違ひをしているようだが、見えてるモノだけが戦いではないことを敵に教えてやれ」

「フフ 敵は自軍の屍が無数に討ち捨てられてから、初めて気づくことでしょうか」

また別の戦場では、先頭にたつて気を吐く部将の姿があった。

「うおりやあああつ」

気合一閃。敵を屠つては部隊に檄を飛ばす。

「戦え秦の兵たちよ。山陽攻略の失態を取り返す機はまさに今この時である」

そうして先陣を駆ける部将に追いついた側近は言う。

「土門将軍。お下がりにください。将軍は急死に一生の怪我から戦線に復帰したばかり。

無理をなされてはなりません」

土門はギロリと側近を睨むと怒声を挙げた。

「うるさい馬鹿者ツ　こんな傷の痛みなど戦っているうちに忘れてしまおうわ。いまはこの戦いの主導権を握るほうが重要だ」

「しかし將軍。こちらは数的に不利にあります。万が一將軍が討たれてしまつては、この方面軍が崩壊してしまいます」

「そんなことは分かつておるわ。右翼から第四部隊を突撃の号令をだせ。敵が怯んだところを儂自らが切り裂き活路を拓く。すぐにでるぞ。遅れるなよ」

土門は第四部隊の突撃とともに揺らぎはじめた敵軍に馬首を向けると「ハあツ」と手綱を撓らせ馬の腹を蹴つて駈け出した。

「ど、土門將軍をおひとりで行かせるな。皆の者、腕の見せ所であるぞ。將軍に続けえええ」

先陣を駈ける土門はふと口走る。

「小僧ども、この儂を扱き使つておきながら戦果があがらぬなどほざくようなら、名家の嫡流と言えど容赦せんぞ」

第86話

「前衛変わるぞ。田有、竜仙。ッおりやああああ」

飛信隊隊長信は前衛のふたりの間から敵前に躍り出るとその勢いのまま強く握りしめた剣を振り抜き敵兵を斬り払った。

「ぬんツ」と隊長に続いて前衛に現れたのは怪力衆のひとり中鉄。

「すまねえ。しばらく任せるぜ隊長に中鉄」「お願いします」

と怪力衆の顔役田有にその三倍力を誇るといふ竜仙が後衛に下がった。そして田有は荒くなつた息を整えて周囲に目を配った。

「フウ、フウ、フウ……。橋に群がる敵の攻撃も激しいが、川岸も相当だぞ。けど去亥と田永がうまい具合にやられそうなところの支援に入ってるおかげで何とかもつてるって感じか」

田有の言葉通りに川岸でも激しい攻防が続いており予備兵すべてを使つてのギリギリの戦いになっていた。橋の左では崇原が声をあげた。

「敵を無理に殺す必要はない。川にさえ叩き落せば流れの強い川だ。また這い上がるのは至難。敵を徹底的に疲れさせろ」

その反対側では、松左が槍を巧みに扱って敵の甲冑の隙間に突き刺した。

「おっと。ととつと。ふう。敵さんの勢いが途切れないから疲れるね、まったく」

と松左が持ち場を見渡すと古参の尾平の叫び声が挙がった。

「く、ちよ、ちよつとだれか、誰か助けてくれ」との声に、少年兵昂が「尾平さん。まったく僕が助ける」と向かおうとするも敵兵に阻まれる姿が映っていた。

「ひいひい、だれかああ」

そのため叫び続ける尾平に、松左はため息を漏らすように言葉を吐いた。

「少しは休ませてほしいね」

飛信隊に対峙する魏軍本陣。

「儂の目に戦況は拮抗であるようにみえるが、どうだ水鬼」

と魏軍將軍間永は軍師に訊いた。

「そうですね。私の想定よりも幾分かは堅いかと。ですが数の利を覆すほどではありません。さらに、もう間もなく趨勢を決める襲撃部隊の到着があるかと」

「うむ、そうかそうか。それでは崩れた敵を討ち取る準備に入るとするか。がはははっ」

とささも愉快だと笑い声を挙げた間永に水鬼は軍師として言葉を掛けた。

「お待ちを、間永將軍。いまだ勝敗が決したわけではありません。將軍は、万が一に備えて追撃には加わらず後方にて待機でお願ひします」

「むつ。なぜだ。ここで戦を決するつもりなのである。ならば儂自らが前に出て声を挙げねば儂の名が廢るであらうが」

「將軍の仰ることは重々承知しておりますが、この場所は木々や草木が生い茂る戦場です。どこに兵を伏せているかはわかつたものではありません。それに勇猛であられる將軍に慎重を期する助言をするのが、私の務めであると認識しておりますゆえ、どうか」

「そう拱手の姿勢で礼を示す姿に間永は肯定の言葉を発した。
「ぬう。わかつた。ならば逆に――」

間永の言葉に、軍師水鬼は肯定の言葉を発した。

「良いお考えです。それは私も提案するつもりでいました」

「そうふたりが魏里井攻略本陣で話していると彼らが待ちに待ったひとつの報が届いた。」

「別動隊到着つ。到着した別動隊は敵川沿いの守備兵の側面に襲い掛かりました」

「た、隊長ツ。右の上流側から敵援軍があらわれたと。松左隊より至急救援の要請です」

「なんだとツ。クソツ、俺が行く。田有、竜仙、中鉄。ここは任せたぞ」
そんな信を田有は引き留めた。

「待て。信。河了貂に言われてたことを忘れたのか」

信はハツとした表情をしたあとと言った。

「ツ、と。そうだった。つてことは」

と信が耳を澄ましてすぐに銅鑼の音が響き始めた。

「銅鑼の合図だ。全員、退くぞ。俺について来いッ」

飛信隊は退却を報せる銅鑼の音にくわえて信の号令により、すぐに戦いを納めると退却をはじめた。当然、背を向けて逃げ出す飛信隊を見過ごす魏軍ではない。

「敵は退却を始めたぞ。いまこそ敵を討つ絶好の機だ。全隊追撃に入れッ」

ここから、魏軍の激しい追撃が始まるはずであったが、その初手で躓くことになった。

「追え、追えええ。敵を討て。武功を挙げろ」

魏軍は隊列を伴って逃げる飛信隊の背を衝くため隊列を乱して追った。そうして魏兵の槍がその背後に届きそうになったその時であった。

「いまだ。敵の隊列が乱れている隙をつけ。皆が逃げる時間を稼ぐぞ」

そう声を挙げたのは、古参の頼れる強面沛浪であった。彼らは戦が始まった段階から伏せてあった百人ほどの小隊であった。

そして寡兵とはいえ木々と草木が生い茂る森という立地にくわえて完全な奇襲となる攻撃、なにより逃げ出した飛信隊の背を追って勝ち戦だと浮かれて乱れてはじめていた魏兵に驚きをもつて迎えられ、わずかながらにも混乱をもたらししていた。

「敵襲、敵襲だ。敵の伏兵が現れたぞ。隊列だ、隊列を組んで押し潰せッ」

と魏将校は混乱する部隊を收拾するために声を挙げた。が、その立て直しを図る時間こそが沛浪たちにとって最も欲しかったものであった。

即座に踵を返した沛浪は「今のうちだ。森を抜けるぞ」と声をあげて一目散に逃げだした。

「ここまでばっちり敵の動きを読むとはな。たいしたもんだぜ。軍師河了貂ってのは」その報を受けて魏軍師氷鬼は「フム」と声を漏らして続けた。

「どうやら、敵もなかなか切れ者のようですね。私の策を読んでいたのかまでは定かではありませんが、想定外の事態に備えて策を弄していたようです」

「よいのか、このままでは飛信隊をとり逃がしてしまうぞ」

「いえ。伏兵との報告でしたが数は寡兵も寡兵。最後のあがきでしょう。ですから、そう遠くない所で捕捉ができ、包囲完了の報もいずれ届くかと。あと、付け足すことがあるとすれば、この美仁橋は周辺唯一の橋であり、秦の他の戦線にとつては重要な兵站を担う地の一つです。よって、飛信隊長信の首は取れば良い程度とお考え下さい」

「むう。そうか」

「残念そうですな、將軍。私はなにも、できないと申し上げているわけではございません。できるなら実行する。状況の問題です。そうしている間に、あらたな伝令がきたようですぞ」

伝令は言った。

「報告します。道清千人將より飛信隊を崖際にて包圍。これより攻撃を開始するのとこのです」

その報は、間永に勝利が眼前に迫っているという笑みをこぼさせた。

「よいな、氷鬼」

氷鬼はこくりと頷いた。

「出るぞ。今日中に敵兵を殲滅し、我らが山陽奪還にむけての最初の狼煙を挙げるぞ。進めッ」

そうして動き出した魏軍本陣の様子を窺うものたちがいた。

「楚水副長。敵本陣が動きました」

副長楚水は、敵部隊が隊長信の本隊の追撃に移ったことであまれた余白。草木が茂るその隙間に身を滑り込ませていた。

「よし。皆の者、聞け。我らの狙いは、この戦いを指揮する敵の將軍のみ。奴らが橋を渡

りきり、我らに背を向けた所で一気に制圧する」

楚水は別動隊指揮官として息をひそめ、その時をじつと待った。その頃、飛信隊は切り立った崖を背にしながら円陣を組んで屈することなく激しい抗戦を繰りひろげていた。

崖を背に半円の形となった陣の中心。信は声を荒らげて部隊を鼓舞していた。

「野郎ども。ここが正念場だぞッ 絶対に生き残つてやるつう強い意志を持って、一丸となつて戦えッ」

それから信は周囲を見渡す。

「田有、竜仙。お前たちの底力を魏軍の雑魚すけどもに見せつけてやれッ」

信の檄に応えるように、田有の矛が魏兵を薙ぎ倒し、竜仙の棍棒が唸りを上げた。それらは複数の魏兵を一振りで薙ぎ倒してはふき飛ばし、彼らの勇が戦場にしめされる。

信は続けて声を挙げた。それは檄ではなくもはや挑発そのものであった。

「田永。お前が達者なのは口だけかッ それだけじゃねつてところを俺に見せつけてみやがれつてんだ」

「嗚呼ッ んだどッ信、てめえふぎけたこと抜かしてんじやねえぞ。コラああああ」

と田永は敵兵との槍の柄同士での鏝迫り合いの状態から片足に地力を込めると反対の足を浮かせて前蹴り、俗にいう喧嘩キックを放つて敵を転ばせたところに槍を突き立

てた。

「どうだ、コラア信。あとで覚えとけよ。この野郎ッ」

そのまま勢いに乗った田永は俺が田永様だと誇示するように暴れ回った。

「カカツ 単純な野郎だぜ」

そう信はひととき口角を上げて笑みを浮かべたが、全体の戦況が好転したわけではない。各持ち場を任せている伍長や什長、百将たちの奮迅の働きによつてなんとか持ちこたえている状態で、余力の底は見え始めていた。

「限界が近え」

信はそう言葉をもらずと副長の渚に向けて目配せた。渚はその意を汲み敵の囲いのそとに目を配ったが、望んでいる姿を確認できずに顔を横に振った。

「ツチ。あと、少しだ。あと少し皆耐えてくれ。かならず、必ず転機がくる」

飛信隊は、魏軍に完全に包囲されている状況にかかわらずに誰一人諦めることなく団結して立ち向かつて抗戦を続けた。

第87話

場所は戦場から少し離れた崖の上。

飛信隊軍師河了貂は敵の動きにあわせて指揮所を移動させ、高所で全体を見渡せるこの位置に設けていた。

「おい、河了貂。隊長たちが崖際に追い詰められて包囲されちまつてるぞ。隊長たちは本当に大丈夫なんだろうな」

その声を挙げたのは物見であった。

「……信の言葉が本当なら、まだ大丈夫なはずだ。それよりも森の様子を注視して。すべては伏兵となっている楚水副長の働き如何に掛かっているんだから」

河了貂がいる崖上は戦場全体が見渡せる程度に高く、この崖から荒野を挟んで信たちが撤退してきた木々の生い茂る森林の切れ目までを見渡すことができた。

「まだ副長の姿は見えない。それより、敵本隊は本当にこの荒野まで前進してくるのか」「必ずくる。オレがついた日からここまでの攻防を見る限り、敵に力量のある軍師が付いているのは間違いないんだ」

「そうはいつでもその力量のある軍師つてのがついていたら、なおさら、安全を期してこ

こまで前進してこないんじゃないのか」

物見の疑問に、河了貂は「そうだね」と頷き自身の考えを口にした。

「言いたいことは分かるよ。だから、そうさせないためにまだまだ粘れるところを切り上げさせてきたんだ。そのおかげで犠牲も極力減らせることができた。軍師といえどひとりの人間なんだ。どんなに慎重な軍師でも己の策が嵌れまば嵌るほど、心にゆるみが出る。なにより、敵にとつて絶対的に優勢なこの状況は、それを加速させてくれる。だから、動かないはずがない。いや、動いてくる」

「ただの撤退にも理由があつたつてことかよ。つてことは、あの森から楚水副長が出てくるのは、敵の本陣を攻めて敵將軍を捕らえた時つてことになるわけか」

河了貂は言葉を発することなく戦場の一点に集中していた。

「……あ、よし。できてきた、出てきたぞ河了貂。でも、なんであんな道から離れた場所から……」

そうして物見は安堵の息を吐こうとして止めた。何かがおかしいと気づいたのだ。

「お、追われてる。敵に追われてるぞ。楚水副長の騎馬隊が。なな、なにがあつたんだ」

時は少し遡る。

楚水たちは敵本隊が背を見せるのを木々の隙間からじつと息を潜めて待つていた。

「本隊は五百程か。先行部隊に百。本体が三百。後方に百、か。なかなか用心深いな。よし、予定通り奇襲は後方からにする。美仁橋から続いているこの街道は、視界を左右の木々と草木に遮らていることもあつて騎馬隊の良さを存分に活すには不十分であるからな」

そうして機を見て楚水隊は動き出した。

「行くぞ。敵後方守備隊を貫き一気に敵大将を我ら楚水隊が捕らえるぞ」

それは完全なる奇襲であつた。

なぜなら、敵の意識は勝敗を決する戦いに向かうため前方に集中していたからである。そのため、後方を警戒しているはずの敵守備隊ですら、この奇襲に対して後方から響き出したドドドツと地面を踏み鳴らす馬脚の音を拾うまで気づけていなかったのだ。

敵兵も急いで振り返つたが、もうすぐ傍まで迫つていた大きな馬体の圧力に腰が引け、叫ぶのが精一杯であつた。

「て、てて敵襲ッ。こ、後方より騎馬隊、騎馬隊です」

楚水の目には、唐突にあがつた声に行軍を止めて反転、隊列を整えようと慌てふためく敵兵の姿が見えていた。

「よしッ 楚水隊。今こそ力を示す刻だ。全力を尽くして戦え」

楚水の檄は隊の士気を盛り上げ勢いをまして敵本隊の後方守備隊とぶつかった。

「雑兵に構うなッ とまらずに進めえええ」

楚水騎馬隊が敵後方部隊が隊列を組み直す暇を与えずに分断、貫通した。

「本隊が視えたッ。勝機はここにあり。この戦いに片を付けるぞッ」

楚水騎馬隊は勢いそのままに突撃した。

のだが……。

魏・軍師八師氷鬼はこの強襲にも

「読み通りですな。將軍」

とほくそ笑む。

「フツ。そうであろう。やれ、氷鬼」

「御意のままに」

氷鬼が天にむかって拳を掲げ、手刀の形に変えて振り下ろした。

その途端に「ガザガザッ」と街道を挟んで両脇の茂みから魏兵が姿を現す。

「殺せえ。奴らの最後のあがきであるぞ。殲滅だ」

「なんツ。しまった。まさか奇襲を読まれていたのかッ」

直ちに楚水は馬脚を緩めて周囲を睨むように見渡した。

「副長ッ。て、敵兵が……」

その間も両の茂みから敵の後続と思われる敵影の姿が見えていた。

楚水は戦況の変化を感じ取って即座に判断を下す。

「ツク。こうなつては仕方がない。森を抜けて撤退だ。撤退するぞ。私について来い」

楚水は馬首をさきほどまで身を潜めていた方角に定めて駆けさせた。

「奇襲は失敗だ。作戦を二の案に移す。この森をなんとしてでも突破し、信殿たちを包囲してであろう敵の背を衝き脱出の糸口をつくるぞ」

「追撃だ。敵を逃がすな。敵本隊に合流させぬように執拗に追い込めえッ」

魏軍指揮官の声が魏兵を動かし、追撃戦が開始された。

「フフ。将軍、この戦……、勝ちましたな」

「ああ。これで、やつらにもう打つ手はあるまい」

と魏の将軍間永は、そう言葉を発したあと「ククク」と声をもらして、さらに言葉を続けた。

「敵の攻勢の弱い箇所を読みとり、この里井に兵を素早く増員させたお主の手柄であるぞ」

「なにを仰いますかな将軍。私は策を立案しただけ。将軍がそれを採用なされた。その判断力こそが優れた人物の証でしょうな」

「そうかそうか」と得意げな表情をみせる間永を尻目に、氷鬼の心の内には、これまで隠していた強い功名心が顔を覗かせていた。

フッフ。よしよし。間永將軍は勇猛さだけでなく素直さを持ちあわておられるゆえに扱いやすい。ここから山陽奪還の狼煙があがるとなれば、私の評価は鰻登りであろう。そして、この功をもとにして、さらなる大戦の作戦立案にも携わって、ゆくゆくは軍師八師のひとりなどではなく「魏に大軍師氷鬼あり」と、この私が称される日も近づいてくるというものよ。

しかし……、他国に冷酷無比と恐れられた火龍靈鳳様が生きておられたことには驚いたものだ。

この私から見ても、靈鳳様の智謀に疑う余地など微塵もない。ありもしない。が、皆の注目が、その弟子呉鳳明にだけ集まっていたことが癪に障っていたのも事実。「あの自信に満ちた漢の鼻を明かせるとおもえば甘美な夢見心地よの」

「て、敵の本隊も森から出てきたぞ。ど、どうするんだか、河了貂。楚水副長の奇襲も失敗して、隊長たちも奮戦しているけれど包囲されたままだぞ」

物見の言葉に、河了貂はおおきな声を挙げた。

「ツ……。信に、みんなに。最後の合図をだして。いそいでツ」

そのとき、飛信隊副長洩の声が響く。

「合図です。信殿。軍師殿から合図が出ています」

信は洩と視線を交わすと剣を掲げて号令を発した。

「全員聞けえ、いまから俺が突破口を切り拓く。いくぞ飛信隊ツ」

実のところ信は、円陣を組んで抵抗をはじめてから敵と一度も切り結んではいなかった。それは、まさに今この時のため。敵の包围を一点突破するための力を温存していたからであった。

「うおおおおおおおッ。どけえッ 魏の雑魚すけども」

そして、これは現飛信隊にとって残っていた最後の余力であった。

「どツりあああッ」

信のゆるぎない信念の籠った一振り、一振りは敵兵を確実に仕留めて掻き分けていく。隊長信が最前線に踊り出て剣を振るう姿は隊員たちに、ここまでの戦いによって積み重なって見え始めていた疲労の色から刹那的ではあるが脱却させた。

田永が声を挙げる。

「お前ら、信だけにいい恰好させるんじゃねえ。気合を入れなせ。やるぞコラア」

それは檄にも似た叫び声であった。そして、その闘志をむき出しにして戦う姿は、飛信隊皆の心の火にあらたな薪をくべた。

「そ、そうだ。俺たち負けねえぞ。みんな信に続けえ」

「び、尾平さん。……お、おいらだつてやってやる。やあッ」

尾平の、昂の、戦う意思に澤が続く。

「そうです、皆さん。我々はまだ負けたわけではありません。最後まで背中を護り合つて戦いましょう」

それらは、この戦場にいる飛信隊隊員のひとりひとりに連鎖を促し、そして鬨の声を響かせた。

その様子に魏の將軍間永は、ひとつ舌を打つと言葉を続けた。

「ツチ。袋の鼠が粘りおるではないか。氷鬼よ、万が一に脱出されてはやつかいだ。よいな」

「はい。將軍直下の精銳で一氣に仕留めましょう」

「ぐははっ、道清に総攻撃の号令だ。そして我が精銳、お前たちの出番だぞ。飛信隊隊長の首を獲つてまいれ。行けえッ」

こうして戦いは終結に向かう。

第88話

「君は、これが大いなる勝利のためだとしても、秦国の仲間をだしにした策略を使う僕のことを非情だと思ukai」

と言葉を発したのは、露草色に似た青を基調とした衣装を身に纏った青年であった。

「それがこの一帯の劣勢を覆すために必要な策略であるなら、そうすべきだと俺はおもう。それに、そのだしになっているのは、そんなヤワな奴じゃない。どんな状況でも絶対に諦めない。そういう奴だ」

そう応えたのは、中国神話に登場する？の面で素性を露わにしていな漢であった。

「……彼のことを随分と信じているみたいだけど、ここは戦場だ。まあ、その彼を死地に置いた策を為そうしている僕がいうのは気が引けるけど、もし、少しでも戦う意思を保つことができずに挫けてしまっていたら、最悪、全滅をしていたとしてもおかしくないよ」

青年は、物言いこそ非情な面を覗かせているが犠牲をいたずらに増やしたいわけではない。けれど、敵が秦軍のもっとも戦況の悪いこの戦線に注力し始めたことを逆手に

とつて、各戦線全体を押し返す方策を巡らせた結果であつた。

「もしそうだったとしたら、その程度だった。それだけだ。だが、俺の知っているアイツなら、どんなに苦しい状況だったとしても決して諦めずに戦い、死中のなかにも活路を求めて剣を振るい続けているはずだ」

「なるほどね。彼とは顔見知り程度かと考えていたけど、彼と君には、なにか特別な繋がりがあつたみたいだ」

「それは昔に……すこしな」

「君たちの過去に若干の興味はあるけれど、話してくれなくても問題はないよ。僕としては両隊の隊長二人が相互に協力しあえる関係なら、今後についてもやりやすいかなつただけだから。それに、ちようど僕の妹分もいるからね」

ふとして湧いたひとときの会話。注視していた丘にかざされた旗に気付いて青年は声だした。

「……つと、合図だ。うまくやったみたいだね。河了貂」

同じ頃。最前線の攻防は最後の局面を迎えようとしていた。

「皆の者。將軍より総攻撃の号令がかつたぞ。一兵たりとも見逃すなッ」

魏の精兵千人の指揮官道清の声に、いよいよ待ちかねたとばかりに魏兵たちの意気は盛り上がつて攻勢は激しさを増した。

「征けえええ。秦の糞ども皆殺せえッ」

「わっはっは。ここまで道清の声が響いて来おるわ」

「フフ。將軍直下の精兵も加わりましたので、すぐにでも飛信隊の殲滅も時間の問題でしょう」

それは魏軍里井攻防を指揮する將軍間永と軍略を補佐する魏軍師八師氷鬼であった。

「氷鬼よ。ここを完全に占拠した後の計画に抜かりはないであろうな」

「お任せください。里井攻略を皮きりに隣接する戦線各所に部隊を派遣します。拙速を尊びますので、將軍には他戦線から集結させた部隊の速やかな編成を行って頂きます」

「うむうむ。儂に任せ……ん。なんだ」

間永は耳で音を拾い気に掛けた。

「ん。後方からですので、他の戦線からの増援で、しよ、將軍……ッ」

「ど、道清様ッ。ほほ、本隊が強襲されていますう」

「……は。なにを言っ……、ツ馬鹿な。敵はどこから現れたというのだ。こうしてはおれん。ただちに救出に向かー」

本隊の危急を受けて、即座に道清は馬首を回して駆け出すところで突如掛かった声に動きを止めた。

「待ちやがれツ。てめえの相手はこの俺だ」

そこにいたのは完全に包囲していたはずの敵部隊の隊長であった。

「な、貴様ア。あの包囲をどうやって抜けてきた」

「アア、ハア。ハア……、んなもん。見たまんまだろうがツ」

その言葉の通り、敵部隊隊長の背中の先には、包囲網の一部が貫かれて見えて取れた。

「……敵の力量を見誤っていたかの、俺は」

ここまで彼らが知り得ていた飛信隊の姿は、山陽戦での急造千人隊の姿あり、そして、この里井の攻防で窺い知れたものは兵数千を相手取って兵一千で守る力であった。また彼らは、飛信隊の本質的な強さが『守』ではなく『攻』に偏っていることを知り得えなかった。

さらに彼らは、ここまでの戦いが終始優勢に進められたことで、包囲攻撃で起こる一地点の密度の低下、それによって突破される危険を憂慮していなかった。

いや、そうさせなかったのだ。

「ツグ。だが、包囲をすり抜けられたのは、すでに消耗しきった貴様ただ一人ではない

か」

道清は矛を強く握りしめて馬腹を蹴つたのちに吼えた。

「邪魔をツ、するなアアツ。糞餓鬼が一撃で屠つてくれるツ」

それは戦いの経験が薄い者であるなら思わず怯むほどに激しく気迫のこもつた雄たけびであつた。それに相對峙する漢もまた「フウ」と一息吐き出すことで呼吸の乱れを整えると馬腹を蹴つたのちに応えるように声を挙げた。

「うるせえぞ。魏の雑魚すけが調子に乗つてるんじゃねえツ」

そうして、對峙する両名は馳せた。

「死ねえ。薄汚い秦人の餓鬼がアツ」

一瞬の勝負であつた。

「うらアあああツ」

矛と劍。二頭が馳せて交錯。矛は空を切り、劍は身をとらえた。

「グフツ」

さきほどまで血氣盛んに声を上げていた頰れる躰が一つ。交差した先には勝者の姿があつた。

「飛信隊の信が、敵を討ちとつたぞツ」

飛信隊長信が高らかに掲げた劍先と勝利を宣言する雄たけびは、劣勢の戦いの最中

にあつた隊員たちにも届いて鬨の声をあげさせた。

「ハア、ハア、ハア……」

疲労困憊。信の躰は大小いくもの傷から血が滲んで、流れ落ちる汗が肌を刺激していた。

それは、飛信隊軍師河了貂が仕掛けた罠。

手の内のすべてを曝け出すことで敵軍師の意識を欺く策略であつた。

「一点突破。まじでぎりぎりだつたぜ。貂」

信が敵のなかでもっとも勢いのあつた指揮官を討つたことで拡がった動揺、さらに秦国の別動隊による本隊制圧の一報が加わつたことで、魏軍は、いまだ兵数こそ優位であつたが、戦いを放棄し遁走を開始するにいたるのであつた。

その様を別動隊としてのひと仕事、本隊の制圧を完遂させて観ている者たちがいた。

「初めの予定通りに追撃は行わないでね。李豹」

「わかっている。いまは、この地の平定が先だ。それに信もうまくやつたみたいだしな」

李豹の視線のさきには、馬上で剣を掲げる信と喜びを表すように騒がしい飛信隊の姿があつた。

「……あれが飛信隊の信殿か。正直、あれだけの包圍陣だ。僕としては、河了貂の策が功を奏するのか不安なところがあつたけど、きつちりとやり遂げてきたね」

「だから言つただろう。あいつは絶対に諦めない、と」

「ふふ、そうだね。君の言つたことは正しかつたみたいだ」

李豹は視線を移して訊いた。

「それで、捕らえたこの二人の魏国の将校はどうする」

「この二人は土門將軍のもとに――」

と敵本隊を奇襲、制圧した千人部隊豹騎隊長李豹とその軍師となつた蒙恬の弟である蒙毅が会話を重ねていると馬蹄の音とともに声が掛かつた。

「李豹おツ。お前、怪我はもうよくなつたのかよ」

信であつた。

「信か。あの近利関の夜以来だな。あれから何か月経つたと思つている。もう完治しているヤ」

「ハッ。そうかよ。つうか貂の言つてた別動隊つてのは、お前のことだつたんだな。驚いたぜ」

と信は李豹の隣で拱手をする人物に気が付いて訊いた。

「んで、そつちの奴は誰なんだ」

「はじめまして。僕の名は蒙毅。君と戦場をもにした蒙恬は、僕の兄にあたります」

「つてことは蒙恬の……へえ、そうなのか。俺は信。千人部隊飛信隊長の信だ」

「あなたのことは兄から聞いています。勇猛さが際立つ将である」と

「フツ。勇猛が際立つ、将か。なあ、信」

「あ、なんだよ豹」

「将、なんだぞ。なにひとつ持つていなかっただ俺やお前が千人の将。一角の部将として戦場で戦っているなんて、凄い事だとおもわないか」

「あん。たしかにそうかもしれないけど、忘れてねえか。俺が、俺たちが目指してんのは天下の大將軍だぞ。こんなところで、まだまだ満足なんてしてられつかよ」

李豹は面の奥で笑み零した。なに一つの翳りもなくただ純粹に邁進する信という相棒の変わらぬ姿に。

そして李豹は言った。

「フツ。変わらないな、信。だけど、先に大將軍になるのは俺だ。お前は俺の後をゆつくりとついてくればいい」と。

火種であった。

「アア。ふざけんなよ。大將軍にさきになるのはこの俺だ。お前があとからついてこい」

「いいや、俺が先だ」

「俺に決まってるだろうが」

「お前は後だ」

「お前があとだッ」

そうして、馬上でお互いに譲らずに意地を張り合う様子をいつそ微笑ましく眺めていた蒙毅に聞き覚えのある高い声が掛かった。

「ねえ蒙毅。勝ったのにあのふたりはなんで言い争っているの」

飛信隊軍師河了貂であった。

「河了貂。すぐにこっちに降り来ていたんだね。あれは、高い志があるふたりにとってとても重要なこと、かな。それより、よくやったね」

「うん。ありがと。オレのつていうか皆のおかげかな。オレのことより、この場の戦いだけで考えていたオレと違って蒙毅の策は、戦場を大きくみていて凄いよ」

河了貂の視界に映るのは李豹たちに捕えられ、縄で縛られた状態で地面に座す魏軍の將軍間永と軍師氷鬼であった。

「そうかな。でもね、河了貂。これは僕の策に君の策が合わさったからこそ想定していたよりも迅速に推移した結果でもある。だから謙遜しなくていいよ」

「え、そ、そうかな」

「そうだよ。一部隊、一戦線だけで為しえないことは沢山ある。だからこそ、広大な目をもてる僕らのような軍師が必要なんだ」

そう蒙毅が言葉を口にしたところで嘯みつくような声が足下から挙がる。

「軍師、軍師だとふざけるなアツ。お前らのような子どもが軍師などと笑わせるツ」と。声の主は捕虜となった氷鬼であった。

「戦場は貴様たちのような子ども遊び場じゃないぞツ。何をしたのか本当にわかってるのか」

蒙毅は応えた。

「もちろんですよ。僕や河了貂がその覚悟をしていないとでも」

「ツならば教えてやる。とくにお前だ。飛信隊の軍師ツ。お前はうまくやったと考えているのかもしれないが、自分の隊を孤立無援の窮地に追い込むなど、常人のすることではない。我ら精強部隊を引き寄せるためにどれだけの犠牲を払った。言ってみろ餓鬼がツ」

「……それは……」

と答えようとした河了貂に蒙毅は名を呼び遮るように続けた。

「河了貂。なにも答える必要はないよ。それと、魏・軍師八師の氷鬼殿」

「ツ。……私を知っていたのか」

「当然でしょう。敵の陣容を知ることが戦いを知ることにつながるのですから。そして、私が貴方に伝えることは一つです。今この状況こそが、すべて。そうではありませんか、氷鬼殿」

その言葉で氷鬼はあげていた顔をさげて「……ギリツ」と歯噛みした。

「その、通り、だ」

「わかつて頂けたようで何よりです。さあ、李豹」

李豹は向き合っていた信から視線を移すと言った。

「ああ。そろそろ出発しよう。信。この捕縛した二人の身柄はお前に預ける。俺たちはすぐに戻らねばならないからな」

「ん。手柄はいいのかな」

「そのことについては、こちらの軍師蒙毅と河了貂と間で話はついている。俺たちが得る戦果は、ここからさきにあるからな。なにより、この作戦は信たち飛信隊の働きがあつたからこそ、俺たち豹騎隊の損耗は最小限で済んだことは大きい。あと付け加えるなら、俺たちはこの作戦のために隣の戦線に穴をあけてきた。だから、いまから敵の目ぼしい戦力を削つた流れでそのまま戻ることになる。ちゃんと話は通しているが、土門將軍はかんかんだったからな」

「隣は土門のおっさんかよ。すぐ怒るだろ、あのおっさん」

「……たしかに少しばかり血気が盛な方ではあるけれど、俺たちの話をちゃんと聞いてくださるぞ」

「そうかよ」

李豹は信と視線を一拍交えた。

「じゃあな。信」

「おう。またな豹」

李豹は手綱を引き声を挙げた。

「豹騎隊。行くぞ」

豹騎隊は李豹を先頭に元居た戦線に向かって駆け出した。その最中、蒙毅は馬の足を止めると言葉を発した。

「あまり気に病むんじゃないよ河了貂。それと、もし本当に無理だと判断したのなら、必ず戦場を離れること、いいね。それじゃあ僕も行くよ」

河了貂は拍の間顔に陰りを揺らせ言葉を返した。

「……うん。ありがとう蒙毅。またね。何かあったら、教えてよね」

蒙毅は頷くとすでにさきを駆けている豹騎隊の後を追った。

「貂。いまのは」

「ん、なんでもないよ。ただオレの問題っていうだけ。それよりも、だ。信。急いで皆の

状況を確認しよう。負傷者の手当を急がせて。あと、山陽にこの一帯の戦果の報告をして、守備兵の増員をお願いしよう」

第89話

「ふむ。魏・軍師八師、か」

秦による山陽城の占拠から始まった周辺一帯の平定戦は、先手を打った魏が里井の奪取のために兵力を傾けた矢先に、若手軍師である蒙毅、河了貂兩名による作戦によって逆にこれを破ることに成功した。

「師匠のご期待に添えませんでしたか」

これによって一時的に指揮系統が麻痺した里井一帯は、組織的な抵抗をする術をなくすことになった。

「もとよりさほどの期待はしていない」

「それは、大戦を任せられる者はいない。ということでしょうか」

その間隙を縫うように素早く進発した李豹豹騎隊が敵の残存兵力を悉く撃破、退却させたことで、魏軍は里井一帯から完全に撤退することになった。

「フフ。逆に、お前はどうか考えている。鳳明」

また里井奪取のために兵力を傾けた魏軍は、各戦線を支える予備兵の不足を招くことになり徐々に劣勢へと追いやられていくことになる。

「あの氷鬼という男、生来の高慢な性をうまく包み隠す術を持つ程度に頭は回るようですが、評するなら箱庭の軍師と言ったところかと」

「箱庭の、か。面白い評ではないか」

「はい。時におおきな変化に富むことがある大戦を任せるに難がありますが、舞台なる戦場から敵軍までをしつかりと下調べをさせ上での中規模の戦いにおいてなら、と考えます」

靈鳳は、弟子の呉鳳明を一瞥し、ふむ。としてから続けた。

「……最早、早期の山陽奪還は難しかろう。もとより、先の大戦における敵の力を理解していたのなら、本腰をいれずにやり遂げられようはずもないのだがな。その辺りを把握できておらぬ大臣どもが差配を主導し、自ら失脚していく様は悪くない。いずれにせよ、これでやりやすくなった」

「そうですね。我らにとつては確かに好都合です。それに、対秦において警戒すべき将の名も粗方を知れました」

「そうだな。王翦に桓騎、鬼面の朱錐に虎の虎豹。加えて龍面の王騎か。まったく、隠れた傑物に加えて厄介な奴らが戦場に舞い戻ったものだな」

「はい。さらに、秦はいま若輩とはいえあらたに頭角をしめす者たちの姿が目立ちます」

そして、これまで不調とみられていた王賁玉鳳隊が急速に力を発揮し始めたことでの流れは完全に秦に傾くことになる。

「賁様。この番陽、本日より玉鳳隊に復帰を致しますぞ」

言葉の主は番陽。応じるは玉鳳隊長王賁であった。

「副長としての復帰を認める。これからも変わらぬ働きを期待する」

王賁の言葉の返しに番陽は「ハハッ」と手の平を包み込んでいる拳を強くした。

「この身が朽ち果てるまでお仕えいたしますぞ」

王賁は番陽の淀みない言葉、滞りのない所作を前に「そうか」とこぼし周囲にわからぬ程度に口角を少し上げてた。

「さっさくだが、お前に副長補佐として黒金を付ける。これまで実戦で幾度か編制をし直して試したが、黒金が最も周囲に冷静な目を配っていた」

「おや、賁様それはもしや……」

「お前の言に一考の価値があると判断したまでだ。俺の玉鳳隊は、これから必ず大きくなる。そのとき隊の大きな力となるように番陽。お前が導け」

「賁様。承知いたしましたぞ。この番陽にお任せ下され」

王賁はひとつ頷くと言った。

「よし。すぐに出る準備だ。業腹ではあるが、飛信隊ならびに豹騎隊の活躍によつて各戦線に歪がうまれているこの好機を逃す手はない。玉鳳、出るぞ」

先頭を勇ましく駆け出した王賣の姿に付き従うように番陽は声を挙げた。

「皆の者。賣様に続けええッ」

ここから玉鳳千人隊はさきごろまでの不調が嘘であつたかのように快進撃を始めた。それは、三百人隊から千人隊になつたことで起きていた隊員それぞれがもつ共通の認識や感覚のわずかな差異、そこから生じる連携の乱れや遅延による拍の間の空白、その隙を解消したことにならなかつた。

「これは……圧巻ですな。千人のすべてが賣様の手足であるかのように自在な動きをみせておりますぞ」

そして、それが玉鳳が一つの宝珠としてあらたな輝きを放ちはじめた瞬間でもあつた。

「まだまだだ。玉鳳の、俺の目指すべき頂には程遠い」

王賣は槍を強く握りしめた。

「見つけたぞ。あれが敵の本隊だッ。一気に叩く。ついて来い」

こうして敵前線を荒らして回る王賣玉鳳隊の躍動は、前線に立つ兵士たちの士気をおおいに高めるのであつた。

「目立つ、といえは鳳明。直接指揮を執つてはいないとはいえ、お前の策を打ち破つた者がいたそうだな」

「はい。全体の編成にまで関わつてはおりませんが、基礎となる作戦の流れを組みました。ですので、私自身も戦場に立ち経過を見守つていたのですが、あえなく、敗走致しました」

「作戦に何か不備が」

「……不備、というほどの綻びはなく、敵の要所を守る将を討つところまですべてが順調でした。もし、ある。とするとしたら、敵の将を討つた瞬間の気の緩み。そして、名もない部隊の長の英断、でしょうか」

靈鳳は瞬時に当時目を通した戦況報告からの所感を述べた。

「こちらの将を討ち、尚且つ、要所を守らず攻めに転ずる大胆さは、機を見るに敏。育てば厄介な敵になるな」

本来の戦線に復帰した豹騎隊は独立遊軍として土門將軍らの奮戦によつて膠着した戦線を縦横無尽に突き崩したかと思えば、ときに、囷となつて陽動に徹するなど、形に囚われない意表をつく部隊運用で敵を翻弄した。

「蒙毅が軍師として加わってくれたおかげで、戦場を別の視点から見えるようになった気がする。ありがとう」

「うん。戦場は広いからね。僕にしても、この李豹豹騎隊で戦術盤だけでは得られない経験を積ませてもらっているから、これはお互い様かな」

「そうか、君にも利があるというならよかった」

李豹は少しの沈黙のあと訊いた。

「これは答えられるならで構わないのだが、訊きたいことがある。なぜ、この豹騎隊に加わろうと考えた」

「それには理由が二つあります。ひとつは、大本営に玄峰先生が招かれたことです」

「玄峰……先生？」

蒙毅は

「彼のお方は大変な軍略家であられるのですが、元とはいえ秦の怨敵である趙国の大人物ということもあって、上層部からすると直接的な軍事作戦に携わさせるにことに不安がある、ということ、教えを乞う。という形で参加して頂いています」

「そうはいつでも不安があるのは事実ではないのか」

「それは祖国の趙や廉頗將軍らといまだに繋がりがあるではないかという疑いのことです」

李豹はコクリと頷いた。

「その疑いを持つのはもつともだとおもいます。ですので、私も昌平君先生より玄峰様の付き人を申し付けられて、ここ最近までずっと張り付くことになりました」

「……それで疑いは晴れた、と」

「完璧に、とはいきません。あの御歳になるまで軍略に携われた方ですので、その老獪さは私に推し量れるほど浅くはないでしょうからね。そこは、軍総司令を信じて頂くことになります」

「……御仁が招聘されたことで手が空いた、と。それで二つ目は」

「二つめは、僕が目指す父や兄の力になれる軍師になるという目的のためです。これまで、先生のもとで軍略の知を積んできましたが、先生は、実践に勝るものはないとも仰られています。そして、機となる出来事、大本营に玄峰先生が参画されたことで、僕の役割に変化……、いえ、戦場に出よ。と勧められた。というのが正しいのかもしれない」

「ちよつと待つてくれ。それは、戦場に出た理由であつて、我が隊を選んだ理由ではないだろう」

「ええ。これは気を悪くするかもしれませんが、端的にいうと、僕にとつて豹騎隊がちよつとよかつたのです」

「ちようどよかった。とはどういう意味だ」

「まず、僕に戦場で誇れるような実績はありません。そのため、自分の力を示せる場が必要でした。ですので、すでに形として出来上がっている隊は望ましくなかつた。つぎに、僕も早死にしたいわけではありませんので、元々の実力は高い方がよい考えた。つまりは、僕の入り込める余地があつて苦境にある隊。それがこの豹騎隊だったので」

李豹は蒙毅と視線を交え、少しの間をおくと応えた。

「……なるほど。納得はできるし、だからといって気を悪くもしない。蒙毅の加入は千人隊をうまく回すことに精一杯だった立場からすれば、まさに渡りに船だったからなだが」

とふいに？面の奥にある眼光が鋭さを増した。

「それがすべてじゃない」

そうだろう。と李豹は確信をもつて蒙毅を見据える。蒙毅はひとつゆっくりとまばたきをしてから応えた。

「はい。豹騎隊が選ばれたのには明確な意図があります」

蒙毅は李豹の眼をまっすぐに見据えて続けた。

「それが僕が前線に出るにあたつて課せられた任務の一つでもあるからです。原則として、任務の内容の口外は禁じられています。が同時に、任務に支障が生じる場合に限り、

僕の判断で明かすことの許可も得ていますので、あなたが望むのであれば、お教えすることもできますよ」

今度は李豹が？面の裏でひと拍の瞑目のちに応えた。

「いや、明かす必要ない。俺にはさきほど蒙毅の言葉は真からでたものだと感じた。だから俺たち豹騎隊にとって害にならないのならいい」

蒙毅はふふつ。と微笑みを浮かべると応えた。

「当り前です。先生は、つねに秦国全体の事を考えられていますから自国の不利になるようなことはなさられませんよ」

「わかった。蒙毅、これからもよろしく頼む」

「はい。新たな任を授かるその刻までともに戦いましょう」

奇しくも不調とみられていた三つの部隊が時期を同じくして躍動し始めたことで、魏軍は山陽奪還作戦を放棄せざるを得なくなるほどに撃退されることになり国境付近まで引き返すことになった。

第90話

山陽一帯の平定に向かつて飛信隊や豹騎隊、王賁玉鳳隊に蒙恬樂華隊が新千人部隊として華々しい戦果を挙げている頃、最前線となる国境近辺からやや外れた行路のひとつ。

「さあ、これが最後だ。持ち上げるぞ」

そこに朱錐はいた。

「応ッ」と返した複数人の屈強な漢たちが破城槌に使われるほどに頑強でおのれの背丈ほどの長さもある材木を担ぎ上げるために手を添える。

「いち、にの、参ッ」

朱錐の掛け声とともに後方から「うオオオツ」と挙がる屈強な漢たちの声とともに丸太が浮き上がっていく。その様を帰還の途中に見て取った馮はおもわず言った。

「……いや、軍長のお前がなんで運搬作業をしているんだよ。指揮をとれよ、指揮を」と。

そう、軍長である朱錐が一本の破城槌を思わせる丸太を軍中の力自慢たちを伴い担ぎ上げて設置場所まで移動させて置いていたからであった。

「おう、馮か。これは鍛錬の一環に良いと思ってな」

と朱錐は足を止めて平時のように言葉を発していたが、その後ろでは丸太を支える力自慢たちの顔は真つ赤に色づいて、だんだんと苦悶の表情が焼き付き始めていた。

「……もういい。後ろがやばそうだからまずはその丸太を置いて来い。俺は天幕の所で待つてるわ」

しばしのあと、自軍の天幕に戻った朱錐は中に入ると待機していた馮に声をかけた。

「馮。待たせたな」

「おう。終わったのか。まあ、これでも飲め」

と馮は腰に携えていた水の入った瓢箪でつくられた筒を手にとると掲げた。朱錐は礼を述べて受けとると栓を開けて口に含んだ。

「うまいな。それで、なにか新しい報告はあるか」

「ここらの大きな話はないな。他の戦線なら一昨日か、微子にある景城に侵攻してきた魏を追い返したと聞いたぞ」

「微子の景城なら李豹たちも入っていたのではないか」

「ああ。なんでも魏は、陳城の城主が自ら軍を率いていたそうだが、それを李豹の豹騎と飛信隊とが協力し合って討ち取ったって話だ」

「それは大手柄だな。これは山陽一帯の平定がいよいよ見えてきたな」

それからひと月ほど過ぎた頃。

山陽城に一帶に展開していた主だった部隊の参集が行われるとともに黒衣同色の甲冑を身に纏った旅団が入城することになった。

黒衣甲冑を纏う者の正体は、秦国朝廷直属の特殊護衛部隊である。つまりは、旅団の主が秦国中央における重鎮である証であった。

件の特殊護衛部隊に護られて悠然と姿を見せたのは二人の漢であった。場所は城郭の内にある大広間。

その壇上となる上段広場から下方を見渡せば、整然と並ぶ屈強で秦国の武威を担うべく立つ將兵たちの無数の目が佇んでいる。

そんな秦国の武威を担う彼らが壇上に姿を見せた薄い藤色の外衣の漢にむけてゴクリと唾をのんだのは、その人物の威風によるものか、はたまた、大本營にて戦略を預かるほどの大人物であると気づいたからなのか。

大広間は静とした静寂の波に飲み込まれていった。

この場の注目を一身浴びた漢は、泰然と、力強く声を張り上げた。

「いま、この刻をもつて山陽は名を改めることになる。これより先、山陽は山陽にあらず。秦国東郡であると宣言するッ」

言葉の主は、秦国総司令昌平君であった。

「それにもない他の城邑より秦人一万を集めて移住させる」

これは、異例の措置であった。

なぜなら、この時代の戦争とは、国土の奪い合いに終始していたからである。例え、大軍を起こし侵略して奪った地であったとしても、数年のうちには、獲られた側による反撃や他の隣国によって攻め込まれ、すぐにまた奪われるといった具合に重要地の奪い合いが繰り返されていたからだ。さらに各国の情勢はよつては割譲や返還、放棄もあった。

だからこそ奪った地に自国民を入植させるという行為がいかに異例な措置であったかが理解できるだろう。

昌平君は徐々に語気を強めていく。

「よつて、これより先、この東群は——」

そして全兵士に向けて秦国の方針を高らかに宣言した。

「我らが命を賭して護るべき秦国土そのものになった。その旨、とくと頭に焼き付けよ」
これは、「この地を絶対に手放すことはない。」という秦国中枢による強い意志の表れであり、つまるところ、この山陽改め東群宣言は、現秦国中枢の思惑が領土拡大であることを中華全土にむけてはつきりと宣言したも同然の形であった。

「さらに行政の長に李斯を据える。これより、この地は秦国の法こそが導となつて民を

治める」

おもむろに昌平君の後方から歩み出た呂氏四柱李斯は簡潔且つ明確に言葉を発した。「李斯だ。私が来たからには、これよりさき一切の容赦なく秦国の法が敷かれると覚悟せよ。承服できぬ者は、即座に退去させる。以上だ」

この李斯の言により、元山陽の民は選択を迫られることとなった。

それがどれほど憎き敵国であろうとも住み慣れた家を、土地を、容易に捨てさることは難しいものである。それでも、他の地に寄るべのある民は断腸の思いを胸に城をあとにし、寄るべのない民であっても秦人と同義とされる地に住んでなるものかと布地の袋に家財を詰め込み、ただの身一つで住み慣れた城を捨てて流民と化す者たちも多くでることになった。

秦国東群宣言がなされた城下では、水面におちた水滴が波紋を広げるようにひとびとは街路を慌ただしく駆け抜けていき、各所では事のあらましを声高に叫ぶひとを囲う塊うまれ聡いものから順に家路を急いでは家財を荷車に乗せる姿が目立つようになっていった。

その様を信は蒙恬と城壁の上から眺めていた。

「なあ、蒙恬。どこもかしも大慌てって感じだな」

「まあ当然といえば当然だな。この一帯に住んでる人からすれば、生きてる間に一度あ

るかかないかの一大事だ。まさかの東群宣言だよ。まったく」

と、そうお道化るように語る蒙恬に信は顔を向けると「やっぱ、そんなにすぐえ大事なんだな」と声をかけた。それに蒙恬は「もう特大も特大さ」と頭を振った。

「信はいまいちぴんときていないみたいだけど、山陽東群宣言つてのは、ある意味、六国を揺るがすほどにおおきな動きなんだ」

と蒙恬がいまだに事の重大さを理解していないの信のためにこんこんと説明を始めた所で、二人の人物が揃って城壁の上に繋がる階段から姿を見せた。

「あれ？ 王賁。それに李豹じゃないか。二人は知り合ってたのか」

「少しだが戦線が重なったことがある。ここには同時に着いた。それだけだ。それよりも、だ」

と王賁は横にいた信を一瞥して状況を理解すると「その馬鹿の相手をする暇があるなら、俺の質問にさきに答えろ」と発言した。

これには信も李豹に向かって「よっ」と挙げようとしていた手を止めて王賁に視線を向けると「誰が馬鹿だと、王賁てめこらア」とチンピラが威圧するように言葉を投げかけた。

「うるさい黙れ下僕。貴様に用はない」

とにべもない態度をとる王賁に向けて「なんだとこの根暗つり目野郎がッ」怒りが頂

点に達しそうな信を見かねた李豹が二人の間に躰を滑り込ませて距離をとらせた。

「信はすこし落ち着け。王賁も無暗に煽る必要はないだろう」

李豹の正論に、信は「ツク」と漏らし、王賁は顔を背けて「ツチ」と軽く舌打ち体を向き直り腕組んだ。その状況に蒙恬は面白いもの見たばかりに声を漏らした。

「へえ。素直にひくなんて認めるんだね、王賁。李豹のことを」

「フンツ その馬鹿と違って李豹には確かな実力がある。そのうえ機を見定める目には見張る物があつたからな、そのうすら馬鹿と違って」

「王賁てめえツ 二度も言いやがー」と信が李豹によつて抑えられた感情を爆発させようとしたところで、今度は蒙恬が場の流れを変えるように声を掛けた。

「まあまあ信はおさえて抑えて、ね。王賁もそんなことをしに俺の所に来たわけじゃないでしよう」

「……当然だ。秦があのような宣言をすれば周辺国家が黙っているはずがない。ようやく一帯を平定してとはいえ大戦を終えたばかりだ。なぜ今なんだ、理解に苦しむ。ここでお前だ。総司令のもとで学んだ身のお前ならなにかをしっているのではないか」

と鋭い視線を投げかけてくる王賁に蒙恬は「だよねえ」と少しおどけてみせて同様の考えを持つていたことを暗に示した。

「俺もそう思つてさ。先生の所に顔をだしたんだよね。そうしたら、一言だけだけど返

事をもらったよ」

「ふむ。総司令はなんと」

「先生曰く、今は中華の戦を活性化させる刻。だつてさ。これは俺が思うに、敢えて周辺国家に派手に宣戦布告することで戦局を流動化させる狙いがあるんじゃないか思う」

「……なるほどな。各国がそれぞれの思惑のもとに軍備を増強すれば、戦が起こる。強いては、兵力に偏りがうまれて隙がうまれる、か。となれば、大本営には各国は出し抜く算段があるということ」

「んー。さあ、どうだろう。俺にもそこまでのことはわからないな」

そうして両者が思案にふけはじめたところで李豹は妙な雰囲気のに気付いて「どうかしたのか」と声を掛けた。

「お、俺は、間違つてねえとおもう。住民を無理やり追い出すつては本当にやつていい事なのかはわからねえけど、これで戦は活発になるんだろう。つてことは政の全部の国を平らげるつつうどでかい目標に早く近づけるつてことだよな。なあ、豹」

「そうだな。それが我らの大王様が目指す路であり、俺たちが大將軍になるといふ夢にも繋がっているのは間違いない」

「ん。ちよつとまで。大王の目指す路とはなんだ。そもそもなぜそんなことをお前たちが知っている」

そう疑問を投げかけたのは王賁であった。横にいた蒙恬も同様に声を挙げた。

「俺も気になるなあ。王宮で権力争いの真つ最中な我らの大王様がどんな路を描いているのか」と。

信はふたりに話した。あの山界の出来事、山の王楊端和と大王政が語らった一幕を。

「この中華を……」「統一する?」

そう王賁、蒙恬が驚愕と困惑を緬い交ぜにした表情を浮かべる中で李豹が続けた。

「大王様は本気で中華を統一する気だ。国の境を失くして、全てを一つに」

「その口調。李豹。貴様も今代の大王となんらかの面識があるということだな」

「詳細は口にするにはできないが」と断りながらもこくと頷くことで肯定とした。

そして蒙恬は「はは」と乾いた声を漏らすと続けた。

「中華を統一する、ねえ。壮大すぎて霞の中で雲をつかむよな話に聴こえるよねえ」

「んなことはねえッ」

そう信は叫ぶ。

「政は絶対に諦めねえでやり遂げるつもりだ。俺だつてそうだ。この戦いのさきで必ず天下に名を轟かす大將軍になってやる」

そう拳を握つて奮起する信の姿を煩わしいとばかりに王賁は言葉を発した。

「……分をわきまえろ下僕。いまは貴様の夢の話などどうでもいい。大王にしてもそうだ。中華統一などと世迷言を口にする前に王宮内を一つにするほうがさきではないのか」

「俺もそう思うなあ。中華統一。成し遂げられれば歴史に名を残す大業だけど、いまだ地に足が付いているとは思えないな」

と口した段になって蒙恬は「けど、そうなると先生はいつたい……」と別の視点に思考を移した。それにたいして王賁は早々に見切りをつけて言葉を発した。

「もういい。大本營の目的は知れた。俺は行く」

と踵を返して歩き出し、城壁下続く階段へと姿を消した。蒙恬もそれにならない「それもそうか、じゃあ俺も行くかな」と声を発すると歩き出した。けれど、階段に差し掛かる手前で「おっと、そうだ」と足をとめると振り返った。

「李豹。うちの弟がお世話になることになったけど迷惑じゃなかったかな」

「いや、そんなことはないな。蒙毅の助言はどれも的確で、とても助かっている。俺は、もう豹騎隊に欠かせない人物だと思っている」

その李豹の言に「そっか、よかった」と蒙恬は満足したように笑みを浮かべ続けた。

「李豹。弟のこと頼んだよ。信もまたね」

「ああ」「おう、またな蒙恬」

そうして城壁の上にいるのは李豹と信のふたりになった。

「そういえば飛信隊にも軍師が加わったそうだな」

「おう。貂つっていうんだけどよー」
と信は出会いからいまに至るまでのことを語った。李豹もまた、あの日から今日にたどり着くまでのことを話した。

「豹に……そんなことがあったんだな」

「ああ。さすがに死んだと思っただぞ。あの日朱錐様に見つけてもらえなければ、俺は間違ひなく死んでいただろうな」

「そうか。そういう話なら俺もあるぜ。これは尾倒のやつもだけど、馬陽の戦いのおかげだ。龐煖つてのとやり合つてボロボロなところに趙軍の奇襲があった。それで俺の三百人隊のやつらも大勢死んじまった。俺も龐煖にやられて気を失つた。気づいたら尾倒に背負われてよ。隊のやつらはちりぢりになったって聞いた。そのあと朱錐のおっさんの副官で虎豹つて人に助けられたんだ。俺も尾倒もあの時はまじで危なかったぜ」

「……なあ、信。俺たちはずっと自分のために必死に努力して鍛えてきた。それで得た力があつたからこそここまでやってこれた。それと同時に、俺たちはいつも誰かに助けられてきた」

「ああ、言いたいことはわかつてる。こつからだ。こつからめちやくちやに強くなって、

今度は俺たちがみんなを助けてやるようになってやろうぜ。そんなもってゆくゆくはふたり揃って天下最強の大將軍だ」

そして李豹と信は互いに向き合うと右腕同士でガツと胸の前で組み目を合わせて誓いあつた。

「そのときまで勝手に死ぬんじゃないぞ、信」

「お前こそな、豹。大將軍まで突つ走ろうぜ」

こうしてふたりが幼し日に交わした約束を決意へと昇華させていた頃、遠く離れた趙国の王都邯鄲では、おおきく床に拵げられた戦略図に向かい立ち鋭い視線を注いで思案する李牧の姿があつた。

「秦趙同盟を促した張本人として、私も動かねばなりませんね」